

樽本照雄 著

初期商務印書館研究

增補版

清末小説研究会

初期商務印書館研究

增補版

樽本照雄 著

清末小説研究会

まえがき

商務印書館は、清朝末期、上海に創業した印刷企業のひとつである。キリスト教会関係、あるいは商業関係の請負印刷からはじめ、のち教科書出版に進出した。さらには一般出版物の分野においても事業を拡大発展させる。清末から中華民国初期を通じて他の出版社との競争に勝ち抜き、現在では、創設から百年以上の歴史をもつ中国唯一の存在になっている。

その百年をうわまわる商務印書館の歴史のなかで、特異ともいえるべき一時期があった。

創業（1897 光緒二十三年）して間もない1903年（光緒二十九年）から1914年（民国3）までの約10年間、商務印書館は、日本の出版社との合併会社だったのだ。相手企業の名前は、金港堂という。中国を代表するような有名巨大出版社が、過去において、日本の出版社と合併会社を組織していたなどとは、にわかには信じられないかもしれない。だが、これは事実である。

商務印書館は、中国出版界において巨大企業に成長した。その事業発展の基礎を確立するのに決定的な役割をはたしたのが、日本金港堂との合併である。この合併なくしては、営業、編集、印刷の3分野における商務印書館の発展は、ずいぶん違ったものになったであろう。

ただし、外国資本との合併が、すべての面においてプラスに働いたわけではなかったのも事実だ。中国国内で政治批判的にされたのは、この日本企業との合併が理由であった。その背後には、清朝から中華民国への転換という歴史の流れがある。

商務印書館の創業から日本金港堂との合併時期を合計した足掛け18年間をさし

て、特に、初期商務印書館と称する。

初期商務印書館を代表する人物といえば、夏瑞芳をあげなければならない。創業を決意し、日本金港堂との合併を推し進め、それを解消した人物である。

清朝末期から中華民国の初期にかけて、時代が大きく転換した時代に、夏瑞芳は、商務印書館経営の舵を取りながら、自らも揉まれつつ時代の荒波を乗り切る原動力そのものだったといっている。夏瑞芳自身は、日本資本を回収した直後に暗殺されるという不運に見舞われた。初期商務印書館は、別のいいかたをすれば、夏瑞芳の時代だということもできよう。

本書は、初期商務印書館の歴史を、中国側からと日本側からの両方にまたがって総合的に描くことを目的とする。結果として、清末から民国初期にかけて、すなわち1900年代と1910年代に存在した日中出版社交流の特異な一事例を歴史の中から掘り起こすことになった。

第1章において、商務印書館の創業から日中合併にいたるまでの過程を述べる。商務印書館側からの記述となる。

創業者たちのなかのひとり夏瑞芳の動きを中心に、くわえて初期印刷物についても紹介する。経営困難からいかに脱出したのか、火災に襲われながら巨大印刷所を建設できたのはなぜなのか。その背後に存在するものを解明する。

第2章では、商務印書館の合併相手である日本金港堂の創業から、中国大陸との関係が生じることになった人間の結びつきについて概観する。金港堂側からの記述である。

雨山長尾楨太郎が、商務印書館で教科書編集に従事していたのは有名な話だ。長尾雨山は、もともと東京高等師範学校教授をつとめていた。その長尾が、教授の地位を捨てて上海に移住し、商務印書館に勤務することになったのは、なぜか。大きな謎である。金港堂の動きを追跡していく過程で教科書疑獄事件の詳細を知ることになった。長尾雨山にまつわる謎を解くカギがそこにある。

第3章は、商務印書館と金港堂の合併成立からその解消までを、経緯、内容、人的交流にわたって検討する。

日本人と中国人の共同編集による教科書作成、ライバル出版社との闘争、夏瑞芳の投機失敗などの詳細を明らかにし、最後には、合併解消時に獲得した総合利

益の算出を行なう。

第4章は、日中合弁事業がどのように評価されたのかを、商務印書館の当事者による証言、あるいは中国人研究者の発言にもとづいて検討する。

商務印書館は、金港堂との合弁成立直後から、合弁の事実を隠したがっていた。さらに、商務印書館が、一貫して自らを被害者のように演じ表現してきたのは、なぜか。商務印書館の当事者、あるいは中国の研究者たちの心の奥底にある心理状態を明らかにする。

以上の記述は、私が目にできるかぎりの資料にもとづいていることはいうまでもない。

本文中 で示している上海の地名とその説明は、商務印書館に関連する場所である。その場所に番号をふって上海の地図と連動させている。いくつか掲げたこの地図は、もともとは一枚ものである。分割掲載して、その表示する場所が異なるだけだ。丸付番号は関連の場所をさしている。地図そのものの番号ではないのでご注意ください。番号をたどれば、創業の地から、事業発展にともなって上海内を移転するまを追跡することになる。逆にいえば、移転をくりかえしながら事業を拡大していったということでもある。なお、便宜のために「初期商務印書館所在地の変遷一覧」【図1-1】をかかげておく。この一覧に振った丸付番号も同様に、地図上の番号と連動している。

初期商務印書館研究 增補版

目 次

まえがき.....	3
第1章 商務印書館	
1 商務印書館の創業.....	15
夏瑞芳 / 8人の出資者 / 出資者7人説 / 創業者たちとキリスト教 / 夏瑞芳という人	
2 初期印刷物.....	27
3 漢訳『新島襄伝』について.....	33
漢訳『新島襄伝』 / 漢訳『新島襄伝』の内容	
4 商務印書館とキリスト教会.....	40
5 美華書館.....	42
6 英語教科書.....	45
『華英初階』のこと / 『華英初階』の内容	
7 新式学堂の設立.....	60
8 張元済の保証.....	60
翻訳原稿の失敗	
9 教科書の系譜.....	62
日本語教科書(その1) / 坪内逍遙の教科書 / 沙張訳本 / 『絵図 文学初階』	
10 修文書館買収.....	78
11 経営不振をめぐる謎.....	81
12 第1次増資をめぐる謎.....	84
13 張元済が正式に入館するまで.....	88
14 編訳所.....	89
15 火災発生.....	93
出火状況 / 火災保険	

目 次

16	印刷所の設立.....	102
17	印刷所の謎.....	105
18	発行所の設立.....	107

第2章 金港堂

1	永沢金港堂.....	113
2	金港堂の創設者原亮三郎.....	114
3	金港堂と高等師範学校 三宅米吉を例として.....	116
4	金港堂の方向転換.....	119
5	雨山長尾楨太郎.....	121
	長尾雨山と鄭孝胥 / 鄭孝胥のこと / 鄭孝胥の日記 / 日記の中の長尾雨山 日清戦争まで	
6	教科書疑獄事件.....	131
	教科書の採択 / 教科書採択をめぐる醜聞 / 教科書疑獄事件の発生	
7	長尾雨山と教科書疑獄事件.....	138
	新聞に見る長尾雨山らの裁判 / 高津楯三郎の場合	
8	長尾雨山は冤罪である.....	145
	小谷重の場合	
9	上海で報道された日本教科書疑獄事件.....	148
10	長尾正和の雨山伝.....	150
	上海以前 / 上海行 / 子女から見た父雨山 / 長尾雨山の「暗部」	
11	原安三郎からの手紙.....	158
12	金港堂の中国大陸進出計画.....	160
	その動機 / その時期	
13	金港堂から商務印書館への投資.....	164
	原亮三郎と中国大陸 - 商務印書館	
14	山本条太郎.....	167

山本条太郎という人 / 三井物産上海支店長 / 上海紡織有限公司 /
 商務印書館 / 印錫璋

第3章 日中合併

- | | | |
|----|---|-----|
| 1 | 合併の経緯について（誤解その1）..... | 185 |
| 2 | 創業者高翰卿の証言..... | 187 |
| 3 | 合併にいたる経緯、その構造..... | 189 |
| | 合併の推進者 / 合併の条件 / 5万円の捻出 | |
| 4 | 合併と教科書事件の関係について（誤解その2）..... | 194 |
| 5 | 合併の事実を隠したがる商務印書館..... | 196 |
| | 商務印書館の理由 | |
| 6 | 夏瑞芳の才覚と合併効果..... | 208 |
| 7 | 『最新国文教科書』そのほか..... | 212 |
| | 蔣維喬日記から / 教育課程試案 / 教科 / 編制 / 中国の教育課程
/ 『最新国文教科書』第1冊 | |
| 8 | 上海における雨山..... | 253 |
| | 長尾雨山の漢語論文その他 / 雨山の訳書 / 長尾雨山の教科書
日本語教科書（その2） / 時代の反映 / 日中合併 / 翻訳 / 商務
印書館の初期刊行物 | |
| 9 | 鄭孝胥と長尾雨山..... | 271 |
| | 長尾雨山と再会する / 預備立憲公会など | |
| 10 | ライバル（その1） 中国図書公司の場合..... | 274 |
| | 中国図書公司の出現 / 章錫琛論文 / 外交史料 / 『支那經濟全書』
/ 利権回収 その内容 / 「中国図書有限公司縁起」 / 「縁起」
/ 「招股章程」 / 發起人 / その後 / 席子佩 / 『申報』 / 席子佩
（裕福）の登場 / 席子佩にとっての中国図書有限公司 | |
| 11 | 日本人理事の排除..... | 305 |
| | 社長と理事会 | |

12	鄭孝胥と商務印書館、理事会.....	306
	商務印書館株主 / 商務印書館理事会	
13	ゴム投機.....	309
14	張元済、攻撃される.....	316
15	ライバル(その2) 中華書局との教科書戦争.....	318
	陸費逵と商務印書館 / 中華書局創立まで / 陸費逵の秘密行動1 / 夏瑞芳の場合 / 張元済の場合 / 陸費逵の秘密行動 / 秘密行動の 謎 / もうひとつの秘密行動 つぶされた教科書改革 / 中華書局 創立後 / 高夢旦の場合 / 『教育雑誌』のチグハグさ / 陸費逵の商 務印書館辞職 / 中華書局側の記録 / 『申報』紙上の教科書戦争 / / 「共和国教科書」 / 背景としての学制改革 / 実録教科書戦争	
16	商務印書館が日本資本回収を決断する.....	354
	商務印書館の精神的苦しみ	
17	合併解消の経緯.....	356
	民国の商務印書館理事会 / 日本人持ち株の回収 / 金港堂の事情	
18	株と資産の評価.....	363
	日本資本回収 / 商務印書館理事会の完全勝利宣言	
19	増加する資本金とあがる利益.....	368
	資本金 / 日本籍投資者名単 / 夏瑞芳の商務印書館	
20	合併の総決算.....	373
21	合併解消の公表.....	375
22	夏瑞芳暗殺.....	380
23	長尾雨山の帰国.....	386
	長崎到着	

第4章 初期商務印書館の精神分析

1	合併記述の簡素化あるいは軽視.....	395
---	---------------------	-----

目 次

2	被害者意識.....	399
3	人事権.....	403
4	変化しつつある商務印書館研究の現在.....	406
5	事実と意識 心の傷は癒されない.....	412

附 録

1	民國三年一月三十一日非常股東大會董事會報告.....	417
2	商務印書館『最新国文教科書』第1冊本文.....	419
3	最近の商務印書館研究に見る日中合弁の事実.....	426
4	初期商務印書館年表.....	471
5	文献一覧.....	478

初版あとがき 519

増補版あとがき 527

増補版あとがき 2 532

索 引 534

地図（参謀本部陸地測量部1916.2）はすべて同じ。丸数字は移転の順番

地図上の	江西路北京路首徳昌里末街三号	23
地図上の	北京路慶順里口美華書館西首	41
地図上の	長康里で編訳所の設立準備	89
地図上の	錢業会館西文昌閣隔壁	102
地図上の	唐家街	107
地図上の	冠生園北隣171、173番地	107
地図上の	河南路棋盤街直街中市	110
地図上の	蓬路	110
地図上の	美租界新衙門東首祥麟里間壁成字一三六四号	294
地図上の	閘北宝山路	295
地図上の	四馬路畫錦里口	304

第 1 章 商務印書館

第 1 章 商務印書館

【図1-1】初期商務印書館所在地の変遷一覧

年 月	所 在 地		
光緒二十三年正月初十日 1897.2.11 創立	江西路北京路首德昌里末街三号		
光緒二十四年六月 1898	北京路慶順里口美華書館西首		
光緒二十六年 1900	修文書館の機器を買収		
光緒二十八年正月 1902	張元濟、正式に入館 長康里で編訳所 設立準備		
光緒二十八年七月十九日 1902.8.22	火 災		
	印 刷 所	編 訳 所	発 行 所
光緒二十八年九月十五日 1902.10.16 以前	北福建路海寧路 錢業会館西 文昌閣隔壁	唐家街	冠生園北隔壁 之 171,173 号 河南路棋盤街 直街中市
光緒二十九年正月 1903		蓬路	
光緒二十九年十月初一日 1903.11.19 日本金港堂と合併			
光緒三十年八月二十九日 1904.10.8		美租界新衙門 東首祥麟里間壁 成字一三六四号	
光緒三十一年十二月 有限公司、商部登記 光緒三十二年三月十二日 1906.4.5 認可			
光緒三十三年四月落成 1907	開北宝山路		
宣統二年九月 1910.10			四馬路畫錦 里口
民国元年 7 月 1914.1.6 金港堂との合併 を解消			河南路棋盤 街中市

1 商務印書館の創業

商務印書館の創業者のひとりが、夏瑞芳（1872-1914）である【図1-2】。

夏瑞芳こそ、商務印書館の創業を決意し、日中合弁を決断した人物であり、またその合弁解消に踏み切った人にほかならない。

夏 瑞 芳

夏瑞芳、字は粹芳、江蘇青浦県の人、1872年に生まれる。父は上海董家渡の露店商、母はアメリカ籍牧師の家で保母をしていた。1882年夏、母に従い上海にやってくると長老会清心堂南市小学に入学し、卒業後清心書院（Lowrie Institute）に進学する。長老会の正式名称は、American Presbyterian Mission, North（漢語：美国北長老会）という。上海長老会の責任者は、1861（一説に1860）年に上海にやってきたジョン・ファナム（John Marshall Willoughby Farnham 漢語：范約翰）である。

1889年、夏瑞芳は、同仁医院の看護人となり、一年後、英商『文匯報』館で植字を学ぶ。1894年、英商『字林西報』館の植字工に転じ、その後英商『捷報』館で職工長を勤めた[熊尚厚1978][孟森1992]。

夏が植字を学んだという『文匯報』館の『文匯報』（The Shanghai Mercury）は、イギリス人クラーク（J. D. Clark）、リビングトン（C. Rivington）が、1879年4月17日に創設した。上海の重要晩報のひとつである。次の『字林西報』（North China Daily News）は、1864年7月1日、上海の船舶と商業ニュースが増加したことにより『北華捷報』（North China Herald）から別に発行され始めた日刊紙だ。上述『捷報』というのはこの『北華捷報』（1850年8月3日創刊、上海で歴史、影響力ともに最大の英字新聞）のことであろう[曾虛白1966:164-166][戈公振1955:85-86]。

8 人の出資者

1897年2月11日（光緒二十三年正月初十日）、商務印書館は、8名からの出資金を集めて上海に創業された。

【図1-2】夏瑞芳とその家族（1909-1913年の間にスタッフォードが撮影）



「商務印書館」という名称は、商業用に使用する帳簿、広告などを印刷する工場という意味である。当時、中国では印刷工場を「印書館」とよんでいた[胡愈之1979:206]。

出資者たちの出資額と当時の所属、人的関係などを一覧しておく。

沈伯芬 2株1,000元 天主教教徒、郵伝部駐滬電報高等学堂勤務。張蟾芬の紹介で出資。

鮑咸恩 1株 500元 長老会清心学堂で学ぶ。英文捷報館の植字工。

夏瑞芳 1株 500元 長老会清心学堂で学ぶ。英文捷報館勤務。鮑哲才牧師の次女鈺と結婚。出資金は、夫人が女性の同級生から借りたもの。

鮑咸昌 1株 500元 長老会清心学堂で学ぶ。美華書館勤務。郁厚坤の姉と結婚。出資額の半分は、高翰卿が貸与。

徐桂生 1株 500元

【図1-3】鮑3兄弟と父親 左から咸昌、咸恩、哲才、咸亨



高翰卿 半株 250元 長老会清心学堂で学ぶ。美華書館勤務。

張蟾芬 半株 250元 長老会清心学堂で学ぶ。郵伝部駐滬電報高等学堂の電報教習。鮑哲才牧師の長女と結婚。

郁厚坤 半株 250元

商務印書館創業時の出資金は、合計3,750元である[郁為瑾1988:14-18][汪家燊1991:64-70, 1992b:642-655, 1994a:91][劉漢忠1991:42][高翰卿1992:1-13]。

創業の中心者たちは、出資金を捻出するにも困難を感じた。とはいえ、出資できるだけの条件は備わっていたようだ。

夏瑞芳は、その夫人がある女の同級生から借金をしたものだとし、鮑咸恩も同じく借金でまかかった。鮑咸昌の出資金は1株500元となっているが、その実、半分は高翰卿が貸したのだ。高本人がそう証言している[高翰卿1992:3]。

張蟾芬の記憶によると、創業の下相談は、光緒二十二年三月初三日だった[張蟾芬1935:生61]。日付までをおぼえているのは不思議な気もするが、当事者だけ

【圖1-4】夏瑞芳（上）／鮑咸昌（中左）鮑咸恩（中右）／印有模（下）



鮑咸恩 先生浙江鄞縣人爲本館創辦人之一前任印刷所所長長前清宣統二年五月十五日逝世

夏瑞芳 印有模先生字先生字粹方江蘇瓊江蘇青浦縣嘉定縣人爲縣人前本館創任本館辦人之總經理一前任及於民國三年十一月十日逝世

鮑咸昌 先生字仲言浙江鄞縣人爲本館創辦人之一歷任本館印刷所所長及董事及總經理民國十八年十一月九日逝世

あつて鮮明な記憶が残っているのだろう。同じ日付を高翰卿も書いているから、創業者たちは同じ記憶を共有していたことがわかる。

出資者7人説

細かいことのようにだが、最初の出資者は7人だったという説がある。

創業者のひとり高翰卿の発言に起因する。ゆえにそのまま信用する人もいる。

たとえば、林茂「商務印書館創立の経過 併せて宋查理と商務の関係について」は、「その投資は次の七者によるもので、合計金額は三、七五〇元であった」[林茂1986:2]と書く。

高翰卿は、創業当時の株の所有状況について、2度証言している。

「本館創業史」に見られるのが、下に示した左側の1934年講演の人名と数字だ。もうひとつは、それより以前の1917年に、張元済にむかって説明した言葉である。

	1934年講演	1917年発言	
沈伯芬	両股計洋1,000元	1,000	沈伯曾
鮑咸恩	一股計洋 500元	500	
夏瑞芳	一股計洋 500元	500	
鮑咸昌	一股計洋 500元	500	
徐桂生	一股計洋 500元	×	
高翰卿	半股計洋 250元	250	
張蟾芬	半股計洋 250元	500	張桂華 西洋人某より譲渡される
郁厚坤	半股計洋 250元	500	

2説をまとめて、出資金は、ともに合計3,750元となる。合計の数字には、異同はない。

出資者とそれぞれの出資金について、汪家熔が、疑問を提出している。

1980年、汪家熔らが張元済日記を整理している過程で、創業時の投資者について高翰卿が発言したことを張元済が記録しているのを発見した。すなわち、『張元済日記』上冊1917年4月19日の項目に、高翰卿の言葉を見ることができる[張

元濟1981:212]。それを表にしたのが上の右側1917年発言である。金額は同じく3,750元だが、人物に出入りがある。1917年における高翰卿の発言のほうが正しい、『張元濟日記』を信じるほかない、と汪家熔はいう。

ことは、それほど簡単ではない。創業時に出資したひとりである張蟾芬の証言がある。

「私（注：張蟾芬）は、半株二百五十元を担当しただけだ。数のうえでは少ないものだったが、工面するには困難を感じたものだ」[張蟾芬1935:生61]。高翰卿の1917年発言では、張蟾芬（桂華）の金額が500元となっていて、本人の証言とくいちがってしまう。さらに、張蟾芬自身が高翰卿「本館創業史」に注をつけているのだから、金額に間違いはなかろう。

以上の理由から、いくら1917年の方が以前の発言だからといって、必ずしも正確であるとは限らないと考える。記憶違いが後に訂正されることもある。汪家熔の疑義に、あるいは林茂の出資者7人説に、私は賛成することはできない。

創業者たちとキリスト教

商務印書館の創業者たちの関係は、汪家熔によると、もとをたどれば彼らの父親からはじまっている。

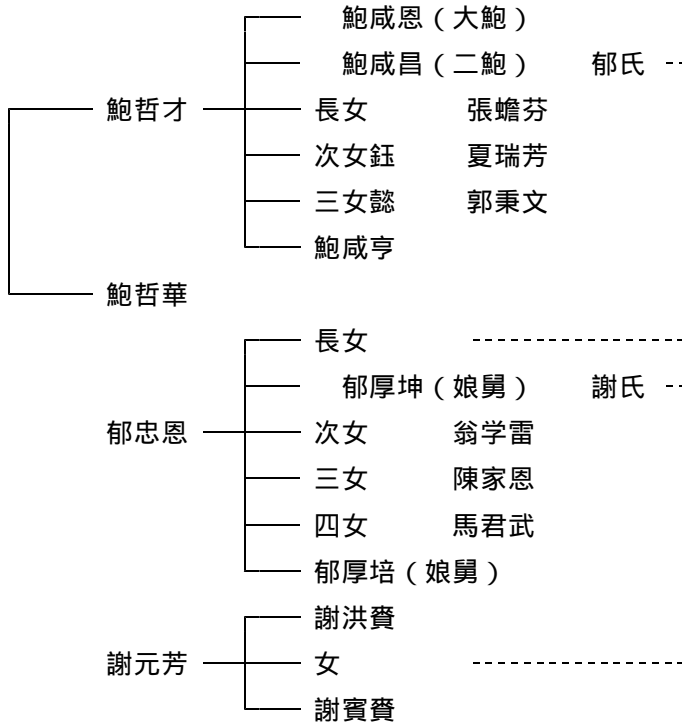
寧波にアメリカ北長老会の宣教師が経営する崇新書院があった。その第1回卒業生が、鮑哲才、鮑哲華兄弟と郁忠恩、謝元芳である。彼らの息子、娘どうしで姻戚関係を結び、商務印書館の創業主要メンバーとなるのだ。

鮑咸恩と咸昌は、兄弟である。鮑咸昌と同時に入館した咸亨とあわせて鮑三兄弟という。彼らの父鮑哲才（字華浦）は、長老会清心堂の牧師だった。ゆえに兄弟とも長老会に属しており、清心学堂に学んだ。長男の鮑咸恩は、文匯報館、英商字林西報館を経て英文捷報館で植字工を勤めている。次男の鮑咸昌は、美華書館に勤務し、郁厚坤の姉と結婚する。

夏瑞芳も長老会に属し、同じく清心学堂に学び、英文捷報館では鮑咸恩と同僚である。さらに、夏瑞芳は鮑哲才牧師の次女鈺と結婚してこれまた親族になっている。

高鳳池（1864-1950）、字は翰卿、江蘇上海県の人。清心堂の学校に学んだ。その

【図1-5】商務印書館創業者の姻戚関係



印：キリスト教徒で最初の出資者

以下は汪家熔のご教示による。

印：終身商務印書館勤務

印：商務印書館に勤務したことがある

()：商務印書館での通称

頃の同級生が、夏瑞芳および鮑咸恩、咸昌兄弟である。高翰卿は、美華書館に勤務し、夏瑞芳、鮑兄弟が商務印書館を設立する際、半株250元を出資した。鮑咸昌の出資1株500元のうち半分は、高翰卿が貸したことはすでに述べた。商務印書館の業務がほぼ安定したのち、高翰卿は、美華書館をやめる。「1909年4月15日、……新1回理事は得票多数を当選とし、合計7人」[張樹年1991:80]だったが、そのひとりが高翰卿だ。

高翰卿が商務印書館に入ったのは、少なくとも1909年以前ということになる。

1914年1月10日、夏瑞芳が暗殺されたあと、印錫璋が総経理に任じられ、その

印が病没するやその後を継ぐ(1915年12月-1920年5月)。マンイング・イブによれば、高翰卿は、有名無実の総経理であり、彼自身は、保守的で慎重すぎる典型的な旧式商人であったという。

張蟾芬も清心学堂に学び、郵伝部駐滬電報高等学堂で電報教習をしていた。沈伯芬と同僚である。鮑哲才牧師の長女と結婚する。

以上、商務印書館創業にかかわった人々のほとんどがキリスト教の信者であり、鮑兄弟と姻戚関係にあった。

沈伯芬は、カトリック(天主)教徒で、電報局において張蟾芬と同僚だ。夏瑞芳、鮑咸恩とは面識がなかったにもかかわらず2株の出資をしたのは、張蟾芬との関係だったのだろう。徐桂生については、詳細は明らかでない。

汪家熔論文にもとづき一覧表を作成すると、おかしなところが2カ所あることに気がついた。鮑咸昌は、郁忠恩の長女と謝元芳の娘を娶っていることになっている。もうひとつは、謝元芳の娘が郁厚坤と鮑咸昌のふたりに嫁いでいるのだ。汪家熔文章には、詳しい説明がないので直接問い合せてみた(1995.7.16)。7月25日付お手紙で、郁忠恩の長女が鮑咸昌へ、謝元芳の娘が郁厚坤に嫁いだ関係図をいただく。別に掲げたのがその関係図である【図1-5】。

商務印書館は、同族会社もしくは家内工場として出発したことを、私は強調しておきたい。同族会社に限らず、創立したばかりの組織は、誰か中心になる人物がいて、はじめて動きだし、時代の波に乗った企業だけが生き残る。

出資者8人のうち、そもそも誰が商務印書館を始めようと言いだしたのか。探っていくとたどりついたのが、夏瑞芳である。

夏瑞芳という人

創業者のひとりである高翰卿は、夏瑞芳、鮑二兄弟と同級生だった。同じ信仰を持っていたので日曜日の礼拝ではいつも顔を合わせ、午後は城隍廟の湖心亭でお茶をのんだり、時には食事に行ったりしていた。英文捷報館での仕事がつらいと話し合い、なんとかこれから逃れようとして考えついたのが、商店の宣伝ビラ、教会関係の出版物を印刷することだ。

高翰卿の証言によれば、最初の考えは夏瑞芳、鮑二兄弟から出された[高翰卿

1992:2-4]。

一方で、陳叔通は「商務（印書館）の主要な創業者は夏瑞芳である。夏は、野心をもった企業家であった」[陳叔通1987:4]と述べている。

「仕事がつらい」とグチだけだったら誰でも言う。行動に移す人がいて、事業は始まる。野心があるから創業当初の激務にも耐えることができるのではないか。

章錫琛は、「1897年2月11日、正式に創業し、夏瑞芳が主宰するよう皆で決めた。鮑咸恩、咸昌兄弟は助けあって仕事をし、鮑咸亨と高鳳池（翰卿）は美華（書館）に残った」[章錫琛1964:63]と書いている。

夏瑞芳は二十六歳だった。鮑咸亨と高翰卿が美華書館に残ったのは、商務印書館がうまくいかなかった場合の一種の保険、すなわち危険分散のつもりだ。

創業した商務で実際に仕事をした人々は、出資者のうちの3名だというのが有力だ。

すなわち、夏瑞芳、鮑咸恩、郁厚坤である[高翰卿1992:3][朱蔚伯1981:142]。

これに鮑咸昌を加えたものもある[張蟾芬1935:生61]。ただし、翌年、美華書館の西隣に移転することになるが、その時に移ってきた人が鮑咸昌、咸亨だと朱蔚伯は証言している[朱蔚伯1981:142]。鮑咸昌は、創業時から商務に自由に出入りしていたということだろう。

夏瑞芳は、創業の年、印刷の視察のために日本へ赴いたという[朱蔚伯1981:143]。この行動ひとつとっても、夏瑞芳の印刷に対する感覚のよさを証明している。商務印書館が、印刷物の高品質で評判をとるのも理解できるのだ。

江西路北京路首徳昌里末街三号（地図）

創業の地である。民家を借り、印刷機械を設置して、従業員は、十数名にすぎなかったという。鮑咸恩、夏瑞芳、郁厚坤の3人が中心になって仕事の区別なく働いた。

最初の資金3,750元は、印刷機器、活字を購入したらほとんどなくなった。経営が最初から苦しいのもしかたのないことだ。株主の沈伯芬に回転資金として2千元を用立ててもらっている[鄭逸梅1983b:4]。

張蟾芬は、住所を「末街三号」とし、高翰卿は「末弄三号」とする。「末街三

号」というのは朱蔚伯だ。

高翰卿は、場所を説明して中国墾業銀行の南、という。中国墾業銀行は、1929年に創業し江西中路、北京東路の角にあった[馬学新ら1992:145]。地図は1916年のものだから、当然ながら中国墾業銀行の記載はない。

部屋の間取りとなると、各人の証言が微妙に違っているのが不思議だ。列挙する。

高翰卿「三幢兩廂房連庇屋」[高翰卿1992:3]

朱蔚伯「三幢兩廂後連披屋的民房」[朱蔚伯1981:142]

章錫琛「兩間屋」[章錫琛1964:63,64]

王雲五「三樓三底房屋一幢」[王雲五1973:2]

陳從周、章明主編『上海近代建築史稿』(上海・三聯書店上海分店1988.12初版未見/1990.6第二次印刷)によると、上海の里弄建築は、老式石庫門、広式、新式石庫門、新式里弄などの類型に分類される。老式石庫門は、一般ににぎやかな市街区に建てられ、階下は商店、2階には多く職工が住む。広式は、2階建てで広東の建物に似ているためこの呼称がある。

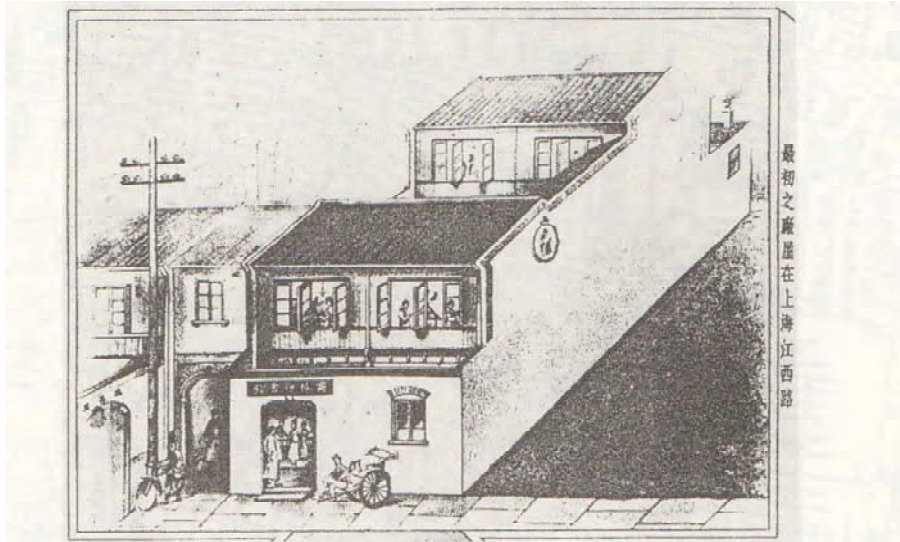
当時の復元図を見ると、二階建てで、出入口の上に商務印書館と看板が掲げているのがわかる【図1-6】。老式石庫門様式だと思う。『上海近代建築史稿』(164頁)から、それらしい図を引用しておく【図1-7】。商務印書館の復元図とは、屋根の形など外見が異なるが、おおよその間取りが理解できる。

朱蔚伯は、高翰卿の文章によっている。間取り図に照らし合わせると、1階の応接間、次間側房(廂房)と後廂房、2階の寝室2間で合計3間2側房になる。1階階段のところにある台所、中2階の寝室2間部分が、高翰卿のいう「連庇屋」、朱蔚伯の「連披屋」であろうか。つづきの間、と訳しておく。ついでに、「幢」は、辞書的には建物の棟を数える場合の量詞である。しかし、高翰卿、朱蔚伯はともに「幢」を部屋を数えるものとして使用している。

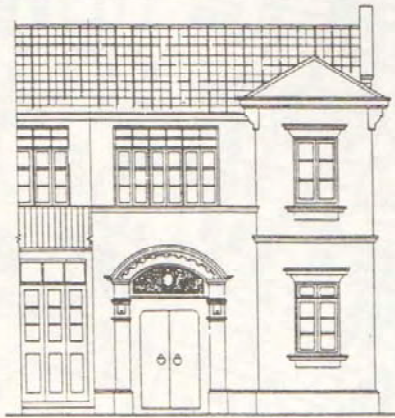
章錫琛が書いている2部屋は、勘違いだろう。王雲五のいう上が3間階下が3間は、細かいところで数が異なる。



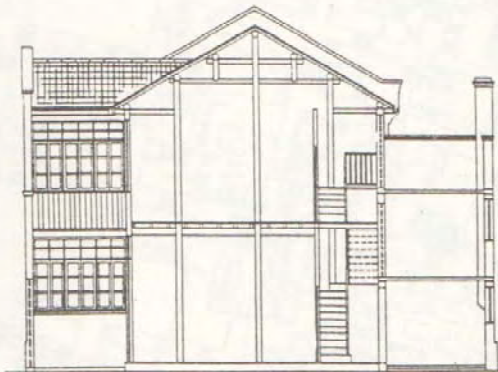
【圖1-6】商務印書館創業の図



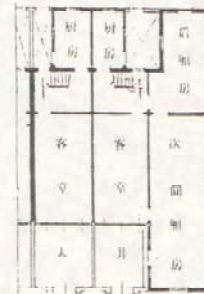
【圖1-7】老式石庫門樣式



剖面



二層平面



底層平面

梅蘭坊石庫門住宅

鄭逸梅は、商務印書館で数十年を勤めた華吟水が持っていた多くの珍しい史料を整理したことがあった。それによると、商務印書館は夏瑞芳と鮑咸恩のふたりが発起したことになる。夏瑞芳は聡明で思い切りがよく、鮑咸恩は慎重で勤勉、ふたりの性格は異なるが、仲がよかった[鄭逸梅1983a:3]。

上の文献から得られた情報をもとに判断すれば、夏瑞芳と鮑二兄弟をくらべてみると、性格からいっても夏瑞芳が積極的に動いているに違いない。印刷業という仕事柄、植字と印刷の工場部門と印刷物の注文を取ってくる営業部門にわかれるのは必然であろう。印刷技術の裏付けがあり、一方の営業に人を得てはじめて発展の基礎が築かれる。商務印書館の場合、その人が夏瑞芳である。

印刷機器を置いた部屋は、賃貸料が毎月50余元だった[鄭逸梅1983a:4]。

夏瑞芳は、社長とはいっても校正、集金、仕入などなんでもこなす。毎日夜8、9時まで働いて給料は24元である。毎月の部屋代の半分にもならない。当然、家庭の収入には不足するので、印刷の注文をとるついでに保険の勧誘を副業にして家計の補助とした。

夏瑞芳と鮑咸恩の家族はみな工場に住み込んで、折りや製本をした、といわれる状況を見れば、同族会社よりも一段と小規模な家族企業とよぶ方が適切だ。指導的立場にいる強力な人物が、すべてを取りし切るのを特徴とする。基本的に家族企業としての形態は、企業規模が大きくなっても変化せず、夏瑞芳が暗殺されるまで継続したと考えるが、これはまた後に述べることにする。

収入があれば営業資金にまわし、当然ながら、出資金に応じた利益の配当などあるはずがなかった。

2 初期印刷物

創立当時の商務印書館が請け負った印刷物のいくつかを見ておきたい。

創業から1902年くらいまでの約5年間、どのような印刷を行っていたのか。特に書籍、雑誌に関するものをさがそうとすると、とたんに見通しが悪くなる。原物を見るのが困難なことはいうまでもない。それゆえか、二次資料もあやふ

やになっている。手探りではじめるほかない。

たとえば、王雲五『商務印書館与新教育年譜』(台湾商務印書館1973.3)である。

1901年に『外交報』を創刊する(8頁)、1902年の項目に図書15種27冊を出版する(10頁)、と書いてあるくらいのことだ。1900年以前の仕事は、皆目わからない。

本来ならば、『商務印書館図書目録(1897-1949)』(北京・商務印書館1981)を見れば、一目瞭然となっていてほしいところだ。しかし、該書に収録されたのは、書名と著訳者名を主としているだけで、発行年月が記載されていない。惜しい、としかいいようがない。

想像するに、該目録は、商務印書館が過去に出版していた宣伝用の出版目録をそのまま流用して編集したのだろう。宣伝用のものだから発行年月日は、もともと掲載されていないのだ。教科書の出版概況が、附録に掲載されている。初等小学用に7種類、高等小学用に9種類の書名が掲げられるが、これらは1902年のものだ。

さすがに、『商務印書館大事記』(北京・商務印書館1987.1)は、創業90周年を記念して発行されただけのことはある。以前のものにくらべて、記述がかなり詳しくなっている(のちに『商務印書館百年大事記』となって発行された)。

該当部分を引き抜いてみよう。

1898年の項目に、「出版《華英初階》,《華英進階》(謝洪賚牧師訳注)」(参考[汪家燊1987d:2-4])とある。説明しておく、『商務印書館大事記』には、通しページ数というものはない。1年を見開きに収める。

この英語の教科書がよく売れ、出版業の基礎をつくったことは有名だ。請け負いだけの印刷業より自社企画の出版業へ転身するきっかけとなった記念碑的出版物といってもいい。

おなじく1898年の項目を見る。「代印《昌言報》和《格致新報》」と書かれている。「代印」とは、印刷を請け負ったという意味だ。『昌言報』は、その第3冊(光緒二十四年七月二十六日1898.9.11)より印刷が商務印書館に変更された[樽本照雄1986f]。該誌第6冊(光緒二十四年八月二十六日1898.10.11)のノドに「上海北京路商務印書館代印」と印刷されている。

『商務印書館大事記』によると、創業の1897年には、印刷、出版の記載がない。

つまり、翌年に出した『華英初階』、『華英進階』がはじめての出版物であり、『昌言報』、『格致新報』が最初の印刷物だ、と商務印書館自身が認めていると考えてもいいたろう。

『商務印書館大事記』の記述をもうすこし見る。

1899年「出版《商務印書館華英字典》(據鄺富灼所編《華英字典》修訂)」

1900年「出版《華英地理問答》(英漢对照)」

以上のふたつとも教科書がらみの出版だ。

手元にある『商務書館華英字典』(光緒二十有八年<1902>歲次壬寅仲春<二月> 上海商務印書館 三次重印本。奥付なし)は、活版線装本だ。

誤解があるようだが、書名は『商務書館華英字典』であって、『商務印書館華英字典』ではない。書影で確認してほしい【図1-8】。商務印書館が発行した各種雑誌の広告にも『商務書館華英字典』とあるとおりだ(商務印書館発行の英語辞書について書いたものに、[汪家燊1992b]がある)。商務印書館みずから、「商務書館」と表記していたことがあった。誤記ではない。

扉裏に当時商務印書館が発行していた書籍の広告がある【図1-9】。英語の学習書に漢語を併記するという工夫が読者によるこぼれ、商務印書館の経済的基礎を築いたのはよく知られた事実だ(後述)。読本、文法、地理、辞書、書簡文、会話、その他と英語表示と同時に漢語の書名が明らかにされている。

広告欄の下に“the Commercial Press Book Depot, U41, Peking Road, Shanghai”とあるのが目を引く。従来、商務印書館の英文表記は、“(the) Commercial Press”だと考えられていた。しかし、初期の英文表記は上述のとおりである。“the Commercial(商務) Press(印) Book(書) Depot(館)”となって、漢字をそのまま英文に翻訳したのが正式のものだとわかる。

つぎの『外交報』あたりからすこし傾向が異なってくる。

1901年「代印張元濟与蔡元培創辦的《外交報》(1901-1910)」

【図1-8】『商務印書館華英字典』



『外交報』に関する『商務印書館大事記』のこの記述は、正確さを欠く。『外交報』第1号の発行は、「光緒二十七年十一月二十五日」である。西暦になおすと1902年1月4日だ[樽本照雄1986d]。西暦で表記するならば、そのまま1902年とする必要がある。この第1号表紙下に「上海商務印書館代印」とあることをつけくわえておく。

たよりになるはずの『商務印書館大事記』には、以上のような言及しかない。

【圖1-9】商務印書館の書籍廣告

ENGLISH AND CHINESE SCHOOL BOOKS.
Especially Reprinted, with FULL TRANSLATIONS IN CHINESE, from the series of School Books published by the Christian Literature Society for India.
 PUBLISHED BY THE
COMMERCIAL PRESS BOOK DEPOT.

READERS:

ENGLISH AND CHINESE PRIMER	華英初階	初階	階	初集
ENGLISH AND CHINESE FIRST READER	華英初階	初階	階	式集
ENGLISH AND CHINESE SECOND READER	華英初階	初階	階	參集
ENGLISH AND CHINESE THIRD READER	華英初階	初階	階	肆集
ENGLISH AND CHINESE FOURTH READER	華英初階	初階	階	伍集
ENGLISH AND CHINESE FIFTH READER	華英初階	初階	階	陸集
ENGLISH AND CHINESE READERS	華英初階	初階	階	全集

(From Primer to Fifth Reader. Bound in 1 Vol. Coloured Cloth Covers.)

GRAMMARS:

ENGLISH AND CHINESE GRAMMATICAL PRIMER	華英初階	初階	階	初集
GRAMMATICAL PRIMER	華英初階	初階	階	初集

GEOGRAPHIES:

ENGLISH AND CHINESE CATECHISM OF GEOGRAPHY 華英地理問答

From the series of the New Orient Readers.

READERS:

ANGLO-CHINESE NEW ORIENT PRIMER	華英亞洲	亞洲	洲	啓集
ANGLO-CHINESE NEW ORIENT FIRST READER	華英亞洲	亞洲	洲	悟集
ANGLO-CHINESE NEW ORIENT SECOND READER	華英亞洲	亞洲	洲	本集
ANGLO-CHINESE NEW ORIENT THIRD READER	華英亞洲	亞洲	洲	本集

From the series of Royal School Books.

READERS:

ANGLO-CHINESE ROYAL PRIMER	華英國學	國學	訓蒙	編卷
ANGLO-CHINESE ROYAL FIRST READER	華英國學	國學	文編	壹卷
ANGLO-CHINESE ROYAL SECOND READER	華英國學	國學	文編	貳卷
ANGLO-CHINESE ROYAL THIRD READER	華英國學	國學	文編	參卷
ANGLO-CHINESE ROYAL FOURTH READER	華英國學	國學	文編	肆卷

DICTIONARIES:

COMMERCIAL PRESS ENGLISH AND CHINESE DICTIONARY 商務書館華英字典
 400 pp. COLOURED CLOTH COVERS. 40,000 REFERENCES.
 " CHINESE PAPER AND BINDING. "

LETTER WRITERS:

ENGLISH AND CHINESE COMPLETE LETTER WRITER	華英文件	指南
SELECT CORRESPONDENCE, (French and English)	華英尺牘	譯要

CONVERSATIONS:

ENGLISH AND CHINESE CONVERSATIONS	華英要語	類編
--	------	----

MISCELLANEOUS:

METHOD FOR LEARNING ENGLISH	增廣英字	指南
<i>Revised, Improved and Enlarged. Bound in 1 Vol. Coloured Cloth Covers.</i>		
CHINESE PRIMER, No. 1	文初階	卷一
CHINESE PRIMER, No. 2	文初階	卷二
BOYERS' READING, 6 vols.	文學階	卷六
GENERAL DESCRIPTIVE GEOGRAPHY, PART I	拳地間	事答
GENERAL DESCRIPTIVE GEOGRAPHY, PART II	拳地間	事答

Orders should be sent to the Commercial Press Book Depot, U41, Peking Road, Shanghai.

あとは、あちこちに散らばる資料から拾い集めることになる。見落としがあるのを免れないが、気のついたものを紹介しよう。

資料の海を漂うようなものだ。ふるいものから順に触れる。

1898年、邵作舟撰『邵氏危言』を上海商務印書館が出版した、という記述がある[張樹年1991:23]。

英語教科書『華英初階』、『華英進階』とは別の出版物があったことがわかる。

「『亜泉雑誌』は、わが国人が自ら経営する最も早い自然科学に関する総合雑誌である。1900年11月29日（光緒二十六年十月初八日）に創刊された。主編は杜亜泉，彼が上海で創設した亜泉学館が出版発行し、上海北京路商務印書館が印刷した（下略）」[范明礼1982:77]

『外交報』の印刷より、こちらの方が早い。

はやいといえば、もうひとつ『訳林』の印刷がある。1901年3月5日（光緒辛丑正月十五日）創刊。林紘、伊藤賢道監訳。編印所は杭州におかれているが、印刷は上海だ。「上海北京路商務印書館代印」と明記される[樽本照雄1982c][劉仁達1982:90]。

『訳林』とほぼ同じころ『集成報』の印刷も請け負っている。

『集成報』は、1901年4月（光緒二十七年三月）、上海で創刊。イギリス商の集成報館の経営、代理人はラッセル（H. C. Russell 呂塞爾）という[潘慶徳1982:69]。

めずらしいと思われるものに『天地奇異志』（1901）がある。ツゲ版画の印刷例としてあげられたものに説明が加えられ、商務印書館の印刷だと書いてある[張静廬1953:挿頁]。

1901年、嚴復の翻訳『原富』（A. Smith “AN INQUIRY INTO THE NATUR AND CAUSES OF THE WEALTH OF NATIONS”）を印刷したというのは、汪家燾だ。1901年代印とする[汪家燾1985:46]。増田涉文庫の目録には、「英国斯賓塞爾撰、清嚴復訳『原富』南洋公学訳書院排印本 光緒二十八年（1902）」[増田涉1983:140下]となっていて、発行は1902年と知れる。

なお、嚴復の翻訳ではミル（John Stuart Mill）の『群己権界論』（On Liberty）が商務印書館から出版されている。賀麟「嚴復的翻訳」には、「『哲学／群己権界論／On Liberty／John Stuart Mill／英／1859／商務印書館／1899／原名自由論一九

○三年改今名」[賀麟1925:76-77]とあり、1899年に発行されているように読める。しかし、該書は、一般に1903年の出版とされる。原物を見ていないので、疑問にとどめておく。

ついでに、『商務印書館大事記』の1903年の項目には、「出版叢復訳《群学肄言》(〔英〕斯賓塞著)」とあるが誤り。『群学肄言』は、もともとが上海・文明書局の発行である。版權が商務印書館に帰することになるのは、後のことだ。ここは、「出版叢復訳《群己權界論》(約翰・穆勒著)」とすべきだろう。

以上、こまごまと述べた。私の見た資料の記述によると、可能なかぎりさかのぼって、商務印書館の印刷物は、創業の翌1898年になる。

なお、中村忠行より1991年12月5日付け書簡を拝受、以下のようにご教示いただいた。参考と記念のために引用しておく。

「清末の商務刊の本を御捜しの由。何かの文の末に御示のものゝ他に気付いたものにノ馬建忠の文通初印本があります(実藤文庫)。その巻一の扉にはノ光緒二十四年孟冬ノ馬氏文通ノ上海商務印書館排印翻刻必究ノとあつて、自家版らしく見られます。ノ序文の末に、<明治三十七年五月初一日識湖北商務館之樓上 大日本帝国 布衣河瀬長定撰>とある岡本監輔の《西学探源》の扉も、ノ明治三十四年六月 岡本監輔編次ノ西学探原ノ光緒二十七年四月 上海商務印書館代印ノとあり、共に外注による印刷と見られます。両者で異なる点は、前者に奥付はないが、後者にはあることです。大兄の御文章に見える邵作舟の<危言>も、印刷を商務に頼んだもので、商務の出版物(発行品)ではないでせう。扉に題字に<邵氏危言>とある右下に朱(コノ朱刷八木版ノ朱印肉ヲ使ツテ後カラ捺シタモノ)で<每部実洋五角>左に同じく朱で<書経存案翻印必究>とあり、オモテ表紙の裏に翻刻を禁ずる諭告があつて、一見商務の出版物の様だが、扉の枠外に<上海商務印書館擺印>とある(印行デハナイ)」

3 漢訳『新島襄伝』について

美国台物史先生輯、范師母口訳『尼虚曼伝』(中国聖教書会発 光緒二十三年)と

【図1-10】『尼虚曼伝』（同志社大学所蔵）



いう本がある【図1-10】。

扉に印刷されている「商務印書館代印」という文字に注目してほしい。光緒二十三年（1897）とは、商務印書館創業の年にほかならない。管見によれば、この本を記載する資料を見ない。既述の通り、商務印書館の印刷物としては、ほかのどれよりも早い。初期商務印書館の印刷物としては、めずらしいもののひとつだといえる。

書名の「尼虚曼」とは、中国音では、Nixumanとなる。つまり、同志社の創立者である新島襄（1843.2.12-1890.1.23）の伝記なのだ。なぜ新島と漢字表記しないかといえ、原文が英語でNEESIMAと書かれているから音訳するほかなかった。

漢訳『新島襄伝』

線装、活字本、25cm×15cm。半葉15行40字。扉のあとに新島襄の肖像画が木版画で掲げられ、下に「尼虚曼先生伝」とある。つづいて「救主降世一千八百九十三年正月即光緒壬辰之冬季西冷原源子謹識」と記す「尼虚曼伝序」が2葉、本文は、全30葉である。あわせて14枚の木版画を収める。

序によると、本書は、辛卯の夏、范師母が漢語に口訳したものを筆記して成ったという。辛卯は、光緒十七年（1891）だ。范師母とは、ファーンナム夫人（Mrs. J. M. Farnham）である。

漢訳本の原書となったものは、REV. J. D. DAVIS, D. D. “A SKETCH OF THE LIFE OF REV. JOSEPH HARDY NEESIMA, L. L. D.” (TOKYO : Z. P. MARUYA & Co., LIMITED 1890) という。訳せば、宣教師ジェローム・ディーン・デイヴィス神学博士著『宣教師ジョゼフ・ハーディ・新島名誉法学博士の生涯の素描』ということになるだろうか。

TOKYOとあるところからわかるように日本で出版された。この本には、日本語の奥付がある。記録しておく。

明治廿三年十一月十日出版

著作者 米国人 ゼー、デー、デビス

発行人 上田周太郎

印刷人 広瀬安七

売捌所 丸善商社書店

14枚の木版画が収められている。木版画には、「東京生巧館」あるいは「SEIKOKAN」と製作所の名前らしいものが刻み込まれており、日本で作成されたことが明らかなだ。写真にもとづいて模刻した木版画である。

漢訳『新島襄伝』は、英文原本が発行されて1年後に翻訳された。ちなみに日本語訳は、同志社教授ゼ、デ、デビス君、村田勤、松浦政泰合訳『新島襄先生之伝』（扉に大阪福音社<奥付には、東京・警醒社と併記される> 明治二十四年<1891>一月十七日）である。

J.D. デイヴィス著、北垣宗治訳『新島襄の生涯』（同志社校友会1975.11.22）の「訳者あとがき」によると、英語版初版の日本語訳は、警醒社より一八九一年一月十六日に発行された、という（同書 207頁）。しかし、すでに述べたように、奥付には、大阪・福音社と東京・警醒社が併記されている。また、訳者のいう発行日の「一八九一年一月十六日」というのは、誤り。十六日は、印刷日だ。見誤ったのだ。なお、北垣訳本は、小学館（1977.3.10）からも発行されている。ただし、元本の「訳者あとがき」の一部を削除する。

たしかに日本語訳の方が、早く出版されてはいるが、中国でもほとんど同時期に漢訳が行なわれていたことになる。

漢訳『新島襄伝』の内容

漢訳版は、全7章で構成されており、英語版と異ならない。ただ、英語原本にある各章題、たとえば第1章の“Birth, Early Surroundings and Start from Japan（誕生、初期の環境、日本からの脱出）”などは、漢訳版では省略されている。

書き出し部分を対照してみよう。

まず、英語原本から。

The ancestors of Mr. Neesima were of the samurai class, the retainers of a Daimio of Joshu, an interior province, with the Daimiate at Annaka about seventy five miles from Tokyo.（新島氏の祖先は士族であり、東京より約75マイルのところにある内陸地上州の大名安中藩の家臣であった。）

これが、日本語訳初版では、次のようになる。

新島襄先生は元上州安中の藩士なり、幼名を七五三太と呼び弱冠にして襄と改む

この部分のみを見ると、いわゆる豪傑訳といってもいいだろう。原文とあてはまるのは、「新島」「上州安中」、しいていえば“the samurai class”を「藩士」と

した部分くらいだ。

漢訳は、どうか。

日本人尼虚曼、華族也、世居離東京七十五英里大名之上州省安中府、為該省諸侯之属僚（日本人ニイシマは、華族である。東京より75マイル離れた大名の上州省安中府に代々住み、該省君主の家臣であった）

“Mr.Neesima”が、「尼虚曼」と音訳された。“the samurai class”を「華族」とするなどひっかかるところはあるが、日本語訳に比較すれば、漢訳の方が原文に忠実だといえる。

ご存知の方には煩わしいかもしれない。が、よほど関心のある人以外は、新島襄の伝記が漢訳されたものを見る機会はないだろう。説明をくわえながら、一応、内容を要約しておく。

第1章 新島の誕生から、彼の受けた教育、日本脱出までが述べられる。

「日本人尼虚曼、華族也」で始まるのは、すでに見た。新島の属していた上州安中藩を「上州省安中府」と訳したのは、中国人向けという意味もある。中心は、聖書とのめぐりあいだ。新島は、十六歳のとき漢訳アメリカ地図書によって新知識にめざめた。蘭学を学び、友人のところで漢訳聖書を見つけ西洋語の聖書を読む決意をかため、導いてくれる教師あるいは宣教師を見つけたいと考えた。箱（函）館を経由して、ついに日本を脱出することになる。

第2章 密航した新島が、アメリカで教育を受けることが語られる。

新島は、香港で購入した漢訳の新訳聖書を読み、イエス・キリストこそ自分の欲するものであることを自覚する。アルフース・ハーディー（Alpheus Hardy）の援助を得て、新島は、フィリップス・アカデミー（Phillips Academy）から、アーモスト大学（Amherst College）に学び、卒業後、アンドーヴァー神学校（Andover Theological Seminary）で学業を続けることになった。1872年、岩倉具視一行がワシントンに到着、通訳を依頼され、同行して10ヵ月におよぶ欧州諸国の教育視察を行なったのもめぐりあわせだ。この時知りあった人物が帰国後要職についていたため、新島の学校創立にいくらか有利にことが運んだともいえる。

1874年、アンドーヴァー神学校を卒業し、アメリカン・ボード（米国海外伝道協会）の宣教師となる。日本に伝道の大学校を設立するための募金を訴えたのは、その年次大会でのことだった。

第3章 同志社設立までの過程が綴られる。

1874年、帰国。新島は、学校創設のため大阪、神戸へおもむく。大阪は不首尾におわったが、京都の山本覚馬の知遇を得て、御所の北に学校用地を購入、同志社と名前を定める。反対、妨害をはねつけ、ねばり強い一連の運動を継続し、1875年11月ついに開校式にこぎつけた。

第4章 新島と同志社をとりまいた数々の困難がしたためられる。

新島は、山本覚馬の妹八重と結婚した。一方、学校に対する京都府の敵視、聖書を朗読することが許されないなどの妨害があった。また、外国人教授の京都滞在、教授許可についても厳しい扱われかたをした。それらの一つひとつは新島を悩ませるのに充分だったろう。さらに、熊本（原文：古麻麻土）より信仰の故に迫害された30名の学生が同志社に入学している。この熊本洋学校にいたのが徳富猪一郎で、東京から草創期の同志社に転入した。「予は別段新島先生には失望しなかつたが、同志社には失望した。同志社は明治八年に開校したといふことで、創立から既に一年を経てあるが、何事も不整頓であつた。予等が熊本にて学んだる洋学校に比ぶれば、とても比較にはならなかつた」、「先生から洗礼を受けるやうになつたのは、恐らくはそれ（注：新島を立派な人物であると蘇峰が認めていたこと）が主なる理由ではなかつたかと思ふ。謂はゞキリストを信ずると云ふよりも、新島先生を信ずると云ふことで、キリストを經由して、神に近付くと云ふよりも、新島先生を經由して、神に近付くと云ふ事であつた。ノ（中略）予は同志社に於て何物を最も多く得たかと云へば、国民的精神を得た事である。若し予が同志社の如き宣教師学校に入らなかつたならば、これ程迄に自国を愛するの心は多く出なかつたではあるまいかと思ふ。謂はゞ同志社に入りて、初めて我が日本帝国の難有さを知つた様な心持がする」と書いている[徳富猪一郎1935:79, 86-87][中野好夫1972:77-103]。

第5章 大学校設立計画の推進と病氣療養のための海外旅行が記される。

同志社では、現在も「キリスト教主義大学」という言葉が使われている。デイ

ヴィスの原本に見える“ a Christian university ”だ。ただし、漢訳本第5章には、該当の部分に「大学校」とあるのみ。

大学設立の趣旨は、漢訳では「勸勉之詞（勧め励ます言葉）」となる。「善道」を習う大学校が日本には、ない。この「善道」こそ教化の基礎なのだ。欧州で政治宗教がすばらしいのは、自由、格致（原理の追及）およびキリストの善果が国政とあい助けあって行なわれているがゆえなのだ（英語原本“ The growth of liberty, the development of science, the advancement of politics and the power of morality ” p.88 / 村田、松浦日本語訳「要するに自由の拡張と学問の発達と政事の進歩と道義の能力に帰せずんばならず」88頁）。

この四つの基礎には、キリストの道徳がある。明治8年、京都に学校を建設し、真理を教え、格致などの学に及んだ、と。そして明治大学校設立の宣言となる（最初の計画では、同志社を明治専門学校と改名することも含まれていた。同志社大学となるのは、徳富猪一郎の助言によるらしい）。

1884年、過去9年間の疲労が重なり、新島は休息のため欧州経由でアメリカにむかう。アメリカ滞在中は、大学創立の構想を練るのだった。

キリスト教によって日本を救う、この考えが新島の根底にある。帰国後も大学設立のための募金運動が続いた。

1888年11月10日<7日?>に新島の大学設立のことが新聞に発表されている。この一文において、新島は自らの経歴を含んで同志社創立までのありさまを語り、私立大学設立の必要性を訴えた（新聞に掲載されたこの文章は、デイヴィス著の第二、三版では、削除されたらしい。ゆえに第三版にもとづいた日本語訳には、該当部分がない）。

第6章 晩年の事業、病気、死去および埋葬が書き留められる。

病身をおして東京で大学設立の募金活動を行ない、ついに横浜の近く（大磯）で静養するもかいなく、1890年（明治23）1月23日、没した。遺骸は汽車で京都に運ばれ、全学生に迎えられ、葬送の行進がおこなわれた。

第7章 瞑想、性格そして教訓が執筆される。

新島襄の思想、教えが、彼が生前に残した日記、手記から文章が引用されて述べられる。前出北垣訳本では、章題を「新島襄から学ぶこと」としており、わか

りやすい。教会におけるお説教と考えればいい。ここでは、これ以上ふれない。

英語原本は、デイヴィスの一人称で記述が進められている。一方、漢訳のほうは、三人称で書かれているという違いはある。だが、漢訳された内容は、英語原本にほぼ忠実なものとなっているといえることができる。

光緒二十三年、明治でいえば30年、西暦1897年という時期に、日本の一民間人の伝記が漢語訳されて出版された。表面的には、ただそれだけのようにも見える。しかし、その背景を探ってみると、興味深いことに気がつくのだ。

4 商務印書館とキリスト教会

英語原本と漢訳『新島襄伝』には、それぞれ14枚の木版画が収められていることには触れた。その図柄は、ふたつとも異なる箇所はなく、「東京生巧館」、「SEIKOKAN」と刻み込まれたところもかわらない。そればかりか、2種類の出版物に使用された木版画は同一寸法なのだ。つまり、日本で作成、印刷に使用された木版画が、その後、中国に渡り再利用されたということなのである。

漢訳『新島襄伝』の翻訳者ファーナム夫人の夫ファーナム (John Marshall Willoughby Farnham, 1830-1917) は、アメリカ北長老会の宣教師であり、該書を発行した中国聖教書会の秘書である。彼は、1860年、中国にやってきた。中国聖教書会に勤務し、1891年、『中西教会報』(Chinese Christian Review) を創刊、ほかに上海清心書院 (Lowrie Institute) 院長を24年間にわたりつとめた[中国社会科学院近代史研究所翻訳室1981:135]。

『新島襄伝』は、日本、中国のキリスト教会ネットワークにのった出版物だといえることができる。

キリスト教会ネットワークの範囲内にいるのが、商務印書館の創立者たちであった。夏瑞芳、また鮑咸恩、咸昌、咸亨の三兄弟、さらに高翰卿(鳳池)は、前述したようにすべてアメリカのキリスト教長老会の信者なのだ。さらに彼らは、清心堂 (American Presbyterian Mission) で学んでいる。ここでファーナムと結びついていることがわかる。

商務印書館創立に出資した張蟾芬は、夏瑞芳、鮑咸恩らが商務印書館を設立して独立した時の頼みのツナは、英米聖教書会および広学会など教会関係の印刷を請け負うことにあった、という意味のことをいっている[張蟾芬1935:生61]。

『尼虚曼伝』(中国聖教書会発、商務印書館代印1897)という印刷物の存在は、張蟾芬の証言が事実であることを証明している。

キリスト教会から商務印書館が誕生したといっても過言ではない。

ついでに、漢訳『新島襄伝』は、その内容を要約したものが、おなじくキリスト教関係の出版物に掲載されたこともつけくわえておく。

美国范約翰師母「日本陀希削大書院」Mrs. J. M. Farnham “Doshisha College” (『画図新報/威海雜記』第1年第7巻光緒二十九年歲次癸卯六月<1903.7>。原本樽本所蔵)がそれだ。また、おなじものが転載されているようだ。(美)范師母「日本陀希削大書院」(録画図新報)『中西教会報』復刊第97冊癸卯七月初十日(1903.9.1)である[上海図書館1965:490]。ただし、私は『中西教会報』の原本は未見だ。

北京路慶順里口美華書館西首(地図)

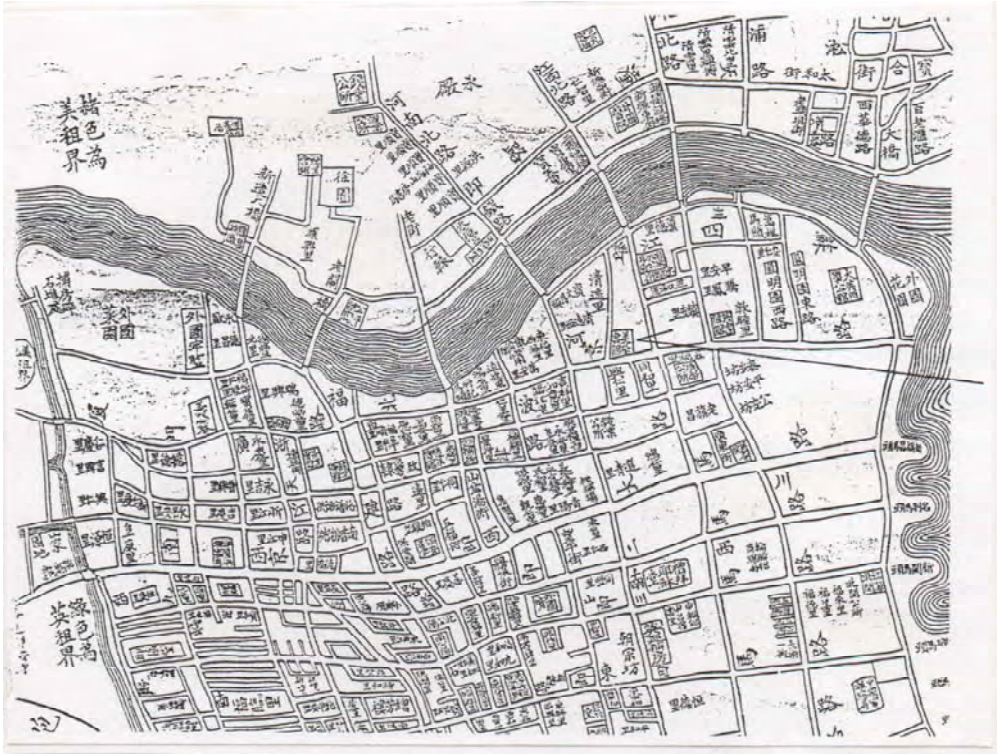
創業の地である徳昌里から慶順里に移転した理由は、手狭になったからだと思っていた。しかし、鄭逸梅の説明によると、創業の翌年、建物が倒れてしまったのが原因で最初の移転を行なうことになったという。たしかに高翰卿も、手狭になったことと崩れたことを移転の理由にあげている[高翰卿1992:4]。

植字と印刷は鮑咸恩、咸昌が主宰し、社長(原文:総経理)をつとめたのは夏瑞芳である、と高翰卿はいうのだ[高翰卿1992:4]。

移転の時期は、高翰卿によると光緒二十四年「夏」、朱蔚伯は同年「六月」とする。

地図では、北京路慶順里(莊俞は、北京路順慶里と誤る[莊俞1931:1]。『商務印書館九十五年』に再録された際も誤りは訂正されていない[商務印書館1992a:722])に浙江銀行の表示がある。ここに商務印書館があった。路地を隔てて東側に美華書館がある。『重修上海景城廂租界地理全図』に美華書館の記入があるのでこれも参照してほしい【図1-11】。

【図1-11】美華書館の隣



5 美華書館

美華書館といえば、商務印書館にとっては切りはなせない存在だ。

英語表記 American Presbyterian Mission Press からわかるように、アメリカのキリスト教長老会が中国に設立した出版、印刷組織である。

1844年、マカオにおいて華英校書房として創業した。1845年寧波に移転し華花聖經書房と改名、1860年に上海小東門外に移り美華書館と称する。のち発行所を北京路に置く [印刷史研究会2000:236][何歩雲1990:213] (別に、アメリカの教会から命をうけて伝道師宋耀如が1892年に設立した、という説もある[曹裕才1985:28-31]。首肯

しがたい。関連するものとして林茂「商務印書館創立の経過 併せて宋查理と商務の関係について」[林茂1986]を参照のこと。林茂論文では、華美印書館とする)

商務印書館創業にあたって、8名の人物が資金を出したことはすでに述べた。商務印書館入館の時期別に配列し直すと以下のようなになる。

創業時入館 鮑咸恩(1株500元)、夏瑞芳(1株500元)、郁厚坤(半株250元)
1898年入館 鮑咸昌(1株500元)
1908年以前 高翰卿(半株250元)
1909年入館 張蟾芬(半株250元)
株主 沈伯芬(2株1,000元)、徐桂生(1株500元) / 合計3,750元

ここで言うておかななくてはならないのは、株などと称しているが、これは株式ではない。出資額を便宜的に数えているだけで、当初は1株500元に設定したということにすぎないのだ。

教会関係の印刷物を請け負うことから商務印書館の仕事がはじまったことを見てきた。創業者たちの経歴を考えれば、それももっともだと理解できよう。

もともと関係の深かった美華書館の、それもすぐ西隣に移転してきたのだから、うわさ、あるいは伝説も生まれてくる。

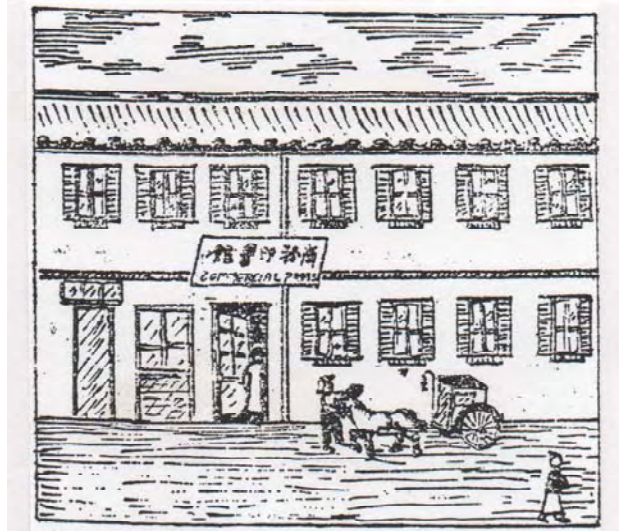
朱蔚伯が述べているのは、こういう話だ。

高翰卿が美華書館にいて、まだ商務印書館に入館していないころのこと。美華書館で印刷を引き受けるにさいして、外国人の基準で価格を高くいい、お客がその値段の高さを嫌うと、隣で開店した印刷所でやってみたらどうかと勧め、商務印書館を応援した、というのだ。いかにもありそうなことではなかるうか。

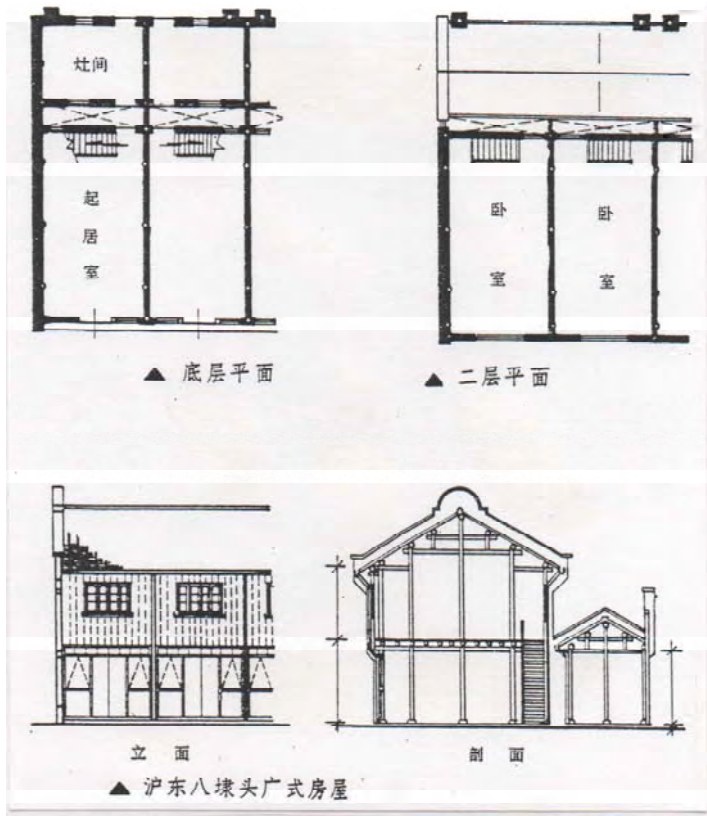
汪家燭『大変動時代的建設者』に当時の復元図が掲載されている[汪家燭1985: 49]【図1-12】。

復元図は、信頼できる資料による、とだけあってそれ以上の説明はない。汪家燭が見た『商務書館華英字典』の表紙に、階上6間階下6間の商務印書館の姿が空押ししてあった[汪家燭1987d]。どうやらこれをもとにして復元図を描いたと思われる。

【圖1-12】北京路の商務印書館



【圖1-13】広式住宅



分類に従うならば、広式住宅【図1-13】ということになる。12部屋を借りたということだ。部屋数からだけいうならば、創業時の石庫門住宅にくらべて増えた。北京路に面して、たしかに表道路に出たという感じがする。ただし、建物自体からいえば庭もなく狭く、さほど高級なものとも思えない。夏、鮑両家の家族は、みなこの慶順里に住み、製本などの仕事をした。

印刷の下請けだけでは、事業としての発展の可能性は少ない、と夏瑞芳は考えた。教科書出版をはじめることにした。その英語教科書が好評でその後の出版の基礎を築いた、というのが通説だ。

6 英語教科書

『商務印書館大事記』の記載によると、英語教科書『華英初階』(English and Chinese Primer)と『華英進階』(English and Chinese Readers)の出版が、1898年である[商務印書館1987a]。前者は、イギリス人がインドの学生用に編集した英語教科書を基礎にして刊行された。それに漢語の注釈をつけたのは謝洪賚だという[汪家燊1987d]。それまでは、漢語の注釈がなく、教師、読者ともに不便を感じていた。目のつけどころがいい。

『華英初階』のこと

前出『商務印書館華英字典』[商務印書館:1902]の出版広告【図1-9】を見てほしい。英語の辞書だから、商務印書館が、当時出していた英語関係の出版広告なのだ。これを見れば、商務印書館が当時発行していた英語関係の書籍の全貌を見渡すことができる。

総題は、English and Chinese School Books という。

どこの国でもそうだが、外国語学習の初期には、自国語で説明する教科書は、なかった。英語の教科書をそのまま流用するのがせいぜいだったろう。

だから、中国でも同様に、英語を学習する場合は、英語で英語を説明する教科書があるだけだった。

そこで、商務印書館は、それに漢語の注釈をつける工夫をした。わざわざ“and Chinese”という語句を挿入した理由である。

商務印書館が採用した英語教科書の原本について、その広告は、以下のように説明している。

Especially Reprinted, with FULL TRANSLATIONS IN CHINESE, from the series of School Books published by the Christian Literature Society for India.
(インドむけにキリスト教印刷協会によって出版された教科書シリーズから、漢語の全訳をつけて、特に翻刻したもの)

インドむけの教科書、それも漢語の翻訳付き、というのがうたい文句である。原本がなぜキリスト教会の教科書かといえば、商務印書館と教会の關係にさかのぼる。

理由は簡単で、見てきたとおり商務印書館の創業者の多くは、キリスト教徒であったからだ。英語教科書は、創業者たちが教会の学校で学んだときに使用したものだった。

商務印書館の社員だった章錫琛が、その頃を説明して大略次のように書いている。

当時、社会的には改良運動が起こっており、資産階級の知識分子は「変法自強」を求めて外国語学習に熱心だった。上海は、重要な商業港でもあり、外国商人との交流も多い。すくなくとも青年が貿易に従事したいと希望したとしても不思議ではない。こうして英語学習熱の流行があった。夏瑞芳らは教会学校の出身で、学校で学んだ英語教科書は、イギリス人がインドの小学生用に編集した入門書だった。その全部をインドから輸入してもいた。英語の需要が増加しているところに目をつけた夏瑞芳は、英語に漢訳をつけて『華英初階』と名付けて出版する。さらに高度な教科書も漢訳して『華英進階』の名前で発行した。この2種類の教科書は、いくどかの改訳をへて、その後十数年の長い期間流行したのである [章錫琛1964:64]

夏瑞芳たちが、印刷業から脱皮するためにはじめた教科書出版だが、まったく

の未知の分野であったわけではない。なじみの英語教科書だったからこそ、それに漢語の翻訳をつければ、利用者が増えるのではないかという予測も出てきたのだろうと考える。

さて、広告のなかで分類して READERS の部に、以下の書名が見える。

English and Chinese Primer	華英初階
English and Chinese First Reader	華英進階初集
English and Chinese Second Reader	華英進階貳集
English and Chinese Third Reader	華英進階參集
English and Chinese Fourth Reader	華英進階肆集
English and Chinese Fifth Reader	華英進階伍集
English and Chinese Readers	華英進階全集

読本の部といっても、入門を収録していることがわかる。初階を修了すれば、それにつづくものとして進階が用意されていた。

その他の分類は、文法、地理書、さらに高度な読本が 2 群、辞書、手紙文（作文を含む）、会話、雑集などになる。それぞれに書名を掲げるが、ここでは省略する。

英語関連書全体の構成は、『華英初階』の裏表紙に掲げてある「序」において述べられる。

資料として貴重だ。全文を示す（句読点は樽本がほどこした）。

序 書經給示翻印必究

当中外交通之始、華人士之治英文者、殆莫不取資於印度文学会所著之読本。本館曾取以訳漢刊印問世。書成未幾風行一時。蓋是書之組織有極臻完善者、如首二三集中各課之所載、則著名之格言習用之物話為多。学者讀之足以養道德而啓知識。四五兩集中各課之所載、則或為西哲所闡發之學理、或為彼都名人之伝記而遺聞野史。亦時採輯一二以助學子之興趣、資課餘之研究。餘如綴字之方審音之法、以及文法會話与夫尺牘体裁、凡為読本中之要素。而又為吾

人日用所不可少者亦一一詳載臚列無遺。學者苟循序而進則於訳鞮之学、譬引筏以渡迷津、猶拾級而登高嶺。進階之名庶幾無愧。顧其書專為印度人而作、凡所稱述或未必尽合於吾中国之学子。今更將全書量為修改、凡專為印人説法者、悉數刪汰。其他訳註亦靡不審慎周詳、務求与原文相合、於読者有迎刃之益、刪繁補闕、蔚為大觀。吾知是編一出、凡治英語者、更必有先覩為快之意也。是為序。

重訳者識

ここには、『華英初階』を出版する前の英語学習状況、および商務印書館の英語関連書物の構成の妙が謳われている。用意された教科書を初階から進階へと順序よく学習していけば、道徳を養い、知識を増やすことができる。綴り、発音、文法、会話、手紙文までそろっているというのだ。ただ、それらはインド人のために制作されているから、中国人用に改めたとも書かれている。

なるほど、よく考えられている全体の構成だということができる。

合冊本も含めて、この出版広告には、29種類の教科書類が見える。

教科書『華英初階』の発行1898年から、上の字典の発行までのわずか4年間にすぎない。まことに精力的な出版活動だというべきだ。

『華英初階』1種類の出版だけで、商務印書館が経済的基礎を築いたというわけではないことが理解できよう。『華英初階』を含めて、英語関連書籍全体である。

英語に関連する書籍をこれだけそろえたということは、用意周到に出版事業をすすめたということでもある。

次に、商務印書館にとっては最初の英語教科書となる『華英初階』を紹介する。

『華英初階』の内容

判型は、ほぼB6判にちかい。色紙の表紙を使い、本文はわずかに48頁である。

印象は、薄っぺらな小型教科書といったところだ。

表紙

上方に“ENGLISH AND CHINESE PRIMER”と示し、中央に縦書きで「華英

【圖1-14】『華英初階』



LESSON 1.

o
 n o no 無,否否
 2.
 l o lo 視鏡
 s o so 如此,故
 3.
 g o go 去
 so, no, go, lo, so, go, lo, no.

TO THE TEACHER.

1st Lesson.—The teacher should write the letter o on the blackboard. The pupils should be asked its shape; they should not be told. This is the best way of fixing the letters in the memory. It is round like a ring, etc. Its sound should next be given. The pupils should then make their fingers go round in the air, repeating the sound of the letter. After a time, they may write the letter on the blackboard. The letter a should next be taught. The pupils should be questioned on its shape, how it differs from o, and what it is like. It may be compared to a little stool with two legs. Its power should be given, not its name. The pupils should form the letter in the air, and give its sound. Next join the letters n and o, forming the word no. This should be repeated again and again, and the meaning explained in the vernacular. The pupils should be made to use the word. The teacher may ask, in the vernacular, Are you a lawyer and bid the pupils answer in English, no. The same course should be followed with other letters and words.

Letters on cards are excellent at the beginning.

2d Lesson.—The letter i is like a long pole; s is bent somewhat like a snake.

3. The letter g may be compared to a pair of spectacles hanging down. Children are very apt to learn lessons by heart, and so repeat instead of read them. To guard against this, there are lessons which should be read forward and backward. Writing on the blackboard is the best test.

4.

e o
 m e me 吾
 h e he 彼,這
 5.
 b e be 不
 w e we 我等
 6.
 y e ye 汝等
 he, be, ye, me, we, be, he, we.

7.

we go. 我輩去 so ye go. 如此,汝等去
 be so. 乃如此 we be so. 我等乃如此
 go ye. 汝等去 lo we go. 若乎,我等去

4. The letter e should first be written on the blackboard. The teacher should then write i, and question the pupils on the difference. The letter s has one side drawn in. The letter n should then be written, and afterwards m. The letter n has two legs, while m has three. The letter A is like i joined to n; or it may be compared to a little chair.

5. The letter b is like i joined to o on the right; u stands on two sharp points.

6. The letter y is like the half of u, with a tail below.

24

VOYEL RECOGNITION BY SOUND

43.

can 能 hat 帽 man 人 mad 狂瘋
 cane 杖 hate 憎惡 mane 鬃 made 作製造
 He made a box. 渠作一箱
 Cut me a cane. 代吾斬一杖
 A man has my hat. 一人有吾之帽
 Has a cat a mane? 貓有鬃否
 Can I get a cane? 吾能得一否
 A mad dog bit him. 一瘋狗咬渠
 My dog is not mad. 吾之狗非瘋
 Hate no man. 莫憎惡人

44.

gate 大門 make 作造 age 年齒
 late 遲晚 take 取持 page 頁,字葉
 Take this to him. 取此與之
 Is that your age? 彼乃汝之年齒否
 My age is ten. 吾之年十[歲]
 This is the page. 即此頁是也
 Can you make it? 汝能作此否
 Make it for me. 爲我作此
 I sat at the gate. 吾坐在門邊
 Do not be late. 勿太遲
 13. This is my cane. That box was made by him.
 此爲吾杖 是箱爲渠所造
 Is he mad? 他狂否?
 14. Go to the gate. Take your pen. Were you late?
 往大門去 帶汝筆 汝去遲否

45.

its 彼之 must 當,必 our 我等之 out 出外
 Our cat; your dog. 我等之貓,汝之狗
 Did he run out? 彼曾走出去否
 You must not go. 汝必不可去
 This is its mane. 此即彼之鬃毛
 Must I cut it? 吾必須斬此否
 Our ox is fat. 我等之牡牛肥
 Its leg is wet. 彼之腿濕
 Let me go out. 容吾往外去

46.*

came 來過 lame 跛 same 同,一致
 game 遊戲,玩具 name 名字 tame 馴養
 My dog is lame. 吾之狗跛
 Is your ox lame? 汝之牡牛跛乎
 That is my name. 是乃吾之名也
 We had a game. 我等曾遊戲一次
 Is this the same? 此物同否
 It is the same. 同也
 Can you tame it? 汝能馴養之否
 You came late. 汝來晚矣

45. They must do it. He got our box. Its mane is big.
 彼等必須作此 彼得我等之箱 彼之鬃毛大
 Go out.
 往外去

46. It is tame. Have you the same? We came to the gate.
 是馴養 汝有相同者否 我等至大門
 *Show that final s is less than the preceding vowel.

初階」と大きく掲げる。右肩は「民国十年五月七十七版」、左下に「上海商務印書館発行」と印刷する（[商務印書館1997]に1917年63版の表紙写真が収録されている）。

元本は、“ENGLISH PRIMER”だろう。翻訳すれば「英語入門」という書名になる。それを商務印書館なりの工夫をしたのが、前述のように“AND CHINESE”部分を挿入したところだ。

漢語で「華英初階」と順序を逆にするのは、「英漢」では中国人の自尊心が傷つくからだ（と何かで読んだ記憶がある）。

奥附らしいものは、ない。だから、本書を見るかぎり、初版がいつか、注釈者、編集者が誰であるのかも不明である。ただ、注釈者は、謝洪賚であるという汪家燊の指摘があることは述べた。

1921年で77版を重ねる。初版出版から23年間にわたっているから、毎年、約3回平均で増刷していることになる。ただし、全体の印刷部数は、不明である。

序

いきなり第1課がはじまるわけではない。

前もっての解説が述べられる。この部分は英文だ。つまり、これは教科書だから、教師へむけての説明なのだ。

Plan of the Book

本教科書の目的は、読むことを教えるところにある。まず、こう宣言する。

各課には、6個の新出単語がある。それらは冒頭に大文字でかけられ、その下に使用例を示す。

ページの下部に、組み合わせ練習の文章が置いてある。

以上によって、各課の構成を説明した。

教師はなにをするのか。

それぞれの文章を読み上げる。それを生徒に漢語に翻訳するように命じる。その逆に、簡単な文章を漢語であたえ、英語になおさせる。すべての単語は、最低4回はくりかえさせる。具体的な指示である。

自習書であれば、こういった説明は不要かもしれない。だが、対面教育であるからには、その教授法は、詳しい方がいいに決まっている。口と耳を使い、くりかえし練習するという外国語の学習法は、どこでもいつでも、それほど変化があ

るわけではないことがわかる。

Directions to the Teacher

それぞれの課に、教師への注意事項が書かれているから、注意深く読むように。および、英語の発音に注意すること。当然の注意である。

いかにも教会の教科書だと思っるのは、この注意事項のなかに、宗教課 Religious Lessons について述べられていることだ。

本文に分散して宗教専門の課文が配列されている（後述）。その通りを、単語の綴りなどは気にせず、とにかく読むようにとの指示がある。なるほど、教会で使用される教科書である。

あとは、アルファベットの小文字、大文字、筆記体とアラビア数字が、つづいて示される。

入門の教科書であれば、挿絵は、学習者の理解を助けるために多い方がよい。外国の事物は、言葉で説明するよりも、絵図で示すのが、もっともわかりやすいからだ。

だが、『華英初階』には、挿絵はわずかに 2 枚しか使用されていない。

そのうちのひとつは、羽根ペンを持った右手である（残るひとつは、狼 wolf だ）。英文を書くのには、毛筆は不便だろう。羽根ペンに類する筆記用具であれば、その持ち方から教える必要がある。

アルファベットが終了すると、文字の組み合わせとなる。

ba be bi bo bu by と単純な組み合わせから、さまざまな 2 文字を反復させ 3 文字にいたる。

こうして第 1 課をむかえる順序になる。

本文に入る前に、祈りの文章があることに言及しておく。

課文に宗教課があることは、前述した。それとは別に、本教科書の最後のページに、朝昼晩の祈りの言葉が英語と漢語（文言）で書かれている。

朝の祈りを見てみよう。

MORN-ING PRAY-ER.

晨禱文

O Lord, my God, to Thee I pray,

主乎、吾之上帝、吾祈求汝、

When from my bed I raise, 自吾夙興以後、
That all I do, and all I say, 凡一切所行所言、
Be pleas-ing in Thine eyes. 願悦於汝目
(朝の祈り / 主よ、わが神よ、お祈り申し上げます / 目覚めたのちの / すべ
ての行ない、すべての言葉が / あなたのお目にかないますように)

この教科書の後半に進んだ段階で、くりかえし朗誦されたのではなからうか。
生徒は暗唱できるまでになったであろうと想像もする。

本文

いくつかの特徴がある。

1. 1課の分量は、多くない

48頁に全90課を展開する。課数が多いのは、1課の分量が、多くないからだ。

1頁には、平均して2課分があると考えればよい。

第1課は、「o/ n o/ no 無，否否」これだけ。

第2課は、「l o/ lo 視哉 /s o/ so 如此，故」と2行になる。

母音 o e a i u の順に、それらを使った単語を例に出す。

教師への指示は、まず、文字を黒板に書くことだ。その時、文字の形を説明し
てはならない、生徒に質問せよ、とある。記憶させるためには、これが一番よい
方法なのだそうだ。教師が発音し、生徒は、指で空中にその形をなぞる。これを
何度もくりかえす。

それにしても、最初に出てくる意味ある言葉が、「no 無，否否」というのは、
強烈である。まず、否定することから教えているのだから。

時代を反映しているのか、使用されている単語が、少し古い。「lo 視哉」「ye
汝等」などだ。

2. 単語から短文へ

人称代名詞、動詞の次は、第7課に短文が試しに出現する。

we go. 我輩去/ so ye go. 如此，汝等去/ be so. 乃如此/ we be so. 我等乃如此/
go ye. 汝等去/ lo we go. 看乎，我等去

この段階では、文字の形を覚えさせることが主眼ではあるが、文章になれるためにも早目にごく短いものを取りだしている。

第15課より、例文が増える。

or 或，抑 do 為，作，行 to 及，於(12頁)

am I to go? 吾須去否

if it be so. 若果爾爾

do as I do. 為之，以吾亦為也

is it he or I? 為彼歟抑為吾歟

is he to do it? 渠作此否

文言による漢訳だ。

3 . 口頭練習 文法説明は、ない

文法の説明は、教科書には、ない。教師が、口頭で解説しているとも思えない。疑問文にしても、be 動詞にしても、説明しはじめるとかなりやっかいだろう。

想像するに、教場では、教師が黒板を使用して、ひたすら口頭練習をつづけているのではなからうか。生徒の方も、教師に言われたとおりを反復するのみ。英文の意味はわかっているかもしれないが、なぜ、そういう風に表現するのかは、説明がないから、わからない。漢語の翻訳があって、英語の意味がわかっているだけまし、というところだろう。

文章の冒頭が小文字で表記されるのは、第34課まで継続される。いわば、肩慣らしという状況だ。第35-42課は、復習である。ここで一息いれて、第43課より、教授内容が、すこしだけ高度になる。新出単語を6個示し、文章の冒頭も大文字に変更されている。

can 能 hat 帽，冠 man 人 mad 狂，瘋 cane 杖 hate 憎惡 mane 鬃 made 作，製造(24頁)

He made a box. 渠作一箱

Cut me a cane.	代吾斬一杖
A man has my hat.	一人有吾之帽
Has a cat a mane?	猫有鬚否
Can I get a cane?	吾能得一否
A mad dog bit him.	一瘋狗咬渠
My dog is not mad.	吾之狗非瘋
Hate no man.	莫憎惡人

英語の動詞変化に相当するものは、漢語にはない。言語の系統が異なるから、make も made も漢語では「作、製造」としか表現のしようがない。ここらあたりの説明は、どうしたのだろうかと思議に感じる。

英語の時制と漢語のアスペクトに言及したとは、とうてい想像することができない。文法的な解説は、教師は行なわなかったのではなかろうか。生徒は、とにかく、教科書に書かれている英文をなんども発音する。初期の段階では、考えるよりも慣れる、と教えられたと思うのだ。

朗読が訓練の主体になるとはいえ、文法的な説明が少しはあったのではないかと思わせる部分が終わり近くにようやく出てくる。第82課(40頁)だ。

can 能 could 能 (過去) will 欲 would 欲 (過去) shall 当 should 当 (過去)

英語の変化と漢語の無変化(漢字だから当然)が一目瞭然だろう。例文を見れば、それがますますはっきりする。

I will come if I can.	吾若能来吾必欲来
I would do if I could.	吾若能為吾必欲為

漢語では、動詞によって時制が表現できないことがわかる。

先に、『華英初階』は、中国人用に書きなおした、と説明があった。

たとえば、第80課にある、「ball 球、call 呼、tall 高」などの発音説明に、それ

らしいものが見られる。

「多様な音をもつ a は、中国の言語のほとんどには、見られない。口を大きく丸い形にあけて、発声は、口蓋の奥からだす」

この説明は、英語の a が、前後の文字に組み合わせによっていくつかの異なる発音になることを説明している。たしかに漢語では、a ならば、基本的に同じ発音である。その違いを指摘しているのだ。ただし、このような説明は、多くはない。

例文に全体をつらぬく主題があるわけではない。短文の寄せ集めだ。

身の回りに起きる日常的な事物を説明し、動作を表現することが主眼となっている。

例文に少しだけ、教会で教えそうな例文がまぜてある。

do no sin.	莫犯罪(17頁)
sin is not hid.	罪惡不能隱匿(19頁)
sin is not fun.	罪惡非遊戲之事(20頁)
Hate no man.	莫憎惡人(24頁)
We must not rob.	我儕不宜劫奪(30頁)

ごくわずかだ、と思われるかもしれない。事実、わずかなのだ。しかし、それには理由があった。キリスト教の教えに関連する文章は、別の課、別の場所にまとめたのだ。

4 . 宗教の課文

教科書のところどころに “ Read lesson ** on page ** ” という課がある。教科書の後半に、3 課ごとに配置する。本文は、巻末に集める。朗読するためだけの課であって、それを実行しろという指示もある。

第57、61、65、69、73、77、81、85、89課がそれにあたる。これらは、教会の教えだけを集めたものだ。全9課だから教科書全体の1割を占める。教師用の説明には、綴りの練習は必要ない、内容を理解して読む練習をするようにと書かれている。おおよその内容を知るために、数例を掲げておく。日本語訳をするまで

もない。

God made all we see. 上帝創造我人所見之万物

God made me. 上帝造吾

He gave me life. 彼与吾以生命

生徒に、くりかえし教えれば、暗唱もしたであろう。

5. 編集上の工夫

キリスト教関連の課文を巻末にまとめているのは、事実である。

しかし、考えてみれば、おかしな編集であるといわざるをえない。

キリスト教の教えを盛り込んだところに、この元版の特徴と意義がある。日常生活に応用できる語句文章にまぜて、宗教課を配置するという創意も盛られていた。

にもかかわらず、漢訳版では、その肝心の宗教課を片隅に集めた。変則的といえばそうだろう。なぜその必要があるのか。

順序よく学習を進めていて、その部分に到達するたびに、突然、××頁にとんで、ひたすら朗読せよ、との指示があるのだ。学習の流れをさまたげているということもできる。

だが、これこそが商務印書館の編集者が工夫をした箇所だと考えるべきなのだ。

つまり、宗教臭を嫌う教師、学習者には、宗教課を無視できるようにするために配慮したということだ。巻末の宗教課を切り離せば、普通の英語教科書となるのである。

6. 比較的高度な内容

教授時間がどれくらいを想定して作成された教科書なのか、詳細はわからない。新出単語が約355語、例文が約630句ある。

教師の懇切で熱心な指導が不可欠である。生徒の熱意も、当然、必要とされる。教科書全体を読んで感じるのは、相当に詰め込んだ内容ではないかと思う。

文字から単語へ、短文からすこし長めの文章へ、とよく考えられた構成になっている。しかし、けっして内容のやさしい教科書ではない。入門書としては、か

なり高度なものだという印象を受ける。また、その内容には、キリスト教会の教えが織り込まれていた（ただし、切り離し可能）事実を指摘しておきたい。

『華英初階』だけで英語学習の入門が修了するわけではない。英語を身につけようと希望するならば、つづく「進階」へ進まなければ、希望は実現できないだろう。版元の商務印書館には、まことに好都合な出版物であったといえることができる。

この『華英初階』を含めた英語関連の書籍が、商務印書館の経済的基盤を作ったほどによく売れたということは、逆にいえば、当時の中国で、それだけ英語熱がもえあがっていた証拠にもなる。

英語教科書に関連して、インド読本を使って英語を勉強した周作人の思い出を紹介しておこう。

1901年、故郷をはなれた周作人は、南京の江南水師学堂に入学した。ここで英語を勉強したときに使用したのが「印度読本」だった。

周作人は、この英語教科書を読んで、経史子集以外に「ここにあるのは私の新しい本だ（这里是我的新书）」などという文章があることをはじめて知ったという[周作人1933:47]。

江南水師学堂における英語教育は、知識を得るための手段にすぎなかった、と周作人は書いている。だから、インド読本は、第4集までしか配給されなかった。ほかには『華英字典』も配られたという。

周作人のいう『印度読本』は、なにを指すのか。

『華英初階』には、周作人のいう通りの例文は載っていない。もともとの漢訳は文言だから、周作人の記す口語とは一致しない。記憶にもとづいて、そのような意味のない例文であったと聞いたのだろうか。というよりも、第4集まで配付されたというのは、『華英初階』が1冊だけだったから、数があわない。『華英初階』とは別の教科書をいつているのかもしれない。周作人が使用したのは、漢語の注釈のつかない、英語だけの元版であった可能性がある。

周作人は、自分の使用した英語教科書について、のちに次のように書いてもいる。「『英文初階』という私たちの英語読本の第1課冒頭の1句は、「ここにあるのは私の新しい本だ。それを好きになると思う」というものだった。（我們的

英語読本「英文初階」の第一課第一句説：「這裏是我的一本新書，我想我将喜歡它）」[周作人1970:135]。

『英文初階』という教科書名は、『華英初階』とは明らかに異なる。書名が違うことは、内容が同一でないことを意味する。すなわち、英語だけを使用した元版が『英文初階 (English Primer)』なのだ。これに漢語の注釈をつけたのが、すでに紹介した『華英初階』である。ただし、『英文初階』も1冊のみ。

『華英初階』から『華英進階 (English and Chinese Readers)』に進むようにというよりも、元版がそうなっているのだが、『華英進階』に相当するのが『英文進階 (English Readers)』全5集だ[商務印書館1927:218, 221]。

冊数からみれば、周作人が『英文初階』といている印度読本は、『英文進階』のことであろう。こちらも商務印書館が発行している。

周作人の先輩たちは、卒業するやいなや英語教科書も辞書も捨ててしまった。手段であるからそうなるのも当然だった。消耗品である。だから、当時の英語教科書をさがそうにも、現在は、かえって目にすることがむづかしい。

さて、夏瑞芳は、自社出版の教科書については、内容ばかりでなく印刷用紙についても工夫をこらした。「有光紙」と称する、表面はツルツルで裏はザラザラのものを使って、普通用紙の3分の2の費用ですませた。のちに他の出版社も「有光紙」を使うようになったが、どこで買えばいいのかわからず、すべて夏瑞芳に委託して購入した[高翰卿1992:5]。

「儲けも少なくなかった」と高翰卿は書いている。英語教科書の出版に成功したというのも、植字工として一貫して英字新聞に関係していた夏の経験と、今の時代に何が要求されているのを見通す彼の洞察力に負うところが多かったのではなからうか。

ただし、儲かったとはいえ、このまま出版業を続けていけるほどの金銭的余裕が生まれたとは、考えられない。なぜなら1901年に張元済と印錫璋が商務印書館に資本参加するまで株（出資金という意味）の配当はなかった、と高翰卿自身が述べているからだ[高翰卿1992:6]。

英語教科書出版の一応の成功は、のちの失敗の原因ともなる。

7 新式学堂の設立

商務印書館が印刷請負から教科書出版に進出することになった時代背景について簡単に触れておきたい。

商務印書館創業の翌年が、1898年戊戌である。光緒帝を擁した康有為、梁啓超らの改革グループが、改革のひとつとして人材育成のための学堂開設を献策した。それはやつぎばやの政令となる。すなわち、八股文の廃止（科挙制度の改良）、京師大学堂創設の会議、新式学堂の創立と西学の提唱、翻訳のための訳書局の設立などだ。戊戌の変法は、結果として袁世凱と結んだ西太后によってつぶされる。ただし、それ以前から新式学堂は、各地に開かれる趨勢は定着していた。通訳養成のために総理各国事務衙門に附属して設立された北京の同文館（1862）から、上海の広方言館（1863）、福建の船政学堂（1867）、上海の正蒙書院（1878）、天津の電報学堂（1879）、天津の水師学堂（1880）、上海の電報学堂（1882）、天津の武備学堂（1885）、広東の水陸師学堂（1887）、南京の水師学堂（1890）、武昌の自強学堂（1894）、天津の中西学堂（1895）、南京の陸軍学堂（1895）などなどである。中国都市部における新式学堂の設立ブームは、新式学生の増加を意味する。当然のことながら、書籍に対する需要を喚起することにつながるのである。

8 張元済の保証

ここに商務印書館にとっては重要な人物 張元済が登場する。

張元済（1867-1959）、浙江海塩の人。進士。北京で友人と通藝学堂を設立し英語と算術を学ぶ。総理各国事務衙門に勤務するが戊戌政変で免職となった。

上海に逃れていた張元済は、李鴻章の盛宣懐にあてた推薦を得て、1899年4月、南洋公学（現在の上海交通大学）訳書院院長に就任した[汪家燾^c1990:466-467]。訳書院で編集したいくつかの教科書を商務印書館が印刷したことがきっかけで、夏瑞

芳は張元済と親しくなる。ある時、夏瑞芳が運転資金に不足していると、張元済が保証人になって銭荘から1千元を融通してもらっている[陳叔通1987:5]。

商務印書館が支払いに困った時は、当時、美華書館の支配人にまでなっていた高翰卿に保証してもらったこともあった[鄭逸梅1983a:4]。

前出『商務書館華英字典』の発行が1899年だから、辞書の編集費などに、当時は、いくら資金があっても足りない状態だったとは容易に想像がつく。

翻訳原稿の失敗

夏瑞芳は、英語教科書で成功したので自信を得たらしく、別の分野での出版に意欲を出す。

当時、日本語の書籍を翻訳して出版することが流行しており、また読者にも歓迎されていた。夏瑞芳は、心が動かされやってみようとする。ある2人に翻訳原稿を買ってくるよう頼む。その2人は、日本語のわからぬ学生に数十種を翻訳させ商務印書館に売った。夏瑞芳は、ただちに印刷し売りだしたがさっぱり捌けない。原稿料1万元を失った[蔣維喬1957:140、1959:395]。夏瑞芳は、教科書の販売不振を張元済に相談すると、内容がでたらめだと教えられる。編訳所の必要性を感じる、という話の筋道である。

章錫琛も、「損失が1万元近くになる」[章錫琛1964:66]といい、朱蔚伯は金額こそ出さないが、同様の説明を行なっている[朱蔚伯1981:145]。

頭脳明晰な夏瑞芳にして、はじめての大きなつまずきである。鮑咸恩、咸昌兄弟あるいは高翰卿らの首脳陣は、夏瑞芳に注意をうながさなかったのか。注意をしたかもしれないが、英語教科書で成功をおさめた夏瑞芳には通用しなかったとも考えられる。「決断の人」らしく、夏瑞芳は、突っ走ったのだらうと思う。資本金3,750元のところに翻訳原稿の欠損1万元は、金額からいってもにわかには信じられないくらいに大きい。

9 教科書の系譜

不良原稿の教科書とは何か、日本では実物を確認することができない。実藤文庫に所蔵される商務印書館発行の教科書を点検して想像の手掛かりとしよう。同時に、商務印書館における教科書編集の系譜についても説明する。

日本語教科書（その1）

商務印書館は、坪内逍遙が書いた国語読本をふたつに分け、1901年と1904年に前後して、漢語に翻訳し出版している。前者の出版は、1901年だから蔣維喬のいう1903年よりもさらに2年をさかのぼる。時期的にみれば売れない教科書ということになる。はたして「クズ原稿」に類するものなのだろうか、検討してみよう。後者は、長尾雨山が上海で翻訳した。商務印書館が金港堂との合併会社になった後の出版物でもある。中村忠行「検証：商務印書館・金港堂の合併（三）」[中村忠行:1993]において紹介がすでになされている。紹介がなるべく重ならないように努力する（後述）。

坪内逍遙の教科書

逍遙坪内雄蔵の教科書から説明しよう（以下、逍遙本と称する）。

翻訳のもとになったのは、坪内雄蔵著『国語読本』尋常小学校用である。

坪内がとなえる小学校読本教授の目的にはふたつあり、直接と間接に分けられる。

直接の目的は、「（第一）能く語り、能く読み、能く作文するの能力を鍛ふること、（第二）事物に関する普通知識の端緒を授くること、（第三）性情陶冶即ち徳育、美育などに資すること、是れなり」という。

間接の目的は、「生徒をして読書の利益と興味とを覚らしむるに在り」[坪内逍遙1927a:689-692][参考 坪内逍遙1927b:693-708]である。

このふたつの目的を達成するために、材料、配列、文体に気をくばり、挿絵、

字体、分量にも工夫をこらさなければならない、というのが坪内の教科書編集の方針であった。

坪内逍遙が編集した教科書は、尋常小学生徒用書『読本』8巻（富山房1899。原本未見）[東京書籍1981:430-431]とその訂正版である尋常小学校用『国語読本』8巻（富山房 明治33<1900>.9.17未見 / 12.19訂正再版[海後宗臣1964]。小学読本研究會『小学読本物語』<アトム出版社1959.1.10.46-47頁>に坪内雄蔵『国語読本』の明治34年版という「トリ」の図が掲げられているが、訂正再版本の図と異なる）がある。

「富山房が、文豪であった坪内雄蔵に依頼して、それまでの教科書の調査を十分した上で、独創的に編集したものであり、当時の代表的な読本である」[海後宗臣1964:617]という。

沙張訳本

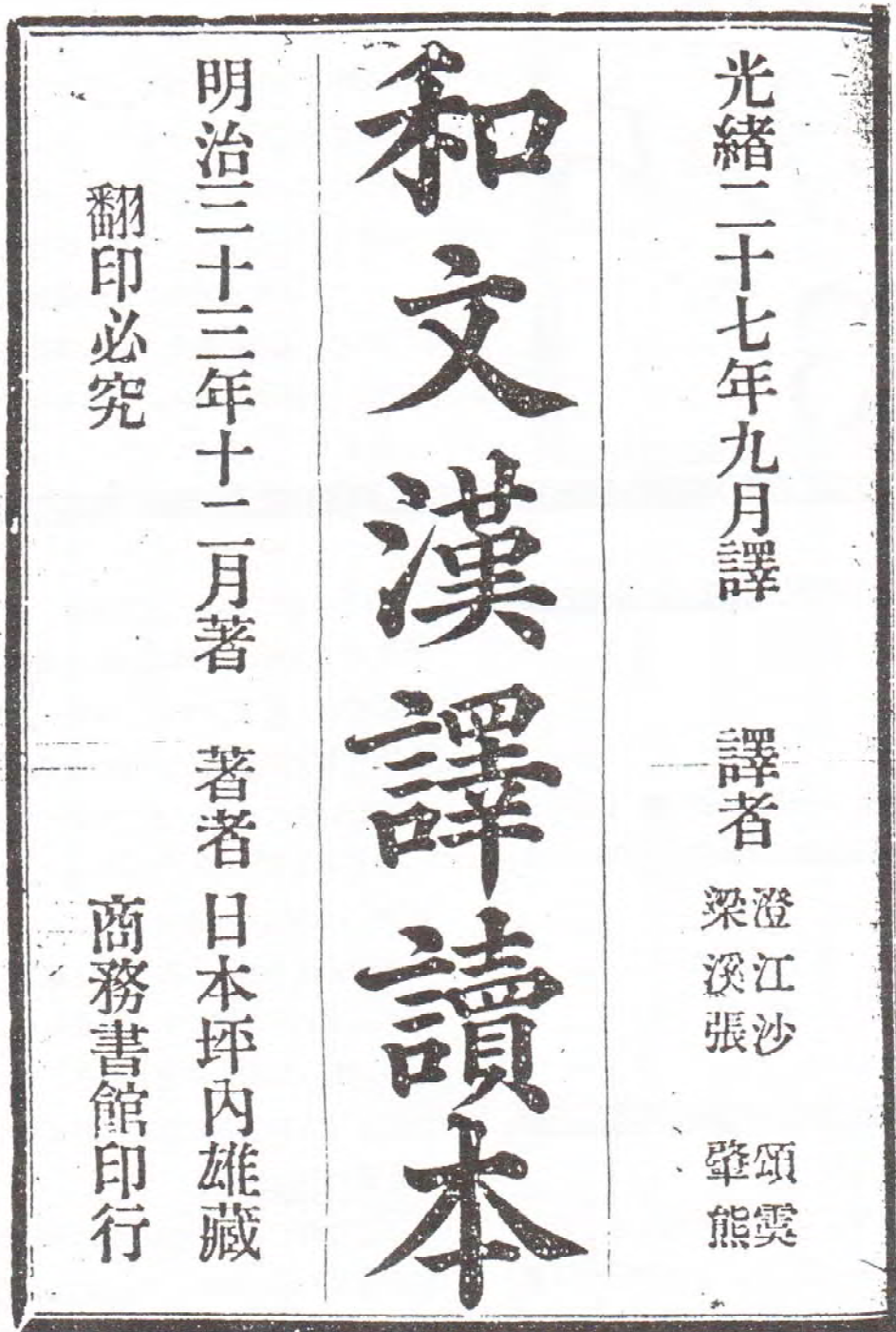
商務印書館が線装本で出版したのは、逍遙本の訂正再版本前半4巻にもとづいている。なぜそうとわかるかは、その扉に、

坪内雄蔵著、沙頌乎、張肇熊訳『和文漢訳読本』^{ママ}商務書館印行 明治33
(1900)年12月著、光緒二十七(1901)年九月訳

と書かれているからだ（西暦は樽本が附した。以下、沙張訳本と略称する【図1-15】）。ここに示されている元本の発行年月が逍遙本の訂正再版と一致している。ちょっと脇道。1996年4月3日、日本放送協会大津放送会館の前を通りかかった。「懐かしの教科書展」という掲示が目飛び込む。江戸時代からの教科書が展示してあるのだ。琵琶湖西方のマキノ町にある白谷荘民俗資料館から所蔵物のうちの教科書だけが示してある。数が多くその内容も貴重だ。その場にいらした所有者大村表郷のおはなしによると所蔵の一部だという。その中に逍遙本の訂正再版本（明治33年9月17日発行 / 12月19日訂正再版）があった。自宅から沙張訳本の複写を持参し、逍遙訂正再版本と原文を照合させてもらったが、もともなった日本語本文と挿絵は同じであることを確認した。

さて、「商務書館」は、商務印書館をさすが、別に誤植ではない。前述のとおり

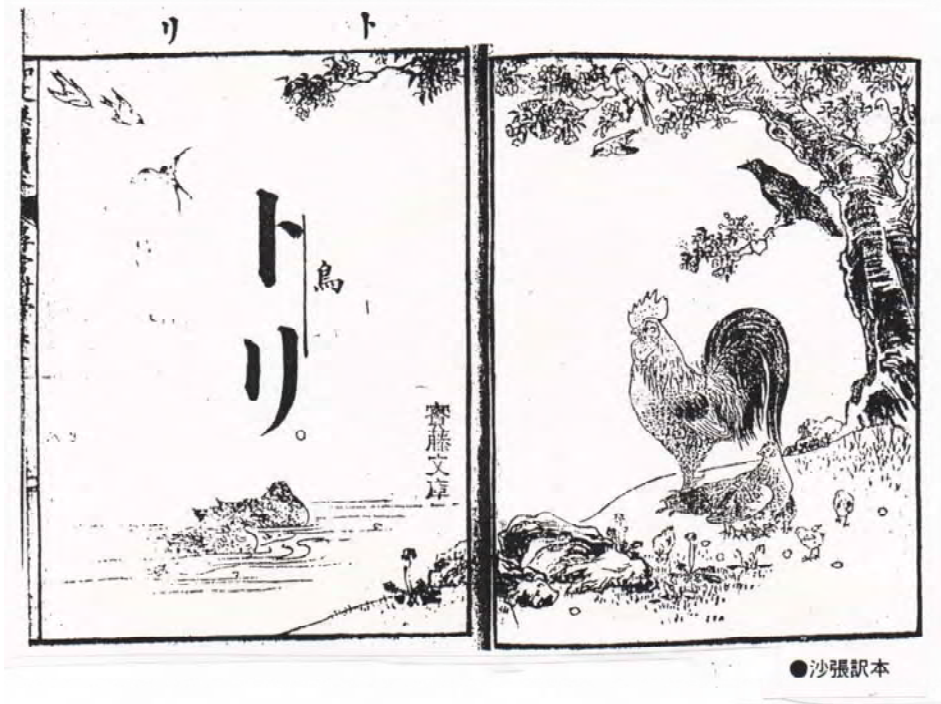
【圖1-15】沙張訳本



【圖1-16】



●逍遙本（海後宗臣編集『日本教科書大系 近代編 第6巻 国語三』講談社1964.4.20/1968.12.10第2刷）



【図1-17】



り、商務印書館の初期出版物には、「商務書館」名義のものがいくつか存在している。

沙張訳本巻1は、「トリ」から始まる【図1-16】。見開きにニワトリのつがいとヒヨコ、カラス、ハト、スズメ、ツバメ、オシドリをつがいなどの鳥づくしだ。ここに単語がひとつ「トリ」と片仮名が示され、傍線の右に「鳥」と漢字がふられている。次ページは、ハト（鳩）、アリ（蟻）、ハタ（旗）、タコ（風箏）だ。和服の子供が棒を持って木の枝にとまった鳩を捕獲（？）しようとしている挿絵があり、左ページに日本の奴隸と日章旗が配される。いかにも日本の教科書である。欄外にト、リ、ハ、ア、タ、コと記されているのは、片仮名の学習のためなのだ。

まず、日本語単語から導入し、あわせて片仮名を学ぶことから始まる。挿絵は、理解を助けるために必要だ。単語をいくつか並べたあとは、「イケ（池）ニヒヨコ（雛）」である。あたらしく出てきた「ニ」については、「二字可作於字解猶言雛在於池也」と説明する。

外国語を学習するとき、自前の教科書がなければ外国で使用された教科書をそのまま使うという状況は、普通に見ることができる。中国でも英語の学習には、同様のやり方から始まった。しかし、教科書全部が英語というのは、使い勝手がよくない。前出『華英初階』が読者に歓迎された理由は、英単語に漢語の注釈をつけるという工夫をしたことによる[汪家燊1987d]のはすでに述べた。

夏瑞芳は、英語教科書で成功したやり方を、そのまま日本語教科書に応用したと考えられる。

単語「トリ」から始まり短文「ウサギ ガ ヤスム」になると沙張訳本は、同じく「兔」「指定之意」「休息」と注釈をつける。ただし、短文だからといって漢語の注釈がすべて正確だとはいえない。

「ツキ ガ ウツル」では、猿が左手で枝をつかみ、水面に映る月に右手を伸ばしている絵を添える。「ウツル」に「映也」とするのは、よい。しかし、同じ場所に「移也」と振るのは、訳者が日本語の「ウツル」を正しく理解していないことを示しており、注釈としてはよろしくない。

同じ間違いは、熊がサケを竹の枝に刺して運ぶ後ろ姿を挿絵に掲げ、「サケヲ

トル。カツイデ ユク。ハシ カラ ヌケル」の「ハシ」に「橋」と漢字を当てている部分にも表われる【図1-17】。

平仮名にすすみ「はなさかぢぢ。かれえだ に、はな を さかせる」の「かれえだ」を「彼枝」とするのも誤りだ。本来の「枯れ枝」がわからなかったようだ。

巻2より巻末に各課の和文漢訳が掲載される。

「て(手)のなる(為)ほへ(法)。てのなるほへ。それ(那)、おに(鬼)がき(来)ました(過去意)。にげ(逃)ませう(未来意)。にげませう」の「なる」が「為」、「ほへ」が「法」になるのは、理解しがたい。

しかし、そえられた漢訳では「向拍手有声之方来。那有鬼来了。逃呀逃呀」となっていて日本語の意味は把握していることがわかる。本文の注釈と漢訳が別々の人物によって担当されており、しかも両者の間に連絡がついていないらしい。

巻1の巻末に「日本語音韻文法変化之大要」があり日本語についての説明がされているとはいえ、この教科書を使って中国人が日本語を独習することは少しむづかしいように思う。漢語の注釈に誤りがあるからなおさらだ。日本語を知る人が教科書に使用するにはさしつかえないか、という程度の翻訳教科書である。

沙張訳本の売れ行きがはたしてよかったのかどうか、この教科書の表示だけからはうかがうことができない。版数を重ねている証拠でもあれば使用された状況を推測することができるのだが、それもない。

ひとつの手掛かりとして、後の『東方雑誌』第2年第1期(1905.2.28)の出版広告をあげて訳しておきたい。

外国語学類

和文漢訳読本(全部八冊定価洋1元)

我が国と日本は同文の国である。文明を輸入しようとするれば和文を学習するのが便利だ。本書の初版は学界においてはなはだ推奨され1ヵ月で売りつくした。ただ、慌ただしく出版したためすこしの誤りがあるのを免れなかった。近頃、各省の学堂の多くが日本語学習をふやし、購入希望者がひきもきらずやってくるが、恥ずかしながら要求にこたえることができなかった。今

般、特に前日本高等師範学校教授長尾楨太郎君に請い、最新本をもとにくわしく校訂をしてもらい、すべての字を斟酌し元の意味をすこしも失っていない。初心者の手引きとすることができよう。

出版元が売れませんでした、とは言うはずがない。「すこし誤りがありました」と表明するのがやっとのことだ。しかし、雨山長尾楨太郎を引っ張り出したのは、沙張訳本の欠陥を認めたことになる。「元の意味をすこしも失っていない」という部分にいたっては、沙張訳本が元の意味を取り違えていたと告白しているのかわりない。

ただ、いくつかの間違いがあることをもって、これを「クズ原稿」だときめつけるには躊躇する。漢語訳文は、意味が通っているからだ。日本の実藤文庫に残っている教科書だから、中国でもある程度は出回ったのであろう。かといって、日本語読本としてすばらしい出来である、とも断定することはとてもできない。商務印書館自身が、誤りを認めているのだ。中途半端な翻訳教科書だということにしておく。

『絵図文学初階』

商務印書館が刊行した初期の教科書には、ひとつの流れがあることを私は指摘したい。

簡単にまとめると次のようになる。

英語教科書に漢語の注釈をほどこした『華英初階』（1898年）にはじまる。ついで、日本語の国語読本に同じく漢語の注釈をつけた沙張訳『和文漢訳読本』（1901年）が出る。これらは、英語あるいは日本語の原文に漢語の注釈を併記するのが、その特徴だ。

この流れの延長線上に杜亜泉の『絵図文学初階』（1902年）が刊行される。その書名からも理解できるように、『華英初階』を継承するものとして考えられていだろう。

ところが、商務印書館が日本の金港堂と合併することになる。合併後の最初の仕事が、日中合同編集によって『最新国文教科書』（1904年）を刊行することだ

った（後述）。商務印書館は、新しく編集された『最新国文教科書』を大々的に宣伝販売する。教育界で評判をよび、大いに売れた。

一方、杜亜泉の『絵図文学初階』は、その後、改訂されることはなかった。こうして、商務印書館の教科書の主流からはずれていくことになる。

不運の『絵図文学初階』6冊を紹介しよう。

体 裁

活版線装本。全課ではないが絵図がついている。書名に「絵図」をうたう理由だ。

巻1の扉には、「初等小学堂用 / 光緒三十一年歳次乙巳 / 絵図文学初階 / 上海商務印書館第五次校印」とある。

全6冊の奥付に見える発行年月を示す。

巻1 光緒三十一年二月二十日五版（120課、31丁。表紙は七版とする）

巻2 光緒三十一年四月十二日八版（112課、39丁）

巻3 光緒三十一年四月二十日八版（107課、34丁）

巻4 光緒三十一年四月二十日四版（100課、33丁）

巻5 光緒三十一年二月二十日五版（101課、48丁）

巻6 光緒三十一年二月二十日五版（100課、53丁）

編輯者 山陰杜亜泉

発行者 商務印書館

奥付の発行年月は重版のものであり、初版についての記述は、ない。

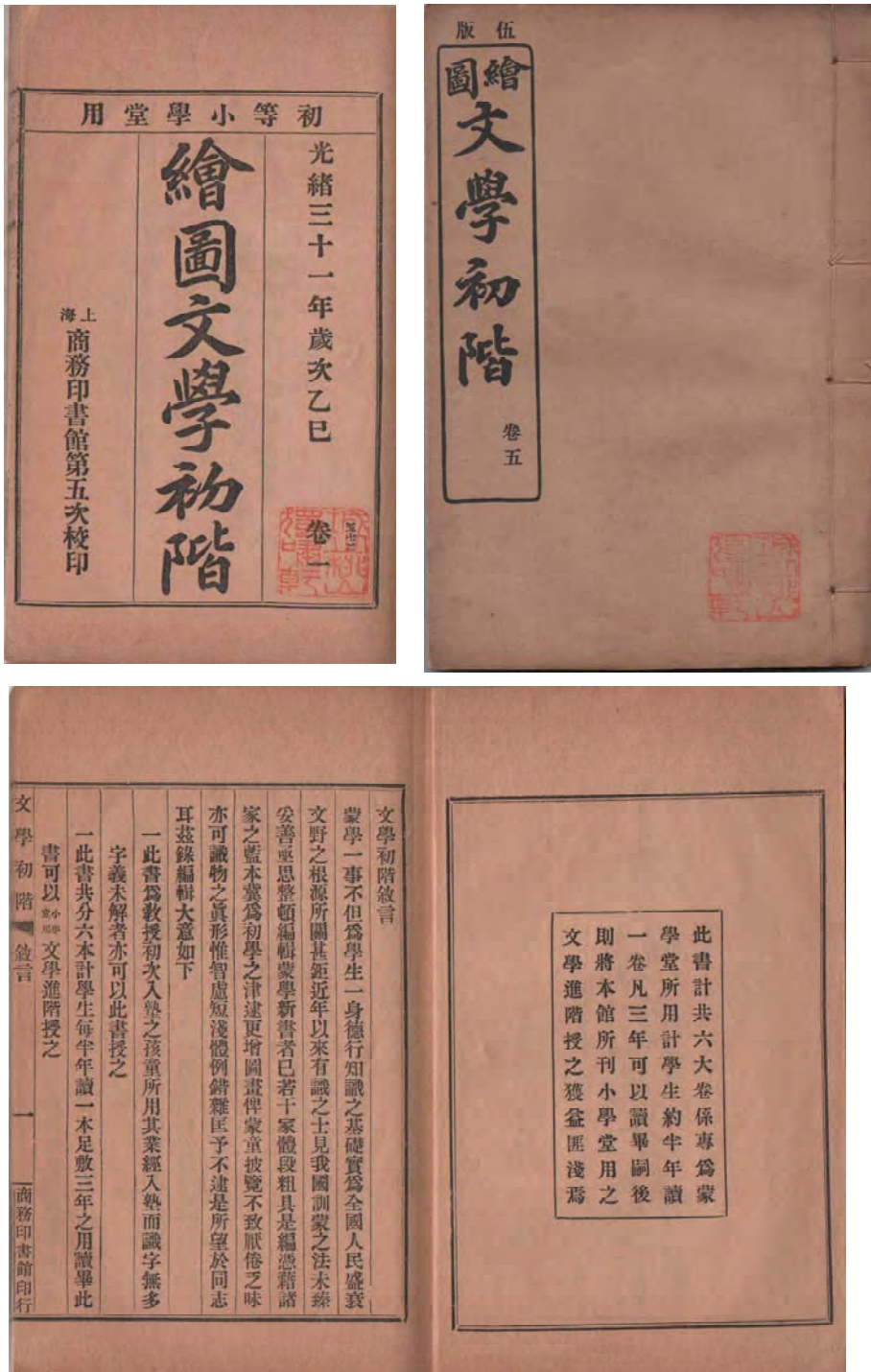
扉の裏には、「此書計共六大卷係專為蒙学堂所用計学生約半年讀一卷凡三年可以読畢嗣後則將本館所刊小学堂用之文学進階授之獲益匪淺焉」とある。


ここに見える「蒙学堂」は、扉の「初等小学堂」と同じ意味に使われる。日本という小学校だ。半年1冊で全6冊だから3年間で使用するために編集された。

『絵図文学初階』を学び終えれば、つぎに『文学進階』へ進め、という。

商務印書館が英語の教科書に漢訳をつけた『華英初階』の後継書として『華英

【圖1-18】『繪圖文學初階』



文學初階 卷一	白黃頭尾		文學初階卷一	
	第二課		第一課 大小牛羊 大牛 小羊 大小 牛羊 法問 小牛 大羊 <small>生板同學 者凡字旁有豎者書其字於豎</small>	
商務印書館印行			一此書由淺入深先以二三字聯綴成簡短之句逐次增長其以數句聯綴成文略成片段而止學生讀畢是書則淺近之文學不難自解矣 一此書原擬為蒙學堂中所用凡各處書館家塾用此書課徒者亦宜仿照學堂規式則受益較多茲列教授略法於卷首請高明披閱一過如可採用務祈依法施行庶不負編輯是書者之本意 一訓蒙之法須隨本地之語言風俗事物以為權度我國幅員廣大語言風俗事物錯雜不齊教師課讀是書如遇書中字句有為本地所罕見者即宜隨時改易編輯是書者所切望也 光緒二十八年荷月亞泉學館編輯	

4 ALPHABET.



A B C D E F G
 H I J K L M N
 O P Q R S T U
 V W X Y Z

—

abcdefghijklmnopqrstuvwxyz

—

1 2 3 4 5 6 7 8 9 0

讀書 寫字 學畫 作文	法問 讀 畫 學字	第四十三課	生人 友才	學生 文人 好友 奇才	法問 ○人 書生 美人	第四十四課	先夫子弟

進階』を用意していたのと同じ方式である。「初階」から「進階」へと名称を共有している。だからこそ、杜亜泉のこの『絵図文学初階』は、国語教科書として商務印書館によって重要視されていた、と私は考えるのだ。

共通の名称を持つ英語教科書と国語教科書の、いわば2本柱である。ただし、不思議なことに『文学進階』が出版された様子はいかたがえな。商務印書館の出版広告にその名前を見ないのである。のちに編集刊行された『最新国文教科書』に取ってかわられた。最初の構想がくずれたのだろうと考える。

つぎに教科書編集の意図が明らかにされる。

「文学初階叙言」

蒙学一事不但為学生一身德行知識之基礎實為全国人民盛衰文野之根源所關甚鉅近年以来有識之士見我国訓蒙之法未臻妥善亟思整頓編輯蒙学新書者已若干家体段粗具是編憑藉諸家之藍本冀為初学之津逮更增图画俾蒙童披覽不致厭倦乏味亦可識物之真形惟智慮短浅体例錯雜匡予不逮是所望於同志耳茲錄編輯大意如下

一此書為教授初次入塾之孩童所用其業經入塾而識字無多字義未解者亦可以此書授之

一此書共分六本計学生每半年讀一本足敷三年之用讀畢此書可以[小学堂用]
(注：小文字2段組)文学進階授之

一此書由浅入深先以二三字聯綴成簡短之句逐次增長至以数句聯属成文略成片段而止学生讀畢是書則浅近之文学不難自解矣

一此書原擬為蒙学堂中所用凡各處書館家塾用此書課徒者亦宜仿照学堂規式則受益較多茲列教授略法於卷首請 高明披閱一過如可採用務祈依法施行庶不負編輯是書者之本意

一訓蒙之法須隨本地之語言風俗事物以為權度我国幅員广大語言風俗事物錯雜不齊教師課讀是書如遇書中字句有為本地所罕見者即宜隨時改易編輯是書者所切望也

光緒二十八年荷月亞泉学館編輯

教育こそが全国人民の繁栄と衰退、文明と野蛮の根本であることを強調する。学童をあきさせないために絵図を増やす。その編集意図は、はじめて学校にあがる学童用であること、半年に1冊、3年用であること、簡単から複雑へ、23文字で句をつづり、漸次ふやして文にすること、学校用だが家塾で使用してもかまわないこと、わが国は広いので課文にその土地にあわないものがあれば、適宜変更してほしいこと、などである。

課 文

簡単から複雑へ、という杜亜泉の編集方針は、どのように実現されたのか。課文を見るのが一番わかりやすい。

第1課 動物に関する名詞と形容詞（大きさ。語句） 絵図：乳牛と子牛

大 小 牛 羊

大牛 小羊 大小 牛羊

法問 小牛 大羊 [凡字旁有豎者書其字於板問学生解否]

「法問」とは、模範質問という意味だろう。そえられた注釈によると、教師が第1課を教えるとき、小牛、大羊と黒板に書いて学堂に質問をしろ、という。大牛、小羊は、課文にあるから、それとは違う漢字の組み合わせを示して、学童が理解しているかどうかを確かめるという手順だ。

この教科書は、学童用であると同時に教師用をも兼ねていることになる。考えてみれば、教師用の「法問」も課文のなかに示されているのだから、わざわざ黒板に書かなくてもいい、という見方も成り立つだろう。

掲げられた絵図は、乳牛1頭があり、その側で子牛が乳を求めている。羊は、いない。「絵図」を強調する教科書ならば、もう少し大きい紙幅を占めていてもよさそうだが、それほど大きくはない。順に見ていくうちに、その理由がわかった（後述）。

形容詞と名詞を出して、それぞれとの組み合わせが示される。語句どまりである。

第2課 動物に関する名詞と形容詞（色。語句） 絵図：なし。

第3課 植物に関する名詞と形容詞（色。文） 絵図：梅にウグイス2羽

花 草 紅 青

白花 青草 花紅 草黄（法問省略）

第3課から、早速、文が出てくる。課文を見れば、漢字の組み合わせにすぎず、語句かと思われるかもしれない。「白花」と「青草」は、たしかに語句だ。しかし、「花紅」と「草黄」は、漢語の用語を使えば形容詞述語文である。著者には、これが文であるという認識がないのではないか。

たとえば、王建軍は、『絵図文学初階』をかなり詳しく説明してつぎのようにいっている。「第80課以後にようやく簡単な文が出てくる。たとえば、「^マ馬拉[負]車、牛耕田、桃開花、竹生笋」である」[王建軍1996:107]。

課文を間違うのは、誤記かもしれない。ただ、「第80課」とわざわざいっているのは理解しかねる。この課文は、第85課のものだからだ。これは、動詞述語文である。第3課の形容詞述語文には、王建軍は、気がつかなかったということだろうか。それとも形容詞述語文は、文ではない、というか。そうならば、おかしい。

第4課 自然と天体に関する名詞と形容詞（色。語句） 絵図：なし

第5課 数字（量詞。語句） 絵図：なし

第6課 自然に関する名詞と形容詞、動詞（語句、文） 絵図：なし

上 下 雨 雪

上雲 下雨 大雨 大雪（法問省略）

いうまでもないが、「下雨」も文である。

第7課 自然に関する名詞と形容詞（語句、文） 絵図：山川の風景

天 地 高 厚

天下 地上 天高 地厚（法問省略）

「天高」と「地厚」は、文だ。

というような具合で、字から語句へ、簡単から複雑へ、という筋道は順に追っているように見える。

ただ、漢字の筆画数を問題にすれば、順序が守られているかということ、必ずしも理想通りにはいかない。日常に必要であり、しかも筆画数が多いというのは、普通にあるからだ。

文字と絵図

文字の大きさは、学童の学習に大いに関係している。

小学生用の教科書は、なぜ大きい文字を使用するのか。学童の目はいいのだから、小さな文字でもよく見えるはずだ。

坪内逍遙が教科書編纂で示した工夫のひとつは、文字を大きくすることだった。文字が大きいと、読むときの声は自然と大きくなる。これが工夫である。

それに比較すると、『絵図文学初階』は、活字はそれほど大きくはない。最初から最後の第6冊にいたるまで同じ大きさの活字を使用している。

坪内逍遙が、日本の教科書で示して見せた文字の大きさに変化をつけるという工夫には、杜亜泉は、気づかなかったことがわかる。

絵図の使用は、杜亜泉教科書の特徴のひとつだ。なにしろ題名に『絵図文学初階』とうたっている。杜亜泉も「叙言」で絵図の使用を強調しているところからもわかる。力の入れようがちがう。

中国で編纂された教科書としては、絵図の導入はたしかに画期的かもしれない。

だが、同じ版元の商務印書館が先に出版した『和文漢訳読本』の存在を視野にいれると、感想がかわってくる。日本の学童を対象としたこちらの教科書は、最初は、絵図の方が主体のように大きく目を引くように配置されている。

第1課で触れたが、牛と羊が出てくる課文であるにもかかわらず、絵図は母牛と子牛だけだ。学童は、羊はどこだ、とさがすだろう。羊も、当然、出てきてほしいところだ。

『絵図文学初階』に使われている絵図は、大きさはどれも比較的小さい。ほん

の挿絵程度であり、悪くいえば添え物なのである。題名に「絵図」を入れて強調しているわりには、扱いが小さい。おまけに、同じ絵柄が別のところで重複して使われたりしている。

木版画と銅版画がいきまじり、絵柄のタッチもばらばらだ。同一人物が描いたものではないことは一見してわかる。『絵図文学初階』のために新しく描かれたとはとても思えない。

絵図から受ける違和感の理由を考えて、その解答を得ることができた。

すなわち、『絵図文学初階』で使っている「絵図」は、ほかの出版物からの流用なのである。あるいは、すでに作成してあった絵図を使い回した。

私が強調したいのは、本教科書のために特別に作成した絵図ではないということだ。つまり、別の雑誌の穴埋め用にあらかじめ作成されている多数のカットのなかから、教科書の本文に適合しているものを選択して配置したにすぎない。本文に適合するカットがなければ、その課には、絵図は置かれぬ。わざわざ新しく描く手間を惜しんだ、ということだ。

その証拠を示そう。

『絵図文学初階』第42課は、「読、写、学、作」の4文字を組み合わせる文をつくる。「読書、写字、学画、作文」というようにだ。それに添えられた絵図は、羽根ペンを持った右手だ。よく見かける絵柄だということができる。そのはずで、『華英初階』の4頁に出てくる絵柄と同一である。大きさまでも同じだから、いくつも作り置きがあったらしい。

商務印書館が力をいれているはずの『絵図文学初階』でありながら、強調する「絵図」に手抜きがあったとすれば、その行く末は目に見えている。もっとも、杜垂泉をはじめとして夏瑞芳などの商務印書館の首脳たちも、それが「手抜き」であるという認識はなかったかもしれない。金港堂と合併し、『最新国文教科書』を編集している過程で、商務印書館の絵師はうまくない、と日本から来た小谷重に指摘されている。その時まで、商務印書館側の編集者は、中国には従来見られなかった、絵図を教科書に取り入れた、という点だけを誇りにし、絵図そのものがもつ重要性には気づかなかつたのではないか。

結 論

『絵図文学初階』の冊数について、重要なところで、齟齬が生じたことについては、すでに触れた。

すなわち、1902年の「欽定学堂章程」では、蒙学堂の年限は4年である。『絵図文学初階』は3年用だから、もともと一致していなかった。さらに、1904年の「奏定学堂章程」では、初等小学堂に名称が改められる。しかも、修学期間は1年延長して5年になった。ますます、適応できないではないか。

杜亜泉編『絵図文学初階』は、最初、商務印書館における教科書の主流であると目されていた。しかし、『最新国文教科書』の出現により急速にその存在を忘れられた。

その理由は、いくつかある。

簡単から複雑へという編集方針を持っていたにもかかわらず、漢字の筆画数までには考えが及ばなかったという不徹底さがある。

「絵図」を前面に押し出して強調するが、できあいのカットを流用するという安易さを指摘しなければならない。

大きな理由は、定められた就業年限にあわない冊数のままに放置し、変更をしなかったことだろう。

重版をかさねていたことは、その版数を見ればわかる。のちの書目にも掲載されており、刊行は続けられていた。だが、それだけのことだ。汪家燭を除いて研究者が、わざわざ取り上げて論及することは、ほとんどなかった。埋もれてしまったといってもかまわない。

10 修文書館買収

日常の支払いに困り高翰卿に保証してもらう、沈伯芬に営業回転資金2千円を用立ててもらう、張元済に保証人になってもらって銭荘から金を借りる、株主に利益配当ができない。いずれも経済的に苦しい状況にあることの証明である。

高翰卿は商務印書館創業者のひとりであるから夏瑞芳を支持するのは当たり前

かもしれない。しかし、本来は夏とは何の関係もない張元済が借金の保証人になっている。このことから、逆に言えば夏瑞芳自身に人間としての魅力があったことを想像させるに十分だ。

当時の経営は、お世辞にも順調であるとは、いえなかった。にもかかわらず、夏瑞芳は、もうひとつのいわば賭けをすることにした。

商務印書館は、もともと印刷技術に留意していた会社である。

『昌言報』第 3 冊（光緒二十四年七月二十六日 1898.9.11）より商務印書館が印刷を担当し、印刷の鮮明さが注目されたのは有名な事実だ。誰の目にもあきらかだった（[実藤恵秀 1940a:245]。中国では、汪家燊が実藤の文章を漢語訳して引用する [汪家燊 1985:45][樽本照雄 1986g]）。

当時、上海に修文書館という名前の印刷所があった。

修文書館は、日本の築地活版製造所が、1883年、上海に設立した、印刷所兼印刷用品販売所だ [矢作勝美 1976:77, 86]。

修文書館については、文献にいろいろな表記がある。修文印書館、修文印刷局、修文印書局、修文印刷所などだ。今、稲岡勝が書く「築地活版製造所出張所修文書館」 [稲岡勝 1997:102] にもとづいている。

中村忠行によると、修文書館の開館は、1884年 8 月という [中村忠行 1990:註1]。上海での営業がうまくいかず、引き払うことにした。印錫璋の紹介で商務印書館が、修文書館所有の機器設備全部を 1 万円で購入する [鄭逸梅 1983a:5]。

もうひとつの証言は、印錫璋がただちに買い取り商務印書館に引き渡したというものだ [唐綱 1992:595]。

手に入れた機器は自家用に使う以外に、残ったものも販売したという。この時から商務印書館は、紙型を作るようになった。

修文書館についてのおおよその流れは以上のようなようだ。しかし、細部が不明確である。その不明確であるということ指摘した研究者は、いない。

まず、印錫璋の紹介で商務印書館が購入したのか、あるいは印錫璋が機器設備を買収して商務印書館に引き渡したのか、はっきりしない。

ともかく、修文書館の買収に印錫璋の名前が出てくるのは、広告印刷の関係で、綿織物工場を営んでいた印錫璋も夏瑞芳と知りあっていたからだ。夏瑞芳の

【図1-19】清末時期における宝山印刷所の活版印刷部（スタッフォード撮影）。印刷機にはりついている少年たちは、辮髪姿だ。印刷工場の規模が大きい



「腕利き」であるところに印錫璋は目をつけ、商務印書館が資金難のときには支援をしている。

商務印書館の創業者のひとりである高翰卿は、修文書館との関係を次のように証言する。

（前略）ちょうど日本人の開設した印書館、名前を修文書館というものが、営業がうまくゆかず維持するのが困難となり、設備、器具のすべてを売り出しけりをつけることに決めた。そこで印錫璋氏の紹介で商務が購入することになったが、価格は格安であった。大小の印刷機、活字の母型、活字

バイト、材料などなど揃わないものはない。それにより大いに拡充するや、みちがえるばかりの規模の印刷所となり、自家用のほかは随時小売りをし、少なからず利益を上げた。商務の基礎はここより固まりはじめたのである。これが商務と日本人の最初の関係だ[高翰卿1992]

高翰卿は、印錫璋の紹介と書いている。そうすると、買収の資金は商務印書館が出したというのだろうか。問題になるところだ。

当時の上海において、商務印書館は「規模は小さいが設備が新しい」[包天笑1971:221]という評判をとっていた。修文書館のもっていた印刷関係の機器材料は、商務印書館の印刷技術向上に大いに役立ったのは事実なのだ。

11 経営不振をめぐる謎

日清戦争に破れた中国では、改革自強の社会風潮が盛り上がった。教育が肝心との認識が広まり、多数の学校が設立される。商務印書館が英語の教科書、辞書を発行した社会的背景である。英語教科書がよく売れ、売れ筋の出版物ではあった。しかし、商務印書館自身の経営は、必ずしも順調ということではなかった。

前述したとおり、創業時からして出資金は印刷機器購入に使い果たし、出資者のひとり沈伯芬に2千元を融通してもらおうほどだ。経済的には逼迫していた。美華書館の西隣に移転してから、植字印刷部門は、鮑咸恩、咸昌兄弟が担当し、総支配人には夏瑞芳がなった。総支配人とはいっても、実態は校正、集金、仕入、注文取りなどをこなすナンデモ屋である。毎晩8、9時まで働いて、月給は24元にすぎず、とても家庭の支払いに足りない。印刷請負の仕事さがすついでに、保険会社の注文取りをして家計費にあてたという状況を思い出してほしい[朱蔚伯1981:142]。前述のように、美華書館にいた高翰卿に、印刷材料の支払いの保証をしてもらったこともある。

創業から第1次増資を行なった1901年夏まで、純益の配分はなかった、と関係者は証言する。英語教科書の売り上げはあったはずだが、利益はすべて営業資金

にまわしていた。夏瑞芳が本業のかたわら保険の勧誘をしなければならなかったほど給料は安かった。この一点を見るだけで、いかに商務印書館の経営が苦しかったかが理解できるのではないか。

そういう経済状態でありながら、修文書館の機器購入を決断している。

多くの文献が、商務印書館の修文書館買収をいう。しかし、問題は、修文書館買収の資金である。買収額を示した文章は、ほとんどない。1万元と買値を出しているのは、私の知る限り鄭逸梅だけだ[鄭逸梅1983a:5]。高翰卿と汪家燊は、具体的に数字を示さず安価で購入したと書く。

修文書館は、上海で営業するために10万元近くを投資した[鄭逸梅1983a:5]。修文書館にしてみれば10分の1で売りだすのは「安価」だ。しかし、商務印書館にとっては、この1万元のどこが安価であろうか。夏瑞芳に副業を強いるほどの給料しか払うことができず、利益は営業資金に流用するなどの自転車操業状態であったことを考えるべきだ。いったいどこに1万元を支出する余裕があったのか。余裕がなければ、どこから出た資金なのか。

印錫璋が、一部分の資金をひねり出して修文書館を買収し、商務が使うように渡した、という説を紹介した[唐綱1992:595]。印錫璋が自ら買収したあと、夏瑞芳に無料提供したとは考えられない。印錫璋に仲立ちしてもらい、1万元も印錫璋から借金をした、と考えるのがいちばん自然でわかりやすい。商務印書館にとっては負債になったとするのが普通の考え方だ。

結局のところ、修文書館の機器を購入する資金について、今まで誰からも納得のいく説明を聞かされたことがない。というよりも、説明そのものが存在しないのだ。不思議なことである。

一方で、夏瑞芳は、日本語書籍の翻訳にかかわって、ほとんど詐欺まがいの行為にひっかかっていることはすでに紹介した。出版は素人ではむづかしい、才能と学問のある人にまかせるべきだ、と夏瑞芳は編訳所の必要性を認識した、というのだ[朱蔚伯1981:145]。

翻訳原稿による出版がうまくいっていたのなら、増資の必要も、編訳所設立の考えも出てはこなかったはずだ。

創業の1、2年は、利益もあがったが、そのうちに損失が利益を上回るように

なり、資金繰りが苦しくなった。そのため外から資金を導入しようとした。これは、商務印書館の総支配人をやったことのある王雲五の証言だ[王雲五1973:2]。

王雲五は、徳昌里から慶順里への移転は、部屋数は12部屋ともとの「4倍」になり、設備の拡充も行なったと述べている[王雲五1973:2]。

いかにも順調な営業であったような印象をあたえる。ことに部屋数の「4倍」化が強調されると、その感を強くする。しかしながら、高翰卿と朱蔚伯の証言によれば、建物が崩れたのが移転の主因であった。そうであるならば、最初の移転は自発的というよりも迫られて行なわれたことになる。

先に慶順里の建物について、「さほど高級なものとも思えない」と書いた。営業が順調で12部屋の場所に移転したわりには、建物全体がみずぼらしい。ふたつの復元図を見比べての感想だった。どうやら、12部屋という数字に惑わされたと考えられる。営業が好調で広い場所に移ったのではないのだ。事實は、もとい建物が崩れたので、しかたなく、移転せざるをえなかった。以前と同じ家賃で、部屋数の多い場所は、部屋の広さを犠牲にし、中庭もない、等級の一段低い広式住宅しかなかったのではないか。

いくつかの事實は、すべて商務印書館の営業不振説をうらづける。

この経済的苦境を、夏瑞芳は、資本金を増額することで乗り切ろうとした。

ところが、以上の商務印書館経営不振説をまっこうから否定するのが汪家熔である。汪家熔は、経営不振説は根拠のない伝説だ、といろいろ理由をあげている[汪家熔1985:47-59]。そのなかでゆるがぬ根拠として、商務印書館が投資した最初の資金が、4年間で7倍に値上がりしていることをいう。7倍もの値打ちをもったからには、経営不振などということはありませんと主張するわけだ。

資本金の増加を、私は、商務印書館の経営不振打開の秘策だと考え、同じ行為を汪家熔は、経営順調の証拠だという。まさに反対の見解だということができよう。

私は、汪家熔説に反対したいと考える。高翰卿の証言と汪家熔があげた数字（張元濟、印錫璋の出資金は2万3,750元。ただし、分担の比率は不明）を使って説明しよう。

12 第 1 次増資をめぐる謎

重要な部分だから、まず、創業者のひとり高翰卿の証言を訳出する。

本館が創立して最初の数年は、発起人に配当金はなかった。利益はすべて営業資金にし、張菊生（元済）氏と印錫璋氏が投資加入した時、あらためて株価の値上げを行なったのである（原文：重為估值昇股）。そのころ張菊生氏は、南洋公学で訳書院院長をつとめていた。書籍印刷のためいつも夏、鮑君らとかけあっていたから、彼らは仕事がきわめてまじめであるのがわかった。しかも、夏氏は、ちょうど本館を拡充し、編訳所の設立を準備しており、張氏に編訳の仕事を主宰してもらおうよう招聘することを考えていた。双方の意見は合致し、相談ののち張氏らは投資し参加することを希望する。同時に印錫璋氏にも参加する考えがあり、もとの発起人により張、印諸氏が四馬路の昼錦里の聚豊園に招待され、合資の方法を相談した。さらに有限公司にすることにし、もと発起人の株をはじめの値の 7 倍にすることを決定した。全部で資本 5 万元となる。これは清光緒二十七年(1901)のことである[高翰卿1992:6]。

朱蔚伯論文も、配当金がなかったこと、株の価格を 7 倍に値上げしたこと、資本 5 万元になったことなどほとんど高翰卿とおなじ表現を使って説明している[朱蔚伯1981:143]。

第 1 次増資について基本的な数字がある。創業者の株価を 7 倍にしたこと、および 5 万元の資本としたことだ。

創業時の資金が 3,750 元だから、その 7 倍は 2 万 6,250 元だ。張元済、印錫璋ふたりの投資で 5 万元となったのだから、張、印が負担したのは、5 万元引く 2 万 6,250 元で合計 2 万 3,750 元となる。

汪家熔が提出した数字は以上の算術に基づいている。

汪家熔は、もとの資金よりも 7 倍に値上がりしたのだから、経営不振説は成立

しないと反論した。どうやらこの7倍という数字が、客観的に定められたように汪家熔は考えているようだ。しかし、その事実はない。

高翰卿の証言を読めば、7倍という数字は、商務印書館のもと発起人と張元済、印錫璋が相談して決定したものだということが理解できよう。株式市場があって客観的に7倍の評価を得た、という種類のものではない。7倍の評価を自分たちで勝手に行なったということだ。

そうするとなぜ7倍か、という疑問がでてくる。7倍というのが重要である。自分たちで自由に決定できる数字にもかかわらず、なぜ10倍ではなくて7倍なのか。7倍というのは中途半端ではないか。切りのよい10倍に評価してもかまわない。

ところが、この7倍という数字には、細心の注意が払われているのである。

鍵は、汪家熔も提出する2万3,750元という数字である。

思いたしてほしい。最初の出資金が合計3,750元だった。修文書館の機器購入に1万元、翻訳原稿代金の欠損が1万元。合計すれば2万3,750元だ。これはまさに張元済と印錫璋の出資額である2万3,750元にほかならない。偶然の一致とは思えない数字といわなければならない。

5万元との差額は、2万6,250元。これを最初の出資額3,750元で割れば、まさに7という数字が出てくる。これが7倍になった秘密なのである。

元金の7倍という客観的な数字があって、5万元との差額2万3,750元が決まったのではない。その逆で、2万3,750元という数字を提出するために、元金の7倍という数字を決めたのだ。

すなわち、数字の上だけであるが、第1次増資によって創立資金および翻訳原稿による損失と修文書館買収費用をまるまる回収したことを意味する。あきれるばかりの鮮やかさである。知恵を出したのは、夏瑞芳だとしか思えない。

つまり、第1次の増資といっても、商務印書館創業以来の欠損を、張元済と印錫璋のふたりに穴埋めしてもらっただけのものにすぎない。もとの出資者は、一文の金も出す必要がないばかりか、本来は失われてしまったかもしれないもとの出資金を取り戻し、修文書館への支払いができ、教科書翻訳費も回収したことになる。まさに一石二鳥どころか一石三鳥の妙案だといえよう。数字を操作する

【図1-20】張元濟（左）／高翰卿（右）



だけで欠損を埋めてしまった夏瑞芳の経営手腕の確かさを、高く評価しなければならない。

印錫璋は、修文書館の機器を商務印書館が購入したさいの仲介者である。もともとは紡績工場の経営者で、当時、三井物産上海支店で綿糸布の輸出入を業務としていた山本条太郎とは親しい間柄であった。山本条太郎は、金港堂主人原亮三郎の娘婿でもある。のちに金港堂と商務印書館が合弁会社になる布石はこの時に敷かれた[樽本照雄1982b]。

1901年に行なった第1次増資は、商務印書館にとって重要な意味を持っている。ひとつは欠損の穴埋めであり、もうひとつは人材の獲得である。資金と人材が、印錫璋と張元濟なのだ。そしてこのふたりともに夏瑞芳の人的関係で商務印書館に参加してくる。

印錫璋と張元済がどういう割合でお金を出したのか、資料がないので不明だ。しかし、印錫璋は紡織工場を経営しており、張元済よりは多くの出資をしたにちがいない。とはいえ、修文書館の買収費用1万元を用立てたとすれば、実際の出費はこの1万元を減じたものとなったはずだ。どのみち、言葉をかえれば、創業からの出費を、印と張のふたりに肩代わりしてもらったということだ。

確かに夏瑞芳は、頭脳明晰である。株価の評価額が総額の半分以上で、しかも累積損害に一番近い金額（この場合はまさにその額）になるのは7倍である事実に注目した。

さらに、評価すべきは、夏瑞芳たちが、ある意味において「謙虚」である点だ。それまでの損失以上の金額を張元済と印錫璋から引きだそうとは考えなかった。夏瑞芳の謙虚で誠実な態度は、張元済と印錫璋に好かれた理由でもあろう。

第1次増資は、いってみれば数字の魔術である。創立資金の7倍＝2万6,250元は、ただの数字だけであって、実際に資金が存在するわけではない。あいかわらず資金不足に苦しんでいたはずだ。

翻訳原稿でこりた夏瑞芳は、編訳所を設立し、張元済に編訳を主宰してもらう構想を持つにいたった。張元済は、承諾した。張元済も投資することにしたが、その額は大きくはなかったようだ。しかし、多額ではないにしても現金をかき集めるために夫人の金の装飾品を手放したという。

張元済は、1902年、商務印書館に正式入館した【図1-20】。朱蔚伯と章錫琛は、張元済がそれまでいた南洋公学訳書院を辞任したのは、約1年後の1903年である、と書いている（[張樹年1991:42]は、南洋公学訳書院の辞任を商務印書館入館と同時にしている複数の証言と異なる）。

もしそうならば、張元済は、1年くらいの期間だが商務印書館と南洋公学のふたつに勤務していたことになる。

商務印書館における新たな役割分担が、定まったということができよう。夏瑞芳が営業全般を担当し、鮑兄弟が印刷部門を統轄する。張元済は、編訳所で編集を担当するという具合だ。外から見れば、トロイカ指導のように映るかもしれないが、商務印書館の実質的運営は、夏瑞芳が全権を掌握していたと考えた方がいい。商務印書館の転換点には、かならず夏瑞芳がかじ取りをしているからだ。

張元済の入館後、彼の人的関係により優秀な人材が商務印書館に入ってくるようになった。高夢旦、蔣維喬、莊俞、杜亜泉たちで、彼らが教科書編集の中心になるのだ。張元済を商務印書館に招いた夏瑞芳のもくろみは、十分に達せられたといえる。

第1次増資は、いわば赤字の補填を兼ねていた。日常の回転資金は、少しはできたかもしれない。

13 張元済が正式に入館するまで

張元済が、商務印書館に正式入館するまでの状況をすこし説明しておこう。

1901年、張元済は、友人たちと雑誌『外交報』を創刊するための準備をすすめていた。資金の分担は、以下のようだ。

張元済 2株、蔡元培と杜亜泉で合計1株、趙從藩 1株、温欽甫（宗暎）
1株500元、商務印書館 1株、その他 徐珂、沈幼珊、王耕三 持ち株
数の詳細は不明 / 合計9株4,500元[汪家熔2003:105]

『外交報』は、1902年1月4日に創刊号を発行し、1911年1月15日第300期をもって停刊した。毎号売れ残りがでたことと、代金の回収ができないものがあって、つぶれてしまったのが事実らしい。

商務印書館は、最初、印刷を引き受け、のち総取次販売元となっている。商務印書館が出資したのも、総取次販売元になったのも、張元済と夏瑞芳の関係からであろう。もっとも、張元済は、1902年に正式入館している。『外交報』が張元済の個人出版物といいながら、その発行所は商務印書館の発行所に置いていた。両者を厳密に区別することはむづかしい。

張元済がちょうど『外交報』創刊の準備をしていたころ、商務印書館に出資する話がもちあがっていた。

張元済は、『外交報』を創刊するために1,000元を出資している。さらに商務

印書館にも資金（金額は不明）を提供するとなれば、毎月350元の給料をもらっていたさしもの張元済も、夫人の金の装飾品を現金にかえなければならなかった[朱蔚伯1981:143]。

南洋公学を辞して商務印書館に入館したとき、給料は南洋公学とおなじ350元である。創業者の夏瑞芳が24元の給料というのにくらべれば、いかに高額かが理解できよう。

張元済は、長康里において編訳所の設立準備を始めた。

14 編訳所

長康里で編訳所の設立準備（地図）

長康里は、北京路北、貴州路西にある。美華書館西よりかなり遠い。朱蔚伯は、編訳所設立の準備[朱蔚伯1981:143]といい、高翰卿は、「まず長康里に編訳所を設立した」[高翰卿1992:6]と書く。

長康里という場所に触れているのは、高翰卿と朱蔚伯の文章くらいのもので、編訳所というと、だいたい唐家衡からはじめるものが大部分だ。大部な『張元済年譜』（42頁）でも、長康里には言及せず、唐家衡に編訳所を設立したとする。

長康里では編訳所の設立準備をしていたという朱蔚伯説を私が支持するのは、張元済の入館時期と商務印書館資料に記録された以下のものをつきあわせた結果である。

3. 編訳所長、編審部長

1902年底-1903年5月 蔡元培

1903年6月-1918年9月 編訳所所長 張元済

（以下略）[汪家燊1982b:20-21]

ちなみに同資料から、理事会、総支配人の関係部分のみを掲げておく。



9

4

8

5

2

3

6

7

【図1-21】編訳所の室内（スタッフォード撮影）。全員が帽子をかぶり辮髪をたらしている。綿入れを着ているところから季節は冬だとわかる



1．董事会主席

1903-1909年初、有董事四名、不設固定会議主席

1909年3月-1912年5月 主席 張元濟

1912年6月-1913年5月 主席 鄭孝胥

（以下略）

2．総経理、経理

1897-1913年 経理 夏瑞芳

1914年1月 総経理 同上

1914年1月-1915年11月 総経理 印有模

（以下略）

董事会について、すこしだけ触れておく。朱蔚伯は、1909年三月に董事局が設立され、これが董事会のはじまりだという。それ以前は、編訳所の会議で決定していた[朱蔚伯1981:147]。上の一覧とあわせて考えると、名称だけの董事(理事)を置いていたということになる。

蔡元培は、張元済と同年生まれ、同郷、同年の進士で南洋公学で同僚であった。ふたりは、前述『外交報』の仲間でもある。この関係から、張元済は、蔡元培を編訳所所長に推薦したのだ[高平叔1990:273]。

上の記録によれば、1902年末から蔡元培が編訳所長に任じられている。ということは、編訳所の正式成立は、1902年末と考えた方がいい。張元済が1902年はじめに入館したとすれば、その年末までの編訳所は、準備段階だったとするのが一番理解しやすい。

編訳所という考えは、どこからきたのだろうか。

包天笑は、創業当時の夏瑞芳をつぎのように描写している。

他人が商務印書館に印刷を依頼してきた印刷物について、どういう種類の内容で、どの方面の読者に売れるか、など夏瑞芳は包天笑に常にたずねたという。また、夏瑞芳が質問していわく、「この頃多くの人が編訳所をやっているが、この編訳所はどのようにやるべきなのかね」と。「業務を拡張し、自分で出版するつもりなら、編訳部をやらなきゃだめです。学問のある有名人に主宰してもらって、あなた自身は営業に専心すべきです」と私(包天笑)がいうと、夏君は、首をふり嘆息している。「残念ながら私たちの資本はあまりに少なすぎます。ゆっくりやるとしましょう」[包天笑1971:236-237]

のちに張元済を編訳所に迎えることになるうとは思えない頃の話である。

夏瑞芳が、編訳所に興味を抱いていることの証拠としておもしろい。単なる興味から実現する方向に転じたのは、不良翻訳原稿を大量につかまされた苦い経験による。営業不振などなかった、という汪家熔説に従うとすれば、編訳所構想が出てくる余地はなくなるのだ。

目を日本に転じると、金港堂編輯所は、1886年(明治19)に設立された。夏瑞芳は、商務印書館を創設した年(1897)に日本へ印刷視察の旅をしている[朱蔚伯1981:143]。夏瑞芳の編訳所にたいする関心は、このときの日本視察旅行にも関

係するのではないか、と思われる。だが、裏付ける資料が今のところない。

張元済と印錫璋の投資があり、編訳所設立準備に張元済を迎えて営業不振から脱却し順調にすべりだしたかに見えた商務印書館に、火災が襲いかかった。

15 火災発生

光緒二十八年七月十九日(1902.8.22)に発生した商務印書館の失火は、重要な問題であるにもかかわらず、中国側から出てくる文献では、無視をするか、説明しても言葉が少ない。火災発生後に印刷所を新築したことと関係して問題が出てくる。きわめて重要だと強調しなければならない。

中国の文献は、商務印書館が火災にあったことに、あまり触れたくないらしい。いや、触れることはふれる。しかし、その被害の状況を過小に書きたがっていたり、その反対に巨額の保険金が転がり込んだと言ったり、意見がマチマチなのだ。

火災発生のものち印刷所、編訳所、発行所の3ヵ所を同時に建設した、と各文献にほぼ共通して記述されている。保険をかけていた、というのは夏瑞芳の副業、すなわち保険の外交をしていたことから考えて本当のことだろう。しかし、巨額の賠償金を受け取るほどのものだったかどうかは疑問である[樽本照雄1991b]。

光緒二十八年七月十九日(1902.8.22)深夜12時、上海イギリス租界北京路角美華書館西にある商務印書館から出火、家屋若干が焼けた。創業から5年目の災難である。

新聞報道によって事実を押さえておこう。

出火情況

火災の第一報は、『申報』に載った【図1-22】。

『申報』光緒二十八年七月二十日(1902.8.23)

イギリス租界の火災 昨晚十二時、北京路から河南路への曲り角の某氏宅において不注意により火災をまねいた。見張り台からの鐘のしらせで消防団

【圖1-22】商務印書館の火災報道

1 『申報』光緒二十八年七月二十日 (1902.8.23)

長久始別 ○昨午前下臺林通判蔡二源別領赴照羅拜會汪大令蔡談片刻而別

英界火警 ○昨晚十二點鐘時北京路至河南路轉角處某姓家不戒於火致兆焚如經瞭望臺鳴鐘報警救火會西人馳往灌救旋即

滅去房屋若干及如何起火俟明日探聞再錄

勸業直廳 ○日前有自稱離花作行頭之顧庚新陳國生倪銀福范月炳等入稟上海縣署稟請給示意圖勒加工價縣主汪瑞大令

2 『申報』光緒二十八年七月二十一日 (1902.8.24)

飭將發交其母領去吳王氏從寬免究身價小進石王氏羅江氏及池一併移送上海縣署候懲

英界火警續聞 ○前晚北京路失火情形已紀昨報茲悉火起於商務印書館幸救火會各西人竭力施救僅焚去房屋四幢及鄰百

德泰客棧

馬路工程局項案 ○前者內地自來水公司工頭徐錦和同源源祥紙店夥計茂生查向水器以致口角互毆事後控諸馬路工程局總

3 『同文滙報』光緒二十八年七月二十一日 (1902.8.24)

日色彩金丁月角身百銀學三二百格云似

火警紀聞 ○前晚鐘鳴十二點捕房蕭半亂吼旋分三下訪知

火起於北京路塊商務印書館四十一號門牌時烈烈轟轟

穿屋頂英法美三界洋龍各驅皮帶車馳至汲水并灌祝融君勢

方不敵旋即斂威而退是役也共焚燬房屋三幢聞均保有火險

云

去且早

4 『同文滙報』光緒二十八年七月二十一日 (1902.8.24)

商務印書館告白

本館於十九晚失慎所有往來銀洋信件等請寄至上海北京路第四十號門牌便是特此佈聞

の西洋人が駆けつけ、消火活動を行なうやただちに鎮火したが、若干の部屋を焼いた。火災原因については明日の調査をまって報道する。

この時点では、火元が商務印書館であったことは、明らかになっていない。翌日の『申報』に続報が掲載された。

『申報』光緒二十八年七月二十一日（1902.8.24）

イギリス租界の火災続報 一昨晚、北京路の失火情況についてはすでに昨日の新聞で報道した。火災は、商務印書館に発生したことが判明。さいわい、消防団西洋人の尽力によりわずかに四部屋と隣接の徳泰客棧を焼いたのみ。

商務印書館の過失による火災は、さほどの被害はなかった模様である。同じく上海の新聞『同文滬報』には、つぎのように報道されている。

『同文滬報』光緒二十八年七月二十一日（1902.8.24）

イギリス租界

火災ニュース 一昨晚十二時、警察署の鐘が激しく鳴った。ただちに三方を調査し、北京路角の商務印書館四十一番地に火災が起こっているのがわかった。盛んな火は、すぐさま屋根をつきぬける。イギリス、フランス、アメリカ三租界のポンプ車がかけつけ水をそそぐや、祝融君（注：火の神様）の勢いはようやく失せた。家屋三部屋（原文：房屋三幢）が焼け落ちるが、すべて火災保険をかけていたという。

同日の『同文滬報』には、商務印書館自身から失火広告が掲載されている。

『同文滬報』光緒二十八年七月二十一日（1902.8.24）

商務印書館広告 本館は十九日夜、失火いたしました。すべての取り引きの現金、郵便物は、上海北京路第四十番地にお送りください。右、お知らせいたします。

北京路第四十番地というのは、焼けた商務印書館が第四十一番地というから、その隣ということになる。

『申報』と『同文滬報』では、焼失した部屋の数が4部屋と、3部屋とで報道が異なる。いずれにせよ、商務印書館が借りていた12部屋全部が焼け落ちたわけではない。

張元済が創刊した『外交報』は、商務印書館が印刷を請け負っていた。火災から約一ヵ月後の日付がある『外交報』壬寅19号（21期 光緒二十八年八月十五日補印<1902.9.16>）には、商務印書館広告が掲載された【図1-23】。「先月、不幸なことに火災にあいましたが、幸いなことに倉庫、活字鑄造室、書板室などは災難をまぬかれました。現在、すでに新たな配置を行ない、規模をさらに拡張し、北京路の元のところの隣家四十番地におきまして通常営業を行なっております」という。

1900年当時の商務印書館を復元図で見ると、二階建ての西洋風長屋に「商務印書館 / COMMERCIAL PRESS」と看板が掲げてある。出入り口がふたつ、合計11個の小窓が見える。12室の部屋を借りていたというから、窓ひとつが1室の勘定になる。そのうちの3、4部屋と隣の旅館を焼いたのが今回の火災である。

出火状況のおおよそは、わかる。しかし、出火の原因、その場所、正確な被害状況、火の手のおよんだ隣家の被害状況、責任者の所在などは、いぜんとして不明のままである。火災の詳細が不明となると、問題になってくるのが火災保険なのだ。

火災保険

『同文滬報』の記述「すべて火災保険をかけていたという」、ここに注目されたい。

商務印書館には、火災保険がかけられていたとは、まことに用意周到である。朱蔚伯の文章に、「(夏瑞芳は)月給24元では生活費に足りなかった。外で印刷業務を請け負う時、懇意の保険公司のために注文を取り、この収入で家計を補った」[朱蔚伯1981:142]とあるのを見ると、火災保険に加入していたのも容易に納得

【圖1-23】『外交報』壬寅第19号（第21期 光緒二十八年八月十五日補印<1902.9.16>）

外
交
報

上海商務印書館廣告

啓者本館向設上海北京路四十一號專售印書機器銅模鉛字銅板鉛板凡印書報器具一應俱全並發兌華英譯本時務新書兼批售各色洋紙精印中西書報各種零件久蒙中外仕商交口稱許僉謂貨物精良足爲滬上各書館之冠是以各省所辦機器鉛字等件大都購自本館生意蒸蒸日上有應接不暇之勢雖不幸于上月間忽遭回祿尙幸棧房鑄字房書板房等均未殃及現已重行部署益擴規模仍在北京路原處隔壁四十號內照常工作如蒙採辦機器鉛字托印書報及批購書籍洋紙等請至四十號本賬房面議貨物格外精良價值格外廉賤工程亦格外迅速嗣當愈自振奮益臻美備藉圖名譽而廣招徠此佈

上海商務印書館謹啓

できる。不慮の災難にそなえるのは、経営者として当然とはいえ、不幸が現実のものとなったことを見れば、やはり、この時期における夏瑞芳の卓越した経営感覚に感心しないわけにはいかない。

上海には保険会社が林立していた。火災保険について、その保険料を調べるのは、困難なことではない。

遠山景直『上海』には、次のようにある。

上海に於ける水、火、人寿保険会社の代理店、支店等の多き屈指に違あらず、
(中略)火災保険の如きも家屋及貨物財産等、一千兩に付大約左の如し、

	兩 錢分
支那第一等家屋	10、55
同 第二等同上	11、85
同 第三等市房	19、00
外国人住宅	9、50
三等市房	38、00
怡和、招商、太古倉庫	2、25
外国人商倉庫	4、50
支那人同上	6、65
洋式市房(如全亨悦生)	19、00
如英法大馬路	28、50

要するに生命及火災保険の如きは各社其取扱ひを殊にし、只保険業者と被保険人との間の契約に基くを以て其詳細は知る能はず、単に其概略を示すのみ

[遠山景直1907:167-169]

この説明にもあるように、商務印書館の火災に関しても、上の保険料一覧は、役に立たない。商務印書館がいかなる規模の火災保険に加入していたのか、詳細を示す資料がないからだ。さらに、前述したとおり火災の具体的な被害内容も不明である。

商務印書館の火災保険について何人かの証言がある。

章錫琛の証言：

1902年、北京路の工場が火災で焼け、巨額の保険賠償を得た。そこでふたたび増資を決定し、北福建路に工場を建設、河南路に発行所を新設した。また、編訳所を増設するため、工場のむかひの唐家弄に三部屋を借りた[章錫琛1964:66]

章錫琛の文章について、少し説明しておきたい。

1979年以前の中国側文献としては、金港堂の教科書疑獄事件に触れている珍しい資料である。その他についても詳細な記述があり、朱蔚伯の文章とならんで信憑性が高い。ただし、『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』(北京・商務印書館1987.1)では教科書疑獄事件を含めて削除する。章錫琛の原文は39章だが、『商務印書館九十年』に転載されたのはそのうちの19章にすぎない。

さて、章錫琛のいうところによると、巨額の火災賠償金で印刷工場を新築し、さらに発行所と編訳所を賃貸できた、ということになる。これでは俗にいう「焼け太り」だ。印刷所、発行所、編訳所の同時新設ができたのは、「巨額の保険賠償を得た」からに違いない、と思ひ込んだのではないか。発想が逆なのだ。だいいち、「増資を決定」したと書くが、この時期に増資をした事実はない。

羅品潔の証言：

彼らが、最初、共同ではじめた印刷組織は、北京路におかれた。たった一部屋で、のち二部屋に拡張した。一度火災にあったが、火災保険に加入していたため損失は大きくはなかった[羅品潔1980:18]

一方、羅品潔証言では、火災保険のおかげで「損失は大きくはなかった」となり、章錫琛の記述とは、大きく異なる。商務印書館から出火した、全焼ではなかったという事実と、火災保険という性格を考えると、うまくいってこれくらいの補償であろう。

もうひとつの証言を紹介しよう。

朱蔚伯の証言：

1902年七月、北京路の家屋は失火で焼けた。そこで印刷所を北福建路海寧路に建設し、鮑咸恩を所長とした。別に編訳所を唐家街に、発行所を河南路棋盤街に設立、内部の職務にかなり明確な分担を行い、経済的基礎はさらに発展し強化された[朱蔚伯1981:145]

商務印書館の職員であった朱蔚伯の文章は、全体に見て信頼性が高い、と私は考えている。ただし、火災にかんするこの部分のみは、うなずくことができない。なぜなら、火災に遭遇した後、なぜ、印刷所が新築でき、そのほか2カ所に部屋を借りることのできる資金が出てくるのだろうか。それが火災保険の賠償である、と章錫琛は、いいたいのだ。検討する必要がある。

そもそも火災保険は、建物の所有者が、焼けた建物を再築、あるいは修繕するために保険会社と契約する。建物の評価額（保険金）に一定の料率がかけられ、それが保険料となる。店子が保険に加入する場合も同様に、焼失した建物の再築、修繕の資金が出るよう契約する。上に引用したように、上海でも、レンガ建築よりも木造建築のほうが料率は、当然、高くなる。

いずれにせよ、火災保険の目的は、建物の再築、修繕であるのが基本だ。

商務印書館の場合はどうか。

まず、商務印書館は、12部屋を借りていた店子である。それも12部屋のうち、一部分のみが焼失しただけだ。さらに隣家が類焼している。

店子が過失で出火したわけだから、修繕して原状回復する必要がある。また、隣家の類焼にたいして、補償が要求される可能性も高い。

商務印書館が、火災保険会社と締結した具体的な保険契約内容は、今のところ不明である。しかし、常識的に考えて、章錫琛のいうように「巨額の保険賠償」が出たというのは信じ難い。好意的に見ても、羅品潔が書くように、せいぜいが「火災保険に加入していたため損失は大きくはなかった」あたりが妥当なところだ。きびしくいえば、いくら倉庫、活字鑄造室などが無事であったとはいえ、水をかぶった書籍、機器、紙がそのまま売り物になるわけではなからう。火災をお

こした責任もある。とても、もとの場所で営業を続けることのできる状況ではなかった、と考えるのが普通である。ましてや、火災をおこした商務印書館が、巨大な印刷工場を新築し、そのうえ新たに部屋を借りて発行所と編訳所を新設することができるとは、誰が考えても不可解の一語につきる。

創業者のひとりである高翰卿は、「光緒二十八年七月、火災にあい、すべての機器工具が焼けてしまった。新しく注文していた機器はすでにとどいていたが、幸いなことに事前に火災保険をかけていたので賠償金を受け取った。ただちに福建路海寧路に土地を購入し印刷工場を建設する」[高翰卿1992:7]と証言している。新しい印刷機器には火災保険をかけていた。これくらいが妥当なところだろう。新しい印刷機器をもう一度入手できる程度のものだ。

降りてきたのはわずかな賠償金だと思われるが、はたして、それで土地を購入し印刷工場を建設できるものだろうか。おまけに、その印刷工場は、赤レンガ3階建ての堂々たる建築物なのだ。

さらに奇妙なのは、火災発生後からごく短期間内に新しい印刷所に移転していることである。土地の選択、購入、設計施行、建築がそんなに急にできるものだろうか。建築資金も多額にのぼるはずだ。この疑問に答えてくれる文献は、現在までのところ、まったくない。

しかし、商務印書館側に投資者のひとりとして印錫璋が存在し、彼の知人の日本人山本条太郎につながり、さらにその背後には、原亮三郎ひきいる金港堂が控えていることに思えば、この一見不可解な商務印書館急成長の謎も氷解するのである([中村忠行1990]も参照されたい)。

さて、火災後、約一ヵ月たらずで通常業務に復帰したようだ。

印刷を引き受けていた『外交報』の発行状況から判断できる。該誌壬寅第18号(第20期)の発行は、光緒二十八年七月十五日(1902.8.18)である。第19号(第21期)は、本来ならば、七月二十五日(8.28)が発行予定日となる。実際は、光緒二十八年八月十五日補印(1902.9.16)となっていて約一ヵ月の発行遅延であることがわかる。

今まで誰もが言及する問題の印刷所について見ていこう。

言及はあるのだが、その建設時期は問題にされてこなかった。火災発生と印刷

所建設の時間経過は、きわめて重要な問題であるにもかかわらず、無視されてきたのだ。

16 印刷所の設立

火災後、商務印書館は、北福建路海寧路に土地を購入し、印刷所を新築した。火災に言及する文献は、ほとんどこのように記述する。火事をおこした事実に触れない文献は論外だ。

錢業会館西文昌閣隔壁（地図）

『外交報』壬寅第24号（第26期 光緒二十八年九月十五日<1902.10.16>）に商務印書館の広告がある。

この広告が興味深いのは、発行所と印刷所を分けているところだ。火災にあう以前は、発行所と印刷所は同じ場所にあった。

発行所は、「開設在上海棋ノ盤街直街中市」に新しく設ける。

印刷所は、「上海錢業会館ノ西文昌閣隔壁」とあるところからわかるように、発行所とは別の場所だ。

印刷所のほうにはさらに「紅磚洋房」とうたう。赤レンガの洋館だということがわかる。

『上海指南』には、「北河南路と文監師路の角に錢莊会館がある」[商務印書館1909:卷二の三オ]と書かれている。前出『重修上海景城廂租界地理全図』には、河南北路に「錢業公所」が見える。南市に錢業公所をもうけ、北市にも錢業会館を置き、北の方を総公所とよんだ、という説明もある[馬学新ら1992:552]。

その錢業会館の西の文昌閣隣は、地図のあたりだろう。

商務印書館自身が掲載した当時の印刷所の全貌を見てほしい【図1-25】。赤レンガ（らしい）3階建ての堂々たる建築物である。鉄のかたまりである印刷機器および印刷用紙を設置するには、これくらい頑丈そうな建物でなければもつまい。

日本人もこれを見て驚いている。



【圖1-24】『外交報』壬寅第24号（第26期 光緒二十八年九月十五日<1902.10.16>）

西文昌閣隔壁

商務印書館

上海錢業會館

紅磚房

印刷所

盤街直街中市

商務印書館

開設在上海棋

新書廣告

發行所

西 洋 歷 史 教 科 書

一國之治原由何故其所以興廢存亡者皆由於其政治之善惡與其法律之優劣也。夫政治之善惡與其法律之優劣者皆由於其歷史之變遷與其文化之進步也。故欲知其政治之善惡與其法律之優劣者必先知其歷史之變遷與其文化之進步也。此書之編纂所以為各國人士所必需也。

<h4>全 美 經 國 談 編</h4> <p>是書之編纂所以為各國人士所必需也。其內容之豐富與材料之詳實實為各國人士所罕見也。且其文字之淺顯與圖表之清晰更使讀者易於理解也。故欲知其國情者必先讀此書也。</p>	<h4>陸 近 世 軍</h4> <p>是書之編纂所以為各國人士所必需也。其內容之豐富與材料之詳實實為各國人士所罕見也。且其文字之淺顯與圖表之清晰更使讀者易於理解也。故欲知其國情者必先讀此書也。</p>	<h4>義 學 理 精 財</h4> <p>是書之編纂所以為各國人士所必需也。其內容之豐富與材料之詳實實為各國人士所罕見也。且其文字之淺顯與圖表之清晰更使讀者易於理解也。故欲知其國情者必先讀此書也。</p>
---	---	---

【図1-25】商務印書館印刷所



商務印書館所属の建物は四箇所に分る。一を印刷所とし、二を発売所とし、三を編訳所とし、四を製本所とす。就中印刷所の如きは煉瓦三階造りにて五百坪に余り、我国の印刷所には見難き程の建築なり。館員は職工を合すれば五百人に達し、何れも整然たる分業の下に業務に従事し、其の勤勉なること実に驚くに堪へたり[教育界1904:123]

日本にもないほどの建築物だという。それほどに巨大な印刷所であった。この巨大な印刷所は、いつ完成したのだろうか。大きな問題となるのだ。

17 印刷所の謎

これだけ大規模な印刷所を建築するには、どれくらいの時間と費用がかかるだろうか。少なくとも一年以上の時間はかかるのではないか。一ヵ月や二ヵ月でないことは、誰にでも理解できるはずだ。土地の選択、買収、建物の設計、施工、

資金の調達などなど、どれをとっても短期間にできるものではない。

北福建路の印刷所は、絵図に添えられた説明によると、創業の5年後に建設された。光緒二十八年(1902)である。ところが、よりくわしく何月なのかを明らかにした資料が、ない。

わずかな手がかりは、前出の『外交報』だ。

発行所と印刷所の存在を公表した商務印書館の広告が掲載されたのが、該誌壬寅第24号(第26期 光緒二十八年九月十五日<1902.10.16>)である。すなわち、この時点よりも以前には、すでに印刷所は稼働していたであろうと考える。

火災の発生は、七月十九日(8.22)だった。九月十五日以前といえ、その間わずかに二ヵ月にも満たない。

火災発生から二ヵ月以内に、新しい印刷所に移転しているのはおかしいのではないか。手際がよすぎる。

かりに「巨額の保険賠償を得た」としても、わずか二ヵ月でこの大建築物が完成するわけがない。ましてや、火元であったうえに、保険金の賠償といっても微々たるものだった。資金は、誰がどこから出したのか。疑問はつきない。

火災にあってすぐさま手当ができるのは、できあいの建物を賃借して印刷所に転用することだ。しかし、この建築物は商務印書館専用で、しかも新築である。

もしも、火災の賠償金をあてにして着工したというのなら、これは犯罪にほかならない。いくら夏瑞芳が辣腕であろうとも、まさか犯罪をおかしてまでやるとは思えない。

資金のめどがついてから着工したはずで、それは、少なくとも一年くらい以前のことには違いない。

可能性があるとするれば、そのひとつは、時期的に見て1901年に行なわれた第1次増資である。ただし、この増資は、説明したとおり赤字を埋めるためのものであり、新たな事業を起こすためのものではなかった。

残る可能性はといえば、日本金港堂の原亮三郎である。

原亮三郎は、かねてから中国において教育書を出版する考えを抱いていた。

1901年9月、娘婿の山本条太郎が三井物産上海支店長として上海に着任したのはひとつのいい機会となる。原亮三郎のほうから、山本条太郎に上海における出

版状況についての調査を頼んでいた。商務印書館に投資している懇意の間柄である印錫璋を通じて夏瑞芳が、商務印書館の経営建て直しを山本に依頼する。それでは、と山本が岳父である金港堂主人原亮三郎に紹介すると、渡りに船と原亮三郎が投資を承知する。事実は、このあたりではあるまいか(後述)。

商務印書館と金港堂が、正式に合併調印をするのは、光緒二十九年十月初一日(1903.11.19)である。山本条太郎が上海に着任したのが1901年だから、合併まで約2年間の時間が必要だった。この間に、将来の合併を前提に原亮三郎が商務印書館に対して資金を含んだ援助を前倒しで行なっていたとしても不思議ではない。印刷所新築着工には、原亮三郎の暗黙の了承と保証があったものと考えるのが自然であろう。

つまり、商務印書館が、印刷所、編訳所、発行所の3カ所に分離するのは、既定の方針であった。方針通り工事は進んでいたと考えるのである。ゆえに、火災は商務印書館の首脳陣にとっては、まったく予期せぬできごとになる。印刷所新築と火災は、もともと関係のない事柄だったのだ。

中国側の文献資料では、印刷所新築についてその資金の出所など、いっさい口をつぐんだままだ。何の言及もない。きわめて不自然である。この謎を解くのは、金港堂の原亮三郎から資金が援助されたと考えることだけである。

唐家街(地図) 編訳所の移転(1回目)

唐家街は、唐家弄と表記するものもある。通音する。

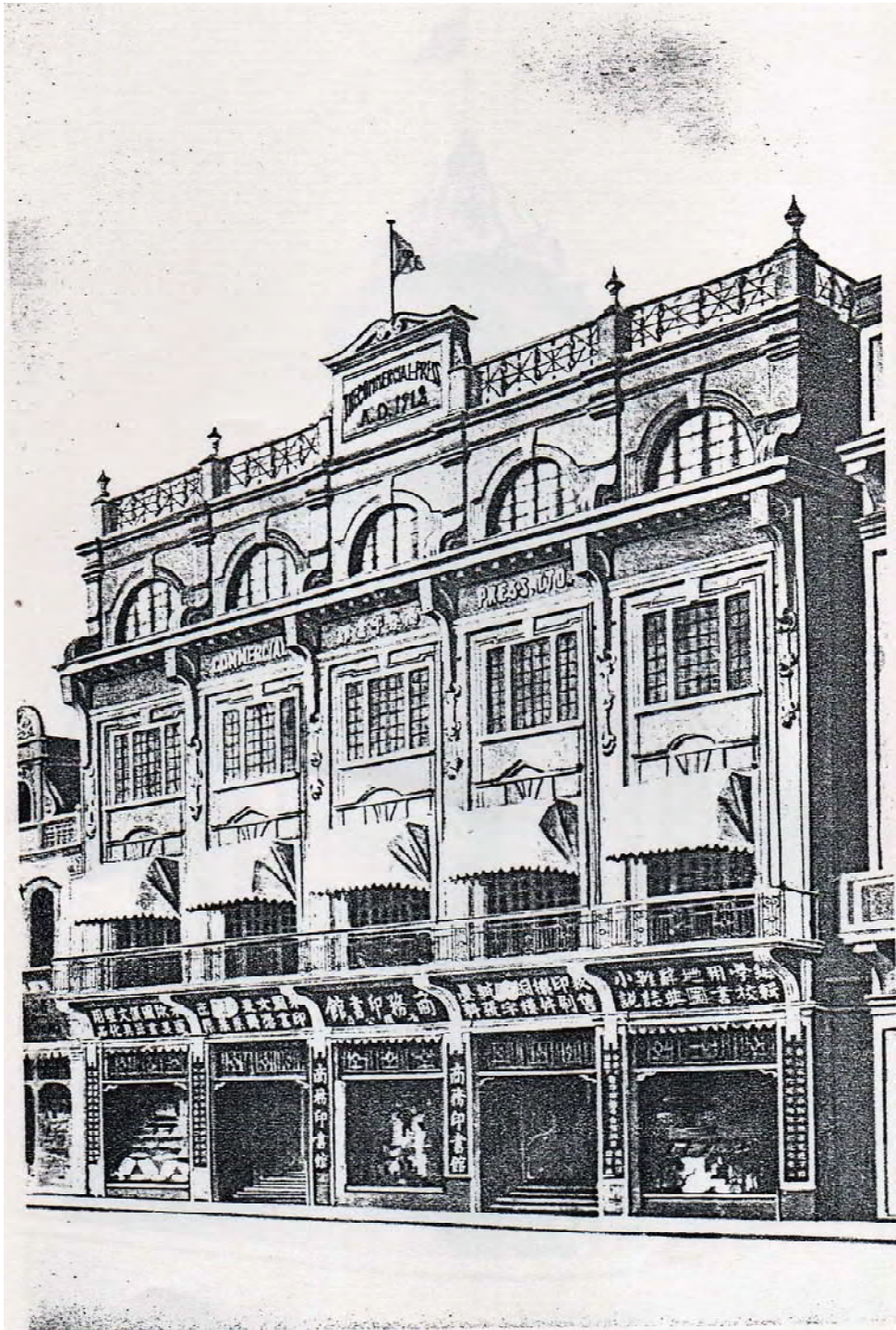
張元濟は、長康里において編訳所設立の準備を行なっていたが、「福建路唐家弄に編訳所を設立し、蔡元培を編訳所長に招き、教科書を編纂主宰した」[張樹年1991:42]。

印刷所の近くに編訳所を設立したことになる。

18 発行所の設立

冠生園北隣171、173番地(1935年当時の番地)(地図)

【圖1-26】河南路棋盤街的發行所



【図1-27】1999年の上海・商務印書館



1999年の商務印書館。もとの建物と較べると4階であるところ、窓の数とも一致する。建て替えたわけではない。見た目が異なるのは、以前の建物はそのままにして表面だけを建材で覆い、ビル風に見せているだけ。中国科技図書公司与一体のように見えるが窓の大きさが同一ではなく、もともとが別の建築物であることがわかる。中国科技図書公司の場所に、以前は中華書局があった。

商務印書館の発行所で有名なのは、棋盤街中市にあるものだ。一般の資料には、この棋盤街の発行所しか登場しない。高翰卿の証言によると、発行所は、棋盤街に設立されるまえに別の場所にあった。それが1935年当時の番地で冠生園北隣171、173番地という[高翰卿1992:7]。

冠生園というのは、食品加工業者の洗冠生が1915年に設立した企業だ。1930年に南京東路に本店を移転している。高翰卿は、河南路というのだが、今、南京東路のあたり(地図)だとしておく。

ここが最初の発行所ということになるが、短期間の使用にとどまったと思われる。火災の発生が七月十九日(8.22)で、『外交報』壬寅第24号(第26期 光緒二十八年九月十五日<1902.10.16>)に載った発行所の広告から推測するに、ほぼ二ヵ月である。

次に移転したのが棋盤街である。

河南路棋盤街直街中市(地図)

棋盤街とは、あらためて説明する必要もないが、河南中路の四馬路(福州路)から五馬路(広東路)までの通りを指す。地図にも「商務印書館発行所」と書かれているのでわかりやすい。民国前後に建物を建てかえた【図1-26】。その建物は、現在に至るまで同じ場所に存在する【図1-27】。

蓬路(地図) 編訳所の移転(2回目)

1903年1月、唐家衝から蓬路へ編訳所が移転した、と朱蔚伯は書く。蓬路のどこらあたりかは、説明がない。印刷所に近寄ったのかと、おおよその場所(地図)を示しておく。

『張元濟年譜』には、次のようにある。「6月15日(五月二十日) 蔡元培は、中国教育会と愛国学社の内部のもめごとが原因で会を辞去し、上海を離れ青島へドイツ語の学習に行き、ドイツ留学を準備する(唐振常《蔡元培伝》)。先生(張元濟)は、ついに商務印書館編訳所所長となる」[張樹年1991:45-46]。これより1918年9月まで、張元濟は編訳所所長を勤めることになるのだ。

以上が、商務印書館の創業から日本金港堂との合弁直前までの状況である。

第 2 章 金 港 堂

【図2-1】原亮三郎（中村忠行提供）



1 永沢金港堂

金港堂は、明治期において各種教科用図書を大量に発行し、文学社、普及舎、集英堂とともに明治の4大教科書出版社とよばれるほどの存在だった。文学雑誌『都の花』『文芸界』などの刊行でも有名な出版社である。出版史、事典などを見れば概略を知ることができる。しかし、現在は消滅してしまっている。また、博文館、春陽堂、新潮社のような社史をもたない。金港堂に関連する資料を寄せ集めることから調査を始めることになった。

京都の河原町御池をあがった（北にむかって行くという意味）ところに「永沢金港堂」という書店がある。創業者永沢信之助は、金港堂編集部で10年間勤務し、1914年に独立開業した[藤井誠治郎1962:94]。名称の通り東京の金港堂と関係がある。

1979年のことだった。永沢信之助のご子息信義が京都にお住まいだ、と私は知った。直接の関係者ではないにしろ、父親より当時の状況をお聞きではないか、なにかご存知ないかと連絡をしたことがある。書店は、現在はビルに改築されているが、まだ平屋だったころのことだ。書店に電話をかけると自宅にいるとのことで、連絡を試みる。当時、信義は、病床にあり話をするのも苦痛のご様子だった。金港堂が中国の商務印書館と合併会社になっていたことなど父から聞いたことはない、初耳である、という不思議なご返事である。金港堂の関係者であっても、商務印書館との合併の事実を知らない場合もあるのだ。

明治から大正にかけて、日本と中国の合併会社であったからには、その公文書が外務省に保存してあるのではないかと私は予想をたてた。金港堂についてほとんど何も把握をしていないのだから、可能性のあるところについては一応の調査が必要だ。東京麻布にある外務省外交史料館で、保存されている書類を検索した。新聞操作のため、あの『国聞報』を外務省が買収した件とか、鉾山関係、紡織関係の日中合併会社に関しての記録は残っている。しかし、どういうわけか金港堂と商務印書館の資料は、見当たらない。なぜ公文書がないのだろうか。真相が明

らかになるには、その後の調査を待たなければならなかった。

2 金港堂の創設者原亮三郎

金港堂は、原亮三郎【図2-1】によって創立された。(以下は、[瀬川光行1893:9/51-61]および[実業之世界社1936:251-255]にもとづく)

原亮三郎は、1848年(嘉永元)に美濃国(岐阜県)羽栗郡平方村に生まれた。父は忠右衛門。代々農を業とし、大庄屋をつとめ、名字帯刀を許されていた土地の名家であり豪族でもあった。本姓は伊藤、幼名を寿三郎といい、原亮三郎と改める([稲岡勝1994b:9]によると亮三と称していたのが正しい。亮三郎となるのは明治13年以降という)。十六歳にして父の職を襲い大庄屋となる。

のち、名古屋に出て、当時、洋学塾を開いていた林欽次の門に入り仏語学を研究する。1872年(明治5)、感ずるところあり志を決し上京し、碩儒藤川三溪の塾に入りもっぱら漢籍を修めた。

家郷を出るにあたり、将来いかなる苦難にあおうとも学資を家にあおがないと心に誓っていた。そればかりか、その妻子を父母に託していたから学資の請求をするわけにもいかず、ついに上京後5、6ヵ月にして学資は欠乏する。藤川の塾を辞め、なす事もなく空しく歳月を送ったため、その後ふたたび大いに困窮した。やむをえず仕官のみちを求めようと郷里での知人駅遞寮出在上田主計を訪問し、同氏の紹介で当時駅遞頭であった前島密にたのみ駅遞寮の日給雇となる。

1873年(明治6)、前島の紹介で神奈川県の史生(下級書記官)に任ぜられる。1874年(明治7)、権少禄に進み、同年、横浜四小区戸長に栄転、一等学区取締を兼任した。

当時、同県下において小学校教科書を出版販売することの有利さを説く人があり(一説に神奈川県知事中島信行)、1875年(明治8)、官を辞し、横浜弁天町に小書肆金港堂を開き、もっぱら文部省編纂の小学教科書を翻刻発売した。

神奈川県のみならず、群馬、茨城、栃木、福島の諸県へも発展する便宜を考え、1876年(明治9)、店舗を東京日本橋三丁目に移した。教科用参考図書、その他

の各種書籍を出版発売し、国内各地に代理店を設ける。1883、1884年（明治16、17）にいたり府下有数の書籍商となり、教科書書肆として筆頭にあげられるようになった。

明治十七年（注：1884）故森有礼氏文部大臣たり一日君に謂て曰く我国の書肆は殆んど書肆の本務を知らざる者なり何となれば則ち内職を主として人の出版したる書籍を委託販売するに過ぎず自ら書を著はし又人の著書を鑑定するの明なければなり斯の如きの有様にて到底善良なる書籍は得ること能はざるへし吾子若し将来盛に教科書を売らんと欲せば宜しく西洋書肆の法を取り自ら編輯の任に当りて以て此欠点を補ふへしと君則ち其言に従ひ竟に金港堂編輯所を設立し当時高等師範学校教授たりし三宅米吉氏を聘して欧米に派遣し之か制度を調査せしめ其帰るを候て泰西の大書肆に倣ひ編輯所と書籍販売店とを対立せしめ三宅氏を編輯所長として費用を惜まず教育社会に著名なる人々を聘して編輯所員となし専ら善良なる書籍を編成せしむるに勉めたり[瀬川光行1893:9/55]

この引用文の中で重要なことがふたつある。

そのひとつは、編輯所を設立したことだ。後年、合併を行なうことになる商務印書館にも同様に編訳所が設立される。金港堂の経験が、商務印書館にも影響をあたえた可能性もある。

もうひとつは、三宅米吉を中心とした高等師範学校との人的つながりだ。国立学校の教員が、一私企業それも関連の深い教科書出版社によって海外に派遣されるとは普通ではない。しかし、見方を変えれば、教科書出版社が教育界の総本山ともいべき高等師範学校とのつながりを求めるのは、当然といえるかもしれない。金港堂と高等師範学校の人的関係には、後に長尾雨山もいやおうもなく含まれるようになる。

金港堂と高等師範学校の教員が、どのように緊密に結びついていたのか、三宅米吉を例にして見ておきたい。

3 金港堂と高等師範学校 三宅米吉を例として

師範学校は、1872年（明治5）、小学校の教育法を研究し、ならびにその教員を養成すべき機関として設立された。1873年（明治6）、東京師範学校と改称、1875年（明治8）、中学教員を養成するための中学師範学科を設置する。1886年（明治19）、高等師範学校と改称し、中等学校の教員のみを養成する機関となり、創立時より行なっていた小学教員の養成をやめる。1902年（明治35）、東京高等師範学校と改称してのち、東京文理大学（1929）、東京教育大学（1949）と変遷していく。

創立40年を記念して、三宅米吉を主任として編纂された『東京高等師範学校沿革略史』（1911）には、校長嘉納治五郎が、その序において「其の大体に於ては正確なるを失はざることを信ずるなり」と書く。三宅自身の編集になるものであるから、特に三宅に関する記述は信頼できよう。該書の彼についての記述を抜粋してみると以下のようなになる。

明治14、15年（1881、1882） 教員となれり（31頁）

明治19年（1886） 此の頃教官中には国府新作、福富孝季、三宅米吉等の如き、私費を以て海外に遊学するもの亦少からざりき（40頁）

同 年 三宅米吉職を辞し（44頁）

明治23年（1890） 三宅米吉も亦先に海外より帰りしが、是に至り再び囑託講師となりしなり（44頁）

明治35年（1902） 文学博士三宅米吉（70頁） / 三宅米吉は明治一四年本校教員となり、一九年辞職し、二三年再び講師となり、二八年以来教授の職に在り。前後凡そ二七年なり（72頁）

「私費を以て海外に遊学するもの」のうちに三宅を入れ、さすがに金港堂の名前は見えない。その間の事情を吉田弥平編『文学博士三宅米吉先生追悼録』（吉

田弥平1930]、鈴木博雄『東京教育大学百年史』[鈴木博雄1978]などによって補う。

三宅米吉は、1860年(万延元)に和歌山藩士三宅栄充^{よしみつ}の長男として生まれた。1872年(明治5)、東京に出て慶応義塾正則部に入學する。塾則が変更になり正則部が廃止となったため尾崎行雄とともに退學した。大学には入らず、父親の任地新潟に移り、官立新潟英語学校教員心得となる。その後、新潟学校百工化学教場舎中監事心得、千葉県師範学校教師を経て、1881年(明治14)に東京師範学校教員(附属小学専務)となる。化学と習字を教えた。

1883年(明治16)、「かなのくわい」常議員となり、雑誌『かなのまなび』を創刊する。つづいて『かなのしるべ』(1884年 明治17)、『かなのざつし』(1885 明治18)を編集し、国字国語の改良に努めた。1886年(明治19)、『日本史学提要』第1輯を普及舎より発行。該書について鈴木博雄は、「国史の先史部分を、考古学的方法を用いて科学的に捉えようとしたもので、当時の漢学流の歴史学や漸く台頭しかけた社会史、文明史、開化史などに多大な影響を与えた史学史上の名著である」[鈴木博雄1978:161]という。

1886年(明治19)、「私費を以て海外に遊學する」とは、年譜の該当箇所を見ると「此の年東京師範学校最初の留學生候補者に挙げられしかど故ありて果たさず」[吉田弥平1930:4]だったからだ。その「故ありて」というのは、師範学校の卒業生ではないためだという[鈴木博雄1978:162]。

それに嫌気がさしたのか、同年4月に金港堂編輯所評議役ならびに取締主務になってしまった。とはいえ、東京師範学校の教員はつづけていたようで、「三宅米吉職を辞し」たのは、同年5月に東京師範学校が高等師範学校に改革され自然廃官となったためだ。つまりは、学校改革の際に再任用されなかったということか。同年7月、教育事業視察のために欧米諸国へ出発したのは、金港堂の後援になる。

1年以上の海外視察を終え、1888年(明治21)に帰国すると、三宅米吉は、金港堂編輯所長となった。みづから雑誌『文』を創刊し、かたわら『都の花』(1888 明治21-1893 明治26)を発行させている。同年末には、金港堂取締となる。おもな役職としては、大日本教育会評議員(1888 明治21)、帝国博物館列品取調(1890 明治23)、東京人類学会幹事(同年)、金港堂書籍株式会社副社長(1891 明治24)

を歴任している。

大日本教育会は、原亮三郎が1878年（明治11）頃、西村貞らとはかつて教育の普及策を講じるために設立した東京教育会の後身である。同会に原亮三郎は、毎年、相当額の寄付を行なっている。

1890年（明治23）、高等師範学校より日本歴史の講義を囑託されたのが、上記「再び囑託講師となりしなり」である。

1895年（明治28）3月、金港堂書籍株式会社取締役および編輯所長を辞任、4月に高等師範学校教授となった。1896年（明治29）、文部省図書編纂審査委員となるなどその後も重要役職を歴任するがここでは省略する。

以上見たように、三宅米吉が欧米に留学したときの身分は、「原亮三郎君伝」に言うような高等師範学校教授ではなく、金港堂の社員としてであった。年譜の上では金港堂を辞職してはいても、なんらかの関係があるかのような書き方をしたものもある。たとえば、「当時全所（注：金港堂編輯所）に在勤したる編輯員にして其後任官して今は要路に立てるもの数十人の多きに達し又現に今日其編輯所員たる者数十名にして三宅米吉、能勢栄、中根淑、庵地保、新保磐次、加藤駒二、渡辺政吉、堀均一氏等濟々たる多士皆一堂の中に集まれり」[瀬川光行1893:9/55-56]だ。新保磐次も、三宅米吉と同じく高等師範学校の教官講師に就いたことがある（1886）人物である。

原亮三郎は、編輯所に三宅米吉をすえ、小学および中学の各教科書をはじめ、法律、政治、経済、理化、哲学などの書籍を多数発行した。かつて文部省編輯局長であった伊沢修二をして、今、文部省の総力をあげても金港堂に及ばない、といわしめたという[瀬川光行1893:9/56]。

原亮三郎は、1887年（明治20）に創立された東京書籍出版営業組合の頭取を、翌1888年（明治21）の2年間つとめる。また、1900年（明治33）、日本銀行の監事に選出されたため金港堂社長の座を辞し、長子亮一郎に譲った[実業之世界社1936:254]。

4 金港堂の方向転換

金港堂は、文芸の分野においても活躍した時期がある。

二葉亭四迷の『浮雲』を出版（1887 明治20、1888 明治21）したこと、あるいは文学雑誌『都の花』を創刊するにあたり、山田美妙を硯友社から引き抜いたことなどが有名だ。

「山田はこの年（注：1888 明治21）の秋頃、金港堂の中根香亭から、新しく大規模な文学雑誌を出したいから主筆として編輯を引き受けてほしい、と相談を持ちかけられてゐた。当時の最も有力な出版社である金港堂が新しく文学雑誌を出し、主筆として二十一歳の山田を迎へるといふのは破天荒なことであつた」
[伊藤整1954:57]

「この年の十月頃、尾崎紅葉と石橋思案とは、何とかして美妙を硯友社に引きとめようと考へた。石橋が美妙の家を訪ねたが、留守だといふことで逢はず、尾崎が手紙を出したが、それにも返事がなかつた。尾崎は遂に腹を立てて猛烈な絶交状を美妙に送つた。美妙と硯友社との関係はそれで終わりになつた。それは美妙の立場からすると口うるさい無名作家の集団から別れたといふ意味であつた。そして噂にのぼつてゐた金港堂の新雑誌「都の花」の創刊号はその十月の末に本屋の店頭に現はれた」
[伊藤整1954:61]

古い友人を捨てるほどの価値がある引き抜きであつたわけだ。当時の金港堂をめぐる文芸界の状況は、伊藤整の上の文章を見れば理解できる。

1891年（明治24）12月、改組され金港堂書籍株式会社となった。ただし、大株主、社長、取締役などは基本的に原一家の者で独占されている。稲岡勝が株式会社となった金港堂について、「原の個人商店に株式会社の衣裳を着せたというのが正確なところかもしれない」
[稲岡勝1994b:98]「金港堂は株式会社の形はとっているが、事実上は個人商店と変りはないようである」
[稲岡勝1994b:99]と指摘している点は、重要である。

形のうえでは会社であるが、実質は家族企業にほかならない、というのは、上

海の商務印書館を指していった表現である。会社の実態は、金港堂となんらかわるところはなかったということだ。商務印書館は、夏瑞芳が取りしきっており、金港堂の方は、原亮三郎がまとめている。両者に合併の話が持ち上げれば、また事実持ち上がるのだが、社主個人にやる気さえあれば、簡単に決断されたことだと想像される。会社と個人の区別がつかない形態であったならば、なおさらだ。

この頃から金港堂の経営が思わしくなくなってきたらしい。経営がうまくいかなければ、当然のように経営方針についての対立が内部に発生する。

経営方針の対立とは、いってみれば本来の教科書路線とそれに対する文芸路線だ。原亮三郎らは、この時点でいったん文芸路線を捨て、従来の教科書路線を選択した。

たとえば、三宅米吉が創刊し当初評判になった『文』は、はやくも1890年（明治23）には廃刊となっている。『都の花』も1893年（明治26）に休刊し、さらには、1894年（明治27）金港堂編輯所が閉鎖された。帰朝後の三宅米吉が腕をふるい、各種書籍と雑誌を編集発行していた場所だった。三宅が翌1895年（明治28）金港堂を退職して高等師範学校教授に就任したのもその流れのなかのひとつだ。

教科書採択には、利幅が大きいだけ熾烈な競争があった。教科書出版社の教育関係者への採用運動が激化するのとは予想されるところだ。教科書出版社からいえば、金を使うし神経もすり減らす。新聞報道で批判される。嫌気のさした原亮三郎は、さらに経営方針を変更しようとした。

稲岡論文から引用する。

（1）小学校教科書の出版を別会社に委譲する、またこれで浮かせた余力をもって、（2）検定だけで自由採定の中等教科書類への進出を強化する、（3）雑誌類出版の復活、（4）世間普通の図書類の出版強化、をはかり、更には（5）“内地の競争余地の少なきを見て海外に発展の地を求める計画をしはじめ”た……[稲岡勝1994b:118-120]

金港堂の「海外に発展の地を求める計画」とは、中国大陸へ進出することを意味する。これに巻きこまれるのが雨山長尾楨太郎である。

5 雨山長尾楨太郎

長尾楨太郎の名前を私が最初に見たのは、陸費逵の文章だったかもしれない。

「文明（書局）が創業した後、商務（印書館）ははじめて教科書を編印したが、張元濟、高鳳謙を中心に、日本人長尾^{マツ}楨太郎、加藤駒二らを顧問に任じた」[陸費逵1932:15]。この長尾楨太郎が雨山だ。また、「教科書之発行概況」の1902年の項目に、「商務印書館は高鳳謙を招聘し編集所長となし、蔣維喬の計画により日本人長尾、小谷、加藤の3名に協力を請い、劉崇傑が翻訳担当、高鳳謙、張元濟、蔣維喬、莊俞が編集を担当し、半年を経て『最新初小国文教科書』1冊が成った」とある[国民政府1953:228]。

ここにある1902年は間違いで、1904年でなくてはならないし、編集には半年どころか2ヵ月半でしかない。だが、そんな誤記よりも、私が調査をはじめた当時は、目についた文章に長尾（楨太郎）、小谷（重）、加藤（駒二）という日本人の名前があるだけで、なにか手掛かりになるような気がしたものだ。

長尾楨太郎は、その号雨山の方でよく知られている。夏目漱石が第五高等学校時代に漢詩を添削してもらった同僚だ。荒正人『漱石研究年表』の明治30年（1897）12月の項目に、「前年からよく漢詩を作り、同僚の漢文教授長尾楨太郎（雨山）に添削を求める（三十二年四月頃まで）」[荒正人1974:125]とある人物である。長尾雨山についての注をみれば、「元治一年（一八六四） - 昭和十七年（一九四二）。香川県高松生れ。帝国大学文科大学古典科第一回卒業生。明治三十年九月九日第五高等学校漢文科主任に任ぜられ、明治三十二年十月三十一日高等師範学校に転じる」[荒正人1974:125]と書かれる。

帝国大学を卒業し、第五高等学校、高等師範学校の教授となった人物が、どういう経緯で上海に渡り商務印書館の顧問となったのか、金港堂との関係は何だったのか。大きな謎として私の目の前に浮かんできた。

中村忠行が示した断片が、その後の調査にとって大きな意味をもつことになった。すなわち「就中、商務印書館は、これ迄、単なる印刷専門の商社であるに過

ぎなかつたが、この年（注：1903）以来、出版にも手を染めることとなり、多年小学校教科書の出版を以て、我が出版界に雄飛してゐた金港堂と提携して合併組織に改め、新たに編輯部を設けると共に、折柄教科書疑獄事件に失脚して悲運を歎つてゐた元高等師範学校教授長尾^{ママ}慎太郎（雨山）を招き、坪内逍遙編『小学読本』以下各種の教科書はじめ「説部叢書」・「林訳小説叢書」といつた全集物まで、続々と翻訳・出版したのである」[中村忠行1962:56]

長尾雨山が「折柄教科書疑獄事件に失脚し」とは、どういうことなのか。当時、私が目にした中国の文献にも日本の文章にも、長尾雨山が教科書疑獄事件に関係しているとは書かれていないのだ。文献はあったのかも知れないが、私の目にふれない。ますます謎が深まるのだった。

長尾雨山と鄭孝胥

長尾雨山『中国書画話』（筑摩書房1965.3.10）には、長尾正和著「著者略歴」がついている。関係部分のみを引用し（ルビは省略）、それでもって長尾雨山のおおよそを示すことに替えたい。

一、長尾甲、字は子生、通称楨太郎、雨山、石隠、无悶道人、睡道人などと号し、書齋を无悶室、何遠楼、思齊堂、艸聖堂、漢磚齋、夷白齋などと称し、居を猗々園、蘆中亭、栢園などといった。

一、元治元年（1864）九月一八日、讃岐高松藩士・長尾柏四郎勝貞（号・竹嬾）の長子として高松で生まれた。幼時から父に従って漢学を修めた。

一、明治二一年（1888）東京帝国大学文科大学古典講習科を卒業。学習院教師。文部省専門学務局勤務。

一、同 二二年（1889）東京美術学校教授兼務。

一、同 三〇年（1897）第五高等学校教授。

一、同 三二年（1899）東京高等師範学校教授、東京帝国大学文科大学講師。

一、同 三六年（1903）上海に移住、商務印書館に入り、編訳を主宰。

一、大正 三年（1914）帰朝し京都に寄寓[長尾正和1965c:379]

「三六年（1903）上海に移住、商務印書館に入り、編訳を主宰」とある箇所は、よく見れば、奇妙だということができよう。なにも説明がないのだ。上海へ「留学」「出張」したわけではない。「旅行」でもない。「移住」なのだ。上海での生活は、あしかけ12年、実質11年間にわたった。教授の椅子を投げ捨ててまでして上海へ行った理由は、なにか。長尾雨山に上海「移住」を決心させたものは、はたして何であったのか。

該書に収録された神田喜一郎「序」に見える雨山上海行の前後部分を示しておきたい。長尾雨山を直接知る人の証言であるからだ。

雨山先生のごことは、ここに更めて紹介する必要もないと思うが、わたくしの承知している二三の事実をしるしておこう。先生の東京帝国大学における同学には甲骨学を以て知られる林泰輔、『史記会注考証』の大著を遺した瀧川龜太郎の諸博士があった。先生は特に文学の研究に専念し、当時から天稟の詩才を謳われた。たまたま清国の公使館員として東京に来任してきた鄭孝胥を驚かした逸事は余りにも名高い。また岡倉天心と肝胆相照し、明治二十二年には天心と共に東京美術学校の創立に尽力し、その教授となり、更に雑誌『国華』の発刊にも多く画策せられた。その後、熊本の第五高等学校教授として同地に赴任し、夏目漱石と同僚であった。当時先生は漱石と親交を結ばれ漱石も先生に漢詩の添削を乞うたという。同三十二年に東京高等師範学校教授に任じ、東京帝国大学講師を兼ねられることになったが、三十六年、遠く上海に移住、同地の商務印書館に入って、編訳事業を主宰、革命前の中国初中等教科書の編纂は、専らその手に成った。大正三年の末に帰国、京都に居をとし、爾来、昭和十七年四月に病没せられるまで、優游自適、専ら詩書三昧の生活をおくられた。京都時代に主として往来せられたのは、内藤湖南・狩野君山・西村天囚・鈴木豹軒、等の諸博士で、東京時代以来の旧友が多かった。……[神田喜一郎1965:3-4]

ここに見られる「商務印書館に入って、編訳事業を主宰」という箇所からか、雨山を編訳所所長とする文章もある。上海での活躍は推測できるが、長尾雨山が

上海へ行くことになった経緯については、「著者略歴」と同様に口をつぐんだままで。

また、同書の吉川幸次郎「解説」にも、長尾雨山が上海へ赴いた理由を説明をしない。

長尾雨山の上海行については、何か「はばかる」ことがあり、それで言及がないのではないか。そう考えれば、中村忠行の記した「折柄教科書疑獄事件に失脚し」が、その「はばかる」ことではないか、と思いつくのに時間はかからなかった。

教科書疑獄事件を述べる前に、神田喜一郎のいう鄭孝胥との交遊を見ておこう。

鄭孝胥のこと

鄭孝胥と長尾雨山のふたりに長年の交遊があったことは、周知の事実には属する。彼らが知りあうのは、東京であった。委細を述べる前に鄭孝胥について簡単に紹介しておきたい。

鄭孝胥(1860-1938)は、福建省閩侯県(福州市)の人。字は、蘇戡、蘇龕など。号は、太夷、海藏。1882年の郷試で挙人となる。1891年、李鴻章の子李經方が出使日本大臣となったのに従い日本東京で副領事を勤め、1893年より神戸兼大阪領事に任ぜられた。1894年の日清開戦により帰国。張之洞の幕に入ったのち、京漢鉄路南段総辦、広西边防督辦を歴任する。1905年、上海に海藏樓をもうけて居住し、鉄道、金融、商工、新聞、出版、教育などの新興事業に参加、上海での預備立憲公会会長にも選ばれている。錦愛鐵路督辦、湖南布政使に起用されるが、辛亥革命後十数年間は上海に門を閉ざす。1932年、満洲国が設立されると國務總理となった。「清朝の遺臣といわれた古い型の人物で、儒教の王道主義を強調し、また文人として民国一流の詩人、書家であった」[百瀬弘1959]と評される(鄭孝胥の略歴については、以下のものによった。[鄭孝胥1993][橋川時雄1940:713][賈逸君1993][陳貞寿1984]。また、[狩野直喜1984:267-269]に鄭孝胥について述べた部分がある)

鄭孝胥は、二十三歳(1882)から七十九歳(1938)まで五十六年間におよぶ日記を残した。商務印書館研究には、重要な意味を持つのだ。

鄭孝胥の日記

鄭孝胥に「海藏樓日記」があることを知ったのは、勞祖徳「鄭孝胥日記中的出版史料 讀《商務印書館大事記》」（『商務印書館館史資料』之四十二 1988.11.19）を読んだからだ。上記鄭孝胥の略歴には触れられていないが、彼は、民国初年、上海商務印書館の理事会（原文：董事會）主席をつとめたことがある。汪家燊整理「解放以前商務印書館歴屆負責人（董事長、總經理、總編輯）」には、以下のよう
に書かれている。

1. 董事會主席

1903-1909年初、有董事四名、不設固定會議主席

1909年3月-1912年5月 主席 張元濟

1912年6月-1913年5月 主席 鄭孝胥

（以下略）[汪家燊1982b:20-21]

だから日記には、夏瑞芳暗殺、商務印書館からの日本資本回収などの記述があるという。ならば長尾雨山との交遊についても言及されているはずだ。その出版を長く待っていた。

中国歴史博物館編、勞祖徳整理『鄭孝胥日記』全5冊（北京・中華書局1993.10）としてようやく世に出た該書から、まず長尾雨山に触れた部分を紹介しよう。

日記の中の長尾雨山 日清戦争まで

東京滞在中の鄭孝胥は、「説文」を読み、英語を習い、作詩をし、ビリヤードを行ない、茶屋通いをするなどの毎日であった。ただし、ビリヤードが頻出するのは前半時期、東京にいた頃である。一時帰国をはさんだ後、神戸兼大阪領事に任じられると公務が忙しくそれどころではなくなったようだ。

鄭孝胥が一流の詩人、書家であれば、日本人との交流が増えて感じることも生ずるのは必然であろう。

光緒十七年八月十九日（1891.9.21）

……夜、李公使の宴に集まった書き物をめくってみると、日本人の詩はみなひどく劣っており、西島醇なる者の文がまだ理解できる。中国人の作品にいたっては、評論するにたえない[鄭孝胥1993:234]

という記述が見える。日本人の作のみならず中国人のものも同じくダメというのは、一流の詩人らしさのにじむ箇所だ。

吉川幸次郎は、「そのころ新しく開設されたばかりの清国公使館は、当時の日本人のいわゆる漢学を軽蔑するのを、習慣としていた。侮蔑はゆえのないことでなかった。当時の日本の漢学者文人は、当時の中国人から見ればはなはだしく時代おくれの、明の学問、詩、書、画を、祖述するのが、一般であったからである」[吉川幸次郎1965:360]とのべている。日本人が外国語で、それも古語を使用して詩を作るという不自然さを考慮に入れれば（当の本人はそうは思っていないかもしれないが）、作風の違いだけが軽蔑の原因ではなかろう。鄭孝胥の日記には、漢語として成り立っているのかが問題にされているような気がする。だからこそ、一般の水準を抜いた日本人が出現すれば、それは鄭孝胥にとっては驚きになる。

1891年の冬、長尾雨山（1864-1942）が東京に滞在中の鄭孝胥を訪ねてきた。

鄭孝胥日記には、次のように書かれている。

十一月十二日（1891.12.12）

朝、「資治通鑑」を読む。はなはだ寒い。日本人長尾楨太郎が会いに来る、張袖海の紹介。その人、号は雨山、身なりはまったく質素で、「詠懐」五詩を礼物とする。筆談すれば、詞はとても流暢で水野貫竜に比べることができ、西島よりもうまい。またつづけて数首を出したが、みなすばらしく文句のつけようがない。「詠懐」詩にいわく、「飯カゴにおわれて忙しく、平素は楽しむひまもない。昂然として世間に合わず、世人は私を傲慢という」と。また、「聖人は死してすでに久しく、大盗のタネはつきない。老子のいう治法はゆるやかで、無為は天理ではない」ともいう。筆づかい構想ともによく、

養成する価値がある。昼過ぎまで話して帰る。……張袖海が来て座る。この日西島醇が来るが、会わず[鄭孝胥1993:255-256]

張袖海は、東京在住の中国人で、公使館に出入りをしていたと思われる。鄭孝胥と行動をよく共にしているところを見れば、公使館員かもしれない。西島醇は、日本人。漢語ができたことは、前述の引用に見える。

長尾雨山の「著者略歴」によると、1888年（明治21）に東京帝国大学文科大学古典講習科を卒業し、学習院教師、文部省専門学務局に勤務するかたわら、1889年（明治22）、東京美術学校教授兼務、と書かれている。東京美術学校教授となったのは、雨山二十六歳の時であった。かぞえれば鄭孝胥と会う1891年（明治24）は、雨山二十八歳、鄭孝胥三十二歳となる。鄭孝胥は、四歳年下の、それも日本人の作った詩を絶賛したことになる。長尾雨山の学識才能をうかがうに十分であろう。

吉川幸次郎は、つぎのように書く。

そうして長尾氏は、駐日清国外交官の一人と、終生の刎頸の交わりをむすぶ。鄭孝胥氏であって、やがて今世紀中国旧詩壇の驍将となった人であるが、若い二人の交遊は、東京ではじまった。当時の鄭氏の詩の一節にいう、「此の都にて文士と号するものは、浮躁にして多くは実ならず。盛名あること頼襄の如き、語助も未まだ完悉ならず」。「其の粗ば可なる者を求むれば、百に未まだ一つを得ず。吾れに善きものに長尾有り、後より起こるも実に美質」。長尾氏の漢文の文法の正しさは、頼山陽の及ぶところでない、というのである[吉川幸次郎1965:361]

鄭孝胥の日記から理解できるのは、長尾雨山のすぐれた才能ばかりではない。才能の素晴らしさとはどこかチグハグな質素な身なりである。鄭孝胥の印象に残った長尾雨山の「身なりはまったく質素」から思いだすのは、つぎのような吉川の回憶談だ。

明治の初年、東京で白面の書生であったころの長尾氏が、清国公使館を訪問したときの逸話を、私はかつて狩野氏からきいた。大清帝国の公使黎庶昌は、長尾氏が、ひとえの着物をきているのをいぶかり、寒くはないかと、筆談で問うた。長尾氏は即座に筆を走らせ、昂然と答えた。「寒士八寒二慣ル、ナンゾ衣ノ単ナルヲ怕レンヤ」、寒士慣寒、那怕衣単。突差の応答が、寒、^{かん}単と、韻をふんでいるのに、公使は驚倒した、と[吉川幸次郎1965:360]

銭実甫編『清季新設職官年表』（北京・中華書局1961.7）の「出使各国大臣年表」を見ると、黎庶昌が日本に派遣されたのは1881年から1884年までと1887年から1890年までの前後2回になっている。「白面の書生」というから、時期的には1887-1890年のころかと思う。長尾雨山の質素な身なりというのは、学生のころからのものらしく、教授になっても変わらなかったようだ。

鄭孝胥と長尾雨山の最初の出会いから、親密な交際がすぐさま始まったかという、日記を見る限り、そうでもない。

十一月十六日（12.16）

長尾、手紙にて謝す[鄭孝胥1993:257]

十一月廿九日（12.29）

国華社に行くとき長尾が迎え入れ、しばらく座って、著書「儒学本論」をもつて帰る[鄭孝胥1993:259]

「儒学本論」は、刊行されることのなかった長尾の原稿である。このあと、鄭孝胥は約三ヶ月の一時帰国をした。日本にもどってきてだいぶ時間がたったころポツポツと交流が続く。

光緒十八年九月初四日（1892.10.24）

……夜、長尾植太郎来て話す[鄭孝胥1993:325]

十月十五日（12.3）

……午後、張袖海のところへ行き、同行して水野を本所区小梅瓦町八十一

番に訪ねる。浅草をまわり隅田川に出て到着した。貫竜は病にふしており、私が来たのを聞いておおいに喜び、出てきて拝す。長く話し、また蕎麦を用意してくれた。辞して張と国華社に行き長尾雨山を訪ねるが、ちょうど外出しており、しばらく待つと帰ってきた。月はすでに出ており、亀清第一楼に登ると、隅田川をのぞんで霞んだ月が美しく、両国橋が近くにあつてぼんやりとした光におおわれ、水中に橋影と灯火がちらつくのが見えるだけだ。長尾が私に言うには、ここは華麗で東都の揚州であると。三妓を呼ぶ。小栄、小福、小吉、皆よろしからず。長尾は詩がとてもよく、即座に数首を連作し韻をかさねる。張袖海がこれに和し、私も已むを得ず書いていわく、「子野（張袖海の号？）は歌を聞きどうしようかと叫び、二君の句は人をとても感動させる。蘇龕（鄭孝胥の号）は、今夕君のために酔い、両国橋のたもとで月の下を過ぎる」。「酒家が川端に船のように集まり、我が客は世俗にとらわれず、地上に降り立った仙人である。私は酔ったので月の明るいうちに帰りたい。李白のようにわざわざ盃をあげて天に問うこともない」と。……

[鄭孝胥1993:330]

鄭孝胥は、長尾雨山と会うたびに雨山の詩に感嘆の声をあげている事実に注目しておきたい。雨山が鄭孝胥より一方的に学恩を受ける立場であったなら、その交流はそう長くは続かなかつたかもしれない。だが、鄭孝胥も一目をおく才能を雨山が有していたからこそふたりのあいだには厚い信頼関係が生まれたともいえるのだ。

これ以後、鄭孝胥日記には、長尾雨山に関するあまり長い記述は見えない。

十一月初七日（12.25）

役所に行く。花園町へおもむき長尾を訪ね長く話しこむ。日本人で田中三四郎というものが同席する。長尾は日本林谷の刻印をひとつ贈る。文にいわく「撫孤松而盤桓」（陶潜）と。また彼の父竹懶^{ママ}の詠琴詩卷子を示す。詩はとてもさっぱりしていて俗ではない。さらに中国人王克三の画梅一幅を出すが、運筆は俗である。客は帰り、長尾は湖辺へちょっと飲みにいこうとさそ

う。私と一緒に副島のところに行こうと請うが、断わる。……[鄭孝胥1993:333]

竹嬾は、雨山の父柏四郎勝貞の号。

十一月初九日（12.27）

……長尾がひとりをつれて来る。姓は牧、名は野、号は静斎、儒者である。長く座り、一緒に出て湖月楼で飲む。春吉、春楽の二妓を呼ぶ。夜中に分かる[鄭孝胥1993:333]

日本人で「野」という名前は考えにくいから、「牧野」という姓の間違いだ。

十一月十五日（1893.1.2）

役所に行く。水野、浅田、長尾、西島らへ賀年の書を書く[鄭孝胥1993:333]

十二月初四日（1.21）

……夜、長尾が来る。副島が話をしたいと私を明日招待するというが、断わる[鄭孝胥1993:337]

光緒十九年一月二十三日（3.11）

……長尾雨山が来る。長く座る[鄭孝胥1993:344]

二月初六日（3.23）

曇り。役所へ行く。午後、長尾雨山がその友黒木欽堂（長尾雨山「欽堂黒木君墓銘」『東洋文化』第40号<1927.8.1>がある）名は安雄なるものを連れて来る。夕方まで話す。長尾は私の送別の宴をしたいというが、感謝して断わる。ふたりが言うには、西京の文士で知っているのは、大阪では、藤沢恒、号南岳、古文をよくする。五十川詡堂、また古文をよくする。神戸では水越成章、号耕南、詩がうまい、亀山節宇、また詩をよくする。西京では江馬天江、小野湖山、みな詩をよくする。私のために紹介の手紙を送るという。…
…[鄭孝胥1993:345]

二月十三日（3.30）

.....四時、秋樵と両国橋へ行き長尾を訪ねるが、会えず。.....[鄭孝胥1993:346]

送別の話がでてくるのは、このあと鄭孝胥は、船で横浜を発ち神戸へ向うからである。以下は神戸での日記だ。

三月二十五日(5.10)

.....長尾雨山が来る。引き止めて食事を出す。里差遜が館に着く。夜、洪韻松、長尾と食事をする[鄭孝胥1993:352]

里差遜は、音訳すればリチャードソンとなる。三月二十三日(5.8)に英語の教師として推薦された「密色士里差遜」の名前が見える。こちらは、リチャードソン夫人であろう。

光緒二十年二月二十一日(1894.3.27)

.....長尾楨太郎と牧野が来る。手合亭で食事をし、妓女を呼ぶ。.....[鄭孝胥1993:402]

1894年(明治27)8月、日清戦争が始まった。鄭孝胥は、同月、帰国する。長尾雨山との交遊は、しばらく途絶える。

鄭孝胥が中国にあったころ、日本の長尾雨山を襲った事件が発生した。これこそが、教科書疑獄事件である。詳細を知ってみると、なるほど雨山の家族旧友知人たちが沈黙を守るはずだと合点がいったのだ。

6 教科書疑獄事件

教科書疑獄事件とは、明治末期に発生した小学校教科書の採用決定をめぐる教科書会社と教育関係者との贈収賄事件である。教科書国定化の引き金となった事

件としても有名だ。

教科書の採択

小学校教科書は、1883年（明治16）までは各府県が文部省に採用教科書を届け出るだけでよかった（開申制度）。すると民間に雑多な教科書まがいのものが出版されたため、認可制度に改めるなど、文部省は、徐々に規制を強化する。

1886年（明治19）、小学校令で小学校教科書は、文部大臣の検定を受けたものに限ることにした（検定制度）。検定を通過した教科書を府県で採用するための教科用図書審査委員会を設置する。これが、不正がはびこる原因となった。

明治30年代に必要とされた小学教科書は、尋常科4年、高等科4年あわせて1年間2,900万冊といわれる。その内訳は、以下ようになる。尋常科の読本（標準価格1冊12銭）800万冊、修身（1冊15銭）400万冊、習字800万冊、計2,000万冊。高等科の読本（1冊21銭）180万冊、修身（1冊25銭）90万冊、習字180万冊、地理、歴史、理科各90万冊、図画180万冊、計900万冊、総計2,900万冊[木村毅1957:161-162]だ。

木村毅のあげた必要教科書数は、尋常科400万人、高等科90万人、合計490万人という数字をもとに算出されている。木村は490万人という数字をどこからひっばってきたのか明示していない。だから信頼できないとこれを疑問視するむきもある。しかし、『日本近代教育百年史』第4巻（国立教育研究所1974.3）の15頁と854頁の小学校在学者数を計算すると、明治30年代の平均は、約483万人となる。木村の提示した490万人とそれほどかけはなれたものではない。

教育界の腐敗が制度に起因するとは、事情通の言葉である。

「一府県下に五万乃至七万円の金額を散ずるも六分通りの教科書を採用されるれば一年乃至一年半にて其の損金を補ひ三年乃至三年半には全く純益を得る割合なれば種種なる運動を為すも無理ならず」

教科書会社がいくら賄賂を贈ろうが、教科書が採用されれば十分に利益を、それも短期間に得ることができる仕組みだというのだ。

「全国の小学教科書に中学、師範等各種学校の教科書を合するとき是一年の売上総額優に四百万円以上に達す可し然るに此教科書は版權所有者の手より小売店

に渡す歩合は大概九掛にして製本の実価は三割乃至三割五分に過ぎず故に此兩者を併せて四割乃至五割を除くの外は版權者の利益となるものなれば云々」[大阪朝日新聞1902.12.28]と新聞に報道されるくらい規模が大きかった。

しかも、文部省検定済みの教科書が府県審査委員会の検討をへて採用されると、1887年（明治20）の省令2号小学校教科用図書検定規則3条「検定ヲ経タル図書ヲ教科用図書トシテ用ヒ得ヘキ年限ハ免許証下付ノ日附ヨリ起算シテ五ケ年トス」[宮地正人1969:353]により、1府県で5年間にわたる独占権が与えられたと同じであった。

教科書採択をめぐる醜聞

金港堂、集英堂、普及舎、富山房、国光社など20社たらずの会社がしのぎを削った。採択をかけ、採用の権限をもつ府県審査委員会に対して贈賄などあらゆる手段をとったのは、言ってみれば、自然のなりゆきであろう。

教科書販売で最大の成功を得ていたのが金港堂だ。1例をあげると、別に示した表は、1902年（明治35）に各府県で修身から唱歌まで、どこ発行のものを採用しているかの一覧である。金港堂発行の教科書は、64の道府県で採用されており、他を大きく圧倒していることがわかる。

発行者別採用教科書府県数一覧表

発行者	教科							合計
	修身	読書	習字	図書	作文	算術	唱歌	
普及舎	16	11	9	2				38
文学社主小林義則	2	7	1	25	1	2		38
金港堂	20	19	9	11		5		64
集英堂	14	10	6	4		11		45
西沢之助(国光社前社長)	6	2						8
富山房		8	5					13
国光社		1	1	1			2	5
阪上半七	2		1			1		4
小野英之助(富山房前社長)	1							1

教科書売り込みにまつわる醜聞を、文部省は、放置していたわけではない。1901年（明治34）、小学校令施行規則に次のように追加した。

第六十三条ノ二 小学校教科用図書ノ審査又ハ採定ニ関シ其前後ヲ問ハス左ノ各号ノ一ニ該当スル所為アル者ハ二五日以下ノ重禁錮又ハ二五円以下ノ罰金ニ処ス

第一号 直接又ハ間接ニ金銭物品手形其他ノ利益若クハ公私ノ職務ヲ官吏学校職員若クハ運動者ニ供与シ又ハ供与セン事ヲ申込ミタル者又ハ供与若クハ申込ヲ承諾セン事ヲ周旋勧誘シタル者並ニ供与ヲ受ケ若クハ申込ヲ承諾シタルモノ（以下略）

第六十三条ノ三 小学校教科用図書ノ審査又ハ採定ニ関シ刑ニ処セラレタル者アルトキハ其ノ者ノ運動ノ目的タル図書ノ審査又ハ採定ヲ無効トス（以下略）[万朝報1901.1.13][宮地正人1969:357]

しかしながら、文部省の運動禁止令は、始めからその効果を疑われていた。

同年1月13日付『報知新聞』は、上記の追加規則を紹介したうえで、「改正通り果して之を励行するの手腕現任当局者に在らば書肆に取りては実際容易ならざる打撃を被るべし」と皮肉っている。

事実、「教科書運動一斑／教科書問題に関する醜聞は久しきものにて文部省も之を取締る為め省令を発したるが事実の上に寸効無く愛媛県に於ては今回全国に率先して教科書変更の先登を為せり而して其変更により利益を受くるものは都下の書肆金港堂にして……」（1.19）、「運動禁令と文部省／……禁止令が出で、間もなき今日なれば審査会委員中にも収賄運動を為すもの少からず各書肆も禁止令の刑律思つたより軽ければ依然其の運動を継続し旧の如く醜怪手段を恣にし居る姿なるを以て……」（1.21）と『報知新聞』が報道する通りのことが行なわれていた。

また、『万朝報』1901年（明治34）1月16日付には、「教科書運動禁止令／教科書審査の拳ある毎に、書肆の運動員は全国各地に派遣せられて、醜穢なる運動を為すを常とす。或は審査委員に陥はすに利益を以てし、或は地方の有力者、官吏

と結托し、或は脅迫に依り、或は贈賄に依りあらゆる誘惑の手段を逞うして、教科書の審査採定を左右せんと欲す。其の結果や、全国到る処に賄賂授受の醜聞を伝へ、…… / 文部省令は凡べての醜穢なる運動を禁じたり。是れ教科書肆に甚だ不利益なるが如くにして、其実は寧ろ彼等に利益あり。……若し文部省令にして大に励行せらるれば、彼等書肆は無益の費用を投ずるの必要なきに至らん。書肆たる者大に該令を歓迎して可なり。 / ……知らず文部省の教科書運動禁止令は果して幾何の効果を収め得るか」とある。教科書採用審査について醜聞が、あまねく知れわたっていることが理解できる。そればかりか、文部省の教科書運動禁止令が、ここでもその効果のほどなどまるで信用されていないのだ。

贈賄には「相場」がある。金港堂の社員であった小川菊松の証言によると、「当時バラまかれた金は百万円に上ると言われ、贈賄相場は知事、部長級が一万円から一万三千元、師範の校長が三 - 五千元、教員が二千元程度であつたそうだが、当時の金としては大したものである」[小川菊松1953:54]という。

実際に贈られ収められた金額、物品は、県知事にマニラタバコと現金1,000円、銀行頭取に現金3,500円、郡視学に反物と現金合計950円、県知事に反物と500円、郡視学に現金合計1,500円、県師範学校長に現金合計700円、郡視学に現金合計1,000円、高等女学校長に瑪瑙ボタンと現金合計600円などであった[宮地正人1969:351-378]。相場といわれるものより、かなり低めだが、いずれも教科書採用に権限をもつ人々に対する贈賄である。

『報知新聞』(1.19)の記事を紹介しておこう。

教科書の運動一斑

教科書問題に関する醜聞は久しきものにて、文部省も之を取締る為め省令を發したるが、事実の上に寸効無く、愛媛県に於ては今回全国に率先して教科書変更の先登を為せり、而して其変更により利益を受くるものは都下の書肆金港堂にして、愛媛県視学官寺尾捨次郎、松山中学校長野中久徹、同県政友会支部幹事岩崎一高等の協議にて、旧臘上京中、彼らの旅寓なる八官町の佐々部方に於て金港堂と協商し教科書変更を決したり、此協商に基き、金港堂は金一万円を彼等に提供する筈にて、既に其一割、一千円を手金として納め

たりと、其向々にて沙汰せるのみか、尚ほ国光社其他に於ても此徹を踏まん見込にて橋渡しの最中なりと云ふ

ほとんど同時進行の報道である。しきりに金港堂の名前が出てくることにも注意をしておきたい。

教科書疑獄事件の発生

教科書会社と教育関係者の小学校教科書をめぐる贈収賄事件、すなわちいわゆる教科書疑獄事件は、1902年（明治35）12月17日、全国一斉摘発からはじまった。教科書会社関係者、県知事、府県書記官、府県視学官、師範学校長、教諭などなど、全国ほとんどの府県から逮捕者がでるという一大醜聞である。

『万朝報』は、1902年（明治35）12月18日付において、その模様を次のように報道している。

教科書事件の大疑獄起る 昨日午前二時頃東京地方裁判所宿直検事の手許に何事か通知の達すると同時に宿直検事よりは川淵検事正に通報し其指揮によりて更に羽左間上席検事、中川上席予審判事に通じ直ちに予審判事及検事の急召集となり中川、川島、潮、横村の四予審判事、羽左間、福井、溝淵、安住、杉本の五検事が八ヶ所に別れて出張し警視庁よりも警部及刑事巡査数十名同行したるが右判検事の出張先は下谷、本郷、浅草、日本橋に涉り被告人として令状を発せられたるは休職視学官村上幹当（同人は旧三重、石川、静岡の三県に奉職せしもの）及び現任群馬県群馬郡々視学太田鶴雄にして事件の関係者は金港堂、集英堂、普及舎の三教科書々肆に於ける教科書検定に関する収賄事件なりと伝へられ其家宅搜索を受けたるは前記三書肆は勿論金港堂側にては営業部長小谷重（下谷々中清水町）運動員中村猪一郎、藤原佐吉、加藤駒次、及び下谷竜泉寺町の金港堂主原亮一郎方、集英堂側には小林精一郎、池部活三、永田一茂、篠塚半藏、前川一郎、普及舎側には山田禎三郎、速井清、中川九郎等其外合せて二十個処内外なるが此件につき昨日裁判所、警視庁より出張したる人員は総て百名近にて押収せしものは金銭に関する帳

簿及び教育家より来りし手紙、名刺などにて其手紙の中には意外なる人の意外なる無心状などあるかも知れずとの事なり（以下省略）

手入れの初日の記事に、金港堂の関係者として原亮一郎、小谷重、加藤駒二の名前がでてくるのが目を引く。

1902年（明治35）12月17日から翌1903年（明治36）まで、多数の人々が拘引された。新潟県知事柏田盛文、宮城県知事宗像政、栃木県知事溝部惟幾、島根県知事金尾稜巖、宮崎県知事園山勇、元群馬県知事小倉信近をはじめとして、府県書記官、府県視学官、府県視学、郡視学、師範学校長、教諭、高等女学校長、県会議長、県参事会員、教科書会社社長、社員などで、まさに全国規模の一大疑獄事件にまで発展する。

その概要は、予審に付された者152名（内28名が免訴）、そのうち112名が有罪決定となる。公判ののち、控訴、上告、差し戻し、再上告をへて、最終的には官吏収賄罪69名、恐喝取財犯1名、洗職法違犯1名、詐欺取財犯1名、小学校令施行規則違犯44名、合計116名、追徴金7万円にのぼった。すべてが終結したのは、1904年（明治37）6月のことだった[宮地正人1969:351-378]。

この事件をきっかけにして、世論は教科書の自由採用と国定化に分かれたが、文部省はただちに国定化に踏み切った。1903年（明治36）4月13日、勅令をもって小学校令を改正し、審査委員会を廃止、国定教科書制度を採用した。

第1回の捜索につづいて、1902年（明治35）12月22日、第2回の大捜索が実行された。

捜索を受けたのは、文学社、国光社、富山房、帝国書籍株式会社、育英社ならびにその社長、社員らの関係者である。

大量の逮捕者のなかに、金港堂関係者がいるのは、教科書会社のことから予想されるところだ。罪名収賄、金港堂編輯主任正七位小谷重がいる。金港堂社員でありながら罪名が贈賄でなく収賄である理由は後述する。加藤駒二もいた。ともに金港堂の社員である。

しかし、罪名収賄で、高等師範学校教授従六位長尾楨太郎（号雨山）が拘引されていた事実を発見した時、私は、ちいさからぬ驚きをおぼえた。

長尾雨山についての「はばかり」こととは、この教科書疑獄事件に関連するものだと確認できたのだ。その証拠が目の前にある。

7 長尾雨山と教科書疑獄事件

長尾雨山は、教科書疑獄事件にまきこまれた。強調したいのだが、この「まきこまれた」というのが事実なのだ。

長尾雨山が関係するのは、集英堂の教科書であった。事件の概略は、こうである。

集英堂は、尋常国語読本その他を文部省に検定を出願したが、不認可になりそうだという消息を入手した。当時、文部省図書審査官であった長尾雨山に対し、集英堂社員池部活三が、検定が通過できるように尽力を依頼し300円を贈った。長尾雨山は、収賄罪に問われ拘引された。

新聞に見る長尾雨山らの裁判

教科書疑獄事件を報道する『大阪朝日新聞』を中心にし、長尾雨山、小谷重らの関連記事を紹介しよう。

1902年（明治35）12月22日 拘引。12月23日付には、「永尾牧太郎」と2カ所も名前を間違っして掲載されている。なお、12月24日付に「文部省は今回拘引されたる嫌疑者に対しては即時休職を命ずることゝなせるが」とある。長尾雨山も、この時点で休職になったはずだ。

1903年（明治36）1月5日付「警視庁へも同日原亮三郎外十三名を召喚し取調べをなしたり 事実を素直に申立つるものは責付を釈す由にて長尾、永田両名の外金港堂店員堀田梅太郎も一日責付となり同夜出獄を許されたりと」

永田は一茂のことで、集英堂監査役だった。責付とは、辞書の説明によると、旧制で、裁判所が被告人を親族その他の者に預けて勾留の執行を停止することをいう。

1903年（明治36）1月11日付 拘引者一覧表（77名）が掲載され、「金港堂主人

原亮一郎（十二月十七日）／東京高等師範学校教授兼図書審査官（責付） 長尾禎太郎（二十二日）／元文部省図書審査官現金港堂員 小谷重（同）」などと記載されている。姓名の後ろの数字は拘引日を示している。

1903年（明治36）1月12日付 「拘引者中大学及び高等師範の出身者は左の如し」に大学出身者9名の名前がある。「文学士 小谷重」が入っていて、彼が帝大出身ということがわかる。

1903年（明治36）1月26日付 加藤駒二、取り調べられる。加藤駒二の肩書きは、いくつかの予審決定書に散見し、帝国書籍（株式）会社取締役、あるいは金港堂総務部長となっている。帝国書籍株式会社は、金港堂がもっともしのぎを削った競争相手の集英堂と、その集英堂の分身ともいべき普及舎とで作った会社で、トラストである。もっとも、従来の出版物はそれぞれのところで発売し、新たに出す教科書をこの新会社で売りさばいたのだという[木村毅1957:157]。加藤駒二は、金港堂の社員として帝国書籍株式会社に出向していた。

1903年（明治36）2月15日付 「教科書事件被告人の内本日左の十名に対して予審終結の言渡りありたり／休職東京高等師範学校教授 長尾禎太郎／以上有罪と決定し軽罪公判に附せらる」10名のうち長尾雨山のみ抜き出した。「休職」とは、前述したように事件が発覚すると同時に文部省は拘引された嫌疑者に対し、即時、休職を命じたからである。

長尾雨山の予審決定書は、1903年（明治36）2月15日付『時事新報』に掲載されている。全文を引用する（ルビ、傍点は省略）。

香川県香川郡宮脇村大座宮脇土族／休職東京高等師範／学校教授従六位／長尾禎太郎／元治元年九月生

右長尾禎太郎に対する官吏収賄被告事件に付き予審を遂げ終結決定を為す左の如し

長尾禎太郎の官吏収賄被告事件を東京地方裁判所の軽罪公判に付す

理 由

東京市日本橋区通旅籠町十一番地書肆集英堂小林清一郎は明治三十三年八月中小学校用教科書の検定を文部省に出願したるに同年十一月に至り其出願に

際し尋常国語読本其他の者に不認可とならんとする傾向あるを探知し集英堂事務員池^{ママ}部活三をして当時文部省図書審査官たりし被告槇太郎に対し集英堂の出願に係る書籍は其欠点を修正して差出すに付速に検定相成るべき様尽力ありたしと依頼し同月二十三日牛込区佐土原町二丁目二番地の槇太郎の住宅に於て金三百円を贈らしめたるに槇太郎は其内囑を容れて之を收受したり以上の事実は証憑十分にして槇太郎の所為は刑法第二百八十四条第一項に該る軽罪なるを以て刑事訴訟法第六十七条第一項後段に依り決定す

明治三十六年二月十四日 / 東京地方裁判所予審判事 中川富太郎

長尾雨山が問われたのは、罪名収賄だ。しかし、上の予審決定を読むと、収賄といっても教科書採用についてのものではないことがわかる。教科書になる前の検定段階で、不正があったことが問題にされている。長尾雨山の収賄内容について詳細が判明するのは、軽罪公判（1903.3.9）が行なわれてからになる。

1903年（明治36）2月16日付 拘禁者一覧表（140名）のなかに高等師範関係者は、長尾槇太郎のほか、教授本庄太一郎、教授増戸鶴吉の名前が見える。金港堂では主人原亮一郎、編輯員小谷重ほか7名が掲載されている。

さて、いよいよ軽罪公判だ。3月10日付『時事新報』には、検事、被告、裁判官の問答を含めてその模様が詳しく報道されている。長尾側の反論を知る上で重要な箇所だから、長くなるが引用する。

次に高等師範学校教授従六位 / 長尾槇太郎 / の審問に入る、検事は犯罪事実を述べて曰く被告は文部省図書検定審査官在職中三十三年八月中集英堂より文部省に請願したる国語読本が不認可となるべき傾向ありしより社員池部活三をして被告を牛込区佐土原町の住宅に訪はしめ認可となるべき様尽力し呉れと頼み金三百円を送りしに被告は之を收受したる者なり云々（裁）被告は文部省の図書審査官を勤めしことありや（被）あり（裁）集英堂主小林清一郎を存じ居れりや（被）知らず池部活三は知れり（裁）三十三年十一月中池部が被告宅を訪問せしことありや（被）九月か十月頃来りしと思へり（裁）某来りし当時被告は集英堂が文部省に国語読本検定の出願中なりしことを承

知し居りしか(被)審査官は兼任なりしのみか自分の担当は中学校の漢文及び小学校の習字の分なりしを以て集英堂の出願は一向知らざりし(裁)池部が被告宅へ行きし時国語読本の話をしてたりや(被)左様の話はなかりし(裁)然らば如何なる用向きなりしか(被)集英堂にて編纂中なりし読本中の文章を修正して貰ひたしとて来りしなり(裁)其頼みを受けたりや(被)再三断りたるに立つての頼み故止むを得ず承諾したり(裁)其修正は何時頃出来上りしや(被)四五十日を要したり(裁)活三は一度頼みに行きしのみなりや(被)然り(裁)其修正を為すに就て報酬の約束ありしか(被)なし(裁)其後報酬を持参せしか(被)余程時経て持参したり(裁)金額は(被)三百円なりし(裁)何と云ふて持参せしか(被)別に何とも云はざりし(裁)一体審査官は著述を為すことを得ずとの定めあるに非ずや(被)自分は嘗つて承知せず

ここまでが事実をめぐる審問である。読むと、両者の意図は、明らかにすれ違っているように思われる。

集英堂は、教科書を検定に通過させるために長尾雨山に尽力を依頼したという。一方、長尾雨山は、集英堂が編纂中の読本を修正してくれと言ってきたのだと考えている。ただし、長尾雨山が集英堂からの300円を受け取ったのは、事実のようだ。両者の思惑が違ったままであるにしても、この金銭授受の事実は否定しようがない。

それにしても、検定通過が危ういと見た教科書を編纂中のものといいつくろい修正を依頼するなど、集英堂も考えたものだ。まさに英知を集めている。長尾雨山の図書審査官としての担当は、中学の漢文と小学の習字だ。ゆえに国語読本とは無関係と考えたところに落とし穴があったのではないか。

つづいて長尾側の弁解がある。

以上にて事実の審問を終りつて調書の朗読を済まし弁護人より文部省へ第一図書検定の順序第二被告長尾の担当せし課目第三国語読本は何人の担当なりしか第四被告は国語読本の検定を為したることありやを照会し尚ほ検定済み

の国語読本を御取寄せありたく及び池部活三を証人として喚問ありたしと申請し安住検事は何れも賛同することを得ずと陳じ裁判長は合議の上（注：『東京朝日新聞』によるとここまでで午後5時30分一時休憩す）何れも必要なしとて却下の決定を与へ直ちに弁論に入れり検事論告の要旨は本件は集英堂の前川池部等が出願の読本を修正して再び差出すに当り被告に検定済みとなる様尽力し呉れと頼み金三百円を被告に贈りたる者なり然るに被告は他の読本の修正を依頼され報酬として三百円を受取りたりと弁解すれども仮りに此弁解をなりとするも同じく犯罪を構成する者なりと思す何となれば審査官たる者が今検定せんとする教科書に筆を入るゝと云ふは実に不都合のことにして現に主務省にては当局官吏に対し一切書肆の依頼に応じ著述等を為すべからずと訓令したりと云ふ然かのみならず池部前川等の供述に依れば修正の報酬は云ふ迄もなく検定通過の報酬も込め置きたる考へなりとなり故に何れの点よりするも刑法上の責任は免れ得べき者にあらずと信ず依て被告を刑法第二百八十四条に照し相当の判決ありたしと云ふにあり弁護人は之に対して被告が三百円を受取りしとの事実は明らかなることなるが此三百円は修正の報酬として受取りし者にして決して検定通過の報酬として受取りし者にあらず仮りに池部等の云ふが如く検定通過の報酬も込めありしとするも被告は如何にして其次第を知るべき余地あらんや尚一步を被告が受取りし金円は検定に関してなりとするも被告は漢文習字の審査担当なるを以て他の国語読本に関して収賄したりとするも這は法律上罪として論ずべき者にあらず故に被告に対しては無罪の宣告ありたしと云ふにあり裁判長は追て判決を言渡すべき旨を告げ閉廷せしは午後七時なりき

金銭の授受は認めるが、それが教科書の修正料か、それとも検定通過のためのワイロか、それが問題の焦点となった。

長尾雨山は、図書審査官とはいえ、担当は中学校の漢文および小学校の習字であり、集英堂が国語読本の検定を出願していたとは知らなかった。集英堂が編纂中の読本の文章を修正してほしいとやって来たが、再三断わっている。しかし、たつての頼みというのでやむをえず承諾した。その後、池部が300円を持参し、

雨山は校閲料だと思いそれを受け取った。長尾雨山にしてみれば、審査の担当科目が違う以上、修正料としか考えるほかなく、また事実そう信じていたようだ。

検事は、集英堂の300円は文章修正とともに検定通過の報酬の意味がこめられていた、と主張し、それ以上に長尾雨山の図書審査官という立場を問題にしたわけだ。検事側の方が一枚うわてであった。雨山は、文章修正のみの報酬であると反論する。

結果は、長尾雨山の有罪だった。

1903年（明治36）3月17日付『東京朝日新聞』「裁判宣告 昨日左の宣告ありたり 東京高等師範学校教諭長尾楨太郎 重禁錮二ヶ月、罰金七円、追徴金三百円」

長尾雨山は、ただちに控訴した。

同日付の『時事新報』も見ておく。

「昨日午後一時左の四名に対し有罪の判決言渡しありたり 休職東京師範学校教授従六位長尾楨太郎 / 重禁錮二月、罰金七円、追徴金三百円」

1903年（明治36）3月18日付 「過日公判言渡ありたる長尾楨太郎、岩屋直次郎は本日控訴の申立をなしたり」

新聞記事だから「本日」とあるのは、前日の3月17日を指す。約40日後に控訴公判が開かれた。

1903年（明治36）4月29日付 「教科書事件控訴公判 本日午前十時より開廷 ……長尾楨太郎は金銭を受領したるは事実なるも収賄にあらざ校閲料なりと信ぜり証人とし渡辺図書課長を喚問する事文部省へ照会の事を許され午後四時閉廷せり」

長尾雨山には、反論するための新しい証拠、論理は提出できなかったようだ。以前の主張をくりかえしただけで終わった。そうなれば、逆転させるのはむつかしいのではないか。

1903年（明治36）5月10日付 「高等師範学校教諭長尾楨太郎、宮城県視学田淵清市兵衛の控訴は孰れも棄却」

こうして長尾雨山の有罪が、確定した。

高津鍬三郎の場合 長尾雨山に類似して結果が正反対

雨山の場合と同じ内容で、結論が異なる例があるので以下に紹介する。

前述のように、教科書疑獄事件では、起訴されたが免訴となった人々がいた。

その理由は、1．証拠不十分、2．収賄の事実はあるが、官吏ではなかったため、3．収賄事実があり、しかも官吏であるが、職務に関して収賄したという認定が成立しなかったため、である。

1の証拠不十分とは、収賄の事実がないにもかかわらず、証人の間違った陳述にもとづいて起訴された例だ。誤った陳述だから、免訴である。

2のポイントは、官吏であったかどうかだ。収賄の事実はあるが、県参事会員は吏員でないため免訴となった。

問題は、3の収賄認定が成立するかどうかである。

実例は、三つある。簡単に述べる。

師範学校教諭の場合。教科書審査会について金港堂店員に依頼され、校長に紹介した謝礼300円を贈与された例がひとつ。認定不十分で免訴となった。

高等女学校長が、友人で金港堂理事となった人物から審査会のことを依頼され、200円を借用したのがふたつめ。これも証拠不十分で免訴である。

みつつめは、文部省図書審査官だった高津鍬三郎に関するものだ。長尾雨山の例と関係するので注目したい。

高津は、文部省の囑託で小学校教科用図書検定事務下調に従事していたとき、集英社社員から依頼を受け、集英社の検定出願の国語読本について修正すべき箇所を指示し200円を受け取っている。ところが、「この事実は明白ではあるが、官吏の職務に関し収賄したと認むべき証憑は不十分」だとして免訴になった[宮地正人1969:364-365]。

文部省図書審査官正六位高津鍬三郎が、名古屋地方裁判所に拘引されたのは、1902年（明治35）12月23日だった。1903年（明治36）2月18日付『時事新報』の記事によると、責付となり、拘引を解かれている。結果として免訴であるというから、予審までいたっていない。数種類の新聞を閲覧したが、予審決定書が見つからない理由だろう。

高津の例は、きわめて興味深い。なぜなら、長尾雨山の場合と行なわれたこと

の内容がまったく同じであるからだ。しかも判決は、正反対となっている。

長尾雨山も高津と同様に文部省図書検定審査官をつとめていた。国語読本の文章修正というのも同じ行為である。同じ職務についており、ふたりとも同じ行為を行なったにもかかわらず、高津鍬三郎は免訴となり、一方の雨山は有罪である。長尾雨山にとっては、どう考えても不公平であるといわざるをえない。

8 長尾雨山は冤罪である

正反対の判決が下った理由をしいてさがせば、証人の証言に左右された結果だとしか思えない。

高津鍬三郎については、集英社社員が、国語読本の修正を依頼した、と証言した。

ところが、長尾雨山の場合はどうか。集英堂社員は「文部省に請願したる国語読本が不認可となるべき傾向ありしより社員池部活三をして被告（注：雨山）を牛込区佐土原町の住宅に訪はしめ認可となるべき様尽力し呉れと頼み金三百円を送りしに被告は之を収受したる者なり」と証言している。読本の文章を修正してもらいたいとの依頼ではない。検定認可となるよう尽力してほしい、と重点はあくまでもここにある。

この証言が雨山の運命を変えた。雨山が、「審査官は兼任なりしのみか自分の担当は中学校の漢文及び小学校の習字の分なりしを以て集英堂の出願は一向知らざりし」「集英堂にて編纂中ないし読本中の文章を修正して貰ひたしとて来りしなり」といくら主張しようが認められなかった。長尾雨山にしてみれば、結果として集英堂社員にだまされたことになる。

検事がいうには、「審査官たる者が今検定せんとする教科書に筆を入るゝと云ふは実に不都合のことにして現に主務省にては当局官吏に対し一切書肆の依頼に応じ著述等を為すべからずと訓令したりと云ふ」をもって有罪を主張した。もしこれが事実であれば高津鍬三郎の場合も有罪としなければならない。しかるに上述のごとく、高津鍬三郎は免訴だ。長尾雨山は控訴し、「収賄にあらざ校閲料な

りと信ぜり」とかさねて主張したが、控訴は破棄された。決定は、はなはだしく偏向していると言わざるをえない。

長尾雨山と教科書疑獄事件についての詳細を明らかにしたものとして、私は、長尾雨山が冤罪であることを強調しておきたい。

控訴は棄却となった。冤罪ではあるが、雨山は「重禁錮二ヶ月、罰金七円、追徴金三百円」という判決に従ったと思われる。

長尾雨山が上海へ行ったのは、直接には教科書疑獄事件で有罪判決を受けたためであろう。

金港堂と商務印書館の正式合併は、1903年（明治36）11月19日（光緒二十九年十月初一日）であった。しかし、いくつかの事実を考えあわせれば、両社の合併計画は1901年から1902年にかけてのころに固まったと予想される。それが1903年の11月になったのは、金港堂側を襲った突然の教科書疑獄事件でしかたなく延期されたものと考えられる。

教科書疑獄事件を惹起したのは、金港堂1社ではない。複数の教科書会社が関係している。長尾雨山の場合、罪に問われた原因は、直接には集英堂との関係であって、金港堂とは無関係であるということが出来る。金港堂が合併先の商務印書館に、なぜ長尾雨山を派遣したのか、その詳細は、現在、不明とせざるをえない。ただし、推測はできる（後述）。

また、雨山の上海行は、教科書疑獄事件以前から予定されていたものか、それとも教科書疑獄事件で急遽決定されたものか、それを証明するものがあるとは判明していない。ただし、いくつかの証言によると、雨山の上海行は、急なことのようにだ。ゆえに、事件の経過を表面的に見る限りでは、今のところ、教科書疑獄事件がきっかけになったとしか思えない。

小谷重の場合

金港堂の社員で、教科書疑獄事件後に上海の商務印書館に出向した小谷重の場合を簡単に紹介しておく。

小谷重の予審決定は、1903年（明治36）3月17日付『大阪朝日新聞』に載った。

株式会社金港堂編輯部長 小谷重 / 明治七年六月生

第一、集英堂主人小林精一郎は明治三十三年十月中尋常小学校用教科書の検定を文部省に出願したる所同年十一月上旬文部省図書科に於て右出願に対し不認可の指令を為さんとする議ありしに因り当時文部省図書審査官にして図書課長たりし被告小谷重は小林精一郎に対し書面を以て其旨を内報したり精一郎は大に驚き神田区今川小路一番地の被告宅を訪問し教科書の欠点を修正して差出すに抛り速に検定相成るやう取計はれたし検査通過の上は相当の謝礼をなすべしと申込み其後検定済となりたるを以て翌三十四年四月中旬金三百円を前記被告の宅に持参し差出したるに被告は収受したり

第二、国光社長西沢之助は明治三十三年十月中高等小学国語読本の検定を文部省に出願したる処其後検定通過の困難なるを探知し同年十二月中社員森房澄江及被告の親族村上八太郎を以て被告に対し読本の修正及び其検定通過を依頼し若し検定通過の上は相当の報酬をなすべき意を通ぜしめたるに被告は其意を了し読本の修正を為して澄江に交付したるを以て沢之助は同年十二月二十九日追願をなし翌三十日同じく検定認可を得たり依りて沢之助は明治三十四年二月中社員川義直衛及森房澄江を前記被告宅に遣し袴地（仙台平）一反金三百円を被告の妻とみに交付せしめたるに被告は之を収受したり

小谷重の場合は、金港堂社員になる前の文部省図書審査官時代の行為を問われたものだ。ゆえに罪名は贈賄ではなく収賄なのである。予審決定の文章からは、親族までを動員する出版社側の攻勢のすさまじさがうかがえる。また、出版社にとって直接の監督庁である文部省の図書審査官を自社に引き入れるなど、現在の官僚の民間会社への天下りとなんら変るところはない。

1903年（明治36）4月25日付の報道によると、小谷重は、予審決定軽罪公判に移され「重禁錮二月十五日、罰金十円、追徴金三百円」とある。

9 上海で報道された日本教科書疑獄事件

事件発生以来、ほとんど連日のように新聞で報道されていた教科書疑獄事件だ。日本国内だけの話題であったわけではない。梁啓超が横浜において主宰発行していた雑誌類が、上海に輸送されていた時代である。日中間では、品物ばかりでなく情報も行き来していた。日本の新聞を騒がせていた教科書疑獄事件は、上海でもほとんどリアルタイムで報道されていたことを紹介しておこう。

日本教科書疑獄事件は、上海『申報』1902年12月26日付で「文字之獄」と題して掲載されている。これが最初の新聞記事である。

友人からの伝聞という形をとる。以下、要約すれば、日本の各学校で使用する教科書は、文部省の検定を受けてのち刊行する。本年陽暦2月より贈収賄のあることを察知し、秘密裏に調査していたが、12月^{ママ}21日、東京地方裁判官中川君は、集英堂社長永田一茂、普及舎社長池部活三を召集し証人とした。同日午前十時東京金満堂書籍会社原亮三郎の父^{ママ}は、検事正室川淵^{ママ}検事正^{ママ}および検事羽佐君により審問をうけ五時に終わり帰宅を許可される云々。

一斉摘発が行なわれたのは12月17日であって21日ではない。池部活三は集英堂社員だ。金満堂ではなく金港堂だし、「原亮三郎の父」というのは原亮一郎を指しているが、名前から想像するのは反対に原亮三郎のほうが父親である。室川淵は、川淵が正しく、検事正を重複させているし、羽佐は羽左間の間違い。というように誤りの多い記事となったのは、伝聞をそのまま流したためであろう。誤記の行進とはいえ、教科書疑獄事件が上海に報じられた最初として注目される。

1902年12月28日付「大索書林」から全10回のシリーズ記事を構成する。ここでは、もういちど大捜査の様相を描写して、より正確になっている。金港堂と正しく表記する。これ以下の報道は、金港堂関係を中心にして見ることにしたい。

1902年12月31日付「大索書林続述」では、日本某新聞の報道を引用する。注目されるのは、証拠がある収賄者として、「高等師範学校教授長尾楨太郎、金港堂書肆編輯長前文部書記官正七位小谷重」と明記していることだ。名前、所属とも

に正確である。

1903年1月1日付「大索書林三志」金港堂の名前があがっている

1903年1月2日付「大索書林四志」

1903年1月4日付「大索書林五志」原亮一郎の名前がある

1903年1月6日付「大索書林六志」金港堂書店主人原亮一郎の妻が出現する

1903年1月8日付「大索書林六志」金港堂、原亮一郎の名前が見える

1903年1月9日付「大索書林七志」

1903年1月15日付「大索書林七志」原亮一郎が登場する

1903年1月16日付「大索書林八志」小谷重雄、原亮一郎、金港堂、加藤駒治の名前がある

以上、いずれも基本的に日本で報道された新聞記事を引きうつして『申報』の記事が作成されている。その書き方は、検事の名前と被疑者の実名を羅列するのがひとつの型になっている。拗った日本の新聞がそうなっているのだろう。

ほとんど1ヵ月におよぶ連続報道は、それぞれの文字分量は多いとはいえないとしても、日本の教科書疑獄事件を上海人に強く印象づけたのではないかと思うのだ。金港堂の名前が頻繁に登場していることを忘れてはならない。また、長尾楨太郎と小谷重が実名で報道されていることも見逃すわけにはいかない。大方の人々には記憶に残らなかったとしても、商務印書館の関係者には印象強くあとを引いた可能性も否定することはできない。

商務印書館の首脳が、日本での教科書疑獄事件を知っていたのかどうかについては、資料は残っていない。しかし、のちの人の証言に教科書疑獄事件が出てくる。これを見れば、関係者から聞いたことがあると想像できる。なによりも上海『申報』での連続報道がある事実を見れば、事件を知っていたと考える方が自然だ。

私は、商務印書館が金港堂との合弁準備を始めたのは、1901年頃だと予測している。教科書疑獄事件発生以前から両者の接触があったとすれば、なおさらのこと商務印書館側は、大いなる関心をもって新聞報道を読んでいたのではないか。長尾楨太郎、小谷重、加藤駒二の名前が脳裏に刻みこまれたと想像する。その彼らが、教科書編纂の専門家として、約1年後に上海に乗り込んでくるのを、商務

印書館首脳部は、想像していただろうか。

のちに商務印書館と金港堂が合併会社となった時、商務印書館側は、表立っては金港堂の総代理店となったとはいう。だが、実態が「合併会社」だということを謳おうとはしないばかりか、その事実を明らかにしようともしはしない。日本教科書疑獄事件が上海でも知られていたことを考えれば、その報道から約1年近く経過していようとも、事件の当事者のひとつである金港堂と合併をしたといえれば、上海の人々の関心を刺激するかもしれないと判断したと考えてもおかしくはない。商務印書館が合併をいいたくなかった理由のひとつにもなる。

10 長尾正和の雨山伝

長尾雨山について述べているすべての文章は、中村論文を除いて雨山の教科書疑獄事件から目をそむけている。

たとえば、雨山の五男正和が、筆名礼之を使用して京都彙文堂の販売書目『冊府』に連載した「長尾雨山」がある。親族の手になる雨山伝には、雨山の上海行について次のように書かれている。(上海の雨山については、数箇所にかけて記述されている。時間順に配列しなおして引用する)

長尾雨山の生涯がいくつかの時期に区切られているので、まず、これから簡単に見ておこう。

雨山の生涯は大別して四期に分けられる。第一期は郷里高松時代で約十九年、第二期は東京時代(熊本時代一年余を含む)約二十年、第三期は上海時代約十二年、第四期は京都時代の約二十六年である[長尾正和1959a:7-8]。

長尾正和の文章は、おおよそ上の時代区分にしたがって記述されている。交遊関係を中心にし、郷里高松時代は、副島蒼海(種臣)を述べ、東京時代は、岡倉天心、鄭孝胥を、上海時代は、帰国の模様にわずかに触れ(後述)、京都時代は、蘇東坡を祝する寿蘇会、赤壁会について記録している。生涯を通じての友人であった鄭孝胥に関しては、特に詳しい。

上海以前

長尾雨山の学歴および職歴が示される。

明治二十一年東京大学古典科を卒業した雨山は、その年九月に学習院に職を奉じたが、十二月文部省に入り専門学務局勤務、翌年東京美術学校が創設せられるとその教授を兼ねた。三十年熊本の第五高等学校教授に転じ、三十二年に東京高等師範学校教授、同時に東京大学講師も兼ねた[長尾正和1959a:7]

上海に渡る以前の経歴であることはいうまでもない。熊本の第五高等学校において、雨山は、夏目漱石と同僚であった。

上海行

東京高等師範学校教授として雨山は、波風なく順調に日をすごしていたと見える。ところが、突然の上海移住である。

明治三十五年^{ママ}雨山は一家を挙げて上海に移住するため……[長尾正和1959b:8]

ここにいう明治35年は、明治36(1903)年の誤りである。

1903年11月30日付『大阪朝日新聞』の「人と船」欄に「高等師範学校教授長尾楨太郎氏は一昨二十八日午後陸路東京より来着海岸西村に投宿明一日河内丸にて上海へ向け出発する筈」と報道されている。海岸西村というのは、神戸港を発着する旅行者の多くが利用した西村旅館のことだ。ただ、この新聞記事を読むだけでは、長尾が一家をあげて上海にむかっていたとはわからなかった。

正和が書いている「上海に移住するため」とある箇所は、注目にあたいする。「移住」であって、ただの物見遊山ではないことがわかる。

なぜ「移住」したのか、長尾正和は、説明していない。説明していないにもかかわらず、その言葉使いになにやら悲壮感さえただよっているように私を感じるの、雨山の教科書疑獄事件を知っているからか。

三十五年一切の官職を退き上海に移住、商務印書館に入り編訳事業を主宰、革命前の中国初中等教科書編纂は専らその手に成つた。在支十二年、大正三年末帰国、居を京都に定め講学と著述の生活に入った[長尾正和1959a:7]

雨山の上海行と帰国してからのことが、ここで触れられている。

「三十五年一切の官職を退き」という書き方は、雨山が主体的にそう決定したように見える。事實は、そうではない。1902年（明治35）12月22日、拘引された時点で、東京高等師範学校は自動的に休職となった。文部省の命令である。結果的に休職を強制された。休職は、退職につながる。自ら求めて「一切の官職を退」いたわけではない。

雨山の商務印書館における仕事が、編訳と教科書編纂であったことがろうじて知られる。編訳の中身、あるいはどういう教科書を編纂したのか、具体的に述べられていないのが残念だ。教科書疑獄事件については一言の言及もないことにも注意してほしい。

考えれば考えるほど、長尾正和の書き方は一般に見られるものとは異なっているといわざるをえない。

日本において地位と名誉のある人物が、「一家を挙げて上海に移住する」のだ。頻繁に発生するような事柄ではなかろう。ここは移住する理由が書かれるのが普通だと考える。留学であれば、「移住する」とは記述しないだろうが、金港堂に勧められたとか、商務印書館から請われたからとか、いかようにも説明はつけられるはずだ。

しかし、なにも触れられていないのが、かえって不自然である。ついでにいうと、金港堂と商務印書館が合併会社であったことにも言及はない。

雨山はその一生決して平坦の道を歩んだのではなかつた。官学に安住するを得ず、海外に流寓して帰国の後も、志を名利に絶つたまま生涯を終つたのであるが、……[長尾正和1962b:1]

「官学に安住するを得ず」と書くのなら、なぜ安住することができなかった

のか、説明がほしいところだ。疑問が生じる。「海外に流寓して」という表現にも悲壮感がある。好んで出国したのではないことが、その字句の選びかたから、明らかである。

長尾正和の文章に見える「一切の官職を退き」「移住」「一家を挙げて」「移住」「一生決して」「安住するを得ず」「流寓」「志を名利に絶つた」などという表現は、何気なく読めば見逃してしまいそうになる。しかし、よく見れば、表現が大仰だし、しかも負の方向をむいていることに気づくだろう。読者にあたえる印象は、暗いといわざるをえない。

これらわざとらしい表現から推測されるのは、正和は、父親の教科書疑獄事件を知っていたのではないかということだ。事実を押し隠そうとする意識が、大げさな言葉使いを誘発したのではないか。それも事件を部分的に聞きかじっていたのではないかと想像する。もし、教科書疑獄事件の詳細を知っていたのであれば、私がすでに述べているように「冤罪」であることが分かっていたはずだ。「冤罪」を確信していれば、なんらかの形で教科書疑獄事件に触れていたはずだ。だが、暗い書き方しかできていないのは、自分の父が「冤罪」であるのを知らなかったからだとしか私には思えないのだ。

子女から見た父雨山

長尾正和は、帰国後の雨山について次のように書いた。

帰国して京都に住むことになった雨山は全く一介の布衣であつた。官職はすでに十二年前に一切を擲つた。いまは印書館の寡なからぬ俸給も絶えた。妻と六人の子女を抱えて如何にして生活するか、背水の陣ともいうべき境涯に立ち至つた[長尾正和1959a:10]

「官職はすでに十二年前に一切を擲つた」のは確かである。だが、主体的に「擲つた」のではない。無理矢理そうさせられたのである。あるいは、そうならざるをえない状況に追いやられたというのが正しい。

正和の示す表現がここでもおだやかではない。「一介の布衣(庶民の意味)」「一

切を擲つた」「背水の陣」などと、言葉が大げさなのだ。切迫した雰囲気を感じる。実際にそういう状況だったらしく、大仰なのも無理はないか。

文中にいう「印書館」とは、いうまでもなく商務印書館をさす。商務印書館における雨山の最初の給料は、200元であった。11年間勤めたのだから、その間、昇給したとは思うが、証明する資料がない。当時の上海において、4人家族が生活できる水準で給料60元という数字がある。これに較べれば200元というのは生活するには問題はなかった。長尾正和が「印書館の寡なからぬ俸給」と述べている通りだ。ただし、書画骨董にまで手が伸びるかどうかはわからない。わからないが、伸ばしたのではなからうか。雨山は金に頓着しない性格であったという。

雨山は、商務印書館の株を所持していたから、給料のほかに株の配当があったかと思う。

娘からみると、雨山は、「至つて経済観念に乏し」かった。また、「欲しいと思へば、書物でも美術品でも金目をいとはず買つてしまひ、その上に大へんな美食家、大酒家で、しかも来客には、誰にでもご馳走するのが大好きなのです」[能田婉子1978:259][杉村邦彦1995d:171]という性格だった。

長尾雨山は、商務印書館の株を45株所有していた。金港堂と商務印書館の合併が解消されたとき、1株は146.5円で換算することに交渉が決着した。雨山の45株は、約6,600元になる。

京都に住むことになり、いきなり「背水の陣」だと長尾正和が書いているところから、商務印書館の株で得たはずの約6,600元は、中国滞在の最後の1年間で使い果たしたことがわかる。雨山が商務印書館をやめた1914年1月から7月はじめまで、月200元の支出として、合計1,200元がかかった。株の売却で得た約6,600元から1,200元を減じて残りは5,400元となる。5ヵ月間の中国国内旅行だから、1ヵ月約1,000元の消費だったと計算できる。まさに文字通りの大名旅行だった。確かに経済観念に乏しいといわなくてはならない。

その人の人となりは、今や文章でしか伝えられていない。性格は、幼児から変化しないものなのか、長じて変わり得るものなのか、私は知らない。長尾正和から見た父雨山は、いかなる性格であったのか、抜きだしてみる。

「何事によらず徹底せねば納まらぬ猛烈な気象」で、経学、文学、書画、金石、

篆刻、政治、経済、国学、和歌、俳句、天文、暦学、骨董、園芸、飲食、器物、草木、虫魚にいたるまで一家言をもっていたという。

徹底しながらも範囲が広いとなれば、これは「知の巨人」である。惜しいことに、おおかたは書籍として残されていない。

「徹底した不羈の性格は、その雄大な体格や相貌と相まって、不興の時には人に畏怖の感を与えることも多かつた半面、機嫌のよい時の温容は譬えようもない円満さで、春風駘蕩の感を覚えしめたものである」。機嫌のよい時と不興の時は、その現われかたが正反対というのだから、わかりやすくのべれば、感情の起伏が激しいということになるう。

「要するに多情多恨、生れつきの詩人であつて、激情が常に身内に燃えたぎっていた」という部分も、感情の起伏の激しさを別の言葉で表現したにすぎない。ことに「激情が常に身内に燃えたぎっていた」という箇所からは、なにか意にそわめものを内部にもてあましていた、それとの葛藤に煩悶していたのではないかと感じさせもする。

息子の目から見ても、雨山の「金費い」は相当に激しかった。

「元来奔放でケチ臭いことの大きらいな、徹底せねばやまぬ性格では金など残るものではない」

「雨山は書物を買うこと、酒を飲むこと、同志と遊ぶことなどで綺麗サツパリと費い果し、細君が質屋の門をくぐることも珍らしくなかつた。飲食衣服は粗末なものでは我慢しなかつた」

「雨山には常に吝嗇をいやしむ心があつた。吝嗇な行為をするのは自分をいやしめるものだという雨山の信念は死ぬまで渝らなかつた」

「汽車汽船は一等、宿舎は一流、宿舎の心付は思い切つてはずむのでサービスも行届いた。雨山は自分の力で得た金ですきなように振舞つた。かくて誰の世話にもならず、一生自分の家をもたず、大きな借家の中で書籍に埋もれて死んだ」(雨山の性格についての引用は、[長尾正和1959a:8-9]による)

学問に限らず「金費い」も徹底していたということだ。中国国内旅行に1ヵ月1,000元を消費したと計算したが、かならずしも荒唐無稽な想像でもなさそうだ。

徹底していれば、それが素晴らしいといえるかどうか。別の目で見れば「至つ

て経済観念に乏し」かった、ということにほかならない。

徹底して金を使うのは、多情多恨の生まれつきの詩人であり、知の巨人にこそ許された行為であった。赤の他人から見れば、あっぱれな性格ということになるかもしれないが、身近にこんな人がいるとその存在そのものに疲れを感じるのではなからうか、などと私なら同情してしまう。

「飲食衣服は粗末なものでは我慢しなかつた」という箇所には目を引かれる。若い頃の雨山は、衣服に頓着しなかつたからだ。

1891年（明治24）、東京において鄭孝胥は、長尾雨山の訪問を受けた。その日の日記に、鄭孝胥は、雨山の身なりがまったく質素であることを書き留めていることを思い出してほしい[鄭孝胥1993:255-256][樽本照雄1994b:3]。中国人の印象に強く残るほどの質素さだった。

さらに、吉川幸次郎の証言がある。これも雨山が若い時の話だ。清国公使黎庶昌は、面会した雨山がひとえの着物をきているのを見て、寒くはないかと問うた。雨山は、とっさに韻をふんだ回答をしたという[吉川幸次郎1965:360]。雨山の当意即妙の返答を感心すべき挿話として書かれている。たしかに、感心するだけでいいのだろう。しかし、その場の状況を想像すると、別の面が見えてくる。ひとえの着物が合わない季節のことだと理解できるのだ。寒さにたえられない薄物を雨山が着ていた。冬にひとえの着物という取り合せは、雨山が、衣服に関して質素だったことを証明している。

ところが、雨山は、後年、「衣服は粗末なものでは我慢しなかつた」らしいから、若い頃とはまるで別人になったのだ。

衣服の趣味など、生涯、変わらないのではないかと私は思うのだが、どうだろうか。一概にいうことはできないかもしれない。しかし、知の巨人は、衣服に頓着しないと思いたくなるではないか。私の勝手な思い込みか。それにしても、鄭孝胥、吉川幸次郎のおふたりが記録しているのと、雨山の変わりようは劇的だと思える。

長じれば、また、経済に余裕が生じれば、若い頃にくらべて正反対になることがあるかもしれない。ただ、疑問を感じるのだ。変化したのには、理由があるはずだ。服装に意を用いなければ、それ相応のあつかいを受けることができないと

いう深い体験があったのではないか。

長尾雨山の「暗部」

正和論文は、雨山の生涯を左右するきっかけとなった教科書疑獄事件についてひとことも触れていない。触れていないにもかかわらず、だからこそか、その文章にはなにか隠すべきものがあることを予想させる言葉使いとそれから来る暗さを感じる。長尾正和は、教科書疑獄事件についてうすうす気がついていながらもかかわらず、それには触れてはならぬと思い込んでいたのではなからうか。それが「暗さ」となって表面に染み出ているとしか思えないのだ。

長尾雨山と教科書疑獄事件の関わりについて隠蔽することは、かえって鼻淵の引き倒しとなったのではないか。意図としては善意でかばうつもりが、隠すことによって著者自らの差別意識を知らずしらずのうちに表出させることになったと考えられる。隠すという行為は、「悪い」という意識にむすびついている。何かしらないが、過去に醜聞があったらしい、というウワサに変身し長く存続してしまう。事実を明らかにすればそれが誤解であることがはっきりしたにもかかわらず、みすみすその機会を捨ててしまった。

周囲がそうならば、雨山自身も、「悪」の意識にとらわれていたのではないかと思う。自らその過去を述べることをしていないところからそう理解できる。冤罪を叫ぶことをしなかったのは、罰せられたという事実が雨山を精神的に打ちのめしたからであろう。しかし、叫ばなければ表面的には雨山は自らの「罪」を認めてしまったことになるのだ。内に抑圧すれば抑圧するほど、精神的に補償作用を必要とすることになるのは必然である。「激情が常に身内に燃えたぎっていた」のは、その抑圧のすさまじさをほうふつさせる。しかも、雨山自身はその理由を理解していなかったのではなからうか。「常に吝嗇をいやしむ心があつた」し、「汽車汽船は一等、宿舍は一流」を求めたのは、抑圧の裏返しだったと理解できよう。教科書疑獄事件によって傷つけられた自尊心を「一等」「一流」のもので埋め合せ、精神的な平衡を保つ。これが、精神の補償作用でなくてなにであろう。

これらのすべては、あの教科書疑獄事件に起因していると思うのだ。

雨山の娘能田婉子の証言を紹介してしめくりとする。

教科書事件について雨山から何か聞いたことはないのか、という杉村邦彦の問いにたいして、つぎのような答えがあったという。原文は、漢語だから翻訳しておく。

父からは、なにも聞いたことがございません。ただ、「私たちの家はなぜ上海に引越したの」と母（雨山夫人照）にたずねたことがあります。母は、「お父さんは教科書事件に巻き込まれ、だから日本にまったく嫌気がさして、それで上海に来たの」と答えました。（[杉村邦彦1993:295]漢語原文では、「(雨山の夫人登世)」となっているが、杉村の鉛筆で「照」と訂正されているので、これに従う）

雨山の家庭内で、教科書疑獄事件が話題になったことは、なかったことがわかる。ただでさえ不愉快な事柄を、雨山が家庭内でむしかえすことなど、常識で考えても、ありえない。軽々しく日常会話に出すことのできるような受け止めかたを雨山はしていない。事件以後に雨山が取った行動がそれを証明している。雨山のなかでは、教科書疑獄事件は、それだけの重みがあった。

11 原安三郎からの手紙

京都の永沢金港堂永沢信義にお話をうかがった時、原安三郎が金港堂の残務整理をしたとご教示くださった。90歳をすぎたご高齢であることを知らされもした。原安三郎にあてて、金港堂と商務印書館の合併問題について何かお書きになったものはないか、手掛かりを与えてくださるようお願いの手紙を書いたのだ。

原安三郎は、1884年（明治17）3月1日に徳島市に生まれ、私が連絡をとった1979年当時、95歳だった。1909年（明治42）、早稲田大学商学部を卒業後、そのころ三井物産常務取締役だった山本条太郎の個人的に関係する事業を手伝いながら、経営者としての修練を積む。「(19)10年茨城県所在の薬丸金山の会計係を命

ぜられたのを手はじめに、福島県の硫黄山、出版社の金港堂などの経営や整理に従事。山本は14年三井物産を辞めて独立するが、山本の関係した事業のうち経営不振のものはすべて原が整理・立て直しに当たり、ボロ会社立て直しの名人と呼ばれた」[現代人物事典1977:1074]

日本火薬製造会社の社長となり、その他数十の会社の重役をかねる。戦後、経団連常任理事、経団連防衛生産委員会火薬委員会委員長、通商産業調査会会長、東京商工会議所理事、国鉄諮問委員会会長、関税率審議会会長などに就任し、日本財界の大長老として重きをなすという。

ほどなくお返事をいただいた。原安三郎（同姓ではあるが、金港堂の原一族とは無関係）は、明治末期に金港堂の当時の経営者より依頼されて社長となり、数年間整理を行ない復旧した上で社長を退き、原亮三郎、原亮一郎など一統に返却したという。金港堂と商務印書館については、次のように書いていらっしやる。

「当時原亮三郎（原家中心）が個人で上海^マ印書館に投資し、長尾雨山先生が現地に定住し経営しておりましたが金港堂との投資関係はありませんでした」（1979.6.26付樽本照雄あてハガキ）

原亮三郎個人の投資で、企業間の投資ではない、とおっしゃるのだ。驚いた私は、つづけて小谷重、加藤駒二も原亮三郎が個人で上海に派遣したのかと重ねておたずねした。

「加藤駒二、小谷重両氏皆金港堂書籍会社に勤務せし方々で、加藤駒二さんは経営面で金港堂の専務に与つた事もあります。小谷重氏帝大出の文学士であつたと思ひますが、商務印書館の役員（取締役）に原亮三郎翁に頼まれて移住した事があると思ひます。加藤氏上海に居つたかも知れぬが本務は金港堂本社在勤でありました」（1979.7.3付樽本照雄あてハガキ）

原亮三郎個人で投資を行ない、それにとまなう人事も彼個人の立場で取り計らったという事実が明らかになった。

関係者でなければ知ることのできない、まことに貴重な証言であるといわねばならない。それ以前の文献で、日本のものであれ中国のものであれ、ここにいうような事実に言及したものを、私は、見たことがない。

私がこれを驚くべき事実である、というのには理由がある。

それまで、金港堂と商務印書館の合併といいならわしてきた。組織としての金港堂と商務印書館が、それぞれしかるべき手続きをへて議決を行ない、双方が合意して合併会社を結成したという意味だ。日本側の資料はもとより、中国側の資料もそのように考えて説明している。

ところが、実質は、原亮三郎の個人投資だったというのだ。誰が資金を出そうと、結果として金港堂と商務印書館は合併会社になったことにはかわりはない。ただ、そこにいたるまでの経過が、それまで考えられていたものとは違っていったという点で、私は驚いたのだった。

金港堂そのものが、株式会社に改組したとはいえ、実質は「原の個人商店」[稲岡勝1994b:98]にすぎなかった。そうならば、原亮三郎にとって、企業と個人の区別がつきにくい。

個人投資であろうと、合併会社になったからには登記が必要となる。外務省外交史料館に公文書として関係書類が存在しない理由は、別のところに求めなくてはならない。登記にまつわる謎を解決するためには、別の資料をさがさなくてはならなかった。

12 金港堂の中国大陸進出計画

その動機

原亮三郎が中国大陸に進出する気になった動機はなにか。

ひとつは、金港堂の経営事情がある。前述のように教科書売込みの熾烈さに少々嫌気がさしていた。

日本国内では、小学校教科書から手を引き、中等教科書類へ重点を移す。休止していた雑誌類出版を復活させる、などの方針変換を摸索している。

もうひとつには、原亮三郎自身の教育に対する関心であろう。

もともと教育について関心をもっていなければ教科書出版にも手を染めなかったはずだ。原亮三郎その人について次のように述べる文章がある。

「君（注：原亮三郎）は徒に教育書肆と称すべき人にあらず教育の実際に於て

最も熱心なる人なり明治十一二年人尚未た教育の事を口にせざる時に於て君は既に西村貞氏等と相謀り東京教育会を組織し労力と費用とを惜まず大に教育の普及策を講じ其後全会が漸次拡張して大日本教育会と改称するや君は其資金として年々三百円を寄附し以て全会の益々発達せんことを図りしに云々」[瀬川光行1893:9/56-57]

「明治二十年海防費献金の挙あるや渋沢栄一氏等君を説ひて献金あらんことを勧告せしに君は教育普及の急は尚ほ海防の急に勝れりとなし則ち海防費に献納すへき金員を以て帝国大学及高等商業学校に寄附して学生の貸費に充てり則ち大学に寄附するものは年額一千円にして商業学校は三百円なり」[瀬川光行1893:9/57]

もともとは個人を賞賛するための文章とはいえ、これらの証言を見れば、原亮三郎が持っていた教育への関心が、中国大陸へ向かったとしても不思議はない。

さらにもうひとつは、時代の風潮だ。当時、中国の新教育勃興に対して、日本側にもそれに応じた関心の高さがあった。時代の風潮が、原亮三郎を中国大陸に導いたと考えられる。

宮島大八らの設立した善隣書院、岸田吟香、阪上半七、名塩佐助、坂本嘉治馬らの勸学会（上海に分会）、伊沢修二らの泰東同文局、地図と地球儀を輸出した松邑三松堂、下田歌子、山田準一らの作新社（上海で開業）などなどが、陸続と設立されている時代だった[小林善八1938:926]。

伊沢修二の泰東同文局について報道された新聞記事を見てみよう。

清国の文化開発機関 / 泰東同文局

泰東同文局の設立 今回伊沢修二氏等の發起にて題号の如き局を東京小石川区小日向第六天町なる同氏邸内に設け、主として清国新政の需要に必ずべき軍事、警察、教育、法律、各種學術に関する書籍及び其の各種学堂の教科書を編纂著述し、其の兼業としては清国に於ける学堂用の理科学器械を代購し、教師の聘用、新聞文書の翻訳を引受け、其の出版及び委託販売の図書は、日清両国政府の版權を取ることにし、毎月局報を発行して、其の事業の報告を為す筈なりといふ[大阪朝日新聞1902.3.10]

以上の新聞記事を読めば、中国向け出版社といっても、いくつかの形態があることがわかる。泰東同文局の場合は、本拠は日本に置いたまま、中国への教育用機器の代購、教師の派遣、翻訳、図書の委託販売などを行なう。

これに比較すると、原亮三郎の中国大陸進出は、形態を一步押し進めたものとなっている。中国企業との合弁という形をとるからだ。それにともない、日本から教科書編纂のための人員を派遣する、さらには印刷方面にも人員派遣を含めて協力を惜しまないということになる。

その時期

原亮三郎は、はたしていつごろから中国大陸に対して興味を持ち始めたのか。それを証明する資料は、今のところそれほど多いとはいえない。

(明治33年 1900) 6月20日 金港堂理事来テ日華学堂学生一同ヲ招待シテ、清国学校二用ユル普通学教科翻訳二付キ学生ノ意見ヲ聞カンコトヲ求ム
[実藤恵秀1981:97]

これは「日華学堂日誌」の一条である。日華学堂というのは、中国人留学生のための学校で、1898年(明治31)、高楠順次郎によって東京に設立されている。金港堂が、中国の教科書にまで業務を拡張しようと準備をしていたこと、しかも、それが1900年(明治33)という早い時期であることがこの日誌からわかる[樽本照雄1983a]。

もうひとつ、以下のような資料がある。金港堂の海外投資について記述したものだ。

(前略)是より先き、同社(注:金港堂)は清国に於て使用すべき教科書出版に着目し、明治三十二年一篇の主意書を作りて、之を彼国に同情を有する諸士に頒布し、先づ其事業の端緒として清国用小学読本を編纂したることありしが、会々同社の業務多忙に赴きしが為に、未だ力を此に致すこと能はざりき、次いで三十六年に及び清国用出版物に着手すべきの議を定め、亮三郎

氏は二社員を伴ひて上海に赴き、種々調査する所ありき、時に上海商務印書館として印刷兼出版を営める清人の会社あり、我と合同に意あり、数回交渉の未従来の団体を解き、更に彼我对等の権利を以て遂に合同して、新たに商務印書館を設立するに至れり、爾来同館は資本金を増加して大に業務を拡張し、又日本より各方面の専門家を招聘して編輯、印刷及び営業等の改善を図り、好成績を挙げつゝありと云ふ。(後略)[開国五十年史1908:292-293]

「金港堂書籍株式会社」という表題のもとに、店舗の写真をかかげ、その空間に役員の名前が「社長 原亮三郎/取締役 原亮一郎/取締役 加藤駒^マ治/取締役 小谷重/取締役 柳原喜兵衛」のように示されている。

この資料は、新しい証言を示している。中国大陸で使用する教科書出版の計画が、1899年(明治32)にはすでにあつたというのだ。計画ばかりか、「清国用小学読本を編纂したることありし」という。実際に、中国人用の小学読本を編集したという箇所には、まったく驚くのだ。やる気は充分だった。日華学堂の学生から意見を集めた1900年(明治33)より1年もさかのぼる。ということは、金港堂は、中国向け教科書の編集に着手しながら、幅広く中国人からも情報を収集していた事実が明らかになる。

1899年といえば、商務印書館が創業して2年たつかどうかの時期だ。

創業直後の商務印書館は、英語教科書の『華英初階』は発行してはいた。しかし、自身ですら小学生用国語教科書の発行など考えていなかったころのことになる。

1902年(明治35)の教科書疑獄事件よりもずっと早い時期からであることにも注目しておきたい。研究者のなかには、金港堂が中国大陸に進出する意図を持ったのは、教科書疑獄事件がきっかけだった、と誤解しているものが少なくないからだ。

さて、商務印書館と合併会社であつたことに言及する文献はいくつかある。上の文章もその一端ではある。しかし、その多くは概略にすぎない。合併にいたる経緯、その解消などについて詳細に説明した文章を、私は目にすることがない。日本と中国の会社が合併組織を結成するわけだから、どちらか一方の資料だけで

は不十分なのだ。日本で文献を中国側の資料と突き合わせる作業を平行して進めることになる。自分で収集した資料と研究者から提供を受けた資料をもとにして、金港堂と商務印書館の合併全体の基本的構造をようやくつかむことができたように思う。次に述べたい。

13 金港堂から商務印書館への投資

1891年（明治24）、改組された金港堂書籍株式会社が、実質は原一家の同族会社にはかならないという事実は、金港堂と商務印書館の合併を考える際に意味を持ってくる。

原一家の中心は、亮三郎である。亮三郎が、個人的な興味で商務印書館に投資することを決定するのは自由にできる。しかも、それが原亮三郎個人なのか、金港堂の方針なのか、区別がつかないのだ。原亮三郎の個人の投資であり、また同時に金港堂の投資でもある。

1900年（明治33）に社長の座を息子亮一郎にゆずった。しかし、商務印書館との合併に触れる文章の多くは、明らかに社長の座を降りた後の1903年（明治36）の合併であるにもかかわらず、やはり「金港堂の原亮三郎」と書く。例をいくつかあげてみよう。

- 1 「清国向の書籍出版概況及東亜公司設立情況」『図書月報』第3巻第5号
1905.2

三十六年中金港堂原亮三郎氏が上海に於て張、夏、^{ママ}芳三氏等の合資たる印書局と合同になれる商務印書館は日本書籍商と清国商人との合同会社の嚆矢にして加藤駒二氏上海に在つて事業を監督せられ編纂、印刷、製本、販売等の事務整頓し益々隆盛にして、既に或省に於ては其発行に係る書籍を教科書に採用せられつゝありと聞く。（樽本注：張は張元済、夏は夏瑞芳を指す。芳は鮑の誤り）

- 2 青柳篤恒「清国に於ける出版事業」『中央公論』第20年第8号1905.8.1。

(圈点は省略)

今日日本の出版事業者で、清国(上海)で大いに発達せんとして居るのは、金港堂主原亮三郎氏と清人某の共同事業にかゝる『商務印書館』で、これは既に今日でも総ての機関が整頓して、印刷部あり、編輯部あり、営業部あり、中々盛大なるものである。

- 3 大橋新太郎「支那の出版業」『東京経済雑誌』第1324号1906.2.17

.....故に書肆金港堂の如きは支那人と共同して商務印書館と称する機関を香港に設けて其翻訳出版の業を営んで居る次第です、抑支那の出版業者は多く自国の法律に従ふを欲せず香港政庁の登録を得て営業をして居る.....

- 4 「金港堂の海外投資」大隈重信発起『開国五十年史附録』1908.10.18

.....次いで三十六年に及び清国用出版物に着手すべきの議を定め、亮三郎氏は二社員を伴ひて上海に赴き、種々調査する所ありき、時に上海商務印書館とて印刷兼出版を営める清人の会社あり、我と合同に意あり、数回交渉の未従来の団体を解き、更に彼我对等の権利を以て遂に合同して、新たに商務印書館を設立するに至れり

- 5 内山清、山田修作、林太三郎合著『大上海』大上海社1915.8

.....一時多大の負債を生じ収支相償はずして將に解散の非運に遭遇せんとするに当り恰も上海滞在中の金港堂主原亮三郎氏之を聞き日支合同の計画を為し明治三十六年遂に合同資本六十萬元を以て漸く其類運を挽回し以て今日の盛大に及びたるものなり

- 6 長澤規矩也「近代支那の図書及図書館」『アジア問題講座』第10巻 創元社1939.10.22。421頁

.....光緒二十三年に印刷業を目的として創立せられ、数年ならずして我が金港堂の資本を入れ、出版界印刷界に大発展した商務印書館が出版の旁、印

刷を発展せしめた。

- 7 実藤恵秀「初期の商務印書館」『日本文化の支那への影響』蚩雪書院1940.7.5。246頁

この時に当り商務印は金港堂より十^{ママ}万円の資本を迎えると同時に、印刷専門から、印刷出版へと飛躍する。編訳所の編輯長には高師教授たりし長尾雨山を迎へ、その下に日人並に留日畢業生の編輯陣を布いて新しく売り出された教科書は断然他の書局の追隨を許さぬところがあつたので、……

- 8 実藤恵秀「支那新書店盛衰記」『図書館雑誌』第34年第12号（第253号）日本図書館協会1940.12。543頁

この頃、商務印書館は日本の金港堂と正式に合作し、十^{ママ}万円づつの資本を出し合つて事業を拡張し、印刷の外に出版をもすることになり、明治三十五年、長尾雨山を迎へて編輯長として盛に新規軸を出し、終に支那出版界の王座を占むるに至るのである。

注意深く読めば、原亮三郎という個人名が出されているのだから、商務印書館への投資は原亮三郎個人がなしたものだと思つていいかもしれない。しかし、その事実を知らない人は、金港堂が投資を行なったものだと思つて止めるのが普通だ。原亮三郎個人と金港堂を区別することは、もともとできないのだ。

商務印書館に投資したのは、原亮三郎一個人であつた。しかし、資金を投入したばかりでなく、長尾雨山および金港堂社員の小谷重、加藤駒二らを商務印書館に送り込み、同族で日本人株の過半数を保有している事実がある。最初は原亮三郎個人の投資から出発してはいるが、その後の株の取得から見れば、実際には原一族の経営に拡大している。個人の投資からはじまったものの、金港堂を巻き込んだ形態に変化しているのだ。

金港堂は、株式会社とはいえその実態は原一家の個人商店だったことを考えれば、そもそも法人と自然人を区別することは無意味かもしれない。金港堂といえは原亮三郎であり、原亮三郎は金港堂の看板であつた。原亮三郎個人の投資は、

社会一般的に見て、金港堂の投資と考えられてもしかたがなかったのだ。

原亮三郎と中国大陸 - 商務印書館

金港堂と商務印書館の合併、と簡単に、あたかも当然のように言っている。しかし、考えてみれば、上海には他にいくらでも出版社はある。なぜ、よりもよって商務印書館なのか。

原亮三郎にとっては、合併先が商務印書館でなくてはならない理由があるのだろうか。

そこで、原亮三郎は、商務印書館になぜ投資する気になったのかという疑問が生じる。

調べてみれば、ここにも必然があるのだ。人的関係による必然性である。

14 山本条太郎

原亮三郎と商務印書館を結びつける鍵というべき人物は、山本条太郎である。

商務印書館は、金港堂と資本提携を行なう直前の1900-1901年当時、業績がふるわず、氣息エンエンという状態であった。もし、原亮三郎に利潤追求の目的でもあったとすれば、とても投資の対象となりうるような会社ではなかった。それをあえて提携に踏み切らせたのには、何かあるはずだ。この肝心の要点に山本条太郎が位置している。

山本条太郎という人

山本条太郎は、「曾ては大三井の重鎮として、満鉄王国の総帥として、将又政友会の巨頭として、財界政界に声望並びなく、内外にその雄才大略を謳はれた不世出の巨人」[山本条太郎1942:1]と表現された。その『山本条太郎伝記』は、本文だけでも前、後篇にわけ958頁という大冊にまとめられている。

まず、本書の目次にそって山本の三井物産時代の行動を概観してみたい。ただし、山本が上海支店長時代に商務印書館に関係する時期までに限る。それ以降の

部分、目次でいうなら「第十二 日露戦役時代の活躍」、「第十三 総監督時代」、「第十四 三井物産の重役」、「第十五 海軍事件」および後篇 シーメンス事件に連座して三井物産を辞職後、実業界、政界に進出した彼を扱った部分は、本稿と直接、関係がないのでふれない。

三井物産上海支店長

「第一 その家庭」山本条太郎は、1867年（慶応三）十月十一日、御坊主（剃髪姿をして城中の雑用にあたる役目）をしていた父条悦、母みつの長男として福井城下に生れた。

「第二 東京転居及び少年時代」1872年（明治5 六歳）、一家をあげて上京、松平邸内に居住する。礪川小学校を終え、共立学校（大学予備門の予備校）に入学したが、1881年（明治14 十五歳）肋膜炎を患い学業を断念せざるをえなかった。

「第三 三井物産会社に入る」1881年（明治14）、叔父吉田健三（『東京日日新聞』『絵入自由新聞』を創刊。養嗣子茂は後の吉田茂）のすすめで三井物産横浜支店に小僧として入る。

「第四 三井物産東京本店に遷る」1882年（明治15 十六歳）、店則違反の相場に手を出し、本来ならば解雇されるべきところを本店に転勤を命じられた。勤めのかたわら英語、漢学、習字の修得にはげんでいた1883年（明治16）、政府の米価釣上策のため三井物産に米の買い上げが命じられたが、この米の買いつけで敏腕を発揮し、異数の抜擢をうけている。1886年（明治19）、明治政府高官の北海道視察に随行した馬越恭平の秘書役をつとめたが、またまたドル相場に手を出したことが発覚し、懲罰の意味で物産所有の頼朝丸に乗船するよう命じられた。

「第五 頼朝丸に乗組」頼朝丸は、石炭を九州から主として上海に運搬することを業務としていた。山本は、船長ベンジャミン・ゴールより英語、その他を教授され、1年3ヵ月の頼朝丸時代をただの左遷に終わらせていない。この間、1887年（明治20）、農商務省鉱山局の命により北清および開平炭鉱を視察している。頼朝丸に乗り組み、九州 上海間を往復したことが、のちの山本と上海を結びつける契機となった。

「第六 上海前期」頼朝丸乗り組みで得た船舶と石炭の経験を見込まれ、1888

年（明治21）3月（二十二歳）、三井物産上海支店勤務を命じられると船舶部と石炭部の仕事を兼ねた。この時期における山本の主要な仕事は、大豆取引の開拓、商況視察および上海紡織会社設立の計画である。

「第七 満洲一番乗り」山本は営口に前後三回出張し、中国東北地方の大豆、豆粕を日本に輸入する端緒を開き、大豆取引の三井物産独占に貢献した。

「第八 日清戦役と翁の活躍」1894年（明治27 二十八歳）、臨時上海支店長代理を命じられる。日清戦争に際し、山本は上海にとどまり軍需品を買い入れ供給したり、被服類、艦用石炭などを日本に輸送するなどし、また諜報機関にも協力している。一時、本店詰めになるが、その間に朝鮮京城および平壤地方の商況視察（1894年<明治27>10月）、北清占領地へ商務視察（1895年<明治28>1月）を行なう。その報告書「占領地及朝鮮平安道商況視察復命書」は、山本の通過した土地の風土、物産、住民の生業、生活状態、風習、通貨、度量衡、租税、交通、運輸、取引方法などを詳細に記述したもので、三井物産が後に支店を設置する際の指針を得たばかりでなく、外務省にも利用された。

「第九 上海支店副支配人」1895年（明治28）6月、日清戦争終了後、三井物産上海支店を再開するために上海出張を命じられた。物産の子会社である上海紡織会社（第1次）の支配人となるが、会社は、結局、設立できなかった。しかし、本稿の主題である山本と商務印書館を結びつける遠因となったのがこの上海紡織会社設立の試みである。上海紡織会社が設立されず、山本は上海支店に復職したが、1897年（明治30）大阪支店に転任するまで、物産上海支店副支配人として、中国生糸の海外輸出を促進する一方、日本綿糸布を中国に輸出する先鞭をつけた。その他、買弁（コンプラドー。外国商人と中国商人の間に立って口銭をとる仲立商）を廃止し、それにかわる人材を養成するための修業生制度を設けたり、空船とならぬよう船繰りを合理化したり、山本の辣腕はこの上海前期時代に遺憾なく発揮された。

「第十 大阪支店時代」1897年（明治30）10月（三十一歳）参事に昇格し、大阪支店棉花系首部長を兼ねてから、1901年（明治34）9月上海支店長になるまでの満4年間は山本の大阪支店時代である。日清戦争後、紡績業が急に勃興し、その結果産出した綿糸を中国に輸出することが考えられた。山本が大阪支店にやられ

たのは、まさにこの時期で、紡績業の中枢をなしていたのが大阪なのであった。彼が上海支店時代に日本綿糸布を扱った経験がかわれたのであろう。1900年（明治33）、三井物産と関係のある九州紡績の大阪出張店長守山が、綿糸の思惑売買を行ない大失敗をした（守山事件）。山本は、この事件が明るみになる前に欧米視察に出ていたが、同年11月帰国後、連座して減俸の懲罰を受けている。同時に本店参事を命じられたが、これは一種の閑職にすぎず、これも守山事件の余波であった。これより前、1898年（明治31）6月（三十二歳）、原操子と結婚している。この原操子こそ原亮三郎の娘であった。山本条太郎と金港堂のむすびつきでもある。

「第十一 上海支店長時代」1901年（明治34）9月（三十五歳）、上海支店長となる。場所を上海に移しはしたが、業務内容は大阪支店時代と関連の深い紡績事業である。山本は、中国における日本人経営による紡績事業の基礎を確立するが、その最初の着手が興泰紗廠の買収であった。これを上海紡織有限公司として香港政庁に登録する。1896年、成立を見なかった上海紡織会社から数えて8年後のことだ。

興泰紗廠買収の件は、話がむこうの方から持ち込まれてきたのだった。

上海紡織有限公司

興泰紗廠は、1896年、黄潤之により創立され、はじめは裕晋紗廠と称していた。その後、経営者がかわり協隆と改名し、さらに寧波人周熊甫の手に渡り興泰と命名されたという。興泰紗廠は、露清銀行の買弁袁士荘の後援を受けていたが業績がふるわず、露清銀行からの借入金の償還に窮して、売却方を三井物産上海支店に申し出たものであった[山本条太郎1942:158]。

当時、山本の部下であった幡生弾治郎は、つぎのように回想している。

又先見の明と決断の迅速は故人天稟の長所であつて敬服した事は一再到止まらぬが、今尚記憶に新らたな一事は明治三十四五年頃の話である、一日支那商印錫章氏と談偶々露清銀行に担保流れとなつて居つた興泰紡績工場買収の事に及び之れを故人に謀らんとしたが、其当時上海の各紡績会社は孰れも

数年来無配当を続け氣息奄々の状態であつた故、斯る際に仮令一小工場にもせよ、之れを買収せんとするが如き提案は容易に故人の承認を得る望みなく、例の一喝を喫する位が落と思はれたため、印氏と謀し合せ種々の術策を弄して百方説得に力むる積りで扨て案を持込んで見ると、豈計らんや開口一番一議にも及ばず賛同され、銀行との交渉も故人親ら之れに当り、約半時間の後には正式の売買契約書が卓上に置かれた[幡生弾治郎1936:56]

明治三十五年の真夏の頃であつた。私は一日、取引先の綿布商印錫章と相談の上、興泰紗廠買収のことを山本氏に進言した。そのときの翁との質問応答は

(問) 成算があるか。

(答) 十分の成算があります。それは第一に買弁制度を廃して積弊を除き、第二に夜間操業を開始して能率を高め、第三に支那流の緞を日本風に改めて糸価の向上を図ります。

(問) 買収価格は何程か。

(答) 最高四十万両見当であります。工場の負債額がこの額ですから。かういふ極めて簡単なものであつたが、氏は即座に出入りのブローカーを呼寄せ、露清銀行に交渉せしめて三十万両で話を纏められ、ついで自から銀行に出かけて売買契約に査印された。当時における三十万両は相当の巨額であつたのみならず、当時紡績事業への投資は危険視されてをつたにも拘らず、何等躊躇するところなく、しかも本社の許可も待たず、独断で買収を決行せられた山本氏の度胸には全く敬服させられた[山本条太郎1942:158-159]

同じく、山本の部下であつた高橋敏太郎も次のように追憶している。

或る日の午前十一時、山本氏を訪ねた一英人が、上海紡績を露清銀行が手放す考へで、十六万両と言ふ値段である、三井が買ふ気ならオツプアーを取つてやるとの事を申し出た。ノ斯様なる機会を逸する山本氏ではない、直に其日の午後三時までのオツプアーを手に握り、到底東京本店へ交渉したり、

許可を得る時間はないので、兎に角買収する決心で、馬車を飛ばせて、英国銀行の友人の間を駆け廻り、漸く金融はつく事になつて、綺麗に午後二時に先方のオツプアーをアクセプトせられ、受渡は其日の午後六時と決定した。ノ夕刻になつて楊樹浦の上海紡績の工場に臨んだ山本氏は、露清銀行の代表と、工場支配人室に立ち合ひ、机の上へ工場の各方面の鍵をひと山に積んで、景気好く三鞭酒の数本を抜き、互に握手乾杯を以て上海紡績の受渡しは無事に終つた[高橋敏太郎1936:249]

本社の意向を仰ぐといったことは一切せず、山本の独断専行である。本店の許可なく行なう事業に、上海の英国銀行が融資したところから、山本個人の信用度をはかることができそうだ。

1902年12月26日、英国会社法の下に同社を株式会社とあらため、八年前、計画のまま成立することのなかった上海紡織会社の社名を復活させて香港政庁に登録した。

登録年月日 明治三十五年（一九〇二年）十二月二十八日
社 名 上海紡織有限公司
資 本 金 五十万両 一株五十両（払込三十五両）一万株
露清銀行借入金 二十二万五千元（五箇年賦）
取 締 役 山本条太郎、ホラチオ・ロバートソン、印錫章、呉麟書[山本条太郎1942:160]

登記することはしたが、本店にはなかなか承認されなかったようだ。前出高橋敏太郎の追憶につづけて、

其晩から東京本店に対する策戦計画が色々と研究された。山本氏の勇氣と先見で、独断を以て買収せられた上海紡績も、当時の筆頭理事益田孝氏をして是れを承認せしむるには、容易の事でないらしく見えた。遂に六ヶ月が経過した。ノいつまでも放任して置く訳には行かぬので山本氏は自ら、上京して

益田氏に親しく面談、支那に於ける紡績事業の将来を説き、上海紡績を三井が持つ事は、支那に於ける三井の諸事業の、根本商策として効果的なる所以を論じ、国家の為めにも、対支政策として重大なる理由を諸方面から説明献策し、遂に益田氏の快諾する所となつた、夫れが今日の巨大なる上海紡績である[高橋敏太郎1936:250]

という証言がある。

1903年(明治36)3月31日に開催された重役会において、上海紡績会社に関する最終決定がなされた。

一上海紡績会社株所有ノ件 可決

這回上海屈指ノ綿糸布商公信、吳仲記、大豊等組合ヒ興泰紡績所(綿糸紡績式万余錘)ヲ買収シ営業ヲ開始スルニ付、当社上海支店ヘ左ノ交渉有之候

一、英国法律ノ下ニ株式会社ヲ組織シ上海紡績会社ト称スルコト

二、資本金ヲ五十万兩トシ、之ヲ壹万株ニ分チ壹株ノ金額ヲ五十兩トシ、内參拾五兩宛ヲ即時払込ム事、残余八当分払込ノ必要ナシ

三、総株式ノ四分ノ三即チ七千五百株ハ公信、吳仲記、大豊等上海綿糸布商ノ重モナル者ニ於テ引受ノ事

四、物産会社上海支店ニ於テ同紡績会社ノ代理店(Agent)ヲ引受呉度トノコト

五、右代理店引受ニ就テハ利害ノ關係ヲ密ナラシムル為メ、株式若干ヲ引受呉度コト(但是八他ニ引受手ナキ為メニハ非ス)

右上海紡績会社ノ実況ハ高辻技師ニ托シ出張調査セシメ候処、其報告ハ別紙ノ如ク有望ニ有之、從テ「インベストメント」ノ一方法トシテ其株ヲ所有スルモ、亦不可ヲ見サル程ニ候得共、此点ハ全ク之ヲ有候間、之ヲ度外ニ措クモ、右会社ノ株主ハ何レモ当社ノ重要ナル綿糸布取引先ニ有之候間是等ノ人ト密接ノ關係ヲ持続スル為メ、株式ヲ有スル事ハ綿糸布商売拡張上策ノ得タルモノニ有之、即チ当社綿糸布商売ノ進捗ヲ企図スル点ヨリ立言スルモ、前記紡績株所有ノ事ハ極メテ緊切ヲ感スル所ニ付、此際左案ノ通り実行致度候(後略)[三井文庫1972:444]

事実からいえば、上海紡織会社は山本条太郎が取締役に名を列ねているいわば山本個人の会社としてすでに設立されていた。ところが重役会議事録を読めば、その一、四と五から、英国の法律の下に株式会社に改組するにあたり一部株式を物産が所有すると同時に、物産上海支店がその代理店を引き受けてはどうかという提案になっている。株式を所有することは、物産が「綿糸布商売ノ進捗ヲ企図スル点」から見て有利であることがあくまでも強調される。上海紡織会社が、すでに香港政府に登記されているという事実は、わざとボカされているのだ。これが高橋敏太郎のいう、「東京本店に対する策戦計画が色々と研究された」ということのひとつなのであろう。

『伝記』の作者は、ここらあたりをよくのみこんでおり、「即ち翁はその後自ら東京本店に到り、容易に首肯しなかつた本店首脳部を納得せしめ、同社の要位に日本人を入れて経営に刷新を加へたので、これまで損失つゞきであつたものが、一年の後には一割七八分に当る利益を挙げ、秋風落莫の上海紡績界に一大センセーションを起したのである」[山本条太郎1942:160]と述べたあとに、前記香港政府に登記した文章をかかげ、あたかも東京本店の承諾を得た後に登記を行なったかのように印象づけようと苦心している。

原安三郎『山本条太郎』の該当箇所には、「すなわち、山本はその後自ら東京の本社に赴き、難色を示す本社首脳とかけ合つてこれを納得させるや、三十五年十二月には、八年前の上海紡織の社名を踏襲して、英国会社法の下に香港政府に登記をすませた」[原安三郎1965:97]と仕上げをする。

それはさておき、紡織会社の経営を軌道にのせる方法も山本独自のやり方であった。山本自身の説明によると、

本店重役と相談の結果、元来支那にゐる外国人の代理店のやり方は、一つ紡績会社の代理店をすれば、その製造品及原料買入について一々口銭をとるのでありますが、我々の会社はその本体の紡績会社が利益のないのに、これを引受けて営業してゐる代理店が、口銭をとるやうでは、支那で長く商売をして、支那人の信用を得る所以でないといふ趣意から、その会社の

使ふ棉の原料等は無口銭で取扱い、もし利益があつたら何程かの割（口銭）を貰ふ、即ち会社が利益を得たならば、幾分かの分配にあづかるといふことにしました。その結果、支配人とか職工の重立つたものとかは、悉く日本人を使つて営業致しました。さうして幸に好結果を得まして、昨年の計算では、丁度一割七八分に当る利益を得ました[山本条太郎1942:164]

ということになる。この上海紡織会社が一年後に利益をあげたことから、山本条太郎の経営力が確かだという評価が定着した。

同じような例として、1905年、盛宣懐が彼の所有する大純紗廠の経営を山本に依頼してくる。山本は、これもまた最初の一年間で出資者に十割余の配当を行なった。翌1906年、契約期間満了にともない同工場を買収し、その中心者が山本条太郎、蘇葆杜、印錫章の三人であったので三泰紡織株式会社（三泰紗廠）と名付けた。

これをさかのぼる数年前の1901年当時、業績不振で四苦八苦していた商務印書館の経営者が、山本条太郎にその経済的救済を依頼してきたのも、彼の経営能力を見込んでのことだったはずだ。また、山本は、上海紡織会社立ち上げによって彼の実力のほどを中国人にむかって十分に示しもした。

商務印書館

まず、商務印書館に関する山本条太郎の回憶談（1904年<明治37>8月東京三井集会所における談話会）を聞いてみよう。

支那人が十万円程の資本で建てた出版会社がありましたが、これも昨年（樽本注：1903年）来資本を倍額にして日本人から半分、支那人から半分出すやうにして、編纂者の外、日本から職人を二三十人連れて来て、支那向きの教科書を拵へる仕事を始めました。これなどは日本とは違ひ、教育制度が甚だ不十分でありますので、案じて居りましたが、二三个月前に発行した小学校用の読本であるとか、或は英文の本、ごく初歩の体操、唱歌といふやうな本まで拵へた結果が、学校そのものには余り売れないが、却て家庭に盛に

売れ、子供がこれを見るのでなくして、親の方がそれを読むといふ実況で、初めに出したものは千字文の売行を凌駕するとまでいはれた程の勢でありました。しかしこれ等の仕事は無暗に競争者が出来ては困るのでありますから、なるべく競争者の出来ないやうに願ひたいと思ふのであります。これは如何に支那通の外国人でも企て及ばない事業で、何故我々は今日までこれをやらなかつたかと思ふのであります。それで又道楽半分に日露戦争記といふやうなものを作つて出版して見ると、中々よく売れる。これ等はみな明らかに書物を書いた者、編纂した者、校正した者が、日本人であるといふことを書いて出して差支ないので、随分支那通の方から見ると、孔孟の古い頭で固まつたところへ、新しいものを持つて行つても売れますまいと思ふだらうが、甚だ案外な訳であります[山本条太郎1942:175-176]

山本の談話には、具体的な人名が出てこない。だが、『伝記』作者はその間の事情を次のように説明している。

同書館は最初盛宣懐の資本系統に属し、夏瑞芳の創設したもので、規模小さく且つ事業に不慣のため微々として振るはなかつたが、翁が紡績工場において示した整理振りを見て、経営者はこの方面にも一臂の力を仮さんことを翁に請ふた。よつて日支両国民の共同事業となし、資本金を二十万円に増加すると同時に、わが国から編輯出版、その他職場の熟練者を招いて実務を担当せしめた。日本側の出資は、翁の姻戚にして斯業の経験に富める書肆金港堂主原亮三郎氏を懇懇して、これを引受けしめ、編輯の方へは長尾雨山（^{ママ}模太郎）、出版、印刷の方へは木本、小平などいふ人々が上海に渡り、夫々の担当部面に応じて盛に腕を揮つたものである。 当時内藤湖南博士なども招聘されることになつてゐたが、これは中止となつた。斯くて瞬く間に同書館の事業が支那の読書界、出版界を席捲するといつた活況を呈したのである[山本条太郎1942:175]

「同書館は最初盛宣懐の資本系統に属し」という箇所は、意味不明。商務印書

館と盛宣懷に関係があるという中国側の文献は、見たことがない。勘違いだろう。

内藤湖南の名前が出ているのが珍しい。招聘が中止となった、というのだから、計画段階でその予定だったものと推測できる。金港堂と商務印書館の合弁が、かなりの準備をしていたことの証明となろう。また、同時に、内藤湖南の名前が掲げられていることによって、ひとつの推測が成立する。

前に、「金港堂が合弁先の商務印書館に、なぜ長尾雨山を派遣したのか」と疑問を提出しておいた。内藤湖南を商務印書館に派遣する予定にしていたが、長尾雨山が教科書疑獄事件によって高等師範学校を辞めることになった。そこで、急遽、長尾雨山に変更になったのだと考えられる。金港堂側が、日本を代表する人物として長尾雨山を派遣することは、その實力からして内藤湖南に勝るとも劣らないと判断してのことだったろう。

文中にある「翁の姻戚にして斯業の経験に富める書肆金港堂主原亮三郎氏」とは前述のごとく、1898年（明治31）6月、山本条太郎は原操子と結婚したことを指す。この操子は、原亮三郎の三女である。

商務印書館 = ? = 山本条太郎 = 妻操子 = 岳父原亮三郎 = 金港堂、という人事で結びついていた。

「？」とした部分には、当然、商務印書館側の人物が想定されるが、これについては後述する。

山本条太郎から依頼を受けた原亮三郎は、小谷重と加藤駒二をともない1903年（明治36）10月11日、神戸出帆の伊予丸に乗船、上海から北京への旅に出た。嵐のような教科書疑獄事件が一段落した時期にあたる。

旅行の目的は、表面上、出版界、教育界の現況視察というものであった[教育界1903:140]。

しかし、同行者の小谷重は、「今度の旅行は支那漫遊を兼ね同国の教育及び実業の現状を視察し又教育ある日本人を要する事業もあらば及ぶ限りは之が周旋の労を執りたき目的に有之」[小谷重1903:140]と書いて、そのあたりの事情をおわせている。明らかに商務印書館との資本提携を具体化するための旅行である。

小谷重とともに教科書疑獄事件では有罪判決が下された長尾雨山は、原亮三郎らに遅れること約1ヵ月半の12月1日、河内丸にて神戸を出港し上海にむかった。

長尾の略歴には、「明治三六年（一九〇三年）上海に移住、商務印書館に入り、編訳を主宰」[長尾正和1965c:379]とあるのを思い出してほしい。

一方、原亮三郎は、翌1904年（明治37）2月3日、帰国した。「清国の学業視察を兼ね其教科書売込の目的を以て渡清せし原亮三郎氏三日伊予丸にて香港より着神直に帰京」[大阪朝日新聞1904.2.5]という新聞報道がある。

1904年（明治37）、『教育界』第3巻第7号の「外国彙報」欄には、「清国に於ける金港堂の事業」と題して商務印書館との業務提携を大々的に謳うに至る。

昨年十月原亮三郎氏は、社員小谷重加藤駒二両氏と共に清国漫遊を兼ね事業経営の為め南清に赴かれしが、其の結果金港堂は、上海にて支那人の設立に係り印刷兼出版を業としたる会社と対等の権利を以て合同し、新たに一大会社を組織するに至れり。而して其の会社には、以前の名称を継承して商務印書館と命名せり。（中略）曩に金港堂よりも編輯員店員其の他印刷製本彫刻等の技術に巧なるものを選抜して二十余名を派遣したるが、何れも支那人に打雑りて各々専門とする所を担当し、彼を指導誘掖して其の短処を助長するに勉め居れり。而して其の結果次第に改良の実蹟はれ、銅版写真版石版電気版の如きも新に着手することゝなれり。尚先方よりは業務見習の為近々支那人職工若干名を当方に送り越す都合なり。（中略）尚今回日清両国の提携を主義とせる月刊雑誌『東方雑誌』をも発刊し、営利以外日清両国の将来の為に尽さんとせり。印書館の編輯長は張元濟と云ふ、進士試験に及第して後、曾て中央政府に職を奉じ、又南洋公学に長たりしことあり、当世新人物の一人として国中に知らる。編輯員には張氏の外、伍光建（英国大学卒業）夏曾佑（旧知県）高鳳謙（旧浙江大学教頭）等諸氏あり。又近時天演論の著述を以て清国読書界に雷名を轟かせる侯官嚴又陵氏の如きも、客員として執筆しつゝあり。元來商務印書館は少額の資本を以て業を起し、苦心経営して次第に改良拡張したる会社なるが、今は有力なる支那人も株主中に少なからず、随て官辺の信用も頗る篤く、清国郵政局其の他官衙の印刷物の如きは殆ど一手に引受くる有様なり。従来は漢口に支店ある外は売捌所のみなりしが、遠からず北京其の他の要地にも支店を増設する予定なり。因に云ふ此の合同の

結果、商務印書館は、金港堂代理店として彼の地に於て金港堂発行の日本書を販売し、金港堂は商務印書館代理店として、同館発行の図書は勿論、広く支那書を取次ぎて販売することゝなれり[教育界1904:123-124]

「対等の権利を以て合同し、新たに一大会社を組織するに至れり」というが、その実態は原亮三郎の個人的投資であったことはすでに述べた。個人の投資であったが、結果的には会社どうしの合併とかわりはない。

引用文から、金港堂は編集と印刷の両面にわたってテコ入れをしたことがうかがわれるし、『東方雑誌』が「日清両国の提携を主義とせる月刊雑誌」として発刊されたとあるのも興味深い。提携を謳う文章であるから相手側商務印書館の業績不振をありのままに表現することができないのは当然のことだ。

それでも、「元来商務印書館は少額の資本を以て業を起し、苦心経営して次第に改良拡張したる会社なるが、今は有力なる支那人も株主中に少なからず」と焦点をぼかして記述しているところに、その実情をかいま見ることができよう。

「従来は漢口に支店ある外は」という箇所に見られる漢口分館は、1903年に設立され、続いて1906年には北京、天津と、以降陸続と分館、支館を増加させている。

原亮三郎に商務印書館への投資を依頼したのは、山本条太郎であったことは判明した。それでは、商務印書館側の誰が、山本条太郎に話をもちかけたのだろうか。その人物とは、印錫璋である。

印 錫 璋

商務印書館側の仲介者が印錫璋である、と私が考えるに至ったいくつかの資料を下に列挙する。

資料1 1901年、張菊生、印錫璋の二君が本館（樽本注：商務印書館）に参加し株主となり、株式会社に改組する。（商務印書館「四十年大事記」初出未見。[張靜廬1953:252]。なお、[商務印書館1992a]所収のものは「本館四十年大事記」と称し、本文の字句がすこし異なる）

資料2 翌年(1901年)、夏(瑞芳)等は南洋公学訳書院院長張元濟、上海閘北紗廠(紡績工場)主人印有模等をさそい経営に参加させ、『外交報』(商務印書館が出版した最初の定期刊行物)を創刊し、商務印書館を株式会社に改組のうえ資本金を5万元に増資、夏は総支配人になった[熊尚厚1978:291]

資料3 一日支那商印錫章氏と談偶々露清銀行に担保流れとなつて居つた興泰紡績工場買収の事に及び(後略。幡生弾治郎記)[幡生弾治郎1936:56]

資料4 私は一日、取引先の綿布商印錫章と相談の上、興泰紗廠買収のことを山本氏に進言した(幡生談)[山本条太郎1942:158]

資料5 1902年12月28日、上海紡織有限公司を香港政庁に登記した際の際の取締役に、山本条太郎、ホラチオ・ロバートソン、呉麟書とならんで印錫章の名が見える。

資料6 手元に商務印書館版「説部叢書」が数冊ある。そのうち、英国科南達利『遮那徳自伐後八事』(二集第62編1909年初版、1915年再版)、日本押川春郎(浪)『侠女郎』(二集第47編1915年)、俄国託爾斯泰『驃騎父子』(二集第81編1915年)の奥付に、発行人が印有模と記されている。また、『外交秘事』(二集第90編1915五年)には「発行兼著作人・商務印書館」とある左に「右代表人印有模」と明記される。

資料1は、印錫璋が商務印書館の株主になったことをいう。ただし、ここでは印の肩書きが明らかではない。

資料2にある「上海閘北紗廠主人印有模」とは、当然、印錫璋のことである。印が紡績工場を経営していることがわかる。

以上のことから、資料3、4に見える綿布商印錫章とが結びつくだ。(「章」と「璋」のふた通りの表記があり、別の中国側資料でも混同している。今、混同したまま使用する)

山本が三井物産上海支店で行なっていた主なる業務は、綿糸布の輸出入である。綿布商、また上海閘北紗廠主人である印錫璋となんらかの関係を持っていた、と想像するのは容易であろう。

資料5の会社登記に、山本条太郎と印錫章の名が併記してある点は、重要だ。

このことから彼らがかかなり親しい知りあいであることが裏付けられる。

資料6によって、上海閘北紗廠主人印有模は、商務印書館代表人印有模であり、ゆえに印錫璋と同一人物であることが確認できる。

記録によると、「(姓名)印有模(字)錫璋(籍貫)江蘇嘉定(年歳)四三(職業)源盛洋貨号(通信处)上海后馬路貽德里二号」[辛亥革命1981:216]とある。この表は1906年のものであるらしい。年齢の四三というのは数え年であろうから、生年は1864年となる。

印錫璋の行状については、『上海市棉布商業』に散在する断片をつづりあわせても、以下のことくらいしかわからない。

すなわち、1861年創設された平織り綿布(キャラコ)の小売りと卸売をする日新盛の支配人をしていた印子華の息子が印錫璋である。1885年主人の陳理耕が死亡してのち、印錫璋も同じく日新盛の支配人になっている、三井物産との関係が非常に深かった[上海市棉布商業1979.7:24、35、54-55]。

印錫璋の肖像が、夏瑞芳、鮑咸恩、鮑咸昌たちとならべて掲げられている【図1-4】。説明して「印有模先生字錫璋江蘇嘉定県人」と記される。こちらには、1915年11月16日逝去で五十一歳とあるから、数え年として生年は1865年か[莊俞1931:2]。1864年か1865年か、どちらかに確定する資料を、今、持たない。

印錫璋は、父親ゆずりの綿布商をいとなみながら三井物産と手を組み、紡績工場をも経営するという人物であった。

その印錫璋が、1901年、商務印書館の経営に加わっているのだから、自ら株主である商務印書館の立て直しをはかるべく、昵懇の山本条太郎に相談をもちかけたと考えるのは何の不思議もない。

商務印書館 = 印錫璋 = 山本条太郎 = 妻操子 = 岳父原亮三郎 = 金港堂、と前出「？」部分に印錫璋の名前を挿入することができ、こうして人事の環は、完成する。

第3章 日中合併

1 合弁の経緯について（誤解その1）

光緒二十九年十月初一日（1903.11.19）に正式調印された商務印書館と金港堂の合弁について、ひとつの誤解がある。しかも、これが広く信じられて現在に至っている。その根は、莊俞の証言だ。商務印書館の長老の言葉である。誰もが信用するのも無理はない。

莊俞証言には、基づく文献がある。「商務印書館特別株主大会理事会報告」【附録1】という（後述）。1914年に商務印書館が金港堂との合弁を解消した時、株主にむかって説明された理事会からの報告だ。当然、莊俞はこれを知っている。だから、莊俞が往時を回想する文章に理事会報告をとり入れたのも自然な流れなのだ。

ただし、この理事会報告書そのものは、その後、約80年間にわたって公表されることはなかった。存在そのものも知られていなかった。ゆえに、理事会報告書にもとづいて書かれた莊俞証言の方が一般に利用されている。いま、莊俞証言を使用して説明する。

いわく、「当時、日本の金港堂なるものが上海において印書館を設立しようとしていた。資本はきわめて豊富であり、本館は、当時の中国印刷業はすこぶる幼稚で日本人と対抗競争することは絶対的にむづかしい点を考え、ただしばらく利用して合作する方法しかなかった。それでもって徐々に自身の発展をはかることにした」[莊俞1931:3]。

金港堂が印刷会社を設立しようとして巨額の資金を携えて上海にやってきた時、とても競争にならないと考えた商務印書館は、外資を利用するため金港堂と合弁をすることにした、というのだ。

今までも多くの研究論文が、この筋書のとおりを反復引用している（論文の一部をあげる。[章錫琛1964:68][胡愈之1979:207][朱蔚伯1981:146][蔣維喬1987:4][陳叔通1987:7]）。

莊俞証言には、明確な時間の表示がない。ゆえに、次のような誤解を生んだ。

すなわち、金港堂の原亮三郎が上海で印刷関係の仕事を始めようとしていたところに、夏瑞芳がその話にのった、という。誤解のポイントである。

原亮三郎が、いかにも、いきあたりばつりに上海にやってきたような印象をあたえている。しかも、たまたま商務印書館との合併を決定したように読めるのだ。中国で書かれる文章は、ほとんどすべてが以上を踏襲しているといってもいい。

莊俞証言が問題なのは、該文からは、金港堂がかなり早い時期から大陸へ事業を拡大していこうとしていたことを理解することができないからだ。

私にいわせれば、莊俞を源とするすべての文章は、原亮三郎らの上海到着時期を無視した、あるいは事実を把握していないところからくる推測、誤解にすぎない。

事実から出発しなければならない。

原亮三郎が、小谷重と加藤駒二のふたりとともに神戸出港の伊予丸に乗船し上海にむかったのは、1903年（明治36）10月11日のことだった。10月15日、上海に到着する。商務印書館と金港堂が合併の正式調印をしたのが同年11月19日である。わずか1ヵ月の期間しかない。

表向き視察を目的として上海を訪問していた原亮三郎一行が、この1ヵ月間に調査からはじめて、合併相手の選択、会議、合併決定、契約に調印までやってのけたというのだろうか。莊俞らのすべては、ほとんど不可能なことを述べていることになる。

思いつきのように、外国企業との合併ができると考えるのは、現実的ではない。常識的にみて、1ヵ月どころか相当以前から準備工作が行なわれていたはずなのである。

金港堂は、中国において中国人用の教育書を発行する意向を持っていたことはすでに述べた。それは、1899年（明治32）あるいは1900年（明治33）という早い時期であった。

1901年9月から上海に滞在している山本条太郎と東京の原亮三郎のあいだには、連絡が密にとられていたはずだ。夏瑞芳、印錫璋と山本条太郎、原亮三郎の交渉が進められ、合併の条件などある程度の合意が得られていたであろう。中村忠行

は、「勿論、正式調印に至るまでには、かなりの時日を必要としたであらうが、筆者は、前年（注：1902年）秋には大筋で話は合意し、恐らくは仮調印の形で、事業は進められてゐたと思ふ」[中村忠行1986:544]という。

私の予測は、1901年だ。商務印書館の火災（1902年8月22日）以前から合併は計画されていたとすべきだ。

なぜなら、巨大印刷所の新築には時間がかかるからだ。火災発生のすぐあとに新工場が完成しているのを見れば、合併話が持ち上がったその時期は、火災発生から少なくとも1年以上前だと考える。

金港堂と商務印書館の合併話が基本のところでは決定したのは、その時期を絞れば、1901年の第1次増資の後（月日不明）、同年9月に山本条太郎が三井物産上海支店長に就任した後だろう。合併の基本が固まれば、商務印書館の印刷所新築についても、原亮三郎から工事着手の了解が得られる、あるいは原の方から指示が出たかもしれない。

2 創業者高翰卿の証言

金港堂との合併について、もうひとり商務印書館長老の証言がある。

創業者の陳述だ。貴重なものだということができる。とにかく見てみる。荘兪の文章をそのまま下敷きにした箇所も見受けられるが、新しい事実を披露している部分もある。1934年の発言だが、公表されたのは1992年であった。58年間、機密扱いになっていたということか。

日本人との関係を再度のべることにしよう。清光緒二十九年（注：1903）、まさに会社の規模がほぼ整った時、日本金港堂が中国にやってきて印刷所を開設するということを聞いた。金港堂は、日本の巨大印刷会社であり、資本もすこぶる豊富ということだった。当時、金港堂は、上海三井洋行支配人の山本君に調査、計画を依頼しており、山本の夫人は金港堂主の娘で、ゆえに金港堂の株主でもあり、金港堂に対しては力を持っていたし、なおかつ極

めて信頼もされていたのだ。山本は夏瑞芳、印錫璋両氏と親しく、相談のち山本は本館と合弁をする考えを持った。当時、本館は中国の印刷技術は非常に遅れていることにかんがみ、本館は規模がほぼ整ったとはいえ、印刷工具能力のすべては、ただ凸版があるだけでその差ははなはだしく、日本人を相手に競争することはとてもできるものではなかった。軽重をはかれば、ただ、合作の方法をしばらく利用するしかなく、ゆっくりと自身の発展を求めれば、独立もできるだろう。ついに山本の紹介により議決し、日本側が10万を出資する、本館側はもともとある設備器具、資産のほかに現金を集め、あわせて10万とした。これが商務と日本人の第2期の関係である。日本の技師を招聘し印刷業務を援助してもらった。ただし、締結した条件は、決して事々に平等であるというものではなく、我が方にはふたつの主要な条件があった。一は、支配人および理事はすべて中国人であり、日本人はひとりを監察人に推挙するだけだ。二は、招聘した日本人は、随時、辞めさせることができる、というものである。(張蟾芬氏が補充していわく、当時、理事に当選したのは、当然ながらすべて中国人であり、ただ監察人ふたりのうちひとりが日本人であった。合弁後、最初に推挙された監察人は、日本人が田辺輝浪であり、我が国は張蟾芬である) [高翰卿1992:8]

商務印書館と金港堂の合弁を、当事者が冷静にありのままにのべているように思われる。

文中に見える商務印書館の「支配人」は、社長という意味だ。商務印書館と金港堂の合弁をとりもったのが、三井洋行支配人の山本、すなわち山本条太郎であるといっている。商務印書館側では夏瑞芳と印錫璋の名前が出ているのが注目される。山本と金港堂主には姻戚関係があるというところまで言及されているのも興味深い。

とりわけ貴重な証言は、「当時、金港堂は、上海三井洋行支配人の山本君に調査、計画を依頼しており」という箇所だ。金港堂が、はやくから中国大陸進出の計画を持っていたことが、中国側の証言から裏付けられる。

ゆえに、莊俞の証言から印象づけられるような、上海にやってきた金港堂が、

偶然に商務印書館と合併をした、というような安易な記述は、高翰卿証言によって否定される。山本条太郎の事前の調査があったことが明らかなのだ。

ただし、莊俞をひきついで誤解を生じさせる部分もある。

「決して事々に平等であるというものではなく」、主導権は商務印書館がにぎっていたというもの。「支配人および理事はすべて中国人であり、日本人はひとり」を監察人に推挙するだけだ」「招聘した日本人は、随時、辞めさせることができる」というのならば、商務印書館が上位に立っていたということが明白となる。

ことに後者の人事権については、最近までつづいているもうひとつの誤解になっていることを指摘しなければならない。

当事者が、その時々で自分に都合のいいように証言するものだから、商務印書館研究がねじれて複雑にならざるをえないのだ。後述する。

3 合併にいたる経緯、その構造

かさねていうが、商務印書館と金港堂の合併に重要な役割を果たした人物として浮かび上がってくるのが、山本条太郎の存在だ。

山本条太郎は、1901年9月に三井物産上海支店長として上海に着任した。山本は、1888年より三井物産上海支店で働いた経験をもっている。紡織工場の買収に関して印錫璋とは昵懇の間柄であったし、夏瑞芳とも親しかった。

金港堂と商務印書館の動きを総合すると、日中合併にいたる経過は以下のようになる。

1899年（明治32）頃、金港堂の原亮三郎は、中国での教科書製作販売の意図をもって日本で準備をしていた。独自に進出するつもりで、協力者など必要としていない。原亮三郎の娘婿が、山本条太郎である。原亮三郎が山本条太郎に上海での市場調査を依頼する。山本が昵懇の印錫璋に事情を説明する。印錫璋は、1901年に商務印書館が行なった第1次増資に応じた人物でもある。その頃の商務印書館は、前年の1900年に修文書館を買収したので借金があった。1901年の増資実行は、借金とそれまでの損失を補填するのを主たる目的とする。資金的にはどん底

状態だったのだ。夏瑞芳の意向を受けて印錫璋の方から山本条太郎に商務印書館の経済的建て直しを依頼したと思われる。または、経営のテコ入れをたのんだのは夏瑞芳本人だったかもしれない。したたかな夏瑞芳のことで、日本側にはテコ入れを申し込んだが、商務印書館内部に向かっては、日本側が合弁を希望している、と報告をした可能性は高い。山本が原亮三郎にそれを取り次ぐ。原亮三郎は、独力で出版社を設立しようとしていた方針を変更し、推薦された商務印書館に個人で投資することに決める。合弁を条件にして、夏瑞芳は、印刷所新築に着手する。印刷所は規定の方針で建設が進められていた。ところが、まったくの予期せぬことに商務印書館に火災が発生した。つまり、火災と印刷所建設は、無関係なのだ。原亮三郎にとっても、合弁を決心したあとの教科書疑獄事件発生は、これまた予想もしない事件であったということだ。

以上が、1899年から1902年の火災、教科書疑獄事件を経て1903年の合弁にいたるまでの商務印書館夏瑞芳と金港堂原亮三郎の動きだと私は考える。

北福建路に建設した巨大印刷所の資金がどこから出たのかを合理的に説明しようとするれば、この説明にたどりつく。高翰卿を含めて、当時の事情を知っているはずの人物まで、火災の賠償金で印刷所の建設を行なった、と見当違いを書くのにはなにか理由があるのかもしれない。

ひとつ考えられるのは、夏瑞芳の独断専行である。

夏瑞芳の人的関係ですべてが動いていることに注目したい。夏瑞芳は、大いなる決断力でもって金港堂の代理人たる山本条太郎と交渉したのではないか。独断で話を進めて、商務印書館の同僚には説明らしきものはしなかったとも考えられる。だからこそ夏瑞芳以外の人物は、創業者であっても証言内容が一致しないのだ。

合弁の推進者

商務印書館が存続するかどうか、運命の岐路といっても過言ではない日本金港堂との合弁は、夏瑞芳が取りし切って実現した。

1901年に合弁を決意し、正式契約は1903年である。決意から調印までに時間がかかっているのは、前述のように、商務印書館にとっては火災が、金港堂にとっ

ては教科書疑獄事件が原因であろう。両者それぞれに災難がふりかかっているのだ。合弁話を進めようにも、困難の方が大きかった。

張元済が、夏瑞芳の合弁決定を支持したという記述（原文：先生支持夏瑞芳合資決策）がある[張樹年1991:47]。

語句の使い方に注目したい。合弁をするかどうかの相談をもちかけられたわけではない。合弁決定が、先になされている。張元済は、それを追認しただけだ。ここからも、あくまでも夏瑞芳が主体的に主導権を握って動かしていたと考える方が自然である。

金港堂との合弁は、商務印書館が組織的に模索し決定したものではないことを強調しておこう。中心はあくまでも夏瑞芳ひとりである。山本条太郎および印錫璋と関係のある人物としては夏瑞芳以外の存在が考えられないからだ。夏瑞芳も、創業時から経営は自分が担っていると自負していたのではないか。商務印書館は、最初から家族企業、同族会社であった。1901年の第1次増資の際、印錫璋と張元済が資本参加したが、理事が選出されたわけでもなく、その意味では実態は家族企業のままだったと言わざるをえない。しかも、この家族企業の形態は、会社の規模が大きくなったあとも、夏瑞芳の死去にいたるまでつづくことになる。

下準備が整ったところで、社主原亮三郎を中心にして取締役の加藤駒二、小谷重の3人が合弁調印のために上海に渡る。旅行の目的は、表面上は、中国における出版界の事情、教育界の現況を調査するものとされた。ゆえに前出引用文にも、そのように書かれている。

最後の詰めの段階で責任者以下重要人物が乗り出す、というのが日本の仕事のやりかたである。すでに商務印書館との合弁の方針は固まっていたと見るべきだ。ゆえに最終的な条件のすりあわせと調印だけが残っているだけだから、わずか1ヵ月であろうとも両者にとっては十分だった。

合弁の条件

金港堂側は10万元を出資する。商務印書館側は、現有の資産に現金を追加して10万元にする。日本側は「彼我对等の権利を以て遂に合同し」というのだが、中国側の証言によると、すべてが平等ということでもなかった。

莊兪が書くところによると、「締結した条件は、決してすべてが平等というものでなかった。ひとつは支配人と理事は全員が中国人であること、ただ日本人の一、二人を傍聴に列席させることができること。雇った日本人は随時退職させることができることなどだ」[莊兪1931:3]という。

莊兪の文章を下敷きにしたのではないか、と思うくらいそっくりなのが高翰卿の説明だ。

高翰卿は、「締結した条件は、決してすべてが平等というものでなかった。わが方にはふたつの主要な条件があった。ひとつは支配人と理事は中国人であること、ただ日本人ひとりを監査役に選ぶこと。ふたつは雇った日本人は随時退職させることができること」と証言している。張蟾芬が補足するところによると、当時、理事に当選したのは、当然、すべて中国人だった。ただ、監査役のふたりのうちひとり日本人だ。合弁後、最初に選ばれた監査役は、日本人が田辺輝浪、中国側は張蟾芬本人だった[高翰卿1992:8]。

しかし、実際は、莊兪、高翰卿、張蟾芬らの書く通りではなかった。

日本人が支配人（社長）になることはなかったが、理事は、最初、日中から2名ずつ（印錫璋、夏瑞芳、原亮三郎、加藤駒二）、3年後の1907年は、中国3日本2（夏瑞芳、張元濟、印錫璋、原亮一郎、山本条太郎）だった。1908年、さらに中国2日本1（夏瑞芳、印錫璋、原亮一郎）の割合に変化する。1909年より、日本人は理事に就任していない（[林爾蔚ら1984:17]。カッコ内の注は、汪家燊論文による。なお、張蟾芬が述べる監査役の田辺輝浪は、田辺輝雄と同一人物か[汪家燊1992a:651]）。

ただし、1908年部分には異論がある。『張元濟年譜』77頁には、蔣維喬「退庵日記」から引用し、理事のメンバーはもとのまま（「次議重拳董事，衆議仍旧」と書いてある。倪靖武論文[倪靖武1994:34]を参照しながら、『鄭孝胥日記』[鄭孝胥1993]、『張元濟年譜』[張樹年1991]でおぎない、「商務印書館理事一覧」を作成する。

平等な合弁であれば、支配人が中国人の場合は、副支配人は日本人、あるいはその逆となってもいい。ただし、この合弁は、原亮三郎個人の投資だったのだから、厳密な意味で対等平等のものとは、もともとが少し違うのではないか。

理事の構成を見れば、合弁初期は、日中双方から人を出しているのは明らかだ。

商務印書館理事一覧

年月日	中国側理事	日本側理事	典拠
1903.12	夏瑞芳（兼社長）、印錫璋	原亮三郎、加藤駒二	汪家熔論文
1905.3.31	夏瑞芳（兼社長）、印錫璋	原亮三郎、加藤駒二	張元濟年譜55頁
1906.3.10	夏瑞芳（兼社長）、印錫璋	原亮三郎、加藤駒二	張元濟年譜58頁
1907.5.10	夏瑞芳（兼社長）、印錫璋 張元濟	原亮一郎、山本条太郎	張元濟年譜67頁
1908.5.5	夏瑞芳（兼社長）、印錫璋 張元濟	原亮一郎、山本条太郎	倪靖武論文34頁 鄭孝胥日記で5月5日に訂正する
1909.4.15	夏瑞芳（兼社長）、印錫璋 張元濟（4.27より主席）、 鄭孝胥、高翰卿、高夢旦 鮑咸恩	/	鄭孝胥日記1186頁 張元濟日記80頁
1912.6.8	夏瑞芳（兼社長）、印錫璋 張元濟、鄭孝胥（主席）、 王之仁、奚伯綬、鮑咸昌		張元濟日記105頁
1913.4.19	夏瑞芳（兼社長）、印錫璋 張元濟、鄭孝胥、鮑咸昌 葉景葵、伍廷芳（主席）		張元濟日記112頁

莊俞、高翰卿、張蟾芬らの商務印書館長老は、なぜ、それを無視するのか。あえてウソというが、彼らが、なぜウソの証言をしたのか、後々までの問題となる。

1903年に金港堂と合弁をし、商務印書館有限公司となったが、表向きの呼称は今まで通り「商務印書館」である。

5万元の捻出

合弁にあたって、金港堂側が10万元を出資する。原亮三郎が出せばいいことだから、これにはなんの問題もない。

商務印書館側は、1901年の第1次増資で5万元の資産があることになっている。その差額5万元を商務印書館は、どのように調達したのか。

この時の増資に応じたのは、ほとんどが商務印書館の著作者と職員であった。

嚴復、謝洪賚、艾墨樵、沈知方、沈季芳、高鳳崗、張廷桂、李恒春、鮑咸亨の名前があがっている[林爾蔚ら1984:4]。

増資分の払い込みは、もともとそういう契約だったのか、遅れて翌1904年11月になってようやく全額が納められた[林爾蔚ら1984:4]。まるまる1年がかかったことになる。5万元という金額が相当重荷になっていることがわかるだろう。しかし、ままならぬ資本調達も金港堂との合弁以降、様子が違ってくる。営業が順調に発展するにつれて、投資に応募する人間が増え、資金調達が容易になったのだ。

4 合弁と教科書事件の関係について（誤解その2）

金港堂と商務印書館の関係は、1901年9月以降にはすでに始まっていたと私は考えている。

商務印書館と金港堂の合弁は、原亮三郎にしてみれば既定の方針通りだった。誤算があったとすれば、中国では商務印書館の出火と、日本での、降ってわいたように発生した教科書疑獄事件である。事件そのものは、1902年12月の第1回捜索にはじまり、1903年の5月か6月には一段落する。その間、金港堂関係者は、身動きがとれなかった。もし、教科書事件が発生しなかったとしたら、両者の合弁調印はもう少し早目に実現していただろうと想像するのだ。

原亮三郎一行が上海に到着したのを見て、商務印書館が「外資利用」のため合弁を承知した、というのは誤解であると述べた。これと同種類の誤解、推測だと考えるのだが、金港堂は、教科書事件が契機になって中国に進出したという説がある。

例をあげよう。

「1902年、“教科書疑獄事件”が発生し、名誉と営業の両面で極めて大きな影響をうけたため、転じて上海で印書館を設立しようとした」[林爾蔚ら1984:3]という記述になる。金港堂の中国進出計画は、教科書事件発生以前のものだから、上の説は成立しない。

また、マンイング・イブは、原亮三郎が、教科書事件に連座した長尾雨山、小谷重、加藤駒二に対して責任を感じ、彼らの才能を発揮させるために上海で会社

を開設しようと考えた。その過程で商務印書館との合弁になった、と推測する [IP, MANYING1986a, 1987:75-76]。

小谷重、加藤駒二は、金港堂の社員だったから、原亮三郎は、責任を感じたかもしれない。しかし、仕事は日本国内でいくらでもある。わざわざ、人を上海に遣る必要はないのだ。だいたい、教科書疑獄事件に関係したほかの出版社から中国に人材を派遣したという例はない。

長尾雨山はどうか。

長尾雨山が罪に問われたのは、集英堂からの「贈賄」である。金港堂とは、直接の関係はない。無関係である長尾雨山をわざわざ上海へ赴かせたのは、金港堂が事件前から計画していた商務印書館との合弁話があったからにほかならない。

教科書疑獄事件が、突発的に発生したことを無視し、原亮三郎らの上海行を時間的に把握していないイブの意見だということができる。

ここで小さな疑問を出しておきたい。商務印書館の資産についてだ。

同額の資金を出しあって合弁をする場合、現地の資産も勘定にいれるのが通常の商取引ではないか。さきに、1901年の第1次増資で5万元の資産があることになっていると紹介した。数字の上だけのはなしで、現金が5万元あるわけではない。これには、第1次増資後の1902年に新築した印刷所は、当然ながら、含まれていない。金港堂と同額の10万元にするためには、現金で5万元を加えなければならなかった。結果として、5万元の資金を集めるのに約1年という時間が必要だったことには触れた。

ということは、合弁以前に商務印書館が所有していた資産の評価額が5万元だという意味にほかならない。では、増資の後に建設された印刷所の資産的評価はどうなっているのか。

高翰卿は、「ついに山本の紹介により議決し、日本側が10万を出資する、本館側はもともとある設備器具、資産のほかに現金を集め、あわせて10万とした」 [高翰卿1992:8]と述べている。

高翰卿のいう「もともとある設備器具、資産」とは、なにか。

商務印書館が創業した当時から、借家であった。設備器具といえば、修文書館を買収して得た印刷機器くらいのものだ。

注意してほしい。北福建路に新築した印刷所は、増資した5万元には含まれていない。時期がずれているからだ。高翰卿の説明は、この点をあいまいにしている。

この講演そのものが、日本との合併をややもすれば否定的に述べる傾向をもつものだ。日中戦争当時の1934年だから時期的に見てしかたのないことではある。しかし、設備機器、印刷所を含めた資産がいくらで評価され、現金がいくら集められたのかの詳細が明らかにされないかぎり、不明瞭さは残ったままなのだ。

もともと商務印書館自身が出資した印刷所であったならば、頭脳明敏な夏瑞芳がぬかるわけはなかろう。数字上だけの資本金5万元に加えて印刷所を資産として別に評価させたはずだ。

火災保険金でまかになったように書く文章があることは紹介した。出たとしてもわずかな金額だったはずだとも私は指摘している。もし、おりた火災保険金で新印刷所を建設したのであれば、資産として金港堂側に評価するように要求したはずなのだ。そうすれば、差額の5万元からいくらかでも減額できる。それだけ現金を集める苦勞から解放される。

しかし、商務印書館の関係者は、印刷所建設の資金について、なにもいわない。私が、1903年の正式合併前に、金港堂から上海で印刷所を建設する資金が出ていたのではないかと推測するもうひとつの根拠がこれなのだ。

印刷所について、商務印書館側から一言の要求あるいは説明がない。それゆえ、印刷所は、金港堂の資金で、それも合併前に前倒して支出の上、建設されたものであると想像する。これについては、合併解消を述べる時にもう一度触れたい。

5 合併の事実を隠したがる商務印書館

1903年11月19日（光緒二十九年十月初一日）、商務印書館、金港堂の双方はそれぞれ10万元を出資し、あわせて20万元の資本金でもって有限公司に改組した。

合併成立から約1ヵ月後、『申報』に「上海商務印書館広告」【図3-1】が掲載されている（1903年12月22日より断続して載った。22日のものは印刷が不鮮明なので、組

版がほんの少し異なる同一内容の12月30日のものを掲げる)。

「上海商務印書館広告」『申報』 1903.12.22

中国の紳士商人のかたには日本刊行の図書を購読するのにひさしく不便を称せられております。本館は、東京金港堂図書会社が日本にあつて設立もつともふるく、刊行する図書は全国に行き渡り、声望はもとより著しいことを知っております。特にこれと定約し金港堂発行の書籍図画はすべて出版されるや発送を代行いたします(後略)

この広告は、不可解である。商務印書館が金港堂と合弁をしたとは、どこにも書かれていないからだ。代理店契約を結んだというのみである。

もうひとつ、日本語の商務印書館広告【図3-2】を紹介しよう。

「日本書発売広告」『上海週報』 1904.1.1

従来当地にて日本書を御購読相成候には頗る不便を感じられ候やに聞及候
処弊店儀今般東京金港堂書籍株式会社と特約を結び在清国代理店として同社
発行の出版物を取次ぎ手広く販売仕候間何卒大方諸君の御引立に預り度奉希
候(後略)

上海英租界 ^{ギーペーガー} 棋盤街 中市

日本東京金港堂代理店

商務印書館

前出『申報』の「上海商務印書館」とほとんど同様の内容となっているのに気がつく。注目されるのは、はっきりと「日本東京金港堂代理店」とうたっていることだ。合弁会社となったことなど、どこをさがしても、一言もない。

『東方雑誌』第1期(1904.3.11)に掲載された「最新初等小学国文教科書出版」【図3-3】と題する広告文には、「日本文部省図書審査官兼視学官小谷重君高等師範学校教授長尾楨太郎君」を招いたと書く。小谷、長尾のふたりとも金港堂から派遣されているのだが、ここには金港堂の名前が見えない。

中国の文献には、一時的に日本の資本を利用しようとしたただけだ、というもの

がある。商務印書館が終始指導権をにぎって「日本資本を吸収」したのなら、堂々と「吸収」したと宣伝するのが普通であろう。だいいち、双方が同額の10万元を出資していて、一方が片方を「吸収」するなど、常識で考えてありえないではないか。

上のような広告を見ると、当時の商務印書館は、金港堂との合弁を公表したくなかったことがわかる。

商務印書館自身が記録した文章を紹介しよう。

創業10周年を記念して出版したものだ。『創業十年新廠落成紀念冊』（光緒三十三年(1907)年七月）[柳和城2002b:140-141]という。

その序文に商務印書館の簡単な歴史がのべられている。金港堂との合弁をどのように説明しているか興味あるところだ。

> 印部分に要約紹介しながら、解説を加える。

> 光緒二十三年正月、英租界江西路徳昌里に部屋を借りて印刷業をはじめた。翌年六月、北京路に移り、12部屋で規模がやや拡大した。

創業と最初の移転について書いている。年月、場所などに間違いはない。しかし、なぜ移転しなければならなかったのか、その理由をのべない。最初の建物が倒壊したから移転せざるをえなかった、というのが事実だ。

部屋数の12をあたかも事業が拡張して規模が拡大したかのようについて。だが、北京路の建物は、徳昌里の借間に比較して手狭な作りだった。部屋数12に増えたといっても実質的には、変化はない。

記念出版物だから、ありのままに実態を表現することに抵抗があったのかもしれない。商務印書館が、規模が拡大と宣伝するから、のちの研究者はその言葉を吟味せずそのまま信じる。

> 二十八年七月、不注意から火を出し、アメリカ租界北福建路に印刷所を建設し、同時に発行所を棋盤街に開設した。

創業5年目にして火災に見まわれた。そこで印刷所を建設した、という例の話になる。失火と印刷所建設について、あっさり事実だけが書いてある。その間の事情については、説明をしない。説明がないから、この文章を読んだ人は、勝手に想像する。多額な火災保険金でもありて、それで印刷所を新築したのではな

いか。あるいは、もうすこし事情を知っている人ならば、建設費用にまた借金をしてしまい、経営状態はますます悪くなった、などなど。

火事の発生は光緒二十八年七月十九日（1902.8.22）で、印刷所完成は同年九月である。この時間を見れば、印刷所と火事は無関係であることが理解できよう。約二ヵ月で巨大印刷所が完成するなど誰も信じない。

どうやら、商務印書館は、当時の状況をあいまいなままにしておきたいのだ。説明する気は、はじめからない。

> 翌年正月、編訳所を蓬路にもうけた。

翌年とは、光緒二十九（1903）年だ。編訳所は、前年に唐家街に設置されたのが最初だが、これには触れていない。

> 北河南路の北宝山県境に30余畝を購入し、印刷所と編訳所を建設し、本年四月に落成した。

編訳所が実際に機能しはじめるのは、五月初三日からである[蒋維喬1992:51]。

これが宝山路の新しい印刷所だ。「本年」とは光緒三十三（1907）年を指す。

新印刷所の落成を記念して創業10年をうたうのが、この冊子『創業十年新廠落成紀念冊』の出版目的なのである。

> 光緒三十一年十二月、欽定大清商律により有限公司となり、商部に登記した。三十二年三月十二日（1906.4.5）に認可された。

以上が、商務印書館自身が述べる創業からの10年間である。

一読して、おかしいことに気づく。商務印書館は、自らの記録から金港堂の存在を抹殺してしまっている。金港堂と合併した事実を明らかにしていないのだ。

光緒三十一年に有限公司となり、それが認可されたのが翌光緒三十二年だと書かれているだけで、ここにも金港堂の名前は、出てこない。

「日本資本を吸収」などという威勢のいいものでは、もともとなかった。経営のいきづまった状況から脱出するために、金港堂の投資を必要とした。これが事実だ。当時の商務印書館首脳には、事実を事実のままに認める精神的な余裕がなかったように思える。祝い事の記念出版だから、目をつむっていたかったのか。

商務印書館の職員であった朱蔚伯は、「商務（印書館）は、この事（注：金港堂との合併）を宣伝するつもりはなかったため、外部で詳細を知るものは多くな

い」[朱蔚伯1981:146]と証言している通りだ。

商務印書館が、金港堂との合弁を広言したくない理由はなにか。それが明らかにされるのは、しばらくしてから日本においてだった。

商務印書館の理由

当時の模様を比較的詳しく説明する文章は、ふたつある。両者ともに日本文だというのが興味深い。金港堂と商務印書館が合弁会社であるという事実は、日本では比較的早くから知られていたと思われるからである。

ひとつは『支那経済全書』第12輯(1908)に収録されている。合弁の1903年から数えて5年後の文章だ。ゆえにかなり早い、と私はいう。引用しながら説明を加える。

商務印書館八株式組織ニシテ夙ニ支那人ノ経営スルモノナルヲ我金港堂主原亮三郎氏其株ヲ買ヒテ有力ナル株主トナリシヨリ互ニ相協同シテ経営スル事トナリ上海ヲ本店トシ其他各處ニ多数ノ支店ヲ開設シ其分售店ノ如キ八寒ニ二百七十餘ノ多キニ及ベリ而シテ其販売スル書籍モ亦五百餘種アリト云フ

書物が1908年の発行だから、それ以前の商務印書館について紹介している文章であるのは明らかだ。もうすこし絞って、何年か。手がかりは文章のなかにある。

各種印刷物の請け負い印刷業からはじまった商務印書館だ。英語教科書の出版に手を染め、1902年ころより一般書籍の出版にも積極的に進出しはじめた。『商務印書館与新教育年譜』によると、その出版物の種類は、1902年が15種、1903年が51種、1904年が35種、1905年が49種、1906年が111種、1907年が182種で合計442種となっている。1908年の169種[王雲五1973:1-52]を加えれば612種だ。上のべる「五百餘種」に近い数字は、1907年までの442種となる。つまり、1907年ころの商務印書館について説明した文章だと考えていい。

支店といっているのは、分館のことだ。1903年、漢口に最初の分館を設置し、それ以降、北京、天津などに増やしていく。1907年までに14都市を数える。文中に見える「分店」が270余とは、代理販売所の数だと解する。創立10周年を記念

して発行した『創業十年新廠落成紀念冊』によると、分館をおいていない省には代理販売所が約300余りあるという[柳和城2002b:140]。数字は一致しないが、やや近い。

金港堂主原亮三郎が商務印書館の株を購入していることが、最初にのべられていることに注目しておこう。

つづいて商務印書館の沿革を述べる。

同館八光緒二十一年即チ今ヨリ十二年前ニ創立セラレタルモノニシテ当時美華書館ニ在リテ印刷術ニ従事セル華人四名相謀リ独立シテ出版所ヲ設立セントシ各五百圓宛出資シテ北京路ニ印刷請負出版業ヲ開設セシガ後二年ニシテ火災ニ遇ヒ反テ焼肥ノ有様ニテ目下ノ印刷所タル宏大ナル工場ヲ福建路ニ設立スルニ至レルモノナリ

創立を光緒二十一年にするのは、光緒二十三年の誤りである。ただ、「今ヨリ十二年前」を勘定すれば、この文章が書かれたのが光緒三十三年、すなわち1907年だということがわかる。

創立者は4名だと書いてある。夏瑞芳、鮑咸恩、鮑咸昌、高翰卿のことを指すと思われる。美華書館に勤めていたのは、鮑咸昌と高翰卿のふたりだ。出資者は、この4名のほかに沈伯芬、徐桂生、張蟾芬、郁厚坤を加えて全部で8名だった。各人が500元を公平に分担したわけではない。夏瑞芳、鮑咸恩、鮑咸昌が各500元、高翰卿は250元、そのほかの出資者の分を合計して3,750元である。

北京路に開設したというのは、最初の移転先、すなわち光緒二十四(1898)年に北京路慶順里へ移ったことをいっている。

火災にあった事実に触れる文章は、当時としては、珍しい。ただし、「二年」ではなく開業後「五年」が正しい。「焼肥」ではない。事実と異なるとはいえ、巨大な印刷所が火災のあとに出現したのをみた当時の人々の、これが一般的な印象だったのだろう。

然レドモ之ガ為メ一時多大ノ負債ヲ生ジ非常ナル苦境ニ陥リ収支償ハズシテ

將ニ解散ノ悲運ニ遭遇セントスルニ当リ金港堂主原亮三郎氏ノ来港ニ際シ氏
此事ヲ耳ニシ山本達^マ三郎氏等ノ大ナル斡旋ニヨリ彼我合同六十万円ノ資本ヲ
以テ茲ニ其類運ヲ挽回シ遂ニ現今ノ隆盛ヲ見ルニ至リシナリ是レ實ニ光緒二
十九年十月ナリキ

「火災ニ遇ヒ反テ焼肥ノ有様」といっているのに、なぜ「一時多大ノ負債ヲ生
ジ非常ナル苦境ニ陥リ」となるのか。火災保険金はおりたが、印刷所を建設する
ほどの巨額資金はそれではまかなえなかったという意味だろうか。問題だと考える
のは、印刷所の建設費は、誰が融資したのか明らかにしていない点だ。ただ単
に、負債を生じたと書くだけだ。これでは説明したことにならない。

だいいち、事実経過の時間的把握がなされていない。

くりかえすが、火災の発生は光緒二十八年七月十九日であって、北福建路に新
築した印刷所の完成は、それからわずかに約二ヵ月後の九月だった。約二ヵ月と
いう短期間に終わることのできるような簡単な工事ではなかったはずだ。

原亮三郎の上海訪問も、日本での教科書疑獄事件が一応の決着をみたあとだ。
それは、1903年（明治36、光緒二十九）10月11日のことだった。原亮三郎は、小谷
重と加藤駒二をともない神戸を出帆、上海に赴いた。金港堂と商務印書館が合弁
したのは、それから約1ヵ月後の11月19日（旧曆十月初一日）である。

原亮三郎一行が上海に来たのを聞いて、それから山本条太郎（文中の山本達三
郎は誤り）に斡旋を依頼し、合弁したと説明している。だが、これをわずか1ヵ
月のあいだにやってのけたと考えることはむりだ。

商務印書館の経営危機は、創業以来、慢性的に続いていたことを知らなければ
ならない。

もうひとつ、金港堂と商務印書館の合弁話は、教科書疑獄事件、あるいは火災
事件よりも前に進められていたと考えることも必要なのだ。

出資金は、両者平等に10万円づつを負担し合計20万円である。60万円ではない。

当時支那人八日本人ト合同セバ実権全ク日本人ニ帰センコトヲ恐レ容易ニ肯
ンゼザリシガ山本氏ノ尽力ニヨリテ彼我ノ事情融和ニ大ナル効力アリシト云

フ而シテ其株数ヲ兩分シテ日清兩国人ニ均分シ日本人側ニ八原亮三郎、山本^マ達三郎等ノ諸氏アリ支那人側ニ八張元濟、嚴又陵等ノ諸氏アリ共ニ支那官場ニ相往來シテ諸種ノ便宜ヲ図リ且ツ其基礎ヲ鞏固ナラシメタリ又官場中ノ人ニシテ其株主タルモノ少ナカラズト云フ

「実権全ク日本人ニ歸センコトヲ恐レ」という箇所には、金港堂との合弁に対して、商務印書館側が抱いた恐怖感が述べられている。これを読めば、商務印書館の内部事情にかなりくわしい人の手になる文章だと感じる。

経済的に行き詰まっている商務印書館にとっては、日本からの投資を必要としていた。しかし、同時に日本人に実権を乗っ取られるのではないかという恐怖が生じる。これこそが、商務印書館の人々が抱くことになった精神的な負担である、と容易に想像することができる。

だからこそ「其株数ヲ兩分シテ」ということになる。ただし、両者がそれぞれ10万元を出資したとして、家屋、機械などをどのように評価したかまでは書いていない。高翰卿の証言では、すべてを込みで10万元であったようだ（ただし、印刷所はその金額のなかには含まれていないだろう）。

茲ニ注意スベキハ設立登記ハ日本ニ於テ行ハズシテ香港ナル英国籍ニ登記シタル事ナリ蓋シ日本登記手續ハ非常ニ煩錯ナリト云フハ其表面上ノ理由ナルベケレドモ裏面ハ決シテ然ルニアラズ実ハ其实権ノ益ニ日本ニ歸センコトヲ恐ル、ト共ニ官場中ノ物議ヲ避ケンガ為メナルベシ其後彼等ハ日本人ノ真意ノアル所ヲ知ルニ至ツテ始メテ清国法ニ從ヒ之ヲ英籍ヨリ転ジ店舗ハ全ク支那人ノ経営ニ任ジ日本人ハ只株主トシテ生ズル責任及權利アル事トナレリ
[東亜同文会1908a:464-465]

合弁に関する設立登記が、複雑な手続きを経ていることに注目したい。はじめは香港に登記し、のちに清国へ移したというのだ。

ここにも日本人が実権を持つことに対する商務印書館側が抱いた恐怖心の存在が語られる。

「日本人ノ真意ノアル所」とは、金港堂が商務印書館を純粹に援助しようという「真意」であろう。

だいたい、原亮三郎は、中国で独自に出版業を始める心づもりだった。独自資本を有していたのだから、中国の出版社と合併する必要もない。創立したばかりで経営状態のよくない商務印書館が出てくる幕は、最初からなかったのだ。それが、娘婿の山本条太郎との関係で、急遽、商務印書館との合併話になる。原亮三郎にとっては、商務印書館の経営建て直しの側面を強くもった合併である。

金港堂との合併にまつわる商務印書館の恐怖心が語られているという珍しい文章である。

以上に紹介した『支那經濟全書』の文章は、のちに一部が引用されてふたたび発表されることになる。

1919年6月15日付『実業之日本』第22巻第13号に、中華道人「日支合併事業と其経営者」という文章が掲載された。

文章は、「日支合併事業の沿革」「日支合併事業の現況」「日支合併事業の将来」の3部に分かれており、商辦本溪湖煤鉄有限公司、中日実業株式会社など21にのぼる日中合併の会社の紹介を兼ねる。これらの会社のなかに商務印書館がとりあげられているのが目を引く。以下、少し長いが関係部分を引用したい。(総ルビは省略した。#印は樽本注)

十、商務印書館

商務印書館は最初支那人のみにて経営せられ印刷出版を業とせしが、開業後二年^{#1}にして火災の爲め全部を烏有に帰し、更に多額の負債を爲して新工場を建設せしも、遂に収支償はずして將に解散せんとするの非運に遭遇せるを、金港堂の原亮三郎氏聞きて、茲に日支合併の事業と爲し、万難を排して明治三十六年十二月^{#2}遂に彼我合同資本金六十萬元^{#3}を以て開業の運びに至り漸く其類運を挽回し、以て今日の盛大に及ばしめた。当時支那人側に於ては実権の日本人に帰するを恐るゝもの多く、爲めに株主間の内訌を避くる必要あると、且つ官憲の物議を醸すことなからしむる爲め、日本の登記手続は煩雜に過ぎ不適當なりとの理由にて、香港に於て登記し、尚ほ支那人の誤解

を避くる為め、清国農工商部に登録し以て清国会社となし業務の拡張を図つた。当時新旧両学の過渡時代にして、新学書籍の刊行多かりし為め、事業は益々盛況に向つた。現今資本金百萬元（八十萬元払込済）を有し事業成績甚だ良好にして、幾年か年々二割内外の配当^{#4}を為して居る。ノ今や支那人側に於ても、営業成績漸次良好なる為め、日本人側に依頼する傾向を生じ、両者間益々円満に進み、業務は愈々拡張の機運に向つた。然れども未だ該書館が表面支那会社なるも実権は日本人に帰属するものなりとの思想は掃蕩する能はざるものゝ如くある。現に先年北京に開催せられたる中国教育会^{#5}の会長張元濟氏が、該書館の支那人側代表者なりし為め、教育会員の一部及び外部の一般人等は、張氏を商務印刷館^{ママ}に於ける日本人の使用人なりと誤解し、彼れが教育会長となれるは該書館の出版物を広く支那の諸学校に供給せんとするものにして、支那教育権の基礎は全然日本人の手に俟つの不都合を来たすべしとの批難喧しきに至つた、此種の輿論は独り該書館の場合のみならず、日支合同事業の場合に往々見聞する所にして我当業者の影響亦尠からぬ[中華道人1919:163]

一読して、中華道人は、文章の前半を前出『支那經濟全書』より引用していることがわかる。

細かなことだが注釈をつけよう。文中に#印で示した。

#1 火災発生は、1902年8月22日のことだ。「開業後二年」は、正確には「開業後5年8ヵ月」となる。

#2 商務印書館と金港堂の合弁は、「明治三十六年十二月」ではなく、明治36年11月19日（光緒二十九年十月初一日）だ。

#3 資本金は、それぞれ10萬元を出しあい、合計20萬元とするのが正しい。

#4 「年々二割内外の配当」というのは、実際に計算すると約23.25%の配当をしていて、中華道人が事情通であることを証明している。

#5 1902年に上海で蔡元培らによって設立された団体に中国教育会がある。元来は、新しい教科書編集を作成することを主旨としていたが、会員はほとんどが革命思想の持ち主で、革命団体だったという。1907年に活動を停止したとか、民

国に一度復活したとか、はっきりしない。ただし、上記文中にいう中国教育会は、蔡元培らのものとは異なる別団体だ（後述）。

中華道人の文章は、発表は1919年だが、それよりもずっと以前の商務印書館について書いている。文章の前半部分は、1907年の文章だ。文中の「現今資本金百萬元（八十萬元払込済）」と書かれている箇所注目すれば、1912、13年頃の商務印書館について述べたものだとは推測できる。

『支那経済全書』と中華道人の文章には、長年の私の疑問に答えてくれている部分がある。

商務印書館が日本の金港堂との合弁であるならば、日本の外交史料館に関連書類が保存されているのではないかと私は考えた。しかし、それらしい記録はない。記録が残っていない理由のひとつは、金港堂と商務印書館の合弁とはいえ、実質的には金港堂原亮三郎の個人投資だったからだ。

『支那経済全書』によると、「香港に於て登記」したという。そうであれば日本の外交史料館に書類があるはずがない。

では、なぜ香港か。これこそ山本条太郎のやり方である。彼は、興泰紗廠を買収した時、これを上海紡織有限公司と改称して香港政庁に登記した。まさにこれと同じではないか。

それに加えて、『支那経済全書』のいうように、実権を日本側に渡したくなかったため、日本の登記手続きが煩雑過ぎるため、中国の会社としたほうが業務拡大に好都合のため、という3点の理由を挙げれば、状況が、より理解しやすくなる。

商務印書館側は、日中合弁はしたけれど、表面的にはあくまでも中国の会社である、としたかった。考えてみれば、ここにこそ商務印書館の二律背反が存在する。投資は受けたい、しかし、投資を日本から受けているとは表沙汰にしたくない、というのだ。大いなる矛盾である。この矛盾が、のちのち商務印書館をして、対外的対応にねじれた態度を取らせることになる。

五分五分の資金で合弁をする場合、会社の名称を変更するのが普通ではなからうか。金港堂・商務印書館とか、その反対で、商務印書館・金港堂書店とか、あ

るいはまったく別の名前に替えるとか、選択肢はいくらでもある。それを、従来の「商務印書館」のままでいい、としたのは、原亮三郎の柔軟なところだ。

日中の合弁会社とはいえ、香港、清国農工商部に登記登録して表面上はあくまでも「清国会社」としなければならなかった。「誤解を避くる為め」とあるところから、最初から金港堂の資本が入ったことを大声で発表できる雰囲気ではなかったことが理解できる。

「日本書発売広告」に見られる「金港堂書籍株式会社と特約を結び在清国代理店」とだけいう箇所に、日中合弁を公表したくない商務印書館の姿勢を強く感じる。教科書編纂に日本人の協力があることは宣伝するが、資本に日本が参加しているとはいいたくないのだ。これが、商務印書館が対外的に示した一貫した態度である。大きな矛盾を最初から抱えていたと指摘しておく。

また、『支那経済全書』が書いて中華道人が引用している部分から疑問が生じるものもある。多額の借金をして印刷所を建設したという。どれほどの負債なのか。誰に資金を借りたのか。貸主はどういう理由で貸したのか。もうひとつはつきりしない。そこを明らかにできるほどの情報源はなかったらしい。

金港堂との合弁は、商務印書館自身にとっては、隠しておきたい事実であった。だからこそライバル書店から弱点と見られて攻撃されるのだ。

6 夏瑞芳の才覚と合弁効果

夏瑞芳の才覚は、事業に必要な基本的事柄を理解することができるところにあらわれている。

ひとつは、印刷の技術革新であり、もうひとつは需要の開発である。

印刷担当は鮑兄弟とはいえ、側面にあって資金的支援を与えなければ実現しない。特に印刷機器と技術については、金港堂との合弁は効果が抜群であった。

金港堂との合弁以前から印刷の品質に関しては、注意を払っていた。

たとえば、前出の請負印刷物である『昌言報』だ。その第3冊から印刷が商務印書館に変更された。実藤恵秀は、「この昌言報、はじめの三冊は、全く時務報

時代と同じ印刷であるのが、第四冊となつて、俄然面目を一変する、三号活字が四号となつて、しかも従来よりも鮮明な感じを与える。活字のよいためである。よく見ると、この号から、目録の横に「上海北京路商務印書館代印」とある」[実藤恵秀1940a:245]と述べている。

営業の発展には、出版書籍の内容が時宜を得ているほかに、印刷品質の向上が不可欠な条件のひとつだ。1900年の修文書館買収も機器を刷新するには効果があった。

見逃せないのが、人的な交流であり、これこそ金港堂との合弁があったからこそ実現されたものだと考える。人的交流は、印刷と編集のふたつにまたがる。

印刷関係の主なものを賀聖齋「三十五年来中国之印刷術」から抜き出してみる。

- 1903年 日本人技師前田乙吉、大野茂雄を招聘し写真網目銅版を導入
- 1904年 日本人柴田を招聘し彫刻黄楊（ひめつけ）版を導入
- 1905年 日本人技師和田鏞太郎、三品福三郎、角田秋成を招聘し彫刻銅版を導入。同じく和田、細川玄三、岡野、松岡（正識）、吉田、武松、村田、豊室らを招聘し彩色石印を導入
- 1908年 平版印刷機を導入。技術指導のため日本人木村今朝男を招聘
- 1909年 アメリカ人スタッフオードを招聘し写真銅版の改良
- 1912年 電気メッキ銅版を導入
- 1913年 ライノタイプ（自動活字鑄造機）を導入[賀聖齋1931:181-193]

この抜き書きを見ただけで、金港堂との合弁初期に日本人技師が多数招聘されていることがわかる。

アメリカ人スタッフオード（Francis Eugene Stafford、1884-1938）は、写真製版の専門家だった。彼は、1909年から1913年まで商務印書館に勤務していた。1915年に中国を離れるまでの合計約6年間、すなわち清末から民初にかけて各地を訪問し貴重な写真を多数残している。夏瑞芳の一家を記念撮影する機会もあった。さらに、商務印書館の印刷所、編訳所内部の様子を撮影しているのは、清末民初時期のものだけに珍しい[上海市歴史博物館2001]。

金港堂から教科書編纂の熟練者として送り込まれたのは、長尾雨山、小谷重、加藤駒二らである。その最初の成果が『最新国文教科書』となるのだ。

需要の開発とは、全国主要都市に分館、支館をもうけたことと教育事業の振興である。

1903年の漢口分館設立をてはじめに、1906年北京、天津、瀋陽、福州、開封、潮洲、重慶、安慶（支館）、1907年広州、長沙、成都、済南、太原、1909年杭州、蕪湖、南昌、黒竜江（支館）、1910年西安、1913年保定（支館）、吉林（支館）、1914年南京、蘭谿、貴陽、香港と増加させている[荘兪1931:35]。

教育事業の振興とは、小学師範講習所、尚公小学校、商業補習学校、藝徒学校、養真幼稚園、師範講習社などの設立だ。

全国主要都市に分館、支館を設けたのは、情報ネットワークの構築にほかならない。各地の教育情報の収集と教科書の販路開拓に利用される。

教育事業を興し、さらにはその学生を対象とした雑誌、たとえば『教育雑誌』（1909年創刊）、『少年雑誌』（1911年創刊）、『学生雑誌』（1914年創刊）などの発行発売にもそれら情報ネットワークが大きな力を発揮したはずだ。

そればかりか、雑誌の出版についても独創的な販売拡張方法を考案している。

『教育雑誌』は、宣統元年（1909）正月二十五日に創刊され、主編は陸費逵（後に陸費逵が商務印書館を飛び出してから、朱元善が主編）、月刊、定価一角だ。

該雑誌を刊行する目的は、教育を研究し学務を改良するためだという。改良のためにはまず全国の教育状況を調査しなくてはならない。そこで学堂の名前と住所、中学・高小・初小の別、官立・公立・私立の別、創立年月と創立者・校長の氏名、第何学年に学生は何人か、どういう科目があって誰が担当し、使用している教科書は何か、といった項目に答えた一覧表と切手2角6分を同封して商務印書館編訳所内教育雑誌社に送ると、『教育雑誌』2冊を1年間無料で贈るというわけだ。

これにより該雑誌は、全国の小学校のある場所にはすべて読者をもつようになったという。これこそ今でいう市場調査にほかならない。教科書制作とその販売を主要な業務としている商務印書館にとって、雑誌の発行も実態把握のための有力な手段となったのだった。

工夫は、まだある。雑誌への投稿を歓迎し、採用分には商務印書館の図書券を進呈することにした。修身、読本、作文、算術、歴史、理科などの部門にわけて、それぞれの教授法を懸賞募集する。当選者に1等10元、2等5元、3等3元の図書券を贈るとある。現金ではなく商務印書館の図書券というところが工夫のしどころなのだ。

『少年雑誌』（宣統三年<1911>二月創刊、未見）は、はじめ主編孫毓修がほとんどひとりで切り回していた。

当時ロンドンで出版されていた『Children's Encyclopaedia（児童百科全書）』を手本にし、国内外の歴史物語、寓話、科学趣味と国内外の出来事の解釈、紹介などを内容としていたという。この雑誌でも投稿が採用されると、該当雑誌を1冊と図書券を贈る決まりとなっており、主編が朱元善にかわってもその規則に変更はなかった[謝菊曾1980c:62]。

『学生雑誌』は、なんでもありの、とにかく中学生に課外知識をあたえることを目的とした刊行物だ。社論式の短論があり、内容は一貫して学生に勉学を奨励し、将来祖国のために尽力することを勧めるものだった。外国の科学知識を紹介する「学藝」欄などもある。ほかに学生の投稿を掲載したが、その大多数が、文言の遊記、詩詞であった。主編朱元善を手伝って投稿を選考したのが、矛盾だ。

矛盾の書いているところによると、採用についてふたつの点で創意工夫がこらされていたという。

その1、投稿には何省何県、何学校、何学年誰某と明記すること。採用されれば当の学校、教師、学生は名誉に感じ、会う人ごとに誇れば、それが雑誌の拡販につながる。

その2、採用原稿には現金ではなく2元から10元までの図書券を贈呈する。しかも商務印書館出版物に限って使用可能なもので、これが商務印書館の書籍の販売拡大にもなる[矛盾1979b:46]。

後者の図書券を贈るというのは、明らかに『教育雑誌』『少年雑誌』の方法を踏襲している。

たしかに『学生雑誌』創刊号（1914.7.20）の広告を見ると、論説、学藝、修養、学校状況、通信問答、記載、文苑、小説、英文翻訳、挿画の全部門について、大

々的に投稿を呼びかけている。当選者には雑誌を贈る、商務印書館の図書券あるいは文具券を贈るという箇所は、矛盾の述べる通りだ。違いといえば、希望するならば投稿者の肖像写真も文章と一緒に印刷すると書いてある。投稿者は、もともと自己顕示欲が強い。その心理を深く突いた方法であることは容易に理解できる。

才覚のある経営者のもとに、優秀な人材が集まるのかもしれない。

これらは、すべてが金港堂との合弁時期に展開されている事実に注目しないわけにはいかない。

のちの商務印書館が、中国に冠たる出版社としての地位をきづいたその基礎は、金港堂との合弁10年間にうちたてられたという私の主張をここでもくりかえしたい。

7 『最新国文教科書』そのほか

長尾雨山が上海へむけて神戸港より出発したのは、1903年12月1日のことだった。

蔣維喬日記を見れば、1904年1月より、中国側から張元済、高夢旦および蔣維喬が、日本側から小谷重、長尾楨太郎が参加し、日中共同で教科書編集会議を続けたことが書かれている。

長尾雨山にしてみれば、上海到着早々の仕事がこの教科書編纂ということになる。

商務印書館と金港堂が合弁会社となっちはじめての共同作業でもあった。その成果が『最新国文教科書』(1904)だ。編纂に着手してから出版されるまで、わずかに約2ヵ月半しか日時を要していない。この速度には驚かされる。それだけの必要性があったし、またそれに応じるだけの能力もあったということだ。

同書の校訂者として表紙に名前をならべているのは、日本前文部省図書審査官小谷重、日本前高等師範学校教授長尾楨太郎、福建長栄高鳳謙、浙江海塩張元済の4名である。編纂者は、江蘇を共通項にして陽湖莊俞、武進蔣維喬、陽湖楊瑜統の3名が名前を掲げる。

『商務印書館図書目録(1897-1949)』(北京・商務印書館1981)の「附録」に「最

新教科書」の一覧が掲げられている。そのなかに初等小学用として『最新国文教科書』10冊も収録されるが、その初版時期を「光緒二十八年」とするのはおかしい。1902年は、まだ編集も行なっていないはずで、これはなにかの間違いだ。なお、該書の编者としては張元済、高鳳謙、蔣維喬、莊俞の4名だけを示す。長尾楨太郎、小谷重のふたりは無視している。

後のあつかいは別にして、教科書の表紙に見るように、日本人との共同編集であることを大いに謳っている点に注目願いたい。『東方雑誌』創刊号（光緒三十年正月二十五日 1904.3.11）に掲載された教科書の広告【図3-3】を見れば、当時は、日本人の参画を強調している事実を知ることができる。

最新初等小学国文教科書出版

児童が入学するのは、漠として知識がないからである。しかるに、我が国の文字は、大半が晦渋難解で往々にして数年学んでも手紙一通書けず、帳簿ひとつ記せぬ者がいる。教育の普及をはかろうとすれば国文に注意を払わないわけにはいかない。近年、広く学堂を設立し、いささか児童用読本を編するものがある。しかしながら実用に供してすべて適合するというわけではない。あるものは程度が高すぎ会得しがたく、あるものはわずかに字義をあげるのみで一貫しているとはいえず、あるものは外面に西法を踏襲し華文の性質にあわない。また、あるものは俗語を採用し、彼此の通用が不能である。教育の志ある者は、遺憾に思っていた。本館は、特に専門家に請い、入念に編纂を行ない、あわせて日本文部省図書審査官兼視学官小谷重君、高等師範学校教授長尾楨太郎君およびかつて中国学堂に従事したことのある福建の高君鳳謙、浙江の張君元済を招聘し、詳細に校訂を加え一字もゆるがせにしていない。経営数ヵ月にしてはじめて数冊が成り、急需に応じるためまず第一冊を出版する。半寸大の活字を用い、附図は九十余幅、印刷は鮮明である。教授法はしばらく遅れて続けて出版される。本書の詳細を知りたい者は、二月十三、十四、十五日の中外日報の広告を見られたい。小売りは各冊大洋一角五分、大口には割り引く。

上海商務印書館謹啓

【圖3-3】『東方雜誌』創刊号 光緒三十年正月二十五日(1904.3.11)

商 務 印 書 館 出 版

最新初等小學國文教科書出版

童蒙入學茫無知識而我國文字多半艱深往往有讀書數年不能寫一信記一帳者欲謀教育普及不可不於國文加之意矣近歲廣設學堂稍稍有編蒙學讀本者然施諸實用都未盡合或程度過高難於領會或零舉字義不能貫串或貌襲西法不合華文性質或演爲俗話不能彼此通用有志教育者時以爲憾本館特請通人精心編纂兼聘日本文部省圖書審查官兼視學官小谷重君高等師範學校教授長尾楨太郎君及曾從事中國學堂之福建高君鳳謙浙江張君元濟詳加校訂一字不苟經營數月始成數冊因應急需先將首冊出版用見方半寸大字附圖九十餘幅印刷鮮明教授法稍遲續出欲知本書詳細情形者請觀二月十三十四十五日中外日報告白 零售每冊大洋一角五分批發從廉

上海商務印書館謹啓

六

正月

長尾雨山、小谷重がその肩書きとともに中国の書籍に紹介された早い例であろう。

また、同じく『東方雑誌』第2年第3期(1905.4.29)の『最近理科教科書』の広告にも、「日本前高等師範学校教授新保磐次君」という名前を見る。新保磐次とは、高等師範学校に1年たらず在職のうえ金港堂編輯員となった人物であることはすでに触れた。

『最新国文教科書』第1冊は初版4千部を印刷した。大いに売れたという。

つづいて、杜亜泉編『格致』3冊、徐雋編『算術』4冊、張元濟編『修身』10冊、杜亜泉・王兆相編『筆算』6冊、杜綜大・杜秋孫編『珠算入門』2冊、謝洪賚編『地理』4冊の計6種が出た。

最新高小教科書としては、張元濟編『国文』8冊、莊俞編『歴史』4冊、姚祖晋編『地理』4冊、謝洪賚編『理科』4冊、張景良編『算術』3冊、杜綜大編『珠算』4冊、高鳳謙編『修身』4冊、このほか『農業』と『商業』各4冊の合計9種が出された。

最新中学教科書として、黄英編『動物学』、アメリカ甘恵徳編『植物学』、杜亜泉編『鉱物学』、謝洪賚編『物理学』『化学』『生理学』『代数学』(2冊)『平面幾何』『立体幾何』『三角』『用器透視画』『投影画』等各1冊、計12種が、そのほか徐永清編『鉛筆習画帖』各8冊、『英文初範』1冊、『万国輿図』1冊が出た([国民政府1953:228-229]。該文は、1904年の商務印書館発行教科書を1902年の項に置くが、これは誤り。『商務印書館図書目録1897-1949』[商務印書館1981]も同様に誤る。両者には、編者名に一部異同がある)。

長々と教科書名を掲げたのは、書名をみただけでは日本の教科書と見間違いそうになるくらいに日本語であることを知ってもらいたいからだ。日本の影響がかなり強く出ていると思われる。

ともあれ、種類の多さは、教科書の洪水といってもいいのではないか。

この時期に見られる教科書以外の雑誌などについても簡単に述べておく。

外部から李伯元を編集長に招いて発行したのが『繡像小説』(1903)だ。中国大陸における近代的小説専門誌の最初である。同時に、全72冊という清末時期においては比較的長寿を誇るものとなっている。該雑誌には、編集者として李伯元

の名前が見られない。ゆえに、李伯元は『繡像小説』の編集者ではない、いや、やはり編集者だ、という論争が主として中国と日本で行なわれた[樽本照雄1991e、2001a]。

さらに『東方雑誌』(1904)、『教育雑誌』(1909)、『小説月報』(1910)、『少年雑誌』(1911)などを創刊している。また、翻訳叢書で著名になる「説部叢書」は、1903年から刊行がはじまった。のちに、「林訳小説叢書」の発行もある。

蔣維喬日記から

蔣維喬は、1896年から逝去のときまで、約60年間、日記を書きつづけた。その一部、商務印書館に関するところが汪家燊によって抄録発表された。「蔣維喬日記摘録」である。

蔣維喬(1873.1.30-1958.3.16)、江蘇常州(武進)の人。字は、竹莊。江南全県南菁高級学堂卒。少年時代南菁書院で經史詞章地理学を研究した。二十一歳のとき、江南製造局訳の西洋技術書に接触し、科学をすて新学にこころざす。日清戦争後、救国の根本は教育にあると認識し、同好の士と故郷に新式小学を創設する。日本留学。のち中国教育会に参加、蔡元培などに招かれ愛国学社で教え、ほどなく愛国女校の専任となる。1903年陰曆五月より商務印書館の教科書を編集しはじめ、編訳所に入所。教科書編集のかたわら、愛国女校、商務印書館経営の小学師範講習所、尚公小学などで教育の実践をする。辛亥革命後、蔡元培によれば南京政府教育部秘書長、南京教育部参事となり、学制、学校規定および関連教育法令の起草に協力した。江西教育廳長、江蘇教育廳長、東南大学校長、江蘇捲煙稅處處長などを歴任、暨南大学、光華大学、上海国学専修館教授に任じ中国哲学を講じた。中華人民共和国成立前、香港に転居、1951年帰国。武進文献社副社長、江蘇省人民政府委員。著書多数[橋川時雄1940:707-708][蔣維喬1990]。

清末小説に関連していえば、蔣維喬は、元和奚若訳、武進蔣維喬潤辞『福爾摩斯再生後探案』1-5合本(小説林社 発行年不明)、ジュール・ヴェルヌ著、奚若訳述、蔣維喬潤辞『秘密海島』下巻(上海・小説林1905)という翻訳にかかわっていることが知られている。

癸卯年(1903)五月から、蔣維喬は、商務印書館の小学校教科書を編集しはじめ

めた。彼は、商務印書館編訳所に転居し、年末までほとんど毎日、教科書編集に従事している。

具体的に長尾楨太郎と小谷重の名前が記録されているのは、日記、癸卯年十二月初二（1904.1.18）の項である。該当部分のみを引用する。

午後、日本人小谷重、長尾楨太郎来る。張菊（生）翁、高君夢丹（旦）と体裁を相談する。5時、会議が終わる（後略）

小学教科書についての編集会議なのだ。それも大詰めの段階で、すでに編集した原稿を編集しなおすという張元済の提案にしたがった会議となっている（後述）。ここにいたるまでの基礎作業に日本人の協力があった。

金港堂、商務印書館合弁前後の日本人関係者の動きを確認しておこう。

金港堂の原亮三郎が、小谷重と加藤駒二を伴い上海にむかったのが、1903年10月11日である。商務印書館との合弁計画を推し進めるためだ。

原亮三郎一行が上海に到着して約1ヵ月後の11月19日、金港堂と商務印書館の合弁が成立した。

長尾楨太郎は、原一行とは別に、12月1日、上海にむかった。

以上の状況は、蔣維喬が教科書編集作業を進める過程で、日本人が編集に参加する背景が形成されたことをものがたっている。

事実、蔣維喬日記には、長尾、小谷の名前こそあげられていないが、「日本人の起草する小学読本の材料」と題する文献が収録されているのだ。

教育課程試案

蔣維喬日記十一月二十五日（1904.1.12）の項に、小学読本の目録を編集しおわる、との記述がある。上述の「日本人の起草する小学読本の材料」が、それにつづく。商務印書館が教科書編集の指針としたものだと考える。読本編集の指針とはいえ、内容を見れば、小学校の教科と編制にほかならない。かりに教育課程試案と名付ける。貴重な資料だから原文のまま引用する。文中に見える蒙学堂は、日本の尋常小学校に、小学堂は、高等小学校にそれぞれ相当していることを念頭

において見てほしい。

附録日本人所擬蒙小学讀本材料〔 〕は、汪家燊の注)

讀本以教日用普通文字為主，限〔 ？ 〕其文以為国文模範。如蒙学第一年用短句短文，字劃由簡而繁。選語由浅入深。排次關係須極留意。稍進則択題目材料，分屬能文之人操觚最妙。

一、讀本中挿用絵図務求精美。否則減文章品格，殺兒童興味，至便教授無效果。

一、讀本材料由各種事項，選用務須多涉方面，不偏一隅。比如蒙学堂教科有地理、歷史。讀本缺此種材料，不可設得当。但記述之方法，讀本主雅煉有趣味，故不妨稍涉詳細。

一、材料排次以各種事項彼此交互錯綜，不偏不倚。否則生徒恐起厭倦之念。

一、讀本収載材料雖不得一一指定，權就日本通行尋常小学讀本分類彙萃其普通汎用者。此外鑑支那情形選用材料。

分類材料列左：

理科 重要水産物（魚類、海草）象獅、駱駝、鯨等。珍稀動物，有益鳥類，有用植物，虫類。根幹葉花之構造及効用。四時之美花色。金銀銅鉄鉛等重要金屬。煤炭、煤油、温泉、火山地震。空氣、風、水、冰、露、霜、雲、雨、蒸氣。寒暑表。雷、電氣、磁石、時鐘、塩、醬、油、砂糖等日用品。

農業 何謂農業。蚕、桑、茶、棉。生絲、綿。米、麦、豆。野菜、藍。耕作、肥料。害虫。農具。山林之恵。林木、造林法。果樹及果物。鷄鴨等家禽，牛馬豚羊等家畜。蜜蜂。

商業 何謂商業。売買、信用、資本、市場。取貨單、送貨單。押匯。物価。銀行、錢莊及諸公司。貿易、輸出入。度量衡。貨幣、紙幣。

工業 何謂工業。分業之益。漆器、陶器、織物等重要之品。

修身 協同、公共事業、公德、待外国人之道。戒迷信。勤勉、独立、勇氣、愛国。先哲之嘉言善行。伊索寓言之類。

地理 世界之大勢。本国之位置、本国著名之都会勝地。物産、氣候、交通、航海。旅行之樂。日、韓、俄、英、美、法、德之大概，与本国之關係。郵便、電信、火車、輪船。移住、殖民。

歷史 著名人物事跡。

家事衛生 衣服、裁縫。食物、調理。住居、家具。清潔、運動、掃除、洗濯。人體之構造。看病。纏足之害。

全員受領及他証書。簡易尺牘。家事經濟、貯金。職業無貴賤。遊戲。行業。歲時行事。

法政雜目 政治組織之大略（中央政府与地方庁）。法令、租稅、教育、兵役、陸海軍、軍艦、国旗。

小学准此而程度加高。且可參用古人文章。小学堂讀書科教授時間每周十時：讀本課六時，作文默写課四時。

一年四十周。讀本課每周六時，即一年二百四十時。以二時教授一課，即一年百二十課。每冊題目六十課，共配置如左：

理科 十五課

歷史 十五課

地理 九課

修身 七課

實業 七課

家事、政治、衛生、雜目 七課

每課字數大約初冊三百，漸加至末冊約六百字。

教授法中加簡易文法。

理科材料須與時節相応。

修身、理科、地理、歷史古人文章可採入。

地理科包含遊記。理科包含地文。

家事包含尺牘文。〔尺牘〕關於商業者則入商業。

全部文字宜加句讀。

雜目包含歲時、行樂等事。

蒙学四年每周功課表

科目	第一年	第二年	第三年	第四年
修身	二時	二時	二時	二時
讀書	十時	十時	十時	十時
習字	六時	六時	五時	五時
算術	三時	四時	四時	四時
地理			二時	二時

歴 史			二時	二時
体 操	三時	三時	三時	三時
図 画				

第一年〔每周〕二十四〔学〕時，第二年二十五時，第三年二十八時，第四年二十八時。図画科随意加入。

小学四年每周功課表

科 目	第一年	第二年	第三年	第四年
修 身	二時	二時	二時	二時
読 書	十時	十時	十時	十時
習 字	四時	四時	四時	四時
算 術	四時	四時	四時	四時
地 理	二時	二時	二時	二時
歴 史	二時	二時	二時	二時
理 科	二時	二時	二時	二時
図 画	一時	一時	一時	一時
体 操	三時	三時	三時	三時

各学科〔年？〕每周三十時。図画加一時則算学減一時可也。

蒙小学周年時間表

科 目	蒙 学	小 学
修 身	三百二十時	三百二十時
読 書	一千六百時	一千六百時
習 字	八百八十時	六百四十時
算 術	四百五十時*	六百四十時
歴 史	一百六十時	三百二十時
地 理	一百六十時	三百二十時
理 科		三百二十時
図 画		一百六十時
体 操	四百八十時	四百八十時

*（汪家熔注：六百時）

これほど詳細な教育課程試案が、蔣維喬の日記に見られるという事実は、注目

に値する。日本人つまり金港堂側の長尾楨太郎（元東京高等師範学校教授兼図書審査官）、小谷重（元文部省図書審査官）の協力が、商務印書館の教科書編集にいか
に大きな貢献したかを如実に示していると考えられるからだ。

教科

日本人の手になる教育課程試案は、本文にあるとおり、日本で通行している尋
常小学読本の分類をもとにしている。ただ、よく見てみると、「商業」の類に
「銭莊」、「修身」の類に「戒迷信」、「家事衛生」の類に「纏足之害」というよ
うに中国の実情をふまえた部分もある。

日本の尋常小学読本は、もとをたゞせば文部省の法令にもとづいて編集される。
長尾、小谷が主としてよったのは、明治33年8月21日に定められた「小学校令施
行規則」（文部省令第14号）であろう。彼らが上海に到着する3年前の制定である。
職務上、熟知していた事柄だ。

教育課程試案の冒頭部分は、「小学校令施行規則」の第三条、

読本ノ文章ハ平易ニシテ国語ノ模範ト為リ且児童ノ心情ヲ快活純正ナラシム
ルモノナルヲ要シ其ノ材料ハ修身、歴史、地理、理科其ノ他生活ニ必須ナル
事項ニ取り趣味ニ富ムモノタルヘシ（中略）

国語ヲ授クル際ニハ常ニ其ノ意義ヲ明瞭ニシ且既修ノ文字ヲ以テ通常ノ人名、
地名等ニ応用セシメ単語、短句、短文ヲ書取ラシメ若ハ改作セシメテ仮名及
語句ノ用法ニ習熟セシメンコトヲ務ムヘシ

という箇所を下敷きにしていることがわかるだろう。

児童が飽きることのないように、絵図の美しさを求め、材料の配列に配慮し、
内容がかたよらないように、という提案は自らの経験によるものだとは容易に想
像がつく。

長尾、小谷は、教育課程試案を作成するにあたって、「小学校令施行規則」に
もとづいてはいるが、まったくそのままではない。中国の状況にあった材料を選
定するように述べているところからもわかる。編制にもその傾向がうかがわれる。

編 制

日本において、従来の規程では、尋常小学校の修業年限は、3年または4年であった。これを、明治33年の「小学校令施行規則」では、4年に一定した。従来、読書、作文、習字とわかれていたものを国語にまとめた。また、毎週の教授時数を、尋常小学校では30時から28時へ、高等小学校は、36時から30時に削減した、などの改定がある。その他の変革は、今の論旨には直接関係ないので、ふれない。

教育課程試案と日本の尋常小学校と高等小学校の編制[教育史編纂会1938]を比較してみよう。

まずは、中国・蒙学 - 日本・尋常小学から。

修身は、日本中国ともに同科目、同時間に設定してある。

日本の国語を中国では読書と習字に分割する。4年間通算した毎週の時間数も国語52時間に比べ、読書、習字合計62時間と、中国のほうが日本よりも約20%多い。

算術の時間は、日本が23時間に対して、中国は15時間。日本が約50%多い。

同様に体操も、中国のほうが約30%うわまわっている。

日本の科目にあつて中国にないものは、唱歌、裁縫、手工。その反対に中国にあつて日本にない科目は、地理、歴史となる。

総時間数（各週の時間を4年間通算したもの）からいうと中国の105時間に比して日本は99時間だ。同じ4年間に中国の方が約6%の時間を多く学習させることになる。また、科目からみれば、中国では読み書きに重点をおき、さらに、地理、歴史などはばのひろい知識を教授するところにその特色がある。

つぎに、中国・小学 - 日本・高等小学を比較する。

中国での科目設定は、蒙学と同一である。ただ、時間配分が異なるのみ。

日本では、日本歴史と地理に3時間、農業、商業、英語が置かれるところに変化がある。ただし、全体の傾向は、蒙学 - 尋常小学と同じといえる。中国では読み書きを重視し、地理、歴史に時間を割く。

全体からいえば、商務印書館において日本人が示した教育課程試案は、読み書きの基本知識を重視し、学校の初歩段階から地理、歴史を設けてはばひろい知識

【図3-4】修学年の比較と変化

1902	蒙学堂 4年	尋常小学堂 3年
教育課程試案	蒙学堂 4年	小学堂 4年
1904	初等小学堂 5年	高等小学堂 4年

を教授する方針で統一されているといえる。いわば、知識注入型の教育課程試案である。

長尾、小谷らの試案は、中国の教育課程の変遷においては、いかなる位置を占めるのであろうか。

中国の教育課程

清朝末期において、児童にあたえられる書物は2種類があるにすぎなかった。ひとつは啓蒙のためで、『三字経』、『百家姓』、『千字文』、『神童詩』、『幼学』などだ。もうひとつは、科挙の試験準備に「四書」、「五経」、「史記」、「通鑑」、「古文辞」のたぐいが与えられた[呉研因1957:149]。

教師のいうがまを児童は口で反復し記憶する。最初は、内容を理解しようがしまいが頓着しない。児童に合っているかいなかも問題ではない。中国においては、それが伝統的児童教育法であった。

だが、時代が変化をしはじめる。アヘン戦争から、中国は、外国勢力との争いに敗北をつづける。この現実を目の当たりにすれば、統治集団のなかにも改革派が出てくる。

改革政策のなかのひとつが、教育改革である。新式学堂の設置が提唱され、実施に移されてもいる。主として3方面に力が注がれた。外国語、技術、軍事である。これら新式学堂の設立ブームが商務印書館の翻訳書発行の背景になっていることは、すでに触れた。

それまでに存在しなかった新式学堂の教育内容は、奇妙なものだった。西洋の翻訳書で学習するのはしかたがない。一方で、四書五経を学ばせていたという[王建群1996:26-28]。伝統と新式の折衷で「中体西用」の典型だ。中途半端だといわれてもしかたがなかりう。

児童用の教科書としては、三等公学堂の俞復らが編纂した国文、修身、算数の『蒙学読本』(1898)とか南洋公学の朱樹人の『蒙学課本』(1901)が知られている[陸費伯鴻1953:212][国民政府1953:224-225]。

教育全体を見直し、学制を整えるという意味で1902年の「欽定学堂章程」と1904年の「奏定学堂章程」は、重要な意味をもつ。

前者は、大学堂から蒙学堂までを、後者は、初等小学堂から大学堂のほかにも各種学堂までを含んだ大規模なものだ。

宗旨を見ておく。教育の目的をどこにおいているのかを知るためだ。

光緒二十八年七月十二日(1902.8.15)の「欽定蒙学堂章程」第1節には、「卑近な知識をもたせ、身体を育てる」のが宗旨だとある[璩鑫圭ら1991:281]。漠然としている。

第2節には、「欽定京師大学堂章程」第1-3節と同じだということで、そこを見る。

「忠愛をかきたたせ、知識を啓発し、実業を新興する」ことを設立の理由だとする。さらに、「中国の聖經は、倫常道徳を先にすべしと教えている。外国の学堂は知育体育のほかに、特に徳育を重んじる。中国と外国の教育の基本は同じである理由だ。中国、外国の大小学堂をとわず、修身倫理をそのほかの学科よりも注意するのは、人材を養成する基本だと考える」[璩鑫圭ら1991:235]

徳育を重視するのが一貫した姿勢だとわかる。蒙学堂では、それをどういう内容で教えるかが第2章で述べられる。

科目は、修身、字課(天地人物の諸類の名詞を絵図によって示す)、習字、読経、史学、輿地、算学、体操の8科目だ。

読経には、「孝経」、「論語」、「孟子」、「大学」、「中庸」を学ぶことになっている。修身と読経が、体操とならんであわせて3本柱となる[璩鑫圭ら1991:283]。

小学堂は、字課にかえて作文があり、その他は蒙学堂と同じで、合計8科目がもうけられる。

修学年は、蒙学堂4年と小学堂3年に定まる。

学制を整えたということはいえる。だが、全体の印象からいえば、その内容は旧態依然といわなければならない。

知育徳育体育をあげて外国との共通点をのべる箇所を見れば、中国独特の教育を実施する意図はなさそうに思える。諸外国に対抗していくために強力な国民を養成する、と意欲に満ちているとは、とてもいうことはできない。

ただ、教材に古典を指定しているところに特徴を認めることは、できる。しかし、それはそれまでの伝統的な教育方法と異ならない。

つぎに、「奏定初等小学堂章程」と「奏定高等小学堂章程」を見てみよう。

蒋維喬日記に見られる教育課程試案の翌日 光緒二十九年十一月二十六日
(1904.1.13) に公布された

第1節には、「倫理を明らかにし、国家を愛する基礎をうちたてる」と明確にしたところが新しい。「国家を愛する」ことを打ち出している点に注目しよう。

第4節では、「国民」が登場する。すなわち、「国民の知力が愚かか賢いかは、国家の強弱盛衰にかかわる」[璩鑫圭ら1991:292]である。

修学年は、初等小学堂が5年、高等小学堂が4年と、以前のものとくらべてそれぞれ1年延長される【図3-4】。初等小学堂の科目は、修身、読経講経、中国文字、算術、歴史、地理、格致(動物植物鉱物)、体操が基本で、随意科目として図画、手工がある。高等小学堂も、基本的に初等小学堂と同じ科目だ。

科目名の変更がある。

字課、習字、作文が、中国文字(中国での教育科目にわざわざ「中国」とことわるのは、なにかおかしい)に改定され、史学が歴史へ、輿地が地理へ、算学が算術へと改まっている。

「欽定」から「奏定」への変化をひとことでいえば、教育界における「国家」と「国民」の創出ということになる。

長尾、小谷らの試案は、修学年をおのおの4年とし、算術、地理、歴史の名称を使用する。

試案と小学堂章程の公布が1日違いというところから、試案が小学堂章程に、直接、なんらかの影響を及ぼしたというのは、ありえない。ただ、長尾、小谷らの試案は、中国の教育制度改革を先取りして立案されていたとはいえる。中国の近代教育体制の模範が日本に求められた当時の状況を見れば、それは、必然であったのだ。

『最新国文教科書』第1冊

金港堂と商務印書館が合弁会社となり、最初に発行したのが『最新国文教科書』第1冊だ。日本人と中国人が協力して編集した、まさに、日中協力の成果である。

ここで初期商務印書館における教科書の系譜をのべながら、『最新国文教科書』を紹介しよう。

上海で創業した商務印書館が主として行なっていたのは、キリスト教会関係の刊行物、また、よそから依頼された雑誌などを印刷することであった。はじめりは、会社名のとおり、商売に関係する印刷を請け負う、純然たる印刷業である。最初から出版を目標にしていたわけではない。

創業者のひとり夏瑞芳が、印刷から出版に手をひろげようとまず試みた自社企画物が、漢訳英語教科書だった。

それまで、上海では、英語だけで書かれた英語教科書が普及していた。夏瑞芳らも、キリスト教系の学校において、それで英語を学んでいる。

英語教科書に漢訳をつけるというのが、商務印書館の新機軸であり、結果として成功した。ところが、後に日本書籍の漢訳出版で失敗し、まきなおして新しく編集発行した小学生用教科書でふたたび成功を得る。これが、どの論文でも、単行本でもくりかえされる初期商務印書館の出版への歩みである。

成功をおさめた小学生用国語教科書の編集には、日本人が参加していた。商務印書館が、日本の金港堂と合弁会社になったことが背景にある。しかし、この事実に触れる研究者は、多くない。出版元の商務印書館みずからが、教科書から日本人の姿を消すことにやっきとなっているのだ。隠そうとしているのだから、よほどのことがなければ、事実を見逃してしまうのもしかたがなかろう。

金港堂との合弁は、商務印書館の将来を左右する大事件だということができる。だが、知ってか知らずか、日中合弁に触れない論文も発表される。そればかりか、初期の教科書についても、いくつかの、説明不足がある。

たとえば、商務印書館にとっては最初の英語教科書だが、この実物について、具体的に解説した論文を見たことがない。私が紹介したのは、そういう状況があ

るからだ。

同じく、商務印書館の初等小学生用国語教科書の内容にふみこんで説明した文章は、私の知るかぎり、1996年の王建軍が最初である。さらに、教科書の本文複写を示して詳細に紹介したのが、張人鳳の論文[張人鳳1997a、1997b、1998a]だ。

小学校教育という側面ではなく、初期商務印書館の出版物という視点で教科書を探ることがむつかしいのには、理由がある。

当時の営業金額、収支決算、人事関係などのすべてを含めて、出版物の子細が不明である。これは、1902年に発生した商務印書館自身による失火が原因だと説明されている。関係書類が火災で消失してしまった。

だが、関係書類は、焼けてしまったとしても、大量に発行され使用された教科書類は、どこかに残っているだろう。授業に必要であり、落書きするほど親しもうとも、卒業してしまえば、捨てられるのが教科書の宿命だとしてもだ。

教科書の内容に立ち入ったの紹介が、1990年代になってようやく出現したのは、あまりにも遅すぎると感じざるをえない。それだけ手薄な研究分野だといえよう。

ここでは、営業的にも成功をおさめたといわれる『最新国文教科書』とその周辺について考察する。

必然的に初期商務印書館における教科書編集の流れを追跡することになる。また、『最新国文教科書』だけについても、発行時間の異なる3種類の版本を手元において、それらを比較対照して検討する(本書附録に本文を掲げておく)。

商務印書館が、当時、印刷請け負いのほかにどのような出版を行っていたのかを、まず簡単に見ておきたい。

当時の出版物を知ろうと思えば、商務印書館が出した自社出版広告がひとつのてがかりになる。一部、記述が重複するがご了承ください。

出版広告

活版線装本『商務書館華英字典』(光緒二十有八年<1902>歲次壬寅仲春<二月> 上海商務印書館 三次重印本。奥付なし)は、比較的初期の出版物だ。ただし、英漢辞典だから、掲載されている広告も英語関係のものに限られる。今は、触れない。

商務印書館が印刷をしていた『外交報』がある。その壬寅第15号(総第17期

【圖3-6】『繡像小說』創刊号（癸卯五月初一日1903.5.27）

清史初編	每部洋四元
清史續編	每部洋二元
清史三編	每部洋二元
清史四編	每部洋二元
清史五編	每部洋二元
清史六編	每部洋二元
清史七編	每部洋二元
清史八編	每部洋二元
清史九編	每部洋二元
清史十編	每部洋二元
清史十一編	每部洋二元
清史十二編	每部洋二元
清史十三編	每部洋二元
清史十四編	每部洋二元
清史十五編	每部洋二元
清史十六編	每部洋二元
清史十七編	每部洋二元
清史十八編	每部洋二元
清史十九編	每部洋二元
清史二十編	每部洋二元

和文教科書

和文初級	每部洋一元
和文中级	每部洋一元
和文高級	每部洋一元
和文文法	每部洋一元
和文讀本	每部洋一元
和文習字	每部洋一元
和文會話	每部洋一元
和文翻譯	每部洋一元
和文對照	每部洋一元
和文會話	每部洋一元
和文翻譯	每部洋一元
和文對照	每部洋一元

地理叢書

中國地理	每部洋一元
日本地理	每部洋一元
英國地理	每部洋一元
法國地理	每部洋一元
德國地理	每部洋一元
美國地理	每部洋一元
日本政治	每部洋一元
英國政治	每部洋一元
法國政治	每部洋一元
德國政治	每部洋一元
美國政治	每部洋一元

上海商務印書館新書廣告

華英字典	每部洋二元五角
華英初階	每部洋一元五角
華英中階	每部洋一元五角
華英高階	每部洋一元五角
華英會話	每部洋一元五角
華英翻譯	每部洋一元五角
華英對照	每部洋一元五角
華英會話	每部洋一元五角
華英翻譯	每部洋一元五角
華英對照	每部洋一元五角

普通學問叢書

文法	每部洋一元
算術	每部洋一元
代數	每部洋一元
幾何	每部洋一元
物理	每部洋一元
化學	每部洋一元
生物	每部洋一元
心理	每部洋一元
教育	每部洋一元
政治	每部洋一元
經濟	每部洋一元

繡像小說

購閱繡像小說價目

每月一册	全年十二册
每册洋一元	每部洋十二元
每册洋八角	每部洋九元六角
每册洋六角	每部洋七元二角
每册洋四角	每部洋四元八角

告白價目表

一行	一元二角
二行	二元二角
三行	三元二角
四行	四元二角
五行	五元二角
六行	六元二角
七行	七元二角
八行	八元二角
九行	九元二角
十行	十元二角

戰史叢書

俄國革命史	每部洋四元
法國大革命史	每部洋四元
美國獨立戰爭	每部洋四元
普魯士革命史	每部洋四元

輿圖

亞細亞地圖	每部洋一元五角
歐洲地圖	每部洋一元五角
非洲地圖	每部洋一元五角
美洲地圖	每部洋一元五角
大洋洲地圖	每部洋一元五角

續出各書

中國通史	每部洋一元
中國地理	每部洋一元
中國政治	每部洋一元
中國經濟	每部洋一元
中國教育	每部洋一元
中國文學	每部洋一元
中國藝術	每部洋一元

光緒二十八年六月十五日1902.7.19)に、焼け出される前の「上海北京路商務印書館書目」【図3-5】が、掲載されている。

のちの自社出版物広告とは違い、書名を列挙するだけで、内容別の分類はしていない。分類するほどの出版点数ではないということらしい。

『商務書館華英音韻字典集成』の辞書類から、英語教科書で有名な『華英初階』、その「進階」、さらに、『絵図文学初階』、『和文漢訳読本』などの教科書類が、全体のほぼ半数を占める。あとは、書名をみただけではわからないが、日本語からの漢訳本が多い。具体的には、つぎの『繡像小説』掲載広告で説明しよう。発行点数は増えているが、ほぼ同内容であるからだ。

さて、『繡像小説』掲載の広告である。商務印書館の出版全体をうかがわせて、『外交報』と同じくらいに早い。該誌は1903年の創刊だから、『東方雜誌』(1904年創刊)よりもわずかに先行する。

『繡像小説』創刊号(癸卯五月初一日(1903.5.27))に掲載されている「上海商務印書館新書広告」【図3-6】に注目したい(この広告は、上海書店が刊行した該誌影印本には収録されていない)。

書籍の内容によっていくつかの種類に分類する。

最初に掲げられるのは、「華英字典」だ。今でいう英漢字典である。なぜ、華と英が反対になっているかといえば、英よりも華が優位である、という「優越感」にもとづく。

商務書館華英音韻字典集成	每部洋七元五角
商務書館華英字典西紙西装	每部洋一元二角五分
商務書館華英字典洋連史紙	每部洋六角

前述した1902年第3版『商務書館華英字典』は、広告のなかに見える洋連史紙に該当する。活版線装本。ゴム印によって「定価大洋陸角」と朱色で表示しているから、定価も同じだ。

同書の「西装」というのは、洋装という意味だ。手元にある、癸卯(1903)年四月十四日初版、中華民國4(1915)年6月20日13版の重訂版にも、大洋壹元貳

角五分と書かれている。『繡像小説』の広告から12年が経過しているにもかかわらず値段に変化はない。清朝から中華民国に変わったというのに、辞書の定価は値上げにならなかったらしい。

つづいて「華英文教科書」の名称でまとめられたかなりの分量の書名がならぶ。

商務印書館にとっては記念碑的な刊行物である『華英初階』（1898）を先頭に、その上海方言版（上海土白と表示される）、さらに『華英進階』の初集から5集まで、またそれらをまとめた全集がある。その他の書名を少しあげれば『華英亜洲課本』『華英国学文編』『華英文件指南』などだ。

英語だけを使用した教科書も出ている。「英文教科書」とよばれ、『原文英語文規』のほかに『原文華英初階』『原文華英進階』も名前を出す。

『原文華英初階』という書名のつけかたが奇妙だ。「華英」とくれば、英語の原文に漢語の注釈または訳をつけた教科書だと考える。だが、その頭に「原文」をかぶせているのはどういう意味か。もしかすると、『華英初階』の原本である、すなわち原書のまま、ということなのだろうか。

これらの英語教科書を編集刊行することが、商務印書館を印刷業から出版業へと業務拡大させる契機となったことはすでにのべた。主力刊行物だから、自社広告の冒頭のかなりの空間、ほぼ1ページ全部を占めているのも納得がいく。

英語関係につづくのが、「漢文教科書」であり、さらに「和文教科書」がその後ろにひかえている。

「漢文教科書」とは、漢語で記述された教科書だと見当がつく。

あげられた書名を見れば、『綱鑑易知録』は中国の歴史書だ。『清史攬要』は、別名『支那最近史』といい、日本増田貢編で1902年の出版だという。ただし、ものの本によれば、出版社は上海書局らしく、商務印書館ではない。原物を見ていないからなんとも言えない。

日本語からの漢訳本（カッコ内に原著者名をおぎなう）は、『普通新歴史』、『西洋歴史教科書』（本多浅治郎）、『新説教授学』（槇山栄次）、『読書法』（沢柳政太郎）、『支那教学史略』（狩野良知）、『造化機新論』（細部順）などがある。

参考までにそのほかの書名をあげておこう。

『国史初級教科書』、『普通珠算課本』、『小学万国地理新編』、『農話』、『理財

学課本』、『絵図文学初階』6巻、『新輯地理問答』、『日本近世豪傑小史』だ。

注目すべきは、1903年の時点で『最新国文教科書』が出ていないことだ。

該教科書の発行は、1902年だと関係者、あるいは商務印書館自身が書いているが、広告の事実と合致しない(後述)。

こうして書名をならべると、小学生用の国語教科書は、まだ編纂されていないように思える。だが、事実はそのようではない。あとで『絵図文学初階』を問題にする。

「和文教科書」の名称で括られている書籍がある。『和文漢訳読本』巻1-7だ。

商務印書館発行の小学生向け国語教科書を説明して、この『和文漢訳読本』に言及した論文を見ない。

考えれば、当然のような気もする。書名からして日本語の教科書を漢訳しただけのように思われるからだ。だが、その実態を知れば、商務印書館の教科書編集史上、欠かすことのできない重要な位置にあることがわかる。

すなわち、英語原文に中国語で注釈、訳をつけた『華英初階』が商務印書館にとって最初の教科書であるとするれば、それと同じ編集方法を適用したのが『和文漢訳読本』だからだ。

『和文漢訳読本』を説明するまえに、広告全体を見渡した印象を書いておく。

教科書以外の出版に手をだしているのが、つぎの分類名からわかる。

すなわち、「政学叢書」「歴史叢書」「財政叢書」「地理叢書」「帝国叢書」「戦史叢書」「普通学問答書」「説部叢書」「伝記」「輿図」などだ。日本語からの漢訳が多いことでも知られている。ここでは、分類名称だけをあげるにとどめて具体的な書名は省略する。

『和文漢訳読本』1901

坪内雄蔵著、沙頌^マ^マ、張肇熊^マ^マ訳『和文漢訳読本』(商務書館^マ印行 明治33(1900)年12月著、光緒二十七(1901)年九月訳)と表示されている。

鶏のつがいとヒヨコ、木にカラスがとまり、スズメ、ツバメ、池(川かも)にオシドリがおよぐ。絵図を掲げて本文は「トリ」の2字のみを示す。欄外に「トノリ」と抜き出し、これが新出文字であることを意味している。次ページは、

「ハト」「アリ」で、欄外の新出文字は、「八ノア」だ。

このように、徐々に文字数を増やしていく。単語から短文へ段階を追って進む。文字の大きさは、できるだけ大きく、絵図を添えることを忘れない。これらは、すべて小学生の国語教科書はこうあるべきだ、という坪内逍遙の考えが反映されて編集されている。だからこそ、坪内雄蔵著とうたっているのである。

商務印書館の漢訳では、「トリ」に「鳥」と訳語をあてる。これは、『華英初階』において、“me”に「吾」、「we」に「我輩」のように英語の単語に漢訳をふったのと同じ方法であることがわかる。

注目すべきは、日本における国語教育のやり方、それを反映した国語教科書が、1901年という早い段階で商務印書館によって漢訳出版されているという事実の方である。

『和文漢訳読本』は、日本の国語教科書を漢訳しただけの、中国人が日本語を学ぶための学習書であるにすぎないと考えてはならない。別の意味があるというのは、この『和文漢訳読本』を見るだけで、従来の教科書とは違うことがわかる。つまり、新しい小学生用教科書の編集方針はこうでなくてはならない、という著者の姿勢が理解できる点なのである。

いずれも外国語教科書がもとになっており、それに中国語の注釈、漢訳をつけることを共通の方法する。『華英初階』から『和文漢訳読本』へとつながるひとつの流れを構成している。

さらに、内容からいえば、両者ともに、簡単な単語からより複雑な語句に発展させる道筋を示している。いわば、これらによって小学生用教科書のあるべき編集方針を学ぶことができたということだ。つぎに出てくる『絵図文学初階』（『文学初階』と称する論文もある）に受け継がれていく。

さらに先走っていえば、『和文漢訳読本』から『絵図文学初階』に継承される方向を示しながら、もういちど『和文漢訳読本』にもどって、ここから直接『最新国文教科書』が出てくることになる。

商務印書館の教科書編集史において、『絵図文学初階』は、はずすことのできないものだ。

『絵図文学初階』1902

『絵図文学初階』は、杜亜泉が小学3年用に全6冊を編集した。本教科書については、すでに詳しく紹介している。要点をのべる。

1学年に2冊を割り当てる。第1冊は、第9課まで虚詞は使わず、児童の日常生活に題材をとる。たとえば、第1課は、新出単語は、「大、小、牛、羊」であり、課文は、それらを組み合わせて「大牛、小羊、大小、牛羊」となる。

新出漢字は、つぎの漢字と組み合わせて、くりかえし利用することによって児童に理解させるという方法である。入門書として与えられていた以前の『三字経』『百家姓』『千字文』は、ただ暗記するだけしか教授法はなかった[汪家燊1998f]。

たしかに、中国で編集された国語教科書としては、大きな方向転換であったといえることができる。ただ、杜亜泉には、先行物として、商務印書館の『華英初階』と『和文漢訳読本』が存在していたことを忘れてはならない。この点を強調しておきたい。

汪家燊によると、『絵図文学初階』第1冊120課の課文1,224字のうち新出漢字は、542字であるという[汪家燊1998f:681]。

542字を組み合わせて第1冊を編集したことがわかる。以前の入門書で約2,600字弱をマル暗記させていたのとは異なる。

商務印書館は、杜亜泉主編『絵図文学初階』に大いに力を入れた。

そう想像する理由は簡単だ。書名に「初階」という名称を与えている。明らかに『華英初階』の漢語版という意味をもたせていることがわかるだろう。

だが、その教科書としての使い勝手からいえば、重要なところで、最初から齟齬があった。

1902年の「欽定学堂章程」では、蒙学堂の年限は4年である。『絵図文学初階』は3年用だから、もともと一致していない。さらに、1904年の「奏定学堂章程」では、初等小学堂に名称が改められる。しかも、修学期間は1年延長して5年になった。ますます、年限に開きができる。3年用に編集された教科書を、5年間で使おうとすれば、無理が生じる。教育界において、まず、教師によって敬遠されるだろう。

商務印書館が「初階」をうたって主力教科書と考えているならば、年限の延長

に応じて手直しするように杜亜泉に要請できたのではないかと思う。だが、どういふわけか、もともとの3年6冊のままに終わってしまった。

初期商務印書館の出版物を紹介するとき、必ずといっていいほど『最新国文教科書』には言及がある。だが、『絵図文学初階』に触れる論文は、少ない。ほとんど無視されているといってもいい。

商務印書館が宣伝用に配付した出版書目がある。その第118期(1927.4)を見れば、「学校用書類 / 初級小学校用 / 国語文科」のなかに、清末の『最新国文教科書』10冊(3頁)があるのと同時に、杜亜泉著『絵図文学初階』6冊(5頁)も掲げられている。それぞれ定価もつけたままだ。時代の流れによって、教科書として採用される数は減っていただろう。だが、書目に掲げられているところを見ると、それでも、ながく発行販売されていたことがわかる。

『最新国文教科書』の出現

有名な『最新国文教科書』ではあるが、謎がひとつある。第1冊の発行年月日が、いまもって不明のままなのだ。

第1冊の発行年月日の謎

まず、いくつかの証言を見てみよう。

蔣維喬は、「甲辰年(一九〇四年)十二月、第一冊出版」と書いている[蔣維喬1957:142]。甲辰年十二月は、旧暦だから、新暦になおすと1905年1月になる。2週間で5千冊あまりが売れたと書かれているところを見れば、出版物としては大ヒットだ。

蔣維喬は、『最新国文教科書』の編集に直接携わっている。当事者の証言だから、1905年発行というのは信用されるだろう。この文章しか読まなければ、これが間違いであることなどわかりはしない。

一方で、莊兪が、蔣維喬とは違う証言をする。

莊兪は、該教科書の発行は、光緒二十八年、すなわち1902年だという[莊兪1987:62]。ごていねいにも、教科書の一覧表をつけて、それにも1902年だと明記する。

莊兪は、蔣維喬と共同で『最新国文教科書』を編集している。ふたりともに当事者であるにもかかわらず、記憶によっているためか、証言が食い違う。

1903年の『繡像小説』創刊号に掲載された出版広告には、『最新国文教科書』の書名は、見えない。当然、それ以前 1902年の『外交報』の広告にも存在しない。つまり、1902年に『最新国文教科書』は発行されていないことは、明らかである。

もうひとつ、商務印書館自身が編集発行した『商務印書館図書目録(1897-1949)』(北京・商務印書館1981)には、奇妙な資料が附録としてついている。

題して「商務印書館歴年出版小学教科書概況」という。「照録一九三五年十二月原件」と注釈がついているから、1935年に作成されたいらしい。

一覧表のなかに「最新教科書」とあって、初等小学用に『最新国文教科書』十冊張元済、高鳳謙、蔣維喬、莊兪編の名前があがっている。ここが重要なのだが、「初版時期」と一括表示して「光緒二十八年」と書くのである。1902年だ。

おかしいではないか。1903年の『繡像小説』に書名がなくて、なぜ、その前年の1902年に『最新国文教科書』が刊行されているのか。商務印書館自身の作成した資料には、明らかに誤りがある。

莊兪は、商務印書館の資料を見て、1902年発行だと発言しているのかもしれない。

当事者のふたりが、1902年だ1905年だ、と異なることを言っている。商務印書館が提出する資料も、あてにならない。あてにならない資料を根拠にすれば、結果として記述が間違うのは当然だろう。

1868年から1918年までの教科書の発行情況をのべて、1902年の項目に、「商務印書館は高鳳謙を招聘し編集所長とし、蔣維喬の計画により日本人長尾、小谷、加藤の3名に協力を請い、劉崇傑が翻訳担当、高鳳謙、張元済、蔣維喬、莊兪が編集を担当し、半年を経て『最新初小国文教科書』1冊ができた」[国民政府1953:228]と書いている。

最近の資料では、『商務印書館百年大事記(1897-1997)』[商務印書館1997]がある。1903年の項目に「編印小学“最新教科書”」というのが該当する。だが、冒頭の写真版にそえた説明文には「高夢旦与張元済、蔣維喬、莊兪合編小学《最新国

文教科書》(1904.2)」と書いて、本文の1903年と矛盾して平気である。おまけに、「1904.2」は、1904年が新暦で2月は旧暦であって、旧暦と新暦を混用している。

以上のような混乱模様を呈しているなかで、発行の年月日をあきらかにしている文献があるので、紹介しておきたい。

張樹年主編『張元濟年譜』の1904年の項目には、「3月29日(二月十三日)《最新国文教科書》第一冊出版。初版四千冊,未及幾日已銷罄。(蔣維喬《鶴居日記》)」[張樹人1991:49-50]と説明がしてある。月日までを書き込んでいるから、原物で確認したのだと思うではないか。

ところが、張人鳳編著『張菊生先生年譜』(『張元濟年譜』(北京・商務印書館1991.12)を修訂したもの)では、日にちが微妙に異なる。「二月二十三日 《最新国文教科書》第一冊出版。初版四千冊,未及五、六日即告售罄。(參見蔣維喬《鶴居日記》)」[張人鳳1995:57]とあって、前に書いた日付とは十日ほど遅いのだ。二月の「十三日」と「二十三日」の2説が提出されている。

蔣維喬の日記を根拠としているらしい。では、蔣維喬日記に記述のブレがあるのかと思う。

蔣維喬日記選[蔣維喬1990、1992]の該当部分を見ると、以下のようになっている。

二月十五日 国文教科書第一冊已出来,未及五六日而已銷完四干部。現擬再版矣[蔣維喬1992:48]

これまた張人鳳が書いている「二月十三日」でも「二月二十三日」でもない。なんと「二月十五日」なのだ。

どういうことか。

張人鳳「商務印書館的《最新初等小学国文教科書》」がひとつの回答を与えた。

張人鳳は、該書第1冊の第10版に書かれている初版の年月日「光緒三十年歲次甲辰二月二十三日」を示し、蔣維喬日記の記述を考慮にいれて、初版の正式出版年月は、二月十日(1904年3月26日)以前でなければならない、と推測した[張人鳳1997b:87-88]。

張人鳳の主張する、初版は二月十日以前、というのはいかがか。

張人鳳は、単に印刷製本の完成した実際の日付を推測しているにすぎない。書誌の記述法としては、もしかりに、第10版本に初版が二月二十三日であると書いてあるのならば、記述通りに初版は「二月二十三日」だと「推測」できるだけだろう。

蔣維喬日記の二月十五日の時点で出来上がってからすでに五六日経過していようとも、それは関係のないことなのだ。

私の手元には奥付に第42版と印刷するものがある。それには、「光緒三十年二月初版 / 光緒三十四年二月四二版」と書かれている。

本稿では、『最新国文教科書』第1冊の発行は、光緒三十(1904)年二月だとしておく。

書誌に関しては、原物で調査しなくては、決着がつかない問題なのだ。重版ではなく、初版を見てこそ、正確な月日を確定することができる。

書名の謎 教科書の系譜

書名は、『最新国文教科書』という。だが、なぜ「最新」なのか。すなおいに考えれば、小学生用の『国文教科書』と名付ければ十分だろう。

わざわざ「最新」を頭につけるのは、それ以前に出した同類の国語教科書とは区別しているからだと推測できる。

商務印書館が刊行した先行する同類の教科書といえば、『和文漢訳読本』あるいは『絵図文学初階』くらいしかない。

というわけで、ここにいたって教科書編集の一筋の道が出現する。

すなわち、

『華英初階』1898 沙張訳『和文漢訳読本』1901 『絵図文学初階』1902 |
『最新国文教科書』1904

という系譜なのである。

簡単に説明する。

英語教科書に漢訳、注釈をつける『華英初階』からはじまる。同じ編集方針を日本語の国語教科書にあてはめて『和文漢訳読本』をだす。この時、文字から単語へ、簡単から複雑へ、という教科書の編集技術が明らかにされる。それらを参考にして杜亜泉の『絵図文学初階』が刊行された。ただし、こちらは学制の変更に対応させることなく、あとを継ぐ刊行物には発展しなかった。そのかわりに、当時、合弁相手の日本金港堂から派遣されてきた、教科書の専門家である長尾雨山、小谷重らが参加して、中国の小学生用に新しい国語教科書を編集した。日本人たちがもつづいたのは、まさに坪内逍遙著の『和文漢訳読本』に代表される日本の教科書だった。だからこそ、沙張訳『和文漢訳読本』から、直接、『最新国文教科書』につながっていくのに、なんの障碍もなければ飛躍もない。まことに自然で当然な編集の流れだった。

沙張訳『和文漢訳読本』と『最新国文教科書』をならべて見れば、一目でそれが同一であることに気づくだろう。

まず、欄外に新出文字を示すところが同じだ。大きい文字を配置し、絵図を添えることによって児童の興味を引くと同時に内容の理解を助ける。

多くの絵図は、当然、日本と中国では異なる。動物、植物であれば同一のものもある。だが、生活様式が違うのだから、動植物以外は、ほとんど共通するところはない。特に、日常生活を写せば、人物の服装からして日本と中国では異なる。違うのが当然だから、奇妙でもなんでもない。

しかし、ひとつだけ奇妙に似ている絵図がある。

朝日に松という組み合わせだ。

日本では、まことにありふれた組み合わせだろう。だが、中国ではどうか。

沙張訳『和文漢訳読本』にある「マツ(松)。アサヒ(朝日)。」【図3-7】に添えられた挿絵は、文字のとおり松の枝ごしに水平線より出てくる朝日の姿だ。太陽光線をともなって、日本人が抱く朝日のイメージ通りに描いてある。坪内本教科書が原本なのだから、そうなって当然だ。

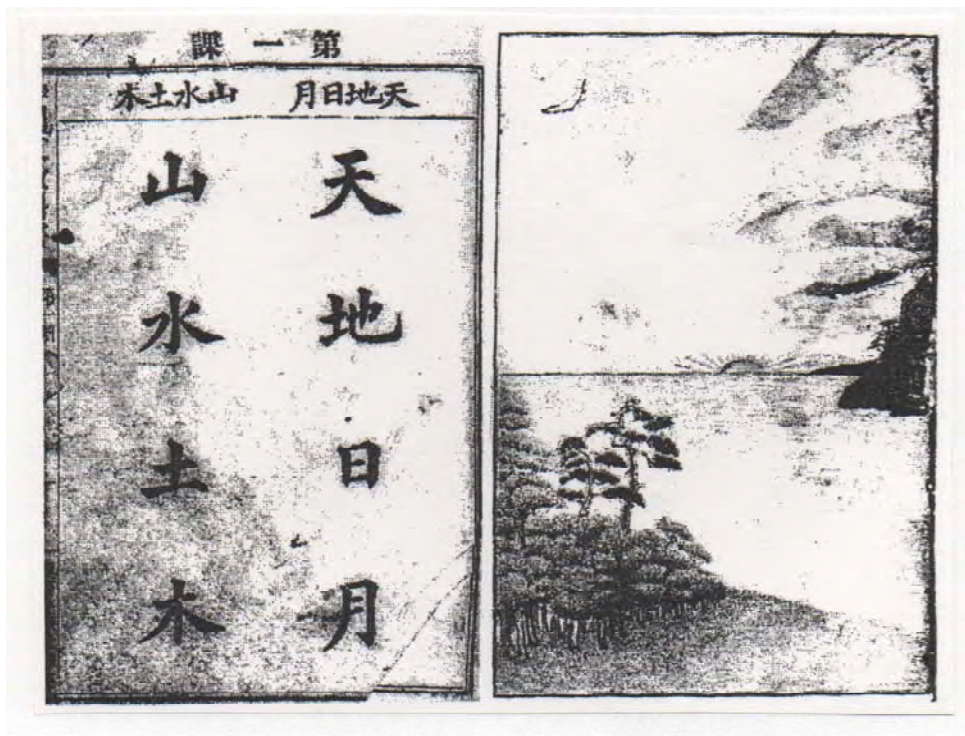
一方の『最新国文教科書』には、本文第1課の前に色彩石印の絵図が1枚置かれる【図3-8】。

これが、偶然の一致なのか、朝日に松の図柄なのだ。

【図3-7】沙張訳『和文漢訳読本』1901



【図3-8】『最新国文教科書』第1冊



ただし、商務印書館版では、視野が広い。左手前に緑の葉と茶色の幹をもった林があり、そのうちの2本がきわだって背が高く、まさに松であって枝振りがよろしい。視線の中央に水平線が置かれて中央よりやや右寄りに赤い朝日が光線をともなって出かかっている。青色の水面には、朝日の赤い光が反映する。右端には、島らしい影があり、こちらにも松林の姿がうかがえる。朝の風景だから天空は朝焼けの一方で、名残の月も出ている。太陽と月が同じ方面に描かれているのは、奇妙だとしても、手前の林の緑色、海の青色、水平線より上部の茜色、さらに天空の青色、と商務印書館の彩色印刷技術の特徴を出した絵だ。(絵図は、1912年版を使用。ほかの版本では、下3分の1が破れていたり、印刷そのものが稚拙であるからだ。ただし、1912年版は、この絵図だけページの綴じかたが他のものと異なる)

教科書の冒頭に、色彩石印であざやかに印刷された朝日に松の風景は、まことに刺激的ではなかったか。中国では取り上げられない種類の、見慣れない風景だと児童の目にはうつった、といいたくなる。墨色一色で黒黒と文字で埋めつくされた啓蒙書を見慣れた目には、特にそうであっただろう。文字通り「最新」の教科書であるという印象を強めただろうと想像する。

朝日に松の色彩絵図は、中国の児童に特別強い印象を与えるために、日本人編集者たちが考え出した方法であった。それを中国人編集者も承認したからこそ実現した奇抜な演出だった、と私は考える。

その故かどうか、1982年時点で、この商務印書館版『最新国文教科書』の文句を記憶している台湾人がいた[任真漢1982]。

1913年、台湾育ちの任真漢が7歳の誕生日のことだった。父親が、誕生祝いの贈り物として任にあたえたのは、商務印書館発行の最新国民小学教科書、すなわち『最新国文教科書』10冊である。父親は、知人にたのんで香港で購入してもらい、台湾にひそかに持ち込んだという。実際に使用した任の感想は、千字文に似てはいるが、課が進むにつれてだんだんと文章が複雑になっていき、文体が生き生きとして興味が持てた、というのだ。知らない漢字がでてくると父親に聞いて勉強した。自習もできる教科書だった。

『最新国文教科書』ができるまで

商務印書館内部において、教科書の系譜は、上にのべている通りだ。

だが、実際には、『最新国文教科書』が完成するまでには、試行錯誤があった。当事者のひとりである蔣維喬がその当時を回想（蔣維喬回憶と称する）して貴重な事実を教えてくれている。

まず、蔣維喬回憶を要約して紹介する。あとで、私の意見をのべる。

クズ翻訳原稿事件にはじまる。すなわち、夏瑞芳が日本語の書籍を漢訳して出版しようとして、売れもしないクズ翻訳原稿をつかまされた。1万元の損失をだす。知り合いの張元済に見てもらおうと、編訳所の設立をすすめられ、そこで手直しをして再度出版しようとした。張元済は、夏瑞芳に蔡元培を紹介し、蔡元培の計画に従って方針を改め、教科書を新しく編集することにする。これが、教科書編集のはじまりだという。

蔡元培は、まず国文、歴史、地理の三科目について編集方針を定め、愛国学社の教員を編集責任者に置いた。蔣維喬が国文を、呉丹初が歴史と地理を担当する。ところが、蔡元培は、蘇報事件で上海を離れてしまう。張元済がかわりに編訳所所長となって、蔣維喬を商務印書館の常任編集員とし、蔣維喬の紹介で莊兪が地理を編集することになった。半年で「蒙学課本（当時は、まだ最新教科書とはよんでいなかった）」初稿10冊ができあがる。ところが、高鳳謙（夢旦）が国文部の主任に招かれると、合議制を採用して、まず編集の根本計画を定め、この計画によってすでにできていた「蒙学課本」を審査すると、まったく不適合となり、編集者はあらためて原稿書きから着手しなおした[蔣維喬1957:140-141]。こうして「最新教科書」が誕生した。

以上が、蔣維喬証言のあらすじである。

蘇報事件について簡単に説明しておきたい。

『蘇報』は、1896年に胡璋が日本人の妻の名義で上海の租界で創刊した日刊紙である。1900年、陳範が買収し、のち中国教育会と愛国学社の機関紙になると革命を宣伝しはじめる。1903年、鄒容の『革命軍』を紹介するなどの行動が清朝政府の弾圧を招いた。これが蘇報事件だ。蔡元培は、『蘇報』の執筆者のひとりだった。

蔣維喬の回想を読む研究者は、当事者の証言だから、とその内容を簡単に信用

するだろう。事実、このことばのままを引用してすませている論文も多い。

夏瑞芳が、商務印書館に編訳所を設立する経過を説明しためずらしい証言だといえることができる。1万円のクズ翻訳原稿も、蔡元培の教科書編集の提案も、蒋維喬と呉丹初の担当も、たぶん、事実なのだろう。いわゆる「蒙学課本」を編集していたこともあっただろう。

だが、私に言わせれば、蒋維喬は、この文章において肝心な部分を隠そうと苦労している。それは、何か。日本人の存在である。

文章の初出が1935年という時代だから、日本人は、出てきてはならないのである。日本人の存在を完全に無視して文章を書いた。日本人が出てこないこと以外は、すべて事実だというか。だが、目の前の文章は、日本人を隠したために、かなりいびつなものとなっているといわざるをえない。

論文とは違い、公表を前提としていない蒋維喬日記でおぎなうことにする。日記には本当のことが書いてあるのではないか。

光緒二十九(1903)年五月二十七日、商務印書館編集の「蒙小学教科書」全1,560課を六月末までに完成させることを蒋維喬は引き受けている。

それにしても全1,560課というのは、とても多いように見える。閏五月があって実質二ヵ月だから約六十日として、1日に26課の課文を考えなくてはならない。はたして可能なのだろうか。

案の定、不可能だった。六月末どころか十一月十五日まで、毎日のように編集にかかっていたらしい[蒋維喬1992:46]。

蒋維喬回憶にいう「蒙学課本」は、この「蒙小学教科書」というのが正式名称だとわかる。

編集中の教科書が、中止に追い込まれる直前の十一月二十五日、蒋維喬日記選には、興味深い資料が添えられている。

「附録日本人所擬蒙小学読本材料」という文書である。これは、『出版史料』の蒋維喬日記では省略されている。

その内容はといえば、日本における小学校教科書の編集方針をのべたものだ。

日用の普通の文字を主とし、第1学年では、短句短文を用いる。字画は簡単から複雑へ、解りやすいものからむつかしいものへと進むように言葉を選ぶ。順序

に配慮する。絵図は美しく、材料は偏らず各方面にわたること、などだ。また、日本で流通している尋常小学読本の分類とその内容を示した一覧表も掲げる。さらには、科目とその時間配分一覧表も添えている。

商務印書館で教科書を編集する際の参考になると考えたからこそ、日記にはさんだか、書き込んだかした資料であることがわかる。

なぜ、この時期に日本の小学校用教科書の編集方針が示されているのか。どこからきた資料なのか。自然と疑問がわくだろう。

商務印書館と合弁した金港堂の関係者以外には、その出所はありえない。

同年八月末に金港堂社主原亮三郎と小谷重、加藤駒二らは、上海に到着している。十月初一日に、商務印書館と金港堂は、正式に合弁会社となった。長尾雨山は、十月中旬に上海で原一行と合流している。

蔣維喬に渡された資料は、金港堂の関係者が提供したものと理解できる。

その結果は、どうなったか。

十二月初二日、蔣維喬が商務印書館編訳所に行くと、張元済がやってきていうには、「蒙学読本」について、東洋西洋の各国が定めているのをみれば、皆、筆画の多寡で簡単複雑を決めている、すでに編集している原稿は、最初からやりなおす必要がある、と[蔣維喬1992:46]。

蔣維喬回憶では、中止を申し渡したのは高夢旦だった。事實は、日記によると張元済じきじきの命令である。たしかに、国文部長では力不足かもしれない。編訳所所長の命令でなければ、それまでの努力をムダにすることを蔣維喬は承知しなかっただろう。

張元済の中止命令が出たあとのことだ。その日の午後、日本人の小谷重、長尾楨太郎がやってきた。それに張元済と高夢旦がくわわり、編集全体を相談している。

第1冊は、60課とし、1課をふたつにわけると。第1課より第6課までは1字を使う(半課で4字、1課で8字)、第6課より第12課までは2字句(半課で6字から8字)、第11課から第20課までは2、3字句(半課で10字)、第21課から第40課までは短文(半課で20字)、第41課から第60課までは短文(半課20字)とするなどなど。5時に終了。その晩、試しに8課を編集し、明日の午後に再び会議を開くことに

した。

これこそが『最新国文教科書』の編集のはじまりにほかならない。最初から、日本人と中国人の共同作業であった。その編集方針は、日本側から提供された資料にもとづいているのはいうまでもない。

文字数の配置は、基本方針であるから、計画通りにできるものではないだろう。実際に編集する過程で、変更をせまられることもあったはずだ。だからこそ、編集会議が頻繁にもたれた。

十二月初二日に、日本人との共同作業がはじまり、初三日、初四日と続けて、十一日には第1冊の編集が終わる。十二日に点検をし、十三日には、小谷が絵図が重要だ、商務印書館の絵師はうまくない、これでは文章の品格を減じる、という。蔣維喬は、すなおい「まったくその通り（其言良是）」[蔣維喬1992:47]と認めているのが正直だ。編集作業は、十二月二十日まで継続されている。

明けて正月十四日から、編集作業の再開である。編集のあいまに、蔣維喬は、長尾雨山に日本の教室での授業方法を質問をし、長尾はそれに対してていねいに答えてもいる。それらを細かく日記に記録しているところを見れば、蔣維喬は、教授法についても興味をもっていたことがわかる。

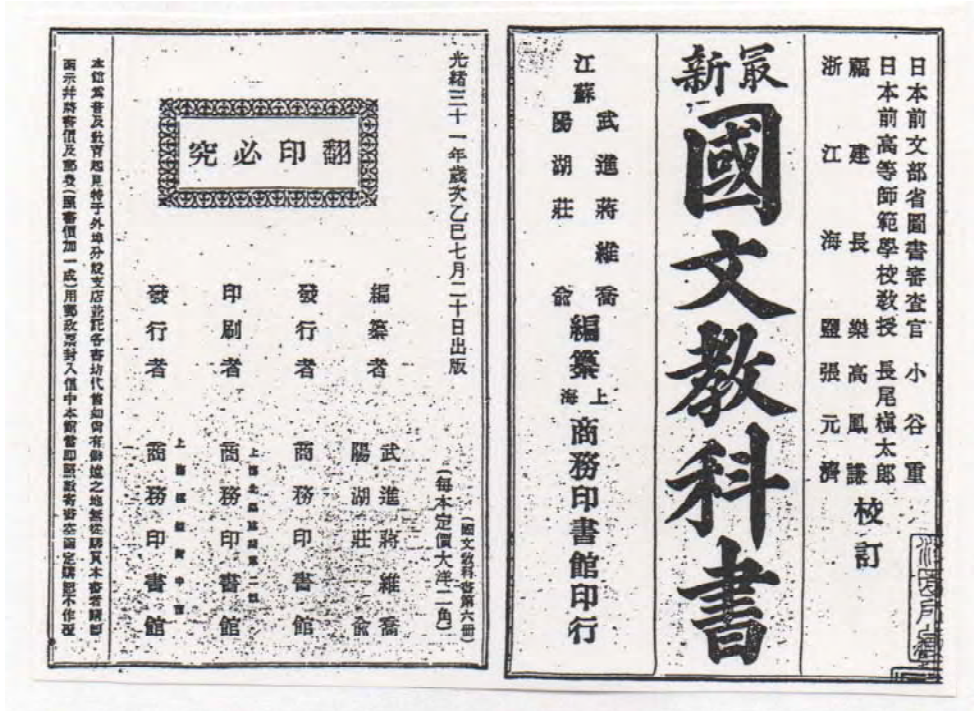
それと同時に、日本側からの一方的なノウハウの授与が行なわれていたことも理解できるのである。

1935年、蔣維喬は当時の教科書を回憶して次のようにのべる。自らが編集にたずさわったから自慢するわけではない、と断わりながら、『最新国文教科書』が当時の教科書として断然すぐれている証拠として、1. 商務印書館の該教科書が出てから、ほかの書店の児童読本は、はやらなくなったこと、2. 教科書のほとんどが該書を模倣したこと、をあげる[蔣維喬1957:139]。

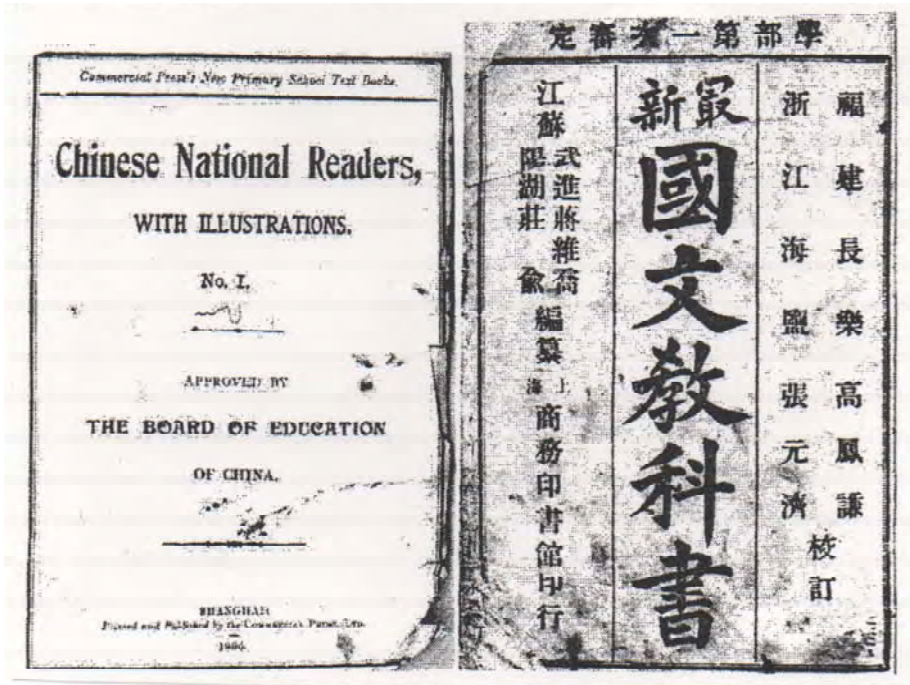
蔣維喬日記を見れば、自らが誇り、同胞にむかって自慢する『最新国文教科書』は、長尾雨山、小谷重ら日本人編集者がいなければ実現できなかった。なによりも注目すべきは、独自で編集を進めていた「蒙小学教科書」は、商務印書館首脳から中止命令を受けなければならない種類のものだったのだ。

『最新国文教科書』1904

【図3-9】『最新国文教科書』第6冊1905年版 『清末小説』第20号(1997.12.1)より転載



【図3-10】『最新国文教科書』第1冊1906年版（奥付を欠く）



【圖3-11】『最新國文教科書』第1冊1908年版

光緒三十四年二月初版
光緒三十四年二月四日版

書經存案 翻印必究

編纂者：陽湖 武進 湖海 陽湖 湖海 陽湖 湖海 陽湖 湖海
 發行者：商務印書館
 印刷所：商務印書館
 總發行所：商務印書館
 分售處：商務印書館

最新國文教科書

商務印書館印行

江蘇 武進 蔣維喬 編纂
 陽湖 莊俞 商務印書館印行

福建 樂高 鳳謙 校訂
 浙江 海鹽 張元濟 校訂

【圖3-12】『最新國文教科書』第1冊1912年版

商務印書館

初等小學作文教科書各五冊
 兒童初入學程度甚淺語以作文動多
 困難數年以來皆習本館各書本館
 有鑒於此特選是書為初等小學作文
 之用全書五冊材料均與本館前出過新
 國文教科書相比附習讀圖次無一不字
 井參酌東西各國文法書而折衷於吾國
 兒童之習慣所採排形正音分類國圖
 字並有英文譯法多至數十用圖國教授
 法別其甚易按步分配務使充實易於兼
 括既誠一課即得一理之用另編教授法
 按課說明教員得此尤便應用

教科書二冊 每本五分
 教授法二冊 每本五分
 點名教員 萬里說校訂

CHINESE PRIMARY SCHOOL
 NEW NATIONAL READERS
 (Revised Edition)
 COMMERICAL PRESS, Ltd.

中華民國元年三月廿九日出版
 第一冊至第五冊各五冊
 第一冊至第五冊各五冊

編纂者：陽湖 武進 湖海 陽湖 湖海 陽湖 湖海 陽湖 湖海
 發行者：商務印書館
 印刷所：商務印書館
 總發行所：商務印書館
 分售處：商務印書館

中華民國初等小學用

訂正最新國文教科書

上海商務印書館出版

第一冊

商務印書館は、『最新国文教科書』を発売するにあたり、最初、日本人が編集に参加していることを宣伝に大きく利用した。この事実には、注目しておきたい。

前出『東方雑誌』創刊号(1904.3.11)に掲載された「最新初等小学国文教科書出版」という広告には、特に招いた、と書いて、日本文部省図書審査官兼視学官小谷重君、高等師範学校教授長尾楨太郎君の名前を出している。ふたりの日本人を、高鳳謙と張元済よりも前に置いているところからも、宣伝の重点がどこにあるのか理解できる。前面に日本人を押し出して「最新」をうったえるのである。

本稿で使用する第1冊の各版本について説明しておく。

初版 未見。張人鳳論文による。【図3-9】

1906年版 奥付を欠く。【図3-10】

1908年版 第42版 光緒三十年二月初版 / 光緒三十四年二月四二版(ただし、英文には TWENTIETH EDITION とある)【図3-11】

1912年版 中華民國元年正月訂正初版【図3-12】

表紙

中華民國になるとさすがに表紙も大きく変化する。だが、初版表紙から1908年版の扉(表紙が別につけられている)までは、ほぼ基本的に変わりはない。

中央に横組で「最新」と置き、たてに「国文教科書」と大書する。

問題は、編者なのだ。

初版(ただし第6冊)では、『東方雑誌』の広告と同じく日本人をふたり、中国人をふたり掲げる。

日本前文部省図書審査官 小 谷 重

日本前高等師範学校教授 長尾楨太郎 校訂

福 建 長 楽 高 鳳 謙

浙 江 海 鹽 張 元 済

ここでも日本人の方が、中国人編者よりも上位に置かれる。

左に編纂がくる。

江蘇 武進 蔣維喬
陽湖 莊 俞

(張人鳳によると、第1冊は高鳳謙、蔣維喬、楊瑜統の3名、第2冊より、蔣維喬と莊俞、第7冊からは蔣維喬だという[張人鳳1997b:97])

1906年版から表紙に「学部第一次審定」を表示する。それと同時に、日本人のふたりが表紙から消えていなくなる。

鳴り物入りといっているほど宣伝をした日本人の編者であったが、1906年の時点では、不要になったということだ。

教科書審査を受けるにあたって、外国人が編集に参加していることを表示すると、合格しないかもしれない、という判断があったのだろう。

ただの日本人はずしだと考える根拠は、名前をださないだけで、教科書本文には変更がないからである。

前出の任真漢が、興味深いことを書いている。

9歳になって広東人の子弟を集めた私塾に入学した。そこで使う教科書も商務版である。ところが、ページのはしがめくれて、挿絵に色を塗っている任の教科書を、教師が見て、不愉快そうに言うのだ。教科書を粗末に扱うもんじゃない、手に入れるのがむづかしいものなのだ。日本が統治している台湾では、これは使うことが許されていない教科書だ、と。

著者の言うとおりであったとしたら、まことに奇妙なことだ。なぜなら、商務印書館の『最新国文教科書』は、日本人が編集に参加して作成したもので、その基礎には日本の教科書があるからである。

当時の台湾にいた日本人は、その事実を知らなかったらしい。商務印書館の教科書は、中国人だけが作ったと思った。だから使用禁止にしたのだ。さらには、台湾在住の教師たちも、日本人が禁止するのだから、中国人だけで編集したと考えていた。

『最新国文教科書』から日本人の名前を削除し、日本人の影を消しさろうとした商務印書館の努力は、台湾における事実をひとつ見ただけでも、十分に実現されていたということができよう。

英文表示

小学生用の教科書であるが、英文表示をかかげて、「最新」らしい演出をほどこす。英語教科書の出版で成功した商務印書館らしいやりかただと思う。

Commercial Press's New Primary School Text Books.

CHINESE NATIONAL READERS, with ILLUSTRATIONS.

APPROVED BY THE BOARD OF EDUCATION OF CHINA

中国語の『最新国文教科書』ではわからないが、英文では、挿絵を強調している。また、「学部審定」が“APPROVED ……”に相当することも一目瞭然だ。

「編輯初等高等小学堂国文教科書縁起」

教育普及の原理は、小学国文の確立にあることを主張する。ただ、この部分は小学生に読ませるための文章ではない。教育関係者にうたえて教科書として採用することを勧める宣伝文である。宣伝文といって悪ければ、趣意書といったおもむきだ。

小学堂から高等小学堂までの9年間に使えるよう18冊で構成されていることをいう。つまり、1904年の奏定学堂章程にあわせて、初等小学堂5年用に10冊、高等小学堂4年用に8冊で合計18冊である。第1冊だから、全体の内容をここで説明したいわけだ。

児童の知力体力の発達にあわせて、普通の道德知識をあたえることがこの教科書の目的である。

「編輯大意」

編集の主旨をのべるから、これは、教師用だと考えてよい。

まず、従来からある教科書の欠点を数えて18条をかかげる。

たとえば、筆画が繁雑すぎておぼえにくい、知らない字が多すぎて理解しにくい、語句が長すぎて口にしにくい、古すぎて社会改良をうながすことができない、進みかたが速すぎて順序よく進むということを知らない、などなどだ。

従来の欠陥をいちいち指摘しているから、『最新国文教科書』は、それらの難

点を克服した教科書だろうと読者は考える。

教師用に教授法も示している。かなり具体的である。

第1冊は、初等小学堂の1年生用で前半(正月から六月まで)に使用する。半年間に休みを除いた20週間で、毎週3課を学習する。1課は半分にかけて、などなど指導が細かい。

そればかりか、児童の視力保護を考えて活字は初号を使って大きくした、光る紙は児童の目に悪いから、堅固さだけを求めて外観の美しさは気にしない、となかなか心配りもされている。

この教授法があるからこそ、教科書として採用された理由でもあったであろう。ただし、もっと詳しい教授法の教本が1冊、別につくられている。用意周到ということができるだろう。

従来のただ暗記させるだけの教えかたではない。内容が、簡単から複雑へ、とそれぞれに関連を保ちながら進んでいくという編集方針なのだから、そこを説明しなければ、教える側もとまどう。

張人鳳論文は、「編輯大意」の全文を掲載している。ただし、なぜだか欠落がある。末尾部分だ。ここに収録しておく。

再本館同人編輯是書按照初学程度悉心斟酌每一課成必經數手易數稿以期適用
惟限於學識深恐尚多未合務望 海內同志將其謬誤之處痛加鍼砭並希 大筆斧
削本館同人敬當擇善而從隨時改良以期漸臻完美斷不敢稍護前短想 有志教育
者必不吝於 賜教也 惠函請寄上海美租界新衙門東首祥麟里間壁成字一千三
百六十四號商務印書館編譯所並祈 示明里居姓字以便往返函商常承 大教尤
為厚幸

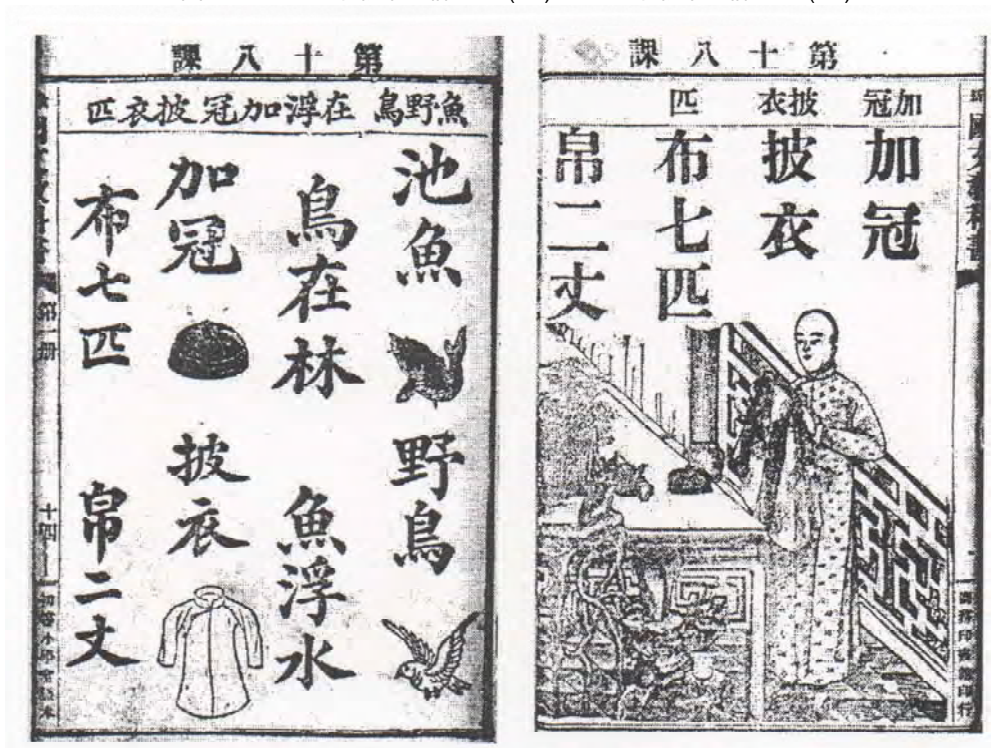
商務印書館編譯所同人啓

本文

本文は、基本的に重版も同じである。ただし、一部分にこまかな異同がある(附録で示しておいた)。

また、1912年版は、語句は同じだが、ページ数を節約するために1課1丁裏表

【図3-13】1912年版第18課14才(左) 1906年版第18課15ウ(右)



の原則を破り、1丁の半分に1課を押し込めている箇所もある【図3-13】。

本文は、第1課「天地日月 山水土木」からはじまり、第60課「放假回 見父母 父母喜 命児前 温書習字 每日一時」で終わる。第60課では、学習を強調していることがわかる。

第1冊全体の内容を大まかに分類すると、自然をあつかうものが38、動物についてが64、人間も動物だから、この64のうち人間関係は12、植物関係が18ある。内容が重複するばあいもあるから、合計すれば60になるわけではない。

自然、動物、植物にわたる内容がほとんどだ。政治的な意味をもたせている部分は、ない。小学生用の最初の教科書であるし、身の回りの日常を題材にするという編集方針から必然的に導き出される結論である。

清朝末期に編集刊行された『最新国文教科書』第1冊が、中華民国成立後も、内容を変えることなく重版されたのは、商務印書館編訳所に所属した編集者の怠慢でもなんでもない。もともとが政治を反映した教科書ではなかった。政治体制

が変化しても、日常をとりまく自然環境に激変が生じたわけではない。これでは、教科書の内容を変えようがなかった。

8 上海における雨山

長尾雨山は、上海に到着早々から教科書の編集に従事して多忙だった。

長尾雨山の没後に出版された『中国書画話』（筑摩叢書27 筑摩書房1965.3.10初版未見 / 1975.9.15第12刷）には、自らの中国滞在時期の活動に触れて述べている部分は、多くない。それでもかろうじて、つぎのような発言がある。長くなるが引用する。資料的価値があると判断するからだ。

私が支那にありました時分に文学やその他の学問の上につきまして、多くの先輩諸大家の人と親しくしておりました。毎月集まって詩を作ったりすることもやっておりました。一日詩会がありまして、そのとき偶然蘇東坡の誕生日にあたっておりましたので、東坡の像を描いてそれにみなが詩を題したら、韻事を添えて好いであろうということになったところが、画を描く人は呉昌碩がおりましたけれども、この人は人物画など描ける人でないからある人を招くことになった。その人は日本では有名な画家である。名をいうことは遠慮いたしますが、学問のほうはあまり深くない人であります。それから俵をやって呼んでまいりまして、東坡の像を描いてもらいたいと頼むと、その人はただちに筆を洗って実に見ておって面白いようにすみやかに東坡の像を描き上げました。ところが詩会のことありますからご馳走もある、これから酒食を始めようというときであるのに、画が出来てしまうと、ご苦労さんお帰りになってよろしいというのです。画においてはかなり技術を持っておる人であるが、しかるにまったく職人が何か扱うように一杯の酒を饗しませずにすぐ返した。そのくらい交際上においても、学者と学問のない人との差別がはなはだしく露骨であります[長尾雨山1965:59-60]

絵が上手であっても学問のない人は知識人の相手にしてもらえない、という実例を雨山は示した。ただ、上海における詩会には触れてはいるが、これ以上の説明はない。雨山自身、上海での生活、活動について語ることが少なかったのか、それとも話すことはあったがその記録がないだけなのか、よくわからない。

周囲の人の文章では、同じく長尾雨山『中国書画話』に掲げられた神田喜一郎「序」に、「同（注：明治）三十二年に東京高等師範学校教授に任じ、東京帝国大学講師を兼ねられることになったが、三十六年、遠く上海に移住、同地の商務印書館に入って、編訳事業を主宰、革命前の中国初中等教科書の編纂は、専らその手に成った」[神田喜一郎1965:4]とある。

汪家焘整理「解放以前商務印書館歴届負責人（董事長、総経理、総編輯）」には、「1903年6月-1918年9月 編訳所所長 張元済」[汪家焘1982b:20-21]と記録されている。張元済が編訳所所長であったことと、雨山が「商務印書館に入って、編訳事業を主宰」したことには、別に矛盾はないように考える。

長尾正和論文にも、「商務印書館に入り編訳事業を主宰、革命前の中国初中等教科書編纂は専らその手に成った」[長尾正和1959a:7]と書かれている。字句が同じだから、神田喜一郎「序」の前出部分は、長尾正和論文にもとづいている。「編訳事業を主宰」という箇所から、商務印書館の編訳所所長であったとする文章もある。これについて、雨山が所長であった事実はない、というのが商務印書館を研究する中国人研究者の意見である。

これまた同書の吉川幸次郎「解説」にも、つぎのように書かれている。

更にまた明治の末、長尾氏が、中国の出版社、商務印書館の顧問として、上海に赴き、大正三年、帰国して居を京都に卜するまで十二年間、その地にいたことは、中国人との交遊を、質量ともに増大した。当時の商務印書館は、中国最大のまた最も権威ある出版社として、旧友鄭孝胥が同僚であるのをはじめ、清末民国初における知識人の重要な拠点の一つであったが、長尾氏は、編集の業務について発言するばかりでなく、時務についても献言した。たとえば、軍事教練を学校の正課としようとする意見に対し、それよりは農業技術の改革こそ急務であると、説いた。また詩社を作って、人人と唱和したの

が、上海の詩社のはじまりであると、いずれもあとでのべるように、京都東山の酒楼で私が奉手した際の、談資である[吉川幸次郎1965:361-362]

雨山より直接聞かれた話だから、信頼するに足るものと言えよう。

以上は、数少ないながら雨山本人と親しい人たちの証言である。次に、中国側の資料に雨山の活動を探してみたい。

資料のひとつは、汪家熔選注「蒋維喬日記選」だ。『出版史料』1992年第2期（総28期。1992.6。45-62、44頁）に掲載された。これ以前、この蒋維喬日記は、同じく汪家熔の手によって一部分が紹介されている。『商務印書館館史資料』之四十五（1990.4.20）に掲載された「蒋維喬日記摘録」という文章だ[蒋維喬1990]。また、雑誌『出版史料』に連載されていた「張元濟年譜」が単行本になった[張樹年1991]。これにも蒋維喬日記からの引用がある。

さて、蒋維喬日記に雨山の名前がでてくるのは、光緒二十九年十二月初二日（1904.1.18）のことだ。「午後、日本人小谷重、長尾楨太郎来る」と記録してある。蒋維喬は、同年五月に蔡元培の推薦を受け、商務印書館に入って国文教科書の編集を始めた。小谷、長尾のふたりも教科書の編集に参加した。翌初三日、「十時編訳所にもどり教科書を編集する。午後、張菊生（元濟）、高夢翁（夢旦）、小谷重、長尾楨太郎らと教科の相談をする」とあるように、初四日、十一日といずれも教科書編集の会議がもたれた。

十二月十四日（1904.1.30）のことだ。雨山と蒋維喬のあいだにやりとりめいたものが発生する。新しく公布された「奏定学堂章程」に定められた小学の課程が、教育公理に反するものだった。ところが商務印書館の「資本家（原文のママ）」には、利益のため強引にそれに従おうとするものがある（「資本家」とは、商務印書館創業者のひとりである夏瑞芳だという）。張元濟、高夢旦および蒋維喬らは、そうはしたくない。小谷、長尾もまた同じだった。長尾はこの課程を見て心がっかりしてしまい、つぎのような詩を作る。

珠履凄凉古廟門

春申城外欲黄昏

食客もさびしい春申君を祭る古寺の門

春の上海城外は 暮れようとしている

枯楊満目生梯^{ママ}(梯)晩 見る限り枯れた柳が芽をだす早春の夕暮れ
 寂寂江南煙雨村 ひっそりした江南の雨にけむる上海

春申といえば黄浦江を指しているし、春の上海(申)と解することもできる。大勢の食客を養ったので有名な春申君をもかけていると考えたい。雨山は、自らを商務印書館の食客に見立てている。それも真珠で飾った立派なくつをはいているとうたうほどだから、いい待遇を得ていると彼自身は考えていたのだろうか。それとも単なる社交辞令か。自分の境遇と、内容的にいても賛成しかねる「奏定学堂章程」の公布に、わびしく寂しい清末の上海を重ねあわせた詩のように私は感じる。ところが、同席していた蔣維喬には、言葉通りには受け取ることができなかった。あるいは、雨山の潜在意識を鋭く見抜いたのかも知れない。中国を軽視する意見を言外に感じ(と蔣維喬自身が日記に書いている)、ただちに答える。

荊棘銅駝嘆墓門 イバラだらけで銅のラクダを飾った春申君を祭る墓場で
 茫茫地老与天昏 衰亡の中国を見て嘆いている
 会看漢族風雲变 漢族が風雲の末世にあるのをたまたま見ているだけだ
 大沢龍蛇淮泗村 やがては劉邦のような英雄があらわれて漢族を復興する時代が来るかもしれない

宮殿が崩壊して銅のラクダがイバラに埋もれる、という故事をふまえている。そこから墓場には銅のラクダを飾る習慣になったという。京都二条通を銅駝坊というのは、洛陽の銅駝街にちなんでいると諸橋大漢和にある。そうか?と家人に問うと、銅駝美術工芸高校があるという。確かに、地図にもものっている(二条大橋西北)。漢族ということばが直ちに出てくるところに、時代の風潮をうかがうことができる。日本人にとやかく言われたくない、明日の中国を見てくれ、というわけだ。予期せぬ反発に雨山はビックリしたことだろう、と思わずつけくわえなくなる。

日記によると、蔣維喬は、教科書編集にあたって雨山から日本の教育状況をいろいろ聞きだしている。教科書の内容的連関についての議論(光緒三十年二月十

三日)、読本を教える際の方法(二月十四日)、小学課程の実情(二月十九日)、読本の実情(三月初八日)、小学課程の内容(三月十三日)、修身の教科書(三月十八日)、文法に関して(四月十一日)、修身と国文の重複(十一月十五日)などだ。

蔣維喬は、教科書編集のために商務印書館に招かれたわけだから、仕事もそれが中心となる。教科書編集を軸にした雨山との交流が日記に現われているということだ。

長尾雨山の漢語論文その他

『東方雑誌』創刊号(1904.3.11)から第3期までと第5期の4回にわたって、日本長尾雨山「対客問」と題する論文が連載されている。その内容(当然ながら漢語論文)を紹介しておきたい。

「対客問」第1において、中国の現状を分析し、滅びのあらわれ(亡徴)と興るきざし(興兆)のふたつにわけると、外国に学ぶ有志の士がいる、敵国外患がある、各省で武備学堂を建てている、教育章程を定めた、人口が多い、勤勉だ、など興兆を10条かかげる。また、積弊のあること、民心不安のこと、国家財政の歳出超過のこと、民が食えていないこと、交通を外国人に握られていることなど亡徴を10条あげる。

つづく第2では、国家の経営には、教育、産業、交通、財政、兵制、法律、行政、風俗の8事が土台となるが、これを妨げているのは、満洲族、漢族という種族の争いである。しかし、今は昔ではない。種族は異なっていようとアジア人種であり黄色人種なのである。民心を一にし、挙国一致してはじめて8事についても言うことができる、という。

第3においては、次のように書く。今、政治を言うものに保守と変法がいる。保守はその興の面のみを見て、変法は亡の面のみを見る。しかし、臨機応変にならねばならぬ。国の本は民にある。民心が離反しているのに、上のみがひとり存在しているなど古来よりないことだ。旧弊を破り、新智を開くためには教育より始めるほかない。奏定学堂章程を読んだことがあるが、教育の公理に合わぬものがひとつならずある。往年、政府は各省に学堂を興すよう下令したが、まだ1、2を設けただけだ。それも高等専門を先となし、いわゆる国民普通教育は漠とし

ている。国の強弱は、兵の強弱によるとはいえ、究極には民智が開けているかいないかによる。

第4の結論部分では、国民教育の普及を力説する。国民教育は国家の利であり、ただ人民の利だけではない。今、中国の時務を言うものは、強兵強兵ととなえる。しかし、兵の本は民にあり、民の本は教育にあることを知らない。農であれ工であれ商であれ、教育があってその業は大いに発展し、その利は大きく開く。欧米が富で世界を圧しているのもこれである。教育を興すのは、百利あって一害もないのだ。

長尾雨山の論文は、国民教育の普及という点に的をしばった論述である。部分的に異論はあるかもしれないが、明確な論旨とそれを構築している文章力は、作者の力量を遺憾なく示している論文だということができる。

教科書編集以外の面では、光緒三十年十月二十七日の夜、雨山をむかえて宴をもうけて詩会を開催している。また、同年十一月二十六日は陽暦の元旦にあたり、蔣維喬らは、日本の風習にならぬ雨山の家へ年賀におもむいた。「その家では客にトソ酒でもてなし、我が国の古風を保存している」などと記述している。

商務印書館は、小学教員を養成するため、速成小学師範講習所を創設した。光緒三十一年七月二十日（1905.8.20）のことだ。長尾雨山は、張元濟、蔡元培、杜亜泉、蔣維喬、徐念慈、高夢旦、嚴保成らとともに教職を担当していることが湯志鈞『近代上海大事記』[湯志鈞1989:602]に記載されている。

中国知識人との詩会の開催、商務印書館での教科書編集、学校での教授などの活動に雨山が従事していたことがおぼろげながらわかる。

以上、断片ではあるが上海における雨山の活動の一端を見てみた。

つぎに雨山の著作についてひとこと述べたい。

雨山の訳書

雨山には、生前の著作はない、とばかり思っていた。たとえば、ご子息の証言に、「父（注：雨山）には自分の著作を出版する意志がなく」[長尾正和1965b:375]と書かれている。さらに、「遺著に何遠楼詩文集、古今詩變、儒学本論、楚辞講

義、聖教序講義、古詩源講義などあるが何れも未刊」[長尾正和1965c:379]ともある。

ところが、雨山には、その友人羅振玉の著作を翻訳した刊行物があったのだ。書店から原物を購入して知った。

羅振玉輯述、長尾甲移訳『南宗衣鉢跋尾』巻一（博文堂合資会社1916.6.25）と題する線装活版本である。おもしろいことに、出版社、発行年月ともに同一、同じ装丁で羅振玉の原文のみを印刷した1冊が別にある【図3-14】。2冊で一組という意味だろうか。その内容は、羅振玉所蔵を含めた南宗画二巻十二幅について解説したものだ。

参考までに該書の構成を示しておく。

南宗衣鉢跋尾序	雨山長尾甲
南宗衣鉢序	羅振玉
例言	訳者附識
南宗衣鉢巻一目録	
南宗衣鉢跋尾巻一	羅振玉輯述 長尾甲移訳

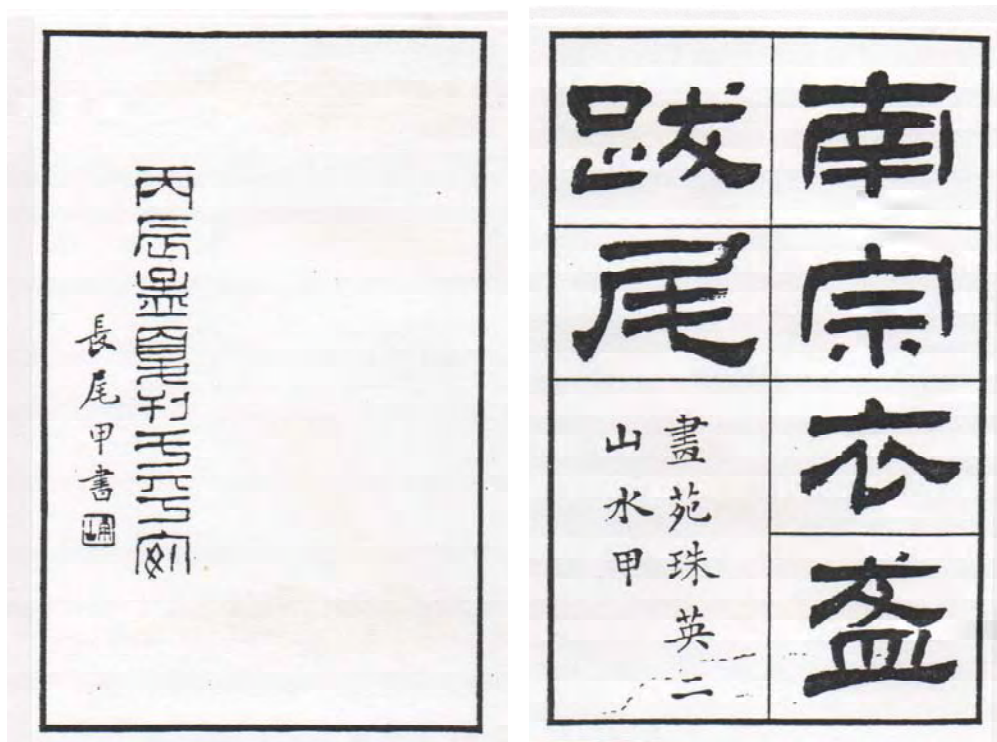
本文23丁（第24丁は空白）

奥付

雨山は、さきほど述べたように1903年、上海に移住し、1914年帰国した。あしかけ12年の上海滞在だった。

雨山が羅振玉を知ったのは、上海に到着した年（1903 光緒二十九）のことだ。その後、辛亥革命が起こり、1911年（宣統三）十月、羅振玉は一家をあげて日本に移住する。1918年の短期帰国をはさんで1919年に帰国した[莫栄宗1963]。雨山と羅振玉が重なるのは、中国で7年（羅振玉は、いつも上海にいたというわけではない）、京都では5年間だった。『南宗衣鉢跋尾』巻一は、まさにこの間、日本で発行されたのだ。この本のなかで、雨山は、羅振玉との交際について具体的なことはひとことものをべていない。雨山にとっては漢語の原本とともに訳本を出版する

【図3-14】



ことが、なによりの友情の証だったのではないかと私は考える。

莫荣宗「羅雪堂先生著述年表」[莫荣宗1962]には、刊年がわかっている著作にはそれが注記されている。ただし、該文には「民国五年丙辰 南宗衣鉢跋尾一卷」とあるのみだ。刊行の有無には触れていない。

日本で出版された本だから、識者には周知のことではないかとも疑った。もしそうなら前出『中国書画話』に書名くらい掲げられていてもいいのではないか。それが無いのは、やはり知られていないのか、と考えて紹介した次第だ。

長尾雨山の教科書 日本語教科書（その2）

商務印書館は、独自に編纂する教科書と並行して引き続き翻訳日本語教科書を出版しており、これが長尾雨山の教科書である。表紙に『日文読本』と書かれ、訳校者として長尾雨山が単独で名前を出している。

南宗衣鉢跋尾 卷一

六朝

雪山圖上虞羅氏書畫

紙本立軸、高さ四尺八寸一分、廣さ二尺二寸九分、この幅の初尺下著色、石は粗麻を作りて皴なし、厚緑を以て染抹し、山巔に粉を加へて塗り、樹幹もまた塗染して成る、中に一樹朱を以て葉を貼せるあり、榮然として新なるが如し、下角の稍上に行書にて界の字あり、下に花押あり、泥金にて書せり、石上に在りて極めて隱暗なれども、日に映すれば辨ずべし、初め何代の物たるを知らず、疑ふらくは是れ楊昇ならんと、而かも畫法、雄厚淳古にして、

南宗衣鉢跋尾卷一

畫苑珠英二中山水

上虞 羅振玉輯述
長尾 甲逸譯

南宗衣鉢跋尾 卷一

六朝

雪山圖上虞羅氏書畫

紙本立軸、高四尺八寸一分、廣二尺二寸九分、この幅の初尺下著色、石作粗麻、無皴、以厚綠染抹、山巔加粉、樹幹亦塗染而成、中有一樹、以朱點葉、榮然如新、下角稍上、有行書界字、下有押字、泥金書、在石上、極隱暗、日乃可辨、初不知為何代物、疑是楊昇、而畫法雄厚淳古、如觀古彝器、法物與唐以後絕異、且古畫著題、未有書名不著姓、而名下加押者、疑不能決、垂二十年矣、近讀張彥遠歷代名畫記、言前代御府、自晉宋至周隋、收梁圖書、皆未行印記、但備列當時鑒識、人押署、貞觀中、魏河南等、置畫裝背、並有當時鑒識、人押署、跋尾、官爵姓名、年月、日、開元中、玄宗、購求天下圖書、亦命當時鑒識

南宗衣鉢跋尾卷一

畫苑珠英二中山水

上虞 羅振玉輯述

大正五年六月廿二日印刷
大正五年六月廿五日發行

著者 長尾 樞 太郎

印刷者 博文堂合資會社
大正市西區上通丁日十六番地

代表者 原 田 耕 三

印刷所 堀 越 活 版 所
大正市西區阿波座二番町壹番地

發行所 博文堂合資會社
大正市西區上通丁日十六番地

大正五年六月廿二日印刷
大正五年六月廿五日發行

著者 羅 振 玉

印刷者 博文堂合資會社
大正市西區上通丁日十六番地

代表者 原 田 耕 三

印刷所 堀 越 活 版 所
大正市西區阿波座二番町壹番地

發行所 博文堂合資會社
大正市西區上通丁日十六番地

坪内雄蔵編輯、長尾楨太郎訳校『日文読本』巻5、6 上海・商務印書館
光緒三十（1904）年十月初版 / 光緒三十二（1906）年八月五版。

奥付、柱には「和文漢訳読本」と示してあるから、前出坪内『国語読本』の巻5、6であることがわかる。『東方雑誌』第2年第1期（1905.2.28）の出版広告で見たとおり、書名は異なっているが、『和文漢訳読本』のつづきなのだ。

ただし、訂正再版本[海後宗臣1964:248-276]と対照すると、文章に出入りがあり、課数が異なり、挿絵が違っているものがある。長尾がもつづいたのは初版の『読本』のほうであろう。

日本語本文の右側に漢字を振り、漢字にはその読みを片仮名で補い、巻末に漢語訳文をまとめているのは、沙張訳本と同じ編集方法だ。1904年の出版だから、両山が上海で漢訳したものだ考える。おおよその内容を知るために目次とそれにつけられた漢訳を示しておく。

巻5

- 第1 我が国ノ気候（我国之気候）
- 第2 鳥（鳥）
- 第3 お千代と大きなおに（千代之歌）
- 第4 母ごころ（母心）
- 第5 草木ノ生長（草木之生長）
- 第6 茶ト桑（茶与桑）
- 第7 皇后へいかの御歌（皇后陛下之御歌）
- 第8 野川のけしき（練習文）（野川之気色）
- 第9 日本帝国ノ図（日本帝国之地図）
- 第10 郵便箱の歌（郵便箱之歌）
- 第11 船ト車（船与車）
- 第12 東京市（東京市）
- 第13 みやこの一日（都之一日）

第14 太郎と電話（練習文）（太郎与電話）

第15 電話及ビ電信（電話及電信）

第16 京都（京都）

第17 織物の歌（織物之歌）

第18 大阪（大阪）

第19 豊臣秀吉（豊臣秀吉）

第20 商人（商人）

第21 正直の徳（練習文）（正直之徳）

第22 四面皆海（四面皆海）

第23 軍艦（軍艦）

第24 海の底（海之底）

卷6

第1 富士山（富士山）

第2 日本武尊（日本武尊）

第3 山上のながめ（山上之眺）

第4 国のけもの（練習文）（国之獣）

第5 動物ノ職業（動物之職業）

第6 高橋東岡のつま（高橋東岡之妻）

第7 有用ナル植物（有用之植物）

第8 石炭及石油（煤炭及煤油）

第9 象の目方（象之量）

第10 松山鏡（上）（松山鏡上）

第11 松山鏡（下）練習文（松山鏡下）

第12 楠木正成（楠木正成）

第13 北海道（北海道）

第14 徳川光圀（徳川光圀）



第15 鉱山ノ話（鉱山之話）



第16 手がさはると黄金（上）（手捫黄金上）

【圖3-15】

<p style="text-align: center;">經 案 存 翻 必 究 印</p> <p style="text-align: center;">總發行所</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 25%;">編輯者</td> <td style="width: 25%;">坪 内 雄 藏</td> <td style="width: 25%;">譯校者</td> <td style="width: 25%;">長 尾 横 太 郎</td> </tr> <tr> <td>發行者</td> <td>商務印書館</td> <td>印刷所</td> <td>商務印書館</td> </tr> </table> <p style="text-align: right;">光緒三十一年歲次甲辰十月初版 光緒三十二年歲次丙午八月五版</p> <p style="text-align: right;">(和文漢譯本) (定價每部大洋一元)</p>	編輯者	坪 内 雄 藏	譯校者	長 尾 横 太 郎	發行者	商務印書館	印刷所	商務印書館	<p style="text-align: center;">世界のはしぐくまの 名もなき里までかひなきぬ。</p> <p style="text-align: center;">第二十四 赤十字社</p> <p style="text-align: center;">凡ツ戦争トナレバ敵味方トモニオビ</p> <p style="text-align: center;">買傷タシシク死人負傷者ヲ出タスヲ例トス</p> <p style="text-align: center;">中ニ七劍又ハ彈丸ニ傷ケラレ半死半生</p> <p style="text-align: center;">而シテ戰場ニウメキ苦ム負傷兵ホトイテ</p> <p style="text-align: center;">マシキハ無シ</p>
編輯者	坪 内 雄 藏	譯校者	長 尾 横 太 郎						
發行者	商務印書館	印刷所	商務印書館						

<p style="text-align: center;">和文漢譯本 卷六</p> <p style="text-align: center;">四十六 商務印書館發行</p>	<p>就中如神功皇后之征伐三韓引安之役明治二十七八年之役乃著名之事實也。</p> <p style="text-align: center;">第二十三課 征清軍</p> <p>頃者明治之二十七年際朝鮮亂之時支那於持大國之威陵辱朝鮮且敵抗我國我國雖不好戰欲懲彼之無法陸軍海軍一齊其勢猛烈而進旗滿於海上山野以正義所鍛鍊之銃口何有能敵抗者海軍先戰於豐島又陸軍首有牙山之勝頗覺快然繼以平壤海洋島義州旅順威海衛攻陷勢如破竹所指正在北京城支那方屈講和我國固不好戰乃使清國立誓永令朝鮮國獨立而有名譽之軍遂旋此謂日清之戰勝軍之美名轟然爾來我國之光赫赫乎耀於世界邊陲無名之鄉矣。</p> <p style="text-align: center;">第二十四課 赤十字社</p> <p>凡爲戰爭則敵軍我軍均以多出死人負傷者爲常例其中可悲者莫如爲劍或彈丸所傷而半死半生呻吟苦惱於戰場者抑軍人或爲敵軍或爲我軍相戰於戰場無論何人皆爲國而非爲私然則雖爲敵人戰畢之後猶憤而苦之非道也赤十字社赴戰場不分敵軍我軍以撫救病兵負傷兵爲目的現在日清戰爭之時赴支那地方雖清之負傷兵亦猶我兵勞撫救護是以彼等皆感其恩云赤十字社平時遇有地震水災地方亦急赴而撫救賴赤十字社庇陰得救應死之命其數不知幾許。</p>
--	--

<p>法 進 旗 証</p> <p>朝鮮國をはつかしめ、 なほ我が軍に手むかひす。 我が國、いくさをこのまねど、 彼れが無法をこらさんと、 陸軍海軍、一せいに、 きほひたけく進軍す。 おきも野山も、日の御旗、 正義にきたへるつゝさきに、</p> 	<p>第二十三 征清軍</p> <p>頃、明治の二十七、 朝鮮みだれし折をかし、 支那大國の威におこり、</p> <p>交通して、古來種々の關係ありき中にも、 神功皇后の三韓征伐、豊臣秀吉の朝鮮 征伐、弘安の役、明治二十七八年の役の如 きは、名高き事實なり。</p> 
---	--

<p>和 譽 争</p> <p>支那、力つき、和をこひぬ。 いくさ好まぬ我が國は、 朝鮮國を、末ななく、 獨立せさす、とちかはせて、 名譽のいくさを引きかへす。 これを、日清戦争と、 美名と、ひろく勝ちいくさ。 み國の光は、これよりぞ</p> 	<p>破 勝</p> <p>先づ、海軍は、豊島に、 又陸軍は、手始めの、 がさん、の勝利、目さましく、 ついて、いよいよ、海洋島、 義州、旅順、威海衛、 勢ひ破竹と、攻めおとし、 目さすは、やかて、北京城、</p> 
--	--

- 第17 手がさはると黄金(下)(手捫黄金下)
- 第18 水ノ功用(水之功用)
- 第19 水鳥のまがひもの(上)(練習文)(水鳥之類似者上)
- 第20 水鳥のまがひもの(下)(練習文)(水鳥之類似者下)
- 第21 義侠なる鶴(義侠之鶴)
- 第22 隣国(隣国)
- 第23 征清軍(征清軍)
- 第24 赤十字社(赤十字社)

内容を見ると、気候、生物、地理、歴史、電話、電信、商売の仕組み、さらには勤勉儉約正直をすすめる道徳までにもおよんでいる。ときには通信文の見本をまじえて、手紙の書き方を示す。

単語の数を増やし、まとまった文章を読ませる構成となっていることが理解できる。日本語の読み書きばかりでなく、「事物に関する普通知識の端緒を授くること」を目的として編集されているのはすでに書いた。

時代の反映

ところどころに時代を反映する内容が見られる。ひとつは、日本礼讃だ。雨山の漢訳も示す。

北は北海道から南は台湾まで「オシナラシテ イヘバ、我が国ハ、四季トモニ、クラシヨウゴザイマス。カヨーナ ヨイ国ニ生マレタノハ、ワレワレノ幸福デアリマス(概而言之。我国之気候。四時共通人身而易生活。生於斯好国。可謂我等之幸福)」。

もうひとつは、日清戦争である。この教科書が編纂されたのは、日清戦争後から日露戦争前の時期だ。日清戦争が、教材として採用されたのにはそういう時代背景があった。

第22「隣国」は、「朝鮮」「支那帝国」が地理上、日本の隣国であることを述べ、第23「征清軍」の導入部となる。

本編第23「征清軍」は、「頃は、明治の二十七、ノ朝鮮みだれし折ぞかし、ノ

支那、大国の威におごり、ノ朝鮮国をはづかしめ、ノなほ、我が軍に手むかひす」とはじまる歌の形をとる。雨山は、これをつぎのように漢訳した。「頃者。明治之二十七年。年際朝鮮乱之時。支那矜持大国之威。陵辱朝鮮。且敵抗我国」途中を略して、つづくは、「支那力つき、和をこひぬ。ノいくさ好まぬ我が国は、ノ朝鮮国を、未ながく、ノ独立せさす、とちかはせて、ノ名誉のいくさを引きかへす（支那力屈講和。我国固不好戦。乃使清国立誓。永令朝鮮国独立。而有名誉之軍。遂旋）」【図3-15】。

第24「赤十字社」は、「征清軍」をうけて結末部ともいうべき役割をはたしている。すなわち「ソモ々（注：くりかえし記号は「々」で代用した）軍人が、敵味方トナリテ、戦場ニ相戦フハ、何レモ、皆、国ノ為メニテ、私ノ故ニハアラズ。サレバ、敵ナリトテ、戦終リシ後マデモ、ニクミ苦ムルハ、道ニアラズ（抑軍人或為敵軍。或為我軍。相戦於戦場。無論何人。皆為国而非為私。然則雖為敵人。戦畢之後。猶憎而苦之。非道也）」。赤十字社は、戦場において敵味方の別なく看護し、「清ノ負傷兵ヲモ、我ガ兵同様ニアハレミテ、イタハリシカバ、彼等、皆、其ノ恩ニ感ジキ、トイフ（雖清之負傷兵。亦猶我兵。勞撫救護。是以彼等皆感其恩云）」。

日本の立場から見た日清戦争である。もともとは坪内逍遙が日本の学童用に編纂した国語読本だから、このような内容となっているのは、理解できる。

しかし、日本語を学ぶためにこれを読む中国人読者は、どう感じたであろうか。事実は事実だ、と長尾雨山も漢訳するとき疑問に思わなかったのか。商務印書館は、翻訳教科書として自らの名前を冠して出版しているのだが、その内容に違和感を持たなかったのだろうか、などと疑問がわく。

日中合併

金港堂と合併会社になった商務印書館内部での人的関係は、よかったという。商務印書館にしてみれば教科書編集の専門知識、印刷の新技术など金港堂より吸収できたことが金額に換算することが不可能なぐらいの利益になった。商務印書館理事会の報告書において、中国側がそう認めている。換算することのできる株式配当の利益は、約10年の合併時期を合算して金港堂が得たものの約2倍にのぼ

った[樽本照雄1995f]。日本中国の双方が利益を得た結果を見れば、成功した合併であったということができる。

経済と技術の総体ではこの合併は、問題がなかったようだが、しかし、小さな局面では、軋轢がなかったわけではない。日本と中国では文化が異なる。感情の行き違いのないほうがおかしい。

1904年1月30日、商務印書館の教科書編集会議において次のようなことがあったことを思い出してほしい。新しく公布された「奏定学堂章程」に対して、雨山が失望の気持ちを詩にたくして表わしたところ、蔣維喬は、中国を軽視していると感じ、ただちに詩をもってきた。

日本と中国の微妙な関係を示す逸話のひとつである。かすかな箇所にも敏感に反応する蔣維喬がいたことを知れば、雨山訳本が、なんの問題もなく商務印書館から出版されたとは思えない。あからさまに日清戦争を取り扱った教材について商務印書館側から文句が出なかったとは考えにくいのだ。

いちばん無難で実際的な処置は、問題のありそうな教材文は削除すればすむ。それがそうではなく、原文のままに漢語訳がついているのだから私は不思議に感じる。

翻訳教科書の奥付を見る限り、中国人担当者との共訳ではなく、長尾雨山単独の仕事のようだ。翻訳の過程で教材文の検討が中国側によってなされなかったとしても、印刷にまわす時に商務印書館側の点検があるはずだ。内容に変更がないままに出版されており、しかも2年間に5刷も印刷されている。刷数の多さは、中国人読者に歓迎された証拠となる。

それにしても、教科書の本文、特に日清戦争部分を表面的に読めば、商務印書館はよくも出版したものだと驚く。『東方雑誌』の出版広告でも大いに宣伝している。おうようなのか鈍感なのか、現在から見るととても想像できないくらいの時代感覚だといえよう。辛亥革命以後、商務印書館をとびだした陸費逵らが中華書局を結成し、商務印書館の教科書を攻撃することになる。雨山訳本は、中華書局の批判の根拠に十分なりうるものだ。ただし、出版するまでには裏に意外な事実、事情があったのかも知れず、中国側の資料が出てくるまで、出版の状況など疑問のままにしておきたい。

翻 訳

雨山訳本には、沙張訳本に見られたような漢訳語の誤りは見当たらない。

巻5に、京都、大阪を説明して「汽車」が出てくる。「汽車」は、この場合、蒸気機関車を意味する。現代漢語では「火車」というが、雨山が間違っただけではない。清末には、「汽車」[渋江保1903:31]と「火車」(「Train 火車」「Steam ship 火船, 汽船, 大火輪船」[商務印書館1902])が混在していた。

雨山本は、中途半端な沙張訳本よりは優れているのが、刷数の多い理由であろう。

日本では小学校用の教科書であったかもしれないが、中国では外国語の教科書である。成人を対象とする書籍にほかならない。内容に首をかしげる部分がないことはないが、そのほかの日本ではすでに出現していた新しい事物、すなわち電話、電気などがこれらの教科書を通じて中国に伝えられた可能性もある。

金港堂と商務印書館の橋渡しをした山本条太郎の談話を再び引くことにする。

……支那人が十万円程の資本で建てた出版会社がありましたが、これも昨年（注：1903年）来資本を倍額にして日本人から半分、支那人から半分出すやうにして、編纂者の外、日本から職人を二三十人連れて来て、支那向きの教科書を拵へる仕事を始めました。これなどは日本とは違ひ、教育制度が甚だ不十分でありますので、案じて居りましたが、二三個月前に発行した小学校用の読本であるとか、或は英文の本、ごく初歩の体操、唱歌といふやうな本まで拵へた結果が、学校そのものには余り売れないが、却て家庭に盛に売れ、子供がこれを見るのでなくして、親の方がそれを読むといふ実況で、初めて出したものは千字文の売行を凌駕するとまでいはれた程の勢でありました [山本条太郎1942:175-176]

これを見れば、雨山訳本は、山本条太郎のいう通り、子供が見るものではなく、親が読んだものに含まれる。

商務印書館の初期刊行物

本稿で紹介した2種類の日本語漢訳読本は、商務印書館の初期刊行物として見ると、きわめて珍しい。発行年が1901年と1904年（1906年五版）だから、ほとんど創業まもない時期の出版物といえる。補足すれば、『商務印書館図書目録(1897-1949)』（北京・商務印書館1981）の「++438日語読本」（124頁）の項目には、『和文漢訳読本』が8冊として記録されている。ただし、原著者名、訳者名、発行年を記載しない。また、雨山訳本の『日文読本』は収録していない。『和文漢訳読本』に含めたつもりかもしれない。しかし、訳者が異なれば、その由を説明するのが普通のやり方だと思うのだが。とりあえず、雨山訳本は、商務印書館の図書目録にも掲載されていないくらい貴重な出版物だということができる。

2種類ともに、本文は、日本語のものに傍線を引き、平仮名は漢語に翻訳し、漢字には日本語音をそえている。そえられた漢語、日本語音読みは、手書き文字だ。ここは石版印刷となっている。日本語と漢語のまざったこの複雑な組み版は、当時の商務印書館の印刷技術では、石印によらざるをえなかったようだ。巻末にまとめられた漢訳は、活版印刷となる。線装本である。挿絵は石印、本文は活版印刷おまけに線装本というのは、『繡像小説』の印刷製本方法と同じだ。

また、長尾雨山の著作物としても貴重な出版物だといえよう。今まで長尾雨山に日本語教科書の翻訳があったということは、あまり取り上げられたことがない。前出中村忠行論文が最初であろう。また、商務印書館『和文漢訳読本』そのものを紹介する文章に、さねとう・けいしゅう『中国人日本留学史』（1960.3.15初版未見 / 1970.10.20増補版。337-339頁）があるくらいだ。

触れられない理由のひとつは、学者、芸術家としての長尾雨山にとって教科書翻訳など取るに足らない、という考えがあったのではないか。しかし、長尾雨山にしてみれば教科書編集、翻訳も主要な仕事の一部を構成していたと私は考える。

長尾雨山があの教科書疑獄事件にまきこまれたのは、教科書編集の礼金とばかり思っていた金が、収賄と認定されたからだ。商務印書館に送り込まれたのも、中国人向けの教科書を編集するためである。雨山と教科書には、浅からぬ因縁があるのだ。長尾雨山の教科書の仕事を軽視してはならない。

雨山の翻訳した教科書が存在していることにより、雨山の仕事の一部を、今、

私たちは知ることができるのだ。

9 鄭孝胥と長尾雨山

光緒三十一年十月（1905.11）、鄭孝胥は上海にもどった。伝記類によると「海藏楼」を築くということになる。

早速、高夢旦、嚴復、張元濟たちとの交流が復活した。夏曾佑とのつきあいもはじまる〔鄭孝胥1993:1018〕。

十二月廿一日（1906.1.15）には、商務印書館編輯所へおもむき張元濟と会う〔鄭孝胥1993:1024〕。ところが、ここで当然出てきていいはずの長尾雨山の名前が見えない。

その頃の長尾雨山の動きをまとめておく。

長尾雨山は、教科書疑獄事件に連座し1903年に有罪判決を受けて以後、同年12月1日午前、河内丸で神戸より上海にむけて出発し、そのまま商務印書館に勤務している。

上海について、すぐさま商務印書館での国文教科書編集がはじまったことは述べた。その頃の上海における長尾雨山の活動を見れば、張元濟、高夢旦、蔣維喬、小谷重および長尾雨山が参加し、編集方針を議論する。編集会議から約2ヵ月半後という速さで、光緒三十年二月十三日（1904.3.29）には『最新国文教科書』第1冊を手にしてしている。光緒三十一年七月（1905.8）、商務印書館速成小学師範講習所が創設され、張元濟、蔡元培、杜亜泉、蔣維喬、徐念慈、高夢旦、嚴保成らと長尾雨山も教師を勤めた。

鄭孝胥が商務印書館編輯所に姿を現わした1906年の時点で、彼の上海滞在はすでに2年が経過している。どういうわけか、鄭孝胥の前に雨山がいない。

長尾雨山と再会する

鄭孝胥が長尾雨山に再会したのは、年が明けて光緒三十二年二月廿四日（1906.3.18）のことだった。その日の夜、鄭孝胥は、黄浦灘、大馬路を散歩する。来客

がふたりあったのち、「長尾楨太郎がやってきて、蔡忠烈の漁村詩に題するよう求める」[鄭孝胥1993:1035]と書いてある。ただこれだけで、ほかには何も記されていない。あっさりとしたものだ。普通ならば、なぜ長尾雨山が上海にいるのか、その経緯など簡単な説明があってもいいように思う。それもない。話の内容が記録されていないのだから、はっきりしない。

長尾雨山が上海に来ることになったその経緯については、数日前に商務印書館編輯所を訪れたとき、張元濟、高夢旦たちとの話題にはのぼったのかもしれない。また、そんなことはなかったことも予想できる。

教科書疑獄事件が長尾雨山本人から、直接、鄭孝胥に話されるようなたぐいの話とも思えない。それにしても日記に長尾雨山がなめたであろう辛酸について一言も触れていないのは、何を意味しているのか。

長尾自身はその家庭内で事件のことは話題にしなかったという[杉村邦彦1993]。考えれば当たり前のことだ。自ら求めて不愉快になることもない。家庭内でそうであるならば、外の上海においても同様であったろう。昔の友人に告げることではない、というのは常識から判断してのことだ。長尾雨山が上海にやってきた理由などについて、鄭孝胥が日記に書き残していないのは、友人の名誉を重んじたためなのか、あるいは別に理由があるのか。日記には、事実および思うことのすべてが書かれていなければならぬ、などとは思わない。聞いても日記に書かないこともあるだろう。また、本当のことを知らない可能性もないことはない。今は、疑問としておく。

あっさりすぎる再会の翌日(二月廿五日、1906.3.19)、「長尾のために蔡忠烈に和する詩をつくる」[鄭孝胥1993:1035]とあり、つづく翌翌日(二月廿六日、1906.3.20)にも「長尾のために扇に題する」[鄭孝胥1993:1035]と見える。

その後、長尾雨山の名前は、鄭孝胥日記にそれほど多くは登場しない。三月六日(1906.3.30)[鄭孝胥1993:1037]、廿九日(1906.4.22)[鄭孝胥1993:1039]、四月二十日(1906.5.13)[鄭孝胥1993:1042]、二十七日(1906.5.20)[鄭孝胥1993:1042]くらいのものだ。これでは頻繁な交際というわけにはいかない。そうなった理由のひとつは、鄭孝胥の立憲準備運動への参加ではなからうか。

預備立憲公会など

鄭孝胥は、七月廿八日（1906.9.16）に張園で立憲準備（預備立憲）についての演説を行なっている[鄭孝胥1993:1057]。明らかに清朝政府の立憲準備宣言を受けたものだ。鄭孝胥は、まず立憲制の研究を目的とした憲政研究公会を組織し、数回の会合をへて預備立憲公会と改名した[鄭孝胥1993:1061]。十一月朔（1906.12.16）、愚園で預備立憲公会第1回会議が開かれ、会員の選挙で理事15名が選ばれ、鄭孝胥は最多の46票だった。さらに理事の互選で14票（理事は15人なのだ）を獲得した鄭孝胥が会長に、張謇（字は季直）と湯寿潜（字は蟄先）のふたりが副会長となる。会長と副会長については、いろんな説があるらしいが、当事者が書いているのだからこれが正しいはずだ。商務印書館関係者では、張元濟、高夢旦、陸爾奎、孟森、夏瑞芳、印有模、李拔可、陶葆霖、高鳳岐らが会員であった[張樹年1991:63]。

その後、鄭孝胥は、南京などに数回の旅行を行なうなど多忙な日が続く。

長尾雨山の名前が日記に登場するのは、ほぼ1年ぶりの光緒三十三年四月廿二日（1907.6.2）のことだ。

「晴、午後また雨。高夢旦を訪問し、ともに商務印書館の新築印刷局と編輯所を見る。ともに長尾雨山、吳翊庭をたずね、九華楼で飲むことを約し……」[鄭孝胥1993:1093]と書いてある。

新築の印刷局というのは、閘北宝山路に建設した印刷所とそれに併設した編訳所を指す。編訳所は、五月初三日（1907.6.13）から使われるから[樽本照雄1993c:32]、鄭孝胥たちが見たのは、その直前のものだったことになる。

鄭孝胥は、責任ある地位に就くと一所懸命にする人であると思われる。旅行中を除いて上海にいる時は、預備立憲公会の事務所に毎日のように顔をだしている。光緒三十三年十月初七日（1907.11.12）、曾孟樸に会ったのも、立憲公会がらみであるようだ[鄭孝胥1993:1114]。同月廿二日（1907.11.27）にも新安里の曾孟樸の家を訪問している[鄭孝胥1993:1116]。

鄭孝胥は、毛織物工場設立にも関係した。光緒三十三年五月十九日（1907.6.29）から「日輝呢廠」が日記に出現する[鄭孝胥1993:1097]。日輝織呢廠と書く文献もある。日記では日輝呢廠、日輝帳房などと表現される。立憲公会に加えて、八月

よりほとんど連日、日輝呢廠の帳場を訪れているところに、鄭孝胥の生まじめさのようなものを私は感じるのだ。日輝呢廠は、工場を建設し同年十二月には操業を開始するにまでこぎつけた[鄭孝胥1993:1171]。

工場といえば、大生紡績工場の理事にもなっている（七月廿三日、1907.8.31[鄭孝胥1993:1105]）。鄭孝胥の場合、自らすすんで理事になるというよりも、選ばれて、あるいは依頼されて引き受けるというかたちをとることが多い。日輝呢廠の理事会では、工場の状況説明を報告したあと、来年はやらない、と声明しているところからも（十二月廿九日、1909.1.20[鄭孝胥1993:1173]）そこらあたりの事情が理解できるのだ。もっとも、「やらない」といいながら、その後も引き続き仕事をしてはいるのだが。

10 ライバル（その1） 中国図書公司の場合

商務印書館は、日本金港堂との合弁会社だったとはいえ、その実、原亮三郎の個人的投資で成立していた。しかし、個人の投資であろうが、知っている人が見れば、合弁会社であったという事実はなくなる。

外国企業との合弁についての評価は、その時代の思潮、政治動向と無関係ではありえない。不幸なことに、商務印書館の合弁事業は、負の評価がつきまとう時代に重なってしまった。商務印書館自身が、合弁の事実を公表したくなかった理由のひとつである。

商務印書館と金港堂の合弁は、合弁当時も、また、合弁解消後になっても攻撃を受け続けた。攻撃のかたちは、さまざまである。

同時代においては、同業者からの批判という攻撃があった。異民族からの独立を強調し、他国からの支配を排斥する時代に、外国企業との合弁の有利さをいくら説いても、理解してもらうことはむづかしい。かえって反発を強めるだけだ。商務印書館が採用することのできた対抗策は、せいぜいが攻撃を無視するか、陰で相手方の足をひっぱることくらいのものだ。日中合弁を解消するまで、商務印書館自身が感じた精神的圧力には、大きなものがあつたに違いない。

合併解消後では、攻撃はみえ隠れして複雑になる。研究界における批判の存在がその例だ。商務印書館研究が出現してから、一貫してある問題だといってもいい。合併をどう評価するか。その時代の政治状況に応じて、批判をこめた意識的な無視から、正反対の賞賛へと、いとも軽々と変化する。日中合併という事実の無視、軽視は、結局のところ研究の遅延に結びついたということができる。

商務印書館は、同業者からの攻撃を受けていかに対抗したか。中国図書公司の場合を見てみよう[鱗沢彰夫1997、1999][樽本照雄1998b、1999]。中国図書公司の設立意図とその背景について考えることになるはずだ。

中国図書公司の出現

中国図書公司の創立は、一般に1908年とされる。

たとえば、「一九〇八年席子佩、傅子濂などが中国図書公司を創設し、張季直、曾少卿らが投資した。……」([陸費達1932:13-18]にほどこされた張静廬注 8 [張静廬輯1957:283])

「1908年2月17日、席子佩、傅子濂が創設した」[馬学新ら1992:144]

「1908年2月17日(正月十六日)中国図書公司総発行部営業を開始する」[湯志鈞1989:648]

「中国図書公司は、1908年、席子佩らが創設し、張謇らが投資した……」[張樹年1991:131]

商務印書館と中国図書公司の軋轢は、要約すると以下のようなになる。

中国図書公司は、上海の大資本家席子佩と福州の大商人曾少卿によって設立された。曾少卿といえば、アメリカにおける中国人労働者排斥を目的とする「華工禁約」に反対し、上海でのアメリカ商品ボイコット運動の中心人物として有名だ[林健司1979]。投資者が集まり、商務印書館の強敵となるのを見た夏瑞芳は、株価操作とデマを流すという強引なやり方でこれに対抗する。

すなわち、夏瑞芳は、人を使い中国図書公司の株を割り引いて売るという広告を新聞に出させたという。それをいぶかり驚いた株主は資金を出すのを停止し、投資しようとしていた者も二の足をふんだ[費行簡1918:112]。

また、夏瑞芳は、秘密裏に株を買い付けると割り引いて投げ売りし、中国図書

会社の株主が続けて資金を出せないようにした、と書く文章もある[熊尚厚1978: 292-293]。たぶん、同じことを意味しているのだろう。いわば、火のないところに煙をたてる強引なやり方である。

曾少卿が中国図書公司設立に参加したのは、商務印書館に日本資本が多くを占めていたのを聞いたからだ[費行簡1918:111]。独立を尊ぶ曾少卿の気性が知られると同時に、当時、すでに外国企業との合弁会社に対する反発が社会に芽生えつつあったことが注目される。

中国図書公司にしてみれば、商務印書館の夏瑞芳のやり方は、陰謀にちがいない。夏瑞芳からいえば、強力な競争者に打ち勝つためには、少々強引な手段も必要だということだ。また、それくらいの辣腕でなければ、商務印書館を単なる印刷所から全国最大規模の近代的印刷企業兼出版社に育てあげることなどではしなかった。逆にいえば、ペテン、陰謀を使ってまで抵抗したのは、それだけ夏瑞芳の危機感が大きかった証拠でもある。

以上が大筋だ。これだけならば、夏瑞芳は陰謀家であったことになってしまう。しかし、中国図書公司の動向を、もうひとりの設立者席子佩に焦点をあわせて見ていくと異なる様相が浮かび上がってくる。

章錫琛論文

章錫琛が中国図書公司について述べた文章を「漫談商務印書館」[章錫琛1964]に見ることができる(『商務印書館九十年 我和商務印書館』<北京・商務印書館1987.1>所収の該文には、なぜだか中国図書公司の章は省略されている)。

章錫琛が示した表題は、「商務の強敵」である。

1906年、洞庭山人席子佩(裕福)は、50万元の資金を集め、教科書出版に重点をおいた中国図書公司を組織した。

席子佩は、上海の「大買弁資本家」で、南通の官僚大資本家の張謇(季直)を理事長にすえる。張謇は、清末の著名な状元で、清朝の大官僚軍閥たちとも知りあいたった。また、江蘇教育会長でもあって全省の教育大権をにぎっていたからだ。編訳所長は、蘇州の人沈信卿(恩孚)で、江蘇教育界に相当な声望があった。有能な中学、師範学校の教師をまねいて小中学教科書の編集に任じた。中国図書

会社の資本は、商務印書館よりも多かったが、しかし、内部組織と編集、発行の経験は、商務印書館に及ばず、激烈な競争のもとで徐々に失敗していく。商務印書館も、ひそかに中国図書会社の株を買収し、人を使って個人の名義で新聞に広告を出させ、廉価で売りだした。株主の混乱を作りだして、これにより訴えられたこともある。

章錫琛の文章は、人間関係を説明していて詳しい。商務印書館の対抗策については、一般に言われているところを逸脱するものではない。

中国図書会社の創設は、一般に1908年となっているから、1906年というのとは、時期がズレている。あとで見るように、正式な創立が1908年で、それに先立つ株式募集が1906年なのだ。

席子佩が、資金を集めて中国図書会社を設立した。張謇は、席子佩から依頼されて理事長になっている。席子佩が、あくまでも中心であることを確認しておきたい。

席子佩は、「大買弁資本家」であるという。「買弁資本家」という名称は、ある時期、さかんに使用されたレッテルだ。このレッテルをはられると、即座に黒い人物を意味する。章錫琛が、意識的に使用したかもしれない。「買弁」は、もともとは中国側の代理人を指し、負の意味を持たない(本稿では、「買弁」と表示する)。席子佩については、資料が不足している。あとで問題にしたい。

外交史料

上海における中国図書会社の動きには、日本の上海総領事も注目していた。

上海総領事永瀧久吉が、日本外務省とのあいだに取り交わした電報2通には、それぞれ明治39年(1906)5月16日、31日の日付がある。

「中国図書会社設立ニ関スル件」と題する電報の冒頭に、こうある。「当地方ニ於ケル有力ナル紳士ニシテ商部顧問タル張謇等首唱者トナリ」[外交史料1906a]

さらに、「其趣意書中、当地ニ於ケル商務印書館(日清人ノ合資ニ成リ金港堂主原亮三郎之ヲ経営ス)ノ如キ事実上外国人ノ事業タレハ、同館ニ於テ出版スル書籍類ヲ購読スルハ中国人ノ潔シトセサル所ナリ云々ト記載セルニ徴スルモ、外国人ノ出版書ヲ排シ中国人経営ノ右会社ヨリ出版スル書籍ヲ以テ之ニ代ントスル、

例ノ利権回復的主義ニ胚胎スルコトハ明ナル所ニ有之候ヘハ」[外交史料1906a]という部分が重要だ。

日本より上海に打ち返された電報は、上海電報の内容を繰り返す。

「右ハ蓋シ清国人間ニ於ケル利権回収熱ニ伴フ排外的思想ニ基因スルモノ」[外交史料1906b]と書いて、同じ認識を示している。

これらの電報を読むかぎり、当時の、上海総領事は、張謇らの中国図書公司設立を、利権回収運動に直結したものと位置づけていたことがわかる。

外務省の電報から理解できるのは、上海で中国図書公司の設立趣意書のようなものが公表されていること、それに商務印書館が外国人の経営する事業であると暴露していること、これは利権回収運動の一環であること、くらいのことだ。

電報において、中国図書公司に趣意書を撤回するよう清国官憲に求める、此種排外的印刷物の配布を禁止防遏するよう嚴重に交渉しろ、と外務省は上海総領事に命じてはいる。が、はたして、そのようなことが可能であったのかどうか、実行したとして効果があったかどうかは、はなはだ疑わしい。

ともあれ、中国図書公司の設立が、当時の利権回収運動に直結するものである、という認識を上海総領事がもっていた事実が、ここにある。

同様の認識は、上海総領事ばかりのものではなかった。

『支那經濟全書』

中国図書公司趣意書が公表されてからわずか2年後に発行された『支那經濟全書』第12輯の「第四編 出版業」に次のような記述がある。

中国図書公司ハ光緒三十一年米貨排斥ノ当時中国人一般ニ排外思想膨漲シテ利権回収熱ニ狂奔セシ時恰モ商務印書館ハ科举廃止後新書ノ販売ヲナシテ莫大ノ利ヲ占メツ、アルヲ認め同業者不平ノ徒茲ニ結合シテ對抗的二設立シタル公司ニシテ南方報記者姓連ナルモノ商務印書館ガ日本教科書事件ニテ失敗シタル金港堂ヲ株主ニ加ヘタルコトヲ極力攻撃シ其記事実ニ数日ニ亘レリ官吏、郷紳等此記事ヲ讀ンデ同公司ノ目的ヲ贊シ株主ニ加入スルモノ甚ダ多カリキ即チ同公司ハ当時社会ニ喧伝セラレタル排外熱ヲ利用シテ設立サレタ

ルモノト云フベシ[東亜同文会1908a:469]

上海総領事の電報とは表現が微妙にずれているが、ここでは米貨排斥からつながった利権回収運動を背景として、中国図書会社の設立がある、と認めている。南方報記者の連某などと具体的な名前までも出ていて珍しい。連某の新聞記事を、今、見ることはできないが、相当に詳細な商務印書館攻撃のようだ。

外交文書、および同時代の論説が、ふたつともに中国図書会社設立の背景には利権回収運動が存在していると述べている。間違いがないように感じはする。

しかし、考えてみれば、どこかおかしい。

上海総領事の永瀧久吉と『支那経済全書』の筆者が、利権回収運動の存在を認識していた、というのは事実である。表面的には、うまくおさまるように見える。だが、ふたりの認識それ自体と、席子佩の中国図書会社設立の意図は、ぴったり一致していたかどうかは、また、別の問題だと思うのだ。

利権回収運動のために中国図書会社を設立するのと、有望な市場として教科書市場をとらえ、その際、利権回収運動を利用して中国図書会社を設立したのと、表面的に同一のようであるが、内容は、まったく異なるのではないか。これが、私の疑問から生じた推測である。

利権回収 その内容

排外運動の一種としては、外国商品ボイコット運動が、当然、考えられる。

だが、商務印書館に日本資本が入っていることは、外国商品ボイコット運動の視点から見ればどうなるか。

具体的な活動をとるとすれば、商務印書館の教科書を買わない運動になるのだろうか。とどのつまりは、商務印書館を倒産に追い込むことしかない。しかし、商務印書館に日本資本が入っていることを攻撃しはするが、教科書不買を提唱しているわけではない。

利権回収ではどうか。

利権回収が目的ならば、商務印書館から金港堂を追い出して純粹の中国資本にするということしかありえない。外国資本は出て行け、と攻撃を一方向的に続ける

か、潤沢な資金があるのだから、商務印書館そのものに株式買収を働きかけるくらいできようなものだ。利権回収のためならば、別に中国図書会社を設立するまでもない。

当時、商務印書館から見れば、金港堂との合併は、経済的に大きな利潤が生まれていた。相手の金港堂よりも多くの利益を得ていたのが事実である[樽本照雄1995f]。

そればかりか、金港堂から派遣されてきた日本人編集者から得ることのできる教科書編集のノウハウも重要だった。1906年の段階で商務印書館の方から合併解消の申し出が出てくるはずがない。夏瑞芳が、辣腕を発揮してまで中国図書会社に対抗しようとした理由である。商務印書館首脳が合併解消を提案するのは、中華民国成立後であることを考えてほしい。

ボイコット運動にしても、利権回収運動にしても、その単語だけを見た場合、商務印書館と金港堂の合併問題にいかにもからんできそうな感じがする。だからこそ、上海総領事もそう打電した。だが、内実を見れば、商務印書館側の中国人自身が望まない利権回収運動だったのだ。当事者が望まないことを強制することができるだろうか、という根本的矛盾に到達する。

中国図書会社の設立が、利権回収運動を背景にしているという認識が同時代人の一部にあることは、上に見てきたとおりだ。それだけを根拠に立論する人がいるとすれば、軽率のそしりをまぬかれない。一步深めた探索が要求される。利権回収運動そのものの内容を考えてみれば、商務印書館にそのまま適用できるとも考えられないからだ。

中国図書会社設立に際し利権回収運動をいったのだとしたら、それは単なる口実にすぎないのではないか。問題の所在を私なりにまとめれば、こうなる。

ここで、中国図書会社設立の趣意書を検討する必要がでてくる。

「中国図書有限公司縁起」

「中国図書有限公司縁起」が、いわゆる設立趣意書である。光緒三十二年四月初二日(1906.4.25)付『申報』に掲載された。中国図書有限公司が正式名称のようだから、以後、そう呼ぶことにする。

「縁起」

教育は、国民の基礎である。書籍は、教育がそれを借りて転移していくものだ。数千年の国の精華は、経史に伝えられる。五洲各国の進化の程度は、みな新書出版の多寡を見てはかる。いま、科挙は廃止され、学校が興り、著訳の仕事が盛んに行なわれ群がって教育の目的に赴いている。しかし書籍に注意しないのはなぜか（教育者国民之基礎也。書籍者教育之所藉以転移者也。是以数千年之国髓伝於経史。五洲各国進化之程度尙視新書出版之多寡以為衡。今者科挙廃、学校興、著訳之業盛行群起以赴教育之的。然而書籍之不注意何也）

「縁起」の書きだしである。教育を国民の基礎と認める。その国民の基礎である教育は、書籍によって伝えられる。しかるに、書籍そのものに注意しないのはどうしたわけか、と責め立てる。教育の内容を抽象的にうたうのではなく、内容を伝える道具＝書籍の方から話が始まる。具体的だということができる。

書籍の構成は、編集印刷発行からその後に世に伝えられることになる。編集印刷発行は、それによって構成して書籍とするものなのだ。ゆえに編集印刷発行の権利が自分があれば、書籍を構成する権利は自分にある。そうして教育の権利もまた自分にある。編集印刷発行の権利が他人があれば、書籍を構成する権利は他人にある。そうして教育の権利もまた他人にある。今の愛国の士は、ややもすれば国権を保つことをいう。今の国権をいうものは、ややもすれば教育する権利を保つことをいう。しかし、書籍を出版している編集印刷発行の書局について注意しないのはなぜか（書籍之組構、由於編輯、由於印刷、由於発行、而後乃得流伝於世。是編輯印刷発行者所以組構而成書籍者也。故編輯印刷発行之権在我則組構書籍之権在我。而教育之権亦在我。編輯印刷発行之権在人則組構書籍之権在人。而教育之権亦在人。今之愛国之士動曰保国権。今之談国権者動曰保教育権。然而書籍所出之編輯印刷発行書

局之不注意何也)

肝心の書籍が、編集印刷発行により構成されていることを述べる。編集印刷発行の権利を持つものが、書籍を支配する。ごく当然のことであろう。編集印刷発行が集中している場所が書局にほかならない。ここで、書局の所有者が問題になってくる。考えぬかれた文章構成である。

今日、編集印刷発行する書局は、いまだかつてなかったわけではない。しかし、資本をもって最大のものは、我が国の人間ではない。我が国の人間ではないものが、また更に大きな資本を持って我が書籍業を經營しようとしているとも聞く。だが、我が書籍業者は、みな資本は薄弱で統一することができない。大は小を兼ねることができる。強は弱を合せることができる。われらは争って編集印刷発行の書局の發達を求めている。書籍をしっかりと守って教育の権利を保とうとしている。しかし、編集印刷発行を統合する事業を設立することに注意をしないのはなぜか(夫今日編輯印刷發行之書局、未嘗無有也。然而挾資本之最大者則非我本国人。且聞非我本国人者亦將更挾其更大之資本以經營我書籍業。而我之書籍業者又皆資本薄弱而不能統一。夫大可以兼小。強可以并弱。我人競競焉以求編輯印刷發行書局之發達。以鞏護書籍而保教育之權。然而設立統合編輯印刷發行事業之不注意何也)

文中の「資本をもって最大のものは、我が国の人間ではない(挾資本之最大者則非我本国人)」こそが、商務印書館をあてつけているのだ。更に大きな資本が、今まさにやっこようとしている、という部分は、当時、そういう噂があったのかもしれない。日本から、中国大陸に進出して出版会社を設立することが日本でブームになったことがある。このことを指してさらに危機感をあおっている。

商務印書館の名前を出してはいないが、たしかに、それを暗示する文句にはなっている。だが、その表現は、私が見るところ、ごく控え目である。

あわせて、中国の書籍業者を零細だときめつけている部分は、注目に値する。大資本の商務印書館以外は、統一もできない零細企業ばかりだというのは、冷静

な発言だということができる。

教育権のよいように、書籍を守ってよいように、これらを重視すること、編集印刷発行事業の権利を捨てるべきではないこと、今日、すでに知られている。資本弱小の書局が強大なものに併合されるのは、将来、必ずそうなるものである。そうであるならばわれらはなぜ早く自らが計らないのか。早く自らが計れば、上は国権を保つことができ、下は侵略を免れることができる。中国図書会社のここに発起する理由である（夫教育権之宜、鞏護書籍之宜、視為重要、編輯印刷発行事業之権之不可旁落、今日所已知者也。資本弱小之書局必被強大者所兼并他日所必至者也。然則我人何勿早自為計乎。早自為計則上可以保国権、下可以免侵略。中国図書公司之所以発起者以此）

表題に中国図書有限公司とあるにもかかわらず、本文では、中国図書公司だ。「有限」は、あってもなくても実質は同じなのだろう。

以上が、「縁起」の全文である。

本文そのものは、利権回収を声だかに叫ぶ、というような血気盛んな文面ではない。しかし、声を低めて事実を述べながら説得しようとしている姿勢を読み取ることができる。商務印書館にしてみれば、文章全体から不気味な強さを感じたのではなかろうか。

「縁起」には、株式募集規定（招股章程）がかかげられている。

こちらは、格調高い「縁起」とは異なり、かなり刺激的である。

「招股章程」

第1条は、創設主旨だ。

「本公司は、我が国の教育権を強く守り、文明の進歩を追い求め、外国人の分には過ぎた望みを断ち切り、後の禍患をなくすことを主旨とする（本公司以鞏護我国教育権驅策文明之進歩杜絶外人之覬覦消弭後来之禍患為宗旨）」

中国の教育権を堅持する。すなわち、外国人を排斥すると明示している。商務印書館批判を込めていることがわかる。

つぎに、念おしをする。

「本社は、中国人公衆が創設するものだ。外国人を資本に入れない。ゆえに中国図書有限公司と名付ける（本公司係中国人公衆創辦不入外国人股本故定名曰中国図書有限公司）」

たしかに外国を意識するから「中国」という命名になった。ただし、中国を名乗ったのは、中国図書有限公司が最初ではない。ほかならぬ商務印書館自身が、1905年よりその発行する単行本、雑誌『東方雑誌』に「中国商務印書館」と印刷している[中村忠行1989]。中国図書有限公司よりも以前の事だ。

さらに、こうもいう。

「印刷部を設け印刷上の各種工業を改良し、美術の進歩をはかる。すなわち利権を回収して障害をなくする（設印刷部改良印刷上之各種工業以図美術之進歩即以收回利権杜絶障害）」

「回収利権」という原文は、この場合、印刷に関係して使用されているようだ。教科書を編集しても、印刷は商務印書館に依頼する、という状況があったことがわかる。自社で印刷部を持てば、外部委託がなくなる。すなわち「利権回収」という意味だ。

印刷と切り離してこの部分のみを見れば、中国図書有限公司設立そのものが「回収利権」の一環だと認識されても不思議ではない。上海総領事が日本あての電報で示した「例ノ利権回復的主義二胚胎スルコト八明ナル所ニ有之候」に見られる。

「発行部を設け、販路を拡大する。利益を同業に分け団体を集合し各地の消息を連絡しあう。それにより我が国書籍商の得るべき利益を保全し、かつ外国人が我が教育界に誤った種を蒔かないようにさせる（設発行部推広銷路分利益於同業集合団体聯絡各埠声氣以保全我国書商應得之利益且俾外人無播謬種於吾教育界）」

この規定にうたう「外国人が我が教育界に誤った種を蒔かないようにさせる（俾外人無播謬種於吾教育界）」が、どういうものを意図していたのかは、わからない。だが、私には心当たりがある。商務印書館が発行した教科書につぎのような例があるのを想起されたい。

坪内雄蔵編輯、長尾槇太郎訳校『日文読本』巻5、6（上海・商務印書館 光緒三十（1904）年十月初版／光緒三十二（1906）年八月五版）は、中国人が日本語を学習するための教科書である。このなかの第23に「征清軍」と題するものがある。おりからの日清戦争を題材とする。「頃は、明治の二十七、朝鮮みだれし折ぞかし、支那、大国の威におごり、朝鮮国をはづかしめ、なほ、我が軍に手むかひす。／……義州、旅順や威海衛、勢ひ破竹と、攻めおとし、目ざすは、やがて、北京城。／支那、力つき、和をこひぬ。……」[樽本照雄1997]

日清戦争を日本人の側から、一方的に描写したものだ。いくらもともとが日本人向けの教科書とはいえ、これをそのまま中国で発行する神経が、まず、理解できない。商務印書館側にも点検して中止させる人はいなかったのか。この教科書を見た中国人が、怒らないはずはなかろう。中国図書有限公司の設立を促すに十分な要因のひとつの例だと思うのだ。

この翻訳教科書に象徴される商務印書館のいわば無神経さが、敵を出現させる土壌をみずから作りだしていたということもできる。

設立規定によると、株式百萬元を募集しようとしている。まず50萬元で有限公司を設立する。四月十一日（5.4）付『申報』の「中国図書有限公司開収股分広告」によると、50萬元のうちの15萬元は発起人が引き受け、残りの35萬元を募集するという（[東亜同文会1908a:472]も同様に書く）。

発起人引き受けの15萬元のうち、席子佩がいくらを負担したのかは書かれていない。

株式の募集期限は、四月初一日より六月三十日までとする。

1906年当時、商務印書館の総資本は、約40萬元だった。翌1907年は、75萬元に増資している。これに比較して中国図書有限公司の目標額百萬元が、いかに大規模なものかが理解できよう。商務印書館が危機感を抱くのも無理はない。

発 起 人

発起人の名前が掲げられている。便宜上、番号を付して示す。

1 張 壽、2 曾 鏄、3 惲 祖 祁、4 嚴 信 厚、5 馬 良、6 周 廷 弼、7 周 晋 鑣、8 劉 樹

屏、9孫廷翰、10李厚祐、11胡琪、12朱佩珍、13陳作霖、14黃繼曾、15樊棻、16施則敬、17李鍾珏、18朱開甲、19胡煥、20謝綸輝、21連文澂、22席裕成、23席裕光、24汪鍾霖？、25夏清貽、26狄葆賢、27俞復、28席裕福（[東亜同文会1908a]にも所収。ただし、『申報』掲載とは人物に出入がある）

1張謇、2曾鏄（少卿）のふたりが、最初に出てくるのは、中国図書有限公司の主要な地位をしめていることを暗示する。しかし、中心であるはずの28席裕福が最後であるのはなぜか。理由は、不明。

こんなところに21連文澂の名前を見ようとは予想していなかった。連夢青である。排滿を主張していた新聞人であり、劉鉄雲が「老残遊記」を書くきっかけをつくった人物として有名だ。連夢青自身、商務印書館が発行する『繡像小説』に「鄰女語」（第6-20期）、「商界第一偉人」（第6-14期）を執筆している。1903年のことだ。その連夢青が、商務印書館を攻撃する中国図書有限公司設立の発起人に名前を連ねていようとは思わなかった。

連夢青が『繡像小説』に執筆を始めたとき、商務印書館は、まだ、金港堂との合弁会社ではなかった。しかし、1903年11月19日に合弁会社となったあと、『繡像小説』は発行を遅延させながらも出版されている。連夢青の作品も、その合弁以降の『繡像小説』に掲載されているのだ。

26狄葆賢は、字楚青、楚卿、号を平等閣主という。戊戌変法失敗後、日本に亡命し、上海に帰ってから自立軍の起義活動に参加した。1904年上海で『時報』を創刊し、後の1909年には『小説時報』を出版する。『時報』は、清朝政府の妨害を防ぐため、創刊時には日本商の看板をかかげ、宗方小太郎を名義上の発行人にしたとある[史和ら1991:190]。

日本人を前面に押し立てたのは、新聞を発行するためのやむをえぬ措置だったのは理解できる。重要なのは、新聞の中身だからだ。しかし、いかにやむをえなかったとはいえ、そういう人物が、外国人排斥をうたう中国図書有限公司設立の発起人に名前を連ねるのは、なにか納得がいかない気がする。自分の理想を実現するためにはなんでもする、というのなら、そうですかというよりほかないが。

中国図書有限公司設立の中心人物といわれるのが、28席裕福だ。22席裕成、23

席裕光の名前をみると、席裕福の兄弟親戚かとも想像される。席裕福については、後に述べる。

趣意書、規定の文面は、どのようにも書くことができる。重要なのは、行動がともなっているかどうかだ。『申報』紙上に中国図書有限公司の動きを、しばらく追ってみたい。

その後

「縁起」発表の翌四月初三日（4.26）、「中国図書有限公司招股廣告」が『申報』に掲載された。趣意書（縁起）を除いた規定部分だけだ。

ここにも発起人が列挙されている。見れば、おかしなことに名前に異同がある。（）内にあらたに加えられた名前をあげる。

1 張謇、2 曾鏄、3 惲祖祁、4 嚴信厚、5 馬良、6 周廷弼、7 周晋鏞、8 劉樹屏、9 孫廷翰、10 李厚祐、（虞和徳）、11 胡琪、12 朱佩珍、（金紹城）、13 陳作霖、20 謝綸輝、15 樊棻、16 施則敬、17 李鍾珏、18 朱開甲、（丁維藩）、14 黄繼曾、22 席裕成、23 席裕光

順序の違いはおくとして、削除されたものが、19 胡煥、21 連文澂、24 汪鍾霖？、25 夏清貽、26 狄葆賢、27 俞復、28 席裕福だ。

追加は3名、削除は7名、差し引き4名の減少で合計24名となる。前日の28名が24名に減っているのはなぜか。

発起人であるからには、会社設立の準備を重ねていた人々だと思わないか。1日にして入れ替わるほど簡単なものなのか。

抜けた人のなかに、連文澂と狄葆賢が入っている。なるほど、と思わないでもないが、中心人物である席裕福が見えなくなっているのには、首をかしげる。

さらに、翌初四日（4.27）にも同じ広告が掲載され、これにも発起人名簿がつく。

1 張謇、2 曾鏄、3 惲祖祁、4 嚴信厚、8 劉樹屏、6 周廷弼、7 周晋鏞、5 馬

良、(金紹城)、12朱佩珍、20謝綸輝、15樊棻、10李厚祐、9孫廷翰、11胡琪、23席裕光、22席裕成、(丁維藩)、13陳作霖、16施則敬、18朱開甲、17李鍾珪、(虞和徳)、14黃繼曾、25夏清貽、26狄葆賢、28席裕福

初日に名前を出していた19胡煥、21連文澂、24汪鍾霖?、27俞復らは、依然として削除されたままだ。しかし、25夏清貽、26狄葆賢、28席裕福が、復活する。

毎日のように入れ替わる発起人とは、何だろうか。次のことが推理できる。名義を借りた、あるいは勝手に使用した人物もいるのではないか。

たとえば、四月二十二日(5.15)付『申報』の広告に見える発起人のひとり湯寿潜の例がある。発起人陳觀察(作霖だろう)が手紙で湯塾仙に発起人に名前をつらねるよう約束していたが、そののち服喪の暮らして名前をだすのは遠慮したい連絡があった、以後、発起人のなかには掲げない、という主旨のものが新聞に公表されている(閏四月初七日<5.29>付同紙の「中国図書有限公司広告」)。

服喪ならしかたがないようだが、その他の発起人については、それらしい説明もない。中心人物といわれる席裕福その人が、出たり入ったりで、もっと不可解だ。

世界書局で40年間働いていた朱聯保が書いた上海の書店についての回憶録がある。『近現代上海出版業印象記』という。そのなかの「中国図書公司」は、章錫琛「漫談商務印書館」を下敷にしている。朱聯保の筆になる箇所、「(中国図書公司)内部には意見が多かった。曾少卿は病氣と称して退き、張季直を総理に推薦した……」[朱聯保1993:103]とあって、複雑な内部状況を暗示する。

ここまでくれば、中国図書有限公司設立を中心となって画策したといわれる席子佩について検証する必要がでてくる。

席子佩

はじめに述べたように、席子佩については、まとまった資料をさがしあてることができていない。

見つけた人名辞典『現代支那人名鑑』(1924年)に次のように記載されている。

席裕福 (Hsi Yu-fu) 字子佩 年齢四十九 江蘇省青浦県人 (現在上海)
経歴 曾テ質屋ヲ営ミ後申報買弁トナリ次テ申報ヲ買収セリ第一革命ノ際革命ニ関スル戦争記事ヲ掲載シタル結果上海市民ノ攻撃ヲ招キ同新聞ヲ史家修ニ引渡スニ至レリ民国五年新申報ヲ創刊ス [外務省情報部1924:1092-1093]

何もないよりましだくらいに思われるかもしれない。だが、項目として立てられているだけでも珍しい部類に属する。生年を推測する手がかりがここにある。該書が出版された年に数えて年齢四十九なら、1876年生まれだ。

探索する過程で、席子佩が、上海『申報』に関係するらしいことがわかった。新聞史、出版史の関係する書籍のいくつかを見れば、『申報』がらみで席子佩についての断片が浮かんでくる。

しかし、断片はあくまでも断片にすぎない。徐載平、徐瑞芳『清末四十年申報史料』(新華出版社1988.4)および宋軍『《申報》的興衰』(上海社会科学院出版社1996.2)が、『申報』の歴史を述べて詳細である。ここでは両書を中心にして、二、三の資料を参照しながら席子佩について述べることにする([張默1932:3-7][Britton, Roswell S. 1933]また、[史和ら1991:119-120][方漢奇1992][徐松栄1998]を参照した。なお、『中国新聞年鑑(1983)』<中国社会科学出版社1983.10。592頁>の「新聞界名人紹介」に席子佩の項目がある。ただし、生卒年不詳とあり、わずか10行の記述でしかない。残念ながら、本稿に役立つ記事ではなかった)。

『申報』

『申報』は、1872年上海で創刊された。1949年に停刊するまで78年の歴史をもつ。創設者は、英国人のアーネスト・メイジャー (Ernest Major) である。

彼は、兄フレデリック・メイジャー (Frederick Major) と茶葉と綿布の貿易業に従事していた。のち上海でマッチ工場、水薬工場を設立したが不景気で、新しい財源を求めて新聞業に進出する。広告掲載で利益をあげることを考えたのだ。

「買弁」陳莘庚の提案を受け入れ漢語新聞を創刊ことにしたメイジャーは、友人ウッドワード (C. Woodward)、プライアー (W. B. Pryer。宋軍の原文には、Pryce とある。無理に読めば、プライスだ。しかし、中国語は普来亜で、そうはならない。徐

載平、徐瑞芳説[徐載平ら1988:3]にしたがいブライアーとしておく)、マチロップ(John Machillop)の3人を誘う。各人は、銀400両を出し、合計1,600両を資金とした。メイジャーを経営責任者にし、資金は印刷機、活字など漢語新聞を発行するのに必要な器材購入にあてる。

新聞の方針は、過去にあったようなキリスト教の宣教師がやったようなでないもの、中国人読者の需要に合わせるものでなければならないとした。ここから、経営と編集が分離することになる。英国人が出資経営するが、新聞の内容は、中国人のそれも科挙出身の秀才が決定するという形式ができたのだ。

メイジャーにとって新聞経営は、利益をあげることが最大の目的だった。広告収入を増やすためには、大部数を発行しなければならない。売れる新聞にするためには、中国人読者が喜ぶ記事内容にしなければならない。中国人に編集を任せるのが適当となる。

まず秀才の蒋芷湘を主筆に招き、1872年に『申報』を創刊した。財務会計(現在の社長)は、「買弁」趙逸如である。編集に銭昕伯、何桂笙を雇う一方、月刊『瀛寰瑣記』(1872)、『四溟瑣記』(1875)、『寰宇瑣記』(1876)を創刊、大衆紙『民報』(1876)も創刊する。印刷機器を利用しての事業のひとつだ。

『瀛寰瑣記』といえば、私はいまだに目にしたことがないが、線装本の文藝雑誌だという。阿英『晚清文藝報刊述略』(上海・古典文学出版社1958.3)の巻頭を飾っている。英国小説の翻訳『昕夕閑談』が連載されていることでも有名だ。他の雑誌も『瀛寰瑣記』が改題したもの。

また、1877年、『瀛寰画報(Wide World Illustrated News)』を創刊する。『瀛寰画報』について2説ある。申報館が創刊発行したとするもの、イギリスで出版したものを申報館が販売したとするものだ。

徐載平、徐瑞芳は、イギリスで出版し、イギリス人の絵に蔡爾康が説明を加え、上海へ郵送してきたものを販売したとする[徐載平ら1988:319]。宋軍も、メイジャーは、イギリスで出版していた『瀛寰画報』を上海で発売したことがある、と書いている[宋軍1996:40]。

一方で、『中国近代報刊名録』は、中国早期の石印画刊であるとする[史和ら1988:364][朱聯保1993:155]。

考えてみれば、おかしな説明だ。

イギリス人の絵に中国人が説明文を加えたものというならば、明らかに中国人を読者として想定しているのではないか。イギリスで創刊発行したものかもしれないが、これは中国で販売することを目的としていると考えるのが自然だ。となると、売り文句はイギリス製造出版でありながら、その実、企画実行は、申報館であった可能性が高いと私は考える。

1877年6月6日創刊。不定期刊でイギリス人のイラスト（絵図）に漢語の説明文を添える。これは、あの有名な『点石斎画報』（1884）の発行につながり、いずれも新しい試みだったということができる。

新技術の導入にも積極的だった。1881年末から1882年にかけて天津 - 上海間の電報が開通した。これをニュース速報に利用したのが『申報』だった。北京で公表される科挙の殿試合格者を天津の電報を使って上海で報道する。知識人の関心をすくいあげる記事となり、上海とその近傍で大いに歓迎された。

1883年の中法戦争の新聞報道でも読者をふやし、事業を順調に拡大していく。

ひとつの転機は、1889年におとずれる。メイジャーは、体力の衰えを感じ帰国を考えた。関連企業である申報館、申昌書局、集成図書局、点石斎石印書局[朱聯保1993:297-298]などをひとまとめに美查兄弟有限公司（Major Bros. Ltd）に改組することにする（一説に美查股份有限公司）。

のちの話だが、関連書店だけを合併して集成図書会社が組織された。1907年、席裕福（[朱聯保1993:378]で「席豫福」とするが、席裕福の誤植だと思われる。朱聯保の勘違いかもしれない）が発起し小学校教科書などを編集したが、売れなかったという。

さて、改組後の総資産は、銀30万両にのぼった。そのうち、メイジャー兄弟は、約10万両を回収して帰国する。最初の出資が400両だったから、莫大な利益をあげたということができよう。

あたらしい会社は、4人の理事のうちひとりが中国人であるため、名義のうえでそれまでの英商独資から中外合資に変更になる（1909年まで）。そのおり『申報』の経営を担当していた「買弁」趙逸如が死去し（一説に辞職転業）、青浦人席子眉に代わった。この席子眉こそが、席子佩の兄なのだ。

席子佩（裕福）の登場

1897年、席子眉が病死（享年四十八）すると、弟の席子佩があとを継いで『申報』を担当する。この時、席子佩は、二十二歳だ（兄子眉とは年のはなれた弟になる）。

日清戦争前後に、『申報』主編に変化が生じた。最初の主筆蔣芷湘は、1884年進士に合格して辞職する。後を継いだのが錢昕伯だ。錢昕伯は病弱で何桂笙に交代するが、何桂笙も病没し、4代目の主筆が黄協埏である。『申報』担当が席子佩へと交代したのは、この黄協埏の主筆時代のことだった。

黄協埏は、おりからの維新变法運動に反対し、戊戌政変後も康有為、梁啓超を新聞紙上で批判しつづけた。読者離れが進行しはじめた『申報』の発行部数は、下降をたどり、最盛期の1万部近くから6,7千部に減少する。経営母体である美查兄弟有限公司のイギリス人理事長の意向もあり編集陣の改組となった。

1905年、それまでの康有為、梁啓超批判を改め180度の転換を宣言し、紙面も一新する。

『申報』改革の主要因は、あくまでも経営側からの要望であることを確認しておきたい。利益優先の結果なのだ。

批判の矛先を向ける新聞に対して、清朝政府は干渉しようにも、上海の租界には勢力が及ばない。1908年、両江総督は『申報』『新聞報』などに外国人の持ち株を排除させようとしている。同国人に対しては制御できると考えたものか。上から推進された利権回収運動の一環と見ることができよう。

『申報』の経営を担当していた席子佩は、この状況に対してどういう態度をとったか。

『申報』は、美查兄弟有限公司の改組によって名義上は合資であった。しかし、事実は、外国人の所有である。利権回収にならなければ、外国人の持ち株を排除するというよりも、全部を中国側で買い取るという話にならざるをえない。

1907年、イギリス人理事長は、情勢を判断し、中国側に『申報』を売却する提案をした。席子佩が購入することに決定する。1909年5月、7万5千円で席子佩に売却された『申報』は、創刊から37年を経て中国人の所有となったのだ。

ところが、席子佩は、おかしい行動をとる。主権を回収したにもかかわらず、『申報』の名義は外国籍のままにした、というのだ。

中国図書有限公司と席子佩の関係を考える時、『申報』について席子佩がとった態度が、どうしても問題になる。つまり、利権回収を唱えて中国図書有限公司を設立するならば、『申報』の買収＝利権回収をなぜ隠すのか。同一人物が、ほとんど同時期に矛盾した行動をとっていることになる。

乏しい資料をつづって席子佩の行動をさぐった。少なくとも目につく席子佩の伝記が存在していない。ここに中国で下された席子佩についての評価を見ることができ。「買弁」であるがゆえに、伝記を残す価値がない、とでもいわんばかりである。今後、研究が進み、席子佩についても資料の発掘と整理が行なわれ、私の見方が変更を迫られる事態となるように望みたい。

席子佩にとっての中国図書有限公司

中国図書有限公司創立のうたい文句は、外国人排斥、すなわち中国人の自主独立である。その発起人のひとりである席子佩は、外国人の所有する『申報』の経営を担当していた。これほどの矛盾は、珍しい。言っていることと、やっていることが正反対なのだ。こういう場合、実際にとった行動がその人に対する評価のもとになる。口ではどんなことでも言うことができるからだ。

1907年の集成図書公司についても同様である。もともとが美查兄弟有限公司が経営する書店だ。それも席子佩が始めたという。1907年といえば、その前年に中国図書有限公司の設立を宣言したばかりではないか。一方で、外国人排斥の中国図書有限公司創設を言い、その直後に外国資本の集成図書公司以教科書を発行する。さらには、『申報』を外国人から完全買収したにもかかわらず、それを公にはしない。表面からだけ見れば、大きな矛盾だといわざるをえない。

ただ、表面的には矛盾だけだということはできるが、その底に「利潤追求」「利益獲得」という言葉を置けば、それはそれで筋が通るのだ。

利潤をあげるためには、外国の旗を利用もするし、有利と見れば新規事業として教科書制作にも乗りだす。商務印書館に日本資本が加わっていることを批判し、口ざわりのいい利権回収を看板に掲げることくらい簡単なことだ。

同じ上海にいて事業をすすめていた夏瑞芳が、席子佩の正体を知らないはずがない。商務印書館にとって中国図書有限公司が強敵になるかもしれない、という恐怖心もたしかにあったであろう。だが、二枚舌を使う席子佩に対して、夏瑞芳が自分で行なった秘策　デマを流し株価操作をしてまでも対抗したことについて、夏には良心の痛みはなかったのではないか。夏瑞芳は、それらを当然やるべき自己防衛手段だと考えていた、と私は想像するのだ。

利権回収運動は、その時代の流れであったかもしれない。しかし、中国図書有限公司発起人、創設者の席子佩にとってみれば、単なるスローガン、または口実でしかなかった。教科書市場は、なによりも利益をあげることができそうな分野に見えたに違いない。発起人の内部にゴタゴタが発生したのは、各人の考え方が最初からズレていたからだろう。

商務印書館の夏瑞芳は、中国図書有限公司の宣言など実体をともなわない茶番でしかないと判断したはずだ。しかし、夏瑞芳は、侮らなかつた。必死の対抗策をとったのは、夏瑞芳のすぐれた経営感覚であったということが出来る。中国図書有限公司の出現は、商務印書館を襲ったライバルのひとつであったことにはかわりはない。

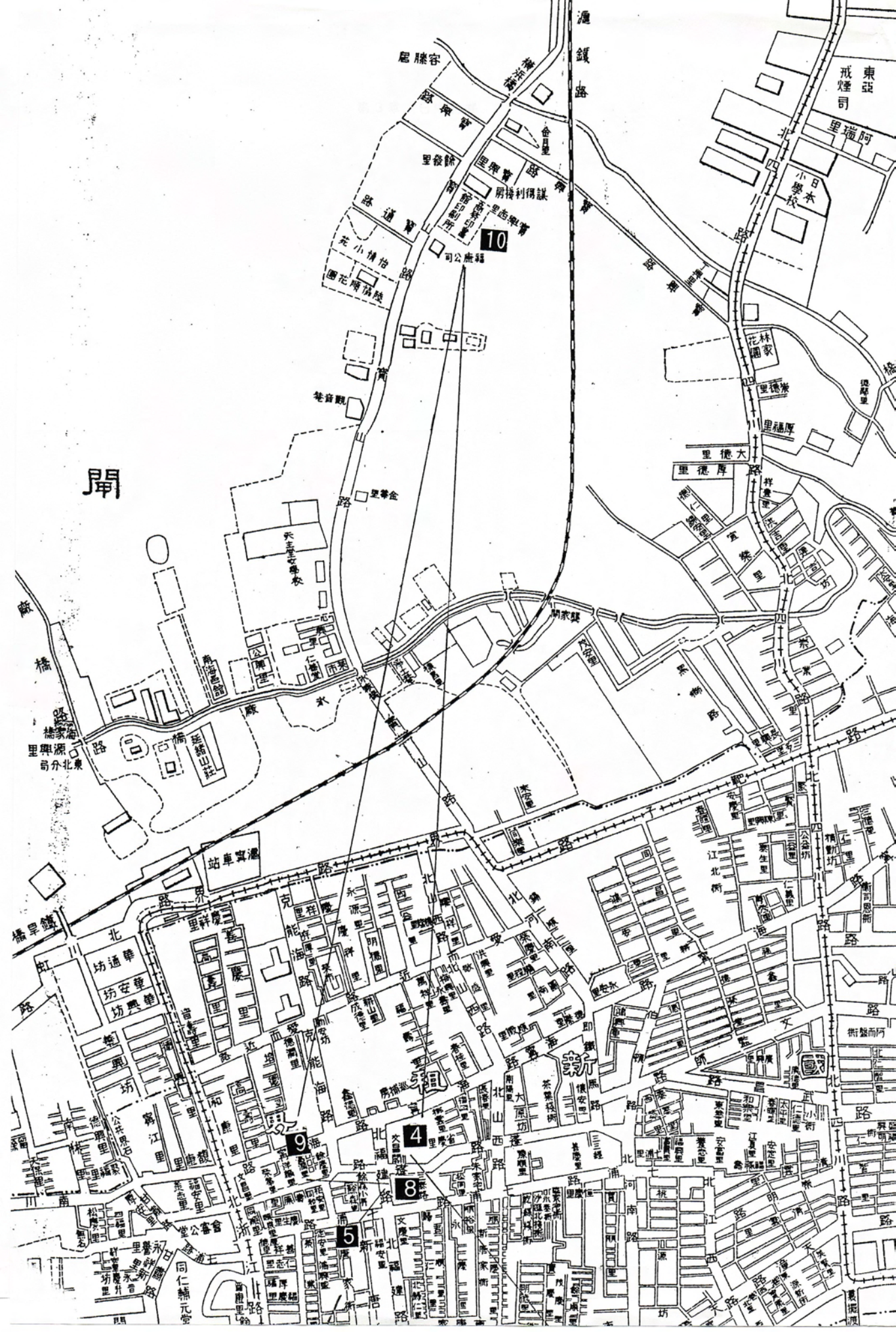
中国図書有限公司が、同年六月に締め切る予定だと公言していた株式募集について、八月末まで延長するという広告が掲載された（『申報』光緒三十二年六月二十九日1906.8.18）。集金状況の悪さを露呈している。夏瑞芳の対抗策が、功を奏したというべきだろう。

結局のところ中国図書有限公司の出版活動は、組織の経験不足からいずれも商務印書館におよばなかつたという。

1914年、商務印書館に売却され、中国図書公司和記と改名する。1918年、終業して消滅した。

美租界新衙門東首祥麟里間壁成字一三六四号（地図）　編訳所の移転（3回目）

編訳所が、蓬路から表記の場所に移転したのは、光緒三十年八月二十九日（1904.10.8）のことだ。正確な日にちがわかるのは、蔣維喬日記に「八月二十九



開

東亞
戒煙司

里瑞阿

小學校

日本

10

花園橋

巷首觀

天主堂學校

延壽山社

里源分北東

站車寶

坊通華

坊安華

坊興華

9

4

8

5

街盤而阿

路

路

路

日本日、商務の編訳所が新衙門東、旧愛国女校新家屋内に移転する」[蔣維喬1992:48頁][張樹年1991:52]と書いてあるからだ。

美租界新衙門東首祥麟里間壁成字一三六四号という番地は、『東方雜誌』第9期（光緒三十年九月二十五日<1904.11.2>）に挟み込まれた広告「商務印書館徵文広告」に見える。同一ピラは、『繡像小説』第22、23期にも掲げられる[樽本照雄1993b]。

文監師路を西に行って北浙江路にぶつかるところに会審公廨がある。地図では会審公堂という名前のところだ。ここは俗に新衙門とも呼ぶ[商務印書館1909:卷二の三オ]。

会審公堂の東に地図をたどると、洋麟里という表示がある。『上海指南』あるいは最近の石頌九主編『上海市路名大全』増補本（上海人民出版社1989.12初版未見/1990.12第二次印刷）を見ても、洋麟里という居住区名はない。祥麟里の誤植だと思う。ここで約3年足らずをすごしたあと、閘北へ印刷所と編訳所を統合した建築物を新築して移転することになる。

閘北宝山路（地図） 印刷所と編訳所の統合

閘北宝山路へ新築建造物を建てるため、光緒三十年夏、宝山路に10畝の土地を購入した[高翰卿1992:10]。

光緒三十年（1904）夏といえば、新衙門東祥麟里に編訳所を移したのとはほぼ同時である。すでに3年後をみすえて行動を起こしていることになる。金港堂と合弁したと無関係ではありえない。

土地購入から印刷所の完成までには、3年という歳月が必要だった。それほど大規模な工事なのである。

新しい工場に興味をおぼえたのか、光緒三十三年二月二十九日（1907.4.11）夕方5時に、蔣維喬は、張元濟、高夢旦らと連れ立って見学におもむいている[蔣維喬1992:51]。

印刷所の落成は四月だ[柳和城2002b:140]。

同じく蔣維喬日記に、「五月初二日 編訳所は、明日、上海駅北の新工場内に

【圖3-16】『圖畫日報』第11号1909.8.26

新新公司 招股啟

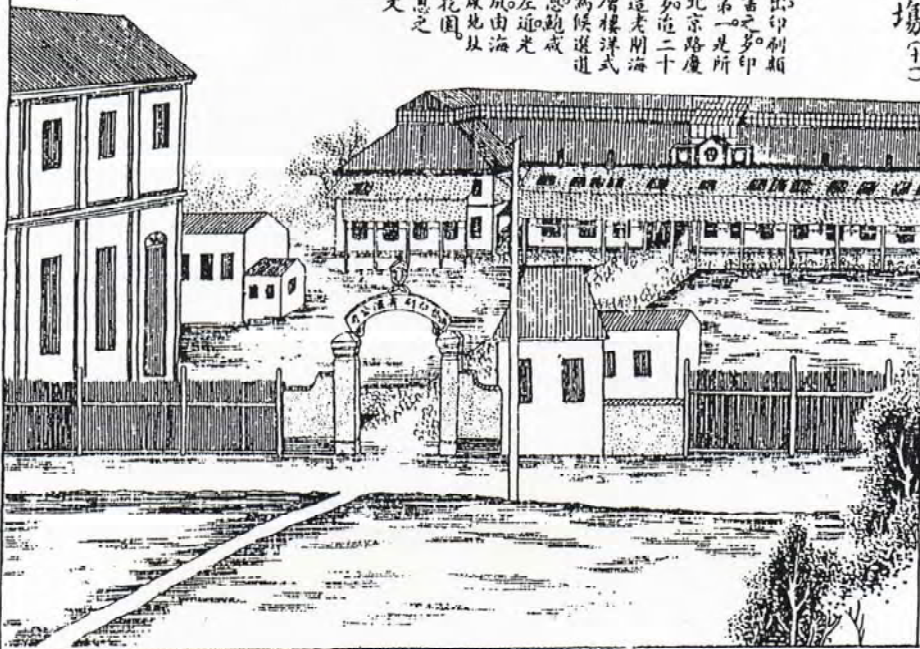
本公司集股十萬元創辦衛生菓子醬油菓子各酒已在小沙渡路建屋開辦房屋工竣先出菓子醬油味鹹而鮮久藏不霉結釀醉仙桃蓮花白紫葡萄豆蔻香洞虎紅代代香榴棗淮香椽露木犀醃蘋果珠玫瑰紅玫瑰白等菓子酒十二種一酒有一酒之味亦一酒有一酒之益大合衛生將來消售起色頗可挽回洋酒利權為此謹告留心賢業諸君欲附股者每股五元可至三馬路中法藥房事務所索閱章程從速入股速恐股額已滿不能續附特此廣告

上海著名之商場

商務印書館印刊所

自戊戌歲學堂漸興折書日出印刷相亦逐漸精熟然生涯之成出書之多印刷之佳皆賴商務印書館為第一是所創興於光緒二十二年設於北京路廣順里口賃屋九樓中概無多造二十八年印刷所失損後創設建遠老開海寧路印刷廠購地數畝建三層樓洋式堅固房屋為新印刷所總理為侯道道夏梓如印刷所總管為鮑成恩鮑成昌兄弟二人並設編輯所於左道光緒三十一年寶山路新廠落成由海寧路遷入則規模愈大矣該廠地處湖大馬路富堂底後餘地為花園以備辦事人及工人工餘休息之所廠西碼為編譯所聚中西文學士編輯材料各書印刷所辦事人約四十餘人排字人約二百餘人印字人約百人餘若照像房石印房鑄鉛字房桐板房圍書棧紙樓布置井然為中國各省印刷所之冠每年獲利之豐幾駕上海各商業而上之

(明日續登
郭萬生)



環球社 圖畫日報第七頁

移転するため、午後はすべてをかたづけのため仕事をやめた」[蔣維喬1992:51]とあるところから、閘北宝山路の編訳所をふくむ新工場は、五月初三日(1907.6.13)には機能していたことが理解できよう。

光緒三十三年(1907)、新家屋が完成したときには、敷地は30余畝にふえ、のちに70余畝にまで拡張している[朱蔚伯1981:147]。

ここで、絵図、あるいは写真に見える宝山路の商務印書館印刷所を紹介しよう。

『図画日報』に連載されたシリーズのひとつに「上海著名之商場」がある。上海の名物建築を紹介するものだ。第11号(1909.8.26)には、商務印書館印刷所の絵図(【図3-16】以下、図画版という)が掲載されているのが目を引く。

図画版

ワクでかこんだ中に、上方に説明文を、下方に絵図を置く。

文章よりも絵図の方に先に目がいく。

見れば、正門に弓形の看板がのせてある。「商務印刷有限公司」と読める。あるはずのない名称に、私は、少し不安を覚える。ここは、「商務印書館有限公司」でなければならない。

正門の右横に屋根つき的小屋がある。位置からして守衛室だろう。遠近法を無視しているから立体に見えない。描いているのは、その程度の画家ということになる。

その奥の建物は、もともと存在していたかどうか不明だ。

正面に見える変形L字型の2階建てが、印刷所である。屋根の上には明かり取りの小屋根がある。建物の周りを囲んでいるのは、庇だろうか(後述)。右端が切れているところからも、その建築規模の大きさに目を見張る。印刷能力の高さが、自然と想像されるはずだ。

左手前には2階建ての建物が大きく見える。編訳所だと推測する。

その奥、つまり印刷所とのあいだにもうひとつの平屋の家屋が描かれている。活字の鑄造工場ではないかと思う。のちに、鑄字部は、印刷所の後方につくられた建物に移転する。

まわりには、建物が見えない。建物の配置は、ゆったりとしている。空間が確保されているところから、畑、あるいは空き地のなかにポツンと存在しているような印象を受ける。まわりの風景は省略してあるというのであれば、市街地の可能性もある。しかし、手前の空き地は、いかにも空き地であって、描写を省略したようには見えない。推測される場所は、ひとつしかない。閘北宝山路である。

添えられた説明文を見てみよう。

出版書の多さと印刷の良さと第一なのが商務印書館である、と紹介をはじめ。そこまでは、いい。だが、その創業を光緒二十二とするのは、誤りだ。光緒二十三年（1897）創業が、正しい。また、創業の地を北京路慶順里とするのも不正確である。その場所は、江西路北京路首徳昌里であって、慶順里は、2番目の移転先だ。

光緒二十八年（1902）の失火に言及しているのは、資料としては貴重だというべきだろう。その事実に触れない文章が今にいたるまで多く発表されているから、よけいにそう感じるのかもしれない。失火後、海寧路に洋風3階の印刷所を建設したという記述は、そのとおりだ。

宝山路に新工場が落成し海寧路より移転したというのを光緒三十一年（1905）とする。誤り。光緒三十三年（1907）としなければならない。

説明文には、時間について誤記をしている部分もあることに注意されたい。

ここに描かれた商務印書館の印刷所は、宝山路に移転した1907年から、この『図画日報』第11号が発行された宣統元年七月十一日（1909.8.26）までの景色であるとわかる。

絵図全体の印象をいえば、手前左側の2階建てが大きく描かれすぎており、全体のバランスが悪い。正門わきの建物にしても同様である。

印刷所を囲むのはなにか

印刷所の2階から庇でかこんでいるように見える。これが、何なのかははっきりしない。

当時の印刷所を撮影した写真が存在している。

上海市歴史博物館編『20世紀初的中国印象 一位美国摄影師的紀錄』（上海

【図3-17】印刷所の退勤風景



古籍出版社2001.9) 所収のものに見ることができる。

該書は、アメリカ人スタッフォードが撮影した写真を中心に編集してある。

彼は、前述のとおり1909年から1915年に中国を離れるまでの約6年間、中国に滞在している。写真製版の専門家だったから、その関係で商務印書館に勤務していた。商務印書館の印刷技術革新の箇所で、必ずといっていいくらい「1909年アメリカ人スタッフォードを招聘し写真銅版を改良する」と紹介される。その人である。

スタッフォードの写真【図3-17】には、絵図版にみる建物そのものが、後方にそびえている。そこから中国人の若者、というより少年ばかりが集団で手前のカメラにむかって歩いてきている風景をとらえる。添えられた説明文には、労働者の退勤風景だとある。つづけて1930年代の商務印書館には約4,500名の労働者がいたと記述する。その文脈からいえば、あたかもこれが1930年代の商務印書館のように誤解するかもしれない。しかし、スタッフォードが撮影しているのだから

彼が勤務していた1913年以前の風景に違いない。しかも、少年たちの服装と帽子のかたちから清朝末期の扮装であることがわかる。1910、1911年ころだ。

その工場のたたずまいからいっても、写真に見る年代は、絵図版に掲載されたころとほとんど一致していると私は判断する。

底に見えるものは、写真によれば竹で組んだものだとわかる。工事現場の足場とは明らかに異なる。屋根を延ばしたようなその形状からして、太陽光をさえぎる工夫ではないかと考える。印刷所の建物全体は、ほぼ東南に向いて横長に配置されていた。

商務印書館の全景

宝山路に移転した後の商務印書館全体を絵図で描いたものは、私の知る限り、ほかに3種類がある。それぞれに時間が異なる。そうとわかるのは、建物の数が増加しているからだ。

2種類は、前述スタッフォードの写真集に収録されている。

いままでこのような鳥瞰図を収録した著書を、私は見たことがない(私が知らないだけで、珍しいものではない、というのであれば訂正します)。

もともとは絵画で、それを写真で撮影している(【図3-18】以下、鳥瞰図といえばこれを指す)。添えられた説明文によると、広告に要求される写真製版の技術見本として作成されたという。

『図画日報』第11号に掲げられた絵図(すなわち、図画版)と比較してみよう。

一見して、鳥瞰図の精密さにおどろく。図画版など足下にもおよばない。それこそ写真にせまる迫力があるといってもいい。

鳥瞰図と図画版の基本的な構造は、共通している。建築物なのだから当たり前かもしれない。ただし、異なる部分もある。

鳥瞰図の正門に弓形の看板がかかっているのはわかる。しかし、小さすぎて文字までは判別できない。正門右横の建物があるとこと、左側に2階建ての編訳所があるのも図画版と同じだ。

正門のそばには、小屋がある。図版版にあった正門を入った右手に見える平屋の建物は、鳥瞰図には見えない。のちに撤去したものか。そのかわり、印刷所に

【図3-18】宝山路印刷所全景



近い場所に2階建てのビルが新築されている。医務部と印刷材料の倉庫である。

図画版に見えた、左手、印刷所との中間にある建物（鋳字部）も、鳥瞰図ではなくなっている。

編訳所と印刷所のあいだの空間に、もうひとつ、屋根の色が2色に分かれている建造物が新しく出現していることに気づくだろう。

これは、写真製版部の独立した建物だ。

スタッフォードが商務印書館に着任したあとに建設された。彼の助言通りにつくられたのだろう。基礎工事のはじまりから完成までを写真で記録している。それほど力の入った建築物であった。

白く見える屋根は、すりガラスかそれに類するものに違いない。いうまでもなく、外光を取り入れるための工夫である。写真撮影するためには、そのころは外光が必要であった。

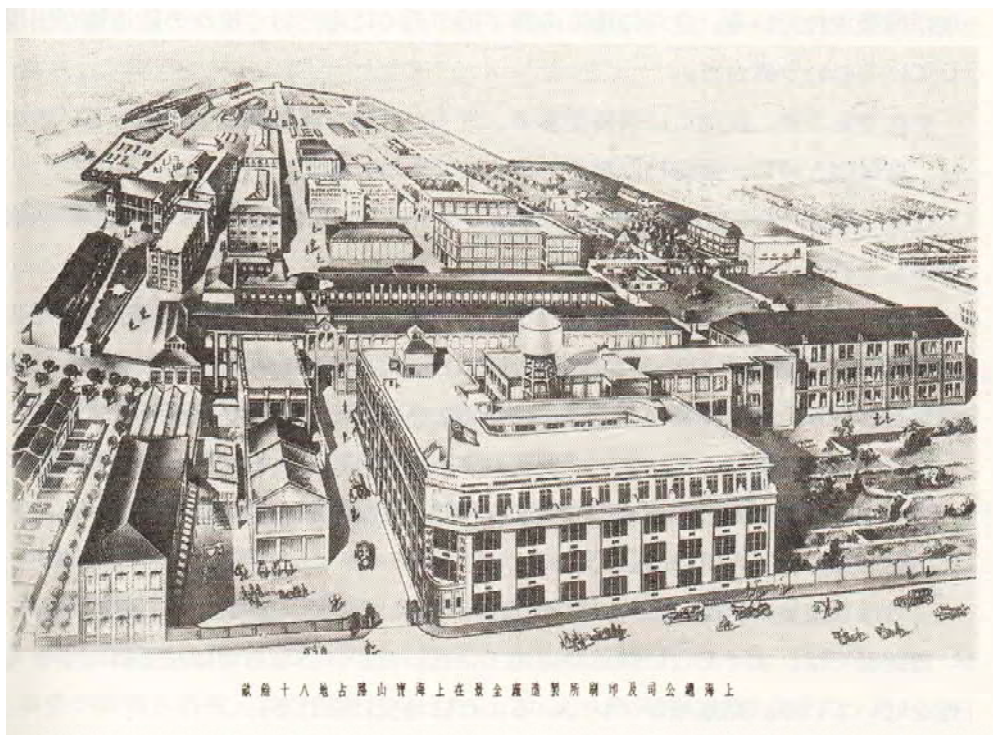
主体となる印刷所自体でいえば、後方にもう1棟が増築されていることがわかる。7本の煙突から煙を出しているのが、鋳字部である。同じ1階には、ほかに機器製造部があった。その2階には学校で使用する各種機械、薬品、人体動植物標本模型などを作る部署が設けられている。

図画版にあった庇は、取り外された。

鳥瞰図には、図画版が省略した周囲の風景が描き込まれている。

建物は増えてはいるが、空間にはまだ余裕がある。右下には公園をつくり、全体としてゆったりとした印象を受ける。

【図3-19】宝山路印刷所全景(1931)



画面やや上方に右から煙を吐きながら走行している蒸気機関車が見える。附近を通っている淞滬線である。現在は、使用されていない。ほぼ南北の方向に走っていた。

建物の増加具合から見れば、図画版より数年後の姿が鳥瞰図に描かれていると考えるのが妥当だろう。

また、図画版の絵柄は、ほぼ正確なものだと結論していい。

ついでだから、もうひとつの鳥瞰図にも触れておく。

スタッフォードの写真集には、商務印書館の鳥瞰図2枚が収録されていることはのべた。もう1枚の鳥瞰図は、見開きに配置される。構図は、同じだ。

さきの鳥瞰図よりもさらに数年後の模様だと考えるその根拠は、建物をいくつか増築しているからだ。正門を入れて左手の編訳所は、第1印刷工場の南へ新築して移転した。もとの編訳所はほぼ2倍の規模に増築拡大され倉庫として使用される。写真製版部も撮影部が2倍になっている。印刷所の屋根には、「商務印書

館有限公司 印刷製造廠」の大きな文字が掲げられる。印刷材料倉庫のかたわらに別の建物が建築中である。もとあった公園をつぶして3階建てのビルが増築されている。さらに後方の鑄字部の近くにも、いく棟かの建造物が出現しているという具合だ。

それでもまだ、敷地には余裕がある。近くの鉄道を蒸気機関車が走っているのは、鳥瞰図と同じ。電信柱が増えていることもつけ加えておく。

残る1種類【図3-19】は、はるかのかのち1931年の状況を示している。

これはよく見かける。荘俞「三十五年来之商務印書館」(荘俞、賀聖齋編『最近三十五年之中国教育』上海・商務印書館1931.9)に掲げられたものだ。敷地は、80余畝あるという。一大会社という名前に恥じない規模であるのが理解できよう。

建物の基本配置は、動かない。変形L字型の印刷所に、編訳所が中心となる。

目を引くのが、正門をすぐの右手に4階建ての巨大ビルが増築されていることだ。給水塔がそびえている。第4印刷工場である。

そのほか敷地内には、多くの建造物が増えていることだけをいっておこう。

鳥瞰図では、すぐそこに鉄道が見えていた。だが、こちらでは左上隅に小さく煙を吐いている。距離感がズレているように見受けられる。

四馬路畫錦里口(地図) 発行所の一時移転

商務印書館の発行所は、棋盤街に移ってから一貫して同じ場所にある。改築を1回行なった。工事が終わるまで、臨時に四馬路畫錦里口に仮住まいをする。その期間は、『東方雜誌』の奥付に記載された発行所の住所を追跡すると、宣統二年九月から民国元年6月までの約2年間であつたらしい([高翰卿1992:7]で、張蟾芬が「宣統三年(1911)春」と書いているが、記憶違いだと思う)。

張蟾芬は、その場所を四馬路聚豊園菜館旧址、杏花樓の向かいだとのべる[高翰卿1992:7]。地図をみると山西路東、九江路南、漢口路北に「書錦里」がある。書錦里という居住名はない。畫錦里の誤植だと思う。しかし、張蟾芬のいう場所とはちがう。

遠山景直、大谷藤治郎編『蘇浙小観』(江漢書屋1903.6.9)の地図には、四馬路に面して「南書錦里」がある。これも南畫錦里の誤植だ。地図でいえば、四馬路

北、山西路西の無記名の場所（地図 ）が、仮発行所に該当しそうだ。

夏瑞芳が、ゴム株の投機に手を出し、手痛い損失をこうむったのがこの時期である。

11 日本人理事の排除

1905年に2回増資する。

1909年4月15日の株主会で理事を7名にすることになり選ばれたのが、張元済、鄭孝胥、高翰卿、印錫璋、高夢旦、鮑咸恩、夏瑞芳である[鄭孝胥1993:1186][張樹年1991:80]。

この時点で、日本側の理事はいなくなってしまった。日中合弁会社であるにもかかわらず、経営陣から日本人を排除したのである。どうやらここらあたりから、商務印書館は、日本との合弁をあからさまに否定しはじめる。

同時に資本を75万元から80万元に増やす決定がなされている。株主会の後、理事会が開催され張元済が主席となった。これより形式的には理事会の、それも日本人を排除しての合議制に移行したと考えられる。日本側からの抵抗あるいは抗議などはなかったのだろうか。それを証明する資料は、今のところ提出されていない。

組織系統からすれば、最高議決機関が株主会であり、その下に理事会がある。理事会の責任者は主席または議長だ。ところが、商務印書館には、もうひとつ社長（総経理）あるいは支配人（経理）がいる。1897年の創業より1914年まで、社長はほかならぬ夏瑞芳なのだ。

社長と理事会

理事会のなかった1903年までは、商務印書館全体を運営しているのが社長の夏瑞芳であった。商務印書館の創業、修文書館の買収、増資の実施、金港堂との合弁のすべてを夏瑞芳ひとりが決定して、ほかの誰からも異議は出てこなかったようだ。金港堂との合弁後も理事の数と成員は部分的に変わっても、夏瑞芳と印錫

璋のふたりに変更はない。夏と印のふたりを比べると、創業者の夏瑞芳に決定権があることは明らかだ。1909年の理事会開催まで、理事会の主席は置いていなかった[汪家燊1982b:20]。だから、理事と社長を兼ねていた夏瑞芳に全権力が集中していたと考えていい。

ところが、1909年より理事会には張元済主席がいることになった。理事会主席と社長との関係を規定した文書があるなどと今まで聞いたことがない。ましてや両者の関係を論じた文章を見たこともない。社長の夏瑞芳に経営上の全権力が集中していることを理事たちは暗黙の了解としていたのではないかと推測する。

形の上で、理事会の合議制を制定していながら、実質は創業以来ひきずってきた夏瑞芳ワンマン体制であった。これは株式会社となった後も、大株主、社長、取締役などは原一族に独占されていて、実際には同族会社であった金港堂と酷似している[稲岡勝1994b][樽本照雄1995b]。金港堂の中心は、社長の座を息子の亮一郎に譲っているはずの原亮三郎であった。夏瑞芳は、原亮三郎の立場とよく似ているといっておく。

理事会が成立したのちも、夏瑞芳は理事会の存在を重視しなかった。商務印書館が組織として整理され近代化する方向に歩みはじめているにもかかわらず、夏瑞芳ひとは、昔のままの個人経営的感覚から脱却することができなかった。その矛盾が1910年のゴム投機失敗という形で表面に現われることになる。

12 鄭孝胥と商務印書館、理事会

商務印書館株主

鄭孝胥は、上海では高嘯桐（鳳岐）、夢旦（鳳謙）兄弟、張元済、巖復たちとしょっちゅうといっていらいに顔を会わせている。そのこともあってか、商務印書館に赴くこともある。そこで商務印書館の株主になるよう説得されたらしく、いつのまにか株主になっている。

「いつのまにか」というのは、日記に何月何日株主になった、とは書かれていないからだ。なぜ株主になっているのかわかるかというと、四月初六日（1908.5.5）

に、「商務印書館の株主会で、議題は日曜日営業の事である。信者の株主諸君は、みなだめだという。多数決で決める」[鄭孝胥1993:1140]とあるからだ。株主でなければ、株主会に出席することはできない。信者というのはキリスト教のである。商務印書館の創立者で中心をなしていた3人はキリスト教信者であった。

『張元濟年譜』に引用された蔣維喬日記によると、株主会は一品香で開催され、参加した株主は41名、高翰卿が前年の営業報告を行なったあと理事を選出している。日曜営業を提案したのは張元濟であった。安息日に商売をすることについてキリスト教信者の株主から反対があったということだ。投票で決めたともある（[張樹年1991:77]。なお、『張元濟年譜』では、株主会の開催日を「5月7日(四月初八日)」としており鄭孝胥日記と異なっている。今、鄭孝胥日記に従う）。

また、四月十九日（1908.5.18）に商務印書館の1907年分の年利息を受け取っている[鄭孝胥1993:1142]。これも鄭孝胥が商務印書館の株主であることを証明している。

鄭孝胥が、商務印書館の株主の資格で理事に選出されたのは、一年後の株主会であった。

商務印書館理事会

宣統元年閏二月廿五日（1909.4.15）に鄭孝胥は、商務印書館株主会に出席した。理事を7名にするということとそのなかのひとりに選ばれた[鄭孝胥1993:1186]。この時、資本を75万元から80万元に増やすことが決められた。商務印書館の資本金の推移は、正確な金額がわかっていないという不思議なことがある（[樽本照雄1993c:40-42]。[汪家燾1993:141]に「商務印書館日股投資和獲利表」が掲載される。該表を見ると1908年の総資本金は75万元、1909年は75万9500元である。鄭孝胥の証言と食い違っている）。

1909年の時点で、資本金75万元を80万元に増額するというのは今まで知られていなかった数字だといっていい。理事が書いていることだから信頼できる。

株主会において理事が選出されたのをうけて、三月初八日（1909.4.27）、第1回理事会が開催され、張元濟が主席となった[鄭孝胥1993:1188]。また、この会議には日本側の代表として加藤駒二と長尾雨山が列席していたはずだ[商務印書館

1987]。しかし、鄭孝胥日記には、日本人ふたりの名前は記録されていない。

第1回理事会を含めて三月に2回、四、五、六、七月には各1回、八、九月に各2回、十、十一、十二月に各1回、つまり十ヵ月に合計13回の会議に鄭孝胥は出席している。ほかの組織の理事をいくつも兼ねているうえの活動だから、かなり多忙だといってもいいだろう。

理事会のあいまに張元濟（菊生）から相談を受けることもあった。

宣統元年四月初五日（1909.5.23）

……張菊生が来て商務印書館のことを話す。私はつぎのように言った。4部にわけるのがよい。株式・産業が1部、資材・印刷が1部、会計・発行が1部、編訳・出版が1部。それぞれに理事ひとりが責任を負う。そうすれば事業発展の基礎は固まるだろう。菊生はその通りだとし、理事会で提案しようという[鄭孝胥1993:1193]

組織作りのための素案である。張元濟が理事会で提案しようというくらい鄭孝胥の考えは素晴らしかった、ということは簡単である。しかし、商務印書館が創立された1897年から数えて、この時点ですでに12年が経過している。理事会が第1回会議を開催したのも1909年であることを考えてほしい。すなわち、言葉を換えて言うならば、創業から12年間にわたって組織らしい組織もなく商務印書館は運営されてきたということだ。

また、理事には、以下に示すような仕事もあった。

宣統元年十二月初四日（1910.1.14）

張菊生が来て、商務印書館理事会の日本株主宛返信1通を示し、署名せよという。夏瑞芳のために給料と事務費を増額することである。……[鄭孝胥1993:1223]

夏瑞芳は、商務印書館創立者のひとりである。その給料増額についても日本側へ報告しなければならないのか、とあらためて知る。それが外国との合併会社と

いうものなのか。わざわざ張元済が訪ねてきて署名を求めなければならない種類の事柄であるらしい。忙しいはずだ。肩書きだけの理事ではなかったこともわかる。

13 ゴム投機

特定の株を、絶対に得をするからと購買をあおる。投資者が殺到し、天井値段が出たところであおった本人は売り逃げ、だまされたと気づいた時は株価は暴落し、株券はゴミ同然となって銭荘が倒産する、個人が破産する。

1907年から1911年まで、中国で発生した金融恐慌の一覧[滄江1911]を見るとわずか5年間に20件もの事件が発生している(参考[中国人民銀行1960][熊尚厚1978][郭太風1991][IP, MANYING1985, 1992])。

その原因は、「基本的には一九〇七年のニューヨーク恐慌の影響、銀相場の暴落、過剰貿易、国内的には信用の濫用、銅元(銅貨)、鈔票(紙幣)の濫発など旧式銀行制度の欠陥等に発して」[菊池貴晴1970:136-137]いた。

ゴム恐慌は、そのなかのひとつで、一名陳逸卿事件という。宣統二年(1910)六月より上海で発生、漢口、天津、營口および長江沿岸の各地に波及した。世界的にゴムの価格が高騰していたのに目をつけたイギリス商人が、上海でゴム株式会社を設立、ゴムが有望であることを宣伝し、これに投機者がむらがったのだ。茂和洋行(一説に新旗昌洋行)の買弁兼正元銭荘主人の陳逸卿が、兆康銭荘と謙余銭荘の後押しを受け、集めた資金をすべてゴム株の購入にあて、そのことごとくを失った。正元、兆康、謙余の3銭荘は倒産(宣統二年六月十四日1910.7.20[湯志鈞1989:685])、その他いくつかの銭荘も苦境に陥った一大金融恐慌である。

ポットの『上海史』は、これを「ゴム景気」として次のように紹介している。「一九〇九 - 一九一〇年に上海は有名なあの「ゴム景気」に見舞われた。この景気は六、七ヵ月つづき、約三十五の地元ゴム会社株が、上海株式取引所に上場されて約二千万両の資本を吸収し、それどころか更に莫大な金額が地元市場を通じてロンドンの会社の株に投資された。それは乱暴な投機時代であつた。この破綻

は一九一〇年六月の決算期にやつて来た。そして上海にあつた二、三のおもだつた支那人銀行、錢莊その他の大手筋は店を閉めねばならぬ破目に陥つた」[ポット1940:268]

夏瑞芳が14万元をゴム投機で失ったことが報告されたのは、宣統二年六月十六日(1910.7.22)に商務印書館で開かれた特別会議であつた[鄭孝胥1993:1265]。

当時の商務印書館の総資本は80万元だから、損失の14万元は17.5%を占めるほどの大金だ。1910年の株利益約10.7万元をうわまわる損害額であることを知れば、いかに莫大な数字であるか理解できよう。

「夏瑞芳は、商務印書館の資金を利用し投機に参加し、百万元あまりを失ってしまった」[章錫琛1964:70]という記事もある。「百万元あまり」というのは誇張としても、感覚的にはそれに等しい金額だったのであろう。

宣統二年二月初七日(1910.3.17)より、張元済は、欧米の教育と印刷状況を視察するため世界旅行に出発している。だから、張は、この旅行中に商務印書館からの連絡で夏瑞芳のゴム投機失敗を知ったことになる[張元済1990:30, 1992b:143][張樹年1991:86]。

張元済は、外国にあって商務印書館の同僚に方策を指示したのは当然のことだ。

連名で鄭孝胥、印有模、高鳳池にあてた張元済の手紙には、商務印書館のこうむつた被害額が7万元、夏瑞芳の被害額が6万元だと書いてある。鄭孝胥の記録した数字14万元に近い。銀行が倒産したことによる損害だから、保有する金銭は1銀行につき5千元を限度として別の銀行に分散させるよう、また、残りは外国銀行に預け入れることを指示している[張樹年ら1992:143]。

しかし、具体的な対策立案は世界旅行を終えてからのことになった。合弁相手である日本側の原亮三郎、山本条太郎にも手紙で善後策を相談、報告している。マンイング・イブと張人鳳が公表した張元済の手紙5通(当然ながら残された手控え)により、その間の事情を理解することができる[IP, MANYING1987:79-80][張人鳳1994:55-68][張樹年1991:100-103]。

第1信：十月初六日(1911.11.26) 張元済 原亮三郎あて

.....夏(瑞芳)君のことは、もともと個人の損失とはいえ、その額があま

りに巨大であり精神的にまいっています。毎日発行所にやってきて仕事をしていますが、気力散漫で、以前のように綿密にすることができません。……今年市況が振るわず、外には商務印書館は欠損をだしているというデマがながれています。もし夏君が個人的に破産すれば、本館が現在預金しております三十万は、必ずや引きだされてしまいます。このことにつきましていかがすべきでしょうか。

商務印書館が恐慌にまきこまれないようにすること、夏瑞芳を仕事に専念できるようにすること、このふたつを相談したい、とも書かれていて、張元済の危機感は大いだと判断せざるを得ない。

汪家熔は、ゴム恐慌と夏瑞芳の関係を説明して、以下のようにいう。

沈季芳は、商務印書館で契約書、書簡などを保管する仕事をしていた。彼は夏瑞芳の腹心の者で、ふたりして宝興不動産会社を共同経営していたが、ゴム恐慌のとばっちりをうけて破産してしまう。商務印書館も辞めた沈季芳は、商務印書館が宝興の不動産を購入してくれなかったから破産したのだと恨み、銭荘がつぎつぎと倒産するなかで、商務印書館の株所有者に株をひきあげるよう扇動したという。これが後に「夏瑞芳のゴム投機失敗」と伝えられた、というものだ[汪家熔1992a:652]。

張元済の手紙と汪家熔の記述をつきあわせてみると、「商務印書館は欠損をだしている」というデマをまき散らしたのは、商務印書館を辞めた沈季芳ということになる。

張元済をしてこの手紙を書かせるほど、夏瑞芳の精神的衝撃の程度が深かったと理解できる。

第2信：十月廿七日（1911.12.17） 張元済 原亮三郎、山本条太郎あて
……夏粹翁自らがいうところによると、このたびの損失は銀約十万両で埋めることができる、自分の所有する商務印書館の株一千株を担保にしたいそうです。高橋君に銀十万両の借用を相談したところ、夏粹翁が個人の資格で三井洋行に借金をするのは困る、商務印書館がかわりに責任を持って三井に借

金を申し込み、商務印書館から夏君に貸し付けることができるだけだ、とのこと。これより前、商務印書館が抵当をいれて三井より借りた銀十万両は、現在なお銭荘にストックしてあり、将来は夏君の私有財産を抵当にして三井から銀十万両を借りて初めに借りたものを分割返済する、銭荘にストックしてある金はすぐさま商務印書館から夏君に貸し付ける、それで目下の急を救いたい、将来、どのように分割払うのか、利息をどうするかは、山本氏が上海に来られるのをまって、相談したいと思います。……

夏瑞芳の損失を埋め合わせることに変わりはない。誰が金を出すか、これが問題となった。夏瑞芳が、山本条太郎の三井洋行から直接借金をするのは、まずいという。三井洋行と商務印書館の貸借関係を基本にして、夏瑞芳の借財は商務印書館内部で処理をしようという計画であったように読める。

第3信：十一月十一日（1911.12.30） 張元済 原亮三郎、山本条太郎あて
……彼（注：高橋）の考えによると、本館が銀十万を夏君に貸し付ける、本館株式一千八十株、南京路の不動産、中英薬房の株を抵当にする、というものです。夏君も承諾し、昨日契約を結びましたので、ここにご報告いたします。

第4信：十二月初四日（1912.1.22） 張元済 原亮三郎、山本条太郎あて
……三井社員の高橋君が上海に来て、おふたりの考えを伝えました。昨年、夏君が会社の株を抵当にして会社から10万元を借りるのは商法に違反しているためすみやかに斡旋案を準備すべし、とのこと。……将来、再び失敗することのないようにすることが必要です。……同僚と相談し、夏君が安心して会社で働くためには負債を完済する望みを持たせることですが、ただ、その額が大きすぎ、急には良策がありません。今、その借款の利息を年5厘に減じ、株で得られるはずの利息を先に支払うつもりです。5年以内は元金を返済しません。……夏君が抵当にした10万元は、三井洋行に移転し（即ち本館が10万元を三井に預け、三井が夏君に貸しつけます）商法に抵触しないよう

【図3-20】張元濟から山本条太郎へあてた手紙の手控え（部分）

山本先生閣下前奉
有書對滬建獻歲發喜伏維
起居萬福敬頌、商務所書館經濟狀況
近來似稍寬裕惟公司辦事之車程
組織未善董事及經理人權限未清
將來公司恐大受損害元濟於陰曆十二月
十三日因事歸海鹽行一週旋返又因
病勢復發不能幸之在茲行所照料
一切不克來往濟二元濟中周旋元濟如此情形
終難持久元濟愚見以為必須更改章程
劃分董事及經理權限訂立管理銀
錢出入規則章程方可固公司之基礎達而免

にします。……宣統元年より給料を100元増額し(注：それまでは200元)、交際費2,000元を手当とします。

第2信では、三井洋行と商務印書館のあいだで貸借関係を結ぶことを条件にしていた。ところが第3、4信になると、どうやら商務印書館内部で問題を処理しようとする法律上ややこしいことになるらしい。表面上は、三井洋行が夏瑞芳に金を貸し付けるとはいえ、あいだには商務印書館がたって資金的な保証をするという基本条件は守られている。

商務印書館から三井洋行に10万元を預金し、それを三井から夏瑞芳に貸しつけるというのは、考えてみれば商務印書館が借金を肩代わりするということだ。一方で夏瑞芳の月給を値上げし、交際費として手当を支給する、それもさかのぼって、というのだから、商務印書館にとっていかに夏瑞芳が重要な人物であるかが想像できる。これが、張元済たちが考えた、商務印書館と夏瑞芳の両方を救済する方法だった。

第5信：十二月二十四日(1912.2.11) 張元済 山本条太郎あて【図3-20】
……商務印書館の経済状況は、最近、ややゆとりができたようです。会社の仕事の規則、組織はまだうまくなく、支配人の権限もまだはっきりしていません。……愚見ながら規則を改め、理事と支配人の権限を区別し、資金の出入を管理する規則を定める必要があります、そうしてようやく会社の発達を図ることができると思います。

第5信は、第4信より20日しか経過していない。「ややゆとりができた」というのは、落ち着いたという意味だ。

以上、張元済の手紙5通を見てみると、夏瑞芳のゴム投機の資金がどこから出たのか、わかっているようでわからない。

第1信では、夏瑞芳のゴム投機失敗を「個人の損失」という。夏瑞芳個人が投機に手を出したので、商務印書館が、つまり理事会が認めた投機ではない、という意味だ。単なる「個人の損失」であれば、夏瑞芳個人の預金、株、不動産を提

出して損失補填に当てれば、ことはそれですむ。しかし、張元済の手紙からは、なんとか夏瑞芳を救いたい、原亮三郎、山本条太郎にむけて解決策を模索している様子がなまなましく浮かんでくるのだ。夏瑞芳という人物が、創立当初から商務印書館に尽くしてきた事実を、張元済はわかっていた。

このゴム投機失敗事件をめぐっての処理方法を見れば、商務印書館にとって夏瑞芳がいかに重要な人物であったかということが理解できる。

その一方、第5信で張元済は、組織の点検と再構築を考えていると山本条太郎に伝えている。つまり、商務印書館にはそれまで「資金の出入を管理する規則」が存在していなかった。このことは、夏瑞芳の投機に商務印書館の資金が流用された事実を、張元済が暗に認めたと読むことが可能であろう。

イプが言うところによると、夏瑞芳のような地位にいる人は、会社の金を、いかなる討論をも経ずして自分で勝手に「借用」できる資金源とみなしていたという[IP, MANYING1987:79]。

外見は立派な会社だが、その会計は、俗にいう「ドンブリ勘定」だ、とっているのと変わらない。

張元済から原亮三郎、山本条太郎にあてた手紙によって、夏瑞芳の受けた精神的衝撃が大きく、仕事が手につかない様子が、如実に伝わってくる。結局、なんとか夏瑞芳を救済しようと張元済らが考えだした方法は、簡単にいえば三井洋行（三井物産上海支店）を巻き込んで商務印書館が借金を肩代わりすることだった。

張元済から山本条太郎にあてた書簡（十二月二十四日<1912.2.11>）に、「……会社の仕事の規則、組織はまだうまくなく、支配人の権限もまだはっきりしていません。……愚見ながら規則を改め、理事と支配人の権限を区別し、資金の出入を管理する規則を定める必要があり、そうしてようやく会社の発達を図ることができると考えます」[樽本照雄1993c:40][張人鳳1994:66]と書かれている。「理事と支配人の権限を区別し」という部分から、それまでは両者の区別がなかったことがわかる。

もうひとつ夏瑞芳の投機失敗を、夏瑞芳個人の責任としている点に注目してほしい。合議のうえでゴム投機を理事会の承認事項にしていれば（そんなことにはならなかっただろうが）、たとえ投機が失敗しても会社の損金として計上し、会計

上は処理をすることが可能だ。その場合、夏瑞芳は傷つかない。そうできなかったのだから、当時の商務印書館理事会が合議制ではなかったことがわかるのだ。

張元済は、ある理事会で夏瑞芳のゴム投機に言及しながら、「商務印書館が、この十年來いまの地位に到達したのは、数々の原因があるとはいえ、夏（瑞芳）君の冒険の性質のおかげを受けているところが、本当に少なくない」[張樹年1991:102]と述べている。夏瑞芳の独断、決断は、張元済も認めていたのがわかる。

一方、金港堂側からいえば、1909年4月以降理事会の成員から日本人は排除されており、ゴム投機について事前の相談は、当然、ない。それにもかかわらず投機に失敗して大損害が出た、なんとか援助をお願いするという手紙を受け取ることになった。商務印書館にとって都合のいいときだけ相談するのか、と日本側が反発をしても不思議ではなからう。ところが、山本条太郎から張元済へあてた手紙を見ると、夏瑞芳が商務印書館に損害をあたえたことを遺憾としながらも、資金融資のため日本国内の銀行に打診をしてもいる[張樹年1991:102]。その努力は実現はしなかったが、ずいぶんと親切なのだ。山本条太郎をも動かす夏瑞芳の人柄のよさを知ることができる。

商務印書館では、夏瑞芳の救助策をいろいろ考えたが、資金を夏瑞芳に貸与し、分割で返却してもらうことにしたようだ。給与などを増額するとかの援助も同時にこうじている。結局のところ、夏瑞芳は、ゴム投機をひとりで決断した責任を取らされたのである。

14 張元済、攻撃される

商務印書館で開かれた特別会議で、夏瑞芳がゴム投機で大損失をこうむったことが内々に報告された直後のことである。閏六月二十八日（1911.8.22）付『申報』に奇妙な記事が掲載された。「中国教育会之内幕」と題されたかなり長い文章だ。

ここで説明が必要になる。前述したとおり、中国教育会といえ、1902年に蔡元培らが組織した団体が有名である。ときに発行された教科書は新しい時代には

不適當だ、新しい教科書を作るため、というのが設立の目的であった。必然的に革命的色彩を帯び、やがて愛国学社を創設する。『蘇報』は彼らの文章を多く発表していた。1903年、鄒容「革命軍」を掲載し革命を鼓吹したとして清朝政府から『蘇報』は封鎖される。これが有名な「蘇報事件」である。ただし、張元済の中国教育会は、蔡元培らのものとは同名ではあるが年代からしても別組織だ。注意されたい。

中国教育会は、閏六月十七日（1911.8.11）午後、北京政法学堂を借りて成立大会が催された。参加者は200名余。張元済が会長に選ばれている[張樹人1991:98]。『申報』閏六月十四日には、「全国教育会」として名前が見える。

閏六月二十一日（1911.8.15）付『申報』に「中国教育会章程草案」が掲載された。中国教育の発達とその改良を旨とすることが謳われる。50名の発起人が名前を連ねているなかに張謇、嚴復、羅振玉、陸費逵、張元済らの名がある。

「中国教育会之内幕」こそ、中国教育会創立から約10日後に公表された張元済攻撃の文章なのだ。

張元済が発起して組織した中国教育会について『北京帝国日報』という新聞に「不可思議之中国教育会」という記事が掲載された。『申報』の記事は、これを転載するという形をとる。

最初にいうのは、日本金港堂と商務印書館の関係である。

「張元済は、日本金港堂主人が雇用した商務印書館の支配人である。中国教育会がその主宰するものならば、表面上は全国の教育権を握ることだ。ひとりの書籍商人とはいえ裏で全国の教育権を握るものは、実のところ一人の日本人なのである。中国教育の前途には大いなる危険が生じている」

辛亥革命直前という時期に、張元済と金港堂および商務印書館の関係を暴き出している。日本人が中国教育に介入するという立論は、いかにも俗耳に入りやすい。文章の冒頭に商務印書館と金港堂の関係を暴露して危機感をあおる手法が、際立っている。文章の主は、よほどの事情通であると同時にすぐれた煽動家であるということができよう。

商務印書館のお膝元である上海の新聞で、それも名指しで報道されるのだから、商務印書館にしてみればたまったものではない。

商務印書館が、この『申報』の記事に対してどういう対抗策を取ったのかの記録は残っていない。すぐに辛亥革命が発生し、その直後には、商務印書館から跳び出した陸費逵らが中華書局を設立して商務印書館に対抗してくる。とても手をうてるような状況ではなかったと考えられる。手をこまねいて、ただ、無視するほかなかった。強く耐えるだけ、商務印書館関係者は、深く傷つかなければならなかった。その原因は、日本金港堂との合弁にある、とあらためて認識したことであろう。商務印書館の戦いは、辛亥革命後も続く。

15 ライバル（その2） 中華書局との教科書戦争

商務印書館と中華書局が、ことあるごとに衝突したのは、中華書局成立の事情に起因する。

陸費逵と商務印書館

中華書局を創立した陸費逵は、もともと商務印書館に勤めていた人物だった。

陸費逵（1886-1941）、陸費は複姓、字は伯鴻、浙江桐郷の人。若いころ『時務報』を閲覧し新思想の影響を受けた。南昌で人と正蒙学堂を経営、英語と日本語を学び、武昌で新学界書店を創設し革命関係書籍を売るなどしている。そればかりか革命団体日知会に参加し、革命活動を行なった。1905年、漢口『楚報』の主筆になるが張之洞によって封鎖されると上海に逃れる。昌明公司上海支店（書店）社長と編集を兼ね、上海書業商会の準備活動に参加したあと、1906年、文明書局職員、文明小学校校長および書業商会補習所教務長をも兼任した[熊尚厚1981:230-236, 1987:1-5][王震1991]。

熊尚厚の記述からわかるのは、陸費逵が革新思想をもっていたこと、小規模ながら書店などの責任者を経験していることなどだ。のちの彼の経歴をあわせて見れば、陸費逵が不羈独立の精神に富んだ人物だと推測することができる。

そのころ、書業商会に出席していた商務印書館の高夢旦は、陸費逵としょっちゅう顔をあわせていた。高夢旦は、陸費が印刷発行業務を把握できるばかりか編

集についても相当の経験を持っていることを知り、その才能が得がたいことを理解する。張元済と相談のうえ、陸費逵を高給で商務印書館に招いた。1908年、陸費逵二十三歳の時である。高夢旦は、のちに姪を彼に嫁がせてもいる[鄭逸梅1983b:37][蔣維喬1959:397]。

ついでにいうと、高夢旦が商務印書館に入社して編訳所国文部部长となったのは、1903年十二月であった[張樹年1991:48][朱蔚伯1981:145]。いきなり部長だ。1909年4月15日、高夢旦は理事のひとりに選出され、中華民国成立の1912年6月まで理事を勤めている。

商務印書館が、キリスト教の信仰と血縁で結びついた人々によって創業、運営されていた印刷会社であったことは、すでに知られているところだ。商務印書館の中心人物である夏瑞芳は、鮑哲才の次女、すなわち鮑兄弟の妹と結婚している。鮑咸恩の弟咸昌は、父鮑哲才の友人である郁忠恩の長女と結婚した。郁忠恩の息子厚坤は、商務印書館の最初の出資者だ。1909年3月2日、高夢旦が親戚の娘高君隱[王震1991:82]と陸費逵を結婚させたのもその例にならったものだ。姻戚関係をもつことによって陸費逵を商務印書館につなぎとめることができると高夢旦は考えた、と想像したくなる。また、高夢旦は、そうしたくなるほどの才能を陸費逵のなかに見出していたともいえよう。

陸費逵が商務印書館に入社する数年前の1903年、商務印書館は、日本金港堂との合弁会社になっていた。商務印書館の編集者たちは、上海にやってきた長尾雨山、小谷重らをまじえて、早速、教科書編集会議を持ち、出版したのが『最新国文教科書』である。編集に参加した蔣維喬の言葉によると、発行されて数ヵ月にもならず十余万冊が売れたという[蔣維喬1959:396]。

既述のように1908年秋、陸費逵は、国文部編集者として商務印書館に入社し、翌1909年春には出版部部长兼『教育雑誌』主編および師範講義部主任となった。時間的に見れば、高夢旦が商務印書館理事に選任されたあとを受けて、陸費逵が出版部部长を引き継いだかこうだ。

陸費逵が、文明書局、商務印書館で編集した教科書を書名だけでも目録[北京図書館1995]から拾いだしておく。陸費逵がたずさわった具体的な仕事を見ることができるのではないかと思うからだ。発行年順に配列すると以下ようになる

(原本はいずれも未見。頁数は目録のもの)。

陸費逵纂輯『本国地理』上海・昌明公司1906.8(345頁)

陸費逵編『新編初等小学修身教授書』第1、2巻 上海・文明書局1907.6
-1908.3(327頁)

陸費逵編纂『倫理学大意講義』上海・商務印書館1908.2(342頁)

陸費逵編纂『算術新教科書』上下冊 上海・文明書局1908.4/1908.11再版
(347頁)

陸費逵編『最新商業教科書』第1冊 上海・商務印書館1908.10(341頁)

地理、倫理学、算術、商業とその範囲が広い。陸費逵が教科書編集の才能にめぐまれていたと想像することができる。陸費逵が商務印書館に移って後に、文明書局から『算術新教科書』が出版されているが、印刷が遅れたのかもしれない。ある一面でのんびりした時代だった。

陸費逵は、革新思想をいだき、独立心旺盛な人物であつたらしいことは前述した。編集の才能があり、自立心が強いとなれば、日本の金港堂と合弁会社である商務印書館の組織に順応できないのではないかと高夢旦は考えた可能性もある。だからこそ高夢旦は、自分の親戚と結婚させたのだ。しかし、常識で考えて、異民族である清朝の支配に反対する人物が、日本と合弁している商務印書館におとなしく勤務できるはずもなかろう、と私は思うのだ。

1911年、武昌蜂起が勝利した。革命はきっと成功する、教科書も大改革をしなければならなくなるし、これこそ別に出版社を創設するいい機会だと陸費逵は考えた。戴克敦、陳協恭らと資金を集めながら、陸費逵たちは、急いで新しい教科書を編集し、新書店創設の準備を進める。1912年1月1日、中華民国成立と同時に上海に中華書局を設立した[熊尚厚1987:2]。

以上が、陸費逵が商務印書館から独立して中華書局を創立するまでの簡単ないきさつである。中国で発表された資料、論文は、ほとんど同じような説明をしていると考えていい。

中華書局創立まで

前出熊尚厚は、「当時、商務印書館は教科書についてまだ改革を行なっていなかった」[熊尚厚1987:2]とあっさり書いている。読みとばしてしまいそうな記述である。しかし、これが事実ならば、商務印書館は無能集団である、と言っているのと変わらない。

商務印書館を経済的に成立させているのは、教科書の発行とその販売である。政治体制が変われば、教科書もそれに応じて変化していくものなのではないか。商務印書館首脳は、政治情勢の変化に対して手をこまねいていたのか。具体的な対策は立てなかったのか、という疑問がわくのは当然だ。

陸費達の秘密行動 1

まず、商務印書館側からの証言を見てみよう。

証言 1：章錫琛

章錫琛「漫談商務印書館」から引用する。

……辛亥革命の時、彼（注：陸費達）は、二十六歳にもなっていなかった。しかし、将来の見通しに富んでおり、革命が必ず成功する、清王朝は必ず崩壊すると考えた。彼は、商務（印書館）が資金繰りがよくなく、業務がしばし振るわない時期につけこみ、国文部編集の戴克敦と発行所の沈知方たちと密かに計画し、資金25,000元を集め、別に出版社を設立するために、商務に解雇されたり、留まっている編集者と招聘する約束をして秘密のうちに小中学教科書を編集した（[章錫琛1964:71]。この部分は、そっくりそのまま[朱聯保1993:87]に無断引用されている）

陸費達が革命運動に参加していた経歴を知っていれば、彼の革命に対する希望的確信も理解できる。商務印書館の資金繰りがよくないというのは、首脳のひとりである夏瑞芳がゴム投機の失敗で損失を出したとか、革命のあおりで各地分館からの送金が順調でなかったとかのことをいっている。「秘密のうちに小中学教

科書を編集した（原文：秘密編輯中小学教科書）」という箇所からも、陸費逵の秘密行動を許した商務印書館の無策ぶりが見えてきそうだが、実は、事実はそのほど単純ではない。ここでは、辛亥革命後、陸費逵らが、周囲に隠れて別の教科書を編集していた事実に注目しておきたい。

章錫琛が商務印書館に入ったのは、1912年だった[陳玉堂1993:844]。彼の商務印書館入社は、時間的に見れば陸費逵が独立した後になる。章が陸費逵と直接の関わりを持っていたかどうかわからない。しかし、内部の話聞いた可能性も否定できない。章錫琛の吐く「秘密」という言葉には、不正義であるという意味合いを感じる。

この年の春、新学期がはじまったが、商務が印刷していた教科書はすでに効力を失っており、新しく編集に着手しようにも経験のある編集者や文字を書き図を描くことのできる職員はすべて中華（書局）に引き抜かれてしまっていた。引き抜かれなかった人のなかにも、密かに中華と気脈を通じ、彼らに内部情報を供給するものもいた。しかし、商務は知ってはいっても叱責できず、給料を増やしなんとか穏便にすませるしかなかった。この年の春、中華は商務の全ての教科書営業を奪っただけでなく、よその書店の教科書も販売できず、これより商務最大の敵となったのだ[章錫琛1964:71]

商務印書館の社員で中華書局に内部情報を提供する人物がいたという。これに対して商務印書館が強い態度に出ることができなかったのはなぜなのか。解雇すればいいようなものの、それでは人手がますます減ってしまうと考えたのか。この部分の詳細は不明である。少なくとも商務印書館の組織内部が脆弱になっていることの証明だ。

証言2：鄭貞文

似たような記述になるが、鄭貞文の回顧も見ておく。

1911年、彼（注：陸費逵）は、張元済に従って北京に行き中央教育会に参

加して上海にもどってくると、国文部の編集者戴克敦および発行所の沈知方らと秘密のうちに資金を集め別に出版会社を設立する計画をたてた。武昌蜂起の後、商務印書館の一部の同僚と小学校教科書を編集する。1912年元旦、中華書局が成立すると、彼は社長となり、同時に『中華小学教科書』を出版し、五色の国旗を印刷した。内容は新しい政治形態に符合しており、商務の黄竜旗の教科書を打倒したのだった。あわせて「教科書革命」と「完全華商自弁」というふたつのスローガンをういて、一躍、商務の強敵となり異常に激しい競争を展開したのだ[鄭貞文1964:143]

ここでも「秘密」という言葉が使われている。いい意味であろうはずがない。鄭貞文が商務印書館に入社したのは1918年であった[陳玉堂1993:616]。当時、商務印書館にいて、陸費逵が独立をしたことに対して歯ぎしりをした人物に内幕を聞いたのだろう。「教科書革命」と「完全華商自弁」のふたつのスローガンがあったという。「教科書革命」については、あとで触れる。

証言3：朱蔚伯

おなじく商務印書館の社員であった朱蔚伯の回想によると、当時の状況は次のようだった。

中華民国と同年同日の誕生日である中華書局は、出発早々、共和制の「中華教科書」1セットを出版し、完全華商の旗を打ち立てて大広告をしたが、その目的は商務の秘密を暴くところにあった。商務は対応する暇もなく、業務上の競争においてはまったく不利な立場に陥ったのだ[朱蔚伯1981:149-150]

「完全華商」というのは、そのあとの「商務の秘密」と関連している。こちらの「秘密」とは、つまり、商務印書館には、当時、日本の資本が入っていた、商務は、日本金港堂と合弁会社であったということなのだ。商務印書館と金港堂の合弁については、積極的に宣伝されることはなかった。それどころか商務印書館には、合弁の事実を公開する考えはまったくなかったのだ。合弁をしたとはいえ

商務印書館の名称はもとのままだし、表面上、どこにもそれらしい証拠を見つけることはできない。だからこそ「商務の秘密」になったのだ。それにしても商務印書館には「秘密」が多い。

もともと、中華の数人の創業者、陸費逵（伯鴻）、戴克敦（懋哉）、沈頤（朶山）、沈知方たちはみな商務の人間で、戴、沈は国文部編集者、陸費逵はかつて『教育雑誌』主編を勤めており、後、出版部主任となった。沈知方は商務発行所の重要メンバーのひとりである。彼らは内幕を充分に知っており、商務当局の辛亥革命のなりゆきについての見通しが不足していること、編集出版方面では機を逸せず十分な準備をすることができないと見抜いていた。陸費逵（伯鴻）は、数人のベテラン編集者および気心をした教育界の人物と内外でひそかに協力し、彼の家で教科書1セットを編集しおわった。文明書局とその印刷所の責任者を仲間に引き入れ、編集出版印刷発行など各方面の人物を含んだかなり完成した主要メンバーを組織した。民国が成立すると、中華書局の準備工作も同時に完成し、共和体制に適合した教科書1セットがすぐさま市場に出た。（商務印書館の）『最新教科書』の黄竜旗に、暗然と色を失わせたのだった[朱蔚伯1981:150]

朱蔚伯までが、商務印書館が「辛亥革命のなりゆきについての見通しが不足している」などと書く。

章錫琛、鄭貞文および朱蔚伯たちは、全員が現在から過去を見て文章を書いている。辛亥革命が成就し清朝が崩壊した事実を知っているから、陸費逵たちが秘密のうちに新しい教科書を編集していたことをあたかも先見の明があったかのように錯覚しているのではないか。いささか非難の語調をにじませているとはいえ、だ。

商務印書館の首脳であった夏瑞芳と張元済のふたりについて見てみると、確かに無策といわれてもしかたのない状況にあった。

夏瑞芳の場合

商務印書館の社長夏瑞芳こそは、事業の節目ふしめに出版と経営のかじ取りをしてきた責任者である。そもそも商務印書館設立を中心になって実行したのが夏瑞芳だった。印刷請負から教科書出版に方向転換し、出資者をさがしだし、日本金港堂との合弁を決意してきた。商務印書館の経営規模を大きくしていった原動力である。辛亥革命という出来事に身をおいて、当然、力を発揮すべく誰からも期待されていたはずだ。ところが、この重大事態に夏瑞芳は、まったくの無力だったのである[樽本照雄1995h]。

1910年3月、張元済は、世界旅行へ出発した。上海から船に乗って香港、シンガポールを経て地中海からロンドンに到着したのが5月だ。7月、夏瑞芳が、ゴム投機に失敗し、14万円を失ったことが商務印書館理事会で明らかにされた。夏瑞芳は、巨額の損失を出したことで精神的にまいってしまい、仕事どころではなかった。中華書局の動きに対してなんら対策をこうじることができなかったのだ。

張元済の場合

夏瑞芳が精神的にへたりこんでいるところに、張元済は世界旅行の途中である。商務印書館へは連絡をとっていたが、手紙ではいかにも不自由だ。アメリカへまわり、日本を経由して上海にもどったのは、1911年1月だった[張樹年1991:92]。

同年6月、学部が中央教育会を設置し、張謇が会長、張元済と傅增湘が副会長となる。学部とは、全国の教育事務を統轄するために清末に新設された中央行政機構のひとつだ。会議開催のため7月から張元済は北京にいた。10月10日には上海にもどってきてはいるが、武昌蜂起について張元済が何か発言したとは『張元済日記』には書かれていない。原物に言及があるのかわからないのは不明だ。1912年、民国となっても同じく『張元済年譜』には中華書局に係る張元済の意見は記録されていない。

夏瑞芳は、ゴム投機失敗で意気消沈している。張元済は、北京で会議に忙しい。辛亥革命以前に教科書に関して商務印書館首脳が何か準備をしていたとは書かれていないのが事実だ。

上の証言でわかるように、辛亥革命以後、中華書局創立のため陸費逵が教科書を秘密のうちに編集していたという事実は、各証言者が共通して指摘している。

便宜的に陸費達の秘密行動とっておく。

まとめると、1911年辛亥革命が成功すると確信した陸費達は、商務印書館に秘密で教科書を別に編集した（秘密行動）。1912年中華民国成立と同時に中華書局を創設し、準備していた教科書を大々的に売りだした、という経過である。

秘密に教科書編集をした陸費達の秘密行動については、当時を回想する誰でもがそれが事実であったことを指摘する。だが、資料を読んでいくと、陸費達は、それ以前にもうひとつの秘密行動をとっていたらしいことがわかってきた。秘密行動 とする。

陸費達の秘密行動

商務印書館の中心人物、責任者夏瑞芳、首脳のみ張元済らは、以上の記述によると、新しい状況に対してまったく手を打たなかったかのようである。

当時の商務印書館首脳が結果として無策であったということはできても、内部、たとえば教科書編集の中枢部が、状況の変化に対処する計画をまったく持たなかったかということ、それはありえないのではないかと思うのだ。商務印書館の経営基盤は、教科書発行にある。教科書発行について、なんらかの改革案があったと考えるのが普通の見方であろう。

証言4：蔣維喬

蔣維喬の証言を聞いてみよう。蔣維喬は、高夢旦よりも数ヵ月早く商務印書館に入社している。教科書編集の熟練者でもあり、商務印書館に長年勤務しているから内部事情をより詳しく知っているはずだ。

この時、革命の勢いが日増しに強くなり、商務（印書館）の同僚のなかで将来の見通しを持った人たちは、革命後に適用する教科書1セットを準備すべきだと菊生（張元済）に勧めた[蔣維喬1959:398]

実際には、商務印書館の将来を憂えた人たちもいたことがここからわかる。それもひとりではない。複数存在したように書かれている。ただし、具体的な名前

はあげられていない。今、かりに教科書改革グループとしておく。

当時、張元済に進言することのできる人たちというと、数が限られる。

そのころの理事会の成員は、夏瑞芳（兼社長）、印錫璋、張元済、鄭孝胥、高翰卿、高夢旦、鮑咸恩の7名だ。消去法でいけば張元済本人と夏瑞芳が、まず、はずれる。鄭孝胥は、のちの「清朝の遺老」だからこれも除外する。高翰卿も保守派の人物で、鮑咸恩は印刷専門だ。残るのは高夢旦だけとなる。政治情勢の変化を見ながら、将来どうなるか予想はできなかったにしても、誰ひとりとして何も考えていなかったというわけではない。

ところが、高夢旦、あるいは高夢旦とのつながりが強い陸費達自身、すなわち教科書改革グループ（だと推測する）のせっかくの進言も張元済には受け入れられなかった。

張元済は、もともと頭脳明敏で実行力に富んでおり、すべての措置が適切でなかったことがない。しかし、聖人にも千慮の一失で、彼は、本来、勤王党（原文：保皇党）の臭みをおびており、話が革命におよぶと、いつも首を横にふった。ついには、革命は成功するはずがない、教科書を改める必要はない、と断定するのだった。しかし、伯鴻（陸費達）は、適用するそろいの教科書をひそかに準備し、秘密のうちに書局を組織した[蔣維喬1959:398]

蔣維喬は、「教科書を改める必要はない」に続けて、「しかし、伯鴻（陸費達）は、適用するそろいの教科書をひそかに準備し、秘密のうちに書局を組織し」、民国元年、中華書局の成立を突然宣告した、と書いている。教科書改革に反対したのは、張元済だったという証言を除いては、多くの証言者と同じとらえ方をしているとばかり思っていた。つまり、辛亥革命の勃発 教科書改革の進言 張元済の拒否 陸費達の秘密行動 中華書局の成立、という順番である。複数の証言と上の引用文を照合すれば、この順序で事態が推移したと思うではないか。中華書局の創業をのべる文章のほとんどすべてが、以上のように把握している。これについて異論を提出している文献を私は見たことがない。しかし、資料をつきあわせてみると、どうやらこれは蔣維喬の記憶違いであるようだ。

秘密行動の謎

陸費逵に関して、蔣維喬の証言に奇妙な部分があることに気がついた。これこそが陸費逵の教科書改革グループの存在と、今まで考えられてきたものとは別の秘密行動があったことを証明する証言なのである。以下にのべる。

陸費逵（蔣維喬の文章では、「陸氏」と誤っている。陸費という複姓が正しい）が高夢旦のひきで商務印書館では特別待遇だったと述べたあと、つぎのように書いている。

……実は陸は野心に燃えており、社外で共謀して小学教科書フルセットを密かに編集した。その実、国文、算術、歴史、地理、理科など最初の一冊だけができていたにすぎなかったが、すぐさま広告をうって宣伝したのだった。商務側では、夏瑞芳、張元済がこれを見て大いに驚き、高夢旦に責任をもって交渉させた。その結果、原稿を高値で購入し、（陸費）伯鴻に対しては給料を増額したのだ。伯鴻のこの行動は、まったくユスリ主義であり、大金を欲して資本とし、さらに意図するところがあったのである。高夢旦たちは困惑するし、だまされてしまったのだが、夏瑞芳、張元済たちはその内幕を知らなかった[蔣維喬1959:398]

蔣維喬が陸費逵に対してよい印象を持っていないことが、この記述からも十分に理解できる。商務印書館を足げにして出ていった陸費逵を回想しているのだから無理もない。

陸費逵が、商務印書館の社外で別の教科書を編集した、というのは、今まで多くの証言がある。武昌蜂起から中華民国成立までの時期に、陸費逵が教科書を秘密のうちに編集したという事実（秘密行動）である。上の証言も、てっきりこの秘密行動についてのべたものだとばかり、私は考えていた。私を含んですべての研究者はそう思っていたのだ。

しかし、蔣維喬の文章をよく読めば奇妙である。いくら考えても納得できないのは、原稿を商務印書館が購入したという部分だ。そればかりか、陸費逵の給料

を増額したとはどういうことなのか。

中華民国になって陸費逵は、中華書局の社長に就任した。中華民国成立後、中華書局の教科書は発売された。蔣維喬のいう教科書は、民国成立後、陸費逵が商務印書館を離脱した後のものであるはずだ。にもかかわらず、商務印書館の給料を増額されたというのでは、つじつまが合わない。陸費逵にしても、新しい出版社を創立するために編集した教科書原稿を商務印書館に売ってしまっただけでは、話にならないではないか。

ここでいう教科書編集とは、中華民国成立直前の新教科書秘密編集（秘密行動）とは、別のものと考えなければならない。そうすると、前述の教科書改革の進言とどうかかわりがあるのだろうか。

蔣維喬の証言を、その記述の順番で整理すると次のようになる。

- 1．陸費逵は、小学教科書を密かに編集し（秘密行動 3と同じ）広告した。商務印書館は、原稿を買い取った。
- 2．教科書改革グループが張元済に革命以後の教科書を準備するよう進言した。しかし、張元済は、それを拒否した。
- 3．辛亥革命後、陸費逵は、密かに教科書を準備し（秘密行動 1と同じ）、中華書局を創立した。

1について、陸費逵が広告で新しい教科書を宣伝したというが、商務印書館の名前を使ったのか、それとも別の出版社名にしたのか、いかなる内容の新教科書だったのか、そのあたりの事情が蔣維喬の文章では、わからない。

詳細は不明にしても、従来は、1の教科書編集と3の教科書準備は、同じものだと考えられてきた。すなわち、辛亥革命後、商務印書館に秘密で新しい教科書を編集し、中華民国成立後、ただちに中華書局を創業した、というただひとつの説明、解釈である。まさか、陸費逵が2度にわたって秘密行動をとっていたとは、誰も想像しないはずだ。

しかし、辛亥革命以前に、陸費逵はもうひとつの秘密行動を実行していたのだ。上記蔣維喬証言の1から3までを矛盾なく説明しようとするれば、陸費逵が2度にわたって秘密行動をとっていたと考えざるをえない。また、その証拠もある。

1910年2月23日の蔣維喬日記に記録されている。すなわち、「正月十四日 朝

9時、夏粹翁（瑞芳）の求めで赴き、陸費逵が外で教科書を密かに編集したこと、会社はそれを購入するつもりだということについて議論をする。私は、賛成もせず、また反対もしなかった」（[蔣維喬1992:59]。[張樹年1991:84]の該日には、関係する何もかも書かれてはいない）というのがそれだ。

1910年といえば、陸費逵が商務印書館に入社して2年にもならないころだ。辛亥革命にはまだすこし時間がある。蔣維喬は、このころ連日のように既存の教科書に手を入れているだけで、新しい教科書編集など影も見えない。ただ、蔣維喬日記には、陸費逵が密かに編集したとは書かれているが、それを広告したとまではいっていない。同じ蔣維喬の文章ではあるが、回想文より時間から見て蔣維喬日記の方が正しいのだろうか。

1910年2月23日前後の『申報』に掲載された商務印書館の教科書広告を調査したことはした。商務印書館の広告は、確かにある。ただし、書目だけでは、陸費逵が秘密に編集したものかどうかわからない。ましてや、別の書店名で出しているののかも不明となると、お手上げである。問題として残しておく。

もうひとつの秘密行動 つぶされた教科書改革

辛亥革命後、陸費逵が密かに教科書を準備したという3の部分は、事実であり、動かない。問題は、1の新教科書編集と広告である。蔣維喬日記から判明した事実は、これが1910年の出来事であり、今まで考えられてきた1912年民国成立直前のものではありえないということだ。

陸費逵が最初に行なった新教科書編集を秘密行動としてみよう。これは、事前に発覚しつぶされてしまった。高夢旦が交渉を命じられたのは、彼が陸費逵の後見人のような立場にあったからだと理解できる。その後、教科書改革グループの張元済への進言が行われるが、これにも失敗する。教科書改革を進言してそれが拒否されれば、普通は、それっきりになるはずのものだ。おまけに2度までも泥にまみれている。ところが、常識を破って、陸費逵は、企画を放棄したように見せかけて、実際は別の教科書編集に着手しており、完成させた、と考えれば、話の筋がよりはっきりと通るのだ。辛亥革命後、陸費逵は、密かに教科書を準備し（秘密行動）、中華書局を創立した、に続くのは上に同じだ。くりかえす。

1. 密かに新教科書を編集し（秘密行動）、広告した。商務印書館は、原稿を買い取って改革を妨害する。
2. 教科書改革グループは、張元済へ教科書改革の進言をして拒否される。
3. 辛亥革命後、陸費逵は、密かに教科書を準備し（秘密行動）、中華書局を創立した。

陸費逵のこの秘密行動は、なにを意味しているのか。

陸費逵こそは、商務印書館の出版部部長である。激しく変化する政治状況を前にして、教科書は、従来通りのものでいいのか、新しいものを編集する必要はないのか、それとも古い教科書を用意しつつ、一方で、事態の流れいく方向を見ながら、新しい教科書も準備する必要があるのではないかと、などなど想像できるかぎりの対策を考えたのではないかと。それを期待して高夢旦は、陸費逵を見込んで高い給料で引き抜き、部長の地位を提供し、姻戚関係さえも結んだのではないのか。

商務印書館の従来の教科書に陸費逵は不満を感じた。陸費逵は、高夢旦の期待に応えた。1910年、陸費逵は、1 秘密行動 を実行した。しかし、新教科書の編集が露見し、商務印書館は、その原稿を購入する。あきらめずに教科書改革を商務印書館首脳に進言した。これが2の部分である。ところが、張元済の拒否にあう。1911年、武昌蜂起の成功を見た陸費逵は、革命の成功を確信し、ふたたび新教科書を準備した（3 秘密行動）。ただし、こちらは自らが独立するためだ。

陸費逵の秘密行動は、今にして思えば、早晩、陸費逵が商務印書館を飛び出す前兆であったということもできよう。

それにしても、陸費逵（秘密行動）にたいする商務首脳の弱腰はなぜなのであろう。陸費逵を叱責するどころか、原稿を購入し、さらには給料の増額を認めるとはどういうことなのか。

商務印書館首脳に「秘密」で別の教科書を編集していたとなると、はっきりいえば、陸費逵は、商務印書館に対して背任行為をしていたことになる。言葉が強ければ、独断専行と言い直してもいい。それも、一度ならず二度までもだ。ところが、商務印書館首脳は、このことについて表立って陸費逵を非難していない。陸費逵の後ろ盾、高夢旦の威光なのか、よくわからない。なぜなのか。今、私が

思いつくのは、陸費逵らが教科書改革を進言していたのに、張元濟らはそれに反対した、しかるに、辛亥革命が成功し、陸費逵らのいう通りになってしまい、面目を失い、陸費逵を非難するどころの騒ぎではなくなった、ということぐらいのことだ。結果として、陸費逵の独断専行は、正しかったことになる。

詳しい事情が知りたいと思う。

証言5：朱聯保

蔣維喬証言によって、革命の時代に適合する教科書を作成するよう進言した人物は、陸費逵（および私見では、高夢旦を含めたい）であったことは、間違いない。もうひとつ、朱聯保の回憶がある。

朱聯保は、世界書局に40年近く勤めた経験をもっている。世界書局とは、初期商務印書館の職員であり、のち中華書局に転職した沈知方が、1921年に創設した書店である。朱聯保が沈知方から聞いたところによると、沈知方と陸費逵は、教科書改編を主張したが、商務は賛成せず、そこで陸費逵、戴克敦、陳協恭らと中華書局を準備した、という[朱聯保1987:52]。

高夢旦のかわりに沈知方が出てきているが、教科書改革グループと考えればいい。

証言6：鄭逸梅

鄭逸梅の文章は、典拠を示さないため、書物に拠った部分と伝聞の部分あるいは自らの見聞との区別がつかない場合が多い。引用するには少しためらうが、商務印書館については、彼は、内部資料を整理したことがあるというので紹介しておく。

1911年、清朝をくつがえす革命の潮流は、沸き返り阻止することができなかった。この時、商務当局は来学期の教科書を発行するについて大いに躊躇したのである。もしも、今までどおり「竜旗は日にはためき、皇帝万万歳」という教材文を印刷して、革命が成功すれば、大量の封建的陳腐な教科書が紙くずになることを彼らはひどく恐れた。莫大な損失でないわけがない。し

かし、もし革命教科書を編集印刷したとしても公開することはできない。万一、革命が成功しなければ、清王朝の怒りを買うことになり、いいわけできない、とも思った。再三考えたがいい方法がない。商務当局は、「知恵者」と呼ばれていた陸費伯鴻に思い至り、彼をよんで方法を相談したが、彼は、「清朝には二百年あまりにわたる発展の基礎があります。総督巡撫地方長官は、全員が優秀ですから、革命党を捕縛することにかけてははなはだ厳しいのです。また、政府は相当な兵力を擁していますから、外敵に抵抗することはできなくても内乱を処理するぐらいのことは余裕があります。ですから革命は、決して短期間に成功するものではありません。来学期の教科書は、やはり今までどおりで結構ですし、変える必要はありません」ときっぱり言った。商務当局は、彼のこの言葉通りに今までのものを印刷発行することに決定したのである[鄭逸梅1983b:37-38]

鄭逸梅の文章は、辛亥革命以前に発生している教科書改革の進言と拒否、ならびに陸費逵の秘密行動 教科書の秘密編集については言及していないことを確認しておきたい。カッコ内に見える陸費逵の言葉など、まるで見てきたように書いてある。

鄭逸梅がのべるこの部分だけを見ると（私が見た限りほとんどすべての文献が同じことを言っているのだが）、陸費逵はなんとひどい人間かと思う人がでてくる可能性がある。革命思想をもっているはずの陸費逵だが、清朝擁護をしているではないか。革命など成功するはずがない、と口ではいいながら、密かに革命教科書を編集していたのは、陸費逵なのだ、などなど。

しかし、陸費逵たちの教科書改革グループは、すでに張元濟ら商務印書館首脳に教科書改革を進言している。それは拒否されたのだ。その時点で、陸費逵は、商務印書館首脳にたいして不信の念を持ったのではないか。将来の独立を決心したと想像もできる。いちど（実質的には2度）拒否されているにもかかわらず、いまさら相談をもちかけられても、真面目に対応する気になるはずがなからう。陸費逵は、それまでの経緯を逆手にとって、教科書改革など必要ではない、と大声をあげたと読むべきなのだ。

もう少し引用する。

……革命の成功は、目前にあった。彼（陸費逵）は、なにごともないように商務をあしらう一方で、数人の比較的親密な同僚 戴克敦、陳協恭、沈頤、沈知方たちを秘密に招き、宝山路宝興西里の彼の家に毎晩集合し、新しい教科書編纂を相談した。しかし、編集を終わってもおおやけに印刷することはできない。なぜなら商務当局に知られたくなかったし、また清朝の役人の目をごまかさなくてはならなかったからだ。普通の印刷所は、このようないわゆる「大逆不道」の革命本を印刷する勇気などなかった。やむをえず鴨緑江道にある日本人が経営する作新印刷所に委託して印刷したが、だいたい二号活字で挿絵は木刻である [鄭逸梅1983b:38]

作新印刷所というのは、作新社のことだと思う。作新印刷所が、中華書局の教科書を印刷したという。さすがに上海である。いくつもの抜け道があった。陸費逵が商務印書館を辞職するとき、商務は月給400円で引き止めようとしたとも書かれている。当時の商務印書館社員の月給は、平均して約60元であるから、陸費逵に提示された400元がいかに高給かが理解できる。商務印書館は、最後まで陸費逵を優遇しようとした。

陸費逵らによる教科書改革を拒否した後も、商務印書館のモタツキには変化がない。

蔣維喬日記を見ることによって、辛亥革命を目の当たりにした商務印書館の鈍感ぶりを蔣維喬の目を通して読み取ることができる。

八月二十三日（1911.10.14） 午前中、編訳所の会議。武昌革命軍により商業は大きな影響を受ける。各部の原稿で組み版印刷の急がないものは、すべてゆっくりすることを提案する。ただ英文国文の二部は、いつも通りとする [蔣維喬1992:61]

その後は、時事ものだと推測できる辛亥革命紀、革命党小伝などの編集校正を

始めている。辞典の編集にも着手しているが、教科書については、なんと1912年元旦にようやく、「辞典を編集する。また、各種教科書を修改しなければならない。ゆえに辞典の編集は中止し、教科書修改に従事する」[蔣維喬1992:44]という記述が見える。ノンビリしたものだ。緊張感などまったく感じるができない。あくまでも過去を振り返っての私の感想である。渦中にある当事者にしてみれば、案外とそんなものかもしれない。

中華書局創立後

民国元年、中華書局は成立を宣言すると同時に各種教科書売りだし、商務印書館は顔色を失った。陸費逵は、商務を離脱し中華書局社長におさまる。

高夢旦の場合

商務印書館に留まった高夢旦は、針のむしろである。

最も苦しい思いをしたのは高夢旦であった。商務の元発起人には許してもらうことができず、かげでスパイと罵る人さえいたのだ。ただ張元濟だけが昔とおなじように信頼していた。私は高夢旦と親しかったので、からかって「虻蜂取らずで、もともこもなくしたな」といったことがある[蔣維喬1959:399]

高夢旦こそ陸費逵を引き抜いてきた張本人だ。出版部部长も陸費逵に譲っている。姻戚関係もある。商務印書館首脳のなかでは、その将来を考えている人物のひとりだといっている。実力をともなった高夢旦 - 陸費逵ライン、すなわち前出の教科書改革グループである。ふたりは親密であったから、陸費逵との関係で高夢旦が後ろ指をさされることになったのは、いたしかたない。蔣維喬の言葉に対する高夢旦の弁明はないのだ。

前述の商務印書館理事会7名の任期は、1909年4月15日から1912年6月7日までであった。翌日からの理事に変更がある。夏瑞芳(兼社長)、印錫璋、張元濟、鄭孝胥(主席)までは留任だ。高翰卿、高夢旦、鮑咸恩の3名が、王之仁、奚伯

綏、鮑咸昌に変更されている。鮑咸恩は、1910年6月21日に死去しているから、鮑咸昌に替わったのには理由があり、納得もできる。高翰卿は、このとき理事ではなくなったが、のちに復活する。つまり、1914年1月10日、夏瑞芳が暗殺され、夏瑞芳のかわりに印錫璋が社長に、高翰卿が支配人に推挙されているのだ。それにひきかえ高夢旦だけがこの時期、浮上してこないのは、この陸費逵事件が原因であろうか。

『教育雑誌』のチグハグさ

商務印書館の時勢に対するノンビリさ加減は、すでに紹介した。積極的にノンビリしているのか、それとも結果的にそうなったのか、どちらをも兼ねているのかもしれない。

清末に、陸費逵が責任者で発行した『教育雑誌』の場合を見てみよう。

商務印書館の『教育雑誌』は、1909年2月15日（宣統元年正月二十五日）に創刊号を発行した。創刊号より第3年第9期（1911.10.31、宣統三年九月初十日）まで、編輯者陸費逵と奥付には表示されている。辛亥革命の混乱で雑誌の発行が遅れた。つづく第3年第10期は、表紙に「中華民國元年元月初十日発行」と印刷してはいるが、その奥付は、「民国元年五月初十日再版」（台湾影印本による）となっている。宣統がつづくという仮定のもとに発行を準備していたはずだ。該号の初版を見ることができないのでなんとも言いようがないが、民国に変更されたため慌てて活字を組み直し、巻頭論文の内容も取り替えて印刷するのに約5ヵ月かかったということか。編輯兼発行者は、陸費逵から教育雑誌社に変更されている。

中華書局は、陽暦1912年1月1日に創立されたから、社長の陸費逵は当然、商務印書館を退職している。しかるに、5月10日再版発行の商務印書館『教育雑誌』には、陸費逵の論文が2本も掲載されたままなのである。

陸費逵論文のひとつの論題は、「謹んで民国教育総長へ告げる（敬告民国教育総長）」という。題名からも、文中に「臨時政府が成立し」とあるところからも明らかのように、1912年1月以降の原稿だ。こちらで教育の原則を述べ、もう一篇の「民国普通学制について（民国普通学制議）」において具体的な学制を提案する。同じく民国成立後に書かれていることはいうまでもない。この時、陸費逵はすで

に商務印書館の社員ではない。

社員でないどころか、後ろ足でドロを跳ねとばすように商務印書館を辞職したのではなかったのか。そういう人物の論文が2本も巻頭を飾っているのは、なぜなのか。別の論文に差し替える時間は、充分とはいかないかもしれないが、ないわけではなかったらうに思うのだ。チグハグと言おうか、ノンビリしているといおうか、けじめをつけたい私としては、なんとも言いようのない気がする。もっとも、当時の商務印書館には、臨機応変に事態に対処できる人間がいなかったといわれれば、それはそれで納得はするのだ。

陸費達の商務印書館辞職

民国元年1月1日には、陸費達は、商務印書館を辞職しているとさき書いた。民国元年1月1日に中華書局を創立したのならば、その時には、すでに商務印書館を辞職しているはずだ、と考えるのが普通だ。その普通にならって関連文章には、みなそう書いてある。

王震「陸費達年譜」の1911年の項目に、「11月6日、彼（陸費達）は、戴克敦（懋哉）、陳寅（協恭）、沈知方（芝芳）、沈頤（朶山）の5人と新しい書局を組織することを相談する。／つづいて彼（陸費達）は、商務を辞職するが、商務は月給400円で引き止めようとした。彼は毅然として無視し、外に出て創業したのだ」（〔王震1991:83〕。沈知方の名前に「マ」としたのは、創業に加わったのは沈継方（季芳）であり、沈知方が中華書局の副局長に任じたのは、1913年2月だ、とする〔銭炳寰1992:128〕の文章によっているからだ）とある。1月1日以前に辞職したように書かれている。私もそう思ってきた。だから、1912年1月には商務印書館の社員ではない陸費達が、なぜ1月10日に発行されたことになっている『教育雑誌』第3年第10期に論文を2本も掲載しているのか、不思議に感じた。

しかし、考えてみれば、陸費達が何年の何月何日に商務印書館を辞職したのか、明確に示す資料を見たことがない。見たかもしれないが、おぼえていない。

あらためて調べてみると、はっきりしたことがわからない。

1912年1月1日に中華書局が創立されたとき、陸費達が社長となった。ここまではよろしい。ただし、これはもしかすると書類上の記載にすぎないものかもし

れない。なぜなら、中華書局の表立った具体的な活動は、もう少しあとに始まっているからだ。

銭炳寰「談談中華書局的創辦人」によると、中華書局の第1回株主会議は、1912年2月20日に開催されている[銭炳寰1992:128]。

この株主会議で決められたことは、創立者が営業主体となる、重大な案件は創立者会議（株式有限公司の理事会のようなもの）で決定する、などの事柄だった。

2月20日までは、新しい教科書の編集などで多忙をきわめた。新教科書の出版めどがついたところで会議をもったものだと予測する。

3月24日に第1回創立者会議を開催し、出席者は、沈継方（季芳）、陸費逵（伯鴻）、陳寅（協恭）、戴克敦（懋哉）、沈頤（朶山）だった。株式を2万5千元とすることを討論する。第2回創立者会議は、ずっと遅れて10月1日だという。

以上の動きを見てみると、陸費逵が商務印書館を辞職したのは、遅くともこの2月20日以前だと思う。1912年元旦に辞職しなくても、中華民国誕生に合せた教科書を秘密に編集しながら、商務印書館から給料をもらったほうがよからう。

2月以前のいつなのか、と絞り込むと1月25日までだと考える。『中華教育界』の創刊が1912年1月25日だからだ。驚いたことに、陸費逵は、この『中華教育界』創刊号に2本の文章を掲載している。掲載していることに驚いたのではない。その2本の文章というのが、前出『教育雑誌』3年第10期（1912.1.10 / 5.10再版）とまったく同じ題名で「謹んで民国教育総長へ告げる（敬告民国教育総長）」と「民国普通学制について（民国普通学制議）」なのである。ただし、『中華教育界』創刊号は、残念ながら読むことができない。日本での所蔵を知らないのだ。

ふたつの雑誌をくらべると、日付のうえでは『教育雑誌』のほうが1月10日で、『中華教育界』の同月25日よりも早いように見える。しかし、商務印書館の『教育雑誌』は、ずっとおくれて5月に出てくる再版本が、いわば正式な発行である。実際には『中華教育界』の方が読者の手には早く届いているはずだ。

新しく出現した『中華教育界』に陸費逵が2本の論文を掲載していることにより、彼が中華書局を創立したことが一般に知られることになる。

陸費逵が『教育雑誌』に論文を掲載したのは、その時はまだ商務印書館に勤務

していたからだ、とすると、陸費逵の商務印書館辞職は、1912年1月10日から25日の間ではないかと想像する。

中華書局側の記録

陳寅が「中華書局一年之回顧」を『中華教育界』民国2年1月号に掲載している[陳寅1913]。中華書局の設立を記録した正式な文書だということができる。

これによると、陸費逵が同志たちと中華書局を組織することを協議したのは、上海光復後の九月十六日(1911.11.6)だという。ただし、中華民国以前に「中華書局」という名称を決めて使ったということではない。とにかく名前の定まらない新しい出版社を組織し、とりあえず新しい教科書の編集を始めたはずだ。

民国元年元旦(1912.1.1)、臨時政府が成立すると同時に中華書局を創立、社長は陸費伯鴻(逵)、編集長に汪海秋(濤。のち戴懋哉<克敦>に交替)、陳寅が事務長という陣容である。

手回しよく『中華教育界』を創刊する。1月25日付の発行であるが、感覚からいうと中華民国が成立して即座に出てきた印象になるのではなかろうか。

該誌第1年第1号(1912.1.25)の「中華書局宣言書」において、「立国の根本は教育にある。教育の根本は実に教科書にある。教育を革命しなければ、国の基礎はついには固めることができない。教科書を革命しなければ、教育の目的はついに達することができないのである」とのべる。これが「教科書革命」である。そのスローガンは、次のようになっている。

- 一、中華共和国国民を養成する
- 二、人道主義、政治主義、軍国主義を採用する
- 三、実際教育を重視する
- 四、国粹と欧化を融和する

中華書局が新聞に広告した教科書は、当然ながら、以上のスローガンに沿ったものとなる。

『申報』紙上の教科書戦争

『申報』紙上でくりひろげられた商務印書館と中華書局の教科書戦争は、いきなり両者の激突から始まったわけではない。つばぜりあいともいうべき段階がある。まず、中華書局から口火を切った。

前哨戦 中華書局の場合

『申報』紙上によく掲載されていた商務印書館の広告は、中華民国成立後、パタリと掲載されなくなった。そのかわりに、突然といていいように出現したのが中華書局の教科書広告なのである。

1912年2月26日付『申報』に掲載された中華書局の広告は、ふたつにわけられている。「教科書革命」と大きく表示し、「革命」という文字が人目を引く。ふたつともに「中華初等／高等小学教科書」発売をいうのだが、その説明文が少し異なっているだけで基本的には同じものだ【図3-21】。似たような内容の広告がならべて掲載されているのも何か奇妙だ。奇妙だと思うように構成したというつもりか。

片方の広告は「教科書革命」の大文字の下に、「清の皇帝は退位し、民国は統一された。政治革命は成功したのである。今日最も急ぐのは教育革命である」と書かれている。部分ぶぶんを大活字で強調し、教育部の訓令を遵守し、独立自主、自由平等の精神で人道、実業、政治、軍国民の主義を採用し、完全共和国民を養成するのを目的とすると述べる。

もう一方の説明の冒頭は、こうだ。

「立国の根本は教育にある。教育の根本は教科書にある。教育を革命しなければ国の基礎はついには固めることができない。教科書を革命しなければ、教育の目的はついに達することができないのである。往時、異民族が国政に当り、政治体制は専制で束縛抑圧に全力を傾注していた。教科図書はきびしく支配され、自由真理共和大義がそこから注入されるはずがなかった……」先に示した「中華書局宣言書」と同文なのである。

掲げられた四つの項目は、(一) 中華共和国国民を養成する、(二) 人道主義、政治主義、軍国民主義を採用する、(三) 実際教育を重視する、(四) 国粹欧化

を融和する、という。

異民族が支配していた清朝時代において、大いに教科書を販売していたのが商務印書館であった。この中華書局の広告は、商務印書館と名指しこそしてはいないが、明らかに商務印書館を批判したものだということができる。

商務印書館の教科書編集と販売に大いに功績があったのが、ほかならぬ陸費逵である。中華書局の広告が意味しているのは、いわば、自分の仕事を自分で否定し、そればかりか競争相手攻撃の手段に使っているということだ。商務印書館側にしてみれば、これほど腹の立つことはないのではなからうか。教科書編集と販売で腕をふるった有能な社員とばかりに思っていた人物が、さあ、新しい時代に新しい教科書を作らんといかんな、期待してますよ、と（私は想像するのだが）いうやさきに、「あんたらはもう古い」とばかりに商務印書館をとびだしていったのだ。そればかりか、ぶつけてきたのが「教科書革命」と「完全華商自辦」である。商務印書館にとって自業自得とはいえ、危機感がつのるはずだ。

中華書局の教科書には、「中華」と頭に冠するのを特徴とする。「中華初等小学修身教科書」のごとくである。

会戦のまえぶれである。それほど露骨な広告でもない。また、「完全華商自辦」という言葉は見えない。

朱聯保編撰『近現代上海出版業印象記』に次のような箇所がある。「……日清戦争（原文：甲午中日戦争）後、中国の愛国主義者たちは、日本軍国主義に対して深い恨みをいだいた。商務（印書館）には、当時、日本資本がはいっていたから、中華（書局）は商務を攻撃するために、教育界と広範な人民の民族主義感情の高まりを利用し、全国の新聞に「中国人は中国人の教科書を使うべきだ」という大々的な広告を何度も掲載した。これも陸費逵、沈知方たちの策略であったのだ」[朱聯保1993:87]。「完全華商自辦」と同じく、「中国人は中国人の教科書を使うべきだ」という新聞広告も、まだ、目にすることができていない。課題としておく。

1912年3月3日付『申報』広告で、中華書局は、「共和宗旨教科書」が陽暦3月中には出そろうと宣言した。

3月18日付『申報』広告でも同じく、教育部訓令を遵守し共和宗旨教科書を編集した、という具合である。

兒童教育 人烟稠密 游戲無非 惡習而為 統計家燕 西洋諸國 法已能漸 部而尤以 以市內小 集合無識 學識授以 所行之方 除兒童聯 無關係者 二歲至十 之下以經 重遊海外

聲明查頌修假冒查二妙堂墨牌

本堂承祖傳秘製二妙堂墨牌... 凡我同胞如有假冒本堂墨牌者... 定必究不貸...

滬軍光復軍收欸清單... 凡我同胞如有假冒本堂墨牌者... 定必究不貸...

教科書革命

自由平等之精神探入道實業政治軍國民之主義程度適合內容宛期期養成完全共和國國民以植我民國基礎

中華初等小學修身教科書	每冊六分	中華初等小學國文教科書	每冊八分	中華初等小學算術教科書	每冊一角	中華初等小學歷史教科書	每冊一角	中華初等小學地理教科書	每冊一角	中華初等小學自然教科書	每冊一角	中華初等小學衛生教科書	每冊一角	中華初等小學公民教科書	每冊一角	中華初等小學勞作教科書	每冊一角	中華初等小學音樂教科書	每冊一角	中華初等小學美術教科書	每冊一角	中華初等小學體育教科書	每冊一角	中華初等小學軍事教科書	每冊一角	中華初等小學衛生教科書	每冊一角	中華初等小學公民教科書	每冊一角	中華初等小學勞作教科書	每冊一角	中華初等小學音樂教科書	每冊一角	中華初等小學美術教科書	每冊一角	中華初等小學體育教科書	每冊一角	中華初等小學軍事教科書	每冊一角
-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------

美生書館廣告

本館開設於馬路十八號... 凡我同胞如有假冒本堂墨牌者... 定必究不貸...

請買便宜貨

本莊於前年七月開辦... 凡我同胞如有假冒本堂墨牌者... 定必究不貸...

工商進黨本部廣告

本會係全國工商進黨本部... 凡我同胞如有假冒本堂墨牌者... 定必究不貸...

上海馬路四馬路東

中華書局

一方、商務印書館は、どうだったか。

商務印書館の場合

商務印書館は、中華民国成立後、新しい事態に急には対応することができなかった。

教科書改革の中心人物であった陸費逵が提出した改革案を、商務首脳は否定して来たのだ。ヘソを曲げた陸費逵は、会議では教科書を改める必要を故意に認めなかった。当時の首脳陣は、旧体制が続くものという予測のもとに、それまで通りの出版計画を維持していた。すなわち、新しい状況の出現を予期していないのだから、それに対する準備がなにもないのは当たり前だ。おまけに、その陸費逵は、商務印書館をとびだして中華書局を創立し、競争相手として出現する。

以上の理由から商務印書館は、状況の急変を目の当たりにしながらどうすることもできない。新しい教科書を急いで編集するにしても、時間がかかる。2月26日に中華書局が「教科書革命」をとなえて大々的に新聞広告をうったが、それに対して『申報』に広告を出したのが、遅れにおくれて4月12日のことだった。

当時の新聞は、第1面全体が広告頁になっている。1912年4月12日付『申報』第1面に「民国紀元 / 商務印書館発行所落成 / 大紀念 新編共和国教科書五折収価」という広告が掲載されている。5割引きで売るという。大きな文字でそれだけを強調する。説明文は、中の広告にある。

「……教科書に従事してすでに十年を越える……共和国教科書を編集するのに実際上の革新に注意をはらった……」などと説明し、従来の経験と実質的な革新を強調する。編集の要点として、自由平等、国粹、参政の普及、五族平等、博愛、尚武などなどの重視をうたっているのもたしかである。しかし、中華書局がくりひろげた広告の量と質に比較して、商務印書館は、守勢にまわっているのが、誰の目にも明らかだ。

商務印書館は、中華書局の「中華教科書」に対抗して「共和国教科書」と呼ぶのが特徴である。

商務印書館が大声で打ちだした対抗策が、なんと「半額」販売でしかなかった。中華書局に対する有効な手段を、当時、商務印書館首脳が持っていなかったこと

の証拠である。

事実、6月3日付『張元濟日記』には、印錫璋、夏瑞芳らと編訳所で新編教科書を半額で販売することを決定したことが書かれている[張元濟1981:2]。

鄭孝胥日記の1912年11月11日に、「……夜、張菊生の約束に出向き、中華書局に対抗するため初高等小学教科書の販路拡充について協議する」[鄭孝胥1993:1442]とある。値引きという小手先の対策では中華書局にかなわないことがようやくわかったのであろう。

商務印書館が半額販売を宣伝すれば、中華書局もそれに追随するのは当然だ。『中華教育界』民国2年2月号(1913.2.15)の広告には、「新制中華小学教科書半額販売」を宣伝している。

「共和国教科書」

本来ならば、ここで商務印書館と中華書局の発行した教科書を並べて比較対照してみたい。だが、残念ながら、現在、当時の教科書を見ることができないでいる。

以前、日本の書店で入手した商務印書館発行の教科書が数冊、たまたま手元にあるので、そのうちの1冊を紹介しておく【図3-22】。初版ではないから、そのころの姿をどの程度伝えているのかわからない。ないよりマシという参考程度であるのをご理解いただきたい。

書名は、『共和国教科書 新修身』である。表紙には書名のほかに、「教育部 審定 国民学校 春季始業 第一冊 学生用」「商務印書館発行」と表示される。奥付には、「中華民國元 / 十六年六 / 四月初 / 七七四版」「編纂者 武進沈頤 / 杭県戴克敦」「校訂者 長樂高鳳謙」「発行者 商務印書館」とある。石印。

七七四版というのは、誤植ではない。15年間にそれだけ増刷されたということだ。その印刷数の多さは、一般書籍とは桁が違う。教科書戦争に発展する原因のひとつでもある。

「一、本書は、共和国民の道徳を養成することを目的とする。独立自尊愛国群愛(他人を愛する)の諸義を重視する。……」にはじまる「新修身編輯大意」が2頁ある。家庭と学校における児童のあるべき姿、つまり編輯大意のことばを引

【圖3-22】

教育部審定

國民學校 春季始業 第一冊 學生用

共和國新修身

商務印書館發行

教育部審定

國民學校 春季始業 第一冊 學生用

共和國新修身

商務印書館發行

教育部審定

國民學校 春季始業 第一冊 學生用

共和國新修身

商務印書館發行

Republic Series
Ethical Readers
For Lower Elementary Schools For Two Semesters
Approved by the Board of Education
Commercial Press, Limited
All rights reserved.

中華民國元年十月十九日出版	中華民國元年十月十九日出版	中華民國元年十月十九日出版	中華民國元年十月十九日出版	中華民國元年十月十九日出版	中華民國元年十月十九日出版	中華民國元年十月十九日出版	中華民國元年十月十九日出版
---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------	---------------

第二課 敬師



春季始業新修身 第一冊
國民學校用

第一課 入學



共和國新修身 第一冊 目次

けば、「共和国民がそなえるべき道徳」を教えるのが目的だ。

目次が続いて本文「第一課入学」「第二課敬師」が第18課までわずか26頁という小冊子にすぎない。8冊で構成される。

第1課は、彩色がほどこされている。父親らしき複数の人物が、日本で現在でも見かける制服姿の小学生を引き連れて学校の建物に入っていき情景が描かれる。入り口には、国民学校と書かれた旗と五色の旗が掲げられている。

この教科書の特徴は、本文に一切説明の文章が使われていないことだ。教員用に教授法が対になって編集されていることがうたわれる。たしかに、説明文のない教科書には、教師用の解説書がなければ教えにくい。

この『共和国教科書 新修身』は、以前に発行していたものを民国になって、わずかな手直しをしただけの教科書だと想像する。清末に発行されていた商務印書館の修身教科書を見ていないので詳しくは言えないのだが、そう考える理由のひとつは、奥付の編纂者だ。沈頤、戴克敦はともに中華書局の創業者になっている。『共和国教科書 新修身』初版が発行された1912年6月には、すでに商務印書館には勤務していない。

勤務していないにもかかわらず編纂者として名前が出ているということは、清末に出版していた元本があったと考えられる。

たとえば、沈頤、戴克敦編纂、高鳳謙校訂『簡明修身教科書教授法』（上海・商務印書館1907.11-1909.6）という教員用の教科書がある[北京図書館1995:328]。

教授法は、児童用の教科書と対になっているものだから、『簡明修身教科書』があるはずなのだ。事実、1910年2月23日付『申報第二張』に掲載された広告「商務印書館/己酉出版/初等小学用書」のなかに、戴克敦、沈頤、陸費逵編『簡明修身教科書』が見える。これを元本にして、『共和国教科書 新修身』と改めたものだ。本文にもともと説明文がないのだから、全面的に書き換える必要はない。

商務印書館は、過去の遺産をうまく利用しているということができよう。ただし、ちょっとした手直しとはいっても、その発行は6月なのだから、中華書局の教科書よりもはるかに遅れをとっていることには変わりがない。

背景としての学制改革

中華民国成立後、教育制度が改められた。教科書は、国の教育方針にそって編集されることになる。商務印書館側が説明する当時の状況は、つぎのようなものだった。「辛亥革命で南京臨時政府が成立し、教育部が設立され、「普通教育暫行弁法」が發布された。5月、北京教育部が成立、すべての教科書で共和の主旨に合わないものは改正するよう通達があり、同年7月、教育部は臨時教育会議を召集し学制を改訂し、教科書の審査制を規定した。本館は、部章に照らして共和国教科書を編集した」（「商務印書館歴年出版小学教科書概況」1935.12。[商務印書館1981:附録]所収）

商務印書館が売りだした教科書には、「共和国教科書」の名称が頭につく。「共和国教科書新修身」、「共和国教科書新国文」といったぐあいだ。「新」が挿入されてはいるが、その中身は清朝時代の教科書を手直したものであったことはすでに述べた。

変更された学制で、商務印書館と中華書局の教科書戦争に関連する部分について見ておく。ふたつある。

ひとつは、教科書については、教育部による審査が必要になったことだ（1912.9.13「審定教科用図書規程」[張静廬1954a:411]）。

璩鑫圭、唐良炎編『中国近代教育史資料匯編 学制演变』（上海教育出版社1991.3.655頁）所収の「教育部公布小学校令」第16条（1912.9.28）では、省図書審査会が選定するとなっている。

もうひとつは、それまでの2学期制が改められて3学期制に変更されたことだ[陳寅1913]。

商務印書館の教科書は、もともと2学期用に編纂されていた。清朝時代がそうだったのだからしかたがない。しかし、新しく3学期制に変わると、前時代をひきずったままの教科書なのだから急にはそれに対応できない。その弱点を突いたのが中華書局なのだ。

陸費逵は、商務印書館において教科書販売に辣腕をふるっていた人物である。商務印書館の内部事情には詳しい。そういう人物が、敵にまわって商務印書館を攻撃するのだから、商務にしてみれば往生するのも無理はない。

実録教科書戦争

商務印書館と中華書局の教科書戦争は、表面に姿をあらわしている部分とそうでない部分とがある。教科書をいかにして販売しているのか、どのように採用を働きかけているのか、現場の状況についてはそれを伝える資料が出てこない。これが隠れた実態なのだ。文献だけではこの隠蔽された実態を探ることが困難だ。

実態を背景にして表面に浮き上がる部分があり、それが『申報』の第1面を舞台にくりひろげられた教科書の宣伝合戦である。本論であつまっているのは、この表面に出てきている部分であることをお断わりしておく。

宣伝合戦といっても、両書店が相手を無視して独自に広告を發表するという単なる宣伝ではない。論争のかたちをとっているのが特異である。

商務印書館が教科書の宣伝をすると、中華書局がそれに噛みつく。さらに商務印書館が反論する、というやりとりが数回つづいた。水面下でくりひろげられている苛烈な教科書販売戦争を想像させるのに十分な論争なのだ。

典型的な例を、1913年8月11日の『申報』に見ることができる。

第1回 両社の衝突

『申報』第1面上段に商務印書館の、下段に中華書局の広告がある。

商務印書館の広告からはじめる。

大見出しは、「新編三学期／共和国教科書／秋季始業用本」という。初等小学に「新修身」「新国文」など4種類、それぞれに教授法と組みになっていて合計8種類の教科書名と冊数、定価が明示される。高等小学のほうは7種類（新算術が重複しているが、価格が異なっているので2種類とする）だが、同じく教科書と教授法に分かれているから合計14種類になる。初等小学の「新算術」「新算術教授法」の2種類を除いて、あとはすべて「教育部審定」の表示がついている。

問題となるのは、商務印書館による説明文だ。

「本館の編集する秋季始業共和国教科書は、新しい規定である3学期を遵守しておりますが、やはり毎年2冊に分けて編纂しています。第1学期は1冊で、第23学期は合わせて1冊です。購買者は、2冊の費用を出すだけで3冊分を得る

ことができます」とのべる。さらに、安い、きれい、審査済み、教授法教科書の充実と4大特色をあげる。

2冊分の費用で3冊分が購入できる、というのには笑ってしまう。清朝時代の2冊をむりやり3学期用に流用していることがあからさまなのである。商務印書館が苦し紛れに打ちだした方法なのであろうが、中華書局は、その弱点を攻撃した。

中華書局は、商務印書館の広告と同一紙面において、「新規定を遵守し学校運営を行なっている諸君へ」と題する長文の説明文をかかげる。「 」を用いて伏せ字にしてあるのは、原文のままである。

「 書館は、3学期の書を論じて毎学年の2冊の費用のほうが安く、3冊の費用が高い……などと言っている。新規定を遵守して編集した本は、かの会社は毎学年2冊で、弊社は毎学年3冊だ。(教育部は每学期1冊のほうが利用者には便利だと裁決している)かの会社は冊数のみを論じているが、しかし、新規定の編成に照らせば3冊が適当なのだ。かの会社の秋季始業 国教科書は、旧本を分割合成して成ったもので、相変わらず2冊にわけているが分量にふぞろいがあり新規定に合致していないのだ」という。つづけて、中華書局は、時間数、教材文の数、頁数など細かい数字を挙げて説明しているが、煩雑になるのでここでは省略する。

最初の は、商務印書館を、次の は、共和国教科書を指しているのは、誰でも瞬時に理解する。中華書局は、商務印書館が新規定を守っていない、規定違反であることを強調する。

商務印書館の反論

1913年8月14日には、商務印書館からの反論「声明(原文:商務印書館登報声明)」と、その隣りあわせの場所に昨日と同一の中華書局の広告が出現している【図3-23】。

商務印書館は、まず、中華書局が、最近、秋季始業共和国教科書について大いに罵る広告を出しているが、無用の紛争をするつもりはない、と前置する。中華書局が「 」を使用しているところに商務印書館が自ら名乗り出るのだから、商

務印書館はよほど腹にすえかねたのだ。もっとも、中華書局は、誰にもわかるように「 」を使ってはいるのだが。

学期制と教科書の冊数の不一致という弱点を指摘された商務印書館は、「秋季共和(国教科)書は、教育部の完全なる審査を経ている」ことを強調して中華書局への反論とする。さらには、両書店の教科書を頁当たり価格がいくらになるのかわざわざ計算して比較までしている。商務印書館は、頁当たり1厘62、中華書局のは2厘33というわけなのだ。

商務印書館が反撃に転じている箇所があり、これが新しい展開といえばそうなる。いわく、「本館の印刷所は従業員1,500余人を有し、カラー印刷、3色印刷、石印、活版など各種大小機器の百数十台で出版書籍は自社印刷である。しかるに、かの会社は印刷機をわずかに十余台しか所有せず、その書籍は多くがほかの会社に委託して印刷してもらっている」などなど。商務印書館がいいたいのは、自分の印刷所で印刷しているのだから、きれいで品質がよろしい、ということだ。中華書局が怒らないはずがない。

中華書局の反論

1913年8月15日、中華書局の反論である。「中華書局は、商務印書館の声明に答える」というのが題名だ。

商務印書館は「大ボラを吹いている」と中華書局は、箇条書きにする。1. 秋季共和国教科書の課数には出入りがあり、教育部の規則に合致しない、2. 秋季共和国教科書は、旧本を分割してできた本で、用を足さないのは確実だ、3. 底面は、多くは単頁だ(意味不明)、4. 字形が小さすぎると教育部は却下している。

商務印書館が旧本を元にしていう指摘は、事実だ。活字が小さすぎるというのは、内部事情に詳しくなければ言いだせない。

委託印刷について中華書局は、反撃する。商務印書館は、すべて自社印刷とするが、文新、天宝、錦章、中華図書館公記などの印刷所は、共和国教科書を印刷しているのではないが。商務印書館は、もっぱら手を抜き材料をごまかしている。職員、印刷機の数多さを自慢するが、それほどの数があるわけではない。などなど。反論は、ますます細かい部分に及んでいる。今回の反論で新しいのは、

「本社の教科書は、国恥と租借割譲地についての国民教育を重視する。あの館には憚るところがあるようだが賠償について庚子の4万5千万両^{ママ}だけを言い、甲午の2万3千万両^{ママ}を言わない、というようなことはしない」という箇所だ。義和団事件の4億5千万両には言及するが、日清戦争の2億3千万両を無視するという。商務印書館には日本資本が入っているから、日清戦争について述べるのをはばかっているのだ、と中華書局はあてこすっている。中華書局も、商務印書館は日中合弁会社だ、と直接いえばいいようなものの、もってまわった言い方をしたものだ。あまりに遠回しで一般の人々に理解されたかどうか不明である。ただし、言われた商務印書館自身は、敏感に反応する。

商務印書館の反論2回目

翌8月16日、すかさず商務印書館の2回目の声明が掲げられた。「共和国教科書/全数審定」と題する教科書の書目に続いて、声明文が並列される。そのおおよそは、つぎのようだ。

共和本が庚子賠償だけを言い、甲午賠償をいわないのは本社編集同人が国恥を忘れていようで弁解しないわけにはいかない。前の最新国文では土地割譲と賠償について詳細に述べているし、共和本は分量がすくないが触れている。詳しくは教授法のなかで甲午の賠償を説明している。本館の共和本は、外交の失敗をつづけて3課にわたって叙述しているが、あの会社は、租借割譲地の1課があるだけだ、と。

教科書の冊数から印刷へ、その内容へと論題が徐々に細かい内容にまでおよぶこととなった。

中華書局の反論2回目

8月17、19、21日の3日間に中華書局の再度の反論(3日とも同内容)が掲載されてこの教科書論争は終了する。

短い再反論である。焦点は、日清戦争(甲午1894)と義和団事件(庚子1900)の賠償金に関してのものとなっている。「甲午庚子の賠償について該館は、たしかに4万5千万両^{ママ}といっているにすぎず、2万3千万両^{ママ}とは言わない。また、4万^{ママ}

5千万両の5千という2文字が落ちており、憚るところがもしないのならば、なぜ詳細と簡略のふたつにわけるのであろうか」

中華書局は、商務印書館が日本と関連を持っているがために日清戦争の賠償金について触れないのだとあくまでも言いたいのである。

商務印書館に以前勤務していた陸費達たちが、その内部事情を熟知している古巣を攻撃するのだ。中華書局が圧倒的優位に立っていることは誰の目にも明らかだ。

以上の非難合戦を目にした鄭孝胥は、8月15日付日記に「商務印書館と中華書局が、教科書売り込みのために新聞紙上で互いに中傷しあう。……」[鄭孝胥1993:1479-1480]と記述している。当時、鄭孝胥は、商務印書館の理事を勤めていた。一方の当事者であるにもかかわらず、日記の記述は他人事のようなのだ。鄭孝胥だけが知らされていなかったのか。理事会全体が関知しないところで教科書戦争が行なわれたはずはないと思うのだ。

16 商務印書館が日本資本回収を決断する

1913年8月以降、商務印書館は、新聞紙上で中華書局の挑発に答えなくなった。その理由は、想像するに、商務印書館の日本資本回収の動きと関係がある。

鄭孝胥日記によると、商務印書館首脳が金港堂との合弁解消を議論しはじめたのは、1913年1月4日のことである。同年9月、夏瑞芳と長尾雨山が、日本株回収のために日本に赴いたが、金港堂に拒否された。その後、金港堂側は、金額が折りあえば回収に応じると態度を変え、1913年11月に福間甲松を上海に派遣し商務印書館との交渉に応じた。日本人が保有する株を何元に評価するかの会議が、幾度もねばり強く開かれた。最終的に1株 = 146.5円で両社ともに同意し、1914年1月6日、調印を終わる[樽本照雄1995g]。

以上の経過が背景としてあったため商務印書館の中華書局への反論は停止したのであろう。

商務印書館の精神的苦しみ

1914年に日本資本を回収して、商務印書館は、約10年間つづいた合弁関係に終止符をうった。日本株回収のあと、1914年1月31日に開催された特別株主大会において、日本資本を回収をすることになったいくつかの原因が報告されている。これこそが「商務印書館特別株主大会理事会報告」である。

この報告書は、商務印書館みずからが公表し認めているという点で貴重な資料だということができよう。内部資料であった。特別株主大会が開催されたことは、当時の新聞などで私は確認したことがある。しかし、報告書そのものの存在は知られていなかった。

汪家熔から中文ワープロで印刷した報告書をいただいたのが1993年のことだった。同年7月1日付『清末小説から』第30号にワープロ原稿を影印したのが、この世に出た最初である。約80年間ものあいだ公開されていなかった資料ということになる。中国大陸では、汪家熔が、みずからの論文のなかで該報告を公表した。

あまりにも珍しい資料なので関係部分を翻訳して引用したい。便宜上改行し、まるカッコつきの数字をつけて説明する。

.....同業者との競争が激しくなると、本社の外国資本が常に口実とされ、中傷排除がはなはだしくなり、そのため本社は妨害をおおいに受けたのである。

すなわち前の清朝学部が中学の書籍を編集し、印刷請け負いの発注に本社のみが参加させられなかったが、日本資本が入っているのが理由だという。近年来、競争はますます激しくなっている。

たとえば、江西では広告を掲載して勝手ほうだいに攻撃しているし、

湖南では多数の学界が、中国資本自営の某会社の図書を紹介し、

湖北の審査会は本社に日本資本が入っているというので本を差し押さえて審査させなかった。

このようなことは少なくないし、そのおおよそを挙げたにすぎない。攻撃を受けるたびに、責任者は手をまわして無数の対応をしなければならず、精神上の苦痛はたとえようもなかった。ゆえに理事会で決議し日本資本を回収することにした[商務印書館1993:14-15][汪家熔1993]

「本社の外国資本」というのは、金港堂関係者を中心とした日本資本という意味だ。日本人以外からの外国投資はなかった。

商務印書館は、1903年末から日本資本との合弁会社であったが、その事実を公表しようとはしなかった。しかし、どこからか秘密が漏れていた。報告のなかのから、清朝時代から知るひとはしっていたことがわかる。

以下は、辛亥革命以降のことだと推測する。

の江西とは、遠隔地である。都会ではもっと攻撃が激しかったと想像ができる。

教科書の選定採用は、省図書審査会が行なった。「中国資本自営の某公司」とは、中華書局のことだと考えて間違いなからう。紹介されなければ選定される可能性がなくなる。

もと同じく審査選定の対象にされなかった、いわば門前払いをくわされたということだ。

商務印書館と金港堂の約10年にわたる合弁は、うまく運営されていたということが出来る。合弁の両社ともに大きな利益をあげた事実がある[樽本照雄1995f]。経済的には非常に成功していた。しかし、精神上は商務印書館にとって大きな負担であったことが、上の理事会報告で理解できよう[樽本照雄1995d]。

『申報』紙上でくりひろげられた教科書戦争は、過去においてつづいた商務印書館排除の動きの最後を飾るものであった。

17 合弁解消の経緯

合弁解消の大筋は、こうだ。

辛亥革命後、商務印書館に日本資本が入っていることを理由に攻撃されることが多くなった。教科書の審査からはずされるなど実際の妨害もあった。精神的な圧迫に耐えきれず、日本人所有の株を買い戻すことにした。

注意を喚起しておきたいのだが、商務印書館が金港堂との合弁を打ち切ること

にした原因は、主として政治的なものであったことだ。日中合併企業として社会的に後ろ指をさされる精神的な苦痛が、合併解消の理由だ。ただ、それが経済的な原因にもつながることはある。経済的要因についてもうひとついえば、商務印書館は、すでに経済的には自立していたということはできよう。合併による利益はあがっていた。株式配当は、年平均して2割以上あったのだ。

さらに理由をあげるとすれば、専門知識の蓄積である。合併の10年間で、書籍の編集印刷出版発行に関する専門知識を金港堂から十分に吸収してしまった。金港堂なしでも、独力でやっていけると夏瑞芳は判断したのではなかろうか。金港堂に呑み込まれるのではないかという合併前の恐怖は、夏瑞芳をはじめとする商務印書館首脳にとって心の傷となっていた。しかし、10年を経て心の傷を抑圧する一方で、言葉は悪いが、金港堂の利用価値はなくなったとの結論に夏瑞芳が到達したとしても不思議ではない。合併を解消して独自に経営することの自信が、夏瑞芳にはすでに生じていた。これが、冷酷ではあるが普通の企業の論理だろう。

商務印書館において、日本株回収の論議がはじめて起こったのは1913年1月4日のことだ。『鄭孝胥日記』が当事者の記録として信頼性が高い。これによってこまかい経緯を追跡してみよう。

民国の商務印書館理事会

1912年6月7日、鄭孝胥のもとに商務印書館から辛亥の決算報告が送られてきた[鄭孝胥1993:1419]。あくる8日に株主会が開催され、鄭孝胥は代理人を遣る[鄭孝胥1993:1419]。この会議では理事に、鮑咸昌、印錫璋、張元濟、夏瑞芳、鄭孝胥、王之仁、奚伯綬の7名を選出している[張樹年1991:105]。

鄭孝胥は、最初、理事になることをしづった。「清朝の遺老」としては、しばらく社会活動から身を遠ざけたかったのではないかと想像する。事実、蟄居といってもいいくらいに自宅から出ていない。しかし、夏瑞芳と張元濟の説得を受け、毎日3時間だけ商務印書館で仕事することを承諾した。交通費は月に百両である[鄭孝胥1993:1422]。7月2日の商務印書館理事会に出席したが、鄭孝胥が上海に到着して以来、市内に足をはこんだのは八ヵ月ぶりだ[鄭孝胥1993:1422]。翌3日より鄭孝胥の商務印書館出勤がはじまった。日曜日のみを休み、毎日の商務印

書館通いである。

鄭孝胥が商務印書館理事会主席をつとめていたことに触れたことがある。もつづいた資料には「1912年6月-1913年5月 主席 鄭孝胥」[汪家燊1982b:20]と書かれている。しかし、鄭孝胥日記の記述と照らし合わせると、鄭孝胥は、7月2日の理事会で主席に選出されていなければならない。6月8日の株主会で理事を選び、そののちの理事会で互選をするというのが商務印書館のやり方だったはずだからだ。つまり、「1912年6月」ではなく、「1912年7月2日」である。細かいことだがひとこと述べておく。

7月31日の日記には、張継、胡漢民、熊希齡、于右任、汪兆銘らが民立圖書公司を創設し、株を百万集め、編訳、印刷のふたつがすでに成立している、商務印書館の強敵である、とわざわざ書いている[鄭孝胥1993:1426]。中華民国成立後、新しい出版社が生まれてくるのは、時代の要請に従ったものだ。中華書局もそのなかのひとつだった。

「弱味」をつくのが攻撃の基本である。おまけに、その「弱味」を熟知している人物が攻撃の指揮をとっているわけだからこれ以上強力なことはない。

中華書局が提出した標語のひとつが、「完全華商自辦」であることはすでに述べた。完全な中国資本という意味は、外国、この場合は日本の資本が入っていません、ということにほかならない。隠してもあらわれるのは常のことだ。商務印書館の理事が把握している事実として、辛亥革命後には、江西で広告に掲載して攻撃してきた、湖南では多数の学界が中国資本の某会社の圖書を紹介した、湖北では日本の株が入っているという理由で教科書を審査することを拒否した、などがある。攻撃があるたびに事態の收拾におおわらわとなり、精神上的苦痛がはなはだしい。そればかりか、防御に専念すれば、商売に影響しはじめる。これが金港堂との合弁を解消する大きな理由となった。それを決意させた経済的理由も存在する。1913年の段階で、日本人株はすでに全体の4分の1にまで低下していた[商務印書館1993:14]。合弁最初の出資が五分五分であったのだから大幅な不均衡が生じていたということができる。

それでは、商務印書館が金港堂との合弁をやめることを決定したのは、いつなのか。

日本人持ち株の回収

鄭孝胥日記によると、1913年1月4日から合弁解消の議論が始まる（『張元濟年譜』の1912年の項目には、この年から株の回収を金港堂と交渉しはじめる、とあるが鄭孝胥日記と合致しない[張樹年1991:103]）。

1913.1.4

……（商務）印書館へ行く。夜、日本人株券を買い戻すことを論議したが、余は都合が悪いと考える（原文：余以為不便）[鄭孝胥1993:1448]

鄭孝胥が、どういう理由でよくないというのか、その説明はない。1月4日の会議は、3日後に開催される理事会の下相談だったのかもしれないが、肝心の理事会は、人数が足らず開かれなかった。

日本株の回収は、機密を要する事だったので、株主会を召集すべきだったが、理事会が責任をもって決議した、という意味の報告がある[商務印書館1993]。

そうすると、鄭孝胥日記に見える2ヵ月後の3月4日に開かれた理事会[鄭孝胥1993:1456]において、日本株回収の決議がなされたと推測される。しかし、鄭孝胥は、その理事会の内容について記述していないので確認ができない。

4月19日には株主会がもたれ、鄭孝胥は理事会主席の資格で前年度の営業報告を行ない、拡充案を提出している[鄭孝胥1993:1461]。金港堂との合弁解消については、前述の通りだとすると秘密条項だからという理由でたぶん報告しなかったのだろう。この時選出された理事は、鄭孝胥、鮑咸昌、印有模（錫璋）、張元濟、葉景葵、伍廷芳、夏瑞芳だ[張樹年1991:112]。

5月6日の理事会では、鄭孝胥から伍秩庸（廷芳）に主席を交代している[鄭孝胥1993:1462]。

鄭孝胥日記に日本株回収の記述がふたたび現われるのは、1月から数えて8ヵ月も経過した9月のことになる。

以前、夏瑞芳の給料を増額するために日本側株主に報告書を出すことがあった。給料で報告がいるくらいなら、ましてや日本株を購入して合弁を解消するという

ような重大案件は、上海在住の日本人の裁量には含まれていないのは当然だと考えていい。だいいち、創業以来守られていた中国側2名、日本側2名の理事制度は、1909年4月15日をもって日本側の理事を排除し、中国人だけ7名の理事会になっている。商務印書館の理事会が合併解消をいくら決議しようとも、相手のあることでもあり、最終的には金港堂側と交渉をしなければならない。

1913.9.10

.....夏瑞芳が日本株を購入することを協議するため長尾と東京へ赴くことになる。.....[鄭孝胥1993:1482]

長尾雨山は、上海に滞在したきりで1度も日本には帰国したことがなかったのかと思えば、そうではないようだ。夏瑞芳の案内役となったと考えられる。

1913.9.11

.....(商務)印書館へ行くと、(張)菊生が憤慨していう。「日本人はあまりにも道理をわきまえない。日本株を回収しないわけにはいかない」[鄭孝胥1993:1483]

張元済がなぜこんなに怒っているのか。ここでいう日本人とは誰のことなのだろうか。具体的な名前があがっていないところを見ると、漠然としたものだろうか。鄭孝胥は前日の日記に、日本海軍第三艦隊が長江を封鎖することを聞いたと書いている。張元済の怒りは、この事に関連しているのかもしれない。商務印書館首脳に日本株回収を決意させるいくつかの要因のひとつになる。

1913.9.27

.....(商務)印書館へ行く。夏瑞芳が日本から帰っていて、日本の株主は株を売るつもりがないという[鄭孝胥1993:1484]

夏瑞芳らの日本滞在は、約2週間になる。金港堂が商務印書館との合併話をま

とめたのが、夏瑞芳と原亮三郎、山本条太郎である。当然、今回もこの3者が顔をあわせたのだと思う。夏瑞芳は、合弁解消にいたる商務印書館側の状況を説明したはずだ。ただし、金港堂との交渉にのぞんで、夏瑞芳がどういう条件を準備していたのか、まずこれがわからない。合弁解消を申し込めば、金港堂側はただちに受け入れてくれるとでも思ったのだろうか。鄭孝胥日記には、合弁を解消すると決議をしたとあるだけでその条件には触れていない。合弁の契約書が出てこないのも理解しがたい。わざわざ夏瑞芳が日本にまで出向いて交渉したにもかかわらず、簡単に株の売却を拒否されているところを見ると、私の考えでは、商務印書館と金港堂の合弁には、解消するときの条項が定められていなかったのではないか。もしそうであるならば、もめるはずだ。

1913.11.12

.....(商務)印書館理事会に赴き、日本株40万を回収し、4期に分けて支払うことを相談する。.....[鄭孝胥1993:1490]

金港堂側は、1913年11月に福間甲松を上海に派遣し交渉に当たらせている。日本と連絡を取りながらの交渉なのだ。しかし、金港堂が代理人を派遣したという事実は、株回収に応じるということの意味している。そうでなければ派遣する理由がない。夏瑞芳がわざわざ日本にきたのに株回収を拒否した金港堂だったが、方針が変更されたようだ。「40万」という数字は、商務印書館の総株数のうち3,781株が日本のもので、1株を100円で計算すると37万8,100元になるところから出てくるものだ[樽本照雄1995b]。

1913.12.26

.....夏瑞芳に会い、日本株買収のことを話す。.....[鄭孝胥1993:1495]

1914.1.2

.....夕方、(商務)印書館理事会に赴き、日本株を回収することを協議する。総額54万余元、まず半分を支払い、残りは6ヵ月を期限とする[鄭孝胥1993:1496]

20日前の日記には、「40万」とあった金額が、いつのまにか「54万余元」に変化している。これが、福間甲松との交渉によるものに違いない。つまり、日本側の持つ3,781株を1株あたり何元に評価をするかが、主要な問題となっているのだ。

1月6日に最終決定を見て、1株 = 146.5元となった。合計55万3,916.5元である[樽本照雄1993c:44]。1月2日当日よりも約1万元も多くなっている。これは何を意味するかというと、1月2日では、1株 = 143元くらいで交渉していたのだ。これで54万0,683元となって鄭孝胥のいう「54万余元」にほぼ等しい。それをギリギリまで交渉し、日本側は、さらに3.5元を上乗せさせたと想像できる。福間甲松は、最後までねばった。

1914.1.7

.....商務印書館理事会に行く。日本株を回収することは昨日調印をして、27万余両を支払う。正月三十一日に臨時株主会を開催する。.....[鄭孝胥1993:1497]

理事たち関係者全員が集まって調印をしたのではないことが分かる。すると商務印書館は夏瑞芳が、金港堂は福間甲松が出席したのだと考えられる。文中にいう「正月三十一日」は、陰暦ではなく陽暦であるから注意されたい。

1月10日、夏瑞芳が、銃で撃たれ死去した。翌11日、緊急理事会が開かれ、印錫璋が社長に選ばれる。

夏瑞芳の死は、金港堂との合弁解消とは関係がない。しかし、金港堂との合弁を決意し、また、その合弁をやめることをも決断した夏瑞芳が、合弁解消調印のわずか4日後に殺されようとは、誰も想像しなかったことだ。

1月31日、株主特別会が開催され、日本株回収の経過が鄭孝胥によって報告される。こうして10年にわたる商務印書館と金港堂の合弁は終了した。

金港堂の事情

商務印書館が金港堂に合併解消を申し込んだとき、いったんは断られている。夏瑞芳が、わざわざ日本に赴いているにもかかわらずだ。それが1913年9月末のことだった。ところが、鄭孝胥日記によると11月にはすでに日本株回収の合意ができています。まことに急な展開だというべきだ。

金港堂はなぜ最終的に合併解消に応じたのか。

稲岡勝論文によると、金港堂側にまとまった金を必要とする事情があったのだろうという推測である。ひとつは、赤字経営の穴埋め、もうひとつは娘婿山本条太郎への資金援助という[稲岡勝1996:31]。

赤字経営の穴埋めだけならば、商務印書館からの最初の申し出をなぜ断ったのが不明になる。利益をあげていた合併事業だから金港堂の方から手を引くなどは、考えられない。もっとも、つぎの山本条太郎への資金援助とあわせてみれば状況が変化する。対中国投資の合併会社中日実業を創立することに充当したのかも知れない、という稲岡勝論文の推測だ。ふたつを合わせてまとまった資金が必要になった、とすれば、それまでの態度を急変させ、合併解消、持ち株の評価交渉に入ったのも理解ができる。

18 株と資産の評価

日本資本回収

日本資本回収にあたり、商務印書館が支払った金額については、朱蔚伯論文が詳しい。

1913年末で資本総額150万元、そのうち日本株の55万3,916.5元を返還することに決定した。

支払いは、1914年1月6日と6月30日の2回分割払い。商務印書館負担の利息が4,370元。為替差額1万4,477.5元。経費2,769.58元。合計2万1,617.08元。さらに支払い遅延利息が1万2,464元。あれこれをすべて合計すると、約58万8,000元になったという[朱蔚伯1981:150-151]。

端数までこまかく述べられているから、朱蔚伯は、商務印書館の館内資料に基

づいて執筆していることがわかる。

ところが、汪家熔論文では、次のようになっていて数字が揺れ動くのだ。

文献1：当時の総資産は150万円。日本資本は、その25.2%で、資本金の21%を上積みする、金額にして8万円近く。合計45万円である[汪家熔1985:157]

与えられた数字をもとに計算する。150万円の25.2%は、37万8,000元となる。これに8万円を加算すると、合計45万8,000元だ。

文献2：日本側の持ち株は37万8,100円で、総額の25.2%を占めていた。その他に利益の16.5%、総計8万円を積み上げることに決定した[汪家熔1991:70]

同じく計算してみよう。37万8,100元が総額の25.2%であるならば、資本総額は、約150万円となって王雲五、朱蔚伯の証言と同じになる。こちらでは、利益の16.5%とあって文献1の21%とは食い違うのだが、どういうわけか金額にすると同じになる積み上げ金8万円を加える。結局、商務印書館が金港堂に支払ったのは、45万8,100元となった。

文献3：日本の持ち株は25.2%。出資金総額は、37万8,100元。33%の値上がりがあり、それを金額になおすと12万4,000元余りである[汪家熔1992a:654]

計算する。こちらには、上積み金の8万円はない。33%の値上がりは、計算すると12万4,773元だ。37万8,100元に12万4,773元を加算すると、50万2,873元となる。

文献1で45万円、文献2では45万8,100元、文献3の50万2,873元という金額があらわれる[樽本照雄1993c:43-44]。同一人物の文章で、これほど金額が変化するのも不思議だ。汪家熔は、論文のなかで自らが提出した数字について妥当であったかどうかに触れない。新しい数字を出して前説を訂正したつもりなのだ。すなわち、最近提出した50万2,873元が正しいと考えているのだろう。

朱蔚伯のいう約58万8,000元とくらべると、汪家熔の数字は、約8万5,000元から13万8,000元の差がある。朱蔚伯、汪家熔ともに資料にもとづいているはずなのだが、なぜ一致しないのか。朱蔚伯の利用できた資料が、汪家熔の時代には紛失してしまったという可能性は高い。汪家熔の記述がユレる原因のひとつは、汪家熔が朱蔚伯論文を見ていないことによるのであろうか。汪家熔論文には、朱蔚伯からの引用が少ないところから、私はそのように推測する。ゆえにいろいろな

数字がでてくるのもしかたがない。

最後に、決定的な資料を引用しよう。

文献4：「商務印書館特別株主大会理事会報告（原題：民国三年一月三十一日非常
股東大会董事会報告）」【附録1】[商務印書館1993][汪家燊1993]

1914年1月31日の特別株主大会理事会報告であることはすでに述べた。

それによると以下のようなものである（関連部分のみについて紹介する）。

1913年、日本人の所有株は3,781株で全体の4分の1であった。日本の株主は商務印書館に干渉することはまったくなく、問題が生じると協力して対処しないことはなかった。ところが、同業者との競争が激しくなり、商務印書館に日本資本が入っていることを理由に、印刷の受注からはずされたり、あからさまに攻撃されたり、教科書の審査から排除されたりした。精神上的苦痛たえがたく、理事会で決議して日本資本を回収することにした。夏瑞芳が日本におもむき協議し、1913年11月には福間甲松氏が上海に来て交渉を開始した。

日本の株主がいうには、民国2年の営業は約280万元にのぼり、元年よりも約100万元が増加している。1株につき配当利益は、3割前後、元利合計130円でなければならない。ただ、編集原稿料の80、90万元は、わずか2万元にしか（金港堂側が）評価しておらず、工場の建物、機器の原価68万元も35万元にしか評価していない。ブランドの信用もその価値はとりわけ巨大である。日本の株主が株を手放せば、これらの利益はすべて中国人の所有となる。増額を要求する、と。十数回の協議をへて、1株について16.5元を加える。一切の雑費は、株の利息で相殺し、合計約8万元あまりとなる。民国3年1月6日に調印し、先に半額を支払い、残りは6ヵ月以内に返済する。

以上は、商務印書館理事会の報告なのだ。重視しないわけにはいかない。

日本側の持ち株が3,781株というのが基本である。汪家燊は、「日本側の持ち株は37万8,100元」（文献1、2）と書いているが、別に誤りではない。1株=100元とすれば、そうなる。

日本側の要求は、最初が1株=130元であった。協議のすえ16.5元を上乗せし、最終的には1株=146.5元に決着した。これが3,781株だから、総計55万3,916.5

元である。朱蔚伯証言の基本数字と端数までが一致する。

雑費に約8万元、これを加えると約63万3,916.5元となる。そうすると、これまた朱蔚伯、汪家熔と違った数字になってしまう。

鄭孝胥のいう54万余元、朱蔚伯が計算する約58万8,200元、汪家熔が提出する3種類の数字、すなわち45万元、45万8,100元、50万2,873元、および商務印書館理事会報告の約63万3,916.5元、という合計6種類の数字が出てくる。

私は、商務印書館理事会報告の数字「約63万3,916.5元」を支持する。直接の担当者の公式報告であるからだ。

いずれにしても巨額な出費に違いない。しかし、日本資本をしりぞけ「完全華商」をうたうためには、商務印書館にとってはどうしても支払わねばならない代価であったのだ。

1914年1月2日には1株 = 143元くらいで交渉していたのが、1月6日に1株 = 146.5元で最終的に決着した。株価については、福間甲松のねばり勝ちであろう。

特別株主大会での理事会報告では、「編集原稿料の80、90万元は、わずか2万元にしか（金港堂側が）評価しておらず、工場の建物、機器の原価68万元も35万元にしか評価していない。ブランドの信用もその価値はとりわけ巨大である。日本の株主が株を手放せば、これらの利益はすべて中国人の所有となる。増額を要求する」[商務印書館1993:14]と述べる。

注目されるのは、「工場の建物、機器の原価68万元」の部分だ。合弁後に建設した建物、購入した機器もあるだろうが、このなかに合弁前に建設された印刷所も入っているのではないか。合弁の時、商務印書館側は建物など不動産についての評価をしていないこととあわせて考えると、1903年正式合弁以前に金港堂から商務印書館に資金が流れていた証拠となる。

私が不思議に思うのは、編集原稿料、工場の建物、機器についての扱いについてである。合弁期間中の有形無形の資産は、日中両者の相談でどうなったのだろうか。福間は株価増額の根拠にあげているようだが、株とは別に資産のある部分は当然金港堂のものだと要求してもよかったと思うのだ。

商務印書館理事会の完全勝利宣言

どう考えても不可解だからくりかえす。

商務印書館が開業して18年間になるが、編集原稿料は80、90万元のところを、わずか2万元余だと金港堂が考えている箇所だ。家屋機械の原価68万元を、わずか35万元に査定している（日本股東又以本公司開業十八年，編輯稿費八九十万元，僅作二万余元；廠屋機器原価六十八万元，僅作三十五万元）[商務印書館1993]。「日本股東」が全体の主語だから、「僅作二万余元」「僅作三十五万元」の主体も日本の株主となろう。

この文章は、奇妙だ。商務印書館の創業以来の編集原稿料と家屋の資産評価をしてもはじまらない。普通は、そう考える。だが、合併以前のものを評価しているところから、金港堂から前倒して資金が商務印書館に流れていたという推測になる。どのみちおどろくのは、本来あるはずの資産価値を、金港堂側は低く見積もっているのである。金港堂側は、株価をより高く評価させる材料にしたかったようだ。だが、低い見積りをしてしまったのでは、商務印書館側に最初から足元を見られたのもしかたがない。

交渉初期における、商務印書館側の見積りを計算してみる。

日本人持ち株は、3,781株で、金港堂側のいう通りの1株 = 130円で計算すると、小計49万1,530元である。

編集原稿料は、80、90万元の間をとって85万元とする。家屋機械が68万元。日本人所有株との合計は、202万1,530元となる。合併時期だけが交渉の対象となるから、この数字のままにはならない。この全額を支払うつもりは、最初から商務印書館にはなかった。

金港堂側は、それにしても低く見積りすぎている。株の小計は、同じく49万1,530元だ。編集原稿料が2万元、家屋機械が35万元。合計86万1,530元になる。まず、最初の段階で、商務印書館が試算した約43%しか金港堂は金額設定をしなかったことになるではないか。

しかも、十数回の交渉のすえに合意を得たというのが、1株の評価を16.5元上積みすること、雑費で8万元余を加えるというものだった。16.5元の上積みは、いかにも商務印書館が譲歩したように見える。だが、編集原稿料、家屋機械の評

価額は、消えてしまっている。

総額を算出すれば、どうなるか。

$3,781株 \times 146.5元 = 55万3,916.5元$ 。これに雑費の8万元を加えた合計63万3,916.5元が、商務印書館が実際に支払う金額となる。

なんと、商務印書館が最初に試算した金額202万1,530元の3分の1以下、金港堂が最初に設定した金額86万1,530元と比較しても、約23万元も少ない金額になってしまった。

金港堂にしてみれば、土地建物は、日本に持ち帰ることもできない。商務印書館側から、家屋機械の代金は支払わない、といわれれば金港堂側はどうしようもない。実際、それに近い結果となっている。なにしろ雑費8万元で手を打ったのだ。

足元を見られながらの交渉とならざるをえない。最初から勝負にはならなかった。商務印書館の圧倒的勝利しかないのである。

十数回の交渉をもったというのは、双方が熱心に仕事をしています、という芝居だったのではないかと疑う。商務印書館の利益を守るために、理事会は精一杯の努力したという演技である。そう感じるほどに、勝敗のゆくえは、はじめから明白だった。

商務印書館理事会報告書は、あからさまには書いてはいないが、買収金額を大いに節約したことを、中国人株主に喜びをもって説明するものになっていることがわかる。

なにしろ試算にすぎないとはいえ約192万元が、半分を大きく割り込んだわずか約63万の支払いですんだのだ。

この報告書は、商務印書館理事会の完全勝利宣言にほかならない。

19 増加する資本金とあがる利益

ここで商務印書館が金港堂との合弁時期に達成した資本金の増加と獲得した利益について見ておきたい。

資本金

王雲五『商務印書館与新教育年譜』[王雲五1973]の記録を見ると、1897年4,000元、1901年5万元、1903年20万元、1904年50万元、1905年100万元、1913年150万元、1914年200万元と資本が急増しているのがわかる。

朱蔚伯論文も同じく、1904年50万元、1905年100万元、1913年150万元とする。

王雲五のものでは増資の内訳がないので、別の資料によって補う。ところが、別の資料を見ると王雲五、朱蔚伯の述べるものとは一部が食い違ってくるのだ。

今、主として以下の文献による(発表順)。

文献1：林爾蔚、汪家熔「漫談商務印書館」[林爾蔚ら1984]

文献2：汪家熔「商務印書館創業諸君」[汪家熔1991]

文献3：長洲(汪家熔)「商務印書館的早期股東」『商務印書館九十五年』北京・商務印書館1992.1。上の「商務印書館創業諸君」を改題転載したもの。

どういうわけかそれぞれの記述にユレがあって、これが確実だといえない。どちらが正しいのか、私は判断する材料を持っていないので書いてあるままと紹介しておく。

創業時の3,750元、1901年、張元濟、印錫璋の投資による5万元、金港堂との合弁で20万元、とここまでは各文献ともに相違はない。

王雲五は1904年に50万元になったというのだが、汪家熔論文には、該当するものがない。そのかわり次のようになっている。

1905年旧暦二月に10万元を日中双方で折半した。

投資者

文献1：不記

文献2：原亮一郎、山口俊太郎、利見合名会社、篠崎都香佐、益田太郎、益田^{ママ}夕夕、藤瀬政次郎、鈴木島吉、神崎正助、丹羽義次、伊地知虎彦。

文献3：原亮一郎、山口俊太郎、利見合名会社、篠崎都香佐、益田太郎、益田玉、田辺輝雄、藤瀬政次郎、鈴木島吉、神崎正助、丹羽義次、伊地知虎彦。

文献2に見えない田辺輝雄が文献3に出現する。文献2の益田タ^{ママ}タが、文献3で益田玉に改められる。もともとは、たぶん益田タマと記述されていたのだろう。1905年旧暦二月下旬（数ヵ月後ともいう）にもふたたび10万円を増資する。

投資者

文献1：高夢旦、蔣維喬、楊瑜統、胡君復、杜亜泉、寿進文、俞志賢、顧庚吾、長尾楨太郎

文献2：長尾、田辺輝雄、小平元、木本勝太郎、原田民治

文献3：長尾、小平元、木本勝太郎、原田民治

具体的な名前が挙がっているので、根拠があると思われる。ただし、中国側の投資者を掲げたり省いたり、日本側にも名前の出入りがある。資料の整理がうまくいっていないのか、その理由は不明。

合計すれば、この時点で資本金は40万元だ。

この時、株主は最高の配当が4割、法定積立金が5.4分、最終的には5割の利益をえることができたという（文献3）。超優良株といえる。つまり、商務印書館に関しては、金港堂との合弁以後、投資の意味が変化したのだ。以前は、投資といっても必要経費の補填に利用されていて、出資者をさがすのがむづかしかった。それが、営業の順調化とともに、利潤の高分配が期待されるようになり、出資者に不自由をしなくなった。

1907年、24万元の増資を決めた。鄭孝胥、王俶田、林琴南、羅振玉、王国維、劉子楷、金鏡蓀、伍光建が株主になる（文献1）。

1907年で合計64万元の資本額となる。王雲五、朱蔚伯のいう1905年の100万元とは、かけはなれる。なぜだか知らない。

日本籍投資者名単

1914年、商務印書館は日本資本を回収する。その時点での日本人株主の名前と持ち株数を明らかにしたのが、汪家燊「商務印書館日人投資時的日本股東」[汪家燊1994a]である。

商務印書館は、金港堂と合弁したのち数回にわたって増資を行なっている。投

資に参加した日本人がいるが、その詳細は必ずしも明確になっているわけではない。文献によって人の出入りがあり、取得株数も明示されていないのだ。

このたびの汪家熔論文は、合弁を解消した1914年の日本人株主と持ち株を明らかにした(1株100円で計算した金額は省略する)。1905年旧暦二月と同年二月下旬(数ヵ月後という説もある)に増資した際の投資者とあわせてまとめると下のようになる(典拠[汪家熔1994a:91]。樽本注：印は記載のあるもの、×印は記載のないことを示す。備考は、[稲岡勝1996:30]による)。

日本籍投資者名単

	1905	1905	1914	備 考
1 木本勝太郎	×		135株	商務印書館(印刷)、元金港堂
2 長尾禎太郎	×		45株	商務印書館編訳人、元高等師範教授
3 篠崎都香佐		×	88株	篠崎医院院長(在上海)
4 小平 元	×		60株	商務印書館(印刷)、元金港堂
5 原田 民治	×		13株	不詳
6 神崎 正助		×	30株	三井物産
7 尾中 満吾 (華南記)	×	×	22株	不詳
8 原 亮一郎		×	515株	金港堂社長。原亮三郎の長男
9 原 亮三郎	×	×	1,055株	金港堂創業者
10 山本条太郎	×	×	764株	三井物産。原亮三郎の女婿
11 丹羽 義次		×	45株	三井物産? 山本条太郎部下
12 鈴木 島吉		×	80株	正金銀行上海支店
13 伊地知虎彦		×	15株	三井物産。山本条太郎部下
14 益田 太郎		×	329株	三井物産益田孝の息子
15 益田 タマ		×	167株	不詳
16 山口俊太郎		×	383株	実業家。原亮三郎の女婿
17 利見合名会社		×	35株	大阪で教具の製造販売

18	田辺 輝雄	×		×	
19	藤瀬政次郎		×	×	三井洋行
	合 計				3,781株

汪家熔は該論文のなかで、おおよそ次のようにいっている。

日本人理事のひとりであった加藤駒二は、商務印書館の規定によれば当然株主であったはずだが、資本金回収のおりにはその名前がない。加藤は、益田太郎、タマに株を譲渡したのだろう。株主会に名前の見える藤瀬政次郎、田辺輝雄も最後の3,781株にはいなくなっている。

そして結論である。「以上述べてきたように、株所有者が多人数であり、頻繁に名義書き換えを行なっているが、このことは1903年は、中国商務印書館と日本金港堂のふたつの法人間の合弁では決してなく、原亮三郎ら日本人が商務印書館に投資をしたということを示している」

数回の増資で、誰が何株をいつ取得したのかが不明で、上の表だけではその変遷を正確に追うことができない。原亮三郎は、最初から1,055株を持っていたのか、買い足してそうなったのか。

表を見てみよう。筆頭株主である金港堂の原亮三郎の持ち株は、日本人所有株全体の約28%だ。これに長男亮一郎の515株を加えると、全体の約42%を占める。さらに女婿で三井物産の山本条太郎分、および山口俊太郎分を加算すれば約72%となり、原亮三郎の家族だけで圧倒的な位置を占める。

金港堂と商務印書館が合弁をするにあたり、それぞれが10万元を拠出した。もしかりに1株100元とすれば、1,055株は、105,500元となり最初の10万元に近い。表からはうかがえないが、はじめは1,000株であって後に55株を追加したものかもしれない。原亮三郎以外の株主は、合弁後の増資に参加したと想像できる。

商務印書館へは、原亮三郎が個人的に投資していた。これが私が金港堂の関係者から得た証言である。結局のところ、汪家熔論文は、この事実を商務印書館側の資料で裏付けたということになる。

夏瑞芳の商務印書館

日本株回収にあたって商務印書館の全財産は、資産価値を評価し直し、それを株価に反映させる方法をとった、と張蟾芬は証言している[高翰卿1992:9]。交渉の過程において株価を徐々につりあげた点で、金港堂側からいえば、福間甲松の努力は評価すべきだ。しかし、編集原稿料と工場の建物、機器の評価を株価と切り離さなかったのは、福間を含めた金港堂の大失敗である。夏瑞芳は、株価の細かなところで譲歩したように見せかけ、不動産などの部分で大きな利益を確保したといえる。理事会報告に「この日本株を回収するということは、すべて夏社長が苦心さんたんしたことによりようやく目的を達成した」と特に書き込まれていることに注意する必要がある。商務印書館に有利な合併解消が夏瑞芳によって実現されたことを意味すると考えられる。

夏瑞芳は、金港堂との合併を決断し、また自らによって合併解消をも決断した。その交渉も夏瑞芳が主導して行なったことがわかる。

中国出版界におけるその後の商務印書館の発展を見るにつけ、その基礎を築いたのが金港堂との10年にわたる合併であったことは否定できない。経営の視点からいえば、1897年の創業から、1903年の金港堂との合併を経て、1914年に合併を解消するまで、いわゆる初期商務印書館は、「夏瑞芳の」という修飾語をつけるべき存在であった。

20 合併の総決算

実質10年間の日中合併において、日中の双方は、どれくらいの利益をあげたのだろうか。経済の側面からも合併の総決算をする必要がでてくる。

汪家焜は、日中合併の10年間に出現した商務印書館の総資本の推移と日本株への配当利益に関する詳細な数字を明らかにした(疑問をひとつ。宣統元年閏二月廿五日<1909.4.15>、鄭孝胥が出席した商務印書館株主会において、資本を75万元から80万元に増やすことが決められた[鄭孝胥1993:1186]。汪家焜が1909年に示す総資本は、75万9,500円で、80万元とは異なっている。鄭孝胥の方が正しいと思う。ただし、それをもって獲得利益表を修正することはしていない)。

商務印書館と日本の獲得利益（単位：千元）

年	総資本	商務印書館 資本	日本資本	株式利息 %	商務印書館 獲得利益	日本獲得 利益	備考
1903	150	50	100	28.672	3.584	7.168	10-12月
1904	200	100	100	24.657	24.657	24.657	
1905	300	150	150	28.376	42.564	42.564	
1906	403.5	223.5	約180	40	89.4	72	
1907	750	498	252	20	99.6	50.4	
1908	750	498	252	14	69.72	35.28	
1909	759.5	507.5	252	18	91.35	45.36	
1910	787.4	535.4	252	20	107.08	50.4	
1911	796.5	544.5	252	12	65.34	30.24	
1912	797	545	252	20	109	50.4	
1913	1200	821.9	378.1	30	246.57	113.43	
					948.865	521.899	

典拠：汪家熔論文の「商務印書館日股投資和獲利表」をもとに作成した。線で囲んだ「商務印書館資本」「商務印書館獲得利益」および株式利息の1903-05年は、樽本が記入したもの。

汪家熔が作成したのは、日本側のみが獲得した利益の推移である。この表をもとにして、商務印書館側の資本、獲得利益を計算しなおし、全体が見渡せる一覧表を作ったのでかかげる。

一覧表には、商務印書館が日本株を回収した時に呈示した8万元の上乗せ金は記入していない。合弁期間に株の配当で利益をあげたことと、日本株回収に要した費用は、ここでは別問題だからだ。

「商務印書館資本」は、総資本から日本資本を減じたもの。

「株式利息」は、日本資本をもとにし、日本獲得利益を除すれば算出できる。1903年は、10-12月の3ヵ月だから、年率になおした。

「商務印書館獲得利益」は、商務印書館資本に株式配当率を乗ずれば出てくる。1913年時点の日本側資本は、37万8,100元だ。持ち株である3,781株を1株=100円で計算している。日本側の10年間の株式利息総額は、累計して52万1,899元と

なる。一方、商務印書館の獲得株式利息は、合計すると94万8,865元になった。

商務印書館の獲得利息は日本の約1.82倍、持ち株は日本の2.17倍にのぼるのだ。日本側に比べても巨大な利益だったことがわかる。そればかりか商務印書館が習得した印刷編集出版発行の専門知識は、株の配当には当然ながら含まれていない。金額に換算できないくらい貴重なものだといえる。比率を考えれば、商務印書館は金港堂に比較してはるかに大きな利益を得たのである。この事実はいくら強調しても強調しすぎるということはない。

21 合併解消の公表

合併解消を巡る金港堂と1年あまりの交渉を続け、1914年1月6日、ようやく契約が成立する。株主総会を開催する広告【図3-24】が新聞に載った。

「商務印書館株主特別総会」『申報』1914.1.10

本社は、以前、商務部に登記し、本社の株主は本国人、外国人を問わずひとしく本国法律を遵守すべきことを声明しました。今回、規定を改訂し、外国株を引き受けず、完全に本国人が資本を集めて営業する会社にする予定です。すでに外国人株は、全数を回収しております。陽暦1月31日（陰暦正月初六日）午後3時、上海愛而近路（注：ELGIN ROAD）紡績業組合事務所におきまして株主特別総会を開催し、すべてを報告し、規定改訂、株処理などについて協議を行ないます。（後略）

商務印書館有限公司理事会

この広告にも、金港堂はおろか、日本という単語も使われていない。あくまでも「外国」なのである。抑制した表現というべきだ。

商務印書館が「外国」ととりつくるおうが、内実は、日本の金港堂持ち株なのだから、新聞記事には、当然、日本が出てくる。いわく、「商務印書館特別株主総会記事」[申報1914.2.1]である。

【圖3-24】『申報』1914.1.10

中華民國郵政特准掛號認爲新聞紙類

申 報

SHUN PAO

中華民國三年
西曆一千九百一十四年
一月十號
星期六
今日張四第
第一萬四千七百零二號

本館設上海望平街五十九號
電話二八五〇
零售每份五分
本館定報價目
中國境內全年送日寄大洋十元
半年六元
三個月三元五角
外埠全年十二元
半年七元五角
三個月四元五角
郵費在內
廣告刊例
本館告白刊例
第一日每行一元
第二日每行八角
第三日每行六角
第四日每行五角
第五日每行四角
第六日每行三角
第七日每行二角
第八日每行一角
第九日每行一角
第十日每行一角
封二行起每行一元
封三行起每行八角
封四行起每行六角
封五行起每行五角
封六行起每行四角
封七行起每行三角
封八行起每行二角
封九行起每行一角
封十行起每行一角

商務印書館股東特別會

本公司前在商部註冊聲明本公司股東無論本國人外國人均須遵守本國法律現擬改訂章程不取外股爲先全本國人承充營業之公司已將外國人股份全數購回茲特定於陽曆一月三十一號即陰曆正月初六日下午三時在上海愛而近路商務印書館公同開股東特別會報告一切并商議改訂章程處置股份等事屆時股東務請爲代表

李其華 李其華 李其華 李其華 李其華 李其華 李其華 李其華 李其華 李其華

商務印書館 謹啟

衆秀女學校招生廣告

本校定於陽曆二月十六日開學凡有志來學者請在陰曆年終以前報名開學日期由本校通知校址老靶子路東三十六號洋房先備校址

校長 林 真 真 真 真 真 真 真 真 真 真

商務印書館股東特別會

本公司前在商部註冊聲明本公司股東無論本國人外國人均須遵守本國法律現擬改訂章程不取外股爲先全本國人承充營業之公司已將外國人股份全數購回茲特定於陽曆一月三十一號即陰曆正月初六日下午三時在上海愛而近路商務印書館公同開股東特別會報告一切并商議改訂章程處置股份等事屆時股東務請爲代表

李其華 李其華 李其華 李其華 李其華 李其華 李其華 李其華 李其華 李其華

商務印書館 謹啟

衆秀女學校招生廣告

本校定於陽曆二月十六日開學凡有志來學者請在陰曆年終以前報名開學日期由本校通知校址老靶子路東三十六號洋房先備校址

校長 林 真 真 真 真 真 真 真 真 真 真

商務印書館股東特別會

本公司前在商部註冊聲明本公司股東無論本國人外國人均須遵守本國法律現擬改訂章程不取外股爲先全本國人承充營業之公司已將外國人股份全數購回茲特定於陽曆一月三十一號即陰曆正月初六日下午三時在上海愛而近路商務印書館公同開股東特別會報告一切并商議改訂章程處置股份等事屆時股東務請爲代表

李其華 李其華 李其華 李其華 李其華 李其華 李其華 李其華 李其華 李其華

商務印書館 謹啟

衆秀女學校招生廣告

本校定於陽曆二月十六日開學凡有志來學者請在陰曆年終以前報名開學日期由本校通知校址老靶子路東三十六號洋房先備校址

校長 林 真 真 真 真 真 真 真 真 真 真

大要、次のようなものである。

昨日午後、商務印書館は、日本株を回収したことにより特別株主総会を召集した。会場に集まったのは二百数十名の株主で、理事会により、日本株を回収した経緯、昨年の営業状況の報告がなされた。協議の結果、増資すること、規定を改訂することが認められ、新社長印錫璋が紹介されたという。

この記事には、「日本株を回収した経緯」というだけだった。1月31日当日の理事会報告そのものを知るためには、約80年後の1993年まで待たなくてはならなかった。

「商務印書館特別株主大会理事会報告」は、商務印書館の正式文書にもかかわらず、すでに述べたようになぜだか長期にわたって埋もれたままだった。ただし、その一部分は、一般の目にも触れることができた。なぜなら、商務印書館関係者が、商務印書館と金港堂の合弁を説明する時、ほとんどこの理事会報告をもとにしていると考えられるからだ。

理事会報告の冒頭部分は、翻訳すると次のとおり。

本社は光緒二十三年に創業し、資本は微々たるものだった。光緒二十九年にいたり、ある日本商が資本を糾合し上海にやってきて書店を開設しようとした。本社はその頃編集経験、印刷技術ともにはなはだ未熟であり、外国人と競うことなどおそらくできないだろうというので、これと合弁をしたのである。資本はそれぞれ半分を受け持つ、すなわちおのおの10万である。さらに人事管理はすべて中国人が主宰する、日本の株主すべては中国の商法を遵守しなければならないと明確に定めた【附録1】[商務印書館1993][汪家燊1993]

商務印書館から見た、金港堂との合弁経過である。理事会からの公式文書ではあるが、長年公表されていなかったところからもわかるように、株主向けの、いわゆる非公開文書というあつかいになる。持ち株の評価に関するこの理事会報告は、すでに見たので省略する。

新聞広告では、抑制した表現をとっていた商務印書館だが、自らの雑誌では違った。『東方雑誌』第10巻第9号(1914.3.1)の広告ページで「完全華商」を大い

【圖3-25】『學生雜誌』第1卷第1号 1914.7.20

完全華商股份

商務印書館

敬贈紀念書券

緣起

本公司現收足資本一百八十萬元從前日本人所附股份三十七萬八千一百元於本年一月盡數收回業經呈明農商部立案並經登報布告現在本公司為完全華商資本之股份有限公司特印行紀念書券贈送學界且近來各省學款支絀國民教育不無影響故對於購用小學教科書者特別加贈聊盡贊助教育之微

贈送規則

- 一 上海總發行所與各省分館一律贈送
- 二 贈送時期上海總發行所於本年陽歷七月二十二日起至九月四日止（即陰歷六月初一日起至七月十五日止）各省分館另行酌定日期於該省秋季開學期前在本省登報佈告
- 三 贈券之等級如左
 - 甲 購木版小學教科圖書滿實洋五角者贈書券實洋二角
 - 乙 購木版小學以外各種圖書滿實洋五角者贈書券實洋一角
 - 丙 購本版各種雜誌並預約券及儀器文具歐美出版西書滿實洋一元者贈書券實洋一角
- 四 以上各項均以類推奇零不計
- 五 贈送書券以現款購貨者為限其非現款者概不贈送
- 六 凡不通匯兌處所仍用本館郵票購書章程可以郵票抵實洋但照九五折計算
- 七 外埠寄款購貨即將應得書券專函寄上如防郵局遺失應另加掛號費否則本館不負其責至於郵費運費仍照向章歸客自認

壬(945)

に宣伝する。外国資本を回収して「完全華商自行集股辦理之公司」と大活字を組むのである。同誌第10巻第12号（1914.6.1）、また、『学生雑誌』第1巻第1号（1914.7.20）の表紙二には、「完全華商股份 商務印書館 敬贈紀念書券」と大書し、日本株を回収した記念に特別に図書券を印刷し、教科書、書籍、文具を購入したものに贈呈するという【図3-25】。

「縁起 / 本公司は現在資本180萬元を所有しています。以前、日本人が引き受けておりました37万8,100元は、本年1月、全額を回収し、すでに農商部に上申し登記いたしており、新聞に掲載し現在本公司が完全に華商資本の株式会社となったことを布告いたします。特に図書券を発行し教育界に贈り、かつ近来各省においては学費が不足し国民教育に影響なしとは言えず、ゆえに小学教科書を購入される人に対しては特別に贈ることとし、教育を贊助する微意をいささかつくそうというものであります」

特別に記念図書券を印刷したばかりか贈呈をするというのだから、日本株回収が、よほどうれしかったと見える。

商務印書館が金港堂との合弁を解消せざるをえなかった最大の理由は、なんといっても清朝の崩壊と中華民国の成立という歴史の大きな流れが背景にあったこと以外には考えられない。まさに辛亥革命という時代の大きな流れが、日中の合弁事業を存続させるのを困難にしていた。中華書局がかかげた「独立自主自由平等」のスローガンそのままに、異民族の支配から独立し中国全土に民族主義が高揚した新しい時代にあっては、日本との合弁は、負の要因にはなってもその逆はありえなかった。精神的負担が経済上の有利さを大きく上回ったのである。

合弁解消の理由にもうひとつあるとすれば、商務印書館内部の要因である。精神上の苦痛以外のものだ。

「外国資本を利用する」というのが、商務印書館の最初からの意図であった。資金ばかりではない。足りない箇所を日本の技術で補う。編集印刷発行のノウハウが含まれる。

その意図は、合弁の約10年間に十分実現された。上にあげた獲得利益を見ても理解できる。

利用する例をほかにあげれば、1910年に発生した夏瑞芳のゴム投機失敗でわか

った巨額の損失についても、張元済は、原亮三郎、山本条太郎に手紙を書いてくわしく救済方法について相談している。ふたりの日本人は、当時は、理事でもなんでもない。ただ、大口投資者として金銭的背景をもっているから、なにかと相談をするのに便利な存在であったろう。

結局のところ、商務印書館が、目に見えないノウハウについても金港堂から十分に学んで修得し終わったと判断したとすれば、それ以上合弁会社をつづける意味はなくなる。そう考える以外にない。

利用価値のなくなった金港堂は、捨てられるのが資本の論理である。それを商務印書館は、冷徹に実行したにすぎない。

商務印書館にとって金港堂との合弁は、成立の時は、隠すべきものであり、解消のありは、謳いあげたものであった。金港堂との10年間にわたる合弁は、商務印書館にしてみれば、編集ノウハウの蓄積、印刷技術の近代化など、その後の出版印刷事業発展に欠くべからざるものであったはずだ。にもかかわらず、商務印書館側の扱いは、いわば「冷たい」ものだった。

金港堂に対する実情を無視した扱いは、90年後の『商務印書館大事記』に記された「(1903年)十月、商務印書館有限公司が正式に成立した。日本資本を吸収し、印刷を改善する」という部分にも、連綿として受け継がれていると重ねて指摘しておきたい。

22 夏瑞芳暗殺

1914年1月10日(土)夕方6時半、御者の胡有慶は、馬車の扉を開けて主人の商務印書館社長夏瑞芳が乗りこむのを待っていた。夏瑞芳は、(河南路)棋盤街にある商務印書館発行所からでてきて、いつもの習慣通りに左右を眺めてから馬車に乗ろうとした。その時、パンと音がしたが、胡は人力車のタイヤが破裂したのだらうと思った。つづけてもう1発がひびいて、夏瑞芳を見ると、両手で胸をきつく抱いて「アイヨー」と叫びながら建物の中に入ろうとしている。夏瑞芳の右後に拳銃を持った男の姿が目に入った。夏瑞芳は、逃れようと商務印書館に

【図3-26】花に囲まれた夏瑞芳の遺影。両側に起立しているのは夏瑞芳の息子たちだろう



引き返して玄関のところまでたどりつくところで、出血多量のためそのまま倒れ込んだ。犯人が南に向かって逃げるのを見て、胡が大声で叫びながら追いかけると、犯人はくるりと振り返って胡にむけて銃を撃った。胡の右耳をかすめ血が流れる。痛みを感じないまま追う。犯人は、泗涇路角まで逃げると人力車にとびのって、もう1発を撃つ。弾丸は夏瑞芳と同姓の夏光仁（18歳学生）の腹部に当たってこれを死亡させた。犯人は銃を投げ捨て、車夫に急げと命令したところに胡が追いつき犯人の手をつかまえる。胡と一緒に犯人を追跡していた租界警察の中国人巡査が、犯人を逮捕した。胡が地面から銃を拾った時、駆けつけた西洋人巡査が、胡を犯人の仲間と勘違いして銃を取り上げる。誤って暴発し、流れ弾が近くを歩いていた賀阿毛の左足を傷つけた。

夏瑞芳は、ただちに仁済医院に送られる。傷が重く、気を失っている。夏瑞芳の身体には、弾丸は1発だけ命中しており、左肩の後ろから入って胸部をななめに

【図3-27】 商務印書館の前を夏瑞芳の葬列が通過する。この箇所は、花の十字架をたてた棺を人が担いでいる



出ている。7時に夏瑞芳は絶命し、虹口斐倫路の検死所へ送られた。享年四十三（『申報』1914.1.11-2.3に掲載された記事、「棋盤街又出暗殺案」から、番号八、九のないものをはさんで「棋盤街暗殺十誌」までをもとにして記述した。事件の概要については、以下についても『申報』の記事に拠っている。ただし、目撃者の証言が錯綜しており、筆者の判断で取捨選択した）。

張元濟は、商務印書館発行所で夏瑞芳と仕事を終えたあと、階下において帰宅の準備をしていた。忘れ物に気づき2階にもどったとたんに銃声を聞いた。傷ついた夏瑞芳を仁濟医院に送ったのは、張元濟である（[張樹年1991:116]ただし、該書は、事件発生後、張元濟が鄭孝胥と後門から急いで帰宅した、と書いているが間違いだろう）。

商務印書館の理事をつとめる鄭孝胥は、1月10日、宝山路にある高夢旦の新居

【図3-28】夏瑞芳の棺を安置した2頭立ての馬車が行進する。うしろに続く馬車には、遺族がのっているらしい



を訪れ、食事をしようとしていた。その時、知らせるものがあり、「夏瑞芳が発行所で(馬)車に乗ろうとして狙撃され、2発が当たった。すでに仁済医院に入院している」という。高夢旦と李拔可が先に行き、鄭孝胥がそれにつづいて病院に到着したが、夏はすでに死亡しており、犯人1名が捕縛されたことを聞かされた。夏瑞芳は死亡したが、商務印書館は普段通りに落ち着くように、張元済は避難した方がいい、と皆で相談する。鄭孝胥と張元済はつれだって病院を出た[鄭孝胥1993:1497]。

皆が張元済に避難を勧めたのは、夏瑞芳事件の約4ヵ月半まえ、脅迫状が届いていたからだ。

1913年8月28日、鄭孝胥が、商務印書館に行くと、夏瑞芳が投書を示して、「党人が虞洽卿、張菊生(元済)および夏たちを憎み、危害を加えようとしてい

る。出入りに気をつけるように。虞洽卿の家では、今朝、爆弾を投げるものがあったが、当たらなかった」といったことがあった[鄭孝胥1993:1481]。

翌11日夜、日曜日にもかかわらず商務印書館理事会緊急会議が開かれた。張元濟、鄭孝胥らが出席し、なくなった夏瑞芳のかわりに印錫璋が社長に、高翰卿が支配人に推挙される。

1月12日、夏瑞芳は納棺され、14日に葬儀がとりおこなわれた。当日、商務印書館は全社を休業とし、宝山路一帯は葬儀の車馬で埋まる。音楽および一切のプラカードなどは用いず、葬列の礼拝、見送りも事前に断われている。なぜなら、夏瑞芳は、キリスト教徒だったからだ。夏瑞芳の棺は、4頭の黒馬が引く馬車に納められ(スタッフォードが撮影した写真には、2頭立ての馬車が2輛連なって写っている。合計すれば4頭にはなる)、花で作った十字架がかかわれている(花の十字架は2個、ひとつは棺にもうひとつは馬車の屋根に設置されているらしい)。参列者は2千余名、そのなかに外国人も少なくはなく、馬車は約百輛を数える。午前9時、宝山路4号の自宅を出発し、上海市内をまわって延緒山荘に仮安置された。

御者の胡は、凶悪犯人を追いかけて捕まえた勇気を讃えられ、工部局から250元が与えられることに決まった。商務印書館は、最初、5千元を報奨金として出そうとしたが、かえって不都合があるかもしれないということで毎月60元を終身贈ることにする。

王慶瑞(32歳 山東人)が犯人の名前である。夏瑞芳に個人的うらみがあったわけではない。依頼殺人であった。

夏瑞芳暗殺には、背景があった。1月10日、鄭孝胥は、夏瑞芳の暗殺からただちにあの脅迫状を思いだしたに違いない。その日の日記に、「これはすなわち閩北で軍火を差し止めようとしたことにたいする党员(原文:党人)の復讐である」[鄭孝胥1993:1497]と書いている。「党员」とは、陳其美を指すという。

陳其美(1878-1916)は、日本に留学したことがあり、革命運動に従事しながら上海青幫の大頭目でもあった。1911年、武昌蜂起後の11月に上海で武装蜂起し滬軍都督となる。1912年には派閥争いから陶成章を暗殺してもいる。1913年7月、国民党員は反袁世凱の「第2次革命」を発動し、陳其美は上海袁世凱討伐軍総司令に推された。7月18日、陳其美は上海独立を宣言し南市(中華銀行跡)に上海

袁世凱討伐軍司令部を置いた[黄徳昭1978:105-110][湯志鈞1989:759][中国国民党1970:196-197]。

結局、袁世凱討伐は失敗する。そして夏瑞芳暗殺の原因となったのが、この司令部に関連したものなのだ。陳其美は、閩北に司令部を置きたかった。しかし、閩北宝山路には、商務印書館の印刷所と編訳所および関連会社がある。夏瑞芳にしてみればきがきではなかったであろう。夏瑞芳、呉子敬らは閩北が戦火にみまわれるのを恐れ、ひそかにイギリス、アメリカ租界の工部局と共謀し閩北の入り口に兵を置いて陳其美軍を阻止した。さらに、商務印書館に軍費および商務印書館が閩北で保管している武器を貸せと陳其美から申し出があったが、これも夏瑞芳によって拒否された。これが陳其美のうらみをかっただし[章錫琛1964:73]。

陳其美が、商務印書館に軍費を貸せという部分は、いかにもありそうなことで理解できる。だが、商務印書館がなぜ武器を保管していたのだろうか。説明がないので事情がわからない。腑におちない箇所である。

夏瑞芳の葬儀にあたって商務印書館は全社休業としている。商務印書館の夏瑞芳に対する手厚い待遇を見ることができよう。さらに、犯人を捕らえた御者の胡に毎月60元の終身贈与を決めたことがある。額が多すぎるととりやめになった5千元だが、そのかわりに呈示された毎月60元の手当は、1年にして720元である。これをもとにして考えれば約7年で約5千元となる。終身だから5千元の報奨金よりもはるかに多い金額になるのだ。これも間接的な夏瑞芳厚遇と考えられる。

当時の商務印書館にとって夏瑞芳という人物は、特別な存在であった。商務印書館の創業から事業の節目ごとに、特に経営上の重大な決断を行なったのが夏瑞芳である。創業、増資、合弁、投機、合弁解消という五つの転換点に見せた夏瑞芳の決断力を思わないわけにはいかない。

初期商務印書館は、夏瑞芳ぬきには語るができない。金港堂との合弁解消直後に夏瑞芳が暗殺されたのは、名実共に夏瑞芳の商務印書館が終わったことを意味している。

23 長尾雨山の帰国

1914年1月6日に日中合弁が解かれたのだから、長尾雨山にしてみれば解雇ということになる。

商務印書館からいえば、日本とは縁を切りたい、「完全華商」を宣伝したい、攻撃からのがれて精神的に楽になりたい、という願望が先にたっている、と一般にはいうことができる。合弁解消後、印刷関係の日本人ばかりを集めて別の印刷会社を作った、という記述を読んだことがある。

ただし、長尾雨山の場合も同じようにただちに解雇にむすびつくかどうかは疑問だ。1916年の時点で印刷所にいた日本人技師ふたりが張元済に留任するよういわれている例がある[張樹年1991:131]。そうならば、資本関係での日中合弁は解消されたとはいえ、人事方面では、完全に日本色を一掃したことにはならない。特に長尾雨山の場合は、商務印書館から解雇をいい出したとは、考えにくい。張元済、鄭孝胥らは留任を勧めたのではないか。それでは長尾雨山の方から辞職を願ったのか、といわれれば、それを証明する資料は、今のところない。

ともかく、上海に移住したはずの長尾雨山は、日本に帰ることになった。雨山が息子正和に語ったところによると、ひとつの理由は、子供の教育のためだったという。

一度永住と心に決めた支那から雨山はなぜ帰国したのか。自分の口から語ったのは長子、次子ともに成長し中等教育を受けさせる時期になり、やはり日本の中学に入れねばならぬと考えたということである。これは必ずしも原因の全部とは言えない[長尾正和1959b:9]

「移住」といい「永住」というからには、雨山にその気持ちが強かったのは確かだった。「心に決め」ていたというのだ。その気持ちが揺らいだのは、子供の教育問題であったというのも理解できないことはない。しかし、正和がつづけて

述べる原因らしきものは、「目のあたり覆滅に瀕した清朝を見るに忍びなかつたことも想像に難くない」である。抽象に過ぎる。

雨山に帰国の決心をさせたのは、私の見るところ、やはり金港堂と商務印書館の合弁解消にほかならない。

もしも金港堂と商務印書館の合弁が続いたならば、雨山は、日本に帰国しようとは思わなかったのではなからうか。しかし、社会情勢が変わってしまった。個人の力ではどうしようもない。

長尾雨山は、商務印書館の株を45株所有していた[汪家燊1994b][樽本照雄1995b]。1株 = 146.5円で計算すると6,592.5元になる。

商務印書館における日本人の給料は、技師長の木本勝太郎が180元、加藤駒二と長尾雨山が200元だった[朱蔚伯1981:147]。

1909年当時の上海における標準的給料、といっても親子4人家族がどうやら生活できるという水準で60元という数字がある(樽本照雄「清末民初作家の原稿料」『清末小説論集』法律文化社1992.2.20所収)。これから見れば、長尾雨山の200元は高額ということになる。しかし、夏瑞芳が張元済をその所属していた南洋公学訳書院から商務印書館に引き抜く時、月給350元を支給した[朱蔚伯1981:144]のとくらべれば、200元というのはそれほどの金額でもない。

昇給についての資料がないので200元を基礎数字において6,592.5元を割り算すれば、約33ヵ月分の給料ということになる。これは株だけの所得であり、ほかに貯蓄があるかどうかはわからない。

2回分割払いであったとしても金銭的に余裕があったのか、長尾雨山は、すぐには帰国せずしばらく中国に留ることにした。

1914年6月21日、長尾雨山が中国国内を旅行するというので、商務印書館の同人が徐園にあつまって歓送会をひらいている[張樹年1991:118]。

といってもすぐに旅行に出かけたわけでもない。6月30日には、鄭孝胥が長尾に会いにいており[鄭孝胥1993:1521]、7月10日には、張元済が長尾雨山を招待し宴会を催してもいる[張樹年1991:118]。7月24日に長尾のほうから鄭孝胥にわかれを告げにきて、7月26日、ようやく列車に乗るのを見送られているのだ[鄭孝胥1993:1524]。1914年7月26日より5ヵ月にわたる中国国内旅行である。雨山

は、この旅行に先立って家族を春日丸で日本に帰国させた。

日本に帰国する前に行なった長尾雨山の中国国内旅行について詳しいことはわからない。いつ上海に帰ってきたのかも不明だが、12月14日に鄭孝胥のもとを長尾雨山が訪ねてきた。鄭孝胥日記には「於陰曆二十二日返国；且言日本東京大学願聘余為漢文教授，月俸三百元」[鄭孝胥1993:1543]と書かれている。

「陽曆22日に帰国する」のが長尾であるのは、間違いない。つぎの東京大学に漢文教授として招かれているのは、誰か。これが問題になる。

鄭孝胥の日記なのだから、間接話法であって「余」は、鄭孝胥が自分のことを指して書いていると解釈できる。

日本の東京大学が、長尾雨山を仲介者に立てて鄭孝胥を漢文教授に招聘しているという意味だ。

そのように読むのが普通であろう。だが、私は、すこしひっかかるのだ。

もし長尾がそう申し出て勧めたのであれば、それに対する鄭孝胥の返答があるはずだろう。しかし、意外なことに鄭孝胥はそれを受けたのか断わったのか、なにも書いてはいない。日記には、ここしか東京大学はでてこない。以後、まったく言及がないことが不思議だ。これが奇妙な点のひとつ。

鄭孝胥自身のことであれば、給料以外にも各種条件について質問したろうし、その記述があってもいい。ところが、まるで聞き流しているような書き方である。奇妙な点のふたつめだ。鄭孝胥にとっては他人事だからではないか。

だいいち、長尾雨山は、鄭孝胥に東京大学の職を紹介する権限を与えられていたのだろうか。大いに疑問である。

以上の理由で、鄭孝胥日記に見える東京大学漢文教授うんぬんは、「日本東京大学が自分を漢文教授に招いており、月俸300元である」とカッコをつけた雨山の直接話法であると考え。すなわち、ここの「余」は長尾雨山が自分を指しているといっていると解釈するのだ。

ただし、こちらの読み方にも難点はある。長尾雨山は、教科書疑獄事件に連座したことが原因で東京高等師範の職を失っている。その彼に、東京大学の職が用意されていると考えるのは、むつかしいのではないか。

どのみち、雨山が、帰国後、東京大学の漢文教授に就任したことは、事実とし

て存在しなかったことだけを書いておく。

翌15日朝、こんどは鄭孝胥が長尾を訪ねる[鄭孝胥1993:1543]。つづくのは歡送会である。主催者が違えば、それだけの回数を宴会についやした。

12月17日、鄭孝胥は、小有天において長尾の歡送会を開く。張元濟、高夢旦らも出席した[鄭孝胥1993:1543]。

12月20日、長尾雨山のお別れ会に六三園へ行く。客は数十名、宴会が終わり、撮影をして解散する[鄭孝胥1993:1543]。

12月21日、張元濟は、長尾槇太郎が日本に帰国するのでカールトンにて歡送会を催した。高夢旦、蔣維喬、莊俞、李拔可らが参加している[張樹年1991:119]。

宴会の数だけ、長尾雨山は友人に恵まれたと解釈できる。それだけ人望が厚かったのだ。

1914.12.22

.....山城丸に行って長尾雨山が帰国するのを送る。雨山は帰国し、西京市室町出水上に居住する。.....[鄭孝胥1993:1544]

1914年、内藤湖南が、南京から投函した長尾雨山あての繪葉書が残っている。

「泰山に上り曲阜に詣し南京に入りこれより上海に向申候斗姥宮の尼姑をも一見致候ノ十一月五日ノ虎」という文面で、宛て先は「京都市室町出水上ル」[内藤湖南1976:517]である。鄭孝胥日記に見える住所と同じところだ。

12月22日上海発の山城丸は、神戸行きである。

長崎到着

山城丸は長崎に到着した。長尾の談話が記録されているので紹介したい。(ルビは省略)

『大阪朝日新聞』1914.12.27欄外記事

長尾雨山氏帰国(長崎) 十二年余支那にありて歴史研究に従事したる長尾雨山氏は二十四日朝入港の山城丸にて上海より京都に帰れるが同氏の談に

曰く

近来支那政府の神経過敏となり外人の内地旅行をなすに従来の如く決して容易ならず何れの土地に入るも先づ城外にて番兵に誰何され護照の有無等嚴重に取調べられ辛うじて城内の旅館に入るや直ちに巡邏の御見舞を受け更に五六名乃至十名余の兵卒を引き連れたる官民来りて厳密なる取調をなし態度頗る傲慢にて遂には其の無礼を叱咤するの己むなきに至ることあり旅行中の不快云ふべからず是れ支那官憲が如何に日本人に対して猜疑の眼を放てるかを証するものなるが一は邦人中革命党に加担し或は革命黨員が邦人を装うて横行するを恐れ或は邦人売薬行商等が不正を働く等に依るべく察せらる尤も革命党に対する警戒の嚴重なるは単に邦人に及ぶのみならず支那人に対しても固より然る処にて一老夫と雖も猥りに城内に入り込むを許さざる有様なり然かも一般人民が革命党に対する同情は今や地を払ひ居れば大なる資金と相当の武器を有せざる限り最早革命党の勃興し得ざるものと観測せらる。

文中の内地旅行というのは、長尾雨山が帰国前に行なった中国国内旅行のことを指しているのは明らかだ。辛亥革命後、政情不安と都市の治安悪化の様子がうかがわれる、ということはできるかもしれない。

それにしても、上海に10年以上滞在していた人の談話としては、なにか唐突な感じをぬぐうことができない。ある程度の量がある談話のうちのほんの一部分が活字にされたような印象を受ける。

「欄外記事」は、新聞の折り目部分に掲載されるものだ。紙面に入り切らない、あるいは突発ニュースを押し込む場所と考えられる。長尾雨山の帰国談話は、どちらかといえば埋草程度のあつかいにしか見えない。新聞記者が興味を感じたのが上の箇所だけだったのだろうか。

内容とは別に、あらためて驚くのは、上海から帰国した長尾雨山をさがしだし、その談話を朝日の記者がよく取ったものだと思う。長尾雨山の帰国は、秘密でもなんでもないが、またおおさわぎされることでもなかった。雨山を出迎えた人がいたのかもしれない。

足かけ12年実質11年にわたる長尾雨山の上海滞在だった。金港堂と商務印書館

の合弁が10年間だからそれよりも1年長いことになる。

1914年、商務印書館と金港堂の合弁が解消された直後に、夏瑞芳は、暗殺された。

同年、長尾雨山は、上海をあとにして長崎経由（12月24日）で京都にもどってきた。

商務印書館から資本と人事の日本色を払拭して、完全に自己資本となる。これをもって初期商務印書館時期が完了したといえることができる。

第4章 初期商務印書館の精神分析

商務印書館と金港堂の合併について、中国側関係者はどのように考えていたのか。

見れば、それぞれの証言には濃淡がある。時代により、立場により異なった内容を提出していると考えてもよい。また、のちの研究者によっても受け取りかた、見方は、違う。

しかし、合併を経験している当事者の証言には、共通したものがあるように思う。外国企業との合併という事態を、当事者たちは、どのように受け止めていたのか。それを外部に向かってどのように表現したのか。いくつかの代表的証言を材料にして考える。

合併を、直接、体験している当事者の証言を見る前に、商務印書館の公式見解を検討しておきたい。

1 合併記述の簡素化あるいは軽視

商務印書館自身の記録が、「大事記」すなわち自社の歴史年表である。編年体により関連事項が記述されている。どのように記録されているかを見れば、金港堂との合併に関する商務印書館の公式見解をさぐることができるはずだ。

「創業十年新廠落成紀念冊」商務印書館編訳所 光緒三十三年七月（1907）
[柳和城2002b]

新出資料である。年表ではないが、触れておきたい。宝山路の印刷所が落成したことを兼ねて創業10年を記念した出版物だ。商務印書館が金港堂と合併会社になったあとの出版だから、合併をどのように述べているのが興味深い。

一読して驚くとはこのことだ。創業からの簡単な歴史を紹介しているが、金港堂にも合併にも言及しない。無視している。書きたくなかったらしい。

「本館四十年大事記（1936）」『同舟』第4巻第12期初出未見[商務印書館1992
a:679、682-683]

1903年の項目には、次のように書いてある。「日本金港堂主原亮三郎が、上海に来て印刷会社を開設しようとしたので、本館は、当時の情勢の必要から、合資することに決定した」

10周年記念のときは、すこし違っている。合弁を解消してかなり時間が経過しているのが理由だろうか。

原亮三郎の名前を出しているところが客観的だということができる。ただしこの部分は、原亮三郎が上海にやってきて行き当たりバッタリで商務印書館と合弁をしたように読める。間違いであるが、そう証言する人が別にいるものだから複雑になる。この年表は、該説を検討せずに、そのまま記載しているにすぎない。最初から記述が、ゆがんでいる。

1914年の項目「外国株を完全に回収する」とあり、日本株回収についてかなり詳しく説明している。民国元年から外国株を回収することを提起していたこと、夏瑞芳が日本に行って金港堂と相談したこと、その2年後の1914年1月6日に日本の全権代表福間甲松と調印したこと、日本株の数、評価額、総計、支払い期日などなどだ。

ここには、事実を事実として記録しておくという態度がうかがえる。だが、掲載誌『同舟』は、内部発行物だったらしく、一般の目に触れることはなかった。

「商務印書館大事紀要」『商務五十年』1950.9初出未見[商務印書館1957][張静廬1957:557、559]

50周年といえば、1947年だ。ただし、出版はそれより3年遅れの1950年であった。中華人民共和国が成立した直後ということになる。

40周年記念の記録では、あれほど正確に書いていたにもかかわらず、わずか10年後の50周年では、違った。

1903年の項目では、日中合弁には触れない。1914年の項目で、「日本株を回収する（1903年日本金港堂が上海にやってきて印刷会社の開設準備をした。本館は日商の資本と技術を暫時利用し、本年になって全部の日本株を回収した）」と書いていただけだ。はなはだしく簡略化されてしまった。張静廬が資料集に収録するにあたって削除した部分があるという。日中合弁部分がそれにあたるのかもしれない。

削除があったのではないかと思わせるのは、「商務五十年（未定稿、1950）一個出版家の生長及其発展」（『商務五十年』1950.9初出未見[商務印書館1992d:765]）が一方で存在しているからだ。こちらには、「日本資本利用の段階（1903-1914年）」と題し、1903年に金港堂の資本を「吸収」と説明する。「吸収」という言葉は、大規模会社が、小規模会社を吸収したように読めるのではないか。この言葉使いからして、事実とは異なる印象を受ける。日本人技師を招聘して印刷技術を援助してもらったこと、それにより長足の進歩があったこと、1914年、日本株を全部回収したことを述べる。同じ書物でこれだけ日中合弁に触れているのだから、年表も同様に原文は詳細であったのかもしれない。ただし、これは推測であることをつけくわえておく。

「商務印書館歴年大事紀要（1897-1962）」1962？初出未見[商務印書館1992c:709、711]

この年表は、初出雑誌などについて書かれていない。65周年記念のために編纂された内部資料かもしれない。公表しなかったのなら、一般に見る機会はなかったはずだ。

1903年の項目では、日本金港堂の資本を「吸収」し、日本人技師を雇い入れ、株式会社に改組したとする。50周年文献からの引き写しらしく、ここでも「吸収」だ。1914年の項目では、「日本株を全部回収する（原文：収回全部日股）」とだけ書かれている。40周年の頃とは様変わりといっているほどの冷淡さだ。ほかに書くことがいくらでもあるのだから、日中合弁に紙幅を割くことなどできない、と言われてしまえば、そうですかとしかいいようがない。

65周年の次は70周年だろう。だが、1967年は、「文化大革命」が始まって間もない。年表を編集する余裕などあろうはずがない。80周年も、「文革」終結直後だから同様だった、と想像する。

「商務印書館大事記」[商務印書館1987d:629、631]

「文革」後10年を経て出版された。記述は、ますます簡単になる。簡単な文面だから原文のままを示す。

1903「成立商務印書館有限公司，吸収日資，改進印刷」

1914年は、合併解消に触れない。「設分館於香港。ノ胡愈之（学愚）進館。ノ創刊《学生雑誌》」とあるのみ。1903年に「吸収」したとする表現には、変更がない。

『商務印書館大事記』[商務印書館1987a]

90周年を記念して、年表部分のみを独立させて単行本で出版された。1年に見開き2頁を当てているから、詳細に書こうと思えば、十分な紙幅が保証されている。しかしながら、あまりにも簡単な記述しかされていない。これも原文で下に示す。

1903「十月，正式成立商務印書館有限公司，吸収日資，改進印刷」

ここには、金港堂の名称もなければ、原亮三郎の名前もない。合併の条件も書かれていない。ただ「吸収」があるのみだ。

1914「董事会收回日本股份」

日本株を回収したことだけで、詳細は書かれていない。

百周年記念としては、『商務印書館一百年（1897-1997）』[商務印書館1998]が発行されている。これには、年表そのものが存在しない。90周年の時と同じで別に年表だけを出版したからだ。

『商務印書館百年大事記（1897-1997）』[商務印書館1997]

記述は、90周年記念の『商務印書館大事記』と同じ。

以上、商務印書館の記念出版物に日中合併の記述を見た。時間が経過するにしたがい、日中合併の位置付けが軽くなってしまっている。記述の簡素化が、それを証明している。簡素化ばかりではなく、中華人民共和国成立後においては、日本資本を「吸収」したと表現して、自らが優位に立っているような印象を与えようと努力しているように見受けられる。商務印書館自身が、金港堂との合併時期を無視したくなっているのではないかと想像してしまう。

2 被害者意識

合併の当事者による証言は、経験者だけあって詳細だ。ただし、ここには奇妙な現象が見られる。発言の類似性である。

商務印書館と金港堂の合併事業について当事者が発言した文献を発言順に示す。重要文献は、以下の3件にしぼることができる。

「商務印書館特別株主大会理事会報告」(1914)

莊俞論文(1931)

高翰卿講演(1934)

本章の目的は、それぞれの発言内容を検討するところにある。すでに引用した箇所を再度引用する場合もあるが、ご了解いただきたい。

合併の経緯に関して誤解があることは、すでに述べた。その時は、莊俞論文を主としてあつかった。莊俞論文が知られており広く利用されていたからだ。だが、時間順に配列しなおすと、莊俞よりまえに商務印書館の公式文書が位置する。触れないわけにはいかない。

商務印書館の株主に向けて、なぜ金港堂との合併を解消したのかの理由とその経過を説明する報告だ。

「商務印書館特別株主大会理事会報告」(1914)

原題は、「民國三年一月三十一日非常股東大會董事會報告」という。

本社は光緒二十三年に創業し、資本は微々たるものだった。光緒二十九年にいたり、ある日本商が資本を糾合し上海にやってきて書店を開設しようとした。本社はその頃編集経験、印刷技術ともにはなはだ未熟であり、外国人と競うことなどおそらくできないだろうというので、これと合併をしたのである。資本はそれぞれ半分を受け持つ、すなわちおのおの10万である。さらに人事管理(原文:用人行政)はすべて中国人が主宰する、日本の株主すべ

ては中国の商法を遵守しなければならないと明確に定めた【附録1】[商務印書館1993][汪家燊1993]

この重要文書の執筆者は、誰か。理事会の報告書だ。責任者の夏瑞芳が書いた原稿かとも想像することはできる。ただし、この報告書の別の箇所には、「この日本株を回収するということは、すべて夏社長が苦心さんたんしたことによりようやく目的を達成した」と書かれている。夏瑞芳が自分自身のことを、こう述べるであろうか。やや不自然だから、夏瑞芳以外の理事が書いたものだと私は判断する。

あとで詳しく見ていくが、後の発言者は、みなこの報告書に基づいて、文章を書いたり講演を行ったりしている。その発言者が、商務印書館の長老だったりするから、影響力は大きい。

「光緒二十九年にいたり、ある日本商が資本を糾合し上海にやってきて書店を開設しようとした」が誤解の元凶であることは、すでに指摘した通りである。

日本商の金港堂は、フラリと上海に合弁相手を捜しにきたわけではない。金港堂関係者は、以前からの予定どおりに商務印書館と合弁会社を設立するためにやってきた。独自に書店（ここでは出版社の意味）を開設しようという最初の考えは、だいぶ前にすてている。その間の事情を一番よく知っているのは、夏瑞芳にほかならない。しかし、夏瑞芳は、商務印書館の同僚に対して、事前に合弁の合意が成立していたなどの詳しい状況説明をしなかったのではないか。説明がないから、これを知る同僚もいない。誤解が生まれる根となった。

光緒二十三年は西暦1897年、創業時は数人が資金を持ち寄り、3,750元の資本だった。

光緒二十九年十月初一日（1903.11.19）に、商務印書館と金港堂の合弁が成立する。合弁は、商務印書館の創業から6年後のことになる。合弁の理由は、「本社はその頃編集経験、印刷技術ともにはなはだ未熟であり、外国人と競うことなどおそらくできないだろうというので、これと合弁をしたのである」と書かれている。この部分は、当事者が持っていた共通認識だ。だからこそ文書になっている。外国資本と競う実力がいないから合弁をするしかなかった。つまり迫られての

選択であり、合併をしなければ商務印書館は存続しえないと主観的に感じた結果だ。いやだ、嫌いだといったところで、結局は「生きるか死ぬか」の選択だと商務印書館の夏瑞芳は思った。好悪の感情が入る余地はなかったことが想像される。この部分は、重要だ。

しかし、事実は、単純に金港堂から迫られて合併をしたものではないことを私たちはすでに知っている。日本側の以下のような証言がある。

（商務印書館は）夏瑞芳の創設したもので、規模小さく且つ事業に不慣のため微々として振るはなかつたが、翁（注：山本条太郎）が紡績工場において示した整理振りを見て、経営者はこの方面にも一臂の力を仮さんことを翁に請ふた。よつて日支両国民の共同事業となし、資本金を二十万円に増加すると同時に、わが国から編輯出版、その他職場の熟練者を招いて実務を担当せしめた[山本条太郎1942:175]

山本条太郎は、会社建て直しの経営手腕で中国でも有名だった。夏瑞芳の方から山本条太郎に商務印書館の財政再建を依頼してきたというのだ。これが山本条太郎、すなわち金港堂側の見解だ。

商務印書館側は、競うことなどできないからしかたなく合併に同意したといい、一方の当事者である金港堂側は、商務印書館の方から援助を依頼してきたという。両者が述べる言葉は、異なる。ここから浮かんでくる推測は、ひとつだ。

合併の直接交渉には夏瑞芳があたった。夏瑞芳は、商務印書館の社長だ。商務印書館の経済状況を誰よりも明確に把握している。なにしろ夏瑞芳が、創業当時の営業担当責任者だった。金港堂と商務印書館を比較すると、編集印刷発行の実力は明らかに商務印書館の方が劣っているという認識もある。夏瑞芳は、自分から三井物産の山本条太郎に会社立て直しなり資金援助なりを依頼する。すなわち合併話を持ちかけた。その一方で、商務印書館の同僚には、金港堂が合併を希望している、と説明する。あるいは、金港堂が合併を迫っている、くらいは言ったかもしれない。最初から、言説に分裂があった。

「迫られての」「生き延びるための」「しかたのない」合併は、商務印書館に

被害者意識を生じさせる原因となる。合併を経て、日本人に商務印書館を乗っ取られるのではないか、という恐怖も容易に生まれるはずだ。

夏瑞芳が、日本側と中国側に見せたそれぞれに分裂した行動は、逆にいえば、商務印書館に生じた被害者意識と恐怖心の具体的な表われであったということもできよう。これは、資本金を対等に同額出資するという条件などとは関係のない、商務印書館自身の純然たる心理問題なのだ。

それぞれへの説明が違っていても、事実は変わらない。すなわち、資金技術経験ともに圧倒的な強さをもつ金港堂（といっても原亮三郎個人だが）に、商務印書館が屈伏して資本の傘下に入ったということだ。被害者意識と恐怖心を抱いたままの合併であった。しかし、合併後も「商務印書館」という名前を使用した部分に、中国側の面子を重んじた原亮三郎の配慮あるいは余裕を感じる。原亮三郎にしてみれば、個人の投資なのだから、会社の名称などどうでもよかった。

商務印書館は、相手にならぬ巨大な対象に屈伏したという心の傷（トラウマ traumaという言葉のほうが雰囲気があっていい、と思う人は、どうぞお使いください）をこうむってしまった。この心の傷を正面から認知することは、商務印書館にはできなかった。そこで対外的には、金港堂との合併については言わない、隠す、という方針をとって事実から目をそらしたのである。

これは、商務印書館自身の深層心理から発生する行動様式となった。

もと社員の朱蔚伯が証言している「商務（印書館）は、この事（注：金港堂との合併）を宣伝するつもりはなかったため、外部で詳細を知るものは多くない」[朱蔚伯1981:146]という言葉は、重視するに値する。

この理事会報告書は、もともと、日中合併解消を報告するものだから、合併のプラス面よりもマイナス面を強調しなければならなかった。プラス面を強調すれば、利益の多い合併をなぜ解消してしまうのか、と株主から攻撃されることになろう。金港堂との合併により、商務印書館が、経験豊富になり技術が精密になったと簡単にふれる程度だ。本当のことをいえば、日本人との合作がうまくいき、商務印書館は金港堂よりも巨額の利益を得ている。しかし、報告の文面からは理解できない。

だからといって、合併のマイナス面を強調しすぎれば理事会の経営責任が生じ

かねない。ゆえに、金額にはあらわれない編集印刷発行のノウハウ獲得をうたい、本来は支払わなくてはならなかった合弁解消資金をいかに値切って節約したかを株主がわかるように説明している。文章を読めば理解できるのだから、実際の株主大会では、よりあからさまに解説をしたことであろう。商務印書館にとって金港堂は、すでに利用価値のなくなった存在であることを強調したに違いない。

つまり、私のいう商務印書館理事会の完全勝利宣言である。

事実は完全勝利宣言であるにもかかわらず、それが率直に表明されないところに商務印書館首脳の複雑にいりくんだ心理状態を見ることができる。

「中国の商法を遵守する」という記述は、どうか。中国の法律を日本株主が遵守するのは当然のことで、なぜここでわざわざ言っているのかわからない。租界を問題にしているとしても、商務印書館の中心は、閘北にある。

「人事管理はすべて中国人が主宰する」という箇所は、わかっているようで、具体的には何を指しているのか。人事権は、商務印書館側にあったといたいのかもかもしれない。説明がないから、これも意味が不明だとせざるをえない。意味が不明だからこそ、のちにこの部分を勝手に解釈する商務印書館関係者および研究者が出てくる。

金港堂との合弁は、外部に向かっては言わないにしても、商務印書館内部では、触れないわけにはいかない。心の傷を隠して、なんとか自尊心を取り戻したい。関係者は、言いつくろおうと、商務印書館理事会報告の「人事管理はすべて中国人が主宰する」という部分を引っ張り出し、拡大解釈をほどこすことにした。

3 人事権

中身はまったくの合弁企業でありながら、表面上はあたかもそうではないようにふるまう。出資金でいえば対等な合弁でありながら、商務印書館には大きな権限を与えられていて、平等ではなかったことを強調する文章が発表される。 莊俞論文（1931）と 高翰卿講演（1934）である。

莊俞論文（1931）

莊俞論文は、商務印書館の35周年記念記念冊に掲載された。日中の合弁会社になるに際し、条件があったという。

締結した条件は、決して事ごとに平等（原文：平均）であるというものではなく、たとえば支配人および理事はすべて中国人（原文：華人）であり、ただ一、二の日本人は列席して傍聴することができるだけで、招聘した日本人は、随時、辞めさせることができる、などである[莊俞1931:3]

理事会報告の「人事管理はすべて中国人が主宰する」部分を、莊俞は、上のように解釈した。中国人が主宰するというのなら、これは、平等な契約ではない。商務印書館に有利な条件であろう。「すべて中国人」という部分から、「理事はすべて中国人だ」と断言したのである。莊俞は、「理事はすべて中国人だ」という事実がないことは、承知のはずだ。理事には、日本人も就任していた。根拠がないのは明らかににもかかわらず、莊俞は、あえて虚偽の証言を行なったのである。莊俞は、1903年に商務印書館に入社している。古参の人物だからこそ創業時のことを回憶して文章を書くことができる、と誰もが思う。根拠のない文章も、賛同者が出現することにより、強固なものとなる。高翰卿講演である。

高翰卿講演（1934）

高翰卿、張蟾芬のふたりとも商務印書館創業時に出資している人物だ。高翰卿が美華書館をやめて商務印書館に入社したのは、1909年以前だと推測される。商務印書館内部においては、元老的な存在であったと考えることができる。そういう人が、商務印書館内部の人間にむかって、商務印書館と金港堂の合弁について以下のように講演している。

締結した条件は、決して事ごとに平等（原文：平等）であるというものではなく、我が方にはふたつの主要な条件があった。一は、支配人および理事はすべて中国人（原文：中国人）であり、日本人はひとりを監察人に推挙す

るだけだ。二は、招聘した日本人は、随時、辞めさせることができる、というものである。(張蟾芬氏が補充していわく、当時、理事に当選したのは、当然ながらすべて中国人であり、ただ監察人ふたりのうちひとりが日本人であった。合併後、最初に推挙された監察人は、日本人が田辺輝浪であり、我が国は張蟾芬である)[高翰卿1992:8]

高翰卿のこの文章は、莊俞のものと驚くほど似ている。高翰卿は、莊俞の文章を下敷きにして講演会で話したのではないか。これを見ての私の感想だ。ということは、商務印書館の元老でありながら、当時の事情を正しく説明していないことになる。事情を知らなかったとは考えにくい。張蟾芬の注意書きも、「理事はすべて中国人」であったことを強調する。莊俞あるいは張蟾芬と同じく、本当のことを言いたくなかったし、言うつもりもなかった。この講演は、商務印書館発行所における生徒を対象とした、ごく内輪のものだったから、なおのことだ。

理事は、すべて中国人である、と長老3人はいい切っている。だが、日本人も理事であった事実がある。日中双方から理事が就任している。1903-1907年は、夏瑞芳、印錫璋、および日本側から原亮三郎、加藤駒二が、1907-1909年には、夏瑞芳、印錫璋、張元濟、および日本側から原亮一郎、山本条太郎がそれぞれ理事をつとめた。日本側理事を排除するのは、1909年以降である。

莊俞、高翰卿、張蟾芬ともに、この事実を知っているにもかかわらず、虚偽の証言をした。

莊俞、高翰卿、張蟾芬の3人は、日本人の理事がいなくなる1909年以降の事実だけを述べて、日本人の理事はいなかったと主張している。1908年以前の実実を無視するのは、あきらかに間違いだ。

間違っていることをあえて主張するのは、なぜか。

当時の商務印書館側に存在した「当時支那人八日本人ト合同セバ実権全ク日本人ニ帰センコトヲ恐レ」[東亜同文会1908a]、あるいは「実権の日本人に帰するを恐るゝもの多く」[中華道人1919:163]という状況が、実際には、すでになくなっていくにもかかわらず、その恐怖心が意識の中では1930年代まで尾を引いているからとしか考えられないのだ。

さらに、莊俞、高翰卿の2論文が書かれたのが1930年代であったことを考えれば、同情しないわけではない。満洲事変、上海事変と、日本と中国のあいだに戦争があった時代だった。上海事変では、商務印書館の工場、編訳所、東方図書館、尚公小学などが爆撃され、巨大な損失を出したうえに営業停止を余儀なくされている。そういう時代に、商務印書館には、昔、日本人の理事もいて、中国人との関係もすこぶるよかったです、大もうけして発展の基礎が日中合弁時代に築かれました、などと本当のことを講演できるはずがない。日本憎しで商務印書館の過去をも消去したい気持ちもわかるつもりだ。

しかし、後の研究者が、何の疑いもなく、時代背景も考慮せずに、莊俞、高翰卿の文章を引用して、人事権に関するふたつの条件だけを材料にして商務印書館に絶対的に有利な合弁であったと書くとすれば、それはまた別の問題になる。

4 変化しつつある商務印書館研究の現在

日中合弁時代の商務印書館について、従来の見方を一変させたのが、鄒振環論文である。転換点の研究論文ということができる。

鄒振環「商務印書館与金港堂」(1992) [鄒振環1992b] (先駆論文に林熙論文<香港『大成』雑誌1982年連載>があるというが、未見。参考[汪家燊1991, 1992a] [稲岡勝1995a])

鄒振環論文の論旨は、以下の通り。

鄒振環は、まず過去に存在した研究の紋切型を批判する。19世紀末から20世紀初頭にかけて、中国にはいくつかの「中外合資」企業が出現した。しかし、(樽本：ここからがいつもの紋切型になるのだが)近代中国は西方列強の残酷な掠奪にあり、特に帝国主義が中国において取得した特権により、中国の廉価な労働力と豊富な原料資源を十分に利用して、中国人民を搾取したという歴史事実から、当時の中国には平等な「中外合資」など存在しなかったし、いわゆる「中外合資」企業の経営管理権は外人の手中に握られていた、という結論を大部分の研究者は喜

んで受け入れた（樽本：一文が長いのが特徴だ）。

紋切り型を受け入れた研究者は、あとは簡単である。スローガンを叫んでいれば、事実を掘り起こす苦勞をせずに文章を書くことができる。考えなくていいのだから、これほど楽な仕事はない。

鄒振環論文の小さな欠点から指摘しておく。鄒振環は、教科書疑獄事件に連座した長尾雨山、小谷重、加藤駒二に対して金港堂の原亮三郎が責任を感じ、上海の商務印書館に投資をして彼らの働き場を用意した、というマンイング・イブの誤った説を引用する[鄒振環1992b:116]。そればかりか想像を逞しくして次のようにいう。当時、双方が（ここからすでに間違っている）合資の事実を謳いあげなかった理由は、日本の投資者は「教科書スキャンダル」に関係した者がどうなったか知らせたくなかったし、商務印書館も同様に、賄賂の授受者である教授と編集者を雇用したことを知られたくなかったからだと説明する。

事実が鄒振環説を否定する。

日本では、金港堂と商務印書館が合併会社となった事実は、いくつもの文献に個人名まで明示して紹介されている[樽本照雄1995b]。また、商務印書館のあの記念すべき出版物である『最新初等小学国文教科書』の出版広告には、「日本文部省図書審査官兼視学官小谷重君高等師範学校教授長尾楨太郎君」と実名を出して広告の宣伝に利用している事実がある。これを見れば、鄒振環の推論が成立しないことが明らかであろう。

教科書編集に日本人を招聘したことを高らかに謳いながら、金港堂との合併について商務印書館が一言も触れないのはなぜなのか。これが問題なのだ。

結論は、ただひとつ。商務印書館は、金港堂との合併を心の奥底では望んではいなかったのである。

鄒振環論文には、部分的に誤りはある。しかし、鄒振環論文が評価されるべき論点は、商務印書館の教科書、雑誌などの印刷編集発行に日本人が重要な役割を果たしていたという事実を事実のままに認めている点である。冷静な執筆姿勢だということができる。

ついでにいえば、この時期に発表された中国人研究者の論文のなかに、日本人の協力に言及するものがある。たとえば、王益著、大川ひろみ、趙京右訳「中日

出版印刷文化の交流と商務印書館」(『タイポグラフィックス・ティ』第156号 1993.12.10)も、商務印書館に協力した日本人について詳細に紹介している[王益1994]。研究論文としては当然である。しかし、そうしない論文が多数存在しているなかには、その厳密な執筆姿勢は特に目立つ。

改革開放政策が、商務印書館と金港堂の合併について再評価を迫っている、と鄒振環はいう。外国資本を利用して民族経済を発展させることが、外国資本の浸透を最終的には排除することになる。この視点に立てば、商務印書館は、日本の資金と技術をうまく利用し、日本の進んだ管理と編集の経験を吸収した。また、当時の中国において「利益が少なく弊害が多い」という状況のもとで、外資を「自分のために用いる」という原則を堅持するのに成功している。20世紀初頭の中日の成功した合資は、短期間のうちに商務印書館を印刷を主体とした小さな工場から、印刷編集出版発行という四位一体の大型近代出版機構に発展させた、というのが鄒振環の結論なのである。

鄒振環論文は、外国資本導入を積極的に行なっている改革開放政策の時代だからこそ出現した論文だということができる。現在の外資導入は、正しい政策だから、過去の外資導入もまたプラスに評価しなければならない。

商務印書館が金港堂と合併をしていたという事実を、無視する、あるいは軽視する従来の傾向からすれば、この鄒振環論文はまことに180度の方向転換を示したといっていい。

商務印書館の日中合併企業を積極的に評価するばかりか、さらには、日中合併後の主導権は商務印書館が握っていた、と「資料にもとづいて」強調するのは、汪家焜論文だ。鄒振環論文と軌を一にしているように見えて、考えてみれば、過去の莊俞論文、高翰卿講演にもういちどたちもどってしまったということだ。その分、ねじれている。

汪家焜「主権在我的合資」(1993)[汪家焜1993]

汪家焜論文は、「主権はわれにある合併(原文:合資)」と題し、3部に分けられる。

「一、感心させられる胆力と知謀」では、夏瑞芳が、印錫璋との人的関係で山

本条太郎を知り、山本条太郎の岳父である金港堂原亮三郎の投資を受け入れた経緯を述べる。教科書編集の経験が浅かったし、印刷技術方面でも日本よりも遅れていたところで、自らの需要を満たすためには日本人と合資をするという夏瑞芳の決断力を賞賛する。日本における研究成果を全面的にふまえた論述である。

この部分で、気のついたことを書いておく。夏瑞芳は、印有模の仲介で修文書館（汪家熔は、修文印刷局とする）の器材を購入したことがある。その資金はどこから持ってきたのか。廉価だというのだが、いったいいくらだったのか。汪家熔は、説明していない。

夏瑞芳が、使い物にならない翻訳原稿をつかまされたとか、ゴム株投機で失敗したことは、汪家熔も認める。以前は経営不振説を否定していたのだから、汪家熔は考えを変えたのだ。私が思うに、仕事上の失敗など誰にでもある。そのことと夏瑞芳の人柄とはなにも関係はない。しかし、夏瑞芳が出版で金もうけしようとしたとか、教養のない労働者だから失敗をしたと書く人たちがいるが、そんなことはない、と汪家熔は理由にもならない反論をしている。私が汪家熔論文に期待するのは、翻訳原稿でいくらの損失を出したのか、ゴム株投機の失敗でいくら資金を失ったのか、その資金はどこから出たものか、などなどについての具体的な事実と数字なのだ。中国で資料発掘を続け、それにもとづいて発言しているのは、汪家熔を除いては誰もいないといってもいいくらいだ。期待は大きいといわざるをえない。

「二、主権はわれにあり」こそ論文の表題にも使用しているくらいだから、重要部分だ。主権が商務印書館側にあったということが、特別重要だという。汪家熔が抛る資料というのが、前出の高翰卿講演である。汪家熔が呈示するのは、例の「締結した条件は、決して事ごとに平等であるというものではなく、我が方には二つの主要な条件があった。一は、支配人および理事はすべて中国人であり、日本人はひとり監察人に推挙するだけだ。二は、招聘した日本人は、随時、辞めさせることができる、というものである」だ。

すでに述べた通り1908年以前は、日本人も理事になっているという事実がある。汪家熔自身、過去に何度も日本人理事について触れているし、該文でも歴年理事一覧を出しているにもかかわらず、なぜ、その中に日本人がいる事実を無視する

のか。思い込んでしまい、日本人の存在が目には入っていても、高翰卿の「支配人および理事はすべて中国人である」という部分にひきずられてしまったのだろうか。

さらに3箇条、つまり、(1)人事管理は中国人がすべてを主宰する、(2)日本の株主は中国の商法を遵守する、(3)招聘した日本人は、随時、辞めさせることができる、を示して「中国側は主権を喪失しておらず、日本側には特権がなかった」というのだ。

2の中国の商法を遵守するというのは、これは当然のことである。どこの国でも主権を有している限り、外国企業がその国の国内法を遵守することを要求する。常識すぎて理由に挙げる意味がわからない。それとも商務印書館は、上海の租界にあったと汪家熔はいいたいのだろうか。発行所は上海棋盤街中市に置かれていたから、ここは英租界だ。しかし、商務印書館の中心をなしていた印刷所は閘北宝山路にあった。

1と3を合わせて、人事権は商務印書館側がにぎっていた、と汪家熔は主張したいのだ。日本側の理事である原亮三郎、亮一郎親子は、日本にいることの方が多い。名目的な存在だということもできる。加藤駒二が日本に帰国したのはいつか今のところ不明だが、理事を山本条太郎に交代しているところを見ると、帰国したあとを山本が埋めたようにも見える。そもそも金港堂の投資とはいっても、原亮三郎が個人的に行なっている事実を思いだしてほしい。個人の投資だったからこそ、原亮三郎は、商務印書館という名称にこだわらなかった。上海で中国人が経営する商務印書館に、人事管理について口をさしはさむ気もなかったし必要も感じなかったのではないかと思う。せいぜいが印刷技術の向上に、日本の技術者を呼んでほしいと商務印書館から依頼があれば、これに応じたくらいだと想像するのだ。

対等の合弁であることを示すためにだけ理事を中国側と日本側から2名ずつ出していたのではないのか。対等なのだから日本側に特権があるはずがない。同様に中国側にも特権などあるはずがなかった。

状況が変化するのは、1909年以降だ。これより日本人を理事にしなくなり、すべての理事に中国人が就任することになった。その理由は、資本の分担に不均衡

が生じたためであろう。そのような方針を、商務印書館側が定めたと考えられる。1907年時点で、商務印書館の資金が49万8,000元に対して、日本側は25万2,000元となっている。商務印書館は日本の約2倍の資金をもつにいたった。

ただし、だからといって商務印書館が完全に実権を掌握しており、自由に何でもできた、ということもできない。

鄭孝胥は、張元濟から、夏瑞芳の給料と事務費を増額するため、日本株主宛返信に鄭孝胥の署名がほしいといわれている[鄭孝胥1993:1223]。1910年1月14日のことだ。当時、日本人の理事は、商務印書館から排除されている。報告だけにせよ、夏瑞芳の給料と事務費増額についても日本側に連絡が必要だった。この1件を見るだけでも、商務印書館が金港堂との合弁を無視できるような状況では、実際はなかったことが理解できる。

汪家燊は、なぜ「主権」とか「特権」にこだわるのか。もし、強大な主権が本当に商務印書館にあるのだったら、日本株を回収する際、長期間にわたって金港堂側と交渉を重ねるはめにおちいることなどなかったであろう。

莊俞、高翰卿論文が、合弁は平等ではなく商務印書館に有利なものだった、と事実ではないことをあまりに強調するものだから、汪家燊は、時代背景を無視して影響されすぎたのではないか。

汪家燊論文に不備な点があろうとも、それをはるかに上回る新しい事実を提出しているからこそ、私は汪家燊論文を高く評価する。

たとえば、日中合弁の10年間にわたる営業上の数字を明らかにした。総資本、株式利息など基本数字であるが、これまで公表されたことはなかったのだ。

論文を読んで、汪家燊が、かなり客観的に事実を事実として見る努力をしているように感じる。しかし、株式利息にしても、日本側よりも結果として圧倒的に商務印書館の方に有利な合弁であったのにもかかわらず、汪家燊が「主権が我が方にあった合資」などといういわでもがなのことをなぜ強調するのだろうか。どこかネジレていて、その分、複雑な心理状態を呈しているとの印象を受けるのだ。

汪家燊が、日本側の利益のみを表にして細かい数字を掲げ、商務印書館側の利益については表にも載せず明細を示さず沈黙するのはなぜか。

商務印書館に主権があったことを主張すればするほど、その裏返しで商務印書

館は合併事業の被害者であった、と汪家熔が強く感じていたのではないかと思ってしまう。その矛盾が論文に現われていて、読んだあと、スッキリしない気分になる。

最大の受益者商務印書館が、金港堂との関係において、あたかも被害者であるかのような扱いを要求している。商務印書館の抱く不合理な被害者意識を私は感じる。これは何なのか。

5 事実と意識 心の傷は癒されない

資金不足に苦しんでいたところに日本側の投資がある、日本から専門家が呼ばれて印刷技術の向上もある、教科書編集に経験豊富な長尾雨山、小谷重、加藤駒二たちによって編集のノウハウを教えられる、出版発行にも経験の蓄積ができる、中国人と日本人の関係も良好だったし、さらには日本側に比較しても巨額の利益を得ることもできた。合併の10年間に、商務印書館が得た株式利益の総額は約95万元であるのに対して、金港堂のそれは約52万元だった。商務印書館は結果として日本側と比較しても約1.8倍という巨額の利益を得たというのが、否定することのできない事実である。

日本との合併が始まってから、商務印書館の印刷編集出版発行の各事業は、飛躍的な伸びを見せ、のちのさらなる発展の基礎を築くことになった。商務印書館は、金港堂という外国資本を十分に利用しつくした。外国資本との合併事業としては、模範とすべき実に見事な事例であった。

ただし、商務印書館を取り囲む環境には、事実を認めにくい政治状況、歴史背景があったのは確かだ。だからこそ、商務印書館の創業者であり当時の責任者たちは、日中の合併会社である事実を外部的に向かって堂々と宣言できなかつたし宣言するつもりもなかつた。

だが、秘密は、隠そうと思っても（あるいは思うから）漏れる。それゆえの苦汁を飲まされもした。清末には、日本の資本が入っているからという理由で、政府機関の教科書印刷から排除されたり、民国後は、中華書局より攻撃をうけたり、

湖北では図書審査よりはらずされるといったこともあった。金港堂との合併を機に、香港と清国農工商部に登録し、中国の会社として見てもらうように努力した[中華道人1919:163]が、役に立たなかった。煮え湯を飲まされるたびに、日中合併を受け入れざるを得なかった心の傷が深くなる。被害者意識が、ますます強く固く沈殿する。

日中合併時代は、いくつかの困難はあったが、商務印書館にしてみれば経済上は基本的に順風満帆の時期であったことを強調しておきたい。

客観的に見れば被害者であろうはずがない。しかし、迫られて合併会社になったと意識する商務印書館が受けた心の傷は、経済的利益が巨額であったとしても、内部の人間関係がいくら良好であっても、それにより癒されるものではない。心の傷による被害者意識がさらに深まった。その原因をさぐれば、資本、技術ともに圧倒的であった金港堂という日本資本に呑み込まれるのではないかと、という合併開始当時の商務印書館首脳が感じた恐怖心にたどりつく。恐怖による心の傷から生じた被害者意識が、その時々で事実とは矛盾したことを商務印書館関係者にしゃべらせたし、今もそうさせている。

商務印書館の精神構造は、大きくは、外向けの顔と内向けの顔の二つに分けることができる。

外向けの顔は、外部の状況にあわせたもので、日中合併の事実を否認し、それが無理なら無視するか、軽く触れる程度という態度を商務印書館にとらせる。日中戦争を経て、自力更生が叫ばれる「文化大革命」中はなおのことだった。「文革」終結後もその態度は維持される。

内向けの顔は、内部でさらに二つに分裂する。表面に現われるものと奥に隠れている部分だ。

表面のものは、虚偽であることを承知しながら、商務印書館が優位に立った合併であったと強弁する。あるいは、日本株を回収して合併を解消した時、日本側は莫大な利益を得たと主張し、いかにも商務印書館が損害を受けたかのように印象づけようとする。商務印書館優位の合併と、金銭的に損害を受けたと思わせるのは、別物のようで実は根はひとつだ。損害を受けたように思わせようとするのは、合併の被害者であるという意識であり、その被害者意識が、反動としてあり

もしない商務印書館優位の合併という主張を強調する。

奥にひそむのは、日本側よりもはるかに巨額な利益を得たという事実だ。10年間の合併で商務印書館は、株式利益だけで日本側の約1.8倍の利益をあげたという数字を先に示した。これは、今まで誰も指摘していない。この事実こそ、一世紀近くにわたって商務印書館が隠しておきたかったことである。材料を公表した汪家燭でさえ、日本側の収益のみを強調し、商務印書館の収益については「中国側についていえば、株主たちは日本側とおなじく高い利潤を得た。これは以前の商務印書館の歴史において空前にして絶後のことだった」[汪家燭1993:140-141]と書くだけだ。具体的な数字を出さず、それにつづいて、編集経験と印刷技術の向上のほうが「目に見える28.78%の経済利益よりもさらに貴重である」といって、その利益総額の莫大さから目をそらせようとしている。

日中合併を無視する外向けの顔、それに対して、商務印書館に有利な合併であった、日本側は莫大な利益を得た（汪家燭は、「双方が得をした合併」という）と主張する内向けの顔、さらには、商務印書館の方が大もうけをしたという奥の事実によって商務印書館の意識は構成されている。奥の事実を隠したまま、前2者は、その時代の情勢により流動的に出現したり隠れたりする。

商務印書館が示したこの内外ふたつの反応は、すべて金港堂との合併によってもたらされた癒されることのない心の傷が原因なのである。

附 録

民國三年一月三十一日非常股東大會董事會報告

【電字版追記】本資料は汪家熔氏提供。『清末小説から』第30号（1993.7.1）に掲載のち、汪家熔「主權在我的合資 一九〇三年～一九一三年商務印書館的中日合資」（『出版史料』1993年第2期（総第32期）1993.7^マ）に本文を引用。同論文は以下に再録。汪家熔『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京・中国書籍出版社1998）。宋原放主編、汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』第3卷（武漢・湖北教育出版社2004.10）。

「二十、中華民國三年一月商務印書館股東非常會議」（梁長洲（汪家熔）整理「商務印書館股東會記錄（選）」（同上に収録）の中に「董事會關於收回日本股份報告」と題して収録。ちなみに「據從老股東處搜集的股東大會記錄印件整理」という。

張樹年主編、柳和城、張人鳳、陳夢熊編著『張元濟年譜』（北京・商務印書館1991.12.117頁）に「2月1日《申報》、《商務印書館股東會記錄》」あり。

本公司創業於光緒二十三年，資本甚微。至光緒二十九年，有日商糾合資本來申開設書肆。本公司彼時編輯經驗、印刷技術均甚幼稚，恐不能與外人相競，乃與之合辦。資本各居半數，即各得十萬。並訂明用人行政一歸華人主持，所有日本股東均須遵守中國商律。資本既增，規模漸擴，利益與共，辦事益力。自是以來，吾華人經驗漸富，技術漸精。嗣後增加股份亦華人多而日人少。至民國二年[底]，華人股份已居四分之三，日人股份僅得四分之一，即三千七百八十一股。日本股東對於公司毫無干涉，遇事亦無不協同維持。

收回之說本屬自擾。但同業競爭甚烈，恆以本公司外股為藉口，詆排甚力，公司因大受障礙。即如前清學部編成中學書，發商承印，獨不與本公司，謂其有日本股之故。近來競爭愈烈。如江西則登載廣告，明肆攻擊，湖南則有多數學界介紹華商自辦某公司之圖書，湖北則審查會以本館有日本股，故扣其書不付審查。如此等

事不一而足，此不過舉其大概。每逢一次之抨擊，辦事人必費無數之疎通周旋，於精神上之苦痛不堪言喻。故由董事會議決，將日股收回。此事關係重大，本應召集股東會籌議辦法。只因事機宜密宜速，故由董事會擔負責任，先行決議。此事應請股東原諒。

夏總經理於去年十月親往日本與日股東商議辦法。日股東顧全大局，情願將股本讓度，特派代表福間甲松君就滬商議。十一月間開始談判交涉，至月余始行議定。據日本股東之意，[民國]二年營業預計約二百八十萬元，較之元年增加約一百萬。就中尤以本館出版各書所增最多，約比元年加至一倍。預算二年官利余利當倍於元年，每股官余利當在三分左右，每股本息應值百三十元。日本股東又以本公司開業十八年，編輯稿費八九十萬元，[資產盤存]僅作二萬余元；廠屋機器原價六十八萬元，僅作三十五萬元；招牌信用所值尤巨。日本股東既將股票賣出，此項利益全為華人所有，要求增加。經十數次之談判，每股增加十六元五角，以抵折扣及招牌之利益。並一切雜費，合計以股息抵過，約合八萬余元。於三年一月六日簽字，先付半價，其余於六個月內還清。此收回日股之大略也。

本公司收回日股需款甚巨，本擬將廠屋機器暫作押款，適值陰曆年關，市面金融頗緊。又因公司正在發達，流動資金不能不格外多備，以為緩急之需。日本股份收回原為轉售本國人之用。本公司信用素著，願購股份者多紛至沓來。本公司正在需款之時，未及候至特別股東會，先行收股。此事亦祈股東鑒原。現在收到新股已過半數，約二十萬元。尚余十余萬元，應俟報告完畢再行提議。惟尚有一言不能不預先說明：日本股東所說每股官余利可得三十元，原屬預計之數。現在各分館紅賬尚未寄到，俟到齊結清，方知真確數目。如官余利不及三分，則所貼補日本股東之數尚不止八萬余元。其實在情形應俟股東常會再為報告。

此項收回日股均系夏總經理苦心經營，乃得達此目的。不意大功告成，本公司可免去同業傾軋最為有力之一題目，朝登廣告而夏總經理即於是夕在公司門首遇害。此誠公司之最不幸事。想眾股東聞之亦必惻然者也。

商務印書館『最新国文教科書』第1冊本文

1 最新国文教科書1906年版 活版線装本 絵図は石印

学部第一次審定

福建長樂高鳳謙、浙江海塩張元濟校訂

江蘇武進蔣維喬、陽湖莊俞編纂 上海商務印書館印行

Commercial Press's New Primary School Text Books.

Chinese National Readers, WITH ILLUSTRATIONS. No. .

APPROVED BY THE BOARD OF EDUCATION OF CHINA.

SHANGHAI:Printed and Published by the COMMERCIAL PRESS, LTD.1906

奥付なし

柱 最新国文教科書 第一冊 (数字) 初等小学堂課本 商務印書館印行

編輯初等高等小学堂国文教科書緣起

編輯大意 商務印書館編訳所同人啓

2 最新国文教科書1908年版 木版線装本 絵図も木版

表紙に学部審定 初等小学用 第一冊

扉は、1906年版と同じ

No. . TWENTIETH EDITION. とある

奥付：光緒三十年二月初版 / 光緒三十四年二月四二版 定價每本大洋一角五分

編纂者 陽湖莊俞、武進蔣維喬、陽湖楊瑜統

3 最新国文教科書1912年版 石印線装本

表紙の書名に「訂正」をかぶせる。中華民國初等小学用

英文表記はない

奥付：中華民國元年正月訂正初版 第一冊定價大洋壹角伍分

編纂者 武進蔣維喬、陽湖莊俞

校訂者 長樂高鳳謙、海塩張元濟

本 文

絵図

第1課	1才	天地日月	山水土木	/自然
第2課	1ウ	父母子女		/動物關係(人間も動物だからそうする)
	2才	井戸田宅		/自然
第3課	2ウ	耳目口舌	人犬牛羊	/動物
第4課	3才	上下左右	大小多少	/方向、量
第5課	3ウ	一二三四五	六七八九十	/数
第6課	4才	日入	月出 田土 池水	/自然 動詞文
	4ウ	宅内	戸外 几上 井中	/方向
第7課	5才	大牛	小犬 丈尺 寸分	/動物、量
	5ウ	耳孔	指爪 眉目 手足	/動物
第8課	6才	山高	水長 風多 雨少	/自然、量 形容詞文
	6ウ	人首	犬足 牛角 羊毛	/動物
第9課	7才	水火	土石 木工 田夫	/自然、動物
	7ウ	竹高	林茂 天冷 月明	/植物、自然
第10課	8才	父子	母女 兄弟 朋友	/動物關係
	8ウ	山下	地上 城市 村舎	/自然
第11課	9才	布帛	柴米 米五斗 布一丈	/物、量
	9ウ	文字	姓名 左五指 右五指	/文化、動物
第12課	10才	日夜	旦夕 天初明 人初起	/自然
	10ウ	東西	南北 日西下 月東上	/方向、自然
第13課	11才	伯父	叔父 我姉姉 我妹妹	

		長男	幼子	好哥哥	好弟弟	/ 動物関係
第14課	11ウ	青草	紅花	池草青	山花紅	/ 植物
	12才	春風	夏雨	春風吹	夏雨降	/ 自然
第15課	12ウ	先生	弟子	良朋至	好友来	
		姉長	妹幼	坐草上	立花前	/ 動物関係、方向
絵図						
第16課	13才	烏飛	兔走	烏出林	兔入穴	/ 動物
	13ウ	虎爪	馬足	虎力大	馬行速	/ 動物
第17課	14才	長枕	大被	帳中枕	牀上被	/ 物、量
	14ウ	坐船	乘車	水行船	陸行車	/ 物
第18課	15才	池魚	野鳥	鳥在林	魚浮水	/ 動物
	15ウ	加冠	披衣	布七匹	帛二丈	/ 物、量
第19課	16才	杏花	柳枝	門外柳	村前杏	/ 植物
	16ウ	白米	黄豆	米八斤	豆三升	/ 植物、量
第20課	17才	皮毬	石筆	姉作文	妹習字	/ 物、動物
	17ウ	瓦屋	柴門	向城垣	居村市	/ 物
第21課	18才	晨星少	朝日紅	好風来	白雲去	/ 自然
	18ウ	木上雀	村中犬	紡紗女	采桑人	/ 動物
	19才	絵図				
第22課	19ウ	有客至	入室内	我迎客	立几側	/ 動物
	20才	父見客	問姓名	父坐右	客坐左	/ 動物
第23課	20ウ	首向前	兩手平	伸左足	屈右足	/ 方向
	21才	目能視	手能指	口出言	舌知味	/ 動物
第24課	21ウ	庭前竹	宅畔松	舍南北	城東西	/ 植物、方向
	22才	春風至	百草青	桃開花	竹生筍	/ 自然、植物
	22才	1908年版は、文字と絵の位置が異なる。				
第25課	22ウ	書案上	紙一幅	羊毛筆	兩三枝	
		先生言	每日間	宜習画	宜作字	/ 物、動物
	20ウ	1912年版は、「宜写字 宜習画」と字句を変更する。				

- 第26課 23才 几上硯 硯有池 日射入 硯水乾 / 物、自然
 23ウ 持粉筆 画黒版 伸左手 拭白粉 / 物、動物
- 第27課 24才 伯母問 叔母答 夜早眠 朝快起
 能耐苦 能作事 好男児 大丈夫 / 動物
- 第28課 24ウ 每五人 為一列 我居長 手持刀
 我為将 向前行 彼為兵 在後行 / 動物
 25才 絵図
- 第29課 25ウ 一年四時 曰春曰夏 曰秋曰冬
 正月孟春 二月仲春 三月季春 / 自然
- 第30課 26才 庭外海棠 窗前牡丹 先後開花 / 植物、方向
 26ウ 姉打皮毬 妹上秋千 同遊同止 / 動物
- 第31課 27才 地面多水 有海有江 有河有湖 / 自然
 27ウ 門外垂柳 有池有泉 有魚有鳥 / 植物、自然、動物
- 第32課 28才 日光初出 沙鳥上下 孤帆遠来 / 自然、動物
 28ウ 平田麦茂 四面皆青 中伏一雉 / 植物、自然、自然
- 第33課 29才 雨初晴 池水清 遊魚逐水 時上時下 / 自然、動物
 29ウ 一童子 持釣竿 伸入池中 魚皆散去 / 動物
- 第34課 30才 直為柱 横為梁 屋上有梁 屋中有柱
 渴思飲 飢思食 南人食米 北人食麦 / 物、動物、植物
- 第35課 30ウ 左手執弓 右手抽矢 向空中 射飛鳥 / 動物、方向
 1908年版は、下部が印刷ミスで文字がない。手書きの毛筆で文字を補っている。
 ゆえに「飛」を間違う。
 31才 肩荷快槍 腰垂長刀 挽匹馬 出城去 / 物、動物
- 第36課 31ウ 画眉叫 孔雀飛 鹿能走林 猴能升木 / 動物
 絵図 1906年版には、ない。
 32才 柏十丈 屋三間 月季両盆 石硯一方 / 植物、物、量
- 第37課 32ウ 黄牛背 坐牧童 口吹短笛 東西往来 / 動物
 33才 一黒豕 臥泥中 夕陽在山 有人喚豕 / 動物、自然
- 第38課 33ウ 棉成布 糸成帛 布可為衣 帛可為帶

- 水生珠 山生玉 明珠形圓 良玉色白 / 物、自然
- 第39課 34才 我長兄 客他方 一紙家書 問兄好安 / 動物
- 32才 1912年版は、「問兄安好」と字句を変更する。
- 34ウ 春光去 兄不回 弟居家中 思兄無已 / 動物
- 第40課 35才 四月天 大麦黃 南風入戸 单衣不冷 / 自然、植物
- 35ウ 雨水足 田工忙 婦女采桑 兒童送飯 / 自然、動物
- 第41課 36才 几上有茶 茶味清香 一杯奉客 一杯自飲 / 物、量
- 36ウ 案上有書 書中有画 母取一冊 指画教我 / 物、量、動物
- 第42課 37才 五月五日 名天中節 先生放假 弟子回家
- 父母兄弟 設宴家庭 角黍肩形尖 黄魚味美 / 自然、動物關係
- 第43課 37ウ 瓦屋兩間 四面短垣 前有草場 後近茅舍 / 物、方向
- 38才 兄弟二人 同一学堂 朝來誦習 夕去遊散 / 動物關係
- 第44課 38ウ 姉執我手 降階看花 我欲采花 姉急揺手 / 動物關係
- 39才 兩客同來 一老一少 我問客姓 客問我年 / 動物關係
- 第45課 39ウ 早起披衣 同立庭畔 仰視浮雲 四面一色 / 動物、自然
- 40才 三兩飛鳥 出沒雲間 紅日上升 雲去天青 / 動物、自然
- 37ウ 1912年版は、文字を1頁に集め、しかも「二童早起」と字句を変更する。
- 第46課 40ウ 夏日晴明 采果庭前 黃梅解渴 桃李清甘 / 自然、植物
- 41才 筍老成竹 削竹為筐 持筐閒行 拾豆桑下 / 植物、動物
- 第47課 41ウ 日初出 兒童上学去 日將入 兒童回家來 / 自然、動物
- 42才 哥哥年九歲 打大鼓 妹妹年七歲 持竹刀 / 動物關係、物
- 第48課 42ウ 黑雲飛 大雨至 雨後見虹 虹現雲散 天氣晴明 / 自然
- 43才 夕陽紅 放学回 左持紗巾 右執紙扇 散步庭中 / 自然、動物
- 第49課 43ウ 猫大鼠小 鼠見猫 入穴中 猫伺几側 鼠不敢出 / 動物
- 44才 犬大猫小 猫見犬 登屋上 犬不能逐 向猫狂吠 / 動物
- 第50課 44ウ 荷花初開 乘小舟 入湖中 晚風吹來 四面清香 / 植物、自然
- 45才 有一老人 提小筐 入城市 買魚兩尾 步行回家 / 動物、

- 方向
- 第51課 45ウ 五月大雨 田中水高 農人分秧 秧針出水 長二三寸 / 自然、
植物、動物
- 46才 岸旁水車 上下往復 有三四人 在水車上 口唱田歌 / 自然、
動物
- 第52課 46ウ 清水一缸 中畜金魚 上浮水草 魚游水動 魚伏水定 / 動物
- 47才 堂前有柏 柏上有巢 巢内有烏 日出烏飛 日入烏啼 / 植物、
動物
- 第53課 47ウ 我手執帶 引猫近前 帶急提起 猫向前迎 兩爪上捧 / 動物
- 48才 二人共飯 小犬走来 搖尾求食 後足坐地 前足向上 / 動物
- 第54課 48ウ 首居上 足居下 胸居前 背居後 首下為肩 肩垂兩手 / 動物
- 49才 眉在上 目在下 脣在外 舌在内 鼻在中央 兩旁有耳 / 動物
- 第55課 49ウ 古画一幅 画馬八匹 或起或臥 或俯或仰 形状不一 / 物、動
物、量
- 50才 絵図
- 47ウ 1912年版は、字句と絵図を1頁に収める。
- 50ウ 庭前花木 松竹桃李 海棠牡丹 東西並列 高下成行 / 植物
- 第56課 51才 為弟子時 入孝父母 出敬長上 先生教我 毋忘此言 / 動物關
係 人間關係の強調
- 51ウ 夏日正長 姊妹二人 同作女工 妹取絲来 乞姉穿針 / 動物關
係
- 第57課 52才 日東升 室中明 日西没 室中暗 作事有時 或遊或息 / 自然
- 52ウ 明星出 晚風清 兄招弟 去乘涼 院中間歩 我唱汝和
/ 自然、動物
- 49ウ 1912年版は、第57課を1頁に収める。
- 第58課 53才 布有長短 量布用尺 十分為寸 十寸為尺 十尺為丈 / 物、量
- 53ウ 米有多少 量米用升 十合為升 十升為斗 五斗為斛 / 物、量
- 第59課 54才 春去夏来 草木長茂 四月孟夏 五月仲夏 六月季夏 / 自然
- 54ウ 采瓜田中 敬奉父母 父命取刀 剖瓜一半 分給弟妹 / 動物關

							係
第60課	55才	入学堂	已半年	国文科	一冊完	天気炎暑	学堂放假 / 自然
	55ウ	放假回	見父母	父母喜	命児前	温書習字	每日一時 / 動物
							学習の強調

自然 38

動物 64 うち人間関係12

植物 18

最近の商務印書館研究に見る日中合弁の事実

本稿の目的は、中国における最近の商務印書館研究を紹介し評価するところにある（以前の研究については、[樽本1986c]を参照のこと）。

とくに、日本金港堂との合弁時期について、研究がどの程度進んでいるかに焦点を当てたい。

その理由は、過去において、日中合弁時期の研究が、中国においては大きな弱点になっていたからだ。弱点とは、問題が存在していること自体に気づいていない、すでに明らかになっている事実について知らない、その事実とは矛盾した考え方を提示する、などなどを指す。つまり、研究が深まっていなかったことがある。

さて、現在は、どうか。

1 研究の弱点

研究の弱点となった理由は、いくつかある。

まず、商務印書館と金港堂が合弁会社であったという事実そのものが知りにくいことがあった。なぜなら、商務印書館は、合弁の事実を隠そうとしていたからだ。事実が意図的に隠されてしまうと、あたかも合弁そのものが存在しなかったかのように思われる可能性がでてくる。事実、創業百年を記念して書かれた文章の多くが、商務印書館と金港堂の合弁について触れていない。まるで、合弁時期などなかったようなのだ。

商務印書館にとって都合が悪いことに、合弁相手が、よりもよって日本の企業であったことだ。

清朝末期において、異民族支配に反対する立場からは、異民族の会社と合併している商務印書館が当然のように攻撃の標的とされた。

中華民国初期においては、異民族からの独立に成功したという政治的風潮に関連して、日本企業との合弁が槍玉にあげられる。特に教科書については、その批判が集中した。異民族との合弁会社が編集する教科書を、新しい中国の児童に使わせてもいいのか、といわれれば、当たり前のように躊躇する人が出てくる。攻撃する側は、そこがねらい目であった。

日本と中国の交流には、歴史的背景がある。政治的にいっても必ずしも順調な関係ばかりというわけにはいかなかった時期がある。日中の政治関係が、そのまま商務印書館攻撃に利用されることもあったということだ。

日本金港堂との合弁を解消した後も、日中戦争を経て中華人民共和国成立後の自力更生が強調される時代には、外国企業との合弁を行なった事実そのものが、商務印書館にとっては隠蔽すべき事になった。

「文化大革命」時期は、商務印書館の日中合弁時期は、研究の「禁区」だったといってもいい。わざわざ研究の主題に選ぶ研究者がいるとすれば、その人の政治傾向が問題にされかねない。誰が、危険をおかしてまであえて触れようとするだろうか。

改革開放政策が実施されてからは、事情が異なってくる。外国からの投資を呼び込むことは、正しい行為だとみなされる。外国企業との合弁事業は、批判の対象から賞賛の対象へと大変化を生じるのである。

商務印書館研究もそれにしたがって、変化する。日中合弁時期の研究は、大いに奨励されても不思議ではない。奨励されないまでも、少なくとも「禁区」ではなくなった。

研究というならば、隠された資料をいかに発掘するかが課題となろう。新しい、あるいは埋もれた資料を探し出すことは、当然やらなければならない作業だ。その作業は、口でいうよりも実際には困難がつきまとう。中国には中国なりの事情があり、一様ではない。

そればかりではない。外国語の壁がある。

日本企業との合弁問題だ。常識的に考えて、文献は中国だけにしか存在していない、というわけではない。だが、日本語文献にまで目を配るのは、中国において、それほど簡単なことではないと想像できる。この困難をいかに切り抜けるか

も研究者の腕の見せ所だ。

研究者の力量をはかるためには、この日中合弁問題は、まことに好都合な題材なのである。

論文評価の基準は、単純だ。資料を発掘して、新しい見解を提出しているかどうか。これにつきる。

2 評価の基準

日中合弁期の商務印書館をあつかう論文については、以下の鍵語あるいは項目に言及しているかどうかキメテとなる。鍵語はあっても、その解釈が異なる場合もあろう。ただし、鍵語がなくて、正しい解釈に到達している例を知らない。ひとつの目安になることは確かだ。それを称して「初期商務のリトマス試験紙」という。

初期商務のリトマス試験紙

- | | |
|---------------|-----------------------------|
| a . 金港堂 | 1. 合弁の事実に言及しているか |
| | 2. 金港堂の名前を出しているか |
| b . 教科書疑獄事件 | 3. この事実を明らかにしているか |
| c . 原亮三郎 | 4. 名前を出しているか |
| | 5. 金港堂主としているか |
| d . 山本条太郎 | 6. 名前を出しているか |
| | 7. 合弁の仲介者としているか |
| | 8. 原と姻戚関係にあることをいっているか |
| e . 長尾楨太郎（雨山） | 9. 名前を出しているか |
| f . 加藤駒二 | 10. 名前を出しているか |
| g . 小谷重 | 11. 名前を出しているか |
| h . 印錫璋 | 12. 名前を出しているか |
| | 13. 修文書館買収の仲介者としているか |
| | 14. 山本と親しく合弁の仲介者としているか |
| i . 修文書館 | 15. 名前を出しているか（修文印刷局、修文印書館、修 |

文印書局などを含む)

- | | |
|------------|-----------------------|
| j . 火災 | 16. 失火したことを書いているか |
| k . 中国図書公司 | 17. 名前を出しているか |
| l . ゴム投機 | 18. 名前を出しているか |
| | 19. 夏瑞芳が投機に失敗したとしているか |
| m . 福間甲松 | 20. 名前を出しているか |

([樽本1992c] をもとにして16-20番の5項目を追加した)

金港堂との合併をいわない文章は、それだけで論外である。教科書疑獄事件は、金港堂が商務印書館と合併事業をおこす過程で発生した疑獄事件だ。ひとつの論議的にするが、教科書疑獄事件で蹉跌した金港堂が、中国に活路を探して商務印書館と合併したという通説がある(後述)。金港堂の名前はあっても社主の原亮三郎の名前が出てこない場合があるので要注意だ。山本条太郎は、原亮三郎の娘婿である。三井物産上海支店長時代に、金港堂と商務印書館の合併を仲介した人物だ。長尾雨山は、東京高等師範学校教授の地位を捨てて上海の商務印書館に勤務した。教科書編集などを行なっている。教科書疑獄事件に関係しているから、合併問題にもはずせない。加藤駒二、小谷重ともに金港堂の社員であり、合併にともない上海に一時期滞在した。印錫璋は、張元済とともに商務印書館の第1回増資に応じた人物だ。紡織に関係して山本条太郎と懇意であった。印錫璋も商務印書館と金港堂を結びつけた人だ。修文書館は、築地活版所出張所が上海に設置した印刷会社で知られている。商売をたたむというので、商務印書館は、活字など印刷機器を一括購入した。その購入資金の出処も問題のひとつだ。1902年の失火により工場兼編集の家屋を失った。経営的にも大打撃である。ところが、その直後にレンガ建ての巨大な印刷所を建設している。これも問題になる。中国図書公司は、商務印書館をライバルとして設立された出版社だ。商務印書館に日本資本が入っていることを攻撃した。商務印書館にとっては、清末期に遭遇した危機のひとつといえる。商務印書館からとびだした陸費逵が設立し、民国期のライバルである中華書局をリトマス試験紙の1項目にあげなかったのは、あまりにも有名であるからだ。普通には出てこない鍵語であるからこそ鍵語の意味がある。ゴ

△投機は、夏瑞芳が商務印書館の資金を投入し失った事件だ。自分の財布と会社の会計の区別がつかないという旧式の会計感覚が、露呈した。福間甲松は、合併解消の交渉のために金港堂側から送られてきた人物だ。この人の名前を出す文章は、相当に資料を調べているということができる。

以上、13項目、細目20個である。言及があれば1点とする。合計を100%に換算し、それぞれの論文の文頭に [鍵語言及率：00%] と表示する。

3 近代日中出版社交流の謎

具体的な論文紹介にはいる前に、合併問題の謎について簡単に触れておきたい。(各論の評価が知りたいという人は、4にとんで下さい)

商務印書館と金港堂の合併問題は、「近代日中出版社交流の謎」といってもいい。

なぜ「謎」かといえば、まず第一に、明治30年代後半から大正にかけて、日本の出版社と中国の出版社が共同出資して上海において合併会社になっていたという事実そのものが、それほど知られていない。中国においても、また、日本においても同様だ。

なぜ合併の事実が知られていないかというと、前述のように中国商務印書館は、日本金港堂との合併を秘密にしたかったからだ。中国側の隠蔽工作があった。「隠蔽工作」という言葉そのものが強すぎるというのであれば、なぜ秘密にしたかといいなおす。

中国側の当事者が、日本の出版社との合併の事実を秘密にしたいという強い意図を持っていたこと、これを称して「謎」という。そうせざるを得ない時代背景があった。さらに、「謎」が形成された理由としては、日本側の出版社が、現在は存在しておらず、合併の事実を知ろうとしてもその手掛かりがなくなっていることをあげることができる。

今から数えれば、ほとんど百年前のことだ。事実を知る直接の関係者は、いずれも他界している。現在では、文献のみの探索になるから、文献そのものに事実の記載がなければ、これまた日中出版社の合併の事実も忘れられることになるだろう。

中国商務印書館 創立百周年

商務印書館は、中国大陸でも有数の大規模総合出版社であると同時に、長い歴史をもつ「老舗」でもある。

解放以前の中国における商務印書館を表現して、組織規模の大きさが業界第1位、規則制度の完備している点が業界第1位、資金の豊富さが業界第1位、従業員数の多さが業界第1位、人材の育成が業界第1位、出版物の多様さが業界第1位、営業額の大きさが業界第1位、支店の多さが業界第1位、印刷技術の革新が業界第1位、労使紛争の激烈さが業界第1位、と言っている[朱聯保1993:333]。まさに業界の「兄貴(原文:老大哥)」であるとその文章は、称賛する。(最近の中国語教科書は、現代中国の実情を反映しているものが少なくない。中国の都会で流行しているポケベル(BP機)とか携帯電話も出てくる。この携帯電話のことを中国語では「大哥大」という。俗語で「ボス」のことだが、なぜ「ボス」が携帯電話の意味になるかということ、都会で携帯電話を使い始めたのがヤクザのボスだったからだ、と説明する中国人の先生がいる。そうすると商務印書館のことを「老大哥」というのも、この「ボス」にやや近い意味でその著者は使用しているのかもしれない)

さて、1997年は、香港が中国に返還されるというので日本でも大きく報道された。

この1997年は、商務印書館創立百周年に当たる。

記録によると、同年4月に中国美術館で「商務印書館百年書画展」が開かれている。5月8日には、北京人民大会堂で「商務印書館暨中国現代出版一百周年座談会」が開催され、学术界、文化界、新聞出版界から専門家、学者が400名あまり参加し、朱鎔基副総理(当時)が、中南海で代表団に接見したと報道された[人民日報1997a, 1997b, 1997c][陳原1997a][李桂傑1997]。

同じ日には、中山公園音楽堂で記念音楽会がもたれてもいるし、さらにまた、商務印書館発祥の地である上海では5月16日に記念会が開催されたというように、商務印書館創立百周年が盛大に祝われたといえることができるだろう。

商務印書館の創業を想像するてがかり

ひとくちに創立百周年といっても、とらえどころがないかもしれない。日本において、創業後百年以上の歴史を持つ出版社の名前を参考までにあげておこう。

日本の出版社

日本には、創業百年を超える出版社は、少なくない。

明治創業の文芸出版社にしぼって例をあげると、春陽堂が、1878年2月4日(明治11)創業で、文芸雑誌『新小説』(1889)の発行で有名だ。三省堂は、1881年4月8日(明治14)創業、中央公論社は、読売新聞社の子会社となったが、1886年4月6日(明治19)創業だ。博文館が、1887年6月(明治20)創業で、総合雑誌の『太陽』、文芸雑誌の『文芸倶楽部』(1895)を発行しているし、弘文堂は、1893年(明治26)の創業となる。商務印書館とほとんど同時期に創業したのが、現在の新潮社であり、1896年5月10日(明治29)の創業で、もとは、新声社といった。文芸雑誌の『新潮』(1904)は、現在にいたるまで発行が継続されているのは周知のことだ。

商務印書館の合併相手である金港堂についてもすこしだけ触れておく。

金港堂は、1875年(明治8)に創業した。商務印書館よりも22年も早いスタートだ。当時、文学社、普及舎、集英堂とともに明治の四大教科書出版社と称されていた。また、文芸雑誌の『都の花』(1888)、『文芸界』(1902)の発行でも著名な存在だったということだけを言うておく。

もうひとつ参考までに新聞社について触れておけば、現在の毎日新聞社が1872年(明治5)。最初は、東京日日新聞。大阪の日本立憲政党内閣新聞1882年(明治15)が88年に大阪毎日新聞と改題、1911年に合併、1943年に毎日新聞と題号を統一)、読売新聞社1874年(明治7)、朝日新聞社1879年(明治12)の創業だ(参照:『日本近代文学大事典』第4巻 講談社1977.11.18、『日本の出版社1998』出版ニュース社1997.10.25)。

中国の出版社

信じられないかもしれないが、中国大陸において創業百周年を迎えた出版社は、商務印書館を除いてほかには存在しない。

商務印書館以前に創業していた出版社はたくさんある。上海にかぎって見ても、

掃葉山房（蘇州で三四百年の歴史を有する。1880年に上海に進出）など「山房」を名前にもつもの、外国の宣教師が租界に設立した出版社（「書館」「書院」「書室」「書会」などと称する）とか、そのうちの美華書館は、1860年に寧波から上海に移転したものだ[印刷史研究会2000:236]。それらのいずれもが現在は存在していない。

1912年に成立した中華書局は、1997年時点で創業85年だから、これも老舗のひとつであることは違いない。しかし、商務印書館に遅れること15年という時間差は、なくなることはない。

当時の、大量印刷、大量出版の近代的印刷技術の中心は、上海にあった。近代的印刷技術が存在した上海だからこそ、近代的出版業も成立することができたといえることができる。文芸関係でいえば、大陸で最初の活版印刷による大量発行の小説専門雑誌が発行されたのが、上海なのだ。

梁啓超と日本

上海で最初、といえは中国大陸で最初という意味だが、大量発行の小説専門誌の発行には、日本という存在を抜きにしては考えられない。

1898年、日本横浜に亡命した梁啓超が、政治家の立場で啓蒙と士気高揚を主旨とした総合雑誌『清議報』（1898年 明治31）を同地において創刊する。100期を発行して停刊、ひきつづき1902年（明治35）に創刊したのが『新民叢報』だ。

これらの雑誌は、横浜において中国語を用いて印刷されたが、その読者は、あきらかに中国大陸の中国人だった。横浜から海を渡って中国大陸に大量に運搬される。

小説は、人々に強い影響を与える力をもっている。これに注目したのが梁啓超だった。小説効用論である「小説と社会の関係を論じる（論小説与群治之関係）」を掲げて、1902年（明治35）に中国語による小説専門雑誌『新小説』を横浜で創刊した。もともと、当時の日本に同名の『新小説』という文芸雑誌が存在していた。さきほど触れた春陽堂が発行していた文芸雑誌が『新小説』（1889）だ。梁啓超は、日本の文芸雑誌を見本にしたことがあきらかだろう。梁啓超の編集した『新小説』が中国大陸に輸入されて当時の文芸界、言論界にきわめて大きな衝撃を与える。

大きな衝撃とは、それまで読む価値のないものとして軽べつされていた小説を、社会改革の有力な道具として重要視するというのが梁啓超の主張だったからだ。

中国近代文学は、梁啓超の創刊した小説専門雑誌『新小説』を抜きにしては成立しなかったといえる。その意味で、中国近代文学の発祥の地は、日本横浜である、ということも可能だ。

1902年（明治35）という時期は、文芸の側面からいっても、日本と中国にとって、まことに緊密な関係にあったことが理解できる。

梁啓超の『新小説』に影響を受けて上海で次々と小説専門雑誌が創刊される。

その最初が、誌名を『繡像小説』という「挿絵（繡像）」を各小説の冒頭に掲げることを売り物にした雑誌である。これこそ商務印書館が発行した雑誌なのだ。

ついでにつけ加えると、中国において出版業と印刷業は、分離していない。書店によって比率は異なるが、出版と印刷のふたつを兼ねて同時進行で行なっている場合が多い。ここでいう出版社は、書店であると同時に印刷会社でもある。

解放（1949年）以前には、「五大書店（原文：五家大書店）」と称せられた出版社があった。規模の大きい順にいうと商務印書館（1897）、中華書局（1912）、世界書局（1921）、大東書局（1916）、開明書店（1926）となる[朱聯保1993:7]。

現在、台湾、香港、シンガポール、マレーシアに存在する商務印書館は、もともとが分館だった。

以上のようなところで商務印書館の中国大陸におけるだいたいの位置が理解できよう。

商務印書館と金港堂の合併

それほど巨大な存在である商務印書館が、一時期、日本の出版社と合併会社となっていた。巨大組織であるがゆえに、まさか、と信用しない人がいても不思議ではない。合併会社であったという歴史的事実を、無視したくなる人もいるだろう。現在、巨大組織であることから、創業当てもそうであったのではないか、独立した存在で、今日まで事業を継続してきたのではないか、という想像にむすびつくのも無理もない。しかし、商務印書館は、最初から巨大組織であったわけではなかった。

中国商務印書館と日本金港堂の合併は、正確にいうと、1903年11月19日（光緒二十九年十月初一日、明治36年）から1914年1月6日までの足掛け12年、実質約10年間のことだった。創業百年の歴史からすれば、わずかに1割の期間を占めるにすぎない。商務印書館が将来にわたって存続すればするほど、日本金港堂との合併期間の割りあいは減少していくだろう。しかし、創業期に行なった、いや、行なわざるをえなかった外国企業との合併という事実を抹殺することはできない。なぜなら、この10年間の合併こそ、商務印書館がのちの巨大組織となる基盤を作り上げる重要な意味をもっていたからだ。

商務印書館創業百周年を記念する文章では、そこらあたり、つまり日中合併時期のことをどのように述べているのか見てみよう。

日中合併事実の無視 商務印書館創業百周年関係文書より

『中国出版年鑑』1998年度版は、特に商務印書館の創立百周年を記念して4本の文章を収録している（『中国出版年鑑（1998）』北京・中国出版年鑑社1998.9。95-100頁）。

「李鉄映同志的賀信」のなかには、つぎのような語句がある。すなわち、「中国近代出版の生誕百年を祝う時、中国出版の創業の苦しみおよび困難に出会ってもくじけない歴史の経験を真摯に総括し、中国の出版が祖国に忠実であり、人民を心から愛し、科学を提唱して真理を探求するという尊い精神を継承し発揚しなければならず、さらに中国の特色をもつ社会主義を建設するという偉大な歴史的進軍の中において巨大な精神と物質の力に転化させなければならない」（96頁）というものだ。

お祝いの手紙という性質からいえば、「創業の苦しみ」といってもこれは一般的な表現であり、とどのつまりは紋切り型の文面にならざるをえないことは理解できる。

于友先「奉獻的百年 光榮的百年 在商務印書館建館暨中国現代出版一百周年座談会上的講話」は、中国の近代出版の歴史を概括している。解放以前の商務印書館を紹介して、「商務印書館を代表とする中国近代出版の誕生以後、見るべき発展があった。1930年代のはじめ、商務印書館にはすでに4500名の従業員がい

たし、資本総額は500万元あまりとなり、年間営業額は1200万元で、国の内外に36の分館、支店があり、年間に出版する図書は800種を超え、図書の営業額は、全国の30%を占めていた。これらは、強い生命力を表現している。……」(97頁)と述べる。

近代中国を代表させている商務印書館だが、その日中合併については一言の言及もない。

陳原「商務印書館創業百年随想(關於張元濟, 他的理想和他的探索的若干思考)」は、商務印書館の百年を回顧して比較的詳しい。「創業はまことに容易ではない。資金は不足し、人材は不足し、技術は遅れており、政治の変動からの衝撃がある。人事が紛糾すれば、随時、臨機応変に除去しなければならない」(99頁)

創業当時の困難な局面をいくつか掲げるが、実際にどういう状況にあったのかは、具体的には述べてはいない。人事には実名をあげて説明をしている。「最大の困難は、指導層内部に妥協できない矛盾が発生したことだ。張元濟が夏瑞芳と一緒に仕事をした12年間は、協力がうまくいった。不幸なことに夏瑞芳が殺害されて(1914)、全体を引き続いて掌握した人物が、全員が愛国の企業家であったとはいえ、張元濟の思想をそれほど理解していたとはいえ、彼らは新しい事物、新しい思考に対して敏感さを欠いており、したがって適応力を欠いていたのである」(100頁)

張元濟は、商務印書館の編集業務を担当した重要人物だ。夏瑞芳は、商務印書館の創業者のひとりで主として営業を担当した。この二人が「一緒に仕事をした12年間」とは、ほかならぬ商務印書館と金港堂の合併時期に重なるのだ。

金港堂からは、日本人が派遣されており、教科書を編纂する作業を張元濟と共同で行なっている。上に示した「初期商務のリトマス試験紙」のなかの長尾雨山、加藤駒二、小谷重らである。しかし、陳原は、日本との関係を会社レベルでも、人間レベルでも、まったく無視する。

最後の、楊徳炎「継往開来 再創輝煌」は、興味深い書き方をしている。

百年前、商務印書館が誕生したころの中国社会が、まさに重大な災難の中であり、出版業界も同様に危急の状況であったことをまず述べる。続けて「我が国の伝統的印刷およびそれに適応した出版方式は、西洋から流入した、活版による機

械印刷を特徴とする先進的出版方式の衝撃に直面した。……外国の先進技術を利用して自己の出版企業を創立するというのが、この業界が発憤して向上をはかる唯一の出口だった。商務印書館はちょうどこの様な背景のもとに成立した」と書いているのだ。

日本の出版社から先進的技術を導入したのは、ほかならぬ商務印書館自身だった。商務印書館に特有の歴史を一般化してしまっている。あたかも時代背景のように描くのは、不可解というよりしかたがない。

楊徳炎という人は、商務印書館と金港堂の合併を知っていて、あえて知らない風を装っているとしか考えられない。

また、「商務（印書館）の成立は、中国人が西洋文明の衝撃のもとで、半世紀あまりにのぼる新旧出版方式の転換という陣痛を経たのちに、ついに中国人自身に適合する近代出版企業を創造したことを明らかにしている」（100頁）とまでいう。

商務印書館は、あくまでも自主独立でもって先進技術を獲得して行った、外国の援助などんでもない、あると想像することすらしない、とでもいわんばかりの書き方のように私には見える。変に肩ひじ張った物言いが、その裏になにかを隠しているのではなからうか、と推測したくなる気持ちにさせるといってもいい。

私は、商務印書館が独力で外国の先進技術を導入する努力をしながら、日本金港堂との合併を経験して、はじめてそれに成功したこと、当時の商務印書館の首脳部は、その事実を感謝の念をもってはっきり認識していたこと、日中合併の実質10年間は、商務印書館にとっても金港堂にとっても経済的に大いに利潤をあげて、双方に満足をあたえた期間であったことなどを知っている。だからこそ、その合併の事実を隠そうとする現在の文章を目にすると、違和感をもつのだ。

もっとも祝賀を目的とした短文では、日中合併の事実に触れる余裕がなかったと好意的に見ることもできる。逆に言えば、改革開放政策の現在ならば、短文であろうとも日中合併の成功した例として商務印書館と金港堂に言及してもいい。それぞれの文章を見ていけば、おのずと結論は得られるものと考える。

いくつかの類に分ける。商務印書館自身の出版物、張元濟関係、一般、または上海通史および専門書だ。遺漏があるかもしれない。ご教示をおねがいしたい。

商務印書館の創業を記念して出版された書籍から見ていこう。

4 商務印書館の年表

ここでは、「大事記」を中心にあつかう。

「大事記」とは、日本でいう年表を意味する。商務印書館の歴史事項の骨子だけを抜き出したものだから簡潔といえそう。普通は、記念冊子の一部分を構成するが、歴史が長くなれば単行本にもなる。金港堂との合弁をどのように記述しているのか、私の知る限りさかのぼって一覧してみる。「大事記」がどのように作成されたのか、今まで言及しているものを見ないためでもある。

その前に、重要文献をひとつだけ紹介しておきたい。

[鍵語言及率：40%] 高翰卿「本館創業史 在発行所学生訓練班的演講」
(1934.3.30)[高翰卿1992:1-13]

1930年代の文章でありながら、1990年代になってはじめて一般の目に触れたのが、この高翰卿の講演記録である。雑誌『同舟』『同行月刊』に抄録が掲載されたという。しかし、中国の研究者にもほとんど引用されることがなかった。一般には手にすることのできない雑誌らしく、私は、見たことがない。創業者のひとりの発言だから、重視される価値がある。なぜもっと以前に、簡単に目にできる形で公表されなかったのか、理由がわからない。

創業当時の状況を詳しく話している。1902年の失火についても触れているのはさすがだ。合弁相手の金港堂原亮三郎の娘が上海三井洋行の山本（条太郎）の妻であるとか、山本と夏瑞芳、印錫璋らが非常に親しかったとか、当事者だからこそ知っている事実を公開している。これが重要だ。私が商務印書館と金港堂の合弁を調べていたころには、この事実には到達するのに多くの時間を費やさなければならなかった。高翰卿の文章が、もう少しはやく公開されていたら、あれほど苦労はしなかったのにと今でも思う。

特に火災に関係する証言は、注目される。当事者の証言は、それほど多くないからなおさらだ。

「北京路に移転してほぼ五年がたった光緒二十八年七月、火災にあい、すべて

の機器工具が焼けてしまった。新しく注文していた機器はすでにとどいていたが、幸いなことに事前に火災保険をかけていたので保険金を受け取った。ただちに福建路海寧路に土地を購入し印刷工場を建設する」(7頁)

この文章は、誤解を招きやすい。火災保険による保険金を受け取ったから印刷工場を建設することができた、と読める。だが、事實は、火災にあってから二ヵ月以内に、赤レンガ3階建ての巨大建築物が完成しているのだ。新築である。土地の選択、購入、建物の設計施行完成が二ヵ月以内でできると考える、というほうが無理だろう。筋道のたった理解は、印刷所建設と編訳所、発行所の3ヵ所に分離するのは、既定の方針であったと考えるしかない。火災発生より以前に印刷所建設に着工していた。だから、火災の発生は予期せぬ出来事だった。そのため、移転の時期が早まったのである。

ここを誤解する研究論文が多いので注意を要する。

ほかの文献に比較すれば、鍵語言及率は、少しはよいということができる。しかし、別の見方をすれば、創業者のひとりでありながら、金港堂との合弁とその解消について、すべてを知っているとは限らないことがわかる。あるいは、知っていても話していないのかもしれない。また、再録した文章が、はたして初出と同文である保証もない。

私が、間違いだといままで繰り返し批判してきている通説のひとつは、この高翰卿の文章にも出現している。つまり、商務印書館と金港堂の合弁にさいして「結んだ条件は、すべてにおいて二者が平等であったわけではない」というのだ。「ひとつは、社長と理事はすべて中国人であって、日本人はひとりだけが監察人であること。ふたつは、雇用された日本人は随時解職することができる」というもの。この発言をとらえて、研究者のなかには、合弁には条件がついていたとか、商務印書館に主権があった(以下、商務印書館主権説という)、という人がいる。

高翰卿の発言は、全部がそのまま正しいというわけにはいかない。

事実を見れば、社長は中国人である。これは、よい。だが、1903年の合弁最初から1908年までは、理事には日中半々の人が就任している。随時解雇といいながら、その例を示していないから、その事實はなさそうだ。

つまり、高翰卿は、ありもしない合弁時の条件を、ことさらにあったと主張し

ているのである。日中戦争当時の、しかも商務印書館内部における発言である点を考慮する必要があることは明白だ。つまり、内部の若者に向けて、長老が虚勢をはったのだと理解できる。

高翰卿の講演記録が掲載された『同舟』は、内部発行の雑誌かと思う。中国の図書館の蔵書目録を見ても、端本が記録されているだけだ。一般の目には触れなかったものだろう。だからこそ95周年記念文集に再録された。

[鍵語言及率：30%] 「本館四十年大事記（1936）」『同舟』第4巻第12期初出
未見[商務印書館1992a:679、682-683]

1903年の項目「日本金港堂主原亮三郎が、上海に来て印刷会社を開設しようとしたので、本館は、当時の情勢の必要から、合資することに決定した」

1914年の項目「外国株を完全に回収する」とあり、日本株回収についてかなり詳しく説明している。

この年表も、『同舟』に掲載された。鍵語言及率は、高翰卿の文章[40%]とおなじくらいに低くはない。どうやら商務印書館は、解放まえにおいて、内部に向けては、わりと正直に事実を伝えようとしているらしく見える。

ところが、解放後になると状況が一変する。合併に言及する部分が極端に少なくなるのだ。

[鍵語言及率：15%] 「商務印書館大事紀要」『商務五十年』1950.9初出未見
[商務印書館1957][張静廬1957:557、559]

1903年の項目では、日中合併には触れない。1914年の項目で、「日本株を回収する（1903年日本金港堂が上海にやってくる印刷会社の開設準備をした。本館は日商の資本と技術を暫時利用し、本年になって全部の日本株を回収した）」と書いている。転載にあたって削除した部分があるというから、日中合併部分がそれにあたるのかもしれない。

そこで、次の文章を見る。

[鍵語言及率：10%] 「商務五十年（未定稿、1950） 一個出版家の生長及其

発展」『商務五十年』1950.9初出未見[商務印書館1992d:765]

「日本資本利用の段階(1903-1914年)」と題し、1903年に金港堂を「吸収」し、1914年、日本株を全部回収したと述べる。「吸収」も大目に見て合併にふくめておく。

上の「商務印書館大事紀要」よりも記述は簡単になっている。

[鍵語言及率：15%] 「商務印書館歴年大事紀要(1897-1962)」1962?初出未見
[商務印書館1992d:710、711]

1962年の発行だとすると65周年にあたる。当時、はたして公表されたのかどうか不明だ。「文化大革命」が発動される直前の文章になる。これ以降、「文革」期間において、創業を記念する出版物はなかった。「文革」後の1980年代になって90周年をむかえるまで待たなくてはならない。

1903年の項目では、合併とはいわない。ここでも「吸収日本金港堂股本」と表現する。1914年の項目では、「日本株を全部回収する(回収全部日股)」とだけある。

[鍵語言及率：5%] 「商務印書館大事記」[商務印書館1987d:629-639]

わざわざ翻訳することもない。漢語原文のままに示す。

1903「成立商務印書館有限公司，吸収日資，改進印刷」

1914年の項には、金港堂は出てこない。「設分館於香港。ノ胡愈之(学愚)進館。ノ創刊《学生雑誌》」とあるのみ。

年表の記述が簡単なのは、年表という性格によるものかもしれない。もうひとつ、既刊の年表を写しているだけ、というのも原因だろう。

[鍵語言及率：25%] 『商務印書館大事記』[商務印書館1987a]

上の『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』とは別に、年表部分を独立させて発行されている。見開き2ページを1年分に当て、その年に起こった事が記入してある。関連文献も適宜引用される。考えるに、創業百周年をにらんだ準備稿の意味を持っているのだろう。信頼できる資料によって作成したが、

「文革」によって失われた資料がたくさんある、とも説明される。「人名索引」があって便利だが、外国人名を省いているので不親切だ。

資料に拠っているといいながら、金港堂の金の字もでてこない。それほど商務印書館には資料がないのだろうか。

1903「十月，正式成立商務印書館有限公司，吸收日資，改進印刷」

日本人といえば、加藤駒二と長尾禎太郎の名前が、1909年の理事会に列席したとあるのみ。

1914「董事会收回日本股份」

以上にすぎない。

[鍵語言及率：20%] 『商務印書館百年大事記（1897-1997）』 [商務印書館1997]

その「幾点説明」に、九十周年を記念した前著『商務印書館大事記』にもとづき、その後の10年間の活動を追加したものだと書かれている。

写真が20ページ掲げられる。創業者たちの肖像、創業当時の印刷物、英語教科書、英漢辞書、国文教科書などなどだ。

1897-1914年の本文は、九十周年の前著と比較すると、わずかな加筆しか行なわれていない。

1904年に「涵芬楼創辦」、1912年に「鄭孝胥任董事長」、1913年に「四月推曾任南京臨時政府司法部總長的伍秩庸（廷芳）為董事会主席（董事長）」が加わった。1914年に蔣維喬の「夏君瑞芳事略」から引用が増えているくらいだ。

以上、年表といういわば公式な記録においては、商務印書館は、金港堂との合併を公表したくなかった姿勢があからさまである。

個々の論文になると、それとは違う傾向が見られる。

『商務印書館一百年（1897-1997）』 [商務印書館1998] が出版されている。

本文742頁の巨冊だ。創業百周年を祝うにふさわしい刊行物である。132篇の文章を収録したと「前言」にある。第1、2部の中央指導者からの祝電、記念会議での講演文章の7篇を加えれば、全部で139篇だ。『中華讀書報』において連載欄「商務印書館百年」を設け、文章を1996年から1年にわたって掲載したという。商務印書館関係者の回憶などで、これが第3部に収録される。短文が多い。第4

部から第6部までは、各種媒体に発表された関連文章を収める。

以前の記念文集が、既発表の論文、資料を再録したのとは異なる。この百周年記念文集は、記念文集を出版するために意図的に文章を書かせたということだ。

初期商務印書館について述べる文章のなかには、多くはないが、合併に言及したものがあ

[鍵語言及率：10%] 欧宏「滄海横流 方顯英雄本色 從三位先賢看商務百年」[欧宏1998:325-337]

夏瑞芳、張元濟、王雲五について述べる。

夏瑞芳の部分で合併が出る。ただし、金港堂の名前はない。

「1903年、日本商人が、出版印刷業を営もうと巨額の資本を携えて上海にやってきた。夏瑞芳は、彼らがやってくることは商務の脅威となることを恐れ、また彼らの資金を利用して経営規模を拡大し、彼らの技術を借用して商務の印刷の質を高めようとも考えた」(327頁)

この書き方は、中国の一般の文章に見られるものと同じだ。

脅威となりそうだったこと、また、外資を利用することを夏瑞芳は考えたというのだ。

脅威になりそうだというならば、商務印書館は、当時、巨額な資本を持つ金港堂と同等の規模であったような印象を受ける。そうではない。ほとんど潰れそうな経営状態だった。夏瑞芳は、印錫璋を間にはさんで懇意の山本条太郎に援助を要請したのが真相だろう。だが、外資を利用する意図があったのは、その通りだ。なんとか商務印書館の生き延びる道を摸索して、渡りに舟となったのが金港堂の存在だった。欧宏は、高翰卿が述べる根拠のないあの「商務印書館に主権のあった合併」であることをここでくりかえす。

「1900年、商務印書館は日本人が上海で開設していた修文^マ印書^マ局を買収した。それは民族資本が東洋(日本)資本をうち負かしたという人をとても興奮させる例証であるばかりでなく、……」(326-327頁)

こういう文章を読むと、それほど日本が憎いのか、とため息が出そうになる。研究論文ではなくなってしまうからだ。修文書館の機器一式を買収することは、

勝ち負けとは何の関係もないことだろう。勝ち負けにこだわる心情が、ありもしないものを信じさせる。

[鍵語言及率：60%] 汪守本「商務印書館是最早引進外資的企業」[汪守本1998 b:343-350]

表題に著者の考えが、率直に表われている。「商務印書館は、最も早く外資を導入した企業である」

改革開放政策の時期だからこそ、出てくる発想に違いない。外国人から手紙をもらっただけで「外国のスパイ」と批判された時代がついこの前の中国にあったことを知っているから、時代の変化を感じる。

鍵語の多くを押さえて得点は、かなり高い。ただし、そのことが正しい解釈と結びついているかといえば、そうではない。

冒頭から、まるで見てきたように書いてある。

「清光緒二十九年（1903年）、商務印書館の株主印錫璋（有模）は、商務の主人夏粹方（瑞芳）に報告しているには、日本の金港堂主人原亮三郎の娘婿で三井洋行上海支店長の山本条太郎が彼につけて、金港堂が中国上海に投資しようと考えている、商務には「合作」する興味があるかね、と」（343頁）

金港堂の原亮三郎が、中国大陸で教科書を出版しようとしていたことは事実だ。だが、それは1903年ではない。それより前の1899年にさかのぼる。また、山本条太郎が三井洋行上海支店長に就任するのは、1901年だ。商務印書館に合併の話をもちかけるにしても、1903年ではありえない。つまり、金港堂の大陸進出は、考えられている1903年ではなく、1901年頃には具体化されていたと見るべきなのだ。

汪守本論文は、短文ながらよく調べられたうえで書かれている。だが、重要な部分で通説のままを信じたからつじつまが合わない。

もうひとつ用語の問題がある。「合作」を使う。漢語で「合作」といえば、一方が資金・設備を提供し、他方が用地・労働力を提供するというものだ。資金を出しあう合併は、「合資経営」といい、「合作」とは区別している。あるいは葉宋曼瑛（マンイング・イブ）が使う協力という意味の「合作」かもしれない（後述）。どちらにしても、「合作」は、合併まで進んでいない形態だから、汪守本は、

知っていてわざとこれを使っているらしい。だからこそ「主権が商務印書館にある」という発想に結びつく。

通説を踏襲するのは、教科書疑獄事件についてもいうことができる。これからもたびたび言及することになるだろう。そのたびに、通説の頑強さを知るのだ。

通説とは、こうだ。教科書疑獄事件が終結したのち、原亮三郎は、連座した人々にたいして責任を感じて、国外に会社を設立することにした。

そう主張する論文があるから、汪守本はそれをそのまま取り入れた。確かに俗耳に入りやすい。因果関係も成立するように見える。だが、この通説を信じる研究者は、教科書疑獄事件の詳細と細部の時間的推移を知らない。

原亮三郎が、責任を感じたという。加藤駒二、小谷重は金港堂の社員だから、そうかもしれない。しかし、長尾雨山は、集英堂の教科書に関連していて、金港堂とは関係はない。

原亮三郎が、加藤と小谷とともに船で神戸から上海に向ったのは、1903年10月のことだった。商務印書館と金港堂が合併の正式調印をしたのが同年11月だ。わずか1ヵ月で合併相手を探すことから始めて、業務内容を煮詰めたうえで、合意にいたることが可能であろうか。

実をいえば、原亮三郎は、早くから中国大陸で教科書を出版しようと調査していた。娘婿の山本条太郎には、上海に住む中国人の知人もいる。適任者だ。上海での出版業についての調査を依頼しただろう。上海には出版社が商務印書館しかなかったわけでもない。多くの出版社の名前があがったにちがいない。1901年、山本は上海の三井洋行支店長に就任する。同年、紡績関係で山本と懇意であった印錫璋が、商務印書館の第1次増資に応じて株主になった。

以上の事実をみるにつけ、1901年は、商務印書館と金港堂にとっては、まさにめぐりあわせの年にほかならなかったという感を深くする。

金港堂主原亮三郎の依頼もあり、かねてから上海の出版業に目を凝らしていた山本条太郎が、上海に滞在することになる。仕事を通じて深い仲であった印錫璋が、偶然にも商務印書館の株主になっている。印錫璋は、商務印書館の経営状況が思わしくないことを知り、夏瑞芳の依頼もあって山本条太郎に援助を仲介する。山本は、それにとびつく。金港堂と商務印書館が結びつかない方がおかしいくら

いに、条件は整っていたのだ。これが1901年のことである。

ところが、合併の合意ができて、将来の事業拡張をはじめようとしたところに、ふってわいたように1902年8月に商務印書館の火災が発生し、年末に金港堂を教科書疑獄事件が襲う。

以上が、商務印書館と金港堂の合併に至るまでの経過である。火災にしても、教科書疑獄事件にしても、合併の原因ではない。強調しておく。

汪守本論文は、鍵語の多くを使用しながら、通説にまどわされて結局のところ問題の核心にふれることができなかった。この種の論文は、最近、少なくない。

[鍵語言及率：85%] 王益「中日出版印刷文化的交流和商務印書館」[王益 1994:1-8]

この論文は、もともと日本の雑誌の求めに応じて書かれた。ゆえに、日本語翻訳の方がはやく公表されている。

王益著、大川ひろみ、趙京右訳「中日出版印刷文化の交流と商務印書館」([王益1993]中国語原文は、のち『編輯学刊』に掲載された[王益1994])がそれだ。表題通り、商務印書館と金港堂の合併を出版印刷文化の交流という視点で描きだす。専門論文であって、その内容は、詳細にしてしかも客観的である。いらぬ推測はなされていない。

日本の雑誌であることを考慮したのかどうか明らかではないが、金港堂の教科書疑獄事件については、触れない。触れないから、長尾雨山、加藤駒二、小谷重が上海に渡った理由についても、述べない。原亮三郎が、彼らの出路を作るために商務印書館と合併をしたなどという通説を述べないのである。賢明な判断であった。

また、日中合併当初、理事に就任したのは日中からそれぞれ2名であったことを、具体的に名前を掲げて述べる。「ある回憶録では日本側は理事になったことはない、とも述べているが、これは事実ではないだろう」(3頁)と明確に指摘する。これこそが客観的な記述だということが出来る。商務印書館主権説という荒唐無稽な言説とも無関係でいられたのは、この資料にもとづいた客観的研究姿勢があるからこそであった。

さらに、夏瑞芳がゴム投機に失敗し、商務印書館に損害をあたえたばかりか、意気消沈してしまい仕事どころではなくなったとき、日本の原亮三郎、山本条太郎が親身になって援助したことをわざわざ取り上げる。

約10年間にわたる商務印書館と金港堂の合併事業は、人的にもうまくいった。経済の側面からいっても、また編集、印刷技術についていえば、商務印書館側がおおいに利益を得たのが事実なのだ。それを率直に認めている王益論文は、全体的にあって、中国の論文のなかでは、きわめて高い水準にあるもののひとつであることは疑いない。その冷静な執筆姿勢は、大いに評価されてもいい。

[鍵語言及率：10%] 鄧雲郷「百年“ 商務 ” 話滄桑」[鄧雲郷1998d:382-397]

この論文の特徴のひとつは、『鄭孝胥日記』を使用していることだ。鄭孝胥は、商務印書館の理事をつとめたことがある。ことに合併解消の事情が詳細に日記に記録されているところに目をつけたのは、よい。ただし、鍵語を使わない。「庚子後の光緒末年に、ある日本の出版商人が上海に来て事業拡大をはかろうとした。夏瑞芳は、彼らが後日強敵となることを恐れ、共同経営を提案した」(513頁)金港堂という名前を出してもいいところだ。また、一般の見解と異なっているのが、うえの部分だ。金港堂が商務印書館に合併を迫った、というのが中国の研究者が取る姿勢だが、その反対に、夏瑞芳の方から提案したことになっているのが珍しい。珍しいというのは、中国の研究者としては珍しい、という意味であって、これが事実だと私は考えている。

鍵語を使わないのは、「その時、夏瑞芳が投機に失敗したときにあたり」(同上)にも見られる。ゴム投機のことを指している。日中合併を主題にしていなが、もし、専論を書く機会があれば、事実肉薄する論文を書くほどの実力があそうだ。そう予感させる書き方であることを言っておきたい。

5 張元濟関係

商務印書館の指導者のひとりであった張元濟については、いくつもの伝記が公表されている。

張元濟は、戊戌政変後の翌年二月、北京を離れた上海で南洋公学の訳書院院長

に就任した。南洋公学の印刷物を夏瑞芳が引き受けており、その関係でふたりは知り合った。1899年のことである。

張元済が商務印書館と正式な関係をもったのは、1901年の第1次増資のときだ。印錫璋とふたりで投資分を負担した。

張元済が南洋公学をやめて商務印書館に入社したのは、[鍵語言及率：60%] 張樹年主編、柳和城、張人鳳、陳夢熊編著『張元済年譜』[張樹年1991:42]によると、1902年の「年初」だという。

[鍵語言及率：45%] 張人鳳編著『張菊生先生年譜』[張人鳳1995]

北京・商務印書館発行の『張元済年譜』を簡潔にしたもの。簡潔な記述にしたから、元版よりも鍵語言及率も落ちてしまった(60% 45%)。しかも、人名索引を削る。両書ともに、長尾楨太郎を楨太郎と誤る。だが、簡潔にした効用もあった。例の商務印書館主権説という荘兪、高翰卿にはじまる通説を削除したから、誤りを偶然にも免れたのである。

張樹年『我的父親張元済』[張樹年1997]

父親張元済についての回憶録だ。商務印書館と金港堂の合併は、本書の対象になっていない。書名をあげるに止める。

[鍵語言及率：35%] 張人鳳『智民之師・張元済』[張人鳳1998c]

1902年に張元済が商務印書館に入社したのであれば、当然、火災のことも金港堂との合併についても知っているはずだ。知っているというよりも、まさに当事者である。だが、火災にはふれず、わずかに金港堂主人原亮三郎が資金をたずさえて上海にやってきたことをいうのみ。

お決まりの「主権が商務印書館にある」(76頁)をくりかえす。そればかりか、つけくわえて「このような条件は、中国がいたるところで外国人の侮辱を受けていた頃において、十分に珍しいことだった」(同上)と不可解な感想までも述べている。余計なことだった。

[鍵語言及率：85% ? 付] 周武『張元濟：書卷人生』[周武1999]

改革開放政策からすでに20年以上も経過した。研究の蓄積ができれば、それを使いこなす人も出てくる。本書は、張元濟の生涯を述べながら、商務印書館の創業と金港堂との合併にもかなりの紙幅をさいている(112-116頁)のが特色だといえる。

彼が以前に発表した「張元濟与近代文化」[周武1996]では、日中合併には触れていなかった。その後、大いに研究したとわかる。

「1902年に日本の朝野を揺るがせた「教科書スキャンダル」(または教科書疑獄事件という)から話さなくてはならない」(112頁)と書いている。

その説明は、とても詳しい。1902年12月17日および22日に連続して2回の大調査逮捕を行なったとある。日にちまで特定している中国の文献を私ははじめて目にした。周武は、何の資料に基づいたのだろうか。それを知らうにも、残念ながら、該書は、参考文献を一切明らかにしていない。前出論文が、こまかく出典を注記していたのとは異なる。

教科書疑獄事件の全貌を金港堂がらみで最初に明らかにしたのは、樽本照雄の「金港堂・商務印書館・繡像小説」[樽本照雄1979]である。漢訳されたとは聞かないから、周武は、日本語で読んだのだろうか。不思議だ。

事件で予審に付された者が152名、そのうち116名の刑が確定した、という部分も周武は取り入れている。ただし、その数字は、(新西蘭)葉宋曼瑛著、張人鳳訳「早期中日合作中未被揭開的一幕 一九〇三年至一九一四年商務印書館与金港堂的合作」[IP, MANYING1987:75]に見えているから、周武は、こちらを見たのだろう。あるいは、汪家燊の文章かもしれない。葉宋曼瑛の文章については、あとで検討する。

このように見ていくと、周武が扱ったタネ文献がわかる。

金港堂主の原亮三郎は、教科書疑獄事件を惹起した責任を感じて長尾雨山らの活路を上海にさがした、というあの通説である。これも葉宋曼瑛論文にそっくりそのままが存在する。というよりも、葉宋曼瑛論文が発生源なのだ。

1例として、周武の原文と葉宋曼瑛の文章を並列しておく。

葉宋曼瑛：我只能推測原亮三郎感到对這三個人的不幸遭遇負有責任。為此在他們亡命異国期間，設法給他們創造發揮才能和維持生機的機會。(75-76頁)

周 武：金港堂主原亮三郎覺得应对這三人涉及丑聞負責，安置受牽連者，設法為他們創造機會，離開日本，另謀生計。(112-113頁)

ふたつともほとんど同文だといってもいい。異なる箇所は、葉宋曼瑛は、「推測」であることわっているところだ。だが、この推測は成立しないことは、すでに説明した。信じられないことに、この部分を読む中国の研究者は、葉宋曼瑛が「推測」であると書いているにもかかわらず、どういうわけか「推測」の文字が目に入らないらしい。それが、あたかも事実であるかのように引用を続けるのである。

周武論文には、山本条太郎と印錫璋の親しい関係を説明して、彼らが上海紡織股份有限公司の理事として香港で登録したことを指摘する(113頁)。これもどこかで見たような気がする。それもそのはずで、日本の論文が漢訳されているのだった。樽本照雄著、東爾訳「商務印書館与山本条太郎」[樽本照雄1989]がそれだ。

中国図書公司との競争を記述する(106-107頁)、あるいは、『申報』に掲載された張元済を攻撃する「中国教育会之内幕」に言及する(115頁)のは、中国の論文としては珍しく、それだけ視野が広いことがわかる。

周武は、できるだけ資料を収集して研究を深めようとしていることが、以上の例を見ても十分に理解できるだろう。

それは研究者として正しい姿勢だ。鍵語を多く含んでいるから言及率の85%は優秀な部類にはいる。

だが、事実の多くを集めるのは研究の基本でしかない。引用文で文章をつづったところで、それは先行論文の焼き直しにしかない。各々の事実を再検討する必要があるのだ。最初にやるべきことは、事実がどのような時間軸にそって発生しているのかを考えることだろう。

何度でもいうが、原亮三郎が、教科書疑獄事件の責任を感じて長尾雨山、加藤駒二、小谷重らを生かす道を上海に求めて商務印書館と合併したというのは、事実ではない。その通説を、周武は採用する。なんとかならなかったものか。

ただし、合併時に「主権が商務印書館にある」という謬論に染まっていない点は評価に値する(114頁)。

参考文献名をすべて省略しているのは、どう考えても専門書として不誠実であるといわざるをえない。どこまでが自分の発掘した事実か、他人の研究成果かの区別がつかないからだ。85%と高得点にもかかわらず、研究書としては大きく減点しなければならないのが惜しい。ゆえに鍵語及率は「?付」とした。

張人鳳整理『張元濟日記』上下[張元濟2001]

該書は、2000年12月に張人鳳氏よりいただいた。発行年月日よりも以前に出版されるのは、中国では、珍しいのではないだろうか。遅れて出ることの方が、今までは多かったからだ。

同名の『張元濟日記』上下は、以前に出版されたことがある。北京・商務印書館1981.9だから、今から20年も前のことになる。

両者を比較すれば、前者にあった「出版説明」が後者にはない。この説明は、商務印書館編輯部の名義になっている。1912-1926年間に書かれた全35冊の全文を、商務印書館創立85周年を記念して発行するとある。

この「出版説明」が削除されたのは、発行元が商務印書館より河北教育出版社に変更になったからだろう。というよりも、整理者に張人鳳の名前があがっているところから、整理者の変更が、出版社の違いになったのかもしれない。だから、別のかたちで説明があってもいいはずなのだが、説明に類する文章は、まったくない。ついでに、張元濟の肖像も、日記の書影も削除してある。

大きな違いは、前者になかった「一九三六年日記残本」と「一九四九年赴会日記」がこのたび新しく収録されたことと、人名と書名の索引がつけられたことだ。

索引は便利だ。収録してある日記が1912年からはじまっていて、それ以前の商務印書館の状況を知ることはできない。1913年も、金港堂の名前は出てこない。名前がないから合併解消も記録されていない。日記とはいえ、業務メモのようなものだから、詳しい記述を期待するほうが間違いなのだろう。

まだほかにも、張元濟伝に類するものがあるが、書名だけをかかげておく。柳和城『張元濟伝』[柳和城1996]および張栄華『張元濟評伝』[張栄華1997]だ。

6 一般、または上海通史

ここでいう一般とは、商務印書館だけを扱う書物ではない、というだけの意味だ。歴史書のなかで商務印書館がどのように記述されているのかを見たい。最近、上海通史が出版されているから、それを取り上げる。

[鍵語言及率：15%] 宋原放「近現代中国出版大事年表」[宋原放1998]

1810-1949年の詳細な出版年表である。

1903年の金港堂との合弁は、「吸収日資」(273頁)と表現している。そのまま金港堂の名前は無視されるのかと思えば、1914年1月6日の項に「商務印書館与日本金港堂簽定日方退股的協議」(308頁)と出てくる。

年表だから、商務印書館についてのみ詳しく記述するわけにもいかないだろう。鍵語言及率が15%と低いのもしかたがない。

熊月之、張敏著「商務印書館」[熊月之ら1999:167-174]

本書では、「五商務印書館」と1項目をたてて言及している。ただし、清末期だから1911年までで、記述の分量も多くはない。つぎの民国期をあわせて見ることにしよう。

[鍵語言及率：80% ? 付] 許敏「商務印書館」[許敏1999:107-118]

上掲書につづいて、再度、商務印書館の創業から記述をはじめ。鍵語言及率が80%と高い水準を示しているということは、先行論文をよく研究していることを意味している。周武の書籍と同じく、ここでも「?付」になるのは、許敏が先行論文を研究しすぎて、それに振り回されている箇所があるからだ。

例の商務印書館主権説だの、教科書疑獄事件の被告人に出路を提供するため原亮三郎が商務印書館に投資したなどという通説を検討することなくそのまま垂れ流すのである。

7 専門書

初期商務印書館については、明確になっていない問題はいくつも存在する。

たとえば、修文書館を印錫璋の仲介で買収したとあるが、その資金はどこから調達したのか。

1901年の第1次増資の時、創業時の資本は7倍の値上がりを示したというが、7倍という根拠はなにか。

1902年の火災で保険をかけていたというが、結局、いくら保険金が支払われたのか。

レンガ建ての印刷所建設は、火災の発生とどういう関係があるのか。

商務印書館と金港堂の合併は、どちらが持ちかけたのか。商務印書館の夏瑞芳か、それとも金港堂の原亮三郎か。

問題の一部分にすぎない。いずれも、重要な意味をもつにもかかわらず、未解決のままである。文献を読んでいけば、自然とわきあがる種類の疑問であろう。しかし、これらの問題の存在に気づいている、あるいは問題を提起する中国の研究論文を見たことがない。

あるといえば、上に見てきたように、ふたつの通説が幅をきかせている。

ひとつは、教科書疑獄事件原因説である。教科書疑獄事件で蹉跎した金港堂主原亮三郎が、中国大陸に活路を見いだそうとした。また、責任を感じて長尾雨山らを上海に送った、というもの。

もうひとつは、商務印書館主権説だ。商務印書館と金港堂の合併は、平等ではなく、人事権は商務印書館が握っていた「主権が商務印書館にある」合併だった、というもの。

通説と書いたが、両者は、いずれも事実ではない。間違いであるにもかかわらず、なぜこれほどまでに中国の研究者に好まれて引用されるのか。これは、また別の問題かもしれない。

それぞれには、もともなった論文がある。

すでに述べているように葉宋曼瑛の論文が、その両者を述べ、汪家熔論文が、後者を強調する。

両者ともにその影響力が大きいので、特にここで紹介しておきたい。誤解の発生源である。

葉宋曼瑛 Manying Ip

本稿に関連する葉宋曼瑛の主要文献は、ふたつある。まず、論文から。

[鍵語言及率：55%](新西蘭)葉宋曼瑛著、張人鳳訳「早期中日合作中未被
掲開的一幕 一九〇三年至一九一四年商務印書館与金港堂的合作」[IP,
MANYING1987]

本論文は、もともと、英語で発表された。MANYING IP “ A HIDDEN
CHAPTER IN EARLY SINO-JAPANESE CO-OPERATION : THE COMMERCIAL
PRESS-KINKODO PARTNERSHIP, 1903-14 ” [IP, MANYING1986a]というのがそれ
だ。今、漢訳を評価の対象とする。中国で研究者が扱っているのは、漢訳の方
からだ。

商務印書館と金港堂が合併していたという事実は、葉宋曼瑛にとっては、隠
された事柄であつたらしい。だからこそ論文題名だとわかる。なぜその事実に葉
宋曼瑛が気づいたかといえ、前出の樽本「金港堂・商務印書館・繡像小説」ほ
かを読んだからだった。

葉宋曼瑛論文は、樽本論文に主として依拠しながら、つけくわえて山本条太郎、
原亮三郎らにあてた張元済の書簡3通を紹介したところに特徴がある。

日中合併時代を主題としながら、鍵語言及率が55%と低いのはなぜかといえ、
山本条太郎、印錫璋らが合併の仲介者であることをいわなかったり、火災にふれ
なかったりするからだ。

次のような漢訳部分もある。

「この協力の期間、金港堂主人であり創始者の原亮三郎は、社長の三本条太郎
と大部分の時間を日本ですごしていた。原亮三郎は、有名な教育家で、1903年訪
中の前は東京高等師範学校教授だった」(74頁)

「三本条太郎」は、「山本」の誤植。彼を金港堂の社長とするのは、葉宋曼瑛
の誤解である。理解不可能なのは、原亮三郎が東京高等師範学校教授であったと
いう箇所だ。長尾雨山の経歴と混同している。英文を見れば、原亮三郎を説明し
て、漢訳のような部分は、ないのだ。すこしあとに、“ Nagao was an eminent

educationist and professor of Tokyo's Higher Normal College before he departed to China in 1903.” (26頁) とあるのを漢訳者が誤解したのだろう。

葉宋曼瑛論文が火元となっている例の教科書疑獄事件原因説は、その故に、いとわず引用しておく。

在日本“教科書丑聞”之後不久，金港堂的代表就出現在上海並尋找投資的機會。為了試圖使一九〇三年那些模糊不清的事件重新顯形，我只能推測原亮三郎感到對這三個人的不幸遭遇負有責任。為此在他們亡命異國期間，設法給他們創造發揮才能和維持生機的機會。(75-76頁)

Shortly after the “Textbooks Scandal” in Japan, the Kinkodo's representatives appeared in Shanghai and looked for chances of investment. In attempting to reconstruct the obscure events of 1903, I can only deduce that Hara Ryosaburo felt somehow responsible for the three men's disgrace, and therefore created chances for them to use their talents and earn their living in exile. (29頁) (日本での「教科書疑獄事件」のすぐあとで、金港堂の代表者たちは、投資の機会をさがすために上海にあらわれた。1903年の暗い事件から立ち直ることを試みて、原亮三郎は、3人の不名誉についていくらかの責任を感じ、彼らの才能を使うためと亡命の間の生計をかせぐために機会をつくりだしたのだと私は推測できるだけだ)

英文に日本語訳をつけたのは、漢訳の一部が不明瞭だからだ。

“the obscure events of 1903”とは、「1903年の暗い事件」という意味だから教科書疑獄事件を指している。

ところが、漢訳では、「模糊不清的事件(あいまいではっきりさせることができない事件)」としてしまった。これでは、事件そのものの真相を明らかにするため、となる。英語原文から離れてしまい、前後の意味が通じなくなっている。

金港堂と商務印書館の合併で重要なことがひとつある。すなわち、教科書疑獄事件のはるか以前である1901年ころには、すでに合意に達していたと考えられる点なのだ。そう考えることによってのみ、商務印書館が火災にあいながらも、短

期間にレンガ造りの巨大な印刷所を建設することができた謎を解くことが可能だ。

葉宋曼瑛は、山本条太郎と印錫璋の役割を正しく認識しなかった。また、原亮三郎が上海にむかった具体的日時を把握していなかった（[樽本照雄1982b、1985e] 1903年10月11日、原亮三郎は、小谷重と加藤駒二を伴い伊予丸にて上海へむかった。12月2日、長尾雨山は、河内丸で上海へむかった）。すなわち、原亮三郎らが上海に滞在して合弁契約を結んだのは、わずか1ヵ月の間であったというのが事実なのだ。なんの計画もなく、行き当りバッタリで、しかも短時間で外国の出版社と合弁関係を結ぶことが可能だと葉宋曼瑛は、考えたのだろうか。詳細を知らないからこそ「推測」ということばを使って仮説を提出したのである。

教科書疑獄事件だけを知った葉宋曼瑛が、金港堂の上海進出を合理的に説明しようとするれば、事件の犠牲者を救済するためだと推測をするしかなかった。まことに安易な、だからこそ俗耳に入りやすい推測である。

事実の把握が十分にできなかつたためにひねりだした安易な解釈が、葉宋曼瑛の教科書疑獄事件原因説だった。

思いつきで実行した外国企業との合弁事業が、常識的に考えて、その後約10年間も継続するはずがない。周到な準備をしたからこそ、巨大なレンガの3階建て建築物ができた。そのことに葉宋曼瑛は、気づかない。

後の研究者が、葉宋曼瑛の提出した推測を事実によって検証することなしに、事実だと見なしてまことに気軽にくりかえすのはなぜか。

葉宋曼瑛は、商務印書館と金港堂の関係を“cooperation”と表現している。日本語では、協力という意味だし、漢語にするとすれば「合作」となる。別の場所では、“partnership”という単語を使用している。

普通、合弁は、漢語で「合資経営」、英語で joint venture という。葉宋曼瑛が、合弁ではなく、“cooperation”あるいは“partnership”を使うのは、別に意味があって意図的にそうしているのだ。

夏瑞芳のゴム投機失敗に関する張元済の手紙を根拠にして、金港堂側の反応が冷たいことをいう。反応が冷たいのは、単なる投資をしていただけに違いないと思ひ込んだ。合弁初期と後期の変化を無視する。だから、合弁全体について、一歩踏み込んで、深い関係の合弁ではなく、もっと関係の浅い協力 co-operation

「合作」という単語をわざわざ使うのである。

無論実藤恵秀還是樽本照雄均没能明確地給“合作”這個詞下定義。從這些信中可以看到中国方面一再堅持所說的 日本是純粹的投資者，中国方面是单方面地掌握了管理權和人事權 是事實。(80頁)

Neither Saneto Keishu nor Tarumoto Teruo can say definitely what the terms of cooperation were. From these letters, it seems that what the Chinese had always maintained that the Japanese were purely investors, and that the chinese side had sole control over administrative policy and choosing personnel might in fact be true.(39頁)(実藤恵秀もまた樽本照雄もふたりとも協力の条件がなにであるのかを明確に述べる事ができていない。これらの手紙からは、日本人は純粹に投資者であり、中国側はもっぱら管理權と人事權を掌握していた、と中国人はいつも主張していたことが本当のところ事実であったように思われる)

英語原文と漢訳には、すこし違いがある。

原文の term は、複数の意味がある。ここでは、条件という意味だ。それを漢訳では、言葉と考へた。英語原文の「協力の条件」が、漢訳では「協力」というこの言葉」になる。ずれるのではないか。

さて、葉宋曼瑛は、実藤恵秀と樽本照雄の名前を掲げて、その言説の不十分さを批判する。「協力」には条件があったことを言うことができないと書いているところから、葉宋曼瑛は、誰かの言葉を全面的に信用していることがわかる。その言葉を根拠にして実藤と樽本の説明には不足するところがある、と批判する。

私は、商務印書館と金港堂は、平等な合弁であり、特別な条件などないと考えている。多くの事実がそれを証明している。だから、突然、「協力」の条件を樽本は述べていない、と葉宋曼瑛から批判されても、何のことだか。

葉宋曼瑛は、樽本が言っていないことを批判するのである。それが的外れだから、困った人ですね。

張元濟の手紙に、山本条太郎、原亮三郎らが冷淡な反応しか見せないというの

は、その時点で、金港堂側からの理事はいなくなっているのが原因である。「協力」の条件とはなんの関係も、ない。

合併当初は、日本側からも原亮三郎、加藤駒二、あるいは原亮一郎、山本条太郎らが理事に就任していた。1909年頃、商務印書館は、日本側の理事を排除し、すべて中国人で固めたのだ。だから、夏瑞芳がゴム投機に失敗して商務印書館に損害を与えようとも、理事の地位にない原亮三郎と山本条太郎が、口を挟むことのできる立場ではなかった。せいぜいが、株主として助言をするくらいだ。それでも、ずいぶんと親切に対応していると私には見える。

葉宋曼瑛の批判は、何度でもいうが的外れである。だが、この部分に興味深い箇所があるのも事実だ。誤解が発生する根源がここに存在していることを教えてくれるからだ。

「中国側はもっぱら管理権と人事権を掌握していた、と中国人はいつも主張していた」とはどういうことか。葉宋曼瑛は、具体的に文献名をあげていない。だが、すぐにわかる。これは、莊俞（および高翰卿）が書いていることだ。葉宋曼瑛は、これこそが「協力」の条件だと考えているらしい。

莊俞「三十五年来之商務印書館」[莊俞1931]のなかで次のようにのべている。

「締結した条件は、すべてが平等というものではなかった。社長と理事は、すべて中国人であり、一二名の日本人が列席して傍聴できるだけだった。採用された日本人は随時退職させることができるなどである」(3頁)

同じ内容を見たことがあると気づかれたことだろう。これは、高翰卿が、商務印書館内部の講演のなかで虚勢をはって語った商務印書館主権説そのものである。使用している語句も、ほとんど同一であることがわかる。

高翰卿はその講演において、莊俞の文章にもとづいたことを明らかにせずそのまま引用した。こう考えて間違いないだろう。

1992年まで高翰卿の講演記録は、一般の目に触れなかった。莊俞の言葉の方が（こちらは商務印書館の記念冊子に収録されている）流布することになったのだ。

葉宋曼瑛は、莊俞の発言がいかなる背景のもとになされたかを考慮しなかった。自ら考えることなく虚言を事実だと信じたのである。だから、わざわざ「協力」の条件などと書いた。莊俞が1931年に記した言葉は、はるか時空をこえて1986年

の葉宋曼瑛にしっかりと受け止められたといえる。その結果、誤った証言にもとづいて樽本を批判することになった。しかも、これが汪家熔の主張する「商務印書館主権説」をも生み出したのである。

もうひとつ、葉宋曼瑛の著作に少しだけ触れておきたい。

[鍵語言及率：45%] 葉宋曼瑛著、張人鳳、鄒振環訳『從翰林到出版家 張元濟的生平与事業』[IP, MANYING1992]

該書の発行は1992年であるが、元本である英語版は、それより7年前に北京で発行されている。MANYING IP “ THE LIFE AND TIMES OF ZHANG YUANJI ” [IP, MANYING1985]という。

内容は、前の論文とほとんど同じだ。莊俞の文章を引用しているのが新しい。

鍵語言及率が前出論文の55%から45%に低下しているのは、日中合弁について（葉宋曼瑛は、あくまで「合作」という）少しの省略があるからだろう。ただし、教科書疑獄事件原因説の部分は、そのままを再録している。

さて、商務印書館主権説を強調する汪家熔の著作に筆を進める時がきた。

汪家熔

汪家熔は、商務印書館の歴史ばかりでなく出版史全般についての多数の論文を発表している。1990年、商務印書館を退職され、1998年にまとめられたのが1冊の論文集だ。商務印書館と金港堂の合併問題についての論文もこれに収録されている。日本では簡単に見ることのできない雑誌に発表されている文章もあり、本書が発行されて利用できるようになった。のちの研究論文、専門書のあるものは、典拠を明示せずに汪家熔の著作から引用している場合があるほどに彼の著作は注目されている。

[鍵語言及率：90%] 汪家熔『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』[汪家熔1998i]

著者の汪家熔から該書をいただいた時、すぐにでも紹介の文章を書きたかった。汪家熔は、篤実な研究者のひとりだ。特に、資料の発掘をしながら商務印書館

の研究を長年つづけてきた点では、他の追従を許さない。商務印書館に勤務していたから、資料を利用するのに有利な立場にあったということはできよう。だからといって、彼以外の方が同じように新資料を探しだして文章を発表したとも聞かない。汪家熔だからこそできたことだ。研究論文に多く引用されるのは、そういう理由があるからだ。該当分野における研究の第一人者である、と私は自信をもっていう。

長年の研究の成果を集めた該書は、特筆すべき発見を多く含んでいる。ことに金港堂との合併時期に関していっても、今後の研究には不可欠の専門書であることは一目瞭然である。

しかし、すぐに紹介する気には、私はどうしてもなれなかった。なぜなら、42本の論文が収録しているうちの最後の2本が、樽本個人に直接関係するものだからだ。ひとつの方の題名には、「為《繡像小説》給樽本照雄的信」というように私を名指している。

私との論争の文章だから、それを収録しているから、私から紹介しにくい、というわけではない。

2本の論文は、『繡像小説』の主編が李伯元かどうかについてのものだ。汪家熔は、李伯元ではない、と主張し、私は、その反対に李伯元だという。

大げさでなく、1984年当時、世界中の研究者を巻き込んでの一大論争に発展した。論争の過程で『繡像小説』の主編は李伯元であることを示す資料の発見があった。大方の判断として、すでに結論が出ている。

ところが、汪家熔は、あいかわらず李伯元であるかどうかはわからない、と主張をまげない。自説に自信があるからこそ、該書に論文を収録したのだろう。それまでの研究の実績と、商務印書館に籍をおいたことのある人間であるという自負もあって、一步も引き下がる気にならなかったと想像する。

たとえ汪家熔の主観的な判断であろうと、まだ未決着の問題を含んだ論文を収録した著書を紹介するのは、私が論争の当事者なのだから、私としても納得ができない。該書を紹介するのが私が躊躇した理由である。

正直にいて、『繡像小説』の編者問題に関してのみ、汪家熔が下した判断に、私は疑問を抱かざるをえなかった。『清末小説から』第54号(1999.7.1)に該書の

総目次をかかげて、とりあえずの紹介に替えたのだ。

では、なぜ今、紹介する気になったのか。

該書は、最近の商務印書館研究において、欠かすことのできない専門書であることが理由のひとつ。もうひとつの理由は、もっと大きく、『繡像小説』が李伯元の編集になっていたと公表する商務印書館の広告が発見されたからだ。決定的な資料である[樽本照雄2001a]。

商務印書館自身が『繡像小説』の編者が李伯元であることを新聞紙上で広告している。いくら汪家燊でも、この事実を否定することはできない。該書に収録した『繡像小説』がらみの2本は、明らかに汪家燊の誤解であるから、今回の紹介から切り離すことができる。

汪家燊が発掘した新資料の例をいくつか示す。

創業者たち夏瑞芳、鮑咸恩、鮑咸昌らの姻戚関係を明らかにした(9-11頁)。

1905年の第2次増資に参加した日本人の名前を発掘した(15頁)。

合弁初期における日中の理事者名を明確にした。最初は、日中で各2名、1907年より中3日2、1908年は中2日1(注: 事実は中3日2)、1909年よりすべて中国人になる(16頁)。

1914年、合弁を解消するにあたって理事会の報告書を発掘した(27-29頁)。これも貴重な文書だ。理事会の報告書が保存されていたようとは思ってもしなかった。日中戦争の時、日本軍の攻撃ですべての資料は失われたと商務印書館の編集室から手紙をもらって知らされていたからだ。商務印書館が、金港堂との合弁をどのように考えていたかを知る材料となる。

1903年から1914年までの商務印書館における日本側株主の投資額とその利息を公表した(30頁)。きわめて珍しい。おそらく商務印書館に保管されていた資料から発掘したものだと思う。私は、このような数字を見たことがない。これによって、日本側の投資額と獲得した利益の総額が判明した。と同時に、計算すれば、商務印書館が得た利益が、金港堂よりもはるかに多かったことがわかったのである。ただし、別の論文「商務印書館的経営管理」(78頁)において、資本金について違う数字を提示する。なんらかの説明が必要な箇所だ。その説明がない。

1914年当時の日本人株主名と持ち株数を明らかにした(33頁)。

以上、日中合併時期を中心に新発見の資料を列挙した。充実した研究成果であることがわかる。商務印書館に勤務していたからこそできた資料発掘であろう。今後の研究に不可欠であるというのは、この新資料を見ても理解できる。

冒頭に示した鍵語及率90%は、日中合併に言及する複数の論文をあわせたものから算出した。高い数値を示すのも、その内容からすれば当然のことだ。

新発見に満ちた汪家熔の論文なのだが、疑問に思う部分がないではない。

汪家熔も、例の根拠のない教科書疑獄事件原因説を採用する(14頁)。

さらに重要なのは、今まで問題にしてきた商務印書館主権説なのだ。

葉宋曼瑛が「早期中日合作中未被掲開的一幕」でさりげなくもらした。

「日本人は純粹に投資者であり、中国側はもっぱら管理権と人事権を掌握していた、と中国人はいつも主張していたことが本当のところ事実であったように思われる」

汪家熔が、これにヒントを得たかどうかは知らない。しかし、外から見れば、ふたりの論文はつながっている。葉宋曼瑛は、莊俞の文章を根拠にしていた。莊俞の文章は、高翰卿の講演記録に受け継がれている。汪家熔は、直接には高翰卿の文章を引く。

汪家熔が、「主権在私の合資 一九〇三年～一九一三年商務印書館的中日合資」[汪家熔1993:21-31]において展開した論点の重要箇所は以下の通りである。

高翰卿の「ひとつは、社長と理事はすべて中国人であって、日本人はひとりだけが監察人であること。ふたつは、雇用された日本人は随時解職することができる」をまず示す。

つぎに1903年から1909年までの日中の理事名簿を提出する。それを説明して「1909年以前の日本株主は、その持ち株に比例して理事を推挙したが、行政職務は担当しなかった」(26頁)という。この論理は、わかりにくい。理事でありながら、行政職務ではないというのだ。論理の矛盾だ。だいいち、そう説明する根拠を示していない。

「中国側は主権を失っていないかつ、日本側には特権がなかった」(同上)という表現はどうか。もともと両者が平等の合併だった。だから資金も折半している。社長は中国側が出しているが、理事は日中同数の人間が就任している。日

中平等だから「中国側は主権を失っていなかったし、日本側には特権がなかった」というのは当たり前のことだ。平等であることを言い換えているにすぎない。それを、論文の表題「主権在的合資」に置き換えるのは、拡大解釈だ。言葉の魔術であり、ごまかしとしか思えない。

もっとも、莊俞と高翰卿の証言には、そのよるところがあった。1914年に商務印書館と金港堂が合併を解消したとき、商務印書館理事会は、その経過を株主に説明した。「商務印書館特別株主大会理事会報告」に似た文章が見られる。

だからといって、理事会報告の該当部分が正しいということにはならない。事実が、証言を否定をしている。どうやら、「商務印書館主権説」は、商務印書館首脳を含めて、はるか以前からの一貫した主張であったようだ。

資料の読みをねじ曲げてまで、商務印書館主権説をなぜ汪家熔がとなえるのか。これは、商務印書館が負った歴史が、そのまま汪家熔の文章に露呈したとしかいいようがない。『初期商務印書館研究』[樽本照雄2000c]のなかで分析しておいたから、ここではくりかえさない。

商務印書館主権説は、魅力があるらしい。中国の研究者のなかには、なにも考えずにそのまま引用している例がある。それほど大きな影響力を持つものだ。理事一覧表をもういちど見てほしい、といいたい。

そのほか

単行本で出版された商務印書館の専門書をいくつか紹介する。

[鍵語言及率：75%] 呉相 『從印刷作坊到出版重鎮』[呉相1999]（書評を別に書いた[樽本照雄2001b]）

商務印書館の創立から日中戦争終了までの歴史を述べる。多くの文献を参照して詳細かつ本格的な商務印書館研究の専門書ということが出来る。張元濟伝は複数出版されている。だが、商務印書館についての専著というのは珍しい。

葉宋曼瑛の論文、著作『從翰林到出版家』、汪家熔の論文（未発表を含む）、著作『大變動時代的建設者』などを主として使用していることが本文から、また参考書からも理解できる。

金港堂との「合作」は、とくにページを割いて「第7章現代企業的経営管理」のなかで述べられている(295-304頁)。

合弁は、漢語では「合資経営」という。ゆえに、呉相は、合資経営、あるいは合資ということばを使う。だが、「合作」という単語も使用してきている。また、「三本」条太郎と誤植する。「合作」「三本」ともに葉宋曼瑛の論文をそのまま継承した結果だろう。

長尾楨太郎を、長尾「楨太郎」と誤る。

1902年の教科書疑獄事件ののち、金港堂が発展を求めて中国にむかったというのは、葉宋曼瑛論文からの引き写しだ(296頁)。長尾雨山らの生計のためだといわないのは、長尾らが教科書疑獄事件に巻き込まれたことを説明していないから、いっそのことこれに関連する部分を省略したと考えられる。

商務印書館主権説を採用するのは、汪家熔論文の受け売りだ(297-298、303頁)。

商務印書館が金港堂との10年におよぶ合弁を解消したとき、金港堂は、最初の10万が37.8万に増えていた。これは正しい数字だ。汪家熔論文には、37.81万とある。一方、商務の資産は180万元に増えたと書く(302頁)。これは、間違い。1913年当時、総資本は120万元だった。だから、金港堂の持ち資本を減ずれば商務の資本は82.19万とならなくてはならない。汪家熔の論文を参照しているにもかかわらず、こういう間違いがどうして生じるのか不明。

書名からは、これが商務印書館の歴史を書いたものだと理解しにくい。工夫があってもよかったのではないか。

呉相が、視野をひろげて研究論文の多くに目を通していていることは、鍵語言及率の75%と見ても理解できる。だが、先行文献を消化するのに気をとられたのか、それらの吟味が不足した。

呉相が収集した先行論文というのは、漢語文献に限られているように思われる。日本との合弁問題にもかかわらず、日本語文献が使用されていないようなのだ。あとで、また問題にする。

王建輝『文化的商務 王雲五專題研究』[王建輝2000b]

王雲五は、1921年、胡適の推薦を受けて商務印書館に入社し編訳所所長をへて、

のちに社長になった人物だ。しかし、国民党政府の要職を歴任している。さらに、1949年、香港に出て、1951年、台湾に定住した。その経歴と政治的立場の違いから、中国大陸では、今まで言及されることはなかった。研究「禁区」のひとつであったのだ。

王建輝の専著は、その王雲五に焦点をあわせる。研究界の状況が変わったことを証明するものともなっている。

ただ、主題が王雲五だから、商務印書館と金港堂の合併については、ほんの少し触れるだけだ(23頁)。ゆえに本稿では、該書の存在をいうに止める。

[鍵語言及率：90%] 楊揚『商務印書館：民間出版業的興衰』[楊揚2000]

本稿を書いている今、楊揚の本書が、いちばん新しい商務印書館研究の専門書である。

著者の「後記」によると、本書は、博士論文に關係して生まれたという。若い世代(1960年代生まれとしか書いてない)の著作だとわかり、中国の研究者層の厚みを感じるのはいくつ時だ。

冒頭に創業者たちの肖像写真、商務印書館の印刷設備、棋盤街、東方図書館、早期雑誌の表紙写真などをかかげる。

楊揚が利用した資料は、豊富だ。内部発行の『商務印書館館史資料』はいうにおよばず、『鄭孝胥日記』までも利用している。日記が出版されたのは、1993年のことだった。時間的な制約があるから、ほかの研究論文に言及されなくてもしかたのない面はある。だが、日記を使うことによって、商務印書館と金港堂の合併解消の状況が、従来よりよほど詳細に説明されることになった。

夏瑞芳の暗殺事件についても、『申報』の1914年1月11日付から「棋盤街又出暗殺案」という報道記事が連載されることを指摘する(79頁)。これも漢語論文でははじめてのことだろう。(ただし、せっかく新聞記事があることを知りながら、それから引用していないのは不可解だ)

豊富な資料を利用している。だから、鍵語言及率も90%と汪家熔と同じく過去最高値を示している。

多数の資料にもとづきつつ、執筆の姿勢は厳格である。

商務印書館が北京路にある美華書館の隣に移転したことがあった。その地名を北京路「順慶里」口とするのがほとんどの文献である。莊兪がそう誤記してから、中国の研究者は、その誤記を疑うことなく継承していた。だが、楊揚は、正しく慶順里口と書く（15頁）。小さいことのように見えるかもしれない。だが、細部にこそ研究者の態度が表われるのだ。（とほめたのだが、附録の年表には、相変わらず「北京路順慶里」（160頁）と誤ったままを書いている）

慎重な研究姿勢は、金港堂が商務印書館と合併する事情を説明する箇所にも見える。

楊揚は、次のように書いている。「金港堂が中国にやってきて投資し印刷組織をうちたてる原因について、1902年12月17日に日本で巻き起こった教科書疑獄事件に直接関係していると一般の研究者は、みな考えている」（29頁）

注を見れば葉宋曼瑛の著作しかあげていないが、その後の論文を読めば、大方が葉宋曼瑛説を受け入れているから、一般の研究者といってもいいだろう。私が「慎重な研究姿勢」だというのは、典拠書名をかかげているだけで、楊揚自身は態度を保留しているように見える。それについて判断する材料を持っていないことを言外におわせていると感じるからだ。におわせているだけで明確に述べないところを見ると、別の意見が日本語論文にはあることを知っているのか。つまり、ぼやかしている。ただし、そのあとの箇所で、原亮三郎らは、教科書疑獄事件によってもたらされた窮地を切り抜けるために上海に投資することにしたとのべる（29頁）。楊揚も、やはり俗説を採用していることがわかる。

夏瑞芳がゴム投機に失敗した事情を詳しく説明するのは、さすがに専門書である。

中国図書公司との闘争には目が届かなかったが、中華書局との教科書をめぐる争いには「二、中華書局的崛起与教科書之争」という一節を割いている。

もうひとつは、例の商務印書館主権説である。楊揚は、この通説については無視する。否定する資料を持たなかったのかどうか知らない。しかし、これが正しい態度である。

それほど資料収集に努めた著者であったが、原文を入手できないものもあった。例にあげているのは、『東方雑誌』創刊号（1904.3.11）掲載の広告「最新初等小

学国文教科書出版」だ。

著者は大学の図書館で『東方雑誌』の該当号をみたがこの広告を見つけることができなかつた(179頁)。しかたなく葉宋曼瑛の著作から孫引きしている(31頁)。著者は、この広告は挟み込みであったのかもしれないと推測する。おかしなことだ。私は創刊号にその広告を見ている。書影を掲げておいた[樽本照雄2000:173]。

商務印書館の総資本の数字が、大ざっぱだ(33、68頁)。汪家熔の「主権在我的合資」(該書30頁)で明確詳細に公表されている。もっとも、同じく汪家熔の「商務印書館的経営管理」(該書78頁)では、数字が異なつてはいるのだが。楊揚は、別の資料(『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』[商務印書館1992a:750])を使用している。カッコに楊揚が示す数字を入れておく。

1903年 15万元(20万元) 合弁当時は、契約の10万元を商務印書館は準備できなかつたのが真相だ。

1905年 30万元(100万元)

1913年 120万元又150万(150万元)

本書のような専門書は、汪家熔の示した数字の違いを指摘してもよかつた。使用する資料の吟味が不足している。

1902年7月(旧暦)に商務印書館が失火したことに言及するのはいい(28頁)。新しい機械設備には保険をかけていたから保険金を得た、と説明するのも正しい。そのあとで、商務印書館が資金を調達して土地を購入し新しい印刷工場を建設したというのは、説明不足だ。その資金はどこから調達したのか。いくらなのか。はっきりしないから知りたいと思う。

ちいさな誤りがある。

30頁13行の「金港堂正七倍編輯室」は、「金港堂正七位編輯室」の誤り。汪家熔が「金港堂“正七位”編輯主任」(「商務印書館創業諸君」[汪家熔1991])と書いたのを誤植した。とはいえ、正七位は官位なのだから汪家熔、楊揚の書くようにはならない。

『繡像小説』に触れて、1906年4月李伯元が死去して停刊したという(49頁)。通説のままに書き流している。だが、該誌は、李伯元の死去後も発行されていたのが事実だ。

金港堂が中国に進出する動機を教科書疑獄事件に結びつけた葉宋曼瑛説のところでも言及したが、楊揚は、日本語論文に別の主張があることをやはり知らないようだ。『繡像小説』の終刊時期についても研究者の論争にまで発展している。日本と中国間で文章の応酬がある。

ということは、楊揚は、漢語文献しか見ていないということになる。注に示された参考文献のなかには、欧文原作もある。ただし、漢訳だ。大きな問題が、ここに存在する。

附録として [鍵語言及率：40%] 「商務印書館大事記」がある。

最近の本格的な研究書として楊揚の『商務印書館：民間出版業の興衰』をあげたから、これで終わりである。しかし、あとふたつ出版されているのでひとことだけ触れておく。

[鍵語言及率：20%] (法)戴仁著、李桐実訳『上海商務印書館1897-1949』

[DRÈGE,JEAN-PIERRE2000]

最近の出版のように見えるのに、該書の鍵語が年表なみの20%というのには、理由がある。

もともとは、フランス語で書かれたものである。ところが、それが出版されたのは、約20年前のことだ。

Jean-Pierre DRÈGE “ LA COMMERCIAL PRESS DE SHANGHAI 1897-1949 ”
[DRÈGE,JEAN-PIERRE1978]が原本である。

漢訳本には、著者の「中訳本序」がつけられた。その日付は1994年7月30日だ。それから数えても出版されるのは6年がかかっている。著者もいうように、フランス語原本が出版されてからの20年の間に、多くの資料と研究論文が発表されているのだ。手を入れようと思えば、書きなおすよりしかたがなかっただろう。原著のままに漢訳本を出版するのは、著者も気のすすまぬことだったろうと想像する。(渡辺浩司氏より漢訳本をいただきました。感謝します)

8 問題点

大きな問題というのは、使用する資料に関係する。

特に、商務印書館と金港堂の合併時期を研究対象とするばあいに生じる。

日本との合併事業であるにもかかわらず、大多数の中国の研究者が日本側資料を利用してない(葉宋曼瑛と汪家熔は除いてもよい)。驚くべきことではないか。

日中企業が合併したというのに、中国側の資料だけを使用して事実が把握できるのであるか。単純な疑問にすぎない。日本の当事者が、金港堂と商務印書館の合併について証言している。当時の評論文、雑誌記事もある。また、それらを用いた研究論文も発表されている。

金港堂については、稲岡勝が公表している一連の詳細な研究がある。はずすことのできないものだ。

研究をより深いものにしたいのならば、資料をできるだけ収集するのは当然だろう。日中合併時期を扱うのであれば、日本側資料にまで目を配るのが常識ではないかと言っているにすぎない。

長尾雨山は、教科書疑獄事件で有罪と判定された。しかし、それが冤罪であったことに言及する中国の研究論文1本、研究書1冊もない。弱点となっていると判断する理由のほんの1例にすぎない。

ただし、王益論文のような論文もある。参考文献には漢語文献しかあげられていない。しかし、その記述は冷静にして事実をついている。日本語文献を参照しなくても、真相に近づくことは可能である。しかし、よほどの才能がなければできない相談だろう。研究者なら誰でもできると思ったら間違いであるのは、上の例を見れば理解できる。

以上、最近の商務印書館研究、特に日中合併時期をとりあげて紹介した。

多くの問題点を指摘した。それらについて評論をすることは、誰でもできる、お前の見解はどうなのか、と問う人がいるはずだ。自分で資料を発掘し研究を進めずに、人の研究成果をあげつらうことに対してうさん臭さを感じている人に違いない。

商務印書館と金港堂の合併問題について、日本人による著作があるべきだと考えて『初期商務印書館研究』[樽本照雄2000c]をまとめた。

自分で自著を紹介するのは、やってできないことはないが、紙幅もとったこと

だし、ここでは省略する。

ひとことだけ述べておくと、商務印書館の合併時期について、今まで書かれた文章のなかでは、もっとも詳細である。上に指摘した問題点について、すべて私なりの考えを提出しておいた。私の知る限りの資料を使って、もっとも合理的だと考える説明をした。自信をもっていうが、商務印書館にとっては耳の痛いことまでを洗いざらい書いたのだ。

該書については、日本で書評が書かれている（[阪口直樹2000]改題再録[阪口直樹2001]）。

【附記】

本稿は、『大阪経済大学教養部紀要』第19号（2001.12.31）に掲載した。

本稿を執筆したあとに次の文献を入手した。

張国功「商務的文化与文化的商務 近期商務印書館研究一瞥」[張国功2001]は、商務印書館の研究論文を幅広く紹介している。外国の文献も含まれるが、いずれも漢訳されたものだけ。日本における研究は、無視される。

なお、樽本の著作に言及している張志強「記録百年商務的光輝足迹 近20年来商務印書館史研究著作述評」[張志強2001]がある。

初期商務印書館年表

アラビア数字は新暦、和数字は旧暦を表わす

丸付数字は、地図上の場所を示す

[日]は金港堂を含む日本人関係の事柄

光緒十四年 1888 明治21

[日]山本条太郎、三井物産上海支店勤務

光緒二十年 1894 明治27

[日]山本条太郎、三井物産上海支店臨時店長代理。のち副支配人(1897年まで)

光緒二十二年 1896 明治29

三月初三日(4.15) 三洋涇橋の茶館で独立の相談をする[張蟾芬1935:生61][高翰
卿1992:3][朱蔚伯1981:141]

光緒二十三年 1897 明治30

正月初十日(2.11) 資本金3,750円で商務印書館を創業する

出資者と出資金：沈伯芬1,000元、鮑咸恩500元、夏瑞芳500元、鮑咸昌500元、
徐桂生500元、高翰卿(鳳池)250元、張蟾芬250元、郁厚坤250元

[高翰卿1992:2-3][朱蔚伯1981:141]

江西路北京路首徳昌里末街三号

[高翰卿1992:3]末弄三号[張蟾芬1935:生61]末街三号[朱蔚伯1981:142]末街^{ママ}三号

仕事をはじめたのは、夏瑞芳、鮑咸恩、郁厚坤の3名[高翰卿1992:3]

創業者のなかで最初に商務で仕事をはじめたのは、夏瑞芳、鮑咸恩、郁厚坤
の3名[朱蔚伯1981:142]

夏瑞芳、鮑咸恩、鮑咸昌、郁厚坤など数人が仕事をはじめた[張蟾芬1935:生61]

夏瑞芳、印刷の視察のために日本へ旅行[朱蔚伯1981:143]

設備：「当時僅置備三号揺架三部、脚踏架三部、自来墨手扳架三部、手掀架一部、
其余略辦中西文鉛字器具」[高翰卿1992:3]

[日] (9.9) 長尾雨山、第五高等学校漢文科主任

印刷：美国台物史先生輯、范師母口訳『尼虚曼伝』中国聖教書会発

光緒二十四年 1898 明治31

[日] (6月) 山本条太郎は原操子(原亮三郎の三女)と結婚

六月 北京路慶順里口美華書館西首へ移転

鮑咸昌、鮑咸亨が美華書館より商務に移る[朱蔚伯1981:142]

七月二十六日(9.11)印刷：『昌言報』第3冊より印刷

[日] (10.20) 小田切万寿之助「清国貿易の前途」 「.....近來は彼國人が歐米の
文明を慕ひ、隨つて之を學ぶには東隣同文國なる日本の經歷に徴し、其の最
近三十年間、歐米の文物を模倣したる成敗に鑑み、成功を採りて失敗を避け
んとするに鋭意なるや、頻りに日本の圖書を買ひ、政治、法律、經濟等の各
科を首とし、工芸、科學、歴史、地理等に至るまで、頻りに日本の書に因て
研究せんとする氣運と爲れり。故に此際日本の圖書を漢譯して彼國に輸出せ
ば隨分販路多かるべし」 『太陽』第4巻第21号。中村忠行「検証：商務印書
館・金港堂の合併(三)」 『清末小説』第13号1990.12.1。82-83頁

印刷：『格致新報』

印刷：馬建忠『馬氏文通』

出版：邵作舟撰『邵氏危言』

出版：英語教科書『華英初階』

光緒二十五年 1899年 明治32

[日] (10.31) 長尾雨山、東京高等師範学校教授兼文部省図書審査官、東京帝
大文科大学講師

[日] 金港堂、中国において使用する教科書出版の主意書をつくり、中国用小学読
本を編纂したことがある[開国五十年史1908:292-293]

印刷：重野安繹著『大日本維新史』上下 発行人善隣訳書館、国光社 上海北京
路商務印書館代印 明治32.12.5印刷 12.13発行

出版：『商務書館華英字典』

光緒二十六年 1900 明治33

[日] (6.20) 「金港堂理事来テ日華学堂学生一同ヲ招待シテ、清国学校二用ユル
普通学教科翻訳二付キ学生ノ意見ヲ聞カンコトヲ求ム」 [実藤恵秀1981:97]

十月初八日 (11.29) 印刷：『亜泉雑誌』創刊

修文書館の印刷機器を印有模の斡旋により購入、紙型をつくることは始める [商
務印書館1992a:678] は修文印刷局とする

出版：『華英地理問答』(英漢対照)

[日] 原亮三郎、金港堂の社長を息子の亮一郎にゆずる

光緒二十七年 1901 明治34

正月十五日 (3.5) 印刷：『訳林』創刊

三月 印刷：『集成報』

四月 印刷：岡本監輔編次『西学探原』

[日] (9月) 山本条太郎、三井物産上海支店長就任

[日] 小学校令施行規則追加で、小学校教科用図書の審査と採定についての書店側
運動を禁止する

九月 出版：坪内雄蔵著、沙頌乎、張肇熊訳『和文漢訳読本』

十一月二十五日 (1902.1.4) 張元済ら『外交報』を創刊 [商務印書館1992a:678]
商務最初は印刷、のちに出版 [章錫琛1964:66]

第1次増資 張元済、印錫璋が投資に応じ株主となる。ふたりの出資は、23,750元。
商務印書館側の元の資本を7倍に定め、合計5万元とする [朱蔚伯1981:143]

印刷：『天地奇異志』

光緒二十八年 1902 明治35

正月 張元済、正式に入社 [張樹年1991:42] [朱蔚伯1981:143]

長康里で編訳所設立準備 [朱蔚伯1981:143]

春、夏間 夏曾佑、編訳所編輯 [張樹年1991:43]

七月十九日 (8.22) 火災発生

九月十五日 (10.16) 以前 (『外交報』第26期広告) 赤レンガ洋館3階建ての印刷
所新築 北福建路海寧路 錢業会館西昌閣隔壁

編訳所 唐家術

発行所 冠生園北隔壁之171,173号

十一月初一日(11.30) 発行所 河南路棋盤街直街中市

[日](12.17)教科書疑獄事件発生。

(12.28)興泰紗廠を買収、上海紡織有限公司として登記。取締役は、山本条太郎、印有模ら

出版：杜亜泉編『絵図文学初階』

光緒二十九年 1903 明治36

正月 張元済、編訳所所長になる[朱蔚伯1981:143]

編訳所 蓬路[商務印書館1992a:679]は蓬萊路とする

三月 漢口分館設立[王雲五1973:11]

五月初一日(5.27) 出版：『繡像小説』を創刊。半月刊。第13期より発行年月日を記載しなくなる

六月 蔣維喬入社[朱蔚伯1981:145]五月入社説もある

[日](10.11)原亮三郎は、小谷重と加藤駒二をともない神戸を出帆、上海に赴く
十月初一日(11.19) 日本金港堂と合併

十月 莊俞(百俞)入社[朱蔚伯1981:145]

十二月 高夢旦(鳳謙)入社[朱蔚伯1981:145]編訳所国文部部长

[日](12.1) 長尾雨山、神戸より上海に赴く

十二月初二日(1904.1.18) 『最新国文教科書』の編集会議がはじまる。参加者は、蔣維喬、張元済、高夢旦、長尾楨太郎、小谷重
日本人技師前田乙吉、大野茂雄を招聘し写真網目銅版を導入
翻訳シリーズ「説部叢書」を刊行しはじめる

光緒三十年 1904 明治37

[日](2.3) 原亮三郎、上海より香港経由で帰国

正月二十五日(3.11) 『東方雑誌』創刊

二月二十三日(4.8)初版 出版：『最新国文教科書』

七月 寿孝天入社[朱蔚伯1981:145]

八月二十九日(10.8) 編訳所 美租界新衙門東首祥麟里間壁成字一三六四号

十一月 杜亜泉入社[朱蔚伯1981:145]

十一月 沈頤入社[朱蔚伯1981:145]

日本人柴田を招聘し彫刻黄楊（ひめつげ）版を導入

光緒三十一年 1905 明治38

二月 増資する

五月 北京に京華印書局を設置[商務印書館1992a:679]

七月二十日（8.20） 第1回小学師範講習班[商務印書館1992a:679]速成小学師範
講習所とも

十月 黄元吉入社[朱蔚伯1981:145]

十二月 遵欽定大清商律定爲有限公司，呈商部註冊[柳和城2002b:141]

増資する

日本人技師和田鏞太郎、三品福三郎、角田秋成を招聘し彫刻銅版を導入。同じく
和田、細川玄三、岡野、松岡（正識）、吉田、武松、村田、豊室らを招聘し
彩色石印を導入

光緒三十二年 1906 明治39

正月 戴克敦入社[朱蔚伯1981:145]

正月 北京分館、天津分館設立[商務印書館1992a:680][王雲五1973:43]1905年とする

三月十二日（4.5） 批准立案[柳和城2002b:141]

三月十四日（4.7） 李伯元死去

四月 奉天分館設立[商務印書館1992a:680][王雲五1973:43]瀋陽分館とする

四月 福州分館設立[王雲五1973:43]

七月 開封分館設立[王雲五1973:45]

九月 重慶分館設立[王雲五1973:45]

九月 安慶分館設立[王雲五1973:45]

十一月 駱師曾入社[朱蔚伯1981:145]

十一月 陸爾奎[朱蔚伯1981:145]

年末 『繡像小説』第72期を発行して停刊

光緒三十三年 1907 明治40

正月 広州分館設立[王雲五1973:50]

正月 小学師範講習班停止、附属小学を尚公小学に改名[商務印書館1992a:680]

- 二月 長沙分館設立[王雲五1973:50]
- 四月 開北宝山路印刷所落成[柳和城2002b:140]
- 四月 濟南分館設立[王雲五1973:50]
- 七月 太原分館設立[王雲五1973:50]
- 八月 潮洲分館設立[商務印書館1992a:680][王雲五1973:45]1906年とする
光緒三十四年 1908 明治41
- 四月 鄭孝胥、株主となる
- 高鳳岐(嘯桐。高夢旦の兄。編訳所勤務)が死去[鄭貞文1964:143]
- 陸費逵(伯鴻)入社[鄭貞文1964:143]
- 平版印刷機を導入。技術指導のため日本人木村今朝男を招聘
宣統元年 1909 明治42
- 正月二十五日 『教育雑誌』創刊。陸費逵主編
- 二月 杭州分館設立[王雲五1973:54]
- 三月初八日(4.27) 第1回理事会開催[鄭孝胥1993:1188]
- 三月 董事局設立。董事会のはじまり。それ以前は編訳所の会議で決定していた
[朱蔚伯1981:147]
- 三月 蕪湖分館設立[王雲五1973:55]
- 四月 南昌分館設立[王雲五1973:55]
- 六月 黒竜江支館設立[王雲五1973:55]
- 七月 張蟾芬入社[張蟾芬1935:生61]
- 七月 商業補習学校[商務印書館1992a:681]
- アメリカ人スタッフオードを招聘し写真銅版の改良を行なう
宣統二年 1910 明治43
- 正月十四日(2.23) 陸費逵が外で教科書を密かに編集し、会社はそれを購入す
るつもり[蔣維喬1992:59]陸費逵の秘密行動
- 正月 西安分館設立[王雲五1973:56]
- 養真幼稚園[商務印書館1992a:681]
- 二月初七日(3.17) 張元濟は、欧米の教育と印刷状況を視察するため世界旅行
に出発した

- 六月十六日（7.22） 商務印書館で開かれた特別会議で、夏瑞芳が14万元をゴム
投機で失ったと報告がある[鄭孝胥1993:1265]
- 七月二十五日（8.29） 『小説月報』創刊
- 九月 発行所 四馬路畫錦里口
- 十二月十八日（1911.1.18） 張元濟帰国
宣統三年 1911 明治44
- 二月 『少年雑誌』創刊
- 九月十六日（11.6） 陸費逵ら新出版社設立を協議[陳寅1913]
民国元年 1912 明治45大正1
- 1月 陸費逵、戴克敦、沈頤、沈知方ら商務印書館から独立して中華書局を設立
- 2-8月 商務印書館と中華書局の教科書戦争
- 6月 桂林支館設立[商務印書館1992a:682]
- 7月 発行所 河南路棋盤街中市
民国2年 1913 大正2
- 1月4日 合弁解消の議論が始まる[鄭孝胥1993:1448]
- 1月 保定支館設立[王雲五1973:79]
- 8月 吉林支館設立[王雲五1973:81]
- 9月 夏瑞芳と長尾雨山が、日本株回収のために日本に赴いたが、金港堂に拒否
された
- 11月 金港堂より福間甲松が来て合弁解消の交渉が始まる
章錫琛入社[陳玉堂1993:844]
民国3年 1914 大正3
- 1月6日 商務印書館は金港堂との合弁を解消する。全権代表福間甲松と調印[商
務印書館1992a:683]
- 1月10日 夏瑞芳暗殺
- 1月11日 緊急理事会が開かれ、印錫璋が社長
- 1月14日 夏瑞芳葬儀
- 1月31日 合弁解消報告のために株主特別会議を開催[商務印書館1992a:683]
- [日]（12.24） 長尾雨山、上海より長崎到着

文献一覽

著者名の現代中国音順 日本語も中国語で読む * : 初出未見を示す

A

- 阿 英1957 繡像小説 「晚清文学期刊述略」『文芸報』1957.10.20
「晚清文学期刊述略」『晚清文芸報刊述略』上海・古典文学出版社1958.3
魏紹昌編『李伯元研究資料』上海古籍出版社1980.12

B

- 百瀬 弘1959 鄭孝胥『アジア歴史事典』下中邦彦 平凡社1959.9.20/84.4.1復刊
阪口直樹2000 中国現代文学研究の源流を発掘する 樽本照雄『初期商務印書館研究』
『中国文芸研究会会報』第228号 2000.10.29
2001 中国現代文学の源流を発掘する 樽本照雄『初期商務印書館研究』
『清末小説から』第61号 2001.4.1
包 天笑1971 我在商務印書館編訳所 『釧影樓回憶録』香港・大華出版社1971.6
『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
北京図書館1995 『民国時期總書目(1911-1949)』中小学教材 北京図書館、人民教育出版社図書館合編 北京・書目文献出版社1995.2
本野英一2001 辛亥革命期上海の中英債権債務処理紛争 一九一〇年「ゴム株式恐慌」
後の民事訴訟事例分析 『東洋史研究』第60巻第2号 2001.9.30
畢 樹棠1935 繡像小説 『文学』第5巻第1期 1935.7.1
魏紹昌編『李伯元研究資料』上海古籍出版社1980.12(魏紹昌
による書き換えがある)
冰 心1987 我和商務印書館 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』
北京・商務印書館1987.1
BRITTON, ROSWELL S. 1933 “The Chinese Periodical Press 1800-1912” Kelly &
Walsh, Limited 1933

C

- 蔡元培1987 商務印書館總經理夏君伝 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 1992 商務印書館新字典序 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 滄江1911 国民破産之噩兆 『国風報』第2年第14号宣統三年五月念一日(1911.6.17)
- 曹冰巖1987 張元濟与商務印書館 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 曹裕才1985 美華書館和商務印書館の淵源 『商務印書館館史資料』之三十一 北京・商務印書館總編室編印1985.6.1
- 長谷川宇太治1905 出版事業 『渡清案内』実業之日本社 1905.9.28
- 長尾雨山1904 对客問 第一-四 『東方雜誌』第1-5期 1904.3.11-7.8
- 1965 『中国書画話』 筑摩書房1965.3.10 / 1975.9.15十二刷 筑摩叢書27
- 長尾正和1959a 長尾雨山 [1] 礼之 『冊府』第10号1959.5
- 1959b 長尾雨山 = 承前 [2] 礼之 『冊府』第11号1959.12
- 1960a 長尾雨山 = 承前 [3] 礼之 『冊府』第12号1960.6
- 1960b 長尾雨山 (四) 礼之 『冊府』第13号1960.12
- 1961a 長尾雨山 (五) 礼之 『冊府』第14号1961.7
- 1961b 長尾雨山 (六) 礼之 『冊府』第15号1961.12
- 1962a 長尾雨山 (七) 礼之 『冊府』第16号1962.7
- 1962b 長尾雨山 (八) 礼之 『冊府』第17号1962.12
- 1963 長尾雨山 (九) 礼之 『冊府』第18号1963.8
- 1964a 長尾雨山 (十) 礼之 『冊府』第19号1964.1
- 1964b 長尾雨山 (十一) 礼之 『冊府』第20号1964.6
- 1965a 長尾雨山 (十二) 礼之 『冊府』第21号1965.1
- 1965b (『中国書画話』) あとがき 長尾雨山 『中国書画話』筑摩書房1965.3.10 / 1975.9.15十二刷 筑摩叢書27
- 1965c (長尾雨山) 著者略歴 同上
- 長沢規矩也1939 近代支那の図書及図書館 『アジア問題講座』第10卷 創元社1939.10.22
- 陳伯熙1924a 商務印書館創業之歴史 陳伯熙編 『上海軼事大觀』上海・泰東圖書局1924.2六版
- 1924b 橡皮股票之歴史 同上
- 陳塵若1987 趙元任和商務印書館 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 陳達文1987 胡適与商務印書館 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1

文 献 一 覽

- 陳 岱孫1987 我和商務印書館 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京·商務印書館1987.1
- 陳 鋒ら1998 商務印書館恢復建制的前前後後 陳鋒、汪守本 『商務印書館一百年 (1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 陳 福康1987 彭家煌小伝 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京·商務印書館1987.1
- 陳 翰伯1987 從小讀者到老編輯 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京·商務印書館1987.1
- 陳 翰笙1987 商務印書館与我同齡 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京·商務印書館1987.1
- 1992 我和《外国歴史小叢書》 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京·商務印書館1992.1
- 陳 江1981 魯迅与商務印書館 魯迅在商務印書館出版的著訳 『魯迅学刊』1981年第1期 1981 刊年不記
『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京·商務印書館1987.1
- 1992a 中国童話の開山祖師孫毓修先生 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京·商務印書館1992.1
- 1992b 慧眼伯樂 憚鉄樵 同上
- 1998a 周建人与《自然界》 『商務印書館一百年 (1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 1998b 文化界的“伯樂” 同上
- 1998c 東方図書館 文化宝庫和学者的搖籃 同上
- 1998d 尚公小学 同上
- 1998e 中国電影史上的商務印書館 同上
- 1998f 上海工人第三次武装起義中的商務工人糾察隊 同上
- 1998g 《東方雜誌》 近現代史的資料庫 同上
- 1998h 百年風雨 人間正道 商務印書館百年簡述 同上
- 1998i 中国童話の開山祖師 孫毓修 同上
- 1998j 中国第一部动画片 同上
- 1998k 黎烈文在商務印書館 同上
- 陳 孟端1992 商務編輯、《国文法草創》著者陳承沢 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京·商務印書館1992.1
- 陳 巧孫1998 張元濟与商務印書館 『商務印書館一百年 (1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 陳 勝華1998a 商務印書館的創立及其意義 『商務印書館一百年 (1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 1998b 中国現代出版業：你的源頭在哪里？ 紀念商務印書館創立一百周年 『商

- 務印書館一百年 (1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 陳 叔通1987 回憶商務印書館 『出版史料』1987年第1期(總第7期)1987.3
 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 陳 寅1913 中華書局一年之回顧 『中華教育界』民國2年1月号 1913.1.15
- 陳 忞年1987 嚴復與商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 1992 何炳松和商務印書館 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 1998a 涵芬樓的文化名人 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 1998b 商務印書館百年回眸 同上
- 陳 羽綸1998 我與商務印書館及《英語世界》雜誌 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 陳 玉堂1993 『中國近現代人物名號大辭典』杭州・浙江古籍出版社1993.5
- 2001 『中國近現代人物名號大辭典(續編)』杭州・浙江古籍出版社2001.12
- 陳 原1987 最後一班崗 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 1992 商務印書館九十年 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 1995 『陳原出版文集』北京・中國書籍出版社1995.6
- 1997 商務印書館創業百年隨想(關於張元濟,他的理想和他的探索的若干思考) 『人民日報』1997.5.7
 『陳原書話』北京出版社1998.1
 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
 『中國出版年鑑(1998)』北京・中國出版年鑑社1998.9
- 1998a 一個智者的成長 胡愈之在商務印書館 『陳原書話』北京出版社1998.1
 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 1998b 百年老店迎接新的挑戰 同上
- 1998c 日新無已 望如朝曙 商務印書館館歌“千丈之松”歌詞、歌解 同上
- 1998d 三個讀書人:一部“書史” 商務印書館創業百周年隨想 同上
- 陳 兆福1987 朱光潛和商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 陳 貞壽1984 鄭孝胥 朱信泉、嚴如平主編 『民國人物傳』第4卷 北京・中華書局1984.3
 中華民國史資料叢稿
- 陳 至立1998 在上海舉行的商務印書館創立一百周年紀念會上的講話 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 程 鎮球1998 我和商務的交往 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5

楚 莊1998 高寒与商務印書館 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館
1998.5

D

- 大橋新太郎1906 支那の出版業 『東京經濟雜誌』第1324号 1906.2.17
- 戴 孝侯1992 黎明前後 我在商務長期工作中的一个片段 『(1897-1992)商務印書館
九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 戴 怡僧1923 新聞事業与上海 『最近之五十年』上海・申報館1923.2/上海書店影印1987.
3(出版説明に1922年2月初版本とあるが1923年の誤り)
- 道坂昭広1990 商務印書館と中国の近代 『しにか』1990年11月号 1990.11.1
- 稲岡 勝1980 金港堂小史 社史のない出版社「史」の試み 東京都立中央図書館『研
究紀要』第11号 1980.3.26
- 1982 金港堂「社史」の方法について 『出版研究』12 1982.2
- 1983 近代出版史と社史 『出版研究』13 1983.2.20
- 1985 明治出版史から見た奥付とその周辺 『出版研究』15 1985.3.25
- 1988 「原亮三郎」伝の神話と正像 文献批判のためのノート 『出版研究』
18 1988.3.15
- 1989 近代出版に関する復刻版資料 『出版研究』19 1989.4.15
- 1991 研究ノート・金港堂と商務印書館の合併問題に関する文献について 『日
本出版学会会報』第75号 1991.12.31
- 1992 關於金港堂与商務印書館合作問題的文献資料 沈洵澧訳 『出版史料』1992
年第4期(総第30期) 1992.12
- 1993 金港堂の七大雑誌と帝国印刷 『出版研究』23 1993.3
- 1994a 初期商務印書館の源流 美華書館、修文書館、岸田吟香、金港堂 『出
版与印刷』1994年第2期 1994
- 1994b 明治検定期の教科書出版と金港堂の経営 東京都立中央図書館『研究紀要』
第24号 1994.3
- 1995a 教科書合併、日中交流の師 今世紀初め、日本の出版社が清近代化に一
役 『日本經濟新聞』1995.3.3
- 1995b 初期商務印書館の源流 美華書館、修文書館、岸田吟香、金港堂 『出
版教育研究所所報』第7号(特集：市場經濟における出版と出版教育
第4回日中出版教育交流會議) 1995.7.31
- 1996 日中合併事業の先駆、金港堂と商務印書館の合併1903-1914年 『ひびや』
(東京都立中央図書館報)第145号 1996.3
- 1997 修文書館と『上海新報』 『出版学校日本エディタースクール・上海出版
印刷高等専科学校 日中出版教育校際學術交流會論文集』出版学校日本エ
ディタースクール 1997.6.7

文献一覽

- 德富猪一郎1935 『蘇峰自伝』中央公論社1935.9.3 / 1935.9.12三十版
- 鄧 雲卿1998a 百年商務之創辦人 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館
1998.5
- 1998b 胡適之与商務印書館 同上
- 1998c 王雲五在商務印書館 同上
- 1998d 百年“商務”話滄桑 同上
- 丁 法ら1998 中国近代民族印刷工業の傑出代表 丁法、陳国旗、錢普齊 『商務印書館一
百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 丁 英桂1992 商務印書館与《四庫全書》 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和
商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 東 爾1987 林紓和商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』
北京・商務印書館1987.1
- 冬 風1998 你好，商務！ 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 東京高等師範学校1911 『東京高等師範学校沿革略志』東京高等師範学校1911.10.30
- 東京經濟雜誌1903 清国に於ける書舗と出版業 『東京經濟雜誌』第1195号 1903.8.8
- 東京書籍商1978 金港堂書籍株式会社 『東京書籍商伝記集覽』青裳堂書店1978.4.30
- 東京書籍1981 『東書文庫所蔵教科用図書目録』第2集 東京書籍株式会社1981.9.1
- 東亜同文会1908a 『支那經濟全書』第12輯 東亜同文会編纂局、丸善株式会社 1908.10.1
/ 1909.6.17四版
- 1908b 支那商事經營組織2-承前完 東亜同文会支那經濟調查部 『支那經濟報告書』
第16,17号 1908.12.31,1909.1.15
- 1909a 支那新事業界3-完 東亜同文会支那經濟調查部 『支那經濟報告書』第23,24
号 1909.4.15,30
- 1909b 商会二就キテ 東亜同文会支那經濟調查部 『支那經濟報告書』第28号 1909.
6.30
- 董 純才1987 從読者に作者 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北
京・商務印書館1987.1
- 董 滌塵1992 我与商務印書館 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』
北京・商務印書館1992.1
- 董 樂山1998 魂牽夢縈憶商務 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 董 枢1939 上海天主教史話 上海通社編 『上海研究資料続集』上海・中華書局有限公
司1939.8
- DRÈGEE, JEAN-PIERRE1978 “LA COMMERCIAL PRESS DE SHANGHAI 1897-1949”
COLLEGE DE FRANCE, INSTITUT DES HAUTES ETUDES CHINOISES
(1978)
- 2000 『上海商務印書館1897-1949』(法)戴仁著、李桐実訳 北京・商務印
書館2000.8
- 杜 亜泉1930 鮑咸昌先生事略 『鮑咸昌先生哀輓録』鮑府治喪事務所 刊年不記(1930)

文献一覽

- 1987 記鮑咸昌先生 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 段 更新1998 小議“商務傳統” 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 多賀秋五郎1973 『近代中国教育史資料 清末編』日本學術振興会1973.3.30

F

- 幡生弾治郎1936 天稟の長所 『山本条太郎翁追憶録』1936.9.5
- 范 岱年1987 范寿康和商務印書館 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 范 軍2003 陸費逵的書刊廣告藝術 『編輯學刊』2003年第4期 2003.8
- 范 明礼1982 巫泉雜誌 中国社会科学院近代史研究所文化史研究室丁守和主編『辛亥革命時期期刊介紹』第一集 人民出版社1982.7
- 范 慕韓1995 『中国印刷近代史(初稿)』范慕韓主編 北京・印刷工業出版社1995.11
- 范 用1998 少年讀者知多少 商務印書館百年感言 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 方 漢奇1981 『中国近代報刊史』上下 太原・山西人民出版社1981.6
- 1992 『中国新聞事業通史』第1卷 北京・中国人民大学出版社1992.9
- 方 山1985 李伯元確曾編輯《繡像小說》 「文学遺產」第692期『光明日報』1985.10.22
- 費 孝通1987 憶《少年》祝商務壽 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 費 行簡1918 『近代名人小伝』 (沃丘仲子) 崇文書局1918 / 北京・中国書店影印1988.8
- 馮文華ら1998 中国印鈔技術的發展与演变 紀念商務印書館成立一百周年 馮文華、葉裕祥『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 馮 亦代1998 百年商務 永葆青春 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 馮 友蘭1987 商務印書館和我是老伙伴 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 富窪高志1987 創立九十周年を迎えた商務印書館 国立国会図書館『アジア資料通報』第25巻第7号 1987.10
- 傅 振国1998 商務印書館誕生一百年 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5

G

- 高 翰卿1934* 本館創業史 在發行所學生訓練班的演講 冰巖筆記原稿 1934?
- 1992 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商

- 務印書館1992.1
- 高 覺敷1987 回憶我与商務印書館的關係 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 高 龍興1984 我的曾祖父 高鳳池 『商務印書館館史資料』之二十九 北京・商務印書館總編室編印1984.12.20
- 高 夢旦1992 校印《四庫全書》及其他旧書計劃 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 高 平叔1990 蔡元培与張元濟 蔡元培、張元濟 『蔡元培張元濟往来書札』台湾・中央研究院中國文哲研究所籌備處1990.6
 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 1996 『蔡元培年譜長編』上冊 人民教育出版社1996.3
- 高橋敏太郎1936 上海紡績を手に入る 『山本条太郎翁追憶録』1936.9.5
- 高 崧1982 商務印書館今昔 『出版史料』第1輯 1982.12
 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 1992 《漢訳世界学術名著叢書》書外綴語 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 戈 公振1955 『中国報学史』北京・生活・讀書・新知三聯書店1955.3/1986.1北京第2次印刷
- 葛 伝規1987 我与商務印書館 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 葛 豫夫1923 祝本報五十年紀念系之以論 『最近之五十年』上海・申報館1923.2 / 上海書店影印1987.3 (出版説明に1922年2月初版本とあるが1923年の誤り)
- 宮地正人1969 教科書疑獄事件 教科書国定への過程として 『日本政治裁判史録 明治・後』第一法規出版株式会社1969.2.15 / 10.20再版
- 公 汗1987 馬君武与商務印書館 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 龔 心瀚1998 承先啓後 再創輝煌 紀念商務印書館誕生一百周年 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 顧 頤剛1987 商務印書館和我的史学研究 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 顧 廷龍1987 回憶張菊生先生二三事 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 1992 我与商務印書館 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 1998 祝賀商務印書館百齡大慶 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5

文献一覽

- 桂 曉風1998 在上海举行的商務印書館創立一百周年紀念会上的讲话 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 郭 秉文1923 五十年來中國之高等教育 『最近之五十年』上海・申報館1923.2 / 上海書店影印1987.3 (出版說明に1922年2月初版本とあるが1923年の誤り)
- 郭 浩帆2003 『中國近代四大小説雜誌研究』北京・當代中國出版社2003.6
- 郭 洛1987 鄭太樸與商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 郭 太風1991 橡皮股票風潮 信之、瀟明主編 『旧上海社會百態』上海人民出版社1991.2
- 國際基督教大學1983 『アジアにおけるキリスト教比較年表1792-1945』國際基督教大學アジア文化研究所編 創文社1983.3.20
- 國民政府1934* 教科書之發刊概況 一八六八-一九一八年 國民政府教育部編 『教育年鑑』第3編上部。開明1934
- 1953 教科書之發刊概況 一八六八-一九一八年 張靜廬輯註 『中國近代出版史料初編』上海・上雜出版社1953.10
- H
- 海後宗臣1964 『日本教科書大系 近代編 第6卷 國語三』講談社1964.4.20/1968.12.10第二刷
- 浩 甫1987 丁文江和商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 何 炳然1987 《大公報》的創辦人英斂之 『新聞研究資料』總37輯 1987.3
- 何 炳松1992 商務印書館被毀紀略 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 何 步雲1990 美華書館 『中國大百科全書』新聞出版 北京・中國大百科全書出版社1990.12
- 何 頻1998a 有品乃貧的張元濟 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 1998b 大夢誰先覺 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 賀 麟1925 嚴復的翻譯 『東方雜誌』第22卷第21号 1925.11.10
- 張靜廬輯註 『中國近代出版史料二編』上海・群聯出版社1954.5
- 1987 漫談我和商務印書館的關係 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 賀聖堯1931 三十五年來中國之印刷術 莊俞、賀聖堯編 『最近三十五年之中國教育』上海・商務印書館1931.9
- 張靜廬輯註 『中國近代出版史料初編』上海・上雜出版社1953.10
- 侯 仁之1987 良師益友常相伴 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1

文 献 一 覽

- 侯 樣祥1998 商務百年訪陳原 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館
1998.5
- 胡 代光1998 我与商務印書館 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館
1998.5
- 胡 道静1936 上海新聞紙的變遷 上海通社編 『上海研究資料』上海·中華書局1936.5 /
台灣·中國出版社影印1973.6.25
- 1939a 最早的畫報 上海通社編 『上海研究資料統集』上海·中華書局有限公司
1939.8
- 1939b 美查兄弟 同上
- 1992a 孫毓修的古籍出版工作和版本目錄學著作 『(1897-1992)商務印書館九十五
年 我和商務印書館』北京·商務印書館1992.1
- 1992b 我的父親胡懷琛与商務印書館 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我
和商務印書館』北京·商務印書館1992.1
- 胡 煥庸1987a 我和商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』
北京·商務印書館1987.1
- 1987b 竺可楨先生与商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務
印書館』北京·商務印書館1987.1
- 胡 嘉1992 呂思勉和商務印書館 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印
書館』北京·商務印書館1992.1
- 胡 覺民1986 蘇州報刊六十年 『近代史資料』第61号 1986.7
- 胡 企林1992 關於世界學術名著的編識和出版工作 『(1897-1992)商務印書館九十五年
我和商務印書館』北京·商務印書館1992.1
- 1998a 喜做商務人 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 1998b 學術文化事業的一項基本建設 商務的漢譯世界學術名著出版工作 同上
- 胡 適之1964 高夢旦先生小傳 『伝記文学』(海外版)第4卷第4期 1964.4
『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京·商務
印書館1987.1
- 胡 文楷1992 我与商務印書館 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』
北京·商務印書館1992.1
- 胡 序文1987 胡愈之和商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書
館』北京·商務印書館1987.1
- 胡 愈之1979 回憶商務印書館 『文史資料選輯』第61輯 1979.4/1981.12第二次印刷
(日本影印)
『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京·商
務印書館1992.1
- 1992 追悼杜亞泉先生 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』
北京·商務印書館1992.1
- 荒 正人1974 『漱石研究年表』 『漱石文学全集』別卷 集英社1974.10.20初版/1976.

8.20初版四刷

- 黄 德昭1978 陳其美 中国社会科学院近代史研究所、李新、孫思白主編『民国人物伝』第1卷 北京・中華書局1978.8 中華民國史資料叢稿
- 黄 光域1992 近代來華新教差會綜錄(上) 中国社会科学院近代史研究所近代史資料編輯部編『近代史資料』總第80号 1992.1
- 黄 建民1998 “陽湖耆宿”与商務印書館 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 黄 警頑1981 我在商務印書館的四十年 『文化史料(叢刊)』第2輯 1981.11
『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 黄 協墳1923 本報最初時代之經過 『最近之五十年』上海・申報館1923.2 / 上海書店影印1987.3 (出版說明に1922年2月初版本とあるが1923年の誤り)

I

- IP, MANYING1985 “THE LIFE AND TIMES OF ZHANG YUANJI” 北京・商務印書館1985.4
- 1986a A HIDDEN CHAPTER IN EARLY SINO-JAPANESE CO-OPERATION : THE COMMERCIAL PRESS-KINKODO PARTNERSHIP, 1903-14
“THE JOURNAL OF INTERNATIONAL STUDIES” NO.16 上智大学1986.1
- 1986b 張元濟、李伯元与《繡像小説》 (新西蘭)葉宋曼瑛 『出版史料』第5輯 1986.6
- 1987 早期中日合作中未被揭開的一幕 一九〇三年至一九一四年商務印書館与金港堂的合作 (新西蘭)葉宋曼瑛著 張人鳳訳 『出版史料』1987年第3期(總第9期) 1987.10
- 1992 『從翰林到出版家 張元濟的生平与事業』 葉宋曼瑛著、張人鳳、鄒振環訳 香港・商務印書館1992.1

J

- 吉川幸次郎1965 (『中国書画話』)解説 長尾雨山 『中国書画話』筑摩書房1965.3.10 / 1975.9.15十二刷 筑摩叢書27
- 吉 少甫1991 『中国出版簡史』上海・学林出版社1991.11
- 吉田弥平1930 『文学博士三宅米吉先生追悼録』茗溪会、大塚学友会、大塚史学会1930.2.18
- 紀 文興1996 清末一份奇特的刊物 『編輯學刊』1996年第3期(總47期) 1996.6.25
- 季 羨林1998 一段美好的回憶 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 季 永桂1989 “商務”元老張元濟 楊浩、葉覽主編 『旧上海風雲人物』上海人民出版社1989.11
- 賈 平安1982a 記商務印書館創始人夏瑞芳 『文史資料選輯』1982年第2輯(總第39輯) 1982.6

文献一覽

- (1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 1982b* 商務印書館与自然科学在中国的伝播 『中国科技史料』1982年第4期
- 1983 『新華文摘』1983年第3期 1983.3.25
龔書鐸主編 『近代中国与近代文化』長沙・湖南人民出版社1988.12
- 賈 逸君1993 『民国名人伝』長沙・岳麓書社1993.3。原名『中華民國名人伝』北平文化学社1937
- 姜 德明1998a 販書者日記 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 1998b 老舎与“商務” 同上
- 蔣 維喬1935* 編輯小学教科書之回憶 一八九七年-一九〇五年 『出版周刊』第156号
1935
- 1957 張静廬輯註 『中国出版史料補編』北京・中華書局1957.5
『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 1936 高公夢旦伝 『東方雜誌』第33卷第18号 1936.9.16
『伝記文学』(海外版)第4卷第4期 1964.4
『出版史料』第5輯 1986.6
『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 1939 中国教育会之回憶 上海通社編 『上海研究資料続集』上海・中華書局有限公司1939.8
- 1947* 創辦初期之商務印書館与中華書局 『人文』復刊第1卷第1期1947.4「民元前後見聞録」
- 1959 張静廬輯註 『中国現代出版史料』丁編(下冊) 北京・中華書局1959.11 影印本
- 1987 夏君瑞芳事略 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 1990 蔣維喬日記摘録 『商務印書館館史資料』之四十五 北京・商務印書館總編室編印1990.4.20
- 1992 蔣維喬日記選 汪家燊選注 『出版史料』1992年第2期(総第28期) 1992.6
- 教育界1903 原亮三郎氏等の清国行 『教育界』第3卷第1号 1903.11.3
- 1904 清国に於ける金港堂の事業 『教育界』第3卷第7号 1904.4.3
- 教育史編纂会1938 『明治以降教育制度發達史』第4卷 教育資料調査会1938.11.15/1964.11.10重版
- 潔 甫1992 郭沫若与商務印書館 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 金港堂書籍株式会社1904 清国上海・商務印書館送致函書(広告) 『教育界』第3卷第7号
1904.4.3

文献一覽

- 金 耀基1992 商務印書館与中国現代化 商務印書館九十五年志慶 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 金 雲峰1992a 我与商務印書館 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 1992b 編輯《四角號碼新詞典》的回憶 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 金 兆梓1992 何炳松伝 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 久保 亨1993 『新聞報』紹介 東京大学東洋文化研究所附属東洋文献センター報 『センター通信』第33号 1993.2.26
- 菊池貴晴1970 『現代中国革命の起源』巖南堂書店1970.4.5

K

- 開国五十年史1908 金港堂書籍株式会社 大隈重信発起 『開国五十年史附録』開国五十年史発行所1908.10.18

L

- 瀨川光行1893 原亮三郎君伝 瀨川光行編 『商海英傑伝』大倉書店・富山房書店1893.4.1 / ダイヤモンド社・雄松堂書店1978.1.20復刻
- 雷 潔瓊1998 (『商務印書館一百年(1897-1997)』) 賀信 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 雷 瑯1923 申報館之過去状況 『最近之五十年』上海・申報館1923.2 / 上海書店影印1987.3 (出版説明に1922年2月初版本とあるが1923年の誤り)
- 黎 沢渝1987 黎錦熙与商務印書館 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 李 白堅1999 『中国出版文化概観』南寧・広西教育出版社1999.4 20世紀中国出版文化叢書
- 李 伯嘉1992 “一・二八”後の商務印書館 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 李 賦寧1998 商務印書館与我国現代化同步 恭賀商務印書館百年大慶 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 李 桂杰1997 商務印書館百年風雲鏤華章 『人民日報』1997.5.8
- 1998 百年風雲鏤華章 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 李 輝英1975a 初期的商務、中華和世界 『三言兩語』香港・文学研究社 刊年不記(後記1975.4)

文献一覽

- 1975b 再談初期的商務和中華 同上
- 李 連科1998 佚而不惰 商務印書館印象 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 李 默1979 辛亥革命時期廣東報刊錄 『新聞研究資料』第1輯 1979.8
- 1980 辛亥革命時期廣東報刊錄(統一) 『新聞研究資料』第2輯 1980.1
- 李 瑞良1997 五十一 商務館的“福建幫” 福建出版史余話 『福建出版史話』廈門・鷺江出版社1997.8
- 李 思敬1998a 商務館史上的一個小記号 《日語學習》雜憶 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 1998b 商務印書館和“商務文化” 同上
- 1998c 百年讀史的思緒 商務印書館的創業与中国近代史上的思想革新 同上
- 李 嵩生1923 本報之沿革 『最近之五十年』上海・申報館1923.2 / 上海書店影印1987.3
(出版説明に1922年2月初版本とあるが1923年の誤り)
- 李 鉄映1998 (『商務印書館一百年(1897-1997)』)賀信 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 1998 李鉄映同誌の賀信 『中国出版年鑑(1998)』北京・中国出版年鑑社1998.9
- 李 元信1944 高翰卿 『環球中国名人伝略』上海・環球出版社1944
- 李 沢彰1931 三十五年来中国之出版業 莊俞、賀聖齋編 『最近三十五年之中国教育』上海・商務印書館1931.9
- 一八九七 - 一九三一年 張静廬輯註 『中国現代出版史料』丁編(下冊) 北京・中華書局1959.11
- 李 祖沢1998 大時代出版与商務印書館 為商務印書館一百周年而作 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 李祖沢ら1992 八十年代的香港商務印書館 李祖沢、陳万雄 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 利波雄一1984 李伯元と商務印書館 『繡像小説』をめぐって 早稲田大学 『中国文学研究』第10期 1984.12
- 1985 「李伯元と商務印書館」補記 『中国文芸研究会会報』第53号 1985.6.30
- 1988 張元濟討論会・武原鎮・張元濟図書館 『野草』第42号 1988.8.1
- 厲 以寧1998 作者与編輯：友誼長存 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 良 1935 上海市書業同業公会簡史 『出版週刊』新160号 1935.12.21
- 梁 漱溟1987 我和商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 廖 世承1923 五十年来中国之中学教育 『最近之五十年』上海・申報館1923.2 / 上海書店影印1987.3 (出版説明に1922年2月初版本とあるが1923年の誤り)
- 林 爾蔚1984 商務印書館介紹 『書林』1984年第4期(総第29期) 1984.7
- 1992 總結過去，開拓未來 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印

- 書館』北京・商務印書館1992.1
- 1998a 張元濟与商務印書館 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 1998b 改革開放中的商務印書館 同上
- 林爾蔚ら1984 漫談商務印書館 林爾蔚、汪家燊 『商務印書館館史資料』之二十五 北京・商務印書館總編室編印1984.2.10
- 林 健司1979 曾鏄について 『中国文芸研究会会報』第21号 1979.12.2
- 林 茂1986 商務印書館創立の經過 併せて宋查理と商務の關係について 『東方』第63号 1986.6.5
- 林 熙1986a 從《張元濟日記》談商務印書館(一) 『出版史料』第5輯 1986.6
- 1986b 從《張元濟日記》談商務印書館(二) 『出版史料』第6輯 1986.12
- 1987 從《張元濟日記》談商務印書館(三) 『出版史料』1987年第1期(總第7期) 1987.3
- 林 語堂1992 兩部英文字典 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 鈴木博雄1978 『東京教育大学百年史』日本図書文化協会1978.7.28
- 劉 德隆2004 商務印書館《英文漢詁・敘》釋文 『清末小説から』第74号 2004.7.1
- 劉 海粟1992 為商務印書館做図画教科書述意 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 劉 漢忠1991 張元濟挽張蟾芬誄文 《張元濟詩文》失収詩文補輯之一 (輯注) 『出版史料』1991年第4期(總第26期) 1991.12
- 劉 客1998 陳雲在商務印書館的日子 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 劉 慶隆1992 《新華字典》出版三十年 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 劉 仁達1982 訳林 中国社会科学院近代史研究所文化史研究室丁守和主編 『辛亥革命時期期刊介紹』第一集 人民出版社1982.7
- 劉 樹森1930 鮑咸昌君哀詞 『鮑咸昌先生哀輓録』鮑府治喪事務所 刊年不記(1930)
- 劉 葉秋1992 記《辞源》組諸老 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 柳 和城1987 兩種張元濟伝記簡評 『読書』1987年第1期 1987.1.10
- 1988 張元濟与《日本法規大全》 『出版史料』1988年第3・4期(總第13・14期) 1988.9
- 1996 『張元濟伝』南京大学出版社1996.9
- 2002a 1907年商務印書館紀念冊序文 『出版史料(叢刊)』第3輯 2002.9
- 2002b 1907年的商務印書館紀念冊 『清末小説』第25号 2002.12.1
- 2003a 孫毓修与《少年雜誌》 『出版史料』2003年第2期(新總第6期) 2003.6.25
- 2003b 張元濟書寫的習字 『清末小説から』第70号 2003.7.1

- 2004 孫毓修與《歐美小説叢談》 『清末小説から』第73号 2004.4.1
- 盧 潤祥1998a 謝六逸佚話 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 1998b 我国第一篇童話《無猫国》 同上
- 陸 典1980 商務館史聞見録(一) 商務早期向日本引進先進技術 『商務印書館館史資料』之四 北京・商務印書館總編室編印1980.12.20
- 陸 爾奎1992 《辞源》説略 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 陸費伯鴻1953 論中国教科書史書 張静廬輯註 『中国近代出版史料初編』上海・上雜出版社1953.10
- 陸費 達1932 六十年来中国之出版業与印刷業 『申報月刊』創刊号1932.7.15
張静廬輯註 『中国出版史料補編』北京・中華書局1957.5
俞筱堯、劉彦捷編 『陸費達与中華書局』北京・中華書局2002.1
- 陸 昕2001 説《説部叢書》 『蔵書家』第3輯 2001.6
- 羅 品潔1980 回憶商務印書館 『商務印書館館史資料』之三 北京・商務印書館總編室編印1980.11.25

M

- 馬学新ら1992 『上海文化源流辞典』 馬学新、曹均偉、薛理勇、胡小静主編 上海社会科学院出版社1992.7
- 茅 盾1979a 商務印書館編訳所生活之一 回憶録[一] 『新文学史料』(1978)第1輯 生活・讀書・新知三聯書店香港分店重印(影印)1979.5
- 1979b 商務印書館編訳所生活之二 回憶録[二] 『新文学史料』(1979)第2輯 生活・讀書・新知三聯書店香港分店重印(影印)1979.5
- 1987 商務印書館編訳所和革新《小説月報》的前後 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 茅 以升1987 我与商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- Mcintosh, Gilbert1999 美華書館六十年史 ギルバート・マッキントッシュ著、宮坂弥代生訳 『(季刊)印刷史研究』第7号 1999.7.1
- 梅田 潔1936 四馬路の本屋 『自然』第3号 上海自然科学研究所倶楽部学芸部1936.7.14
- 孟 森1992 夏君粹方小伝 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 孟 悦1996 商務印書館創辦人与上海近代印刷文化的社会構成 『学人』第9輯 1996.4
『批評空間の開創：二十世紀中国文学研究』上海・東方出版中心1998.7
- 莫 栄宗1962 羅雪堂先生著述年表 上下 『大陸雜誌』第25卷第2,3期 1962.7.31、8.15
- 1963 羅雪堂先生年譜 『大陸雜誌』第26卷第5-8期 1963.3.15-4.30

文献一覧

- 牟 小東1986 読蔡元培、張元濟往来書札 『明報月刊』1986年3月号
蔡元培、張元濟『蔡元培張元濟往来書札』台湾・中央研究院中国文哲研究所籌備處1990.6
- 木村 毅1957 教科書疑獄 上下 『財界よもやま史話』筑土書房1957.1.5 / 2.20再版

N

- 内山清ら1915 『大上海』 内山清、山田修作、林太三郎合著 大上海社1915.8
- 内藤湖南1976 『内藤湖南全集』第14巻 筑摩書房1976.7.30
- 能田婉子1978 (『一茎九花蘭』)あとがき 『一茎九花蘭』八八キギの会1978.9.10
- 倪 靖武1994 商務印書館在近代中日出版交流中的貢獻 『出版与印刷』1994年第2期
1994
- 1995 近代中日出版交流における商務印書館の貢獻 石橋正子訳 『出版教育研究所所報』第7号(特集:市場經濟における出版と出版教育 第4回日中出版教育交流會議) 1995.7.31

O

- 欧 宏1998 滄海橫流 方顯英雄本色 從三位先賢看商務百年 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5

P

- 潘 安栄1992 劉沢栄与俄漢詞典 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 潘 徳利2002 安納斯脱・美査 為中国文化留下重要遺產的人 紀念《申報》創刊130周年 『図書館雜誌』2002年第7期(総第135期)2002.7.15
- 潘 公弼1932 六十年来之中国日報事業 『申報月刊』創刊号 1932.7.15
- 潘 慶徳1982 集成報 中国社会科学院近代史研究所文化史研究室丁守和主編 『辛亥革命時期刊介紹』第一集 人民出版社1982.7
- 潘 涛1998 商務印書館:引進現代科学的橋梁 從《科学大綱》段起 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 坪内逍遥1927a 『小学国語読本』はしがき 『逍遥選集』別冊第3巻 春陽堂1927.11.18 / 原本富山房1901は未見。
- 1927b 『小学国語読本』編纂要旨 『逍遥選集』別冊第3巻 春陽堂1927.11.18
- ポ ッ ト1940 『上海史』 土方定一、橋本八男訳 生活社1940.11.20

Q

- 戚 国淦1998 我和這座“世界精神公園” 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商

- 務印書館1998.5
- 錢 炳寰1992 談談中華書局的創辦人 『出版史料』1992年第4期(總第30期)1992.12
2002 『中華書局大事紀要(1912-1954)』北京・中華書局2002.5
- 橋川時雄1940 『中国文化界人物総鑑』北京・中華法令編印館1940.10.25初版/名著普及
会復刻1982.3.20
- 秦 理齋1923 中国報紙進化小史 『最近之五十年』上海・申報館1923.2/上海書店影印
1987.3(出版説明に1922年2月初版本とあるが1923年の誤り)
- 青柳篤恒1905 清国に於ける出版事業 『中央公論』第20年第8号 1905.8.1
- 秋 翁1944 三十年前之期刊 『万象』第4年第3期 9月号 1944.9.1
- 裘 克安1998 商務印書館和莎士比亞 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印
書館1998.5
- 瞿 鳳起1987 鉄琴銅劍樓和商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務
印書館』北京・商務印書館1987.1
- 璩鑫圭ら1991 『中国近代教育史資料匯編』学制演變 璩鑫圭、唐良炎編 上海教育出版
社1991.3

R

- 人民日報1997a 商務百年書画展開幕 『人民日報』1997.4.25
1997b 商務印書館建館百年/朱鎔基会见参加座談会代表/江沢民李鵬喬石李瑞環
題詞 『人民日報』1997.5.9
1997c 商務印書館暨中国現代出版一百周年座談会举行/李鉄映発来賀信 『人民
日報』1997.5.9
- 任 雪芳1998 陳翰笙老人与商務印書館 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務
印書館1998.5
- 任 真漢1982 日據期在台湾読商務版教科書的回憶 香港『文匯報』1982.2.6
- 日本近代教育百年史1974 『日本近代教育百年史』国立教育研究所1974.3
- 汝 信1998 抓住機遇 再現輝煌 祝賀商務印書館成立一百周年 『商務印書館一百
年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 阮仁沢ら1992 『上海宗教史』 阮仁沢、高振農主編 上海人民出版社1992.7

S

- 三井文庫1972 『三井事業史』資料篇四下 三井文庫1972.7.25
- 渋江 保1903 『泰西事物起原』 渋江保編纂、広智書局同人訳述 上海・広智書局 光
緒二十八年十二月二十日(1903.1.18)
- 沙 宝祥1992 《繡像小説》所刊民間時調述略 『文史哲』1992年第6期 1992.11.24
- 杉村邦彦1986 長尾雨山伝略述 『書苑彷徨』第2集 二玄社1986.8.5
1993 有關長尾雨山的研究資料及其韻事若干 『印学論談』杭州・西*印社出版

文献一覧

- 社1993.10
- 1995a 上海に長尾雨山の足跡を訪ねて(上) 雨山は上海のどこに住んでいたか 『出版ダイジェスト』第1553号 1995.4.1
- 1995b 長尾雨山とその交友 第1回 『墨』第116号 1995年9・10月号 1995.10.1
- 1995c 上海に長尾雨山の足跡を訪ねて(中) 赫林里三号雨山寓居の現況 『出版ダイジェスト』第1576号 1995.9.30
- 1995d 長尾雨山とその交友 第2回 『墨』第117号 1995年11・12月号 1995.12.1
- 1995e 上海に長尾雨山の足跡を訪ねて(下) 山西北路吉慶里の呉昌碩故居 『出版ダイジェスト』第1586号 1995.12.11
『墨林談叢』柳原書店1998.4.10
- 1996a 長尾雨山とその交友 第3回 『墨』第118号 1996年1・2月号 1996.2.1
- 1996b 同上 第4回 『墨』第119号 1996年3・4月号 1996.4.1
- 1996c 同上 第5回 『墨』第120号 1996年5・6月号 1996.6.1
- 1996d 同上 第6回 『墨』第121号 1996年7・8月号 1996.8.1
- 1996e 同上 第7回 『墨』第122号 1996年9・10月号 1996.10.1
- 1996f 同上 第8回 『墨』第123号 1996年11・12月号 1996.12.1
- 1997a 同上 第9回 『墨』第124号 1997年1・2月号 1996.2.1
- 1997b 同上 第10回 『墨』第125号 1997年3・4月号 1996.4.1
- 1997c 同上 第11回 『墨』第126号 1997年5・6月号 1996.6.1
- 1997d 同上 第12回 『墨』第127号 1997年7・8月号 1996.8.1
- 1997e 同上 第13回 『墨』第128号 1997年9・10月号 1996.10.1
- 1997f 同上 第14回 『墨』第129号 1997年11・12月号 1997.12.1
- 1998a 同上 第15回 『墨』第130号 1998年1・2月号 1998.2.1
- 山本条太郎1942 『山本条太郎伝記』 山本条太郎翁伝記編纂会、発行者：原安三郎 1942.3.25
- 単 耀海1998 百年樹人 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 商務印書館1902 『商務書館華英字典』上海・商務印書館 光緒壬寅(1902)三次重印
- 1904a 日本書発売広告 『上海週報』第2号 1904.1.1
- 1904b 最新初等小学国文教科書出版(広告) 上海商務印書館 『東方雜誌』第1期 1904.3.11
- 1909 『上海指南』 上海・商務印書館 宣統元年(1909)五月初版/七月再版
- 1914 完全華商股份 商務印書館 敬贈紀念書券(広告) 『学生雜誌』第1巻第1期 1914.7.20
- 1920 『商務印書館訳印説部叢書三集様本』 上海・商務印書館 刊年不記(1920?)
- 1924 『小説書目』上海・商務印書館 刊年不記(1924?)
- 1927 『図書彙報』第118期 上海・商務印書館1927.4
- 1936* 本館四十年大事記(1936) 『同舟』第4巻第12期
『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商

- 務印書館1992.1
- 1950* 商務印書館大事紀要 『商務五十年』1950.9
- 1957 張靜廬輯註 『中国出版史料補編』北京・中華書局1957.5
- 1981 『商務印書館圖書目錄』(1897-1949) 北京・商務印書館1981
- 1987a 『商務印書館大事記』北京・商務印書館1987.1
- 1987b 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 1987c (商務印書館九十年) 編者前言 同上
- 1987d 商務印書館大事記 同上
- 1992a 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 1992b 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』編者前言 同上
- 1992c 商務印書館歷年大事紀要 同上
- 1992d 商務五十年(未定稿,1950) 一個出版家的生長及其發展 同上
- 1993 商務印書館特別株主大会理事会報告 無署名 『清末小説から』第30号 1993.7.1
- 1997 『商務印書館百年大事記(1897-1997)』北京・商務印書館1997.4
- 1998 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 商務印書館編輯部1998 (『商務印書館一百年(1897-1997)』) 前言 同上
- 上海市歷史博物館2001 『20世紀初的中国印象 一位美国攝影師的紀錄』上海古籍出版社2001.9
- 上海市棉布商業1979 『上海市棉布商業』中国社会科学院經濟研究所主編 北京・中華書局1979.7
- 上海圖書館1965 『中国近代期刊篇目彙録(1)』第1卷 上海人民出版社1965.12 / 1980.7 第2次印刷
- 上海新報1903 上海ノ訳書界 『上海新報』第1号 1903.12.26
- 神田喜一郎1965 (『中国書画話』) 序 長尾雨山 『中国書画話』筑摩書房1965.3.10 / 1975.9.15十二刷 筑摩叢書27
- 沈 百英1987 我与商務印書館 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 沈 寂1998 陳独秀与商務印書館 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 石 坤林1992 憶商務老編輯蘇繼廣先生 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 時 萌1987 《繡像小説》終刊時期問題我見 『清末小説から』第5号 1987.4.1
- 石 敏良1998 商務職工的護館、護廠活動 追記解放前夕 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5

文献一覧

- 時事新報1903 教科書事件第一回予審決定 『時事新報』1903.2.15
- 実藤恵秀1939* 初期の商務印書館 『学叢』第7号 1939.3
- 1940a 『日本文化の支那への影響』蜚雪書院1940.7.5
- 1940b 中国雑誌の概観 同上
- 1940c 新聞雑誌に於ける日支関係 同上
- 1940d 支那新書店盛衰記 『図書館雑誌』第34年第12号(第253号)日本図書館協会1940.12
- 『近代日支文化論』大東出版社1941.10.15
- 1943 近代支那の出版文化 和田清編 『近代支那文化』光風館1943.3.10
- 1944 初期的商務印書館 張銘三訳 『日本文化給中国的影響』上海・新申報館1944.5
- 1981 『中国留学生史談』 さねとうけいしゅう 第一書房1981.5.13
- 実業之世界社1936 原亮三郎(教科書販売の成功者) 実業之世界社編輯局編 『財界物故傑物伝』下 実業之世界社1936.6.5
- 石 子1986 關於《繡像小説》終刊時間的討論 『明清小説研究通訊』1986年第2期1986.4.15
- 江蘇省社会科学院 『社科信息』第6期 1986.7?
- 史 和ら1991 『中国近代報刊名録』 史和、姚福申、葉翠娣編 福州・福建人民出版社1991.2
- 矢作勝美1976 『明朝活字』平凡社1976.12.20
- 1985 わが国活版印刷史の新資料 ウィリアム・ガンブルの来日について 『図書』1985年7月号 1985.7.1
- 狩野直喜1984 『清朝の制度と文学』みすず書房1984.6.8
- 舒 乙1987 老舎和商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 松村茂樹1994 王雲五と鄭振鐸 商務印書館史の一断面 『中国文化』漢文学会会報第52号 1994.6
- 宋 軍1996 『《申報》的興衰』上海社会科学院出版社1996.2
- 宋麗栄(筱松)1998 情系商務 商務印書館百年徵文結束語 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 宋 木文1998 中外文化交流の橋梁 在商務印書館建館暨中国現代出版一百周年座談会上的講話 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 宋 原放1998 近現代中国出版大事年表 『出版縱横』上海人民出版社1998.9
- 宋原放ら1991 『中国出版史』 宋原放、李白堅 北京・中国書籍出版社1991.6
- 孫 振申1998 為慶賀商務印書館成立一百周年回憶佚事 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5

T

- 湯 志鈞1983 戊戌变法時期上海的出版界 『新華文摘』1983年第1期 1983.1.25
1989 『近代上海大事記』上海辭書出版社1989.5
- 唐 錦泉1987 回憶王雲五在商務的二十五年 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
1992 商務印書館附設的函授学校 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 唐 綱1992 印有模与商務印書館 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 唐 鳴時1992 我在商務編訳所の七年 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 唐 鉞1987 我在商務印書館編訳所の四年 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 陶 菊隱1960 《新聞報》癸家史 『文史資料選輯』4輯 1960.5/1980.12第三次印刷(日本影印)
- 陶 希聖1992 商務印書館編訳所見聞記 王雲五先生的魄力与信心 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 特 報 社1903 『(大疑獄)教科書事件』特報社1903.1.25(ノ生編)
- 藤井誠治郎1962 『回顧五十年』藤井誠治郎遺稿回顧五十年刊行会1962.1.11
- 図書館雜誌1992 上海中文報紙史略 上中下 『図書館雜誌』双月刊 1992年第4-6期(總第54-56期) 1992.8.15-12.15
- 図書世界1905 株式会社東亜会社の設立 『図書世界』第6卷第1号 1905.1.20
- 図書月報1905 清国向の書籍出版概況及東亜公司設立情況 『図書月報』第3卷第5号 1905.2

W

- 外交史料1906a 明39.5.16付在上海總發外務大臣宛公信第149号 「學術教育關係雜件」外務省外交史料館
1906b 明39.5.31付外務大臣宛在上海總宛機密送第25号 「學術教育關係雜件」外務省外交史料館
- 外務省情報部1924 『現代支那人名鑑』發行元不記1924.6
- 万 籟鳴1987 毫臺之年話商務 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 汪 道涵1998 在上海举行的商務印書館創立一百周年紀念会上的讲话 『商務印書館一百周年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 汪 家燊1982a 商務印書館出版的半月刊 《繡像小説》 『新聞研究資料』12輯 1982.6

文 献 一 覧

- 1982b 解放以前商務印書館歴屆負責人（董事長、總經理、総編輯）整理『商務印書館館史資料』之十九 北京・商務印書館総編室編印1982.11.5
- 1983 《繡像小説》及其編輯人 『出版史料』第2輯 1983.12
- 1984 漫談商務印書館 林爾蔚、汪家熔『商務印書館館史資料』之二十五 北京・商務印書館総編室編印1984.2.10
- 1985 『大變動時代の建設者』成都・四川人民出版社1985.4
- 1986a 李伯元と劉鉄雲はどうちらがどちらを盗用したのか 『中国文芸研究会会報』第57号 1986.1.30
- 1986b 中国新式出版業中開闢草菜の人 記編輯老前輩張元濟 『編輯家列伝』（一）中国展望出版社1986.8
- 1987a 利瑪竇和他的伙伴 『黒竜江図書館』1987年第6期（総第42期）
- 1987b 蔡元培和商務印書館 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 1987c 《繡像小説》の時間座標 『清末小説から』第5号 1987.4.1
- 1987d 記《華英初階》注訳者謝洪賚先生（1875-1916） 『商務印書館館史資料』之三十七 商務印書館総編室編印1987.4.10
- 記《華英初階》注訳者謝洪賚先生 『出版史料』1988年第3・4期（総第13・14期）1988.9
- 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 記《華英初階》注訳者謝洪賚先生 『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京・中国書籍出版社1998.10
- 1988a 儒家文化的西伝 欧州争注《三字経》 『黒竜江図書館』1988年第1期（総43期）
- 1988b “海洋時代” 『黒竜江図書館』1988年第2期（総44期）
- 1988c 《察世俗毎月統記伝》及其它 『黒竜江図書館』1988年第3期（総45期）
- 1990a 清末地方官書局 上下 『図書館雑誌』双月刊1990年第1、2期（総第39、40期） 1990.2、1990.4
- 1990b 《繡像小説》編者等問題仍須探索 『出版史料』1990年第4期（総22期）1990.12
- 《繡像小説》編者諸問題仍須探索 『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京・中国書籍出版社1998.10
- 1990c 張元濟 『中国大百科全書』新聞出版 北京・中国大百科全書出版社1990.12
- 1991 商務印書館創業諸君 『江蘇出版史志』総第7期 1991.10
- 『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京・中国書籍出版社1998.10
- 1992a 商務印書館の早期股東（筆名：長洲）『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1

文献一覽

- 1992b 商務印書館英語辭書出版簡史 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京·商務印書館1992.1
- 1993 主權在我的合資 一九〇三年～一九一三年商務印書館的中日合資 『出版史料』1993年第2期(總第32期) 1993.7
『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京·中国書籍出版社1998.10
- 1994a 商務印書館日人投資時的日本股東 『編輯學刊』1994年第5期(總第37期) 1994.10.25
『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京·中国書籍出版社1998.10
- 1994b 謝洪賚和商務創辦人的關係 『編輯學刊』1994年第4期(總第36期) 1994.8.25
『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京·中国書籍出版社1998.10
- 1995a 抗日戰爭時期的商務印書館 『編輯學刊』1995年第3期(總第41期) 1995.6.25
- 1995b 抗日戰爭時期的商務印書館(二) 『編輯學刊』1995年第4期(總第42期) 1995.8.25
『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京·中国書籍出版社1998.10
- 1998a 受命於危難之時的陳叔通 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京·中国書籍出版社1998.10
- 1998b 商務印書館之最 略舉其對文化的貢獻 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 1998c 涵芬樓和東方圖書館 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 1998d 試論商務印書館的成功之路 祝商務印書館建館一百周年 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 1998e 商務印書館古籍出版工作概述 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京·中国書籍出版社1998.10
- 1998f “鞠躬盡瘁尋常事” 杜亞泉和商務印書館與《文學初階》 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京·中国書籍出版社1998.10
- 1998g 憶商務印書館的陳翰伯時期 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商

- 務印書館1998.5
- 1998h “參謀長”高夢旦 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館
1998.5
『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京·中國書籍
出版社1998.10
- 1998i 『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京·中國書籍出版社
1998.10
- 1998i01 商務印書館的經營管理 解放前史料輯錄 同上
- 1998i02 商務印書館編譯所考略 同上
- 1998i03 1931年前商務印書館的發行 同上
- 1998i04 抗戰勝利後的商務印書館 同上
- 1998i05 第一本規範化詞典《現代漢語詞典》 同上
- 1998i06 關於孔子是否編輯的答問 同上
- 1998i07 二十四史250年版本史 同上
- 1998i08 鳥瞰馬禮遜詞典 兼論其藍本之謎 同上
- 1998i09 墨海書館時期 世俗書刊時期的開始 同上
- 1998i10 新出版、新出版第一人 王韜 同上
- 1998i11 徐壽和江南製造局叢書 同上
- 1998i12 清末至建國初的英漢詞典 同上
- 1998i13 一本字典興起一個行業 同上
- 1998i14 舊時出版社成功諸因素 史料實錄 同上
- 1998i15 舊時書業批發折扣 同上
- 1998i16 史料所見：出版業生存維艱 同上
- 1998i17 周恩來與新中國的出版 同上
- 1998i18 活字印刷在古代為何未占優勢 同上
- 1998i19 木活字字盤的排列法 同上
- 1998i20 試論馬禮遜詞典的活字 同上
- 1998i21 近代印刷史三題 同上
- 1998i22 出版史的分期標準 同上
- 1998i23 關於《嘉興藏》 同上
- 1998i24 “直隸官書局”和湖南書局 同上
- 1998i25 最早介紹馬克思恐非胡貽谷 同上
- 1998i26 《東方雜誌》是否有南北方版 略論出版史研究方法 同上
- 1998i27 章太炎未必哀挽夏瑞芳 同上
- 1998i28 研究出版史個案必須見書 同上
- 1998i29 《張元濟詩文》有誤收 同上
- 1998i30 自身債務怎能抵償自身資產損失 同上
- 1998i31 為《繡像小說》給樽本照雄的信 同上

- 1998i32 (『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』) 後記 同上
- 2002 能在好上添好的陸費逵 『出版史料(叢刊)』第4輯 2002.12
- 2003 『近代出版人的文化追求 張元濟、陸費逵、王雲五的文化貢獻』南寧·廣西教育出版社2003.6 20世紀中國出版文化叢書
- 汪 凌2002 『張元濟：書卷中歲月悠長』鄭州·大象出版社2002.9 大象人物聚焦書系
- 汪 守本1982 愛國出版家張元濟 『人物』1982年第4期(總第14期) 1982.7
- 1998a 商務印書館與黨的早期活動 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 1998b 商務印書館是最早引進外資的企業 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 1998c 百年回顧話商務 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 1998d 商務印書館第一任黨支部書記董亦湘 同上
- 汪 叔子1992 商務印書館史事札記 『出版史料』1992年第4期(總第30期) 1992.12
- 汪 子嵩1998 對商務提點要求 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 王 成組1987 我的寫作生涯與商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京·商務印書館1987.1
- 王 國偉1998 張元濟 出版人的驕傲 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 王 建輝2000a 讀商務史短札 『編輯學刊』2000年第3期(總第71期) 2000.4
- 2000b 『文化的商務 王雲五專題研究』北京·商務印書館2000.7
- 2002 舊時商務印書館內部關係分析 『武漢大學學報(人文科學版)』第55卷第4期(總第261期) 2002.7.23
- 王 建軍1996 『中國近代教科書發展研究』廣州·廣東教育出版社1996.11
- 王 力1987 我和商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京·商務印書館1987.1
- 王 梅庭1930 哀辭 『鮑咸昌先生哀輓錄』鮑府治喪事務所 刊年不記(1930)
- 王 蘧常1987 我對商務印書館之回憶 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京·商務印書館1987.1
- 王 紹曾1984 『近代出版家張元濟』北京·商務印書館1984.11
- 1992a 記張元濟先生在商務印書館辦的幾件事 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京·商務印書館1992.1
- 1992b 商務印書館校史處的回憶 同上
- 1995 『近代出版家張元濟(增訂本)』北京·商務印書館1995.8
- 王 滉華1987 王伯祥與商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京·商務印書館1987.1
- 王 壽南1992 王雲五先生與商務印書館 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商

- 務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 王 天一1987 為商務印書館壽 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 王 鉄崖1987 商務印書館对中国文化教育的貢獻 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 王 燕2002 『晚清小説期刊史論』長春・吉林人民出版社2002.11
- 王 仰晨1998 “商務”和我 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 王 益1993 中日出版印刷文化の交流と商務印書館 大川ひろみ、趙京右訳 『タイポグラフィックス・ティ』第156号 1993.12.10
- 1994 中日出版印刷文化的交流和商務印書館 『編輯学刊』1994年第1期(総第33期) 1994.2.25
- 1998 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 重視出版史的研究 為汪家熔出版史研究文集写的序 汪家熔 『商務印書館史及其他 汪家熔出版史研究文集』北京・中国書籍出版社1998.10
- 王 英1998 一張照片引出的佳話 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 王 雲五1934 中国的印刷 『文化建設』第1卷第1期 1934.10.10
- 1964a 張菊老与商務印書館 『伝記文学』(海外版)第4卷第1期 1964.1
- 1964b 我所認識的高夢旦先生 『伝記文学』(海外版)第4卷第4期 1964.4
- (1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 1973 『商務印書館与新教育年譜』台湾商務印書館1973.3
- 1987 初長商務印書館編訳所与初步整頓計劃 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 1992a 本館与近三十年中国文化之關係 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 1992b 戰時出版界的環境適應 31年6月1日為中央圖書雜誌審查委員会講同上
- 王 震1991 陸費逵年譜 上 『出版史料』1991年第4期(総第26期) 1991.12
- 1992 陸費逵年譜 下 『出版史料』1992年第1期(総第27期) 1992.3
- 王 振華1998 滄桑百年的文化重鎮 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 魏 紹昌1984a 晚清雜誌《繡像小説》的編者問題 『文学報』1984.8.2
- 『東方夜談』福州・海峡文芸出版社1987.2
- 『晚清四大小説家』台湾・商務印書館1993.7
- 1984b 《繡像小説》編者問題我見 「文学遺産」第658期 『光明日報』1984.10.23
- 1985 『繡像小説』の編者問題に関する若干の補充 樽本照雄訳 『中国文芸研究会会報』第50号 1985.2.15

文献一覽

- 1986 再談《繡像小說》的編者問題 『出版史料』第5輯 1986.6
 『東方夜談』福州・海峽文芸出版社1987.2
 『晚清四大小說家』台湾・商務印書館1993.7
- 無 塵1930 哀鮑公 『鮑咸昌先生哀輓錄』鮑府治喪事務所 刊年不記(1930)
- 吳 方1994 『仁智的山水 張元濟伝』上海文藝出版社1994.12
- 吳 敬恒1992 商務印書館新字典書後 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 無 署名1930 祭文 『鮑咸昌先生哀輓錄』鮑府治喪事務所 刊年不記(1930)
- 吳 鉄声1987 懷念蘇繼頤先生 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 吳 相1999 『從印刷作坊到出版重鎮』南寧・広西教育出版社1999.9 20世紀中国出版文化叢書
- 吳 研因1957 清末以来我国小学教科書概観 張静廬輯註 『中国出版史料補編』北京・中華書局1957.5
 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 吳 易風1998 我和商務的難解之縁 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 吳沢炎ら1992 《辞源》修訂本与其前後 吳沢炎、劉葉秋 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 伍 蠡甫1987 伍光健与商務印書館 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 武 鳴1998 購書記 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- X
- 現代人物事典1977 『現代人物事典』朝日新聞社1977.3.1
- 蕭 乾1998 我与商務 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 蕭 克1998 商務印書館印象記 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 小川菊松1953 『出版興亡五十年』誠文堂新光社1953.8.5
- 小宮山博史1992 日本の明朝体金属活字の源流 『京古本や往来』第57号 1992.7.20
 1995 分合活字Divisible type史稿 『(季刊)印刷史研究』第1号 1995.10.1
- 小谷 重1903 上海便り 『教育界』第3卷第1号 1903.11.3
- 小林善八1938 『日本出版文化史』日本出版文化史刊行会1938.4.29 / 青裳堂書店1978.3.20影印
- 孝 侯 ら1992 經濟文章憶拔翁 孝侯、公叔 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1

- 謝 菊 曾1980a 涵芬樓往事 『隨筆』叢刊第6集 1980.2
 1980b 涵芬樓往事 『隨筆』叢刊第7集 1980.4
 1980c 《少年雜誌》的變遷 『隨筆』叢刊第7集 1980.4
 1980d 《教育雜誌》的變遷（附陸費逵創辦中華書局經過） 『隨筆』叢刊第7集
 1980.4
 1992 商務編譯所與我的習作生活 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和
 商務印書館』北京·商務印書館1992.1
- 謝 仁 冰1992 我館怎樣走上人民出版社的道路 在傳達第一屆全國出版會議大會上的
 講話（1950年10月23日） 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商
 務印書館』北京·商務印書館1992.1
- 謝 振 聲1992 鄭貞文先生與商務印書館 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商
 務印書館』北京·商務印書館1992.1
- 辛 亥 革 命1981 預備立憲公會會員題名表 『辛亥革命浙江史料選輯』浙江人民出版社1981.8
- 熊 鳳 鳴1998 百年搏擊 業績璀璨 賀商務印書館百歲慶典 『商務印書館一百年（1897
 -1997）』北京·商務印書館1998.5
- 熊 尚 厚1978 夏瑞芳 中國社會科學院近代史研究所、李新、孫思白主編 『民國人物傳』
 第1卷 北京·中華書局1978.8 中華民國史資料叢稿
 1987 陸費逵先生 中華書局編輯部 『回憶中華書局』上編 北京·中華書局1987.2
 1981 陸費逵 中國社會科學院近代史研究所、宗志文、朱信泉主編 『民國人物傳』
 第3卷 北京·中華書局1981.8 中華民國史資料叢稿
- 熊 月 之 1999 商務印書館 熊月之、張敏著 『上海通史』第6卷晚清文化「第3章西學輸入」
 上海人民出版社1999.9
- 徐 梵 澄1998 百歲瞻言 『商務印書館一百年（1897-1997）』北京·商務印書館1998.5
- 徐 式 谷1998 從一張照片說起 『商務印書館一百年（1897-1997）』北京·商務印書館
 1998.5
- 徐 式 谷 1998 商務印書館對我國科技翻譯出版事業的歷史貢獻 徐式谷、陳應年 『商務印
 書館一百年（1897-1997）』北京·商務印書館1998.5
- 徐 松 榮1998 『維新派與近代報刊』太原·山西古籍出版社1998.2
- 徐 載 平 1988 『清末四十年申報史料』徐載平、徐瑞芳 新華出版社1988.4
- 徐 志 放1998 我童年記憶中的商務印書館 『商務印書館一百年（1897-1997）』北京·商
 務印書館1998.5
- 許 國 良1985 李伯元編《繡像小說》的最早史料 「文學遺產」第671期 『光明日報』1985.
 1.22
- 許 國 璋1987 祝我們的出版家九十大慶 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務
 印書館』北京·商務印書館1987.1
- 許 嘉 璐1998 此間多師友 『商務印書館一百年（1897-1997）』北京·商務印書館1998.5
- 許 敏 1999 商務印書館 許敏著 『上海通史』第10卷民國文化「第7章現代出版文化的
 產業化經營及其成就」上海人民出版社1999.9

文 献 一 覽

- 許 振生1998 商務印書館与古籍整理 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 宣 節1981 略談商務印書館印刷部門的管理方法 『商務印書館館史資料』之九 北京·商務印書館總編室編印1981.5.20
- Y
- 嚴 独鶴1960 福開森与《新聞報》 『文史資料選輯』4輯 1960.5/1980.12第三次印刷(日本影印)
- 楊 德炎1998a 写在商務百歲之際 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 1998b 繼往開來 再創輝煌 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
『中国出版年鑑(1998)』北京·中国出版年鑑社1998.9
- 1998c 回顧歷史 開創未來 紀念商務印書館創立一百周年 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 楊 靜遠1987 楊端六、袁昌英与商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京·商務印書館1987.1
- 楊 憲益1998 只出好書的商務印書館 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 楊 揚1997 商務印書館与20年代新文学中心的南移 『月光下的追憶』濟南·山東友誼出版社1997.5
商務印書館与二十年代新文学中心的南移 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 1998 一本書的故事 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 2000 『商務印書館：民間出版業的興衰』上海世紀出版集團、上海教育出版社2000.11
- 楊 蔭深1983 在商務印書館的十八年 『出版史料』第2輯 1983.12
『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京·商務印書館1987.1
- 姚 楠1987 我与商務印書館五十年 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京·商務印書館1987.1
- 1992 回憶張天沢博士 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京·商務印書館1992.1
- 葉 篤莊1998 從一部書看商務印書館 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 葉 聖陶1983 我和商務印書館 『出版史料』第2輯 1983.12
『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京·商務

文献一覽

- 印書館1987.1
- 葉 秀山1998 繼往開來話商務 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 葉 至善1998 我念過的尚公學校 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 伊藤 整1954 『日本文壇史 第二卷 新文學の創始者たち』講談社1954.3.31
- 印刷史研究会2000 『本と活字の歴史事典』柏書房 2000.6.5
- 俞 頌華1987 憶錢經宇(智修)先生 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 俞 筱堯1997 陸費伯鴻与中華書局 『出版史研究』第5輯 1997.2
1998 陸費伯鴻与中華書局(続) 『出版史研究』第6輯 1998.2
- 俞筱堯ら2002 『陸費逵与中華書局』俞筱堯、劉彥捷編 北京・中華書局2002.1
- 于 友先1998 奉獻的百年 光榮的百年 在商務印書館建館暨中國現代出版一百周年座談會上的講話 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
『中國出版年鑑(1998)』北京・中國出版年鑑社1998.9
- 于 卓1987 我和商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
1992 商務印書館全面公私合營的前前後後 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 郁 為瑾1988 商務印書館与基督教会的關係 『商務印書館館史資料』之四十 北京・商務印書館總編室編印1988.3.3
- 原安三郎1965 『山本条太郎』時事通信社1965.8.30
- 袁 翰青1987a 自學有成的科學編譯者杜壘泉先生 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
1987b 我与商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 袁 希濤1923 五十年來中國之初等教育 『最近之五十年』上海・申報館1923.2 / 上海書店影印1987.3(出版說明に1922年2月初版本とあるが1923年の誤り)
- 遠山景直1907 『上海』出版社名不記1907.2.28
- Z
- 臧 勵齋1992 中國人名辭典緣起 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 澤田瑞穗1980 閑談『繡像小説』 『清末小説研究』第4号 1980.12.1
- 増田 涉1983 『關西大學所蔵 増田涉文庫目錄』關西大學圖書館1983.6.30
- 曾 虛白1966 『中國新聞史』曾虛白主編 台灣・國立政治大學新聞研究所1966.4初版未見 / 1977.3四版

- 張 蟾芬1935 余与商務初創時之因緣 『東方雜誌』第32卷第1号 1935.1.1
『出版史料』1989年第3、4期(總第17、18期) 1989.11
『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京·商務印書館1992.1
- 張 純1986 關於《繡像小說》半月刊的終刊時間 『徐州師範學院學報』1986年第2期
1986.6.15
1994 再談〈繡像小說〉的終刊時間 向樽本照雄先生請教 『晚清小說快訊』
第3期 1994.2.5
- 張 岱年1998 祝賀商務印書館成立一百周年 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
- 張 國功2001 商務的文化与文化的商務 近期商務印書館研究一瞥 『編輯學刊』2001年
第2期(總第76期)2001.4
- 張 靜廬1953 『中国近代出版史料初編』張靜廬輯註 上海·上雜出版社1953.10
1954a 『中国近代出版史料二編』張靜廬輯註 上海·群聯出版社1954.5
1954b 出版大事年表 一八六二 - 一九一八年 張靜廬輯註 『中国近代出版史料二
編』上海·群聯出版社1954.5
1957 『中国出版史料補編』張靜廬輯註 北京·中華書局1957.5
- 張 連生1992 台湾商務印書館四十四年述略 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我
和商務印書館』北京·商務印書館1992.1
- 張 明養1992a 悼念周建老 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北
京·商務印書館1992.1
1992b 懷念和感激 紀念商務印書館建館八十五周年 『(1897-1992)商務印書
館九十五年 我和商務印書館』北京·商務印書館1992.1
- 張 默1932 六十年来之申報 『申報月刊』創刊号 1932.7.15
- 張 人鳳1994a 張元濟的人才觀和人才管理實踐活動初探 中国出版科学研究所科研辦公室
編 『近現代中国出版優良傳統研究』北京·中国書籍出版社1994.1
1994b 讀《初期商務印書館の謎》後的補充与商榷 『清末小說』第17号1994.12.1
1995 『張菊生先生年譜』台湾商務印書館股份有限公司1995.5
1997a 商務《最新教科書》的編纂經過和特点 『編輯學刊』1997年第3期(總第53
期)1997.6.25
『商務印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
1997b 商務印書館的《最新初等小学国文教科書》 『清末小說』第20号 1997.12.1
1998a 我国近代教育史上第一套成功的教科書 商務版《最新教科書》 『商務
印書館一百年(1897-1997)』北京·商務印書館1998.5
1998b 為国難而犧牲 為文化而奮鬥 抗日時期的商務印書館 同上
1998c 『智民之師·張元濟』濟南·山東畫報出版社1998.10
- 張 榮華1997 『張元濟評伝』南昌·百花洲文藝出版社1997.3
- 張 銳1960 我所知道的福開森 『文史資料選輯』4輯 1960.5/1980.12第三次印刷(日

- 本影印)
- 張 若谷1939 (附録)紀元前五年上海北京画報之一瞥 上海通社編『上海研究資料統集』上海・中華書局有限公司1939.8
- 張 世英1998 無言之師 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 張 仕英1998 「本館編印繡像小説緣起」の筆写をめぐって 『清末小説から』第50号 1998.7.1
- 張 樹年1991 『張元濟年譜』張樹年主編 柳和城、張人鳳、陳夢熊編著 北京・商務印書館1991.12(『出版史料』に連載された。今、単行本に抛る)
- 1992 我与商務印書館 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 1997 『我的父親張元濟』上海・東方出版中心1997.4
- 1998a 商務印書館在我心中 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 1998b 先父張元濟的最後十年 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 1998c 千父張元濟与図書館事業 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 1998d 紀念夏公瑞芳 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 張樹年ら1992 『張元濟蔡元培来往書信集』張樹年、張人鳳編 香港・商務印書館1992.10
- 張万起ら1998 商務印書館与中国現代辞書出版事業 張万起、金欣欣 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 章 錫琛1964 漫談商務印書館 『文史資料選輯』43輯 1964.3/1980.12第二次印刷(日本影印)
- 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 1992 從辦學校到進入商務編訳所 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 張憲文ら1993 『江蘇民国時期出版史』張憲文、穆緯銘主編 南京・江蘇人民出版社1993.12
- 張 鑫友1998 我的第一本書 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 張 秀民1989 『中国印刷史』上海人民出版社1989.9
- 張 英2003 商務印書館早期編印英語教材初探 『清末小説』第26号 2003.12.1
- 2004 《華英初階》和《華英進階》何時出版? 商務印書館早期英語教科書再探 『清末小説から』第74号 2004.7.1
- 張 毓黎1992 商務印書館總管理处遷渝時期的工作概況 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 張 元濟1981 『張元濟日記』上下 北京・商務印書館1981.9
- 1990 張元濟旅欧書札(五件) 『出版史料』1990年第1期(總第19期)1990.3

- 1992a 東方圖書館概況・緣起（1926年）『（1897-1992）商務印書館九十五年
我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 1992b 張元濟致鄭孝胥、印有模、高鳳池（翰卿）函 張樹年、張人鳳編『張元濟
蔡元培來往書信集』香港・商務印書館有限公司1992.10
- 2001 『張元濟日記』上下 張人鳳整理 石家莊・河北教育出版社2001.1
- 張 芝聯1998 我與商務 『商務印書館一百年（1897-1997）』北京・商務印書館1998.5
- 張 志強1998 商務印書館與現代印刷技術 『商務印書館一百年（1897-1997）』北京・商
務印書館1998.5
- 2001a 《張元濟年譜》『面壁齋研書錄』南京・江蘇教育出版社2001.9
- 2001b 兩本“張元濟傳” 同上
- 2001c 汪家燊與《商務印書館史及其他》 同上
- 2001d 記錄百年商務的光輝足跡 近20年來商務印書館史研究著作述評 『中國
出版』2001年第3期 2001
- 趙 而昌1992 於細微處見精神！ 記丁英桂先生 『（1897-1992）商務印書館九十五年
我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 趙 守儼1992 五十年代商務整理出版古籍雜憶 『（1897-1992）商務印書館九十五年
我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 趙 竹光1987 我和商務印書館 『（1897-1987）商務印書館九十年 我和商務印書館』
北京・商務印書館1987.1
- 鄭 爾康1987 鄭振鐸在商務印書館的十年 『（1897-1987）商務印書館九十年 我和商
務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 1998a 《兒童世界》和鄭振鐸 『商務印書館一百年（1897-1997）』北京・商務印
書館1998.5
- 1998b 在作家成功的里程碑上 『商務印書館一百年（1897-1997）』北京・商務印
書館1998.5
- 鄭 寧2002a 海鹽張氏、張元濟與張氏後人 柳和城、宋路霞、鄭寧『藏書世家』上海人
民出版社2002.2
- 鄭 寧 ら2002b 商務印書館早期的《最新初等小學筆算教科書》 鄭寧、張人鳳『清末小說』
第25號 2002.12.1
- 鄭 孝胥1993 『鄭孝胥日記』全5冊 中國歷史博物館編、勞祖德整理 北京・中華書局
1993.10
- 鄭 逸梅1983a 夏瑞芳、鮑咸恩創辦“商務”略記 『書報話舊』上海・學林出版社1983.3
- 1983b 中華書局是怎樣創始的 『書報話舊』上海・學林出版社1983.3
- 1984 《繡像小說》主編為李伯元 「文學遺產」第653期『光明日報』1984.9.4
- 鄭 貞文1964 我所知道的商務印書館編譯所 『文史資料選輯』53輯 1964.3/1981.6第
二次印刷（日本影印）
『（1897-1987）商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務
印書館1987.1

文献一覽

- 鄭 振鐸192a 憶賢江 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 192b 悼何柏丞先生 同上
- 中村忠行1962 清末の文壇と明治の少年文学(一) 『山辺道』第9号 1962.12.25
- 1981 商務版『説部叢書』について 書誌学的なアプローチ 『野草』第27号 1981.4.20
- 1985 清末文学研究時評 『中国文芸研究会会報』第54号 1985.7.30
- 1986 『繡像小説』と金港堂主・原亮三郎 『神田喜一郎博士追悼中国学論集』二玄社1986.12.15
- 1989 検証：商務印書館・金港堂の合併(1) 『清末小説』第12号 1989.12.1
- 1990 検証：商務印書館・金港堂の合併(2) 『清末小説』第13号 1990.12.1
- 1993 検証：商務印書館・金港堂の合併(3) 『清末小説』第16号 1993.12.1
- 鍾 桂松1998 茅盾与商務印書館 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 中国国民党1970 陳其美 中国国民党中央委员会党史史料編纂委员会編『革命人物誌』第4集 台湾・中央文物供应社1970.6
- 中国人民銀行1960 『上海錢莊史料』中国人民銀行上海市分行編 上海人民出版社1960.3 / 1978.7第三次印刷
- 中国社会科学院近代史研究所翻譯室1981 『近代来華外国人名辞典』北京・中国社会科学出版社1981.12
- 中国文学月報1935 繡像小説 文芸雑誌の変遷1 無署名『中国文学月報』第2号 1935.4.5
- 中華道人1919 日支合弁事業と其經營者 『実業之日本』第22卷第13号 1919.6.15
- 中華書局編輯部1987 『回憶中華書局』北京・中華書局1987.2/2001.11北京第2次印刷
- 2002 『我与中華書局』北京・中華書局2002.5
- 中野好夫1972 三 官許同志社英学校 『蘆花徳富健次郎』第一部 筑摩書房1972.3.25 初版第一刷 / 1974.11.15第四刷
- 周 谷城1987 商務印書館与中国的現代化 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 周 文熙1993 一部配有參考資料的大事記 談《商務印書館大事記(1897-1987)》 『出版史研究』第1輯 1993.10
- 周 武1996 張元濟与近代文化 上海社会科学院歷史研究所『史林』1996年第3期(總第43期) 月日不記
- 1998 天留一老試艱難 抗戰勝利後的張元濟 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 1999 『張元濟：書卷人生』上海教育出版社1999.5 20世紀文化名人与上海
- 周 予同1987 追念楊賢江 『(1897-1987) 商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 周 越然1992 我与商務印書館 『(1897-1992) 商務印書館九十五年 我和商務印書館』

- 北京・商務印書館1992.1
- 周 作人1933 学校生活の一葉 『雨天的書』香港・実用書局1967.11影印。據1933北新書局本
- 1970 五一「我的新書(一)」 『知堂回想錄』香港・聽濤出版社1970.7
- 朱 聯保1987 關於世界書局的回憶 『出版史料』1987年第2期(總第8期)1987.5
- 1993 『近現代上海出版業印象記』上海・学林出版社1993.2
- 朱 譜萱1998 我看商務 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 朱 士嘉1987 我与商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 朱 蔚伯1981 商務印書館是怎樣創辦起來的 『文化史料(叢刊)』2輯 1981.11
- 朱 有猷1987 『中国近代学制史料』第2輯上冊 上海・華東師範大学出版社1987.6
- 朱 淵清1998 王雲五和分類法 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 莊 百俞1930 哀鮑先生 『鮑咸昌先生哀輓錄』鮑府治喪事務所 刊年不記(1930)
- 莊 建1998 為千丈之松歌 訪著名出版家陳原 『商務印書館一百年(1897-1997)』北京・商務印書館1998.5
- 莊 適1987 莊俞家伝 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 莊 俞1930 鮑咸昌先生事略 『鮑咸昌先生哀輓錄』鮑府治喪事務所 刊年不記(1930)
- 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 1931 三十五年来之商務印書館 莊俞、賀聖廡編 『最近三十五年之中国教育』上海・商務印書館1931.9
- 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 1987 談談我館編輯教科書的變遷 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 1992a 悼夢旦高公 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 1992b 憐鉄樵君哀詞 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 莊 俞ら1930 『鮑咸昌先生哀輓錄』刊年不記(1930)
- 子 冶1987 梁啓超和商務印書館 『(1897-1987)商務印書館九十年 我和商務印書館』北京・商務印書館1987.1
- 2002 關於中国図書公司的材料(三則) 『出版史料(叢刊)』第4輯 2002.12
- 鄒 尚熊1992 我与商務印書館 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印書館』北京・商務印書館1992.1
- 鄒 振環1992a 馮承鈞与商務印書館 『(1897-1992)商務印書館九十五年 我和商務印

文献一覧

- 書館』北京・商務印書館1992.1
- 1992b 商務印書館と金港堂 20世紀初中日的一次成功合資 『出版史料』1992年
第4期（総第30期） 1992.12
- 2000 『20世紀上海翻訳出版与文化変遷』南寧・広西教育出版社2000.12/2001.
3第二次印刷 20世紀中国出版文化叢書
- 樽本照雄1973 繡像小説総目録 附解題、著者名索引・作品名索引 『大阪経大論集』
第93号 1973.5.15
- 1979 金港堂・商務印書館・繡像小説 『清末小説研究』第3号 1979.12.1
『清末小説閑談』法律文化社1983.9.20
- 1980a 中華書局に独立された商務印書館 『清末小説研究会通信』第6号 1980.
11.1
- 1980b 商務印書館と夏瑞芳（筆名：沢本郁馬）『清末小説研究』第4号 1980.12.1
『清末小説閑談』法律文化社1983.9.20
- 1981 中華書局創立までの陸費逵（筆名：沢本郁馬）『清末小説研究』第5号
1981.12.1
- 1982a 商務印書館と山本条太郎 『清末小説研究会通信』第15号 1982.2.1
- 1982b 商務印書館と山本条太郎 『大阪経大論集』第147号 1982.5.15
『清末小説論集』法律文化社1992.2.20
- 1982c 『沢林』のこと 『中国文芸研究会会報』第35号1982.7.13
- 1982d 商務版「説部叢書」『航海少年』の原作の原作 『清末小説研究会通信』
第22号 1982.11.1
- 1982e 『航海少年』は魯迅の翻訳か 『中国文芸研究会会報』第37号 1982.11.15
- 1983a 金港堂・商務印書館合併の構図 『清末小説研究会通信』第24号 1983.1.1
- 1983b 『航海少年』原作の訂正 『清末小説研究会通信』第26号 1983.3.1
- 1983c 商務印書館と夏瑞芳（筆名：沢本郁馬）著 筱松（宋麗蓉）訳 汪家熔注
『商務印書館館史資料』之二十二 北京・商務印書館総編室編印1983.7.20
- 1983d 『繡像小説』について 『清末小説閑談』法律文化社1983.9.20
- 1984 誰は《繡像小説》的編輯人 「文学遺産」第653期 『光明日報』1984.9.4
- 1985a 『繡像小説』の編者は誰か 『中国文芸研究会会報』第50号 1985.2.15
『繡像小説』の編者は誰か 論争の情況 『清末小説論集』法律文化社
1992.2.20
- 1985b 『繡像小説』の編者をさがす 『清末小説研究会通信』第35号 1985.4.1
- 1985c 『繡像小説』李伯元編者説の根 『中国文芸研究会会報』第52号 1985.5.15
『清末小説論集』法律文化社1992.2.20
- 1985d 關於“李伯元与劉鉄雲的一段文字案” 『大阪経大論集』第165号 1985.
5.15
- 1985e 長尾雨山の上海行 『清末小説研究会通信』第38号 1985.7.1
- 1985f 劉鉄雲が李伯元を盗用したのか 汪家熔説を批判する 『大阪経大論集』

文献一覧

- 第166号 1985.7.15
『清末小説論集』法律文化社1992.2.20
- 1985g 『繡像小説』の刊行時期 『中国文芸研究会会報』第55号 1985.9.30
『清末小説論集』法律文化社1992.2.20
- 1986a 「老残遊記」と「文明小史」の盗用関係を論じる 『中国文芸研究会会報』
第57号 1986.1.30
『清末小説論集』法律文化社1992.2.20
- 1986b 金港堂と商務印書館の合併を証言する 『清末小説研究会通信』第47号
1986.4.1
- 1986c 商務印書館研究はどうなっているか (筆名: 沢本郁馬) 『清末小説から』
第1号 1986.4.1
『清末小説論集』法律文化社1992.2.20
- 1986d 『外交報』と『繡像小説』の共通点 『清末小説研究会通信』第48号1986.
5.1
- 1986e 気になる『繡像小説』の奥付 『中国文芸研究会会報』第59号 1986.5.31
『清末小説論集』法律文化社1992.2.20
- 1986f 李伯元と劉鉄雲の盗用関係2 『啞叢報』第11号1986.6.25
『清末小説論集』法律文化社1992.2.20
- 1986g 清末小説・研究結石 『中国文芸研究会会報』第60号 1986.7.31
- 1986h 『清末小説きまぐれ通信』清末小説研究会1986.8.1
- 1987 『繡像小説』発行遅延説をめぐって 前言 『清末小説から』第5号 1987.
4.1
- 1988 初期商務印書館をもとめて 『清末小説から』第9号 1988.4.1
『清末小説論集』法律文化社1992.2.20
- 1989 商務印書館と山本条太郎 東爾訳 『商務印書館館史資料』之四十三 北京
・商務印書館総編室編印1989.3.20
- 1990 蔣維喬と日本人 蔣維喬日記から (筆名: 沢本香子) 『清末小説』第13
号 1990.12.1
- 1991a 商務印書館が触れられない事 『中国文芸研究会会報』第113号
1991.3.30
- 1991b 商務印書館の火災 『清末小説から』第21号 1991.4.1
- 1991c 中国第一本専登小説的期刊「繡像小説」編者疑案 台北 『中央日報』1991.
8.20
- 1991d 初期商務印書館の印刷物(上) 漢訳 『新島襄伝』について 『清末小
説から』第23号 1991.10.1
- 1991e 南亭亭長の正体 『繡像小説』編者論争から始まる 『清末小説』
第14号 1991.12.1
『清末小説探索』法律文化社1998.9.20

文献一覧

- 1992a 《繡像小説》編者討論 中国古典文学研究会主編 『二十世紀中国文学』台湾・学生書局1992.1
- 1992b 初期商務印書館の印刷物（下） 漢訳『新島襄伝』について 『清末小説から』第24号 1992.1.1
- 1992c 統計表から商務印書館を見る（上） 『清末小説から』第25号 1992.4.1
- 1992d 統計表から商務印書館を見る（下） 『清末小説から』第26号 1992.7.1
- 1992e 鍵としての高翰卿「本館創業史」（筆名：沢本郁馬）『清末小説』第15号 1992.12.1
- 1993a 長尾雨山二題 『中国文芸研究会会報』第135号 1993.1.30
- 1993b 『繡像小説』の刊行時期ふたたび 『野草』第52号 1993.8.1
『清末小説探索』法律文化社1998.9.20
- 1993c 初期商務印書館の謎（筆名：沢本郁馬）『清末小説』第16号 1993.12.1
- 1994a 『繡像小説』の刊行時期みたび 張純氏に答える 『清末小説から』第34号 1994.7.1
『清末小説探索』法律文化社1998.9.20
- 1994b 鄭孝胥日記に見る長尾雨山と商務印書館1 『清末小説から』第35号 1994.10.1
- 1994c 《繡像小説》出版延期問題簡論 『出版史研究』第2輯 1994.11
- 1995a 鄭孝胥日記に見る長尾雨山と商務印書館2 『清末小説から』第36号 1995.1.1
- 1995b 金港堂から商務印書館への投資 『中国文芸研究会会報』第160号 1995.2.28
- 1995c 鄭孝胥日記に見る長尾雨山と商務印書館3 『清末小説から』第37号 1995.4.1
- 1995d 初期商務印書館の精神分析 金港堂との合併をめぐって 『中国文芸研究会会報』第163号 1995.5.31
- 1995e 鄭孝胥日記に見る長尾雨山と商務印書館4 『清末小説から』第38号 1995.7.1
- 1995f 変化しつつある商務印書館研究の現在 または、商務印書館の被害者意識 『大阪経大論集』第46巻第3号（通巻227号） 1995.9.15
- 1995g 鄭孝胥日記に見る長尾雨山と商務印書館5完 『清末小説から』第39号 1995.10.1
- 1995h 夏瑞芳暗殺 初期商務印書館における夏瑞芳の役割 『清末小説』第18号 1995.12.1
- 1996a 長尾雨山は冤罪である 『大阪経大論集』第47巻第2号（通巻232号） 1996.7.15
- 1996b 長尾雨山の教科書（上） 『清末小説から』第43号 1996.10.1
- 1996c 商務印書館と中華書局の教科書戦争（筆名：沢本郁馬）『清末小説』第19

文献一覧

- 号 1996.12.1
- 1997 長尾雨山の教科書(下) 『清末小説から』第44号 1997.1.1
- 1998a 長尾雨山の帰国 『書論』第30号 書論研究会 1998.4.30
- 1998b 商務印書館のライバル 中国図書公司の場合 『清末小説』第21号
1998.12.1
- 1999 鱗沢彰夫氏へ 『清末小説から』第53号 1999.4.1
- 2000a 上海で報道された日本・教科書疑獄事件 『清末小説から』第56号 2000.
1.1
- 2000b 近代日中出版社交流の謎 大阪市大学開放講座 『大阪経済大学市民教養講
座 - 講義のまとめ - 』大阪市教育委員会(2000.2)
- 2000c 『初期商務印書館研究』清末小説研究会2000.9.9
- 2001a 『繡像小説』編者問題の結末 『清末小説から』第62号 2001.7.1
- 2001b 新しい商務印書館研究 『東方』2001年8月号 2001.8.1
- 2001c 【国際学会報告】辛亥革命前後における商務印書館と金港堂の合併 辛亥
革命90周年国際学術討論会(神戸)2001.12.14
- 2001d 最近の商務印書館研究に見る日中合併の事実 『大阪経済大学教養部紀要』
第19号 2001.12.31
- 2002a 商務印書館最初の英語教科書 『華英初階』について 『清末小説から』
第66号 清末小説研究会2002.7.1
- 2002b 初期商務印書館における教科書の系譜 『最新国文教科書』第1冊まで
『大阪経大論集』第53巻第4号(通巻第270号) 2002.11.15
- 2002c 商務印書館版「説部叢書」の成立 (筆名:神田一三) 『清末小説』第25
号 2002.12.1
- 2003a 『絵図文学初階』巻1について 初期商務印書館における教科書の系譜
2 『清末小説から』第68号 2003.1.1
- 2003b 辛亥革命時期的商務印書館和金港堂之合資経営 『大阪経大論集』第53巻
第5号(通巻第271号) 大阪経大会2003.1.15
- 2003c 辛亥革命前後における商務印書館と金港堂の合併 孫文研究会編 『辛亥革命
の多元構造』汲古書院2003.12.25
- 鱗沢彰夫1997 『官話指南』、そして商務印書館の日中合併解消 早稲田大学 『中国文学
研究』第23期 1997.12
- 1999 『清末小説21』所載の樽本照雄「商務印書館のライバル 中国図書公司
の場合」における記述について 『清末小説から』第53号 1999.4.1

初版あとがき

初期商務印書館を主題にした1書をまとめることになろうとは、思いもしなかった。

私と商務印書館の関係は、たどっていけば清朝末期の劉鉄雲「老残遊記」に関して論文を書いたことに始まる(1971)。

「老残遊記」は、最初、『繡像小説』に連載された。雑誌編集者による改竄事件が発生し、劉鉄雲は、連載を中止する。その後、『天津日日新聞』に連載の場を移すなど、奇怪で複雑な経緯があった。不可解な部分を解明するためには「老残遊記」の各種版本を調査する必要がある。必然的にたどりつくのが『繡像小説』だ。これが、当時、澤田瑞穂氏が所蔵する『繡像小説』全冊の目録を作成することにつながった(1973)。『繡像小説』こそは、商務印書館が発行していた雑誌なのである。さらに『繡像小説』の編集者問題が提起される。「老残遊記」と「文明小史」の盗用問題にからんで、『繡像小説』の編集者が誰かを認定するために、中国の研究者と論争も行なった(1984)。発行元としての商務印書館が、私の研究分野のなかで特別な位置を占めるようになったといえる。

清末に突然発生した小説の空前の繁栄は、小説専門雑誌群の創刊に支えられていた。それは、また、上海における近代的出版業の成立とも緊密な関係を有していることはいうまでもない。商務印書館が、清末以後、中国の出版業界において最大の成功をおさめた企業であることを考えれば、商務印書館研究こそは、清末小説研究に欠かせない部分を構成する。そこには、作品、作家、出版社の3方面から、清末小説研究は究明されなければならないという考えが、基本に横たわっているのだ。

くわえて、商務印書館には、日本の金港堂との合併会社であった時期が存在したと知ってからは、私の興味がいっそう深まった。ところが、合併の経緯とその解消の事情について、長い間、日本と中国の双方においてほとんど何も解明されていないのが事実だ。私の知る限り、あらたに追求する研究者もあらわれない。不明ならば調べてみようか、と私は探索する気になった。

鍵となる人物長尾雨山を追跡して文章を発表したのが1979年だ。その時点で、まさかこれほどまで興味が続くとは考えず、その時々 of 商務印書館に係る論文は、『清末小説閑談』（法律文化社1983）および『清末小説論集』（同前1992）に収録している。

研究論文を必要に応じて発表することと、それを一本にまとめることは、直接には関係しない、まったくの別物だ。

私が商務印書館関係論文を整理することになった直接のきっかけは、1999年、大阪市にある勤務校で開催された市民講座である。題して「近代日中出版社交流の謎」という。

長年にわたって発表してきた文章を集めると、かなりの分量になった。市民講座は、全体の流れを整理するのに、いい機会だったということができる。

商務印書館と金港堂の合併に焦点をしばり、内容を無理矢理に圧縮し、2回に分けて紹介した。その結果わかったのは、内山完造、魯迅、巴金の名前は知られていても、商務印書館と金港堂の関係者について、会場の大多数をしめる年配の参加者には、何の知識もないらしいことだった。それほどまでに一般には忘れ去られた、あるいは知られていない事柄であるのだろう。

日中友好がうたわれて長い時間が経過している。にもかかわらず、日中の書店が過去において合併会社を組織していたという文化交流のまさに好例が知られていないのも不思議なことだ。いや、日本では、社会の動きと研究界は必ずしも一致しているわけではないから、不思議ではないか。どのみち、金港堂と商務印書館の合併事業は、一般書で言及されるような話題ではない。共通の知識になりようがない。

それどころか、後に入手した和田博文ほか著『言語都市・上海1840-1945』（藤原書店1999.9.30）を見て意外な気がしないでもなかった。「日本近代は<上海>

に何を見たか」と帯に謳う該書の「上海関係・出版物年表」には、1897年の商務印書館創設を拾うだけだ。金港堂と商務印書館の合併事業については、ひとことの説明もない。年表の記述は、本文で触れられていないことの反映だ。同じ年表の1903年には「漢学者長尾雨山、この年上海に渡り、商務印書館にて編輯を主宰する」と書かれるのみ。長尾雨山と教科書疑獄事件どころか、商務印書館と金港堂を結びつけるなんの手掛かりも持たなかったことがわかる。日本近代文学研究の専門家にとっても、金港堂と商務印書館の合併関係は、関心の外にあることが理解できて貴重であった。

考えてみれば、初期商務印書館に関して書かれたものは、実藤恵秀氏の論文があるくらいだった。そののち、途絶えた。今から約20年前は、日本の中国研究者も商務印書館を記述して事典項目にはする、あるいは論文で金港堂との合併事業について簡単に言及するくらいが常だ。初期商務印書館に関して、専門論文が書かれる程には研究が深まらなかったといわざるをえない。

日本で日中合併を追究する研究者がいないのだから、中国の研究者がそれに関して独自の研究を展開するというものもない。政治上の制約があったことを除いて、資料の点からみても、使用言語からいっても、中国において日本金港堂とその関連事項を調査することは、ほとんど不可能に近い。

初期商務印書館研究の状況が一変したのは、誰も指摘しないから自分でいうよりほかないが、1979年に発表した私の論文からである。

長尾雨山をめぐる謎を中心に置いて執筆した。彼が上海の商務印書館に勤務することになったのは、金港堂と教科書疑獄事件に関連してのことであることを、資料にもとづいて詳細に跡づけ解明したのだ。秘密文書があってそれを発見したわけでは、決してない。明治時代に発行された普通の新聞を、丹念に調査して得られた結果である。誰でも、やろうと思えばできる。たまたま、それを実行する研究者がいなかっただけのことだ。

これがきっかけとなって、商務印書館と金港堂の合併事業が大きな問題として存在することが、内外の研究者の注目を集めた（中村忠行氏から、論文をほめてもらってうれしかった）。資料の掘り起こしと読みなおしが、あらためて始まることになる。

中国における初期商務印書館研究の背景には、「改革開放」政策が研究界にも影響を及ぼしていることを言わなければならない。外国企業との合併事業が推進される時代には、過去には負の評価しかしなかった、あるいは無視していた商務印書館と金港堂の合併を研究論文にする、さらには積極的に評価することが許される。日本での研究は、中国の研究者によっても、典拠を明示するしないにかかわらず、大いに参考にされた。

本書は、私が過去に書いた文章を基礎にしている。個々の論文については、巻末の文献一覧をご覧いただきたい。本書の全体の構成にしたがい、関連する文章を編集しなおして成った。すなわち、枝分かれしたと判断する部分、全体の構成から外れるものは、捨て、重なる部分も削除し、必要部分について新たに書き下ろし、不足を補うなどの加工をほどこしている。上記2著と本書の記述が重複している箇所がある。ご了承を願う。

私が利用した資料は、日本、中国の両方とも公表されているものばかりだ。それらを調査し、拾いあげ、組み合わせる作業をくりかえしてきた。資料が存在しない箇所は、もっとも合理的だと私が判断した推測によって綴りあわせている。

私の興味の中心は、中国商務印書館と日本金港堂の合併事業にある。清朝末期から民国初期（日本でいえば明治から大正にかけて）の時期にあたり、商務印書館の文芸作品の出版活動と重なるからだ。

初期商務印書館は、その創業時期には経済的困難を背負い、日中合併期間中にはライバル会社との闘争を体験する。巨大出版企業に成長するためには、数多くの苦難を経験しなければならなかった。安楽な道ではなかったことを、事実に基づいて追跡するのが、本書の基本的な目的である。関係する人物に焦点を当てるのも、目的のなかに含まれるということができる。

収集した資料によって可能な限り探求した結果、商務印書館と金港堂両者の合併の基本構造とその経過は、ほぼ把握できたものとする。流布している誤解もいくつかは、正すことができた。とはいえ、基礎資料がまだ不足している部分がある。今後の資料発掘によって訂正しなければならないかもしれない。そうなって欲しい、とも思う。

本書は、初期商務印書館の動きを、営業の側面に焦点をあてて描くことになっ

た。それは夏瑞芳を本書の中心に位置づけることを意味する。商務印書館の張元濟を主軸にして記述する文章、著作は多い。しかし、夏瑞芳に重点を置いた著作は多くはない。専著としては、本書がはじめてではないだろうか。

日本の金港堂については、稲岡勝氏の論文に負うところが多い。ただし、その成果をすべて吸収できているという意味ではない。本書は、あくまでも商務印書館を中心にして金港堂との合併からその解消までの時期に限定している。それが私の最初からの意図でもある。ゆえに金港堂の全体像をより詳しく知りたい方は、文献一覧に掲げた稲岡氏の諸著作をご覧いただきたい。

上海へ行くまでの長尾雨山について知りたい方には、杉村邦彦氏の連載論文がある。

中村忠行氏は、商務印書館と金港堂の合併を実証的に探求されていた。それが中断する結果となったのは、まことに惜しいことだった。

思い出すことがある。初期商務印書館について調査と論文執筆を並行して行なっていたころのことだ。金港堂関係者には、少数ではあるが電話と手紙で取材をしていた。だが、商務印書館側については、手がかりがない。しかたなく北京の商務印書館あてに手紙を書いた。両社の合併に言及する何か資料が残っていないか、という問い合わせである。研究目的のためだけで、他意があったわけではない。雑誌『清末小説研究』第3、4号と論文別刷りを手紙に添えた。該誌には、それぞれ樽本「金港堂・商務印書館・繡像小説」、沢本郁馬名義「商務印書館と夏瑞芳」が掲載されている。別刷りは、樽本「商務印書館と山本条太郎」(『大阪経大論集』第147号 1982.5.15)だ。これらによって、私がどのあたりに興味をもって研究しているかを知ってもらいたかったからだ。

1982年7月30日付の商務印書館総編室名義で(個人名は書かれていない)、公印を押した返事があった。それには、翻訳すると、「わが館の早期保存資料は、1932、1937年の淞滬抗戦期にすべてを失ってしまい、ゆえに提供しようにも方法がありません」と書かれている。つまり、日本軍がすべて破壊してしまって何も残っていない、というわけだ。文章の真意は、日本人のお前が要求している資料は、ほかならぬ日本軍が破壊したのだ、と言っているとしか私には受け取ることができなかった。

外国人が、自国の企業について過去の歴史を知りたい、と希望すれば、外国人にしては感心であると思わないまでも、常識的にいって、好意的に処遇するのではないか。ましてや大国中国の世界的大出版企業の商務印書館であるから、なんらかの示唆、手引き、力添えがあるものと期待をしても不自然ではない。だからこそ手紙を書いて、そのうえ印刷物までもわざわざ添えたのである。その答えが返書1枚だ。私の勝手に甘い期待は、商務印書館自身の手によって砕かれた。

商務印書館にしてみれば、見知らぬ日本人からの質問にいちいち答える義務も時間もない、返書を送っただけ、まし、というところだろう。それはそれで正しく、私が、異議を唱える筋合いのものではない。

それにしてもだ。商務印書館の公印が使用してあるのだから、商務印書館の公式見解だと考える。文面からただよってくる冷やかな態度と人を拒絶する雰囲気、私の気分は、いっぺんにさめてしまった。こういうことになるのなら、返事などなかった方が、よほどよかった。問い合わせるなど余計なことをしたものだ、と自らの軽率さを自分で罵った。

その一方で、私が進めている初期商務印書館研究は、商務印書館関係者にとってはなにやら迷惑な様子であることも、その手紙からうかがえるような気がしてならなかった。なぜなのか、その時は理解できない。心に長くひっかかることになる。

ずっと後になって、『清末民初小説目録』(1988)と交換するかたちで『商務印書館館史資料』を複数冊入手した。商務印書館総編室が発行するタイプ孔版印刷の内部刊行物である。書名のとおり、商務印書館の歴史に関する資料の発掘、関連論文を掲載する学術誌だ。掲載された文章が、別の学術刊行物に再録されることもある。資料重視が編集方針だと私は理解した。さすがに歴史ある出版社は、違う。内部での地道な資料発掘と研究の積み重ねを実践している。

それはいいのだが、見れば、私の論文2本が、漢語に翻訳されているではないか。我が目を疑うとは、このことだ。1982年に問い合わせた手紙に同封した文章にほかならない。沢本郁馬名義の論文が、漢訳題名「商務印書館と夏瑞芳」(筱松訳、汪家熔注。『商務印書館館史資料』之二十二 北京・商務印書館総編室編印1983.7.20)で掲載されている。訳者は私の知らない人だ。さらに、別刷り論文も漢訳題

名「商務印書館与山本条太郎」(東爾訳。『商務印書館館史資料』之四十三 北京・商務印書館総編室編印1989.3.20)になっている。

論文2本ともに、事前に翻訳許可を求められたということは、ない。話に聞くところによれば、中国における無断翻訳のころは、頼まれもしないのに漢訳して宣伝してやったからありがたく思え、ということなのだそう。まさか私に降りかかってこようとは思いつかなかった。世界的に著名で長い歴史をもつ巨大出版社であるにもかかわらず、著作権については無神経なのだ。翻訳掲載誌が、私宛に送られてくるということもない。だから、自分の論文が中国で翻訳されていたことなど、知るよしもなかった。原物を目にして意外な気がしたのが正直なところだ。

私あての手紙では、あれほど冷淡だった。にもかかわらず、なぜ私の日本語の論文をわざわざ漢語に翻訳して掲載するのだろうか。矛盾しており不可解な行為だと私には思えた。

本書を書き上げた今、商務印書館からももらったあの手紙を、あらためて手もとにおいてながめている。文面の冷淡さと商務印書館の内部刊行物に私の論文を無断翻訳掲載している事実を並べるとどうなるか。

なるほど、手紙の文面にただよう冷たい拒絶の姿勢は、商務印書館が金港堂と合弁会社であったことを外部には知られたくない、という伝統的姿勢を表わしている、と今なら理解できる。事実を知って研究しようという私に対して、知らぬ顔をして無駄なのだが、そうせずにはいられない。合弁会社の実状を探索する人間には、反射的に身構えてしまうらしい。

合弁関係の資料は、すべてを失っているはずなのに、汪家熔氏の手によっていくつかが、その後、発掘発表された。つまり、資料は保存していても、外部の人間に提供するつもりがなかったということだ。

内部刊行物における日本語論文の無断翻訳掲載は、商務印書館の内側であれば、事実として触れざるをえないものは認める、というこれもまた商務印書館の定まった行動様式だろう。連綿として伝統は、息づいている。

本書によって初期商務印書館研究の空白部分をいくらかは埋めることができたと思う。だが、私は、ひとつの仕事をやり終えたという満足感、達成感を味わ

うことができない。この爽快感のなさ、後味の悪さはどこからくるものなのか、と考える。

金港堂および長尾雨山の関係者からは、昔のことをいまさらほじくりかえして、と迷惑がられる部分があるかもしれない。商務印書館関係者からは、余計なことを、と感じられる可能性もないことはなかるう。もしそうならば、私の説明に言葉が不足しているためであるとあらかじめお断わりしておく。

商務印書館と金港堂の日中合弁事業は、歴史の闇のなかに置いておいたほうがよかったのだろうか。だが、私は、事実を知りたいという欲望を抑えることができなかった。事実を追求していったら、こういう結果になったというよりほかない。

稲岡勝、Manying IP、笈文生、黎活仁、杉村邦彦、汪家熔、張人鳳、中村哲夫、故中村忠行各氏から資料を提供していただきました。昔のことで資料を提供したことをお忘れになった方もいらっしゃるかもしれませんが。しかし、その時々資料は、私にとっての大いなる援助でありました。感謝いたします。

2000年4月19日

樽本照雄

増補版あとがき

本書は初版『初期商務印書館研究』（清末小説研究会2000.9.9）を増補したものである。

「増補版」という理由は、主としてみつがある。

1 『華英初階』、2 『絵図文学初階』、3 『最新国文教科書』について書き足したことによる。

1は上海図書館で閲覧する機会があった。商務印書館が印刷請け負いから教科書出版に進出する契機となった出版物だ。

2は日本の書店から、3は上海の書店を通じて原物を複数冊購入した。実物を見ることによってその詳細を書くことが可能になったのである。

3種ともに日本の公共図書館では見つけることができなかつただけに、読むことができたときは率直に喜んだものだ。

写真、図についていうと、初版のものに加えて、さらに、夏瑞芳と商務印書館関係の写真をスタッフォード（Francis Eugene Stafford）の撮影したものからいくつかを引用した。また、鮑3兄弟の写真を見つけたのでこれも追加している。

附録として商務印書館理事会報告書を収録したのは、研究に不可欠だと判断したからだ。また、年表を新しく作成し、論文を1本つけくわえた。商務印書館『最新国文教科書』第1冊の本文を収めている。

全体にわたって文章を点検した。誤植を正して語句の一部を書き換えている。文献一覧、索引も作り直した。

私は、商務版「説部叢書」についても論文を公表している。収録しようかどうか迷った。もし、これを取り入れるならば、『繡像小説』の編者問題に関する一

連の論文も無視することができなくなる。

本書は、金港堂と商務印書館の合併問題に焦点をあわせている。「説部叢書」と『繡像小説』に関しては、論文名を文献一覧に採録しておくにとどめた。

2001年12月14日、神戸で開催された辛亥革命90周年国際学術討論会において「辛亥革命前後における商務印書館と金港堂の合併」を報告した（のち、『辛亥革命の多元構造』汲古書院2003所収）。

それまで、資料検討を何度かくりかえしていた。その結論は、金港堂と商務印書館の合併がきわめて良好なものであったということだ。そればかりか、商務印書館にとっては、金港堂よりも圧倒的に有利な合併事業であったことを、あるがままにのべた。本書にもその主旨を取り入れていることを記しておく。

その後の研究について簡単に触れておきたい。

中国において、商務印書館と金港堂の合併に言及する論文、著作が増えてきている。従来の無視という状況からは、その意味において少しは前進したということができよう。

しかし、本書のなかで指摘しておいた誤解が、中国ではあいかわらず信じられているといわざるをえない。

すなわち、金港堂が教科書疑獄事件でつまづき、活路を求めて中国に進出し商務印書館と合併をした、という例の伝説だ。かりに「金港堂中国進出物語」と称しておく。

初版においても、それがありえないことだと事実をあげて説明しておいた。

だが、中国の研究者は、よほどこの「物語」が好きらしく思われる。少なくない文章が、根拠のない作り話を疑うことなく、くりかえし述べているからだ。

多くの著者が、中国語で書かれた文献だけを読んで、簡単に信じこんでしまっているのには、いささか驚く。事実を無視しているからありえない物語だ、といくら私が主張しても聞く耳を持たない。

「金港堂中国進出物語」を採用しているか否か。私は、ここに研究と創作の分岐点があると見る。

「金港堂中国進出物語」をのべる文章は、そのほかの部分がいかに詳細に書かれていようとも、信用するにたりない。研究論文としては、無視してもかまわな

い。いかに文献を読みこなし、学術論文の装いをしていようと。自分で資料を検討する能力がないことを自らが認めているにほかならない。

重要な箇所において、根拠のない架空の物語を信じる「研究者」の論文は、それだけの意味しかないと言断言をしてもいい。

初版刊行後1年以上が経過した2001年、北京のある出版社 商務印書館から漢訳して出版したいと申し込みがあった。

仲介者（汪家熔）の手紙によると、学術出版はむつかしくなっており、印税は出ないという。

学術出版が困難であることは、日本でも同じだ。中国の研究者に私の研究成果を知ってもらおうほうが、初期商務印書館について存在する誤解をとくためには有効だと考えた。例の「金港堂中国進出物語」も、当然、その誤解のなかに含まれる。研究のお役に立てばよい、と思った。

私が提示した条件は、本文を勝手に書き直したり省略しないこと、図版をそのまま収録すること、索引を作り直すこと、一部に原稿を追加すること、印税のかわりに著者分として50冊を贈呈希望先に郵送することだった。仲介者の言葉によれば、いずれも出版社の了承が得られたという。

本文の誤りを訂正し、文献一覧を作り直した。追加したのは、初版発行後に書いた2本の論文である。『華英初階』と最近の商務印書館研究を評論した文章だ。出版の許可を与える「授権書」を同封して仲介者へ送付した。その後、漢訳版のために書いた「前言」および贈呈先一覧表も送る。

だが、「出版契約書」は、それ以後、送られてこなかった。

漢訳には時間がかかる。普通、出版契約書には発行時期を明記する。原稿引き渡しから5カ月以内に出版するなどという契約ならば、しばられることになる。それを嫌ったものだろう。善意に推測すれば、そうなる。

というわけで、出版契約を結ぶまでにはいたっていない。

私は半信半疑だった。中国において、はたして本書の漢訳出版が実現されるかどうか疑問に感じたのが正直なところだ。

学術出版がむつかしい、という理由ではない。

同じころ済南の齊魯書社から出版の申し込みのあった『新編増補清末民初小説

目録』は、出版契約書をかわして契約通り期日内に発行されている（のちに重版となった）。

問題は、本書の内容なのだ。商務印書館にとって耳に快い記述ばかりではない、それを中国の出版社が発行するだろうか。これが私の懸念した大きな理由である。

その後、現在にいたるまで出版契約書は、送られてきていない。

本書の内容ゆえに出版社上層部の最終許可が出ないのではないか、と想像した。予想されたことだし、計画が実現しないことなど出版界にはよくあることだ。私と出版社とのあいだに立った人は、本書の内容を知らずに出版を仲介したのかと考えたりする。

中国の研究者にはお気の毒であった。その機が熟していなかっただけだろう。

2003年1月、出版状況に詳しい中国の研究者が、その出版社はかならず出版するはずだ、と私にむかっていう。ここでも私は、半ば疑っている。

2003年6月、上海で刊行されている『近代文学研究・捨枠』第5号に『初期商務印書館研究』の漢訳について消息が掲載された。もうすぐ出版されるという。編集者からの連絡によると、同年3月にその出版社の関係者から聞いたらしい。しかし、出版社から、私には状況を知らせる連絡はいっさい、ない。そういうやり方ようだ。出版契約書なしに出版するとは思えない。

以上の経過を紹介して、私が不満を感じているとか怒っているわけでは、決してない。誤解のないように願いたい。そういう事実があった、という記録の意味しかない。

そうこうしているうちに、増補版を発行するはこびとなった。

本書が最新版なのである。

本書は、中国の出版社に渡した原稿と基本的な部分において変更は、ない。しかし、大幅に増補している本書に比較すれば、初版は、すでに内容が古くなってしまったといわざるをえない。残念な結果となった。

初版について、いくつか記しておく。

ある人から、収録した上海地図についてお叱りの言葉をいただいた。

本文中に地図番号を書いているが、それに対応した地図がない、という。

私の説明が足りなかったらしい。

地図につけた番号は、地図そのものの番号ではない。商務印書館の所在地、発行所、印刷所、編訳所などを示すものである。本文の説明と関連させて、移動している順番に地図のうえにその場所を示した。その番号だ。

誤解をさけるために、地図は全体だけの1枚にして折り畳むことも考えた。しかし、説明文の近くに関連部分の地図を配置した方が読みやすいと判断して、初版のままにしておく。

ある人から、「文学研究者の商務印書館研究」だといわれた。合併会社というのが、その定義を中国の当時の法律に照らして行なっていない、ということを含んでいるのだろう。

歴史の専門家が日中合併時期の商務印書館を研究しているのであれば、その著書が一番読みたいと思っているのは、私の方なのだ。

しかし、それが、ない。だからこそ、私が調査した。また、歴史研究者であれば、書かないだろうと考える部分もある。第4章の精神分析は、彼らはやるはずがない。逆にいえば、私だからこそ、あえて記述したということでもある。

ある人から、「国民統合の教科書問題」について掘り下げるべきではないか、との示唆を受けた。商務印書館が教科書を発行しているところから出てくる視点だ。考えてみたが、本書で扱うには大きすぎる問題である。中国で、当時、発行されていた教科書を収集するだけでも大きな困難がある。資料的にも不足している。今のところ見送らざるをえない。

2003年、初版を大阪外国語大学へ提出し博士号（言語文化学）を取得した。

初版について、渡辺浩司氏より誤植の指摘を受けた。多謝。また、複数の人からご意見をいただいた。増補するにあたり、できるだけ反映するようつとめた。いちいちお名前をあげませんが、感謝いたします。

2004年1月

樽本照雄

増補版あとがき 2

本書は『初期商務印書館研究（増補版）』（清末小説研究会2004.5.1）を電字版に形を改めたものである。

誤植を直しただけで、内容は基本的には増補版のままだ。

文献一覧にも手を加えなかった。刊行以後の論文、単行本は追加していない。本文につけた引用文献と完全に連動しているためだ。

索引は削除することも考えた。本電字版は全文検索が可能であるからだ。機械的な検索可能は、本書の特色のひとつだと思う。しかし、渡辺浩司氏から誤りについてご指摘をいただいている。これには索引部分が含まれる。感謝の気持ちを表わすために残すことにした。ただし、ご注意いただきたい。本文を訂正したのでページ数があわない部分もでてきた。検索機能を使ってほしい。

増補版を刊行してからすでに12年が経過した。本書についての反応をふりかえると以下のものがある。

松村茂樹「【書評】樽本照雄『初期商務印書館研究増補版』読後私感」『中国近現代文化研究』第7号 2004.12.25

また、松村氏は長尾雨山関係論文（2014）において言及された。まことにありがたいことだった。

次の箇所が目に入った。並木頼寿「民国初期の教科書問題」から引用する。

清朝の末期から民国の初期には、明治維新に始まる日本の近代化の事例が、中国にとっても成功した前例としてとらえられることが多く、さまざまな分野で日本の経験を導入する動きがあった。たとえば、中国近代の代表的な出

版社であった上海の商務印書館は、清末の学校制度導入の動きにあわせて教科書出版を本格的に展開したが、初期の『最新国文教科書』シリーズを刊行するにあたって、自社の発行した中国最初期の総合雑誌である『東方雑誌』の創刊号に広告を載せ、日本の教育専門家がその教科書の編集に参加したことを強調した。この間の事情は、樽本照雄氏の『初期商務印書館研究 増補版』（清末小説研究会、二〇〇四年発行）に詳しい。（『中国の歴史月報』第10号2005.9.22。1-2頁）

歴史学者から注目してもらったのだから充分にありがたい。

研究者の誰も興味をいだかない分野らしい、と考えたのは私の早合点だったかもしれない。

本書はごく少数部数を印刷しただけだ。気がつくとも在庫がなくなっている。

電字版で無料公表するに際し、気になっていた誤植を直すことができた。今後求められた時、ファイルのあり場所を示すだけでよい。

ウェブ上に公開するから興味を持つ人にはお役に立つかもしれない。

2016年4月

樽本照雄

索引

現代中国音順 日本語も中国語で読む

引用文献[]内は採らない

文献一覧は対象外とする

A

阿英 290
愛国女校 216,296
愛国学社 110,216,242,
317
艾墨樵 193
アメリカ北長老会 40
アメリカン・ボード 38
AMERICAN PRESBYTERIAN
MISSION 40
AMERICAN PRESBYTERIAN
MISSION,NORTH 15
AMERICAN PRESBYTERIAN
MISSION PRESS 42
AMHERST COLLEGE 37
アーモスト大学 37
庵地保 118
安住 136,142
岸田吟香 161
ANDOVER THEOLOGICAL
SEMINARY 37
アンドーヴァー神学校
37,38
アジア問題講座 165
アトム出版社 63

B

巴金 520
百家姓 223,234
百年“商務”話滄桑 447
柏田盛文 137
坂本嘉治馬 161
阪上半七 133,161
包天笑 92
宝興不動産会社 311
鮑 84,87,164,208,527
鮑華浦 20
鮑咸昌 16-21,23,40,41,
43,61,81,181,193,202,
319,336,357,359,461,
471,472
鮑咸恩 16-23,27,40,41,
43,61,81,100,181,193,
202,305,319,327,335,
336,461,471
鮑咸亨 17,20,21,23,40,
193,472
鮑懿 21
鮑鈺 16,20,21
鮑哲才 16,17,20-22,319
鮑哲華 20,21

報知新聞 134,135
北華捷報 15
北京帝国日報 317
北京法政学堂 317
北垣宗治 36,39
本多浅治郎 231
本館創業史 20,438
本館四十年大事記 179,
395,440
本国地理 320
本庄太一郎 140
編輯学刊 446
博文館 113,432
博文堂合資会社 259
不可思議之中国教育会
317

C

財政叢書 232
蔡爾康 290
蔡元培 29,88,89,92,107,
110,206,207,216,242,
243,255,258,271,316,
317
蔡元培伝 110
蔡忠烈 272

- 滄海橫流 方顯英雄本色
 443
 艸聖堂 122
 冊府 150
 柴田 209,475
 昌明公司 318,320
 昌言報 28,29,79,208,472
 長老会 15,20,42
 長老会清心堂南市小学 15
 長老会清心学堂 16,17
 長尾 130
 長尾柏四郎勝貞 122,130
 長尾甲 122,259
 長尾雨山 4,62,122-131,
 137,138,140-146,150,
 151,152,154-159,166,
 176-178,194,195,210,
 212,215,244,245,253-
 255,257-259,266-273,
 307,319,354,360,386-
 391,407,412,428,429,
 436,445,446,449,450,
 453,464,469,472,474,
 477,520,521,523,526
 長尾照 158
 長尾禎太郎 4,69,120-122,
 126,128,131,137,139,
 140,143,148,149,151,
 176,198,212,213,217,
 221,223,225,236,244,
 248,255,262,272,285,
 370,371,389,407,428,
 442,448,464,474
 長尾正和 122,150-154,
 157,254,386
 長尾子生 122
 長澤規矩也 165
 長洲 369
 潮 136
 陳從周 24
 陳範 242
 陳理耕 181
 陳夢熊 448
 陳其美 384,385
 陳叔通 23
 陳協恭 320,332,334,337,
 338
 陳莘庚 289
 陳学恩 21
 陳逸卿 309
 陳逸卿事件 309
 陳寅 337,338,339,436
 陳作霖 286-288
 池部活三 136,138,140-
 142,145,148
 CHILDREN'S ENCYCLO-
 PAEDIA 211
 CHINESE CHRISTIAN
 REVIEW 40
 崇新書院 20
 重修上海景城廂租界地理
 全圖 41,102
 出版ニュース社 432
 出版史料 243,255
 初期の商務印書館 166
 初期商務印書館年表 471
 初期商務印書館の精神分
 析 395-414
 初期商務印書館研究 463,
 469,527,530
 楚報 318
 楚辭講義 258
 川島 136
 川義直衛 147
 川淵 136,148
 伝記 232
 船政学堂 60
 創業十年新廠落成紀念冊
 199,200,202,395
 創元社 165
 春吉 130
 春樂 130
 春申君 256
 春陽堂 113,432,433
 クラーク 15
 CLARK, J. D. 15
 COMMERCIAL PREDD DE
 SHANGHAI/LA 468
 COMMERCIAL PRESS 96
 COMMERCIAL PRESS/THE
 29
 COMMERCIAL PRESS BOOK
 DEPOT/THE 29
 從翰林到出版家 459,463
 從印刷作坊到出版重鎮
 463
 村上八太郎 147
 村上幹当 136
 村田 209,475
 村田勤 35
 D
 大阪福音社 35
 大阪經大論集 523
 大阪經濟大学教養部紀要
 470
 大阪毎日新聞 432
 大阪外国語大学 531
 大阪朝日新聞 138,146,
 151,389
 大變動時代の建設者 43,

- 463
大成 406
大川ひろみ 407, 446
大純紗廠 175
大村表郷 63
大東書局 434
大豊 173
大谷藤治郎 304
大橋新太郎 165
大日本教育会 117, 118, 161
大上海 165
大上海社 165
大生紡績工場 274
大索書林 148, 149
大隈重信 165
大野茂雄 209, 474
戴克敦 320, 321, 323, 324, 332, 334, 337-339, 345, 347, 475, 477
戴懋哉 324, 337-339
戴仁 468
DAVIS, J. D. 35
丹羽義次 369, 371
稲岡勝 79, 119, 120, 363, 469, 523, 526
デイヴィス 38, 40
デイヴィス, J. D. 36
デイヴィス、ジェローム・ディーン 35
デビス、ゼ、デ、 35
デビス、ゼー、デー 35
徳富蘇峰 38
徳富猪一郎 38
鄧雲郷 447
狄葆賢 286-288
狄楚卿 286
狄楚青 286
帝国博物館 117
帝国叢書 232
帝国大学文科大学 121
帝国書籍株式会社 137, 139
地理叢書 232
第五高等学校 121-123, 151, 472
点石斎画報 291
点石斎石印書局 291
電報学堂 60
丁維藩 287, 288
東爾 450, 525
東方図書館 406, 465
東方雜誌 68, 178, 179, 198, 213-216, 230, 248, 257, 262, 268, 284, 296, 304, 377, 466, 467, 474
東京大学 151, 388
東京帝国大学 123, 254
東京帝国大学文科大学 122, 127, 472
東京高等師範学校 4, 116, 122, 123, 139, 143, 151, 152, 254, 388, 429, 472
東京高等師範学校沿革略史 116
東京教育大学 116
東京教育大学百年史 117
東京教育会 118, 161
東京経済雑誌 165
東京美術学校 122, 123, 127, 151
東京人類学会 117
東京日日新聞 168, 432
東京三井集会所 175
東京商工会議所 159
東京師範学校 116, 117
東京書籍出版営業組合 118
東京文理大学 116
東京朝日新聞 142, 143
東南大学 216
東洋文化 130
洞庭山人 276
DOSHISHA COLLEGE 41
DRÈGE, JEAN-PIERRE 468
都の花 113, 117, 119, 120, 432
読本 63, 262
読売新聞社 432
読書法 231
渡辺 143
渡辺浩司 468, 531
渡辺政吉 118
杜亜泉 32, 69, 70, 73, 76-78, 88, 215, 234, 235, 239, 258, 271, 370, 474
杜綜大 215, 215
对客問 257
- E
- ENGLISH AND CHINESE PRIMER 45, 48
ENGLISH AND CHINESE READERS 45, 59
ENGLISH PRIMER 51, 59
ENGLISH READERS 59
児童百科全書 211
20世紀初的中国印象 299
二葉亭四迷 119

F

幡生弾治郎 170,180
 樊荼 286-288
 范師母 33,35,41,472
 范約翰 15
 范約翰師母 41
 ファーナム 40
 ファーナム夫人 35,40
 FARNHAM, J. M. /MRS.
 35,41
 ファーナム、ジョン 15
 FARNHAM,JOHN MARSHALL
 WILLOUGHBY 15,40
 非常股東大会董事会報告
 365,399,417
 豊室 209,475
 奉献の百年 光栄の百年
 435
 福爾摩斯再生後探案 216
 福富孝季 116
 福間甲松 354,361,362,
 365,373,429,430,477
 福井 136
 福音社 36
 浮雲 119
 副島 130
 副島蒼海 150
 副島種臣 150
 富山房 63,133,137
 傅增湘 325
 傅子濂 275

G

甘恵徳 215
 岡本監輔 33,473
 岡倉天心 123,150
 綱鑑易知録 231
 岡野 209
 高等師範学校 115,116,
 118,120-122,137,148,
 151,177,371
 高鳳池(翰卿)20,23,40,
 310,471
 高鳳崗 193
 高鳳岐(嘯桐)273,476
 高鳳謙(夢旦)121,178,
 212,213,215,236,242,
 248,249,345,419,420,
 474
 高翰卿(鳳池)16,17,19,
 20-24,40,41,43,59,61,
 78,80,81,83-85,89,101,
 110,187,189,190,192,
 193,195,196,202,305,
 307,327,335,336,384,
 399,403,404,405,406,
 408-411,438-440,443,
 448,458,462,463,471
 高津鍬三郎 144,145
 高君隱 319
 高夢旦(鳳謙)88,193,
 212,217,242,244,255,
 258,271-273,296,305,
 306,318-320,326-328,
 330-332,335,336,370,
 382,383,389,474,476
 高楠順次郎 162
 高橋 311,312
 高橋敏太郎 171,172
 高辻 173
 高嘯桐(鳳岐)306,476
 革命軍 242,317
 格致新報 28,29,472
 耕南 130
 ゴール、ベンジャミン
 168
 ゴム投機 309-316,379,
 429,430,447,456,458,
 466
 ゴム株投機 409
 宮島大八 161
 公信 173
 共和国教科書 345,347-
 350,352
 共立学校 168
 溝部惟幾 137
 溝淵 136
 古典文学出版社 290
 古今詩變 258
 古詩源講義 259
 顧庚吾 370
 栝園 122
 関税率審議会 159
 光華大学 216
 広方言館 60
 広瀬安七 35
 広学会 41
 亀清第一楼 129
 亀山節宇 130
 郭秉文 21
 国府新作 116
 国光社 133,136,137,147
 国華 123

国華社 128,129
 国立教育研究所 132
 国史初級教科書 231
 国鉄諮問委員会 159
 国聞報 113
 国語読本 62,63,65,262

H

海藏 124
 海藏楼 124,271
 海藏楼日記 125
 海後宗臣 65
 涵芬楼 442
 漢磚齋 122
 HARDY, ALPHEUS 37
 ハーディー、アルフュー
 ス 37
 河北教育出版社 451
 何桂笙 290,292
 河瀬長定 33
 河内丸 151,177,271
 和田博文 520
 和田鏞太郎 209,475
 和文漢訳読本 63,68,69,
 76,230,232,234,238,239,
 240,262,270,473
 何遠楼 122
 何遠楼詩文集 258
 賀阿毛 381
 鶴居日記 237
 賀麟 32
 賀聖羸 209,304
 黒木安雄 130
 黒木欽堂 130
 横村 136

HIDDEN CHAPTER IN EARLY
 SINO-JAPANESE CO-
 OPERATION/A 454

洪冠生 110
 弘文堂 432
 洪韻松 131
 胡漢民 358
 胡煥 286,287,288
 胡君復 370
 胡琪 286-288
 胡適 464
 胡学愚 441
 胡有慶 380,381
 胡愈之 441
 華工禁約 275
 華花聖経書房 42
 華英初階 28,29,32,45-48,
 51,52,55,58,67,69,70,
 163,230-234,238,239,
 472,527,529
 華英地理問答 29,473
 華英国学文編 231
 華英校書房 42
 華英進階 28,29,32,45-47,
 70,230,231
 華英文件指南 231
 華英亞洲課本 231
 華英字典 29,58
 画図新報 41
 華吟水 27
 寰宇瑣記 290
 荒正人 121
 黄継曾 286-288
 黄潤之 170
 黄協墳 292
 黄英 215
 黄元吉 475
 絵入自由新聞 168

会審公堂 296
 会審公廨 296
 絵図文学初階 69,70,73,
 75-78,230,232-235,238,
 239,474,527
 彙文堂 150

I

INQUIRY INTO THE
 NATUR AND CAUSES
 OF THE WEALTH OF
 NATIONS/AN 32
 IP, MANYING 454,459,
 526
 イプ、マンイング 22,194,
 195,310,315,407,444

J

集成報 32,473
 集成報館 32
 集成図書公司 291,293
 集成図書局 291
 吉川幸次郎 124,126,127,
 156,254
 汲古書院 528
 吉田 209,475
 吉田健三 168
 吉田茂 168
 吉田弥平 116
 集英堂 113,133,136,138
 -148,195,432,445
 記録百年商務の光輝足迹

- 470
暨南大学 216
繼往開來 再創輝煌 436
嘉納治五郎 116
加藤駒二 118, 121, 136,
137, 139, 149, 159, 163,
164, 166, 177, 178, 186,
191-195, 203, 210, 236,
244, 307, 372, 387, 405,
407, 410, 412, 428, 429,
436, 442, 445, 446, 450,
456, 458, 474
簡明修身教科書 347
簡明修身教科書教授法 347
笈文生 526
檢証：商務印書館・金港
堂の合弁 472
檢証：商務印書館・金港
堂の合弁（三） 62
江漢書屋 304
江紅蕉 371
江馬天江 130
江南水師学堂 58
江南製造局 216
江蘇教育会 276
江蘇教育廳 216
江蘇捲煙稅處 216
江西教育廳 216
講談社 65, 432
蔣維喬 62, 88, 121, 192,
212, 213, 216, 217, 220,
235-237, 242-245, 249,
255-258, 268, 271, 296,
319, 326, 328-330, 332,
334, 370, 389, 419, 420,
442, 474
蔣維喬日記 212, 216, 217,
225, 237, 238, 243, 245,
255, 294, 296, 307, 329,
330, 334
蔣維喬日記選 255
蔣維喬日記摘錄 216, 255
蔣芷湘 290, 292
角田秋成 209, 475
教科書疑獄事件 4, 99, 122,
124, 131-150, 163, 177,
190, 191, 194, 195, 203,
270-272, 388, 407, 428,
429, 445, 446, 449, 450,
452, 453, 455, 456, 459,
462, 464, 466, 468, 469,
474, 521, 528
教科書之發行概況 121
教育部 348-350, 352
教育界 178
教育雜誌 210, 211, 216,
319, 324, 336-338, 476
捷報 15
捷報館 15, 16, 20, 22
解放以前商務印書館歷屆
負責人 125, 254
金港堂中国進出物語 528,
529
金港堂 3-5, 14, 62, 69, 77,
86, 92, 99, 101, 106, 107,
110, 113-181, 185-191,
193-196, 198-201, 203-210,
212, 215, 217, 221, 226,
244, 267, 269, 274, 277,
278-280, 286, 296, 305,
306, 316, 317, 319, 320,
323, 325, 354, 356-363,
365-370, 372, 373, 375,
379, 380, 385, 387, 390,
391, 395-404, 407-414,
426-430, 432, 434-458,
460, 463-469, 471-474,
477, 520-523, 525, 526,
528
金港堂の海外投資 165
金港堂・商務印書館・繡
像小説 449, 454, 523
金港堂書籍株式会社 198,
208
金鑊菘 370
金紹城 287, 288
金尾稜巖 137
錦章 352
近代日中出版社交流の謎
520
近代上海大事記 258
近代文学研究・拾稗 530
近代支那の図書及図書館
165
近現代上海出版業印象記
288, 341
近現代中国出版大事年表
452
経団連 159
警醒社 35, 36
敬告民国教育総長 336,
338
- K
- 開国五十年史附録 165
開明書店 434
開平炭鋸 168
かなのまなび 117
かなのしるべ 117
かなのさつし 117
康有為 60, 292

科南達利 180
堀均一 118
堀田梅太郎 138
鄭富灼 29

L

賴朝丸 168
賴山陽 127
勞祖德 125
老殘遊記 286,519
黎活仁 526
黎庶昌 128,156
李拔可 273,383,389
李伯元 215,216,460,461,
467,475
理財學課本 232
里差遜 131
李公使 126
李恒春 193
李鴻章 60,124
李厚祐 286-288
李經方 124
李鉄映 435
李鉄映同志的賀信 435
李桐実 468
礼之 150
李鍾珪 286-288
礪川小学校 168
利見合名会社 369,371
歴史叢書 232
連 278
連夢青 286
連文激 286-288
梁啓超 60,148,292,433,
434

LIFE AND TIMES OF
ZHANG YUANJI/THE
459

林爾蔚 369
林茂 19,43
鄰女語 286
林欽次 114
林琴南 370
林紓 32
林泰輔 123
林太三郎 165
林熙 406
林訳小説叢書 122,216
鈴木豹軒 123
鈴木博雄 117
鈴木島吉 369,371
劉崇傑 121,236
劉樹屏 285,287
劉鉄雲 286,519
劉子楷 370
柳和城 448,451
柳原善兵衛 163
六三園 389
瀧川龜太郎 123
LOWRIE INSTITUTE 15,
40
蘆中亭 122
魯迅 520
陸爾奎 273,475
陸費伯鴻 318,324,327,
328,330,333,338,339,
476
陸費達 121,210,268,317
-326,328-339,341,344,
347,348,429,476,477
陸費達年譜 337
陸軍學堂 60
露清銀行 170-172,180

呂塞爾 32
倫理學大意講義 320
論小説与群治之關係 433
羅品潔 99
羅振玉 259,317,370
駱師曾 475

M

馬建忠 33,472
馬君武 21
馬良 285,287,288
馬氏文通 33,472
馬越恭平 168
マチロップ 290
MACHILLOP, JOHN 290
毎日新聞 432
毎日新聞社 432
メイジャー 290,291
MAJOR BROS.LTD 291
MAJOR, ERNEST 289
メイジャー、アーネスト
289
MAJOR, FREDERICK 289
メイジャー、フレデリッ
ク 289
滿鉄 167
漫談商務印書館 276,288,
321,369
茅盾 211,212
茂和洋行 309
MARUYA, Z. P. 35
美查股份有限公司 291
美查兄弟有限公司 291,
292,293
美国北長老会 15

美華書館 14, 16, 20, 21, 23,
41-43, 61, 81, 89, 202, 404,
433, 466, 472
蒙小学教科書 243, 245
蒙学読本 224, 224
孟森 273
米国海外伝道協会 38
秘密海島 216
ミル 32
MILL, JOHN STUART 32
民報 290
民国普通学制議 336, 338
民立図書公司 358
名塩佐助 161
木本勝太郎 370, 371, 387
木村今朝男 209, 476
木村毅 132
穆勒、約翰 33
牧野 131
牧野静斎 130

N

南京教育部 216
南京政府教育部 216
南洋公学 60, 84, 89, 92,
178, 224, 448
南洋公学訳書院 32, 87,
180, 387, 447
南岳 130
南宗衣鉢跋尾 259
NEESIMA 34, 36, 37
内山清 165
内山完造 520
内藤湖南 123, 176, 177,
389

能勢栄 118
能田婉子 158
倪靖武 192, 193
尼虚曼 37
尼虚曼先生伝 35
尼虚曼伝 33, 34, 41, 472
農工商部 208, 413
農話 231
農商部 379
農商務省 168
NORTH CHINA DAILY
NEWS 15
NORTH CHINA HERALD
15

O

ON LIBERTY 32
欧宏 443

P

PHILLIPS ACADEMY 37
フィリップス・アカデミ
ー 37
驃騎父子 180
平等閣主 286
坪内逍遙 62, 63, 76, 122,
233, 239, 267
坪内雄蔵 62, 232, 233, 262,
285, 473
ポット 309
プライアー 289, 290
PRYER, W. B. 289

普及舎 113, 117, 133, 136,
139, 148, 432
普来亜 289
普通新歴史 231
普通学問答書 232
普通珠算課本 231

Q

齊魯書社 529
棋盤街又出暗殺案 382,
465
千葉県師範学校 117
謙余銭荘 309
千字文 176, 223, 234, 269
銭炳寰 338
前川 142
前川一郎 136
前島密 114
銭実甫 128
浅田 130
前田乙吉 209, 474
銭昕伯 290, 292
銭業公所 102
銭業会館 102
銭荘会館 102
欽定京師大学堂章程 224
欽定学堂章程 78, 224, 234
欽堂黒木君墓銘 130
清国に於ける出版事業
165
清国に於ける金港堂の事
業 178
清国向の書籍出版概況及
東亜公司設立情況 164
清季新設職官年表 128

青柳篤恒 165
 清末民初小説目録 524
 清末民初作家の原稿料
 387
 清末四十年申報史料 289
 清末小説 246,472
 清末小説から 355,460
 清末小説論集 387,520
 清末小説閑談 520
 清末小説研究 523
 清末小説研究会 527
 清史攬要 231
 清心書院 15,40
 清心堂 20,40
 清心学堂 20,22
 清議報 433
 慶応義塾 117
 秋樵 131
 瓊鑫圭 348
 全国教育会 317
 勸学会 161
 群己權界論 32,33
 群学肄言 33

R

仁済医院 381,383
 任真漢 241,249
 日本放送協会 63
 日本化薬製造会社 159
 日本近代教育百年史 132
 日本近代文学大事典 432
 日本近世豪傑小史 232
 日本立憲政党新聞 432
 日本の出版社1998 432
 日本史学提要 117

日本書発売広告 198,208
 日本図書館協会 166
 日本文化の支那への影響
 166
 日本銀行 118
 日華学堂 162,163,472
 日華学堂日誌 162
 日輝呢廠 273,274
 日露戦争記 176
 日文読本 262,270,285
 日新盛 181
 日支合弁事業と其経営者
 205
 日知会 318
 日中合弁 185-391
 リチャードソン 131
 リチャードソン夫人 131
 リビングトン 15
 RIVINGTON, C. 15
 ロバートソン、ホラチオ
 172,180
 儒学本論 128,258
 ラッセル 32
 RUSSELL, H. C. 32

S

三等公学堂 224
 三井 167
 三井物産 158,159,167-
 171,173,181,371,401
 三井物産上海支店 86,106,
 169,170,173,174,180,
 187,189,315,429,471,
 473
 三井洋行 187,188,311,

312,314,315,438,444,
 445
 三聯書店 24
 三品福三郎 209,475
 三十五年来之商務印書館
 304,458
 三十五年来中国之印刷術
 209
 三泰紡織会社 175
 三泰紗廠 175
 三省堂 432
 三宅米吉 115-118,120
 三宅栄充 117
 三字経 223,234
 掃葉山房 433
 渋沢栄一 161
 SEIKOKAN 35,40
 森房澄江 147
 森有礼 115
 沙頌 63,232,473
 杉本 136
 山本八重 38
 山本操子 177,181
 山本覚馬 38
 山本みつ 168
 山本条太郎 86,101,106,
 107,158,159,167-181,
 186-193,203-205,207,
 269,310-313,315,316,
 361,363,371,372,380,
 401,405,409,410,428,
 429,438,443,444,445,
 447,450,454,456-458,
 471-474
 山本条太郎(書名) 174
 山本条太郎伝記 167,174,
 176
 山本条悦 168

- 山城丸 389
- 杉村邦彦 158, 523, 526
- 山口俊太郎 369, 371
- 山田美妙 119
- 山田修作 165
- 山田禎三郎 136
- 山田準一 161
- 善隣書院 161
- 商辦本溪湖煤鉄有限公司
205
- 商界第一偉人 286
- 商務的文化与文化的商務
470
- 商務書館 63, 232
- 商務書館華英音韻字典集
成 230
- 商務書館華英字典 29, 30,
43, 61, 227, 230, 472
- 商務五十年 396, 397, 440,
441
- 商務印書館 3-5, 13-110,
113, 119, 120-125, 146,
149, 150, 152-154, 158-
160, 163-165, 167, 169,
175-181, 185, 187-191,
193-196, 198-213, 216,
217, 221-223, 226, 227,
230-235, 241-245, 248,
249, 251, 252, 254-258,
262, 267-280, 282-286,
293, 294, 298-301, 304-
308, 310-312, 314-326,
328-341, 344, 345, 347-
350, 352-358, 360-368,
370-375, 377, 379, 380,
382-387, 390, 391, 395,
396, 398-414, 419, 426,
427, 429-455, 457-467,
469-471, 473, 476, 477,
519-531
- 商務印書館百年大事記 28,
236, 398, 442
- 商務印書館創立の經過 43
- 商務印書館創業百年隨想
436
- 商務印書館創業諸君 369
- 商務印書館大事記 28, 29,
30, 33, 45, 380, 397, 398,
441, 468
- 商務印書館大事紀要 396,
440, 441
- 商務印書館的經營管理
461, 467
- 商務印書館的早期股東
369
- 商務印書館的《最新初等
小学国文教科書》 237
- 商務印書館館史資料 125,
255, 465, 524, 525
- 商務印書館九十年 99, 276,
441
- 商務印書館九十五年 369,
467
- 商務印書館歷年出版小学
教科書概況 236, 348
- 商務印書館歷年大事紀要
397, 441
- 商務印書館：民間出版業
的興衰 465, 468
- 商務印書館日股投資和獲
利表 307, 374
- 商務印書館日人投資時的
日本股東 370
- 商務印書館史及其他 459
- 商務印書館是最早引進外
資的企業 444
- 商務印書館書目 230
- 商務印書館特別株主大会
理事会報告 185, 355,
365, 377, 399, 463
- 商務印書館と山本条太郎
523
- 商務印書館と夏瑞芳 523
- 商務印書館圖書目錄 28,
212, 215, 236, 270
- 商務印書館一百年 398,
442
- 商務印書館有限公司 298,
303, 398
- 商務印書館与金港堂 406
- 商務印書館与山本条太郎
450, 524
- 商務印書館与新教育年譜
28, 201, 369
- 商務印書館株主特別總會
375
- 商務印書館主權說 439,
452, 458, 459, 462-464,
466
- 商業補習学校 210, 476
- 尚公小学 216, 475
- 尚公小学校 210
- 上海 98
- 上海紡績会社 173
- 上海紡織股份公司 450
- 上海紡織会社 169, 172-
175
- 上海紡織有限公司 170,
172, 180, 207, 474
- 上海古籍出版社 300
- 上海国学專修館 216
- 上海交通大学 60
- 上海教育出版社 348
- 上海近代建築史稿 24

- 上海歷史博物館 299
 上海人民出版社 296
 上海商務印書館1897-1949
 468
 上海商務印書館廣告 196,
 198
 上海商務印書館新書廣告
 230
 上海社会科学院出版社
 289
 上海史 309
 上海市路名大全 296
 上海市棉布商業 181
 上海書局 231
 上海書業商會 318
 上海閘北紗廠 180, 181
 上海指南 102, 296
 上海週報 197, 198
 上田周太郎 35
 上田主計 114
 THE SHANGHAI MERCURY
 15
 少年雜誌 210, 211, 216,
 477
 邵氏危言 32, 33, 472
 邵作舟 32, 33, 472
 申報 93, 95, 96, 148, 149,
 196, 197, 198, 280, 285-
 294, 316-318, 330, 340,
 342, 344, 347, 349, 351,
 356, 375, 376, 382, 450,
 465
 《申報》的興衰 289
 申報館 290, 291
 申昌書局 291
 神崎正助 369, 371
 神田喜一郎 123, 124, 254
 沈伯曾 19
 沈伯芬 16, 19, 22, 23, 43,
 78, 81, 202, 471
 沈朶山 324, 337, 338
 沈恩孚 276
 沈季芳 193, 311, 337, 338
 沈繼方 337, 338
 沈信卿 276
 沈頤 324, 334, 337, 338,
 345, 347, 474, 477
 沈幼珊 88
 沈知方 193, 321, 323, 324,
 332, 334, 337, 341, 477
 沈芝芳 337
 生巧館 35, 40
 聖教書會 41
 聖教序講義 259
 盛宣懷 60, 175-177
 師範講習社 210
 師範學校 116
 施則敬 286-288
 時報 286
 石橋思案 119
 時事新報 139, 140, 143,
 144
 石頌九 296
 さねとう・けいしゅう
 270
 実藤恵秀 79, 166, 208, 457,
 521
 実藤文庫 33, 62, 66
 時務報 318
 実業之日本 205
 石隱 122
 史記会注考証 123
 史家修 289
 世界書局 288, 332, 434
 守山 170
 寿進文 370
 寿孝天 474
 狩野 128
 狩野君山 123
 狩野良知 231
 書業商會補習所 318
 漱石研究年表 121
 水陸師學堂 60
 水師學堂 60
 水野 128, 130
 水野貫龍 126, 129
 水越成章 130
 睡道人 122
 說部叢書 122, 180, 216,
 232, 474, 527, 528
 斯賓塞爾 32, 33
 思齊堂 122
 四溟瑣記 290
 四十年大事記 179
 寺尾捨次郎 135
 SKETCH OF THE LIFE
 OF REV. JOSEPH HARDY
 NEESIMA, L. L. D. /A 35
 SMITH, A. 32
 松岡正誠 209, 475
 松浦政泰 35
 松邑三松堂 161
 宋查理 19, 43
 宋軍 289, 290
 宋耀如 42
 宋原放 452
 スタッフォード 16, 80, 91,
 209, 300-303, 384, 476,
 527
 STAFFORD, FRANCIS
 EUGENE 209, 527
 蘇葆杜 175
 蘇報 242, 317
 蘇報事件 242, 317

蘇東坡 150,253
 蘇浙小觀 304
 速成小学師範講習所 258,
 271,475
 速井清 136
 算術新教科書 320
 孫廷翰 286,287,288
 孫毓修 211

T

台湾商務印書館 28
 台物史 33,472
 泰東同文局 161,162
 太田鶴雄 136
 太陽 432,472
 太夷 124
 談談中華書局的創辦4人
 338
 湯寿潜 273,288
 湯蟄仙 288
 湯蟄先 273
 湯志鈞 258
 唐良炎 348
 唐振常 110
 陶葆霖 273
 陶成章 384
 陶潜 129
 藤川三溪 114
 藤瀬政次郎 369,372
 藤原書店 520
 藤原佐七 136
 藤沢恒 130
 天宝 352
 天地奇異志 32,473
 天津日日新聞 519

天演論 178
 田辺輝浪 188,192,405
 田辺輝雄 192,369,370,
 372
 田淵清市兵衛 143
 田中三四郎 129
 通商産業調査委員会 159
 通藝学堂 60
 同行月刊 438
 同仁医院 15
 同文館 60
 同文滬報 95,96
 同志社 38,39
 同志社大学 34
 同志社校友会 36
 同舟 395,396,438,440
 図画日報 297-299,301
 図書館雑誌 166
 図書月報 164
 退庵日記 192
 託爾斯泰 180
 陀希削大書院 41
 タイポグラフィックス・
 ティ 408

V

ヴェルヌ、ジュール 216

W

外交報 28-30,32,88,92,
 96,101,102,110,180,
 227,228,230,236,473

外交秘事 180
 外交史料館 113,207
 外務省 113,169,277,278
 外務省外交史料館 160
 丸善商社書店 35
 晚清文藝報刊述略 290
 万朝報 134,136
 汪海秋 339
 汪家燊 19-22,32,43,51,
 79,83-85,125,192,193,
 216,218,220,234,254,
 255,311,355,364-366,
 369,370-374,408-412,
 414,449,453,459-465,
 467,469,524,525,526
 汪守本 444-446
 汪濤 339
 汪兆銘 358
 汪鍾霖 286-288
 王耕三 88
 王国維 370
 王建輝 464,465
 王建軍 75,227
 王克三 129
 王慶瑞 384
 王俶田 370
 王益 407,446,447,469
 王雲五 24,28,83,364,369,
 370,443,464,465
 王兆栴 215
 王震 337
 王之仁 193,335,357
 威海雜記 41
 尾崎紅葉 119
 尾崎行雄 117
 尾中満吾 371
 為《繡像小説》給樽本照
 雄的信 460

- 温欽甫 88
 翁学雷 21
 温宗晓 88
 文 117, 120
 文部省 118, 122, 127, 132, 134, 135, 137-140, 143, 144, 145, 147, 151, 152, 221, 472
 文化的商務 464
 文匯報 15
 文匯報館 15, 20
 文明書局 33, 121, 318-320
 文明小史 519
 文明小学校 318
 文新 352
 文学博士三宅米吉先生追悼録 116
 文学初階 絵図文学初階
 文学進階 70, 73
 文学社 113, 133, 137, 432
 文芸界 113, 432
 文芸俱樂部 432
 文字之獄 148
 文昌閣 102
 WIDE WORLD ILLUSTRATED NEWS 290
 我的父親張元濟 448
 ウッドワード 289
 WOODWARD, C. 289
 吳丹初 242, 243
 吳麟書 172, 180
 无悶道人 122
 无悶室 122
 吳相 463, 464
 吳翊庭 273
 吳仲記 173
 吳子敬 385
 武備学堂 60
 伍光建 178, 370
 武進文献社 216
 五十川詔堂 130
 武松 209, 475
 伍廷芳 193, 359, 442
 伍秩庸 359, 442
 X
 奚伯綬 193, 335, 357
 西村 151
 西村旅館 151
 西村天囚 123
 西村貞 118, 161
 西島 130
 西島醇 126, 127
 奚若 216
 西太后 60
 西学探原 473, 33
 西洋歴史教科書 231
 西沢之助 133, 147
 席裕成 286, 287, 288
 席裕福 276, 286-289, 291
 席裕光 286-288
 席子眉 291, 292
 席子佩 275-277, 279, 285, 288, 289, 292-294
 細部順 231
 細川玄三 209, 475
 侠女郎 180
 夏曾佑 178, 271, 473
 夏粹芳 15
 芳 311, 330, 444
 夏光仁 381
 夏君瑞芳事略 442
 夏目漱石 121, 123, 151
 夏清貽 286, 287, 288
 夏瑞芳 4, 15-23, 27, 40, 41, 43, 45, 46, 59-61, 67, 77-79, 81-83, 85-89, 91, 92, 96, 98, 106, 107, 120, 125, 164, 176, 180, 181, 186, 188, 190-193, 196, 202, 208, 209, 226, 242, 243, 255, 273, 275, 276, 280, 294, 305, 306, 308, 310-312, 314, 315, 316, 319, 321, 324-328, 330, 335, 336, 345, 354, 357, 359, 360-362, 365, 372, 373, 379-385, 387, 391, 396, 400-402, 405, 408, 409, 411, 429, 430, 436, 438, 443-445, 447, 448, 453, 456, 458, 461, 465, 466, 471, 476, 477, 523, 527
 下田歌子 161
 現代支那人名鑑 288
 小倉信近 137
 小川菊松 135
 小福 129
 小谷重 77, 136-140, 146-149, 159, 163, 177, 178, 186, 191, 194, 195, 198, 203, 210, 212, 213, 215, 217, 221, 223, 225, 236, 244, 245, 248, 255, 271, 319, 407, 412, 428, 429, 436, 445, 446, 450, 456, 474
 小吉 129
 小林精一郎 136, 139, 140, 147

- 小林義則 133
 小平元 370,371
 篠崎都香佐 369,371
 篠崎医院 371
 小栄 129
 小説林社 216
 小説時報 286
 小説月報 216,477
 筱松 524
 小田切万寿之助 472
 小学読本 122
 小学読本物語 63
 小学館 36
 小学師範講習所 210,216
 小学師範講習班 475
 小学万国地理新編 231
 小野湖山 130
 小野英之助 133
 篠塚半藏 136
 協隆 170
 謝賓賚 21
 謝洪賚 21,28,45,51,193,215
 謝綸輝 286,287,288
 謝元芳 20,21,22
 新保磐次 118,215
 新編初等小学修身教授書 320
 新編増補清末民初小説目録 529
 新潮 432
 新潮社 113,432
 新島襄 34,35,37-39
 新島襄の生涯 36
 新島襄先生之伝 35
 新島襄伝 33,35,36,40,41
 辛亥革命の多元構造 528
 新華出版社 289
 新輯地理問答 232
 新民叢報 433
 新旗昌洋行 309
 新申報 289
 新声社 432
 新説教授学 231
 新聞報 292
 昕夕閑談 290
 新潟学校 117
 新潟英語学校 117
 新小説 433,434
 新小説(日本語) 432,433
 新学界書店 318
 興泰紡績工場 180
 興泰紡績所 173
 興泰紗廠 170,171,180,207,474
 熊尚厚 318,321
 熊希齡 358
 熊月之 452
 修文書館 14,78-80,82,85-87,189,195,209,305,409,428,429,443,453,473
 修文印書館 79,428,79,429,443
 修文印刷局 79,409,428
 修文印刷所 79
 繡像小説 215,216,229-231,236,270,286,296,434,449,454,460,461,467,468,474,475,519,527,528
 徐桂生 16,19,22,43,202,471
 徐雋 215
 徐珂 88
 徐念慈 258,271
 徐瑞芳 289,290
 徐永清 215
 徐載平 289,290
 許敏 452
 宣教師ジョゼフ・ハーデ
 イ・新島名誉法学博士
 の生涯の素描 35
 学部 325
 学生雑誌 210,211,378,398,441
 学習院 122,127,151
 尋常国語読本 140
 尋常小学読本 221
 Y
 押川春浪 180
 亜泉学館 32,73
 亜泉雑誌 32,473
 巖保成 258,271
 岩倉具視 37
 巖復 32,33,193,271,306,317
 巖復的翻訳 32
 岩崎一高 135
 岩屋直次郎 143
 巖信厚 285,287
 延緒山荘 384
 巖又陵 178,204
 言語都市・上海1840-1945
 520
 硯友社 119
 楊徳炎 436,437
 楊揚 465-468
 揚瑜統 212,249,370

- 養真幼稚園 210,476
 姚祖晋 215
 葉丸金山 158
 野中久徹 135
 葉景葵 193,359
 葉宋曼瑛 444,449,450,450,453-459,462-464,466-469
 伊地知虎彦 369,371
 伊藤寿三郎 114
 伊藤賢道 32
 伊藤整 119
 猗々園 122
 伊予丸 177,178,186,456
 伊沢修二 118,161
 夷白齋 122
 訊林 32,473
 益田太郎 369,371,372
 益田夕マ 369-372
 益田孝 172,173
 益田玉 369,370
 藝徒学校 210
 印錫章 170-172,175
 印錫璋 21,22,59,79-82,84-87,93,101,107,179-181,186,188-191,193,305,306,327,335,336,345,357,359,362,369,377,384,405,408,428,429,438,443-445,448,450,453,454,456,473,477
 印有模 18,91,180,180,181,273,310,359,409,444,473,474
 印子華 181
 英国銀行 172
 英文初階 58,59
 英文進階 59
 瀛寰画報 290
 瀛寰瑣記 290
 蛩雪書院 166
 永瀧久吉 277,279
 永田 138
 永田一茂 136,148
 永沢金港堂 113,158
 永沢信義 113,158
 永沢信之助 113
 郵伝部駐滬電報高等学堂 16,17,22
 俞復 224,286-288
 虞和德 287,288
 虞洽卿 383,384
 輿函 232
 于友先 435
 于右任 358
 俞志賢 370
 雨山 長尾雨山
 羽左間 136,148
 預備立憲公会 124,273
 郁厚坤 16,17,19-23,43,202,319,471
 郁厚培 21
 裕晋紗廠 170
 育英社 137
 郁忠恩 20-22,319
 原 119
 原安三郎 158,159,174
 原操子 170,177,472
 原富 32
 原亮三 114
 原亮三郎 86,101,106,107,114,118,120,138,148,159-167,170,176-179,181,186,187,189-195,201-205,207,208,217,244,274,277,306,310-312,315,361,371,372,380,396,398,402,405,407,409,410,428,429,440,444-450,452-458,466,472-474
 原亮三郎君伝 118
 原亮一郎 118,136,137,139,140,148,149,159,163,164,192,193,369,371,372,405,410,458,473
 園山勇 137
 源盛洋貨号 181
 袁世凱 60,384,385
 袁士莊 170
 原田民治 370,371
 原文華英初階 231
 原文華英進階 231
 原文英語文規 231
 原忠右衛門 114
 遠山景直 98,304
 憚祖祁 285,287
 Z
 早稻田大学 158
 早期中日合作中未被揭開的一幕 449,454,462
 造化機新論 231
 沢本郁馬 523,524
 沢柳政太郎 231
 澤田瑞穂 519
 増戸鶴吉 140
 曾孟樸 273
 曾少卿 275,276,286,288

- 增田貢 231
 增田涉文庫 32
 曾鏄 285, 287
 占領地及朝鮮平安道商況
 視察復命書 169
 戰史叢書 232
 張蟾芬 16, 17, 19-23, 41,
 43, 188, 192, 193, 202, 304,
 373, 404, 405, 471, 476
 張桂華 19, 20
 張国功 470
 張繼 358
 張季直 273, 275, 276, 288
 張謇 273, 275-278, 285,
 287, 317, 325
 張景良 215
 張静廬 396
 張菊生 84, 179, 217, 255,
 308, 326, 345, 360, 383
 張菊生先生年譜 237, 448
 張敏 452
 章明 24
 張人鳳 227, 237, 238, 249,
 251, 310, 448, 449, 451,
 454, 459, 526
 張榮華 451
 張樹年 237, 448
 張廷桂 193
 章錫琛 23, 24, 61, 87, 99,
 100, 276, 277, 288, 321,
 322, 324, 477
 張袖海 126, 127, 128, 129
 張元濟 14, 19, 29, 60, 61,
 78, 79, 83-89, 91-93, 96,
 107, 121, 125, 164, 178,
 180, 191-193, 204, 206,
 212, 213, 215, 236, 242,
 244, 248, 254, 258, 271-
 273, 296, 305-317, 319,
 322, 324-333, 335, 357,
 359, 360, 369, 380, 382-
 384, 386, 387, 389, 405,
 411, 419, 420, 429, 436,
 437, 443, 447-450, 454,
 456, 457, 463, 473, 474,
 476, 477, 523
 張元濟年譜 89, 110, 192,
 193, 237, 255, 307, 325,
 448
 張元濟評伝 451
 張元濟日記 19, 20, 193,
 307, 325, 345, 451
 張元濟：書卷人生 449
 張元濟与近代文化 449
 張元濟伝 451
 張肇熊 63, 232, 473
 張之洞 124, 318
 張志強 470
 朝日新聞社 432
 趙從藩 88
 趙京右 407, 446
 兆康錢莊 309
 趙逸如 290, 291
 遮那德自伐後八事 180
 浙江銀行 41
 槇山榮次 231
 正蒙書院 60
 正蒙学堂 318
 鄭蘇戡 124
 鄭蘇龠 124, 129
 鄭孝胥 91, 123-128, 131,
 150, 156, 193, 254, 271-
 274, 305-308, 310, 327,
 335, 354, 357-360, 362,
 366, 370, 373, 382-384,
 386-389, 411, 442, 447,
 476
 鄭孝胥日記 125, 192, 193,
 272, 307, 308, 345, 354,
 357, 359, 361, 363, 388,
 389, 447, 465
 鄭孝胥日記中的出版史料
 125
 政学叢書 232
 鄭逸梅 27, 41, 82, 332, 333
 政友会 167
 正元錢莊 309
 鄭貞文 322-324
 支那教学史略 231
 支那經濟全書 201, 205-
 208, 278, 279
 支那の出版業 165
 支那新書店盛衰記 166
 支那最近史 231
 智民之師・張元濟 448
 中川 136, 148
 中川富太郎 140
 中川九郎 136
 中村哲夫 526
 中村忠行 33, 62, 79, 121,
 124, 150, 186, 472, 521,
 523, 526
 中村猪一郎 136
 中島信行 114
 中根淑 118
 中根香亭 119
 中国出版年鑑 435
 中国出版年鑑社 435
 中国教育会 110, 206, 207,
 216, 242, 317
 中国教育会之内幕 316,
 317, 450
 中国近代教育史資料匯編
 学制演变 348

- 中国近代報刊名録 290
 中国科技圖書公司 109
 中国墾業銀行 24
 中国歷史博物館 125
 中国人日本留学史 270
 中国社会科学出版社 289
 中国聖教書会 33,40,41, 472
 中国書画話 122,253,254
 中国圖書公司 274-280, 283,288,429,450,466
 中国圖書公司和記 294
 中国圖書有限公司 283, 284-288,293,294
 中国圖書有限公司緣起 280
 中国新聞年鑑 289
 中華初等小学修身教科書 341
 中華道人 205-208
 中華讀書報 442
 中華教育界 338,339,345
 中華書局 109,125,128, 268,318,320,322-327, 329-332,334-341,344, 345,347-350,352-354, 356,358,379,412,429, 433,434,466,477
 中華書局宣言書 339
 中華書局一年之回顧 339
 中華圖書館公記 352
 中華小学教科書 323
 中華銀行 384
 中日出版印刷文化的交流 和商務印書館 446
 中日出版印刷文化の交流 と商務印書館 408,446
 中日実業 363
 中日実業株式会社 205
 中西教会報 40,41
 中西学堂 60
 中央公論 165
 中央公論社 432
 中央教育会 322,325
 中英藥房 312
 周晋龢 285,287
 周廷弼 285,287
 周武 449,450,452
 周熊甫 170
 周作人 58
 朱開甲 286-288
 朱聯保 288,291,332,341
 朱佩珍 286-288
 朱鎔基 431
 朱樹人 224
 朱蔚伯 23,24,43,61,83, 84,87,89,92,96,99,100, 110,200,323,324,363, 364,366,369,370,402
 朱元善 210,211
 竹嬾 122,129,130
 主權在我的合資 408,462, 463,467
 築地活版所 429
 築地活版製造所 79
 築地活版製造所出張所修 文書館 79
 筑摩書房 122,253
 莊百俞 474
 莊俞 41,88,121,185-188, 192,193,212,213,215, 235,236,242,249,304, 389,399,403-406,408, 411,419,420,458,459, 462,463,466,474
 資治通鑑 126
 自立軍 286
 字林西報 15
 字林西報館 15,20
 自強学堂 60
 自由論 32
 宗方小太郎 286
 宗像政 137
 鄒容 242,317
 鄒振環 406,407,408,459
 奏定初等小学堂章程 225
 奏定高等小学堂章程 225
 奏定学堂章程 78,224-256, 268
 最近理科教科書 215
 最近三十五年之中国教育 304
 最新初等小学国文教科書 407
 最新初等小学国文教科書 出版 198,213,248,467
 最新初小国文教科書 121, 236
 最新国文教科書 69,70,73, 77,78,210,212,213,215, 226,227,232,233,235- 238,240-242,245-250, 252,271,319,474,527
 最新国文教科書(本文) 419
 最新教科書 324
 最新商業教科書 320
 樽本照雄 449,450,454, 457,459,460,470,523
 佐々部 135
 作新社 161,334
 作新印刷所 334

著者略歴

樽本照雄 (TARUMOTO Teruo)

1948年 広島市生まれ

1972年 大阪外国語大学大学院修士課程修了

現在 大阪経済大学名誉教授 博士(言語文化学)
季刊『清末小説から』を公開中

編著書 『新編増補清末民初小説目録』 済南・齊魯書社2002
『清末小説叢考』 汲古書院2003
『初期商務印書館研究(増補版)』 清末小説研究会2004
『漢訳アラビアン・ナイト論集』 清末小説研究会2006
『清末小説研究集稿』(陳薇監訳) 済南・齊魯書社2006
『漢訳ホームズ論集』 汲古書院2006
『商務印書館研究論集』 清末小説研究会2006
『清末翻訳小説論集』 清末小説研究会2007
『林紆冤罪事件簿』 清末小説研究会2008
『清末小説研究ガイド2008』 清末小説研究会2008
『林紆研究論集』 清末小説研究会2009
『商務印書館研究文献目録』 清末小説研究会2010
『清末民初小説目録 第4版』(CD-ROM) 清末小説研究会2011
『清末民初小説目録 第5版』 ウェブ公開 清末小説研究会2013
『清末民初小説目録 第6版』 ウェブ公開 清末小説研究会2014
『清末民初小説目録X』 ウェブ公開 清末小説研究会2015
『上海のシャーロック・ホームズ ホームズ万国博覧会 中国篇』
国書刊行会2016.1.20

しよきしやうむいんしよかんげんきやう

初期商務印書館研究 増補版

発行 2004年5月1日
電 字 版 2016年5月1日
著 者 兼 樽本照雄
発 行 人
発 行 所 清末小説研究会 〒520-0806
滋賀県大津市打出浜 8 番4-202
樽本照雄方

<http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>

Printed in Japan

非 売 品

【清末小説研究会の本】

樽本照雄編

清末民初小説年表

B5判 上製本 箱入り 660頁 限定150部 定価：20,000円＋税

樽本照雄編

日本清末小説研究文献目録

清末小説研究資料叢書 1 B5判 112頁 限定200部 定価：2,000円＋税

南亭新著 世界繁華報館発行

増注官場現形記

清末小説研究資料叢書 2 B5判 230頁 限定200部 定価：4,000円＋税

樽本照雄編著

樽本照雄著作目録 1

清末小説研究資料叢書 3 B5判 291頁 限定200部 定価：3,000円＋税

樽本照雄編

官場現形記資料

清末小説研究資料叢書 4 B5判 92頁 限定200部 定価：2,000円＋税

劉 徳隆著

清末小説過眼録

清末小説研究資料叢書 5 B5判 126頁 限定200部 定価：3,000円＋税

樽本照雄編

老残遊記資料

清末小説研究資料叢書 6 B5判 151頁 限定200部 定価：3,000円＋税

樽本照雄編

中国近現代通俗文学史索引

清末小説研究資料叢書 7 B5判 98頁 限定200部 定価：2,000円＋税

